

沼津市文化財調査報告書 第119集

史跡興国寺城跡調査報告書
—発掘調査報告編—

2019

沼津市教育委員会

沼津市文化財調査報告書 第119集

史跡興国寺城跡調査報告書
—発掘調査報告編—

2019

沼津市教育委員会



興国寺城跡全景（平成 27 年度撮影）

図版2



興国寺城跡全景（南より：平成28年度撮影）

図版3



本丸1号礎石建物跡（東から）



興国寺城跡 大空堀（平成30年度撮影）



本丸三日月堀（北から）

図版 4



二ノ丸虎口石垣



伝天守台下石垣

例 言

1. 本書は沼津市根古屋字赤池ほかに所在する国指定史跡興国寺城跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は沼津市教育委員会事務局文化振興課が主体となって、興国寺城跡整備調査委員会、文化庁記念物課、静岡県教育委員会文化財保護課（旧文化課）の指導と助言を受けて、実施した。
3. 発掘調査は、平成 15・16 年度には「記念物保存修理事業」、平成 17～19 年度には「史跡等・登録文化財・保存修理事業」、平成 20～26 年度においては「史跡等・登録文化財・歴史の道保存整備事業」、平成 27・28 年度には「歴史生き生き！史跡等総合活用整備事業」、平成 29・30 年度には「市内遺跡発掘調査等事業」として実施した。
整理作業は、平成 29・30 年度に「歴史生き生き！史跡等総合活用整備事業」として実施した。
4. 整理作業は興国寺城跡整備調査委員会より指導を受け、沼津市教育委員会事務局文化振興課主事の原田雄紀が担当した。報告書の執筆および編集は原田が行い、臨時嘱託神山香織、整理補助員の目黒上子、守屋智子、整理作業補助員工藤みさ子の補助を得た。平成 31 年 2 月以後は、原田から文化振興課副主任学芸員の木村聡が業務を引き継ぎ、第 I 章～第 IV 章に加筆修正を加えたうえで、第 VI 章を執筆した。遺構写真は各年度の調査担当者が、遺物写真は原田が撮影した。ただし、遺物写真において番号の前後が生じているのは、原田の撮影後に木村が加筆修正の中で入れ替えを行ったものである。事務処理は事務補助員の土屋周子が担当した。
5. これまで実施してきた発掘調査において現地で取得した遺構のデジタルデータは、沼津市所有の遺跡管理システム（株式会社シン技術コンサル製）に取り込んで管理を行ってきた。報告書用の図版を作成するために整理作業支援業務委託として株式会社シン技術コンサルに業務委託し、その成果品を編集して遺構図版を作成した。
6. 出土遺物の分類については、委員である柴垣勇夫氏をはじめ、池谷初恵氏、小野正敏氏、河合修氏、藤澤良祐氏に指導を受けた。また事実記載、集計表の作成については池谷初恵氏の指導・助言を得た。
7. 自然科学分析についてはパリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、その成果は第 V 章に記した。
8. 発掘調査・整理作業においては、次の方々に指導・協力を賜った。厚く御礼を申し上げたい。
秋元太郎、伊藤真央、池谷初恵、池谷信之、小野正敏、小和田哲男、加藤理文、河合修、齋藤慎一、佐々木健策、鈴木一有、諏訪間順、高尾好之、辻真人、藤澤良祐、松井一明、水野茂、溝口彰啓、望月保宏、森まどか、山本智子（50 音順、敬称略）
9. 本書に係る発掘調査資料および出土遺物は、沼津市教育委員会事務局文化振興課（沼津市文化財センター 〒410-0106 沼津市志下 530 TEL055-935-5010）で保管している。

凡 例

1. 遺構実測図中の水系高は、標高を示す。
2. 遺構配置図中の座標は国家座標を示す。
3. 遺物挿図の基本縮尺は、次のとおりである。
土器：1/3、石器：1/3、木製品：1/3、金属製品：1/2、古銭：1/1
遺物の実測図において陶磁器類の一点破線は釉の範囲を示し、土師質土器の破線は煤の付着範囲を示している。
4. 遺構等の略号は、次のとおりである。なお、空堀や土塁、石列など略号を用いなかった遺構もある。
SD：溝 SG：集石 SK：土坑 SS：礎石建物跡 SX：性格不明遺構 FP：焼土土坑
PT：柱穴 HD：方形周溝墓 TRE：トレンチ Gr.：グリッド
5. 絵図にその存在が記されているが、現在は滅失している遺構については（ ）を用いて表記した。
6. 土層注記は、新版標準土色帖に基づいて記載し、計測は土色計（SCR-1 第一合成株式会社製）を用いた。
7. 愛鷹ローム層の層位名称や略称については第5図による。
8. 瀬戸美濃系施釉陶器・瀬戸美濃産陶器類・瀬戸美濃焼などを略して「瀬戸美濃」と記述した。また古瀬戸中期様式及び後期様式はそれぞれ「中」「後」と略し、ローマ数字で型式名を付記した。大窯製品は「大窯」とし、算用数字で型式名を付記した。登窯製品は「登窯」と略し、小期は算用数字で付記した。常滑焼・常滑産陶器は「常滑」、志戸呂焼・志戸呂産陶器・志戸呂窯製品は「志戸呂」、初山焼・初山産陶器・初山窯製品は「初山」、渥美焼・渥美産陶器は「渥美」、信楽焼・信楽産陶器は「信楽」、肥前焼・肥前産陶器は「肥前」とそれぞれ略して記述した。
9. 出土遺物の編年は、以下の刊行物を参照している。
愛知県史編さん委員会 2007 『愛知県史 別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系』
愛知県史編さん委員会 2012 『愛知県史 別編 窯業3 中世・近世 常滑系』
菊川町教育委員会 1999 『横地城跡 総合調査報告書』
菊川シンポジウム実行委員会 2005 『陶磁器から見る 静岡県の中世社会 一東でもない西でもない』
(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009 『上志戸呂古窯(第二東名No.92 地点)』

目 次

巻頭カラー写真

例 言

凡 例

第I章 調査経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査体制	1
第3節 発掘調査・整理作業の経過	2
第II章 興国寺城跡の位置と環境	6
第1節 地理的環境	6
第2節 愛鷹山の基本層位	6
第3節 周辺遺跡	6
第4節 興国寺城跡の歴史的経過	10
第5節 興国寺城跡の現況と曲輪配置	15
第III章 遺構	21
第1節 本丸	21
第2節 石火矢台	40
第3節 二ノ丸	49
第4節 二ノ丸虎口	55
第5節 三ノ丸・外堀	73
第6節 大空堀	109
第7節 北曲輪	116
第8節 清水曲輪	155
第9節 清水小曲輪	171
第10節 東外堀(伝東船着場)	171
第11節 伝西櫓台	179
第IV章 遺物	180
第V章 自然科学分析	241
第VI章 調査の成果と課題	246
第1節 発掘調査成果からみる城郭の最終段階	246
第2節 最終段階以前の遺構と改修痕跡	249
第3節 興国寺城の変遷と今後の課題	253

写真図版

報告書抄録

挿 図 目 次

第 1 図	年度別興国寺城跡調査範囲図及びグリッド配置図	4
第 2 図	遺跡位置図	7
第 3 図	遺跡周辺地形図	8
第 4 図	遺跡周辺の表層地質図	9
第 5 図	愛鷹ローム層準の基本土層と標準断面写真	9
第 6 図	周辺遺跡図	11
第 7 図	天正末頃の東駿河城郭分布図	15
第 8 図	興国寺城跡現況図及び曲輪配置図	16
第 9 図	城築規範トレース図	17
第 10 図	興国寺城跡地形断面図	19
第 11 図	ボーリング調査による標高断面図	20
第 12 図	本丸 調査位置図	21
第 13 図	本丸 年度別調査地点図	21
第 14 図	本丸絵図 (拡大)	21
第 15 図	本丸 全体平面図	22
第 16 図	本丸虎口周辺 平面図	23
第 17 図	本丸 SS1 平面図	24
第 18 図	本丸 SS1 エレベーション図	25
第 19 図	本丸 石列 3・石列 4・SG4 平面図	25
第 20 図	本丸 SD1 平面図・エレベーション図	27・28
第 21 図	本丸虎口周辺絵図	29
第 22 図	本丸 空堀平面図	29
第 23 図	本丸 空堀断面図	30
第 24 図	本丸 空堀平・断面図 (平成 17 年度調査地点)	31
第 25 図	本丸 三日月堀平面図	32
第 26 図	本丸 三日月堀断面図	33
第 27 図	本丸中央部 平面図	35
第 28 図	SD2・SD3・SX1 平・断面図	36
第 29 図	SS2・SD4 平面図	36
第 30 図	本丸北西部 平面図	37
第 31 図	本丸北西部 平・断面図	37
第 32 図	SG1・SG2 平・断面図	39
第 33 図	石火矢台 調査位置図	40
第 34 図	石火矢台 年度別調査地点図	40
第 35 図	石火矢台周辺の絵図 (拡大)	40
第 36 図	平成 14 年度石火矢台試掘調査 平・断面図	41
第 37 図	石火矢台 全体平面図	42
第 38 図	石火矢台 断面図 (1)	43
第 39 図	石火矢台 断面図 (2)	44
第 40 図	石火矢台 SG1 平面図	48
第 41 図	石火矢台 SG2 平面図	48
第 42 図	二ノ丸 調査位置図	49
第 43 図	二ノ丸 年度別調査地点図	49
第 44 図	二ノ丸絵図 (拡大)	49
第 45 図	二ノ丸 全体平面図	50
第 46 図	二ノ丸 断面図 (1)	51
第 47 図	二ノ丸 断面図 (2)	53
第 48 図	二ノ丸 断面図 (3)	54
第 49 図	二ノ丸虎口 調査位置図	55
第 50 図	二ノ丸虎口 年度別調査地点図	55
第 51 図	二ノ丸虎口絵図 (拡大)	55
第 52 図	二ノ丸虎口 全体図	56
第 53 図	二ノ丸虎口・三ノ丸 根古屋村絵図 (拡大)	56
第 54 図	二ノ丸虎口西側 全体図	57
第 55 図	二ノ丸空堀 (西) 断面図	58

第 56 図	二ノ丸空堀 (西) 内遺構 平面図 (1)	59
第 57 図	二ノ丸空堀 (西) 内遺構 平面図 (2)	60
第 58 図	二ノ丸虎口 SD3・SD4 平・断面図	61
第 59 図	二ノ丸虎口 土橋付近平面図	63
第 60 図	二ノ丸虎口 土橋 断面図	64
第 61 図	遺物出土位置図と土橋の変遷概念図	65
第 62 図	二ノ丸虎口 石垣 平面図	66
第 63 図	二ノ丸虎口 石垣 立面・エレベーション図	67
第 64 図	二ノ丸虎口東側 全体図	69
第 65 図	二ノ丸虎口東側 断面図	71・72
第 66 図	三ノ丸・外堀 調査位置図	73
第 67 図	三ノ丸区分図	73
第 68 図	三ノ丸・外堀 年度別調査地点図	73
第 69 図	三ノ丸・外堀絵図 (拡大)	73
第 70 図	三ノ丸・外堀 全体図	74
第 71 図	三ノ丸北西部 全体図	75
第 72 図	三ノ丸 SX1・2・3 平・断面図	76
第 73 図	三ノ丸西大手 全体図	76
第 74 図	三ノ丸西大手周辺 断面図 (1)	77
第 75 図	三ノ丸西大手周辺 断面図 (2)	80
第 76 図	三ノ丸西大手外堀石積 平・断面図	80
第 77 図	三ノ丸西大手 SD1・SD2 平・断面図	80
第 78 図	三ノ丸西大手 SD3 平・断面図	81
第 79 図	西外堀 トレンチ全体平面図	82
第 80 図	西外堀 トレンチ断面図	83
第 81 図	西外堀 トレンチ (H23-F) 平面図	85
第 82 図	三ノ丸南西部 全体図	87・88
第 83 図	三ノ丸南西部 土塁トレンチ 1 平・断面図	89
第 84 図	三ノ丸南西部 土塁トレンチ 2 平・断面図	90
第 85 図	三ノ丸南西部 土塁トレンチ 3-1・3-2 SD4 平・断面図 (1)	91
第 86 図	三ノ丸南西部 土塁トレンチ 3-1・3-2 SD4 断面図 (2)	92
第 87 図	三ノ丸南西部 土塁トレンチ 3-1・3-2 SD4 断面図 (3)	93
第 88 図	三ノ丸南西部 第 1 調査区 全体平面図	95
第 89 図	三ノ丸南西部 第 1 調査区 断面図	96
第 90 図	三ノ丸南西部 版築遺構 平・断面図	97
第 91 図	三ノ丸南西部 TRE2・3・4・5 平面図	98
第 92 図	三ノ丸南西部 TRE2・3・4・5 断面図	99
第 93 図	三ノ丸南西部 SD5・6 平・断面図	100
第 94 図	三ノ丸南西部 SD7 平・断面図	101
第 95 図	三ノ丸南西部 PT 群 平・断面図	102
第 96 図	三ノ丸南東部 全体図	104
第 97 図	三ノ丸南東部 東外堀 断面図	105
第 98 図	三ノ丸南東部 土塁トレンチ 4 PT 群 平・断面図	106
第 99 図	三ノ丸北東部 全体平面図	109
第 100 図	三ノ丸北東部 断面図 (1)	110
第 101 図	三ノ丸北東部 断面図 (2)	111
第 102 図	大空堀 トレンチ配置図	112
第 103 図	大空堀 TRE1 平・断面図	113・114
第 104 図	大空堀 TRE2 平・断面図	115
第 105 図	大空堀 TRE3 平・断面図	117
第 106 図	大空堀 TRE4 平・断面図	118
第 107 図	大空堀 TRE5 平・断面図	119
第 108 図	北曲輪 調査位置図	120
第 109 図	北曲輪 年度別調査地点図	120
第 110 図	北曲輪絵図 (拡大)	120
第 111 図	城築規範「駿河禅徳寺城」 (拡大)	120
第 112 図	北曲輪 全体図	121
第 113 図	北曲輪 調査区配置図	121

第 114 図	北曲輪	第 1 調査区	全体図	123・124
第 115 図	北曲輪	第 1 調査区	TRE1 平・断面図	123・124
第 116 図	北曲輪	第 1 調査区	TRE2 平・断面図	123・124
第 117 図	北曲輪	第 1 調査区	TRE3 平・断面図	123・124
第 118 図	北曲輪	第 2 調査区	空堀 1 平・断面図	125・126
第 119 図	北曲輪	第 2 調査区	空堀 1 (西) 断面図	130
第 120 図	北曲輪	第 3 調査区	全体平面図	131
第 121 図	北曲輪	第 3 調査区	断面図	132
第 122 図	北曲輪	第 3 調査区	SD2～7 平・断面図	133
第 123 図	北曲輪	第 3 調査区	SD2～4 平面図	134
第 124 図	北曲輪	第 3 調査区	SD5～7 平面図	135
第 125 図	北曲輪	第 3 調査区	SK 群 平面図 (1)	136
第 126 図	北曲輪	第 3 調査区	SK 群 平・断面図 (2)	137
第 127 図	北曲輪	第 3 調査区	SK 群 平・断面図 (3)	138
第 128 図	北曲輪	第 3 調査区	SK 群 平・断面図 (4)	139
第 129 図	北曲輪	第 3 調査区	SX 群 平面図 (1)	140
第 130 図	北曲輪	第 3 調査区	SX 群 平・断面図 (2)	141
第 131 図	北曲輪	第 3 調査区	SX 群 平・断面図 (3)	142
第 132 図	北曲輪	第 3 調査区	PT 群 平面図	143
第 133 図	北曲輪	第 4 調査区	平・断面図	145
第 134 図	北曲輪	第 5 調査区	平・断面図	146
第 135 図	北曲輪	第 5 調査区	HD1・SD11・HD2 平・断面図	147
第 136 図	北曲輪	第 6 調査区	空堀 2・3 平面図	148
第 137 図	北曲輪	第 6 調査区	空堀 2・3 断面図	149
第 138 図	北曲輪	第 7 調査区	平面図	151
第 139 図	北曲輪	第 7 調査区	断面図 (1)	152
第 140 図	北曲輪	第 7 調査区	断面図 (2)	153
第 141 図	北曲輪	第 7 調査区	断面図 (3)	153
第 142 図	清水曲輪	調査位置図		155
第 143 図	清水曲輪	年度別調査地点図		155
第 144 図	清水曲輪	全体図・分割図		156
第 145 図	清水曲輪	第 1 調査区	空堀 平・断面図	158
第 146 図	清水曲輪	第 2 調査区	空堀 平・断面図 (1)	159・160
第 147 図	清水曲輪	第 2 調査区	空堀 断面図 (2)	161・162
第 148 図	清水曲輪	第 3 調査区	平・断面図	163・164
第 149 図	清水曲輪	第 4 調査区	平面図	166
第 150 図	清水曲輪	第 4 調査区	断面図	167・168
第 151 図	清水曲輪	第 5 調査区	平面図	169
第 152 図	清水曲輪	第 5 調査区	断面図	170
第 153 図	清水小曲輪	調査地点		171
第 154 図	清水小曲輪	全体平面図		172
第 155 図	清水小曲輪	断面図		173
第 156 図	清水小曲輪	SD1～3 平・断面図		174
第 157 図	清水小曲輪	石列 1 平・断面図		175
第 158 図	清水小曲輪	SG1 平面図		175
第 159 図	清水小曲輪	SX1 平・断面図		175
第 160 図	東外堀	トレンチ配置図		176
第 161 図	東外堀	トレンチ断面図		177
第 162 図	東外堀	南東部 平面図		178
第 163 図	伝西櫓台	平面図		179
第 164 図	平成 13 年度試掘調査出土遺物			181
第 165 図	平成 14 年度試掘調査出土遺物			181
第 166 図	本丸 1 号礎石建物跡 SS1 出土遺物			183
第 167 図	本丸 1 号溝 SD1 出土遺物			183
第 168 図	本丸 2 号溝 SD2 出土遺物			183
第 169 図	本丸空堀 (西) 出土遺物			183
第 170 図	本丸空堀 (東) 出土遺物			184
第 171 図	本丸遺構外出土遺物 (1)			185

第 172 図	本丸遺構外出土遺物 (2)	186
第 173 図	本丸遺構外出土遺物 (3)	187
第 174 図	本丸遺構外出土遺物 (4)	188
第 175 図	本丸遺構外出土遺物 (5)	189
第 176 図	本丸遺構外出土遺物 (6)	190
第 177 図	本丸遺構外出土遺物 (7)	191
第 178 図	石火矢台遺構外出土遺物 (1)	192
第 179 図	石火矢台遺構外出土遺物 (2)	193
第 180 図	石火矢台遺構外出土遺物 (3)	194
第 181 図	本丸三日月堀出土遺物 (1)	195
第 182 図	本丸三日月堀出土遺物 (2)	196
第 183 図	本丸三日月堀出土遺物 (3)	197
第 184 図	本丸三日月堀出土遺物 (4)	198
第 185 図	二ノ丸遺構外出土遺物 (1)	199
第 186 図	二ノ丸遺構外出土遺物 (2)	200
第 187 図	二ノ丸虎口出土遺物 (1)	201
第 188 図	二ノ丸虎口出土遺物 (2)	202
第 189 図	三ノ丸北西部出土遺物	203
第 190 図	三ノ丸北東部出土遺物	203
第 191 図	三ノ丸南部 4 号溝 SD4 出土遺物	203
第 192 図	三ノ丸南部版築遺構出土遺物	205
第 193 図	三ノ丸南部 5 号溝 SD5 出土遺物	205
第 194 図	三ノ丸南部 6 号溝 SD6 出土遺物	205
第 195 図	三ノ丸南部 PT 群出土遺物	205
第 196 図	三ノ丸南部遺構外出土遺物 (1)	206
第 197 図	三ノ丸南部遺構外出土遺物 (2)	207
第 198 図	三ノ丸西大手周辺遺構外出土遺物	208
第 199 図	大空堀出土遺物	208
第 200 図	北曲輪第 2 調査区空堀 1 出土遺物	210
第 201 図	北曲輪第 3 調査区 SK・SX 群出土遺物	210
第 202 図	北曲輪第 6 調査区空堀 2・3 出土遺物	211
第 203 図	北曲輪第 7 調査区造成土 1 出土遺物	211
第 204 図	北曲輪遺構外出土遺物 (1)	211
第 205 図	北曲輪遺構外出土遺物 (2)	212
第 206 図	北曲輪遺構外出土遺物 (3)	213
第 207 図	北曲輪遺構外出土遺物 (4)	214
第 208 図	北曲輪遺構外出土遺物 (5)	215
第 209 図	清水曲輪空堀出土遺物	217
第 210 図	清水曲輪遺構外出土遺物 (1)	217
第 211 図	清水曲輪遺構外出土遺物 (2)	218
第 212 図	清水小曲輪出土遺物	219
第 213 図	東外堀出土遺物	220
第 214 図	暦年較正結果	243
第 215 図	暦年較正結果	245
第 216 図	興国寺城最終段階 遺構配置図	250
第 217 図	本丸・北曲輪・清水曲輪の改修痕跡	252
第 218 図	三ノ丸の検出遺構変遷模式図	252

挿 表 目 次

第1表	興国寺城跡発掘調査における事務局の体制	3
第2表	各年度ごとの調査概要	5
第3表	周辺遺跡一覧表	12
第4表	興国寺城関連年表	14
第5表	本丸 PT 群計測表	39
第6表	二ノ丸空堀（西）内遺構 計測表	61
第7表	三ノ丸南西部 PT 群計測表	103
第8表	三ノ丸南東部 PT 群計測表	108
第9表	北曲輪 第3調査区 PT 群計測表	144
第10表	出土貿易陶磁集計表	232
第11表	出土主要遺物遺構別集計表（貿易陶磁除く）	232
第12表	放射性炭素年代測定結果	242
第13表	暦年較正結果	242
第14表	放射性炭素年代測定結果	245
第15表	興国寺城跡主要遺構変遷表	254

巻頭カラー図版目次

図版1	興国寺城跡全景（平成27年度撮影）
図版2	興国寺城跡全景（南より：平成28年度撮影） 興国寺城跡大空堀（平成30年度撮影）
図版3	本丸1号礎石建物跡（東から） 本丸三日月堀（北から）
図版4	二ノ丸虎口石垣 伝天守台下石垣

挿写真目次

写真1	本丸三日月堀完堀状況	33	写真24	H26TRE2 堀底堆積（北から）	70
写真2	本丸三日月堀東側端部と本丸	33	写真25	H26TRE2 堀底堆積（北東から）	70
写真3	本丸SG1 検出状況（西から）	39	写真26	H23TRE1 北側セクション（南から）	77
写真4	本丸SG2 検出状況（南から）	39	写真27	土塁トレンチ1 土塁基部	90
写真5	二ノ丸調査状況（南から）	49	写真28	土塁トレンチ1 土塁基部（近景）	90
写真6	二ノ丸土塁確認トレンチ調査前（北から）	49	写真29	土塁トレンチ2 土塁基部	90
写真7	本丸三日月堀現場見学会	50	写真30	土塁トレンチ2 土塁基部（近景）	90
写真8	本丸三日月堀検討会	50	写真31	SD4 及び土塁土層断面	92
写真9	二ノ丸土塁確認トレンチ（1）	54	写真32	SD4 及び土塁土層断面（B-B'）	92
写真10	二ノ丸土塁確認トレンチ（2）	54	写真33	SD4 と断面に残る古土塁	96
写真11	二ノ丸空堀（西）セクション	59	写真34	古土塁と地山掘り残し（北西から）	96
写真12	二ノ丸空堀（西）PT1 周辺（北から）	59	写真35	溝に残る工具痕	97
写真13	土取りによって生じた段差	61	写真36	版築遺構・石列・溝（北から）	97
写真14	二ノ丸虎口 土橋1（A-A' セクション）	65	写真37	TRE2・3・4・5 全景（北東から）	101
写真15	二ノ丸虎口 土橋1（B-B' セクション）	65	写真38	TRE3 SD5・SD6（北から）	101
写真16	二ノ丸虎口 石積1・2	65	写真39	TRE4 SD6（北から）	101
写真17	二ノ丸虎口 石積3・4 石塔転用	65	写真40	TRE4 遺物出土状況（遺物番号553）	101
写真18	二ノ丸虎口 堀底遺物出土状況（遠景）	68	写真41	TRE2 PT が掘り込まれる造成土の 確認トレンチ（トレンチ内は地山）	103
写真19	堀底遺物出土状況（遺物番号506）	68	写真42	TRE2 PT 検出面の上に残る古土塁	103
写真20	H25TRE1 北端部土層セクション	70	写真43	東外堀下層確認トレンチ（南から）	105
写真21	H25TRE1 空堀 北肩部 土層堆積	70	写真44	外堀検出状況（南から）	105
写真22	H25TRE1 空堀 南肩部 土層堆積	70	写真45	SD6 から外堀への改修痕	105
写真23	H26TRE1 空堀	70			

写真46	土塁トレンチ4 外郭土塁とPT群	105	写真54	北曲輪空堀1 Bセクション	129
写真47	H28TRE5 外堀検出状況1（東から）	111	写真55	SD 及びSK群（南から）	135
写真48	H28TRE5 外堀検出状況2（北から）	111	写真56	SD5（東から）	135
写真49	大空堀 TRE1 調査前（北西から）	119	写真57	北曲輪第3調査区 SK群およびPT群	142
写真50	大空堀 TRE2・3 調査前（東から）	119	写真58	北曲輪第3調査区 SK土層断面	142
写真51	大空堀 TRE3・4 調査前（東から）	119	写真59	HD1 検出状況	146
写真52	大空堀 岩盤層露出状況（TRE5付近）	119	写真60	HD1 遺物出土状況	146
写真53	北曲輪空堀1 Aセクション	129	写真61	SD12 出土 壺型土器	154
			写真62	現代基礎全景（東から）	178

写 真 図 版 一 覧

PL.1	興国寺城跡全景写真（昭和27年）国土地理院 興国寺城跡全景写真（昭和54年）		二ノ丸空堀（東）石垣確認状況（北から 平成25年度撮影）
PL.2	興国寺城跡全景及び外堀調査状況（平成21年度撮影） 興国寺城跡より駿河湾を望む（平成30年度撮影）	PL.18	二ノ丸空堀（東）石垣セクション（南東から） 二ノ丸空堀（東）西端部セクション（東から） 二ノ丸空堀（東）西端部堀底確認
PL.3	本丸大土塁（平成30年度撮影） 本丸全景（平成16年度撮影）	PL.19	二ノ丸空堀（東）H26TRE1-2（北西から） 二ノ丸空堀（東）H26TRE2 セクション（北から） 二ノ丸空堀（東）H26TRE2 セクション（東から）
PL.4	本丸全景（南から 平成16年度撮影） 本丸全景（平成17年度撮影）	PL.20	二ノ丸虎口石積2 及びBセクション（北から） 二ノ丸虎口石積2・3検出状況及びAセクション（北西から） 二ノ丸虎口石積3 及びCセクション（南から）
PL.5	本丸SD1・SS1 検出状況 本丸SS1 検出状況（南から） 本丸SD1 宝篋印塔検出状況	PL.21	二ノ丸虎口石積3・4 検出状況（西から） 二ノ丸虎口石積3・4 検出状況（北西から） 二ノ丸虎口石積3・4A セクション（北から）
PL.6	本丸SD1 検出状況 本丸SD1 分岐部検出状況 本丸SD1・SS2 検出状況	PL.22	二ノ丸虎口石積3・4B セクション（北西から） 二ノ丸虎口石積4 検出状況（南東から）
PL.7	本丸石列3 検出状況 本丸石列4 検出状況 本丸SG4 検出状況	PL.23	三ノ丸全景（平成22年度撮影） 三ノ丸北西部全景（平成22年度撮影）
PL.8	本丸空堀（東）セクション 本丸空堀（東）整地層 本丸空堀（平成17年度調査地点）検出状況（南西から）	PL.24	三ノ丸西大手全景（平成23年度撮影） 三ノ丸西大手外堀・外堀石積検出状況（西から）
PL.9	本丸空堀（平成17年度調査地点）整地層 本丸空堀（平成17年度調査地点）検出状況 本丸空堀東端部（平成17年度調査地点）検出状況	PL.25	三ノ丸西大手外堀・外堀石積検出状況（南西から） 三ノ丸西大手SD3 検出状況（南から） 三ノ丸西大手SD3 検出状況（南から）
PL.10	本丸三日月堀全景 本丸三日月堀セクション	PL.26	西外堀 TRE18 外堀東肩部検出状況 西外堀 TRE18 調査状況（西から） 三ノ丸西外堀（H23-F）全景（平成23年度撮影）
PL.11	本丸北西部全景 本丸北西部（西から 平成15年度撮影）	PL.27	三ノ丸南西部全景（平成23年度撮影） 三ノ丸南西部土塁トレンチ3・4 全景（平成22年度撮影）
PL.12	石火矢台全景（平成17年度撮影） 石火矢台北側セクション 石火矢台東側セクション 石火矢台SG1 検出状況	PL.28	三ノ丸南西部SD4（暗渠部）検出状況 三ノ丸南西部SD4（開渠部）検出状況 三ノ丸南西部SD4（開渠部）及び古土塁セクション
PL.13	二ノ丸全景（平成18年度撮影） 二ノ丸東部全景 二ノ丸南東部土塁確認トレンチ（北から）	PL.29	三ノ丸南西部SD4（開渠部）及び古土塁セクション 三ノ丸南西部古土塁検出状況 三ノ丸南西部版築遺構全景（北から）
PL.14	二ノ丸虎口全景（平成27年度撮影） 二ノ丸虎口石積1～4 全景（平成28年度撮影）	PL.30	三ノ丸南西部版築遺構近景（北から） 三ノ丸南西部 TRE2・PT 群検出状況 三ノ丸南西部SD5・SD6 検出状況
PL.15	二ノ丸空堀（西）セクション 二ノ丸空堀（西）検出状況 二ノ丸空堀・石積1 検出状況	PL.31	三ノ丸南東部・東外堀全景（平成22年度撮影） 三ノ丸南東部土塁トレンチ4 全景（北西から） 三ノ丸南東部外堀確認トレンチ全景（平成23年度撮影）
PL.16	二ノ丸虎口SD3・SD4 検出状況（南から） 二ノ丸虎口石垣全景（北から） 二ノ丸虎口石垣堀西面・北面検出状況（南から）	PL.32	三ノ丸北東部全景（平成28年度撮影） 三ノ丸北東部全景2（平成28年度撮影） 三ノ丸北東部東外堀検出状況（H28TRE13 地点）
PL.17	二ノ丸虎口石垣裏込め検出状況 二ノ丸虎口・石垣隅部検出状況	PL.33	三ノ丸北東部東外堀検出状況（H28TRE5 地点） 三ノ丸北東部東外堀セクション（H28TRE5 地点）

- PL.34 大空堀 TRE1 北側肩部
大空堀 TRE2 セクション
大空堀 TRE4 セクション (下層)
- PL.35 北曲輪全景 (平成 20 年度撮影)
北曲輪北部全景
- PL.36 北曲輪空堀 1 検出状況 (東から)
北曲輪空堀 1 セクション
- PL.37 北曲輪空堀 1 土橋検出状況
北曲輪空堀 1 (東) 検出状況 (東から)
北曲輪空堀 1 (西) 検出状況 (北から)
- PL.38 北曲輪南部 (第 3 調査区周辺) 全景
北曲輪第 3 調査区 SK・SX・PT 群 (東から)
北曲輪第 5 調査区
- PL.39 北曲輪第 6 調査区空堀 2・3 セクション (南東から)
北曲輪第 6 調査区空堀 2・3 トレンチ西側セクション (東から)
北曲輪第 6 調査区空堀 2・3 トレンチ東側セクション (西から)
- PL.40 北曲輪第 6 調査区空堀 3 畝検出状況及びセクション (南から)
北曲輪第 7 調査区空堀 3 全景 (北西から)
北曲輪第 7 調査区空堀 3 畝検出状況 (南東から)
- PL.41 北曲輪第 7 調査区空堀 3 セクション (西から)
北曲輪第 7 調査区造成土 1・2 検出状況 (西から)
北曲輪第 7 調査区造成土 1 遺物出土状況 (東から)
- PL.42 北曲輪第 7 調査区 FP1 セクション
北曲輪第 7 調査区 FP1 粘土・焼土検出状況
北曲輪第 7 調査区 FP1 焼土除去後遺物出土状況
- PL.43 清水曲輪空堀全景 (平成 24 年度撮影)
清水曲輪空堀検出状況 (第 1 調査区)
清水曲輪空堀下層土橋検出状況 (第 2 調査区)
- PL.44 清水曲輪空堀肩部検出状況 (北から)
清水曲輪空堀セクション (全景)
清水曲輪空堀セクション及び整地層
- PL.45 清水曲輪空堀整地層
清水曲輪第 5 調査区全景 (北から)
清水曲輪 SD1 検出状況
- PL.46 清水小曲輪全景 (平成 21 年度撮影)
清水小曲輪全景 (平成 21 年度撮影) (北から)
清水小曲輪岩盤検出状況 (東から)
- PL.47 清水小曲輪南西部曲輪造成検出状況 (西から)
清水小曲輪 SD2 礫検出状況
東外堀調査状況 (北から 平成 21 年度撮影)
- PL.48 伝西櫓台全景 (平成 29 年度撮影)
伝東櫓台周辺 (平成 30 年度撮影)
試掘調査出土遺物
- PL.49 本丸礎石建物跡・SD 出土遺物
本丸空堀出土遺物
- PL.50 本丸遺構外出土遺物
- PL.51 本丸遺構外出土遺物
石火矢台遺構外出土遺物
- PL.52 石火矢台遺構外出土遺物
本丸遺構外出土遺物
本丸三日月堀出土遺物
- PL.53 本丸三日月堀出土遺物
- PL.54 本丸三日月堀出土遺物
二ノ丸遺構外出土遺物
- PL.55 二ノ丸虎口出土遺物
三ノ丸出土遺物
- PL.56 三ノ丸出土遺物
- PL.57 大空堀・北曲輪遺構出土遺物
北曲輪出土遺物
- PL.58 北曲輪出土遺物
清水曲輪出土遺物
- PL.59 清水小曲輪・東外堀出土遺物
出土石製品
- PL.60 出土石鍋
出土土製品
出土木製品
- PL.61 出土金属製品 (古銭)
出土金属製品 (鉄砲玉)
- PL.62 出土金属製品

第 I 章 調査経過

第 1 節 調査に至る経緯

興国寺城跡は、戦国時代に関東一円を支配した小田原北条氏（以下、北条氏）の祖、伊勢宗瑞（北条早雲）ゆかりの城として知られる。伊勢宗瑞はこの城から伊豆国へ攻め込み、同国を支配したとされることから、興国寺城跡は戦国時代の幕開けを告げる城として歴史的にも評価され、平成 7 年 3 月、国の史跡に指定された。

江戸時代の初期に廃城となった興国寺城は、後に農地や村の共有地となっていたが、明治時代には県道が城内を通過し、本丸の南側土塁も破壊され、堀は埋められてしまった。戦後には本丸内を東海道新幹線が通過する計画が持ち上がったが、最終的には本丸の通過は避けられた。しかし昭和 54 年には伝天守台での土取り計画が持ち上がった。このことをきっかけに沼津市はこの計画に際して史跡の保存のため土取り計画地の公有地化を図り、以後保存事業に本格的に取り組むことになった。

伝天守台の破壊は避けられたものの、依然として城跡内は住宅地化が進み、各所での土取りなども著しく、多くの遺構の破壊が懸念されている現状にあった。このため沼津市では昭和 57 年に『興国寺城跡保存整備基本構想報告書』を刊行し、城跡の保存整備の基本方針を明らかにした。同年には伝天守台と伝東船着場の発掘調査、昭和 61 年度には古文書調査を行い、史跡指定に向けた基礎資料を積み上げた。同時に地元住民との協議を開始し、史跡指定に同意が得られた地区について平成 6 年 1 月 24 日に国指定申請書を提出、翌年の平成 7 年 3 月 17 日には国史跡に指定され、官報告示された。引き続き地元住民との交渉を続け、同意が得られた地域については、平成 12 年 3 月 7 日、平成 19 年 7 月 26 日、平成 24 年 9 月 19 日、あわせて 3 回の追加指定を受け、現在に至っている。

史跡の保存と整備にあたっては、史跡の大半が住宅地化・農地化していたため、現存する地下遺構の確認が急務であった。沼津市教育委員会では国の補助のもと土地の公有化を進めるとともに、将来の史跡公園としての整備に備え、買上げが終了した土地から順次発掘調査を実施し、遺構把握に努めてきた。

第 2 節 調査体制

沼津市教育委員会では平成 13 年 3 月に興国寺城跡整備調査委員会を設置し、調査についての指導を受けながら、これまでの発掘調査を進めてきた。なお、整備調査委員会は国史跡長浜城跡の総合調査委員会と合同で開催している。また、静岡県教育委員会、文化庁記念物課からもオブザーバーとして指導を得てきた。興国寺城跡整備調査委員会の体制は以下の通りである（敬称は省略）。また、調査体制については第 1 表のとおりである。

【興国寺城跡整備調査委員会】

委員長	服部英雄	中世史専門
副委員長	高瀬要一	造園学（庭園史、史跡整備）専門
委員	柴垣勇夫	考古学（陶磁器）専門
委員	家永遵嗣	中世史専門（～ H28. 7）
委員	麓 和善	建築史専門
委員	千田嘉博	考古学（城郭史）専門
委員	神野善治	民俗学専門（～ H28. 7）
委員	貴田 潔	中世史専門（H28 ～）

【協力指導機関】

静岡県教育委員会文化財保護課（文化課）

文化庁文化財第二課（文化財部記念物課）

第3節 発掘調査・整理作業の経過

今後の史跡整備に先立ち、城跡の地下遺構を把握するためには計画的に発掘調査を行う必要があったため、平成12年度～平成14年度に確認調査を実施し、主要遺構の把握に努めた。この結果に基づき、平成15年度から公有地化がなされている本丸から順に発掘調査に着手した。

史跡全域に対して南西部を(0, 0)とした10m方眼グリッドを設定し、遺構と遺物はグリッド単位で管理した。なお、追加指定に伴って、指定地が拡大したため、西側には(-2, -2)グリッドが存在している。詳細な調査経過は第Ⅲ章に記載するが、調査範囲とグリッド設定図は第1図に、調査概要は第2表に示した。

整理事業は、平成29・30年の2ヶ年に渡って文化庁文化財保存費補助金補助事業として実施した。平成28年度までの遺物の洗浄・注記などの基礎整理作業は概ね終了していたため、陶磁器や土師質の土器の接合作業を行うことから整理作業は開始した。遺物整理は平成29年度の発掘調査出土遺物を加えて実施したが、平成30年度出土遺物は未整理である。器形の復元ができたものについては、復元樹脂による強化と復元作業を行い、全体の1/4程度の残存が認められるものや口縁部や底部などの土器の器形が復元可能なものについては、図化作業を実施した。実測作業とトレース作業については市で雇用した整理作業員が実測図を作成し、その実測図を元にAdobe Illustrator®上でペンタブレットによるトレースを行い、必要に応じて採拓を行っている。また、石製品、金属製品についても同様に実測図の作成とトレース図の作成を行った。ただし実測図の作成の一部は、業務委託にて実施している。

遺物の分類にあたっては、柴垣委員に陶磁器全体の分類について指導を受け、他の中世陶磁器研究者からも細かな分類について指導を得た上で、最終的には執筆者の責任のもと産地、時期判断を行い、実測図と観察表に記載している。

これらの作業と並行して遺構図版の作成を行った。編集作業は各調査年度に素図が完成していたため、平成29・30年度に株式会社シン技術コンサルに委託し、素図の修正とAdobe Illustrator®への変換作業を担当職員が指示をして実施した。遺構図版は、デジタルデータとして取り込んだものに必要な編集を加えて整合性を確認し、Illustrator®上で再編集した。

写真図版については、現地調査時に撮影した記録写真をデジタルデータとして取り込み、整理作業時に撮影した遺物の写真と合わせて整理した。以上の作業を行った後、原稿、遺構・遺物図版、写真図版などすべてをAdobe InDesign®上に割り付け編集した。

原稿の執筆については、これまでの興国寺城跡整備調査委員会における事務局からの発掘調査についての報告や委員からの指導内容について議事録をまとめることで整理し、執筆のための基礎資料としながら執筆を進めた。

平成31年2月1日から木村が、これまでの担当者であった原田よりデータを引き継いだ上、原稿及び図版に加筆修正を行って、最終的な体裁に仕上げた。

第1表 興国寺城跡発掘調査における事務局の体制

年度	事務局体制			
平成15年度	教育長	長澤靖夫	教育次長	三澤幸男
	文化振興課長	大澤敏夫	同課長補佐	鈴木裕篤、土屋宣活
	調査担当	文化財管理係長 山本恵一、指導主事 大木伸夫		
平成16年度	教育長	工藤達朗	教育次長	伊藤幹雄
	文化振興課長	大澤敏夫	同課長補佐	鈴木裕篤、土屋宣活
	調査担当	文化財管理係長 山本恵一、臨時嘱託 長野裕之		
平成17年度	教育長	工藤達朗	教育次長	伊藤幹雄
	文化振興課長	大澤敏夫	同課長補佐	鈴木裕篤、後藤 豊
	調査担当	文化財管理係長 山本恵一、指導主事 岩品文隆、厚地淳司		
平成18年度	教育長	工藤達朗	教育次長	戸野谷清
	文化振興課長	川村英治	同副参事 鈴木裕篤 同課長補佐 後藤 豊	
	調査担当	文化財管理係長 山本恵一、指導主事 伊海正尚、奥村祐喜		
平成19年度	教育長	工藤達朗	教育次長	村上益男
	文化振興課長	鈴木敬人	同副参事 鈴木裕篤 同課長補佐 後藤 豊	
	調査担当	文化財管理係長 山本恵一、指導主事 厚地淳司、伊海正尚		
平成20年度	教育長	工藤達朗	教育次長	村上益男
	文化振興課長	上原正之	同副参事 鈴木裕篤 同課長補佐 後藤 豊	
	調査担当	文化財管理係長 山本恵一、指導主事 片桐誠一郎、渡邊均		
平成21年度	教育長	工藤達朗	教育次長	村上益男
	文化振興課長	上原正之	同副参事 鈴木裕篤 同課長補佐 後藤 豊	
	調査担当	文化財管理係長 山本恵一、主幹 石川治夫、指導主事 片桐誠一郎、倉地 憲		
平成22年度	教育長	工藤達朗	教育次長	海瀬 治
	参事 鈴木裕篤、文化振興課長 宮下義雄、同副参事 初又利明、同課長補佐 山口正文			
	調査担当	文化財管理係長 高尾好之、主幹 石川治夫、指導主事 倉地 憲		
平成23年度	教育長	工藤達朗	教育次長	海瀬 治
	文化振興課長 宮下義雄、同課長補佐 勝又恵三、同副参事 初又利明			
	調査担当	文化財管理係長 高尾好之、学芸員 木村 聡、指導主事 倉地 憲		
平成24年度	教育長	工藤達朗	教育次長	工藤浩史
	文化振興課長 井原正利		同課長補佐 勝又恵三	
	調査担当	文化財管理係長 高尾好之、学芸員 木村 聡		
平成25年度	教育長	工藤達朗	教育次長	工藤浩史
	文化振興課長 勝又恵三		同課長補佐 山本恵一、高橋清一	
	調査担当	文化財管理係長 高尾好之、学芸員 木村 聡		
平成26年度	教育長	工藤達朗	教育次長	工藤浩史
	文化振興課長 勝又恵三		同課長補佐 山本恵一、山内良太	
	調査担当	文化財管理係長 高尾好之、主査 鶴田晴徳		
平成27年度	教育長	工藤達朗	教育次長	井原正利
	文化振興課長 勝又恵三		同課長補佐 山内良太	
	調査担当	文化財管理係長 高尾好之、主査 鶴田晴徳		
平成28年度	教育長	服部裕美子	教育次長	井原正利
	文化振興課長 中島康司		同課長補佐 山内良太	
	調査担当	文化財管理係長 高尾好之、主事 原田雄紀		
平成29年度	教育長	服部裕美子	教育次長	山田昭裕
	文化振興課長 中島康司		同課長補佐 杉山好永、鶴田晴徳	
	調査担当	主事 原田雄紀 副主任学芸員 木村 聡		
平成30年度	教育長	服部裕美子	教育次長	芹沢一男
	文化振興課長 原 将史		同課長補佐 杉山好永、鶴田晴徳	
	調査担当	主事 原田雄紀 副主任学芸員 木村 聡		



第 1 図 年度別興国寺城跡調査範囲図及びグリッド配置図

第 2 表 各年度毎の調査概要

年度	調査箇所	面積 (㎡)	調査内容	調査期間
H 12 (試掘)	本丸	70	本丸中心にトレンチを十字型に設定して調査。	—
H 13 (試掘)	北曲輪	120	空堀 1 の調査。堀底を確認。	—
	二ノ丸	60	虎口付近の版築状況の確認。	—
H 14 (試掘)	二ノ丸	350	本丸空堀の調査。	H 14.10.1 ~H 15.2.28
	北曲輪		空堀 1 と土塁の調査。	
	本丸虎口		礎石を検出。	
	清水小曲輪		拳大の石を検出。ローム層を平坦に削っている構造を確認。	
	石火矢台		北側でローム層の基盤を検出。土塁同様の土の堆積が認められるが、現代の遺物が混入しており判断が難しい。	
H 15	本丸	700	本丸北西部を平面的に調査。	H 15.10.20 ~H 16.2.20
	本丸虎口		本丸虎口を面的に調査。礎石建物跡と空堀に挟まれる土橋を確認。	
H 16	本丸空堀	2,300	本丸空堀の堀底を確認。底部は愛鷹山の基盤層まで掘削している。三日月堀検出。	H 16.10.1 ~H 17.3.15
	土橋付近		土橋に本丸から伸びる排水路が伴う事を確認。土橋上の版築状況を確認。	
	本丸		曲輪の造成、版築状況を確認。本丸を縦断する石組水路 (SD1) の検出。本丸空堀の改修痕跡を確認。	
	土塁		土塁基部と石列 (土留か) を検出。	
H 17	本丸	3,000	SD1 の追加調査。虎口から伸びている。建物の基礎と思われる石列を検出。	H 17.10.3 ~H 18.2.28
	石火矢台		曲輪全体が大きく掘削された構造。北と東に道がある。	
	本丸空堀		下部で岩盤を検出。形状は逆台形で、最大の深さは石火矢台から 11m。石火矢台から続く土塁は掘り残して作出。	
H 18	二ノ丸	2,500	平面上は遺構を確認できず。	H 18.10.20 ~H 19.3.20
	東外堀		—	
	石火矢台虎口		土塁の版築土を確認。	
	三日月堀		規模の確認。土層堆積状況から人為的に埋め戻されていることが判明。	
H 19	二ノ丸	90	東西トレンチの東端では土塁基礎部分の可能性のある土層を確認。	H 19.10.19 ~H 20.3.19
	北曲輪 (南西部の小曲輪)	1,500	曲輪造成土と弥生時代の方形周溝墓検出。	
	北曲輪		北曲輪空堀 1 の調査。段差が複数認められる構造。曲輪内にも新たに空堀を検出。空堀 1 の南側には堀の向きを異にする多数の竪穴状方形土坑、長方形土坑、柱穴を検出。	
H 20	北曲輪	2,470	空堀 1 と土橋を確認。	H 20.10.16 ~H 21.3.19
	清水小曲輪		中部ローム層まで掘削し客土を充填して曲輪を造成していることを確認。	
H 21	清水小曲輪	2,113	曲輪の面的調査により、ローム土を平坦に掘削し盛土をして造成していることを確認。時期不明の石列を検出。	H 21.9.25 ~H 22.3.12
	北曲輪馬出	23	北端で空堀を検出 (三日月堀)。堀幅は約 6m で、堀底まで確認できず。	
	大空堀	277	現在の地表面より最大で 4 m 地下に堀底を確認。堀の深さは伝天守台から最大で 20 m に及ぶ。堀底には東西で高低差が生じている。形状は箱堀。東端には 2 本の堀底を確認。	
	東外堀・伝東船着場周辺	960	遺構の確認調査であったが、検出されず。	
	西外堀	550	岩盤が水平に削平されている状況を確認。	
H 22	三ノ丸北	2,060	二ノ丸空堀を確認。L 字状に屈曲している。	H 22.10.15 ~H 23.3.31
	三ノ丸南		土塁の外側に通じる石組暗渠遺構を検出。土塁の版築状の堆積土を確認。曲輪造成面の下から多量のビット群を検出。	
	東大手		攪乱を大きく受けている状況を確認。	
	西外堀	63	遺構は検出されなかった。	
	東外堀	786	遺構は検出されなかった。	
H 23	西大手	178	岩盤を平坦に削って造られた平場と切岸、その外側には石積と杭を検出。	H 23.11.1 ~H 24.3.31
	三ノ丸南	1016	現在の土塁の内側にも古段階の土塁跡を確認。最終段階の土塁は旧段階の土塁と堀を破却した後に構築されている。	
	東外堀	108	遺構は検出されなかった。	
H 24	清水曲輪	1053	北側に空堀を確認。堀には段差が生じており薬研堀から箱堀への改修が認められる。薬研堀段階の土橋? を曲輪西側で確認。南側では掘立建物跡を検出。	H 24.10.1 ~H 25.3.31
	西大手	93.0	溝状遺構の規模を確認。	
H 25	二ノ丸虎口	152	石積を確認。	H 25.5.17 ~H 26.3.31
	二ノ丸空堀	78	東側で絵図と一致する堀を確認。	
H 26	二ノ丸虎口	84	石垣を伴う二ノ丸空堀を確認。	H 26.6.20 ~H 27.3.31
	二ノ丸空堀	110	トレンチ調査で二ノ丸空堀の東端を確認。	
H 27	二ノ丸虎口	309	二ノ丸土橋の東面において石積 (石垣) が 3 列見つかると。	H 27.7.17 ~H 28.3.31
	三ノ丸北東		外堀の位置を確認。	
H 28	二ノ丸虎口	37	土橋西側の構造調査。東側 3 列の石積の対となる西側の石積を調査し、西側 2 列のみを確認。	H 28.7.15 ~12.16
	東大手	328	外堀の位置と土塁の基礎部分を確認。	
H 29	清水曲輪	333	表土直下から城郭以前の弥生時代~古代の遺構遺物を確認。	H 30.1.15 ~3.30
	北曲輪	185	東側で 2 条の堀が重複している状況を確認。両トレンチで堀底に障壁が検出され、障子堀の可能性を想定。	
	伝西櫓台	35	方形に並ぶ石列とその内側に垂円礫が敷き詰められている建物跡を確認	
H 30	北曲輪	100	前年度の成果を受けて空堀 2・3 調査の調査区を拡張。障壁は確認されず。	H 30.8.1 ~11.30

第Ⅱ章 興国寺城跡の位置と環境

第1節 地理的環境

興国寺城跡が所在する沼津市は静岡県の東部、駿河湾に望む伊豆半島の西側付け根に位置する。市内の中央部には狩野川が流れ、市内を二分しており、さらに沼津市域は地形的に4つの地域に分けられる。ひとつは北部地域の愛鷹山を主とする山麓、西部地域の千本砂礫洲とその背後に広がる浮島沼、さらに中心部から東部地域にかけて広がる黄瀬川扇状地、そして南部地域の海に迫った複雑な海岸線を有する地域である（第2図）。

その中で興国寺城跡は愛鷹山の尾根の先端部に築城されており、城郭の南側はかつて浮島沼と呼ばれた低湿地に面し、ここは山麓地域と低湿地の境目にあたる（第3・4図）。沼津市街地から北西に6.4km、JR 東海道本線原駅から北へ約1.4kmの位置にあり、城内で最も標高が高い伝天守台では約35m、城内で最も標高が低い三ノ丸では約5mを測る。

愛鷹山麓から富士山麓沿いにかけての集落は、山の「根」に分布することから「根方」と呼ばれ、集落を東西に結んで山裾を東西に横断する主要地方道三島・富士線は「根方街道」と通称されている。この根方街道は富士市の旧吉原地区から三島・御殿場方面を結ぶ古代からの主要な幹線であった。かつての道は山裾際を地形に沿って曲がりながら通じており、道沿いには古代より集落が展開していたと考えられる。興国寺城跡には、戦前根方街道が直線に作り変えられる際に道が三ノ丸を通過しており、現在は分断されてしまっている。

駿河湾沿いの千本砂礫洲上にも、古くから東西を結ぶ道が通じており、江戸時代には東海道として整備され宿場町が栄えた。現在では、根方街道と東海道を南北に結ぶ県道原停車場線が通じており、地元では「江道」と呼ばれている。かつてはこの道より西に「竹田道」と呼ばれる道も存在しており、興国寺城跡は古来より海沿いと山沿い2つの道を結ぶ結節点に位置する。

第2節 愛鷹山の基本層位

興国寺城跡が位置する愛鷹山は、10万年前に活動を終えた成層火山である。その火山活動は、現在の富士山に覆われている小御岳火山とともに40万年前頃から開始したと考えられている。火山の形成は旧期・中期・新期・最新期に分類される。旧期は主として玄武岩質溶岩と凝灰角礫岩から成り、愛鷹火山の基盤を構成している。中期は火山活動が比較的不活発な時期で、主として凝灰角礫岩と扇状地堆積物から成っており、火山麓扇状地が広く形成された。新期は前半に玄武岩質溶岩、後半に安山岩・デイサイト質の溶岩を噴出し、最新期にはデイサイト質の溶岩ドームを形成しその活動を終了している。

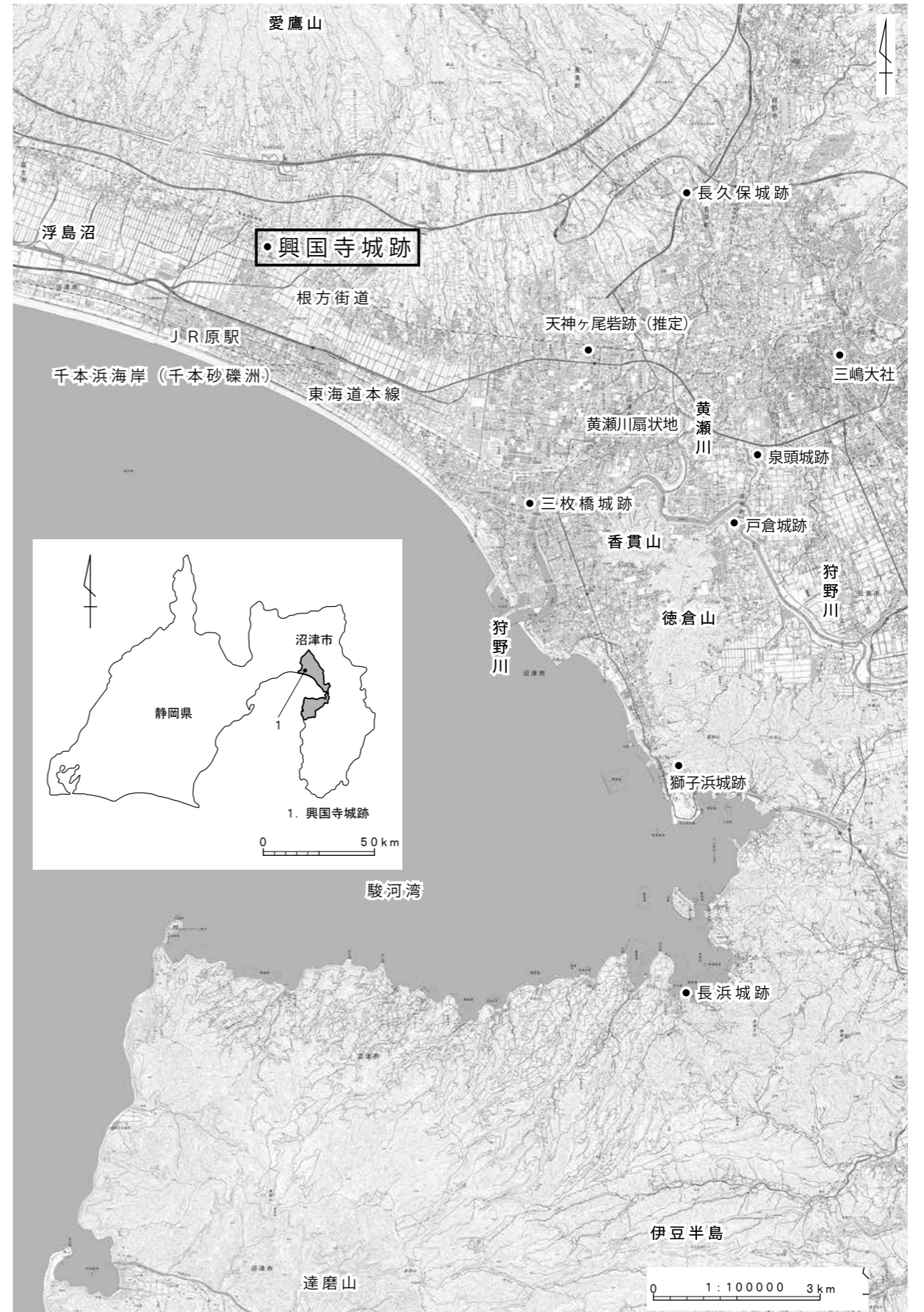
火山活動を終えた愛鷹山麓には、その後も活発な火山活動を続けた古期富士（小御岳火山）や箱根火山のテフラが堆積し、厚いローム層を形成している。特に旧期・中期の火山活動で流出した玄武岩と凝灰角礫岩の緩斜面部にはこのテフラが厚く堆積し、緩やかな扇状の緩斜面を形成している。このローム層は愛鷹ローム層と呼ばれているが、地質学的な不整合面の存在により、下位から下部ローム層・中部ローム層・上部ローム層・現世腐植質火山灰層に区分されている（第5図）。

第3節 周辺遺跡

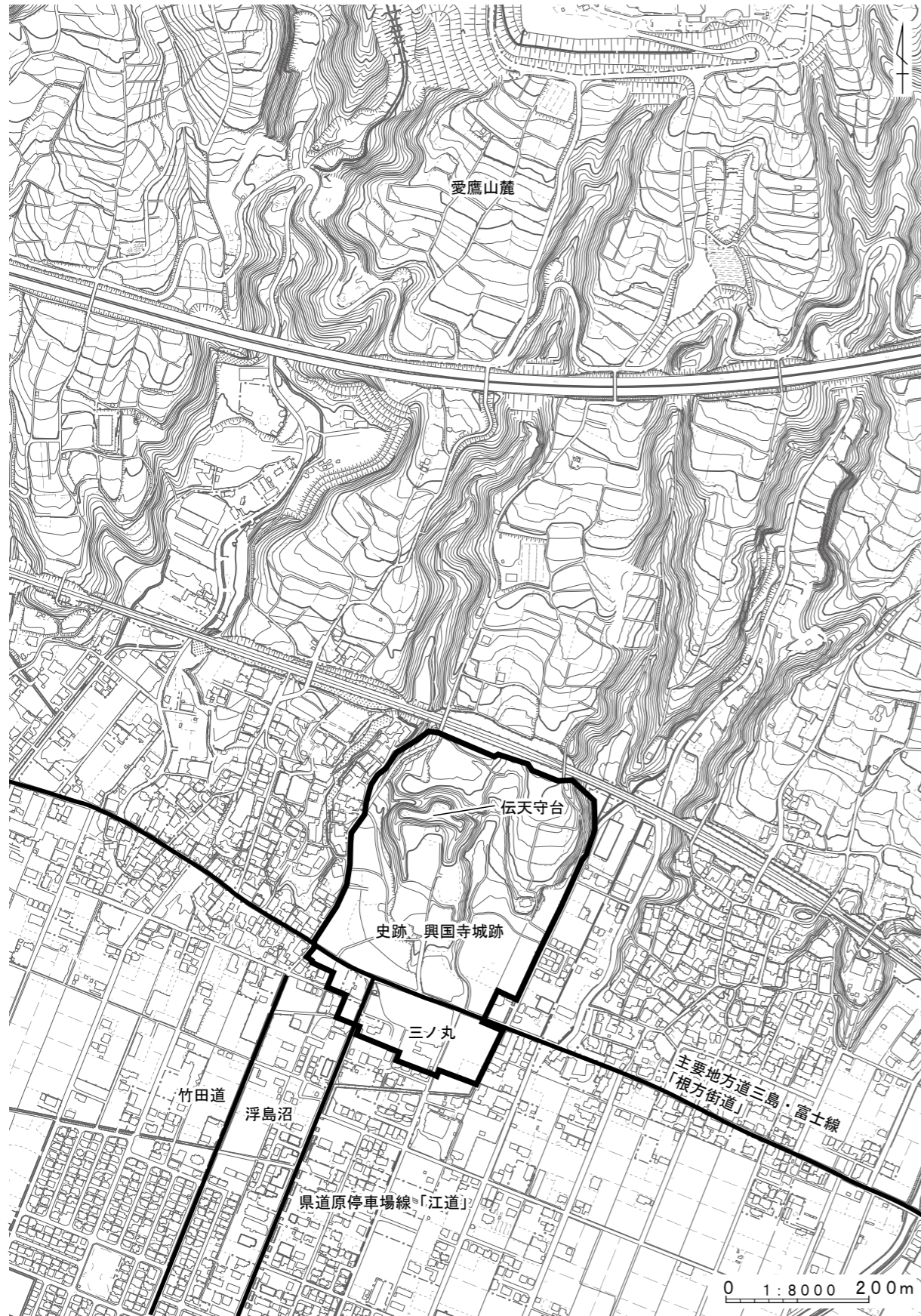
以下には興国寺城跡周辺に所在する遺跡を時代ごとに概観する（第6図・第3表）。

【旧石器時代】

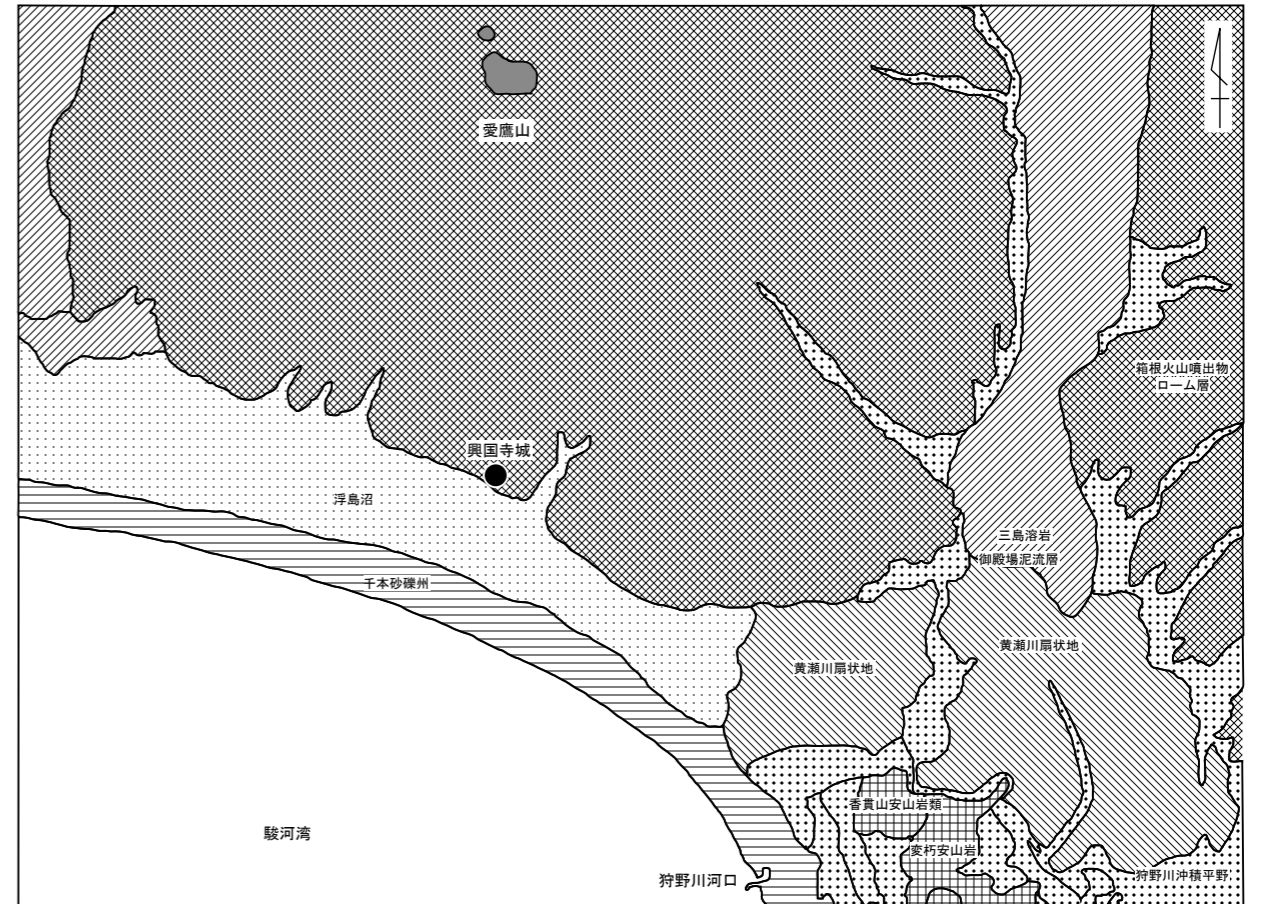
沼津市域の愛鷹山麓は当該期の遺跡の密集地帯として知られている。これは、東名高速道路などや愛



第2図 遺跡位置図

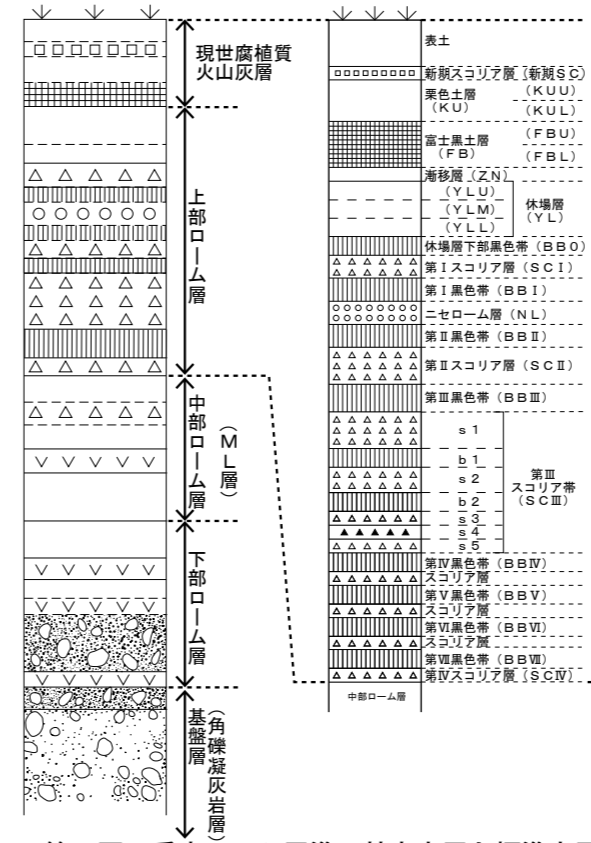


第3図 遺跡周辺地形図



第4図 遺跡周辺の表層地質図

産業技術総合研究所・地質調査情報センター「シームレス地質図」より作成



第5図 愛鷹ローム層準の基本土層と標準土層断面写真



鷹運動公園などのインフラ・社会基盤の建設に伴う埋蔵文化財調査が行われてきたことによる。特に、桃沢川と高橋川に挟まれた愛鷹山の南東麓は傾斜が緩いことから現代の開発も多く、遺跡調査が集中している地域であり、遺跡の発見例も多い。一方、興国寺城跡が位置する高橋川より西方では、山の傾斜はきつく、河川の開析も進んでいる地域である。したがって遺跡数は多くないが、興国寺城跡の西3kmに位置する井出丸山遺跡は、SC IV～BB VII層において石器が出土し、共伴する炭化物の年代測定値が約38,000年前であることから、日本最古級の旧石器時代遺跡として知られている。

【縄文時代】

縄文時代においても愛鷹山麓では、葛原沢第IV遺跡などの草創期段階の遺跡をはじめ、縄文時代早期から前期までは遺跡数も数多い。しかし中期以降は遺跡数は減少する傾向にある。後期には千本砂礫州の形成に伴って、砂礫州上にも遺跡が認められるようになる。

【弥生時代】

沼津市域の前期・中期の遺跡数は極めて少ない状況であるが、後期以降飛躍的に遺跡数が増加し、愛鷹山の尾根上や低地にも大きな集落が形成される。愛鷹山麓の弥生時代後期の遺跡群は「足高尾上遺跡群」とも呼ばれ、各尾根に広がる建物跡のほか遺跡群内の八兵衛洞遺跡などでは集落の北側に複数の尾根を横断する大規模な溝状遺構が検出されるなど、単独の尾根にとどまらない集落構成が認められる。

【古墳時代】

集落遺跡は千本砂礫洲上や狩野川沖積平野にその中心を移し、愛鷹山麓地域、千本砂礫洲、狩野川沖積平野、南部海岸地域には古墳・横穴が分布する。根方沿いには、東日本最古級の前方後方墳である高尾山古墳が築造されるほか、愛鷹山の尾根上は後期～終末期古墳が密集している。興国寺城跡の周辺にも的場古墳群や井出古墳群など後期古墳群が分布している。

【奈良・平安時代】

狩野川下流域には唐三彩陶枕が出土した上ノ段遺跡、御幸町遺跡などの大規模集落や古代寺院（日吉廃寺跡）が認められることから、沼津は駿河国の中心地の一つであったと考えられる。また駿河湾を望む砂礫州上にも古墳時代後半から大規模集落遺跡が形成されている。興国寺城跡周辺では、尾根上の的場遺跡から建物跡が検出されており、山麓にも依然として集落が形成されているところもある。

【鎌倉・室町時代】

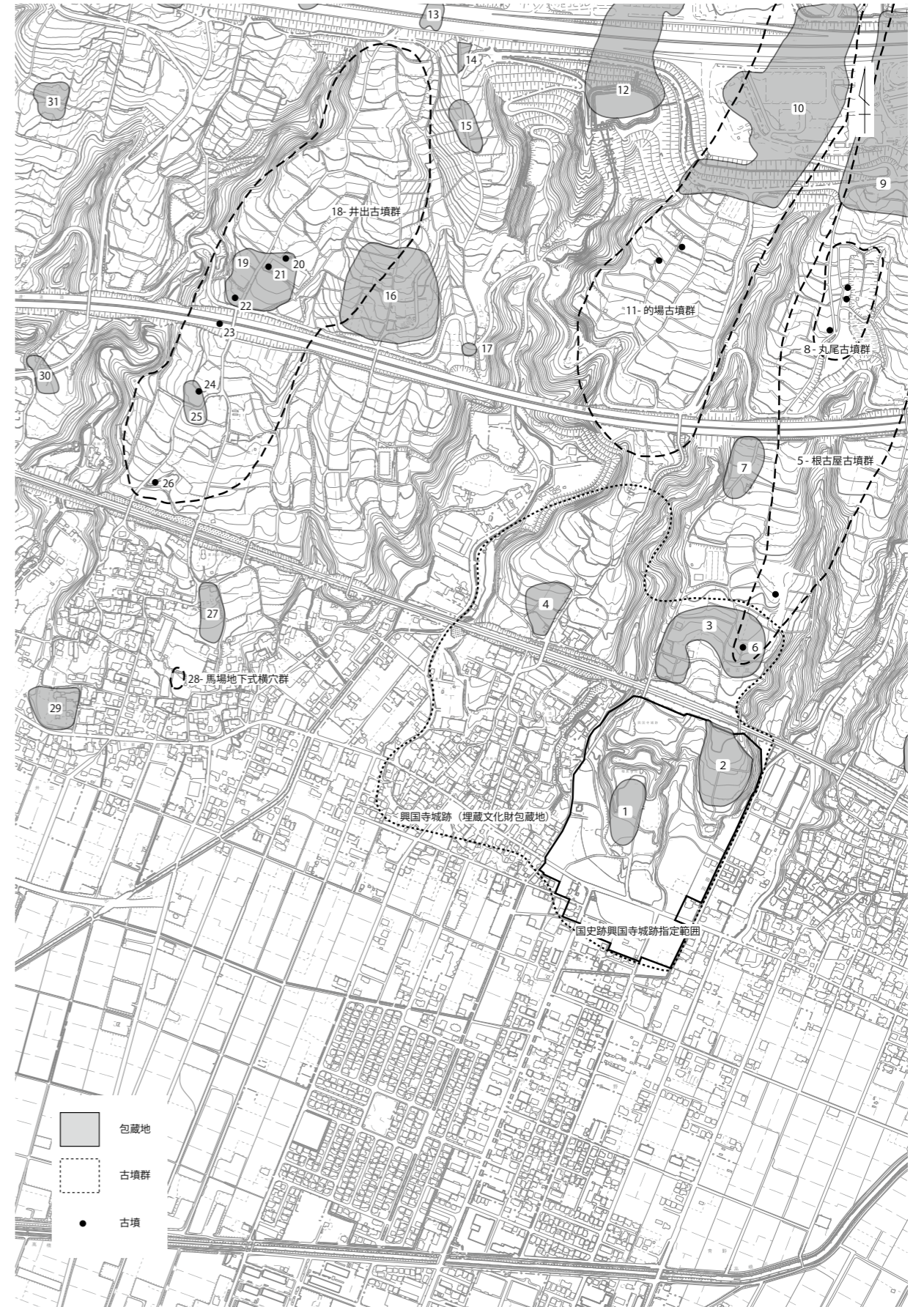
中世以前から沼津は東西を結ぶ交通の要衝であり、愛鷹山の山裾を走る根方道、砂礫州上には、のちの東海道が通過していた。当該期の遺跡の発掘例は少ないが、こうした主要道沿いの遺跡においては、中世の貿易陶磁が出土する事例もある。その一例として、東海道のやや北側に位置する西通北遺跡では、遺構については明らかではないものの、国産陶磁器や貿易陶磁が出土している。

【戦国時代・江戸時代】

沼津周辺は駿河・甲斐・相模・伊豆の境目の地域として政治的にも軍事的にも重要な位置にあった。興国寺城の前を通過する根方道沿いには、沢田砦・天神ヶ尾砦・長久保城などが沿線に築かれている。また、狩野川から黄瀬川にかけてが駿河と伊豆の国境にあたり、狩野川下流には武田が築いた三枚橋城、海岸部には北条水軍の基地となった長浜城などがある。江戸時代に入ると天野興国寺藩、大久保沼津藩が成立したが、江戸時代初期に相次いで改易となり、城は取り壊された。しばらくは城下町としての発展はなかったが、東海道の整備に伴い沼津宿・原宿が設置され、宿場町として繁栄することになる。そののち水野氏が沼津に封ぜられ、沼津宿を取り込みながら城下町を形成し幕末に至っている。

第4節 興国寺城の歴史的経過

ここでは文献史料から明らかになっている興国寺城の歴史的経過について述べる（第4表）。



第6図 周辺遺跡図 (S=1/25,000)

第3表 周辺遺跡一覧表

No	遺跡名	所在地	時代	種別	遺構・遺物等
1	古城	根古屋字古城	縄文～古墳	集落跡	石棒・石錘、弥生土器、土師器
2	根古屋清水	根古屋字清水	弥生～古代	集落跡	削器・礫器、縄文土器、弥生土器、土師器
3	根古屋丸尾	根古屋字丸尾	縄文～弥生	集落跡	1955 田子ノ浦高校踏査。縄文土器、弥生土器
4	中アラク	根古屋字中アラク	古墳	集落跡	土師器
5	根古屋古墳群	根古屋	古墳	古墳群	
6	魔王第六天古墳	根古屋字丸尾	古墳	古墳	円墳
7	光厳寺沢	根古屋字光厳寺沢	縄文	集落跡	縄文土器、打製石斧
8	丸尾古墳群	根古屋字丸尾	古墳	古墳群	円墳
9	秋葉林	青野秋葉林	旧石器～中世	集落跡	BB VII層石器群、礫群。ナイフ形石器、尖頭器、細石刃等。草創期尖頭器群。縄文土器、土師器
10	的場	根古屋字的場・木戸上	旧石器・縄文・古墳・古代	集落跡	1999～県教委調査。石器ブロック、礫群、住居跡(縄文・平安)。縄文土器、石鏃・尖頭器ほか、土師器、灰釉陶器
11	的場古墳群	井出銭神	古墳	古墳群	旧名「銭神古墳群」。円墳。組合せ式箱形石棺。1999～県教委調査。
12	測ヶ沢	根古屋字測ヶ沢	旧石器・縄文・古墳～	集落跡	2003 調査。石器ブロック・礫群。台形様石器、ナイフ形石器、尖頭器、細石刃ほか、縄文土器（早期前半～晩期）、尖頭器、トロトロ石器、石鏃ほか、土師器、須恵器、灰釉陶器。県教委も調査
13	銭神	井出字銭神	縄文～弥生	集落跡	2012 県教委調査。ナイフ形石器、縄文土器、尖頭器等
14	銭神第Ⅱ	井出字銭神	旧石器・縄文	集落跡	2015 市教委調査。細石刃ほか、縄文土器、石鏃、磨石等
15	銭神南	井出字銭神	縄文	集落跡	縄文土器、石槍
16	段崎	井出字段崎	縄文・古墳	集落跡	縄文土器、石匙、土師器
17	閑峰	井出字閑峰	弥生	出土地	小銅鐸（東京国立博物館蔵）、弥生土器
18	井出古墳群	井出字段崎	古墳	古墳群	
19	堀込	井出字堀込	古墳	古墳	円墳・土器
20	段崎古墳	井出字段崎	古墳	古墳	旧名「堀込橋上古墳」、円墳
21	井出2号墳	井出字段崎	古墳	古墳	
22	井出4号墳	井出字焼畑	古墳	古墳	1979 調査。刀子
23	井出古墳	井出字焼畑	古墳	古墳	1966 調査。東名高速建設で消滅。金環、玉類、金具類、鉄鏃、須恵器
24	二ツ塚古墳	井出字二ツ塚	古墳	古墳	円墳、金環、玉類、鉄鏃、須恵器、環頭大刀柄頭
25	焼畑	井出字焼畑	縄文	集落跡	1953 沼津女子高踏査。縄文土器
26	焼畑古墳	井出字焼畑	古墳	古墳	旧名「東井出浅間神社北方古墳」。円墳、直刀、鉄鏃、金環、玉類
27	北畑	井出字北畑	弥生	集落跡	1959 沼津女子高踏査。弥生土器
28	馬場地下式横穴群	井出字馬場	古墳	横穴群	地下式横穴5基（うち1基埋没）
29	阿野氏館	井出字馬場	中世	城館	土塁が残存。伝阿野全成親子の墓
30	井出丸山	井出字堀込	古墳	集落跡	2005・2006 市教委調査。SC IV～BB VII層より国内最古級の石器群。
31	丸山橋上	西井出	縄文	集落跡	縄文土器

『沼津市史 資料編 考古』及び『沼津市埋蔵文化財分布地図』より作成

興国寺城跡周辺は、鎌倉時代頃から阿野庄と呼ばれていた。源平の戦いの後には、源頼朝の異母弟となる阿野全成がこの地に領地を得ており、阿野全成親子のものと伝わる墓が井出大泉寺に残っている。戦国時代の阿野庄は、古文書などから富士市船津付近から沼津市の浮島・原・愛鷹・片浜地区の一部にかけて位置する広範な地域であったと考えられる。

興国寺城の存在を最も古く示す史料は、江戸時代に記された『北条記』『今川記』といった軍記物や『今川家譜』のような家譜であるが、これらによれば、北条氏の祖伊勢宗瑞は、室町幕府の申次衆を務めながら、姉北川殿の嫁いだ今川家の家督争いにおいて、甥今川氏親を家督につけることに成功し、富士郡下方十二郷と興国寺城を与えられたとされる。さらに堀越公方の内紛に際しては、興国寺城から堀越御所足利茶々丸を攻めたと伝わる。

天文6（1537）年、今川義元が外交政策を転換し甲斐国の武田信虎と同盟を結ぶと、それまで宗瑞以来の従属関係または友好関係にあった北条氏との関係が悪化し、北条氏綱が駿河東部に出兵し、いわゆる河東一乱が勃発した。戦況は当初北条方優勢であったが、武田の援軍を得た今川義元が河東地域を奪還し、その後今川義元によって興国寺城が大規模普請された。これが現存する最古の一次史料である。その際、興国寺という寺院を蓮光寺の境内に移し、真如寺と改称させたことが記録として残っており、興国寺城の名称の由来とされる（史料編 史料番号 38。）。

その後、今川・武田・北条による三国同盟が締結され、興国寺城は今川支配が続く。しかし、永禄11（1568）年に武田信玄が今川との同盟を破棄し、駿河に侵攻すると再び当地は戦場となる。北条氏康は今川支援のため東駿河に出兵し、興国寺城をはじめ諸城を占領したが、武田信玄も数度東駿河に侵攻し、興国寺城でも大規模な戦闘があった。北条方は堺和氏統をはじめとする諸将が奮戦し武田軍を撃退するが、蒲原城が落城するなど劣勢を強いられ、北条氏康が亡くなると後を継いだ息子の氏政は外交政策を転換し、武田信玄と和睦して駿河から撤兵、興国寺城は武田方に引き渡された。

武田支配のもと、しばらく当地には平穏が続くものの、上杉謙信の後継者をめぐる御館の乱をきっかけに武田と北条との関係が悪化し、武田勝頼は国境沿いに三枚橋城を築城した。武田は上杉との同盟により北信濃衆を駿河に配置して北条との戦に備えたことから東駿河において再び緊張が高まり、この頃、同じ根方街道沿いの天神ヶ尾砦の門を興国寺城に移築するなど、興国寺城でも普請が行われていたことが記された史料が残る（史料編 史料番号 114）。武田勝頼は西からも織田・徳川の攻勢をうけ、天正10（1582）年に滅亡する。この時、興国寺城主曾根昌世は、以前より織田信長に通じており、戦後に駿河の所領と興国寺城を安堵されている（史料編 史料番号 129・130）。

同年、織田信長が本能寺の変で急死すると、旧武田領をめぐり徳川氏と北条氏の間で天正壬午の乱が勃発する。本能寺の変の際には、徳川家康の家臣牧野康成が興国寺城を守っていたが、のちに松平清宗が城主となる。また三枚橋城には松井忠次（松平康親）が配置されるなど、北条氏との最前線にはこれまで諏訪原城などで対武田との最前線を担ってきた武将が配置された。駿豆国境での戦闘が続く、徳川方は長久保城を改修するなど軍事的緊迫はしばらく続いていたが、家康と氏政の会盟を経て再び平穏が訪れる。のち豊臣秀吉が北条氏政・氏直親子に対して宣戦布告すると、豊臣方の大軍勢が街道を東に進み、興国寺城付近も諸将と軍勢が通過している。

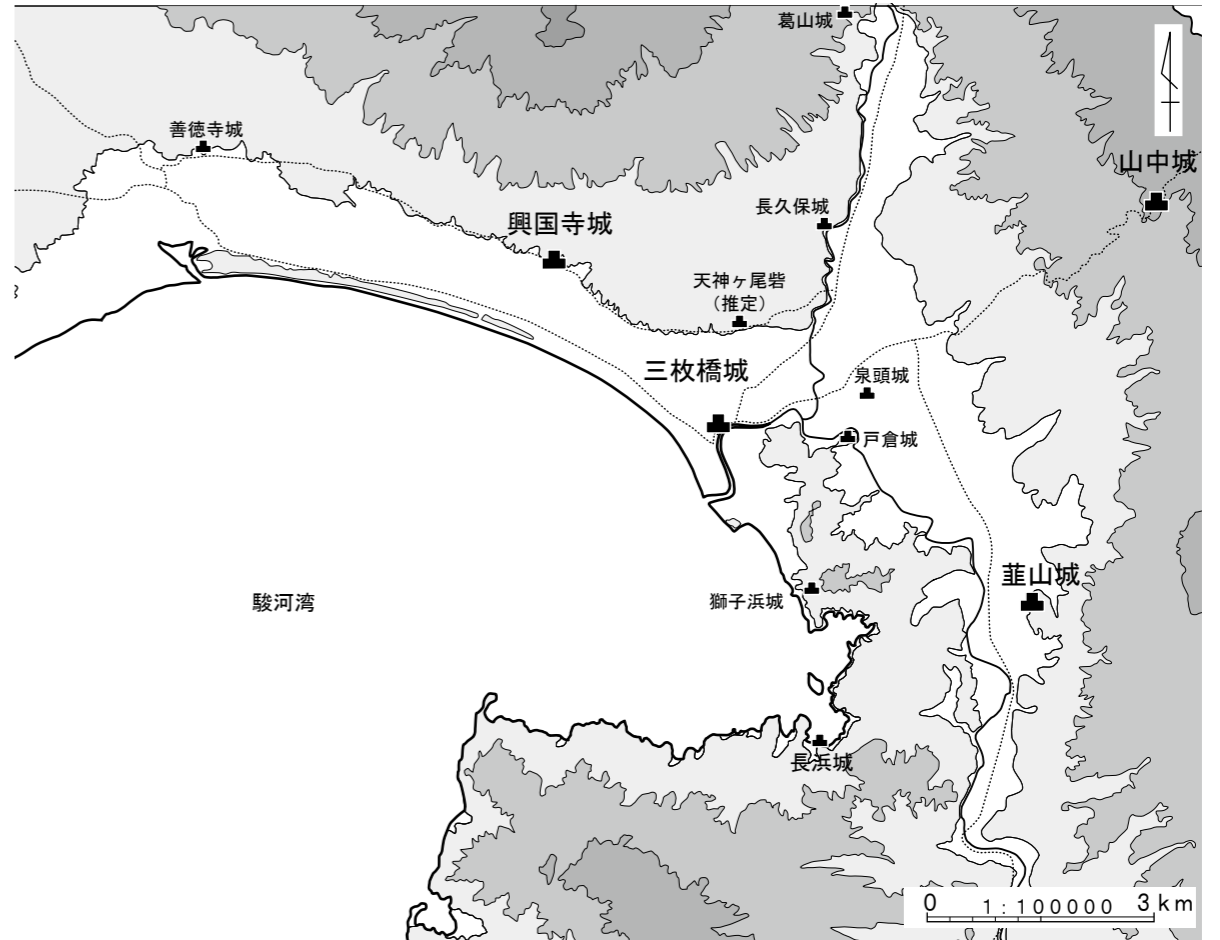
天正18（1590）年に北条氏が滅びると徳川家康は関東に転封となり、駿河国には豊臣家臣の中村一氏が配置された。中村は駿府を拠点とし、三枚橋城に弟の中村一栄（氏次）、興国寺城に河毛重次を配した。河毛は武に秀でた武将であったようで一氏の岸和田在城時代に対雑賀・根来衆との戦いにおいて軍功を多数あげている。河毛時代の記録は少ないが、領内の大泉寺・桃沢神社に安堵状を出している（史料編 史料番号 177・178）。

慶長5（1600）年、会津上杉征伐・関ヶ原の戦いが起き、興国寺城は再び大軍勢が通過することと

第4表 興国寺城関連年表

西暦	和暦	支配大名	城主・城代	出来事	史料編の番号
1487	文明 19			伊勢宗瑞、室町将軍足利義尚の申次衆に名が見える。	3
1487	長享元	今川・北条	伊勢宗瑞	伊勢宗瑞、今川氏親を当主に据え、富士郡下方十二郷と興国寺城を与えられる。	4
1491	延徳 3			堀越公方足利政知が没す。茶々丸が義母円満院と義弟潤童子を殺害。	
1493	明応 2			伊勢宗瑞、伊豆国堀越御所に足利茶々丸を攻め、伊豆平定を開始。京都では明応の政変が起きる。	18
1498	明応 7			伊勢宗瑞、伊豆平定がなり、興国寺城から葦山城へ本拠を移す。	9
1515	永正 12			伊勢宗瑞、沼津妙海寺に諸公事を免除する。	23○
1537	天文 6			今川義元と武田信虎が同盟。義元、信虎の娘を正室に迎える。	
1537	天文 6	北条		北条氏綱、河東侵攻。「(第1次)河東一乱」勃発。河東を北条が制圧。	
			(青地飛騨)	(興国寺城主青地飛騨、武田に降伏する)	29
				(武田信虎、娘の化粧田として今川義元に興国寺城を渡す。)	31
1545	天文 14			今川義元・武田晴信、河東に侵攻し吉原を攻める。(第2次河東一乱)	33
1545	天文 14	今川		武田晴信、吉原を落とし、千本松、岡宮に陣をはる。河東は今川の勢力下となる。	34
1549	天文 18			今川義元、普請のため興国寺を真如寺に移し、寺領を安堵する。(興国寺城の普請)	38○
1550	天文 19			今川義元、興国寺城の普請を検分する。	39
1552	天文 21			今川義元、秋山三郎の興国寺城普請の功を褒め、棟別銭などを免除し、高橋修理の同心とする(興国寺城普請)。	41○
1552	天文 21			今川義元の娘が武田義信に嫁ぎ、翌年武田信玄娘と北条氏政の婚儀が整う。さらに翌年、北条氏康娘が今川氏真に嫁ぐ(甲相駿三國同盟なる)。	
(1554)	(天文 23)			(北条氏康・氏政、河東に侵攻し、浮島ヶ原に陣をはる。)	43
1560	永禄 3			桶狭間の戦い。今川義元戦死。	
1560	永禄 3			今川氏真、松井宗信の興国寺口での戦功や桶狭間での討ち死を子八郎に対して賞す。	47○
1568	永禄 11	北条		武田信玄が駿河侵攻。北条氏康も駿河に進出し、興国寺城ほか河東地域を占領する。	52○
1569	永禄 12			武田信玄が再度駿河侵攻。興国寺城などを攻めるが、大水のため八幡大菩薩の旗を捨て敗走。	69
1569	永禄 12		塀和氏統	塀和氏統、興国寺城主に任じられる。	68○
1571	元亀 2			興国寺城に武田勢が侵入するも、塀和氏統らが奮戦し、撃退する。	86・87○
1572	元亀 3	武田		武田と北条が和睦し、興国寺城を武田が受け取る。	90○
	元亀頃		(保坂掃部)	穴山梅雪が麾下の保坂掃部に興国寺城を守らせる。	95
1577	天正 5		(向井正重)	向井正重が興国寺城を守る。	101
1579	天正 7			武田勝頼が三枚橋城を築城。武田と北条の関係が悪化する。	106○
1580	天正 8			駿河湾海戦起きる。武田勝頼、浮島ヶ原を本陣とする。	110
1580	天正 8			穴山梅雪、興国寺城に天神ヶ尾砦の門を移築するなど、普請を行う。	114○
1581	天正 9			興国寺城表に北条家臣大藤政信の軍勢が攻め込む。	121○
1582	天正 10	徳川		織田徳川連合軍が武田勝頼を攻め滅ぼす。	
1582	天正 10		曾根昌世	織田信長、曾根昌世に興国寺城と河東一万貫を与え、徳川麾下とする。	131
1582	天正 10		牧野康成	本能寺の変。牧野康成の家臣稲垣長茂が興国寺城を守る。	136○
1582	天正 10			天正壬午の乱。	
1582	天正 10		松平清宗	松平清宗が興国寺城主となり、2000貫、与力50人が与えられる。	144
1583	天正 11			徳川家康が富士山作業に興国寺城普請等以外の普請役を免除する(興国寺城の普請)。	148○
1583	天正 11			松平家忠、長久保城を普請する。往路と復路に興国寺城に立ち寄る。	150○
1584	天正 12			小牧長久手の合戦。松平清宗は家清と共に興国寺城を守る。	156
1585	天正 13			武川衆の人質が興国寺城に入る。武川衆は大久保忠世に属し戦功をあげる。	158
1589	天正 17			大地震で興国寺城の塀(と二階門)が破損する。	164○
1590	天正 18			豊臣秀吉の小田原攻めが始まる。徳川家康、興国寺城に滞在する。	171
1590	天正 18			松平清宗は吉原を守り、山口直友が興国寺城を守る。	169
1590	天正 18			北条氏が滅び、徳川家康が関東へ移封。松平清宗親子は武蔵八幡山城1万石を与えられる。	
1590	天正 18			関東移封のため、松平家忠の妻子が一時興国寺城に滞在する。	174○
1590	天正 18	中村(豊臣)	河毛重次	中村一氏が駿河国を与えられ、河毛惣(宗)左衛門重次が城主となる。	176
1590	天正 18			河毛重次、大泉寺領地と桃沢神社地を安堵する。	178○
1600	慶長 5			会津上杉征伐・関ヶ原の戦い。中村勢は東軍に参加。内藤信成・菅沼定仍が興国寺城を守る。	182・183
1601	慶長 6	天野(徳川)	天野康景	天野康景、五千石を加増され、合わせて1万石となり、興国寺城を与えられる。	185
1603	慶長 8			天野康景が大日不動(現、駿東郡長泉町)へ二石寄進する。	191○
1603	慶長 8			天野康景が本宿村新井堰に十石付け置く。	192○
1607	慶長 12			天野家臣が天領の農民を殺傷し、天野は小田原西念寺に蟄居(逐電)する。	197
1607	慶長 12			興国寺藩は除封。興国寺城は廃城となる。	

※数字の後の○は一次史料を表す



第7図 天正末頃の東駿河城郭分布図

なり守将が配された。関ヶ原の戦いは東軍の勝利となり、東軍に属した中村氏は伯耆国へ移封となり、徳川家康家臣の天野康景が、興国寺城に配され1万石の大名となる。

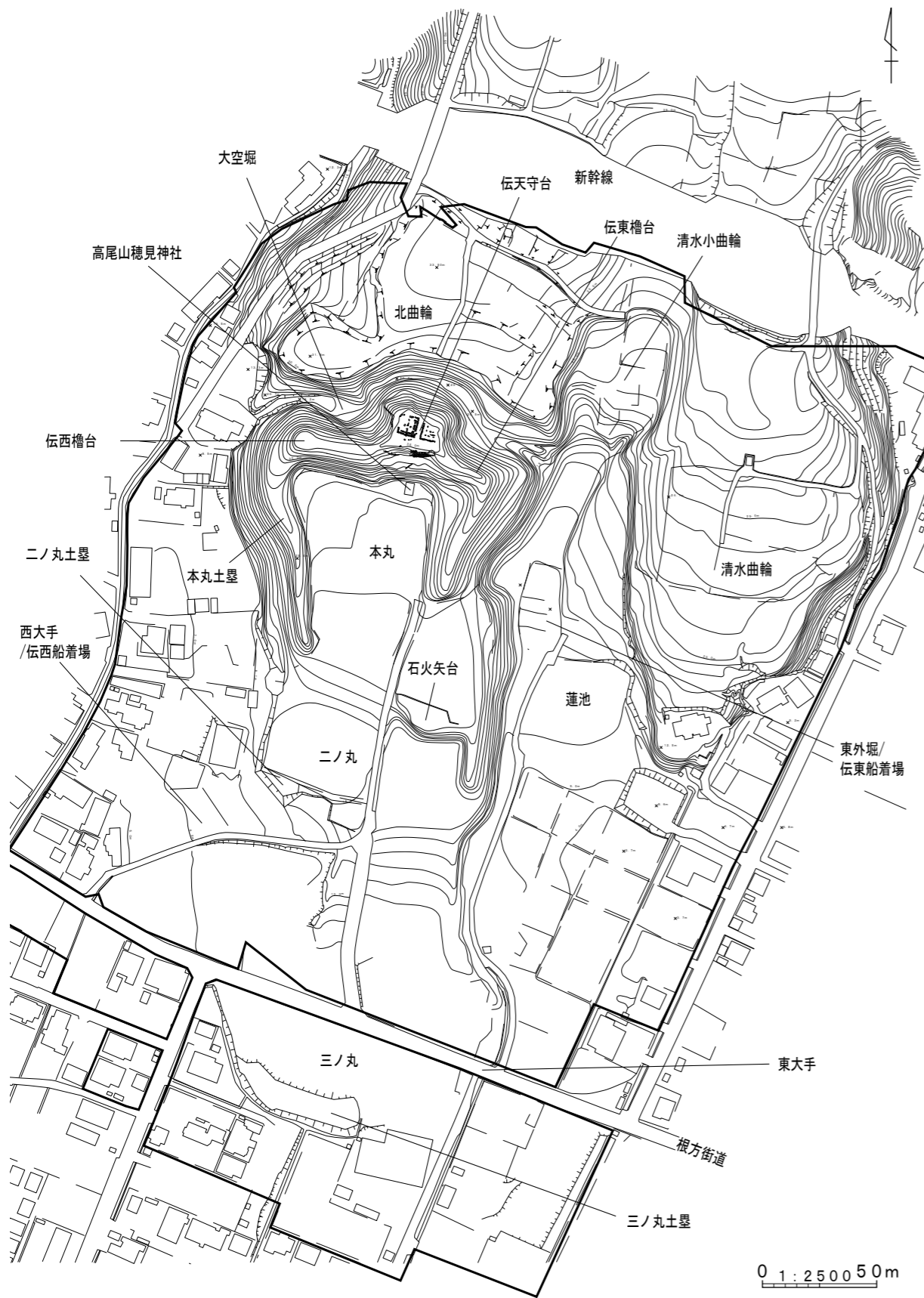
慶長12(1607)年、天領民の殺傷事件をめぐる、城主天野康景は子の康宗とともに出奔。相模国西念寺に蟄居した。このため、藩は取り潰しとなり興国寺城は廃城となった。その後、城内は農地となり改変が進み、根古屋村差出帳(史料編 史料番号205)や絵図(史料編第五章 史料番号28)には村の共有地として郷蔵が建てられたことも記されている。

第5節 興国寺城跡の現況と曲輪配置

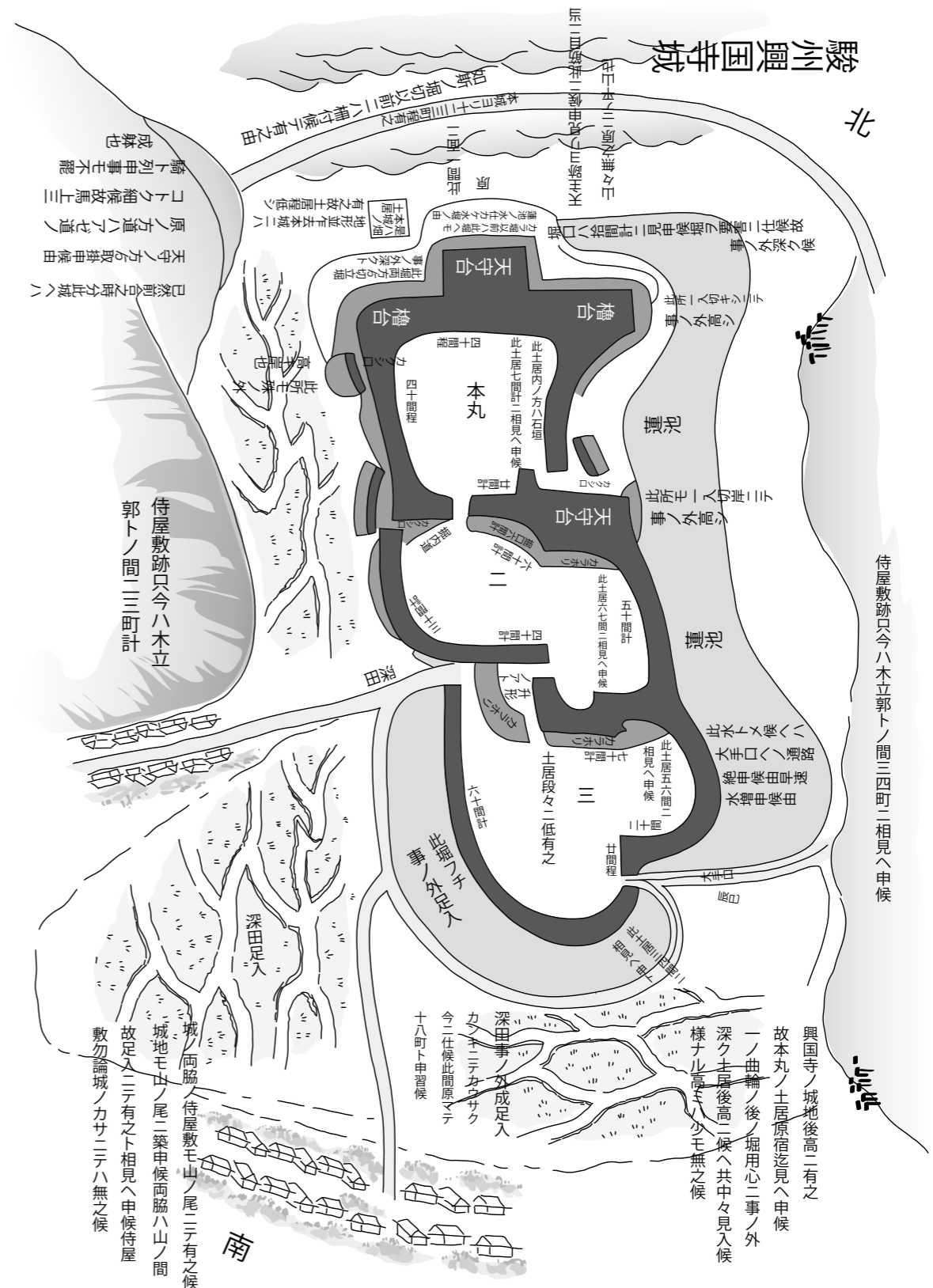
現在の興国寺城跡は後世の改変を多く受けているが、残存する土塁等の諸施設は、国文学研究資料館蔵の『城築規範』(興国寺城 津軽家文書)(史料編第五章 史料番号1)と対比が可能である。本史料は弘前津軽家が寛文12(1672)年に編纂したとされる『城築規範』に記された全国72城図の内の1枚で、天野康景の逐電による廃城以後の状況を記していると考えられる。城郭内の曲輪名称は、基本的に本史料に基づいており、これに記載の無い曲輪については沼津市教育委員会が新たに名称を与えている(第8～10図)。

曲輪は北から「本丸」「二ノ丸」「三ノ丸」と直線的に配され、絵図からこれらが主要な曲輪群と考えられる。そして絵図には記載されていないが、本丸の北側に「北曲輪」がある。さらに字名を用いての命名であるが、東側の谷筋に「清水小曲輪」、そして更に東の尾根に「清水曲輪」が配されている。

城の北端は新幹線によって破壊されているが、昭和27年撮影の航空写真(写真図版PL.1上段)に三日月堀が写っている。絵図には北曲輪よりも北側に堀もしくは道が描かれるが、現況では明らかでない。



第8図 興国寺城跡現況図及び曲輪配置図(太線は指定範囲)



第9図 城築規範トレース図

本丸の北側には絵図に「天守台」と記されている場所がある。昭和57年の調査では礎石建物は検出されたものの、瓦の検出はなかったため、いわゆる近世城郭の「天守」はなかったと考えられる。そのため本地点は「伝天守台」と呼称している。そして本丸土塁上には、絵図に「櫓台」と記されている箇所が2か所ある。西側を「伝西櫓台」とし、平成29年度には発掘調査を行って建物跡を検出した。一方、東側にも絵図には櫓台が描かれているが、発掘には至っておらず、詳細は不明である。

伝天守台南面には石垣が残存する。絵図には「此土居内ノ方ハ石垣、此土居七間計ニ相見ヘ申候」（この土塁の内側は石垣で、この土塁七間ほどに見える）としか記されていないことから、この時から石垣は南面だけであったと考えられる。

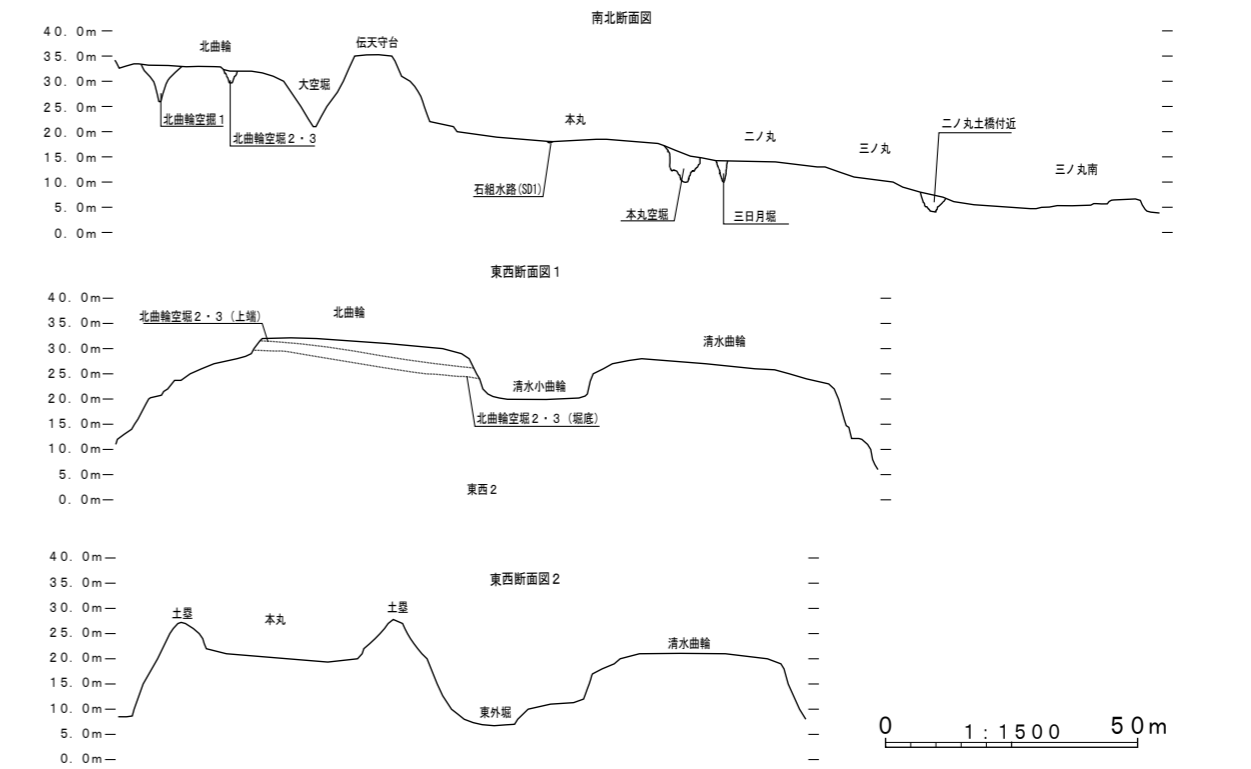
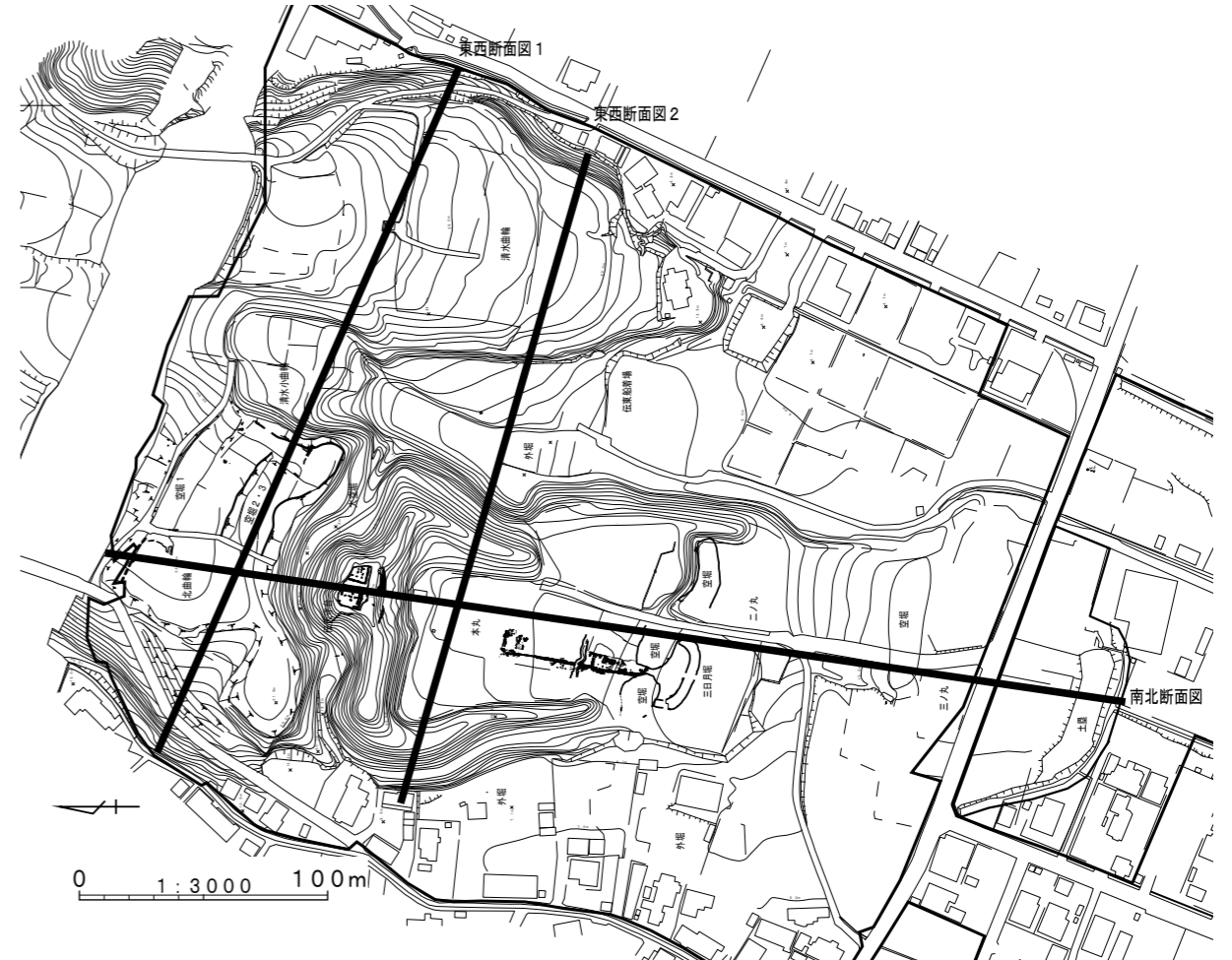
本丸空堀の東側には「カラホリ」と記され、さらに西側の空堀には「カクシ口」とあるが、西側は急斜面となっていることから、発掘調査は行われていない。同じく「カクシ口」が、本丸東側の小曲輪にも描かれており、この周辺は「石火矢台」と地元には伝わっている。「台」とあることから、本来は土塁の上の平場を指すのであろうが、本報告書では本丸土塁の東側の小曲輪を広義としての「石火矢台」とする。

二ノ丸虎口に「カラホリ」「升形ノアト」と記されている。西側の空堀周辺は後世の改変により、大きく土地が下がっている。また三ノ丸土塁の形状は絵図と一致するものの、大きく土取りされて低くなっている。このように三ノ丸は後世の改変が激しく、特に大きな変化として、絵図では外堀の南側を回っている根方街道が現在の三ノ丸の中を直線的に通過していることが挙げられる。そのため、絵図において、三ノ丸土塁南東に描かれている「大手口」は現在の県道によって滅失したと考えられる。

城の南方と両側に広がる低地は、1mも掘削すると水が湧き出る低湿地帯である。現在の海岸線付近にあたる千本砂礫州は、縄文時代後期頃に完全に陸地化し、山裾との間に浮島沼と呼ばれる湖沼を形成した。愛鷹山などからの土砂の供給により沼は次第に陸地化していったが、近世の城絵図には「蓮池」「深田足入」と表現される湿地帯、明治初期の絵図でも湧水が各所に見られる軟弱な地盤であり、この湿地帯を興国寺城跡では天然の堀としている。この東西に位置する天然の堀には、それぞれ船着場があったと地元には伝わっており、詳細位置は不明であるものの、この周辺を「伝西船着場」「伝東船着場」と呼称している。さらに伝東船着場周辺には、絵図で「蓮池」と記されるとおり、自然湧水池がある。

次に発掘調査やボーリング調査によって得られた地質情報について述べる（第11図）。興国寺城跡では、現世腐植質火山灰層・上部ローム層・中部ローム層、中部ローム層の下部の角礫層を挟むローム層、基盤となる凝灰角礫岩層が確認されている。詳細な調査は行っていないが、基盤層上位の角礫層を挟むローム土が下部ローム層に相当すると認識している。

興国寺城跡のローム層は、愛鷹山南麓におけるローム層の標準的な堆積に比べると上部ローム層は相対的に薄い傾向がある一方で、中部ローム層の層厚は標準的な厚さがあり、主要曲輪群は中部ローム層までを一度削平してからの造成が行われている。このため上部ローム層は北曲輪と三ノ丸南端周辺においてのみ確認されるにとどまっている。なお、本丸空堀の東側では堀の斜面に礫層が確認できるが、この礫層は二ノ丸から三ノ丸にも部分的に検出されていて、このことから上部・中部ローム土はほとんど掘削されていると考えられる。また興国寺城跡で最も深く掘られている大空堀では、その深さは地表面から約15mに及ぶ。上部ローム層から掘削され、愛鷹山の基盤となる岩盤層まで到達し、さらにこの角礫凝灰岩層を数メートル掘削している。



第10図 興国寺城跡地形断面図



平成 17・18 年度実施地質調査業務委託結果より作成

第 11 図 ボーリング調査による標高断面図

第三章 遺 構

第1節 本丸

(1) 調査の経過と概要

3ヶ年の試掘調査を経て平成15年度から本格的に興国寺城跡の遺構確認調査を開始し、そのうち本丸の調査は平成15年度～18年度まで実施した。調査地点は平成12～14年度にトレンチにて遺構の残存状況を確認した上で、平成15年度に本丸北西部と虎口周辺、平成16年度は本丸空堀から本丸中心部にかけて、平成17年度は神社地を除いた本丸中央部から北東部と石火矢台の南にまで伸びる本丸空堀（東）、平成18年度は石火矢台との境と本丸三日月堀を対象とした（第12・13図）。

本丸北側では、後世の攪乱を大きく受けていることから、確認できた遺構は少数であったが、表土から1.2mの深さのところまで山である中部ローム層（ML層）が平坦に掘削され、さらにその面の上位には整地土と集石遺構が確認された。一方、南側の本丸虎口付近ではより厚い造成土上にて遺構が検出された。このことから本丸は南側をより盛土することで、南への斜度をゆるくし、平坦面を造り出していることが明らかになった（第II章第10図）。

検出された遺構は、礎石建物跡2棟（SS1・SS2）、石組水路及び素掘りの溝4条（SD1～4）、石列4条、本丸空堀、本丸三日月堀、そして性格不明の集石遺構4基（SG1～4）、及び柱穴である。堀については、本丸三日月堀を除いて、絵図との対比が可能である（第14・15図）。

(2) 本丸虎口周辺（第16図）

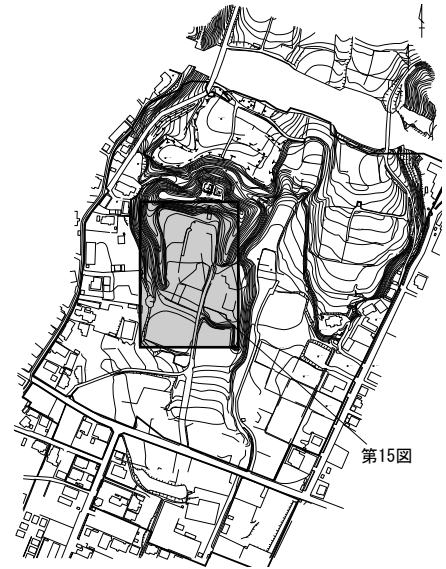
1号礎石建物跡（SS1 第17・18図）

遺構が比較的多く残存していた本丸虎口の北側（13-26Gr.）で検出された。南西の礎石は失われているが、規模は幅5.4m、奥行き3.6m（3間×2間、石の中心より計測）で、西側をSD1が南北に通っている。土塁に両端を挟まれた櫓門と推定され、さらに南東側に1.5mほどの距離で礎石が近接していることから、潜戸があったと考えられる。

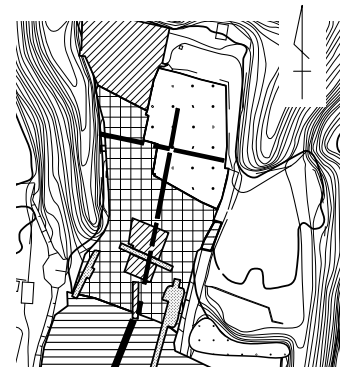
建物跡の北側には、SD1と接続する形で東西に石組水路が4.5m伸びている。水路の中心と礎石の中心は約0.5m離れており、本遺構に伴う雨落ちと推定される。

石列1・石列2（第17図）

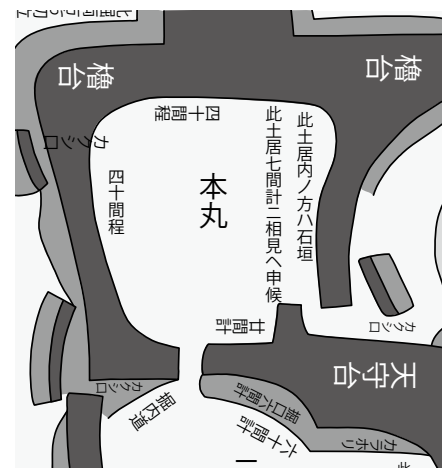
SS1の東西にてそれぞれ検出された。現在は失われているが、絵図に基づけば、SS1の東西両側には土塁があったと考えられ、石列1・2は形状や規模は不明であるものの、その位置から土塁の際を



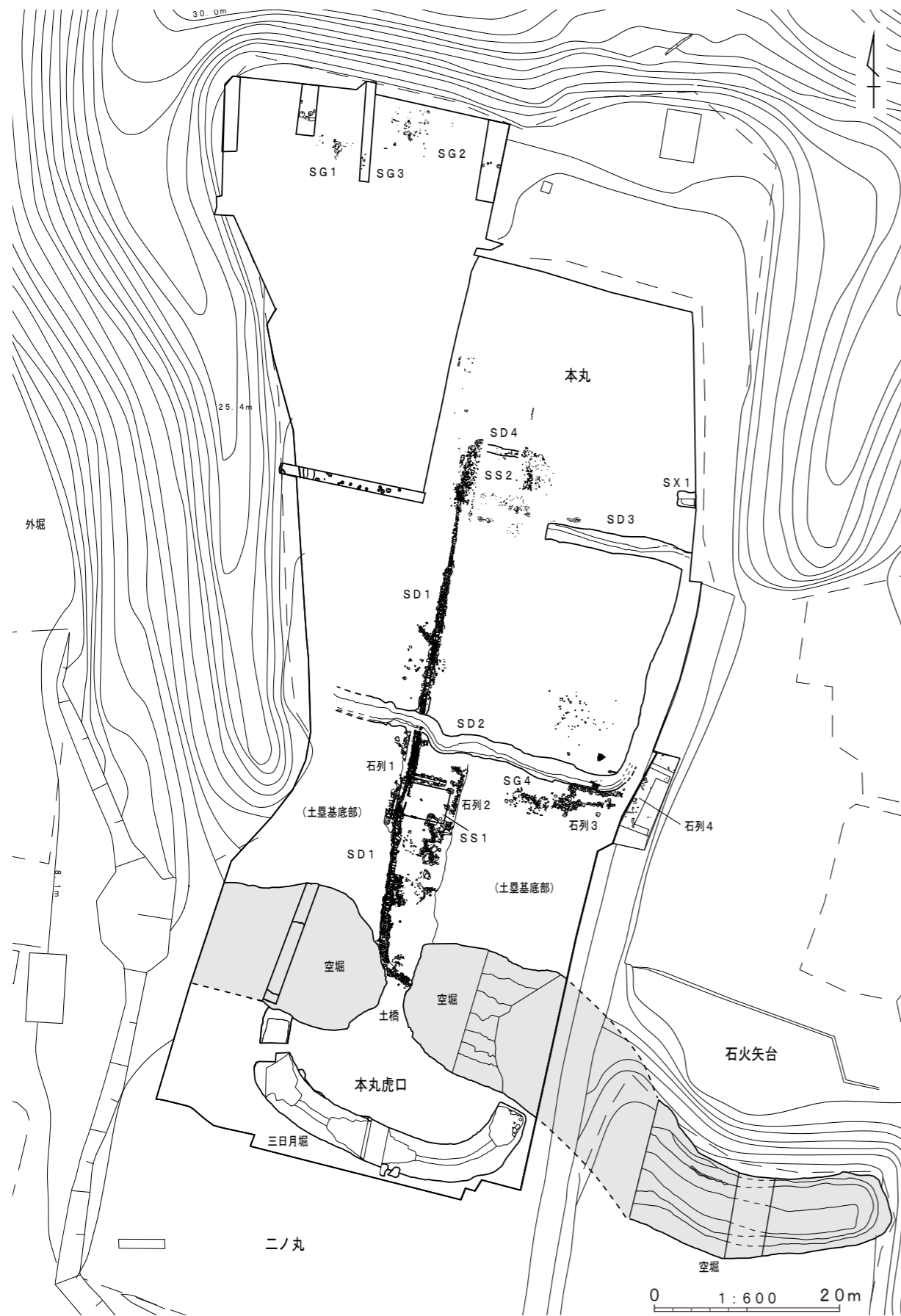
第12図 本丸 調査位置図



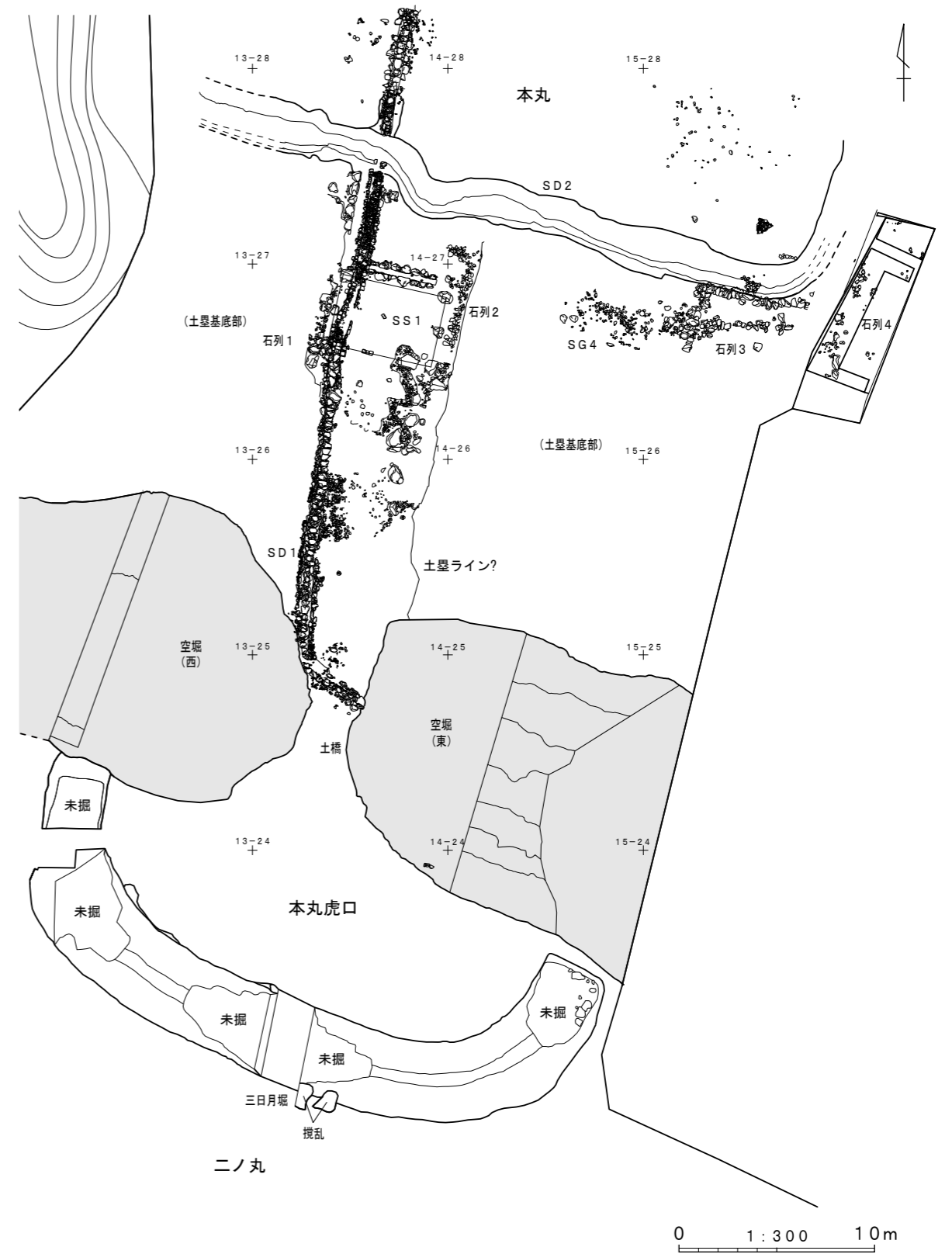
第13図 本丸 年度別調査地点図



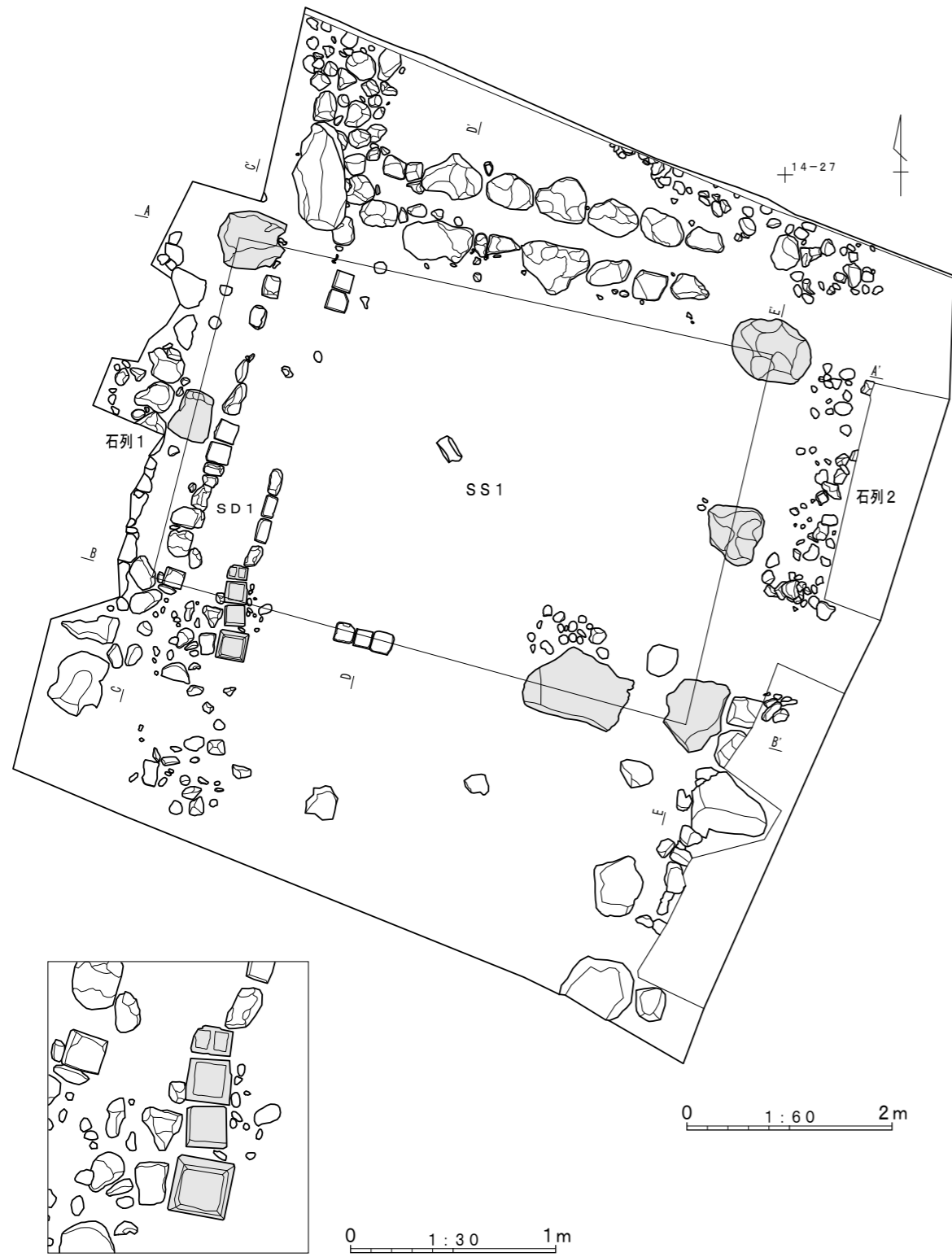
第14図 本丸絵図（拡大）



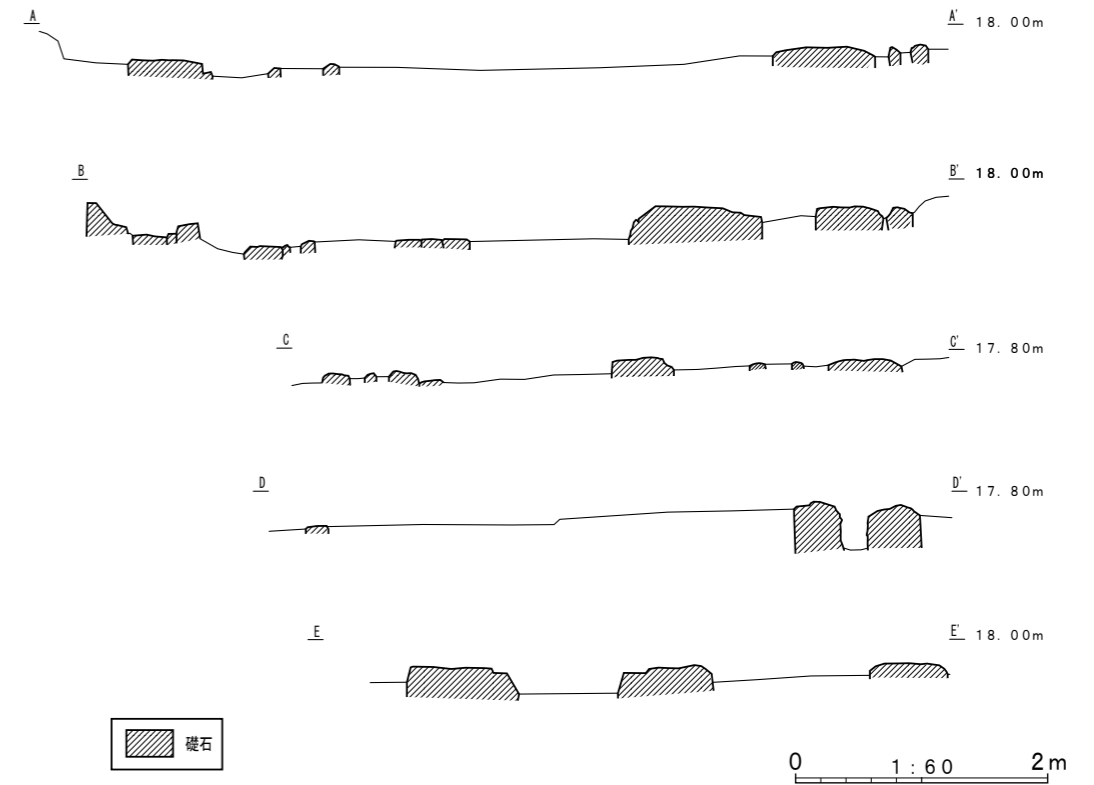
第15図 本丸 全体平面図



第16図 本丸虎口周辺 平面図



第17図 本丸 SS1 平面図



第18図 本丸 SS1 エレベーション図



第19図 本丸 石列3・石列4・SG4 平面図

巡る土留の石と想定される。

上部構造が失われているため断定は困難であるが、石列に沿って土塁の基底部と考えられる盛土層のラインが確認されている。南側の空堀の立ち上がりから計算した場合、土塁基底部の幅は西側で約 18 m と推定され、東側は若干短くなる。

石列 3・石列 4・4号集石 (SG4) (第 19 図)

本丸虎口東側の石火矢台との境 (15-25Gr.) において検出された。石列 3 の検出長は東西約 6.0 m、石列 4 は南北 5.0 m である。石列 3・4 は組み合わさって、L 字を呈している。絵図と突き合わせれば、この石列も石列 1・2 と同じく、土塁を巡る土留の可能性もある。また石列の西側には性格不明の SG4 が認められる。検出面は石列 3 や石列 4 と同一面であるが、両者の関係は不明である。

1号溝 (SD1 第 20 図)

SD1 は本丸のほぼ中央にて検出された石組水路である。石材は付近で産出される安山岩系の石材が多用されており、北端は攪乱によって失われているが、建物と考えられる SS2 から南へと走り、虎口周辺では SS1 の西側を通して本丸空堀間の土橋で向きを変え、東側の空堀 (東) とつながる。検出された総延長は約 55.0 m、幅は 0.5 m～1.0 m、深さは最大約 0.4 m である。また途中水路が分岐している部分 (13-28Gr.) も認められ、空堀へ注ぐ以外に本丸内の施設に水を供給していた可能性もある。

虎口付近の SD1 の石には宝篋印塔の石材が転用されている。遺構の一部であって、取り上げは行われていない (第 17 図左下・PL.5)。出土遺物には志戸呂の大窯 4 段階～登窯併行期に位置づけられる丸皿等が出土しており、本遺構の年代は 17 世紀初頭以降である。

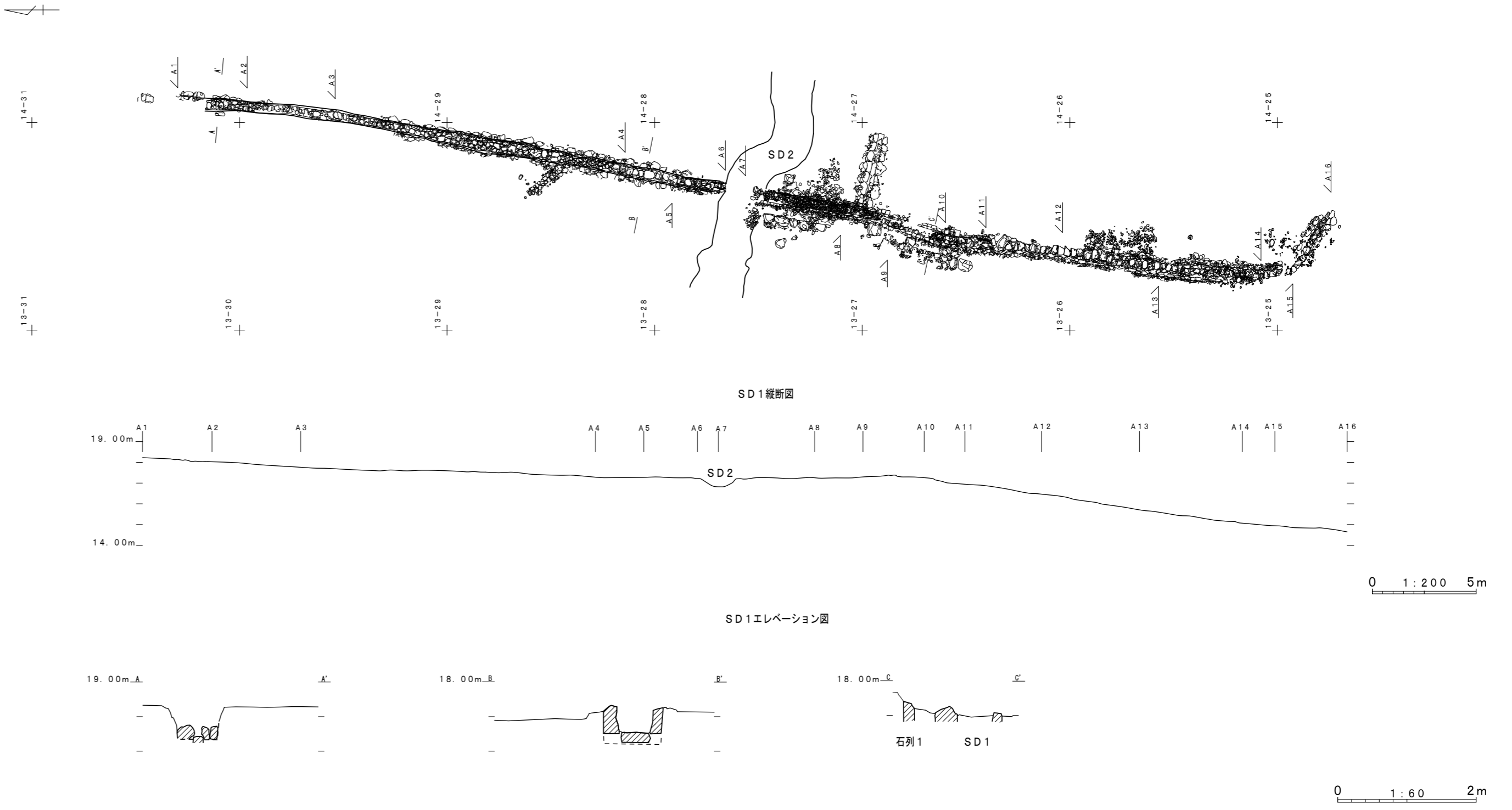
本丸空堀 (第 22～24 図)

本丸虎口と石火矢台南側の 2 地点で調査した。本丸虎口の土橋西側の構造は未調査であるが、東側は石火矢台南側まで弧を描く形状となり、これは絵図とも一致する (第 21 図)。本丸南側の検出面で堀幅は約 14.0 m、深さ 7.0 m を測る。ただし堀底は 2 段構造となっており、底部から 2.0 m の高さにおいて堀の手前と奥に段差が認められ、中央がより深い構造となっている。段差の生じている高さ付近では水平の堆積層があり、その上部には本丸側からの土砂の流れ込みが認められることから、段差面の上下を挟んで時期差が推定され、最終的に SS1 の東西に付属していた本丸土塁を南側に崩して堀を埋めたと考えられる。ここでは水平堆積層よりも上部を「本丸空堀 1」とし、下段の幅狭い堀を「本丸空堀 2」と呼称する。本丸空堀 2 は堀底幅約 2 m を測り、堀底部の一部は愛鷹山の基盤層に達しているところがある。水平堆積層を堀底とする本丸空堀 1 は堀幅約 9.5 m の箱堀構造である。本丸空堀 1 の本丸側の壁面は直立するような角度で、高さ 3.5 m を測る。

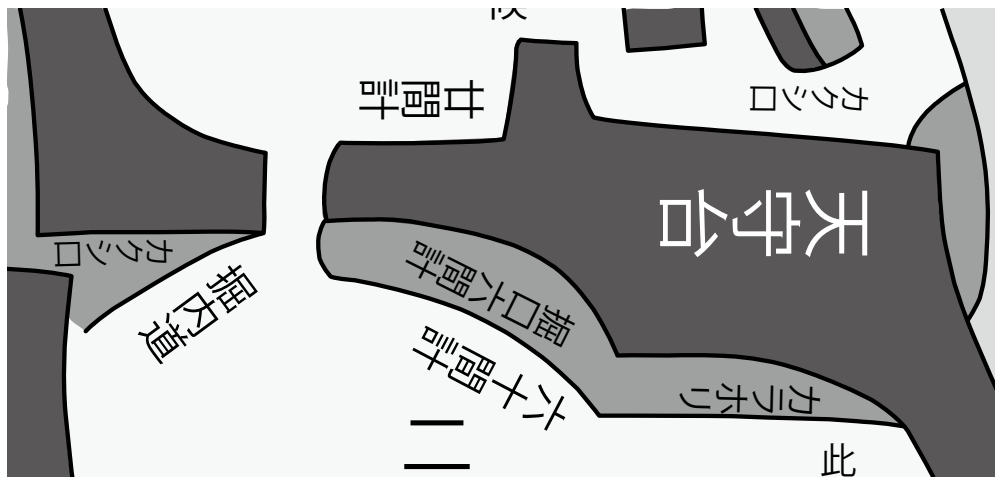
土橋は最も狭い箇所です約 2.7 m を測り、ML 層まで掘削されて、その上は固く締まっている。土橋上には石組排水路 (SD1) が SS1 から延伸しており、土橋中央付近で東に折れて、本丸空堀に接続している。本丸堀の西側は絵図では堀底道と記されて西外堀に接続していることから、堀底道の設置に伴って、排水の場を東に変更した可能性がある。なお、土橋上の石組の残存状況は悪く、側面の石の残存は部分的となっている。

石火矢台南側の本丸空堀は平成 17 年度に堀底まで調査を行っている (第 24 図)。石火矢台が本丸から南に張り出ていることから、空堀平面は弧状を呈しており、西側の直線的な空堀とは異なる。東側端部は方形で、底部も箱形である。絵図において空堀 (東) は二ノ丸東側土塁の手前で収束しており、発掘調査でもこのことが裏付けられた。

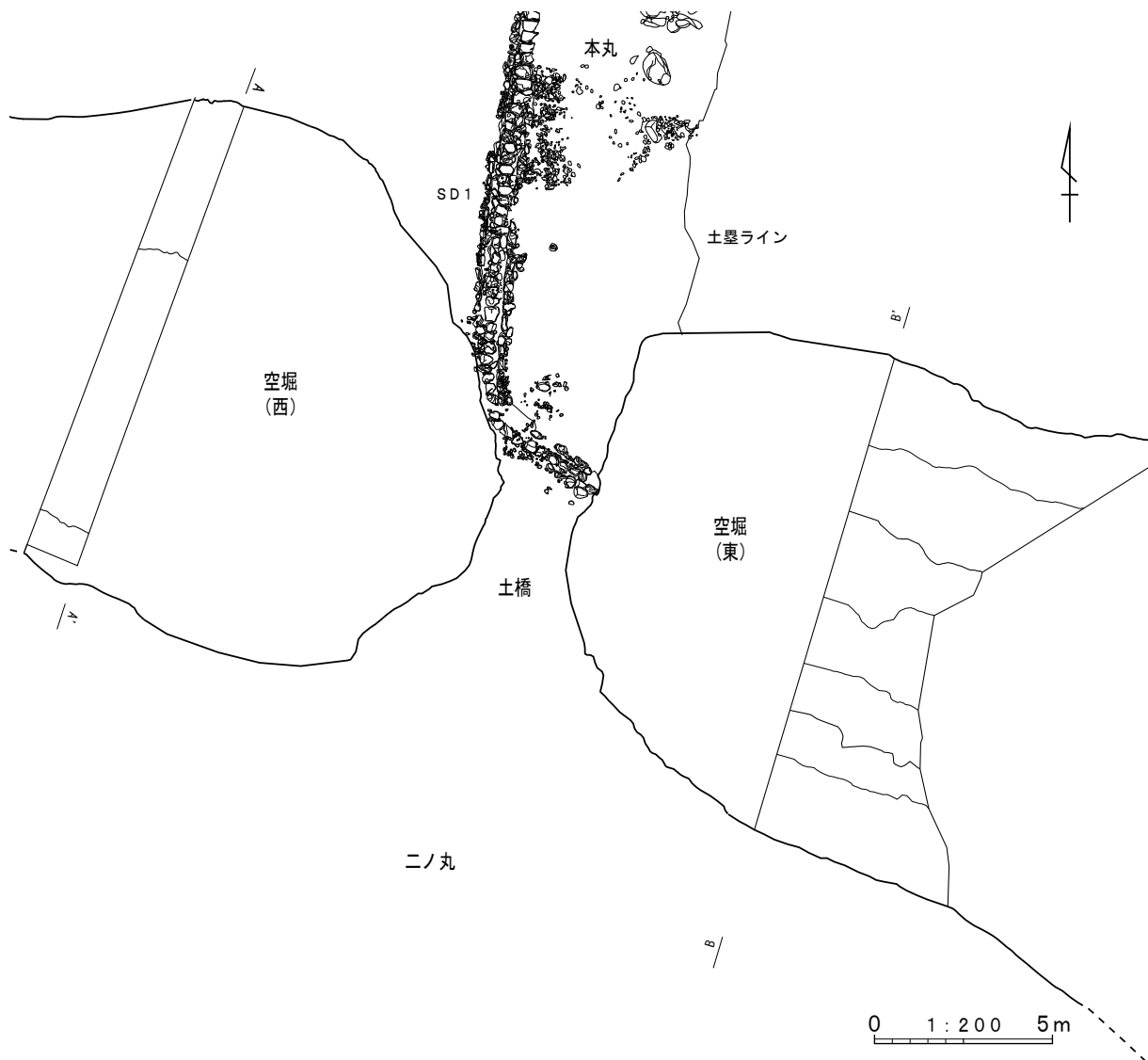
検出面での幅は上端で 13.0 m で、検出面からの深さは 3.5 m、現存する石火矢台土塁の最上部からは約 11 m の比高差を測る。覆土の堆積状況を確認すると、本丸虎口周辺のように北側から土塁を崩して埋めたような堆積は確認されない。本丸南面の空堀と同様、堀の中位に段差が確認され、堀底は幅が 2.0 m



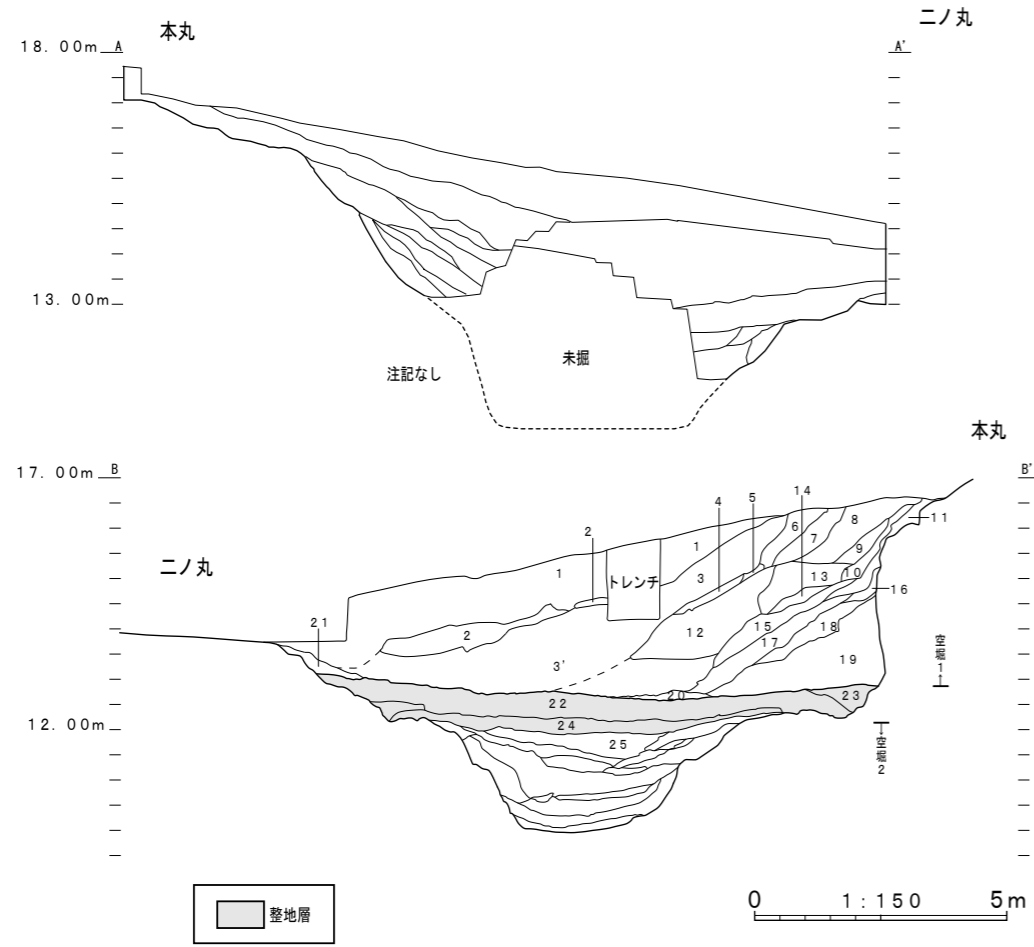
第 20 図 本丸 SD1 平面図・エレベーション図



第 21 図 本丸虎口周辺絵図（「城築規範」より一部切り取り）



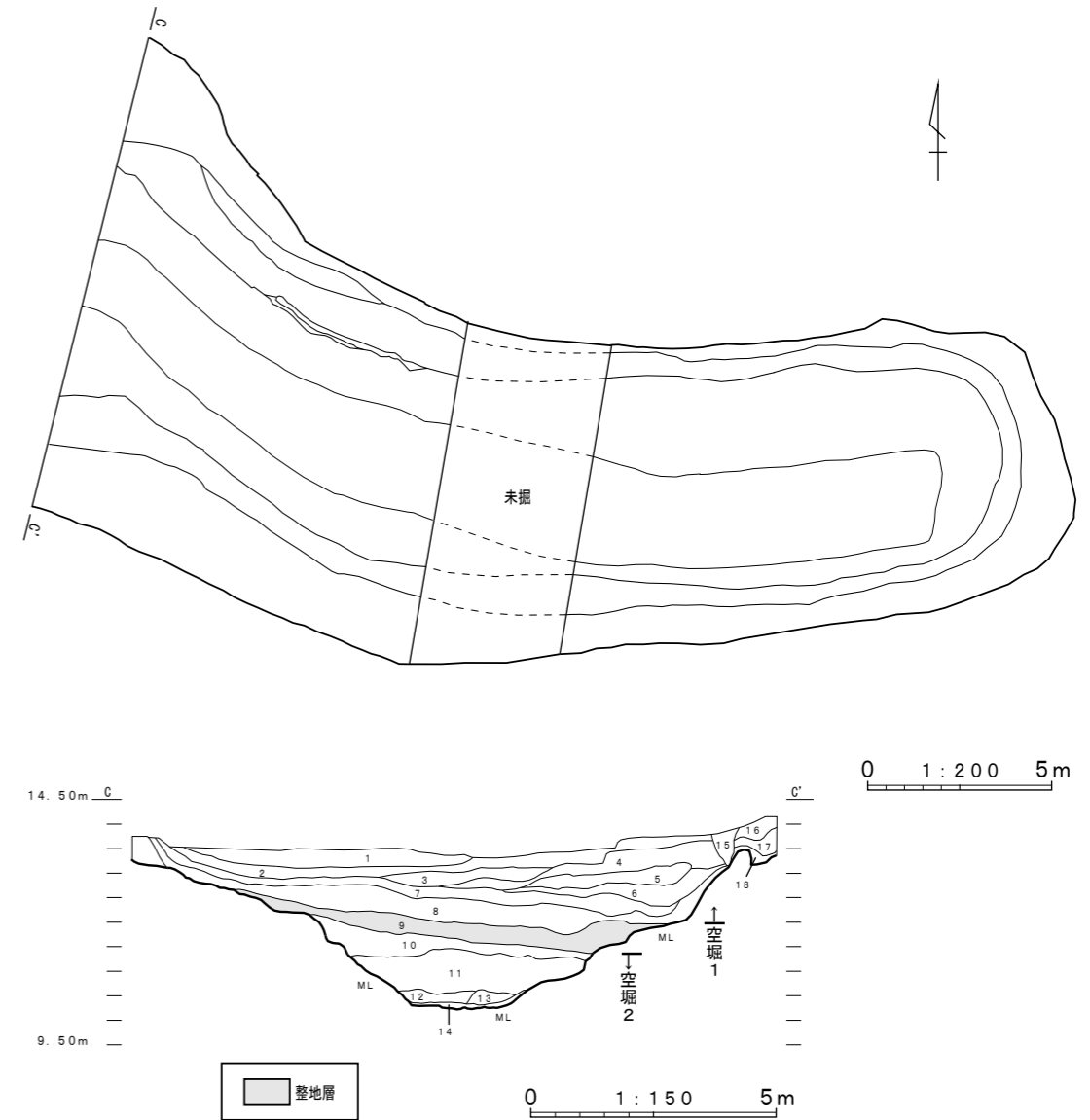
第 22 図 本丸 空堀平面図



本丸空堀 B-B'

- 1 明褐色土 明褐色土に明黄褐色土ブロックが20%混じる
- 2 褐色土 褐色土に明黄褐色土ブロックが10%混じる
- 3 褐色土 褐色土に明黄褐色土ブロックが10%混じる
- 3' 明黄褐色土 2層の下層部 φ50mmを超える明黄褐色土ブロックと褐色土ブロックからなる隙間の生じた層
- 4 にぶい褐色土 褐色土にφ10mm程度の明黄褐色土ブロックが60%混じる
- 5 褐色土 褐色土に細かい明黄褐色土ブロックが混じる
- 6 明褐色土 明褐色土に明黄褐色土ブロックが20%混じる
- 7 褐色土 褐色土に明黄褐色土ブロックが5%混じる 2層に類似
- 8 明褐色土 明褐色土に明黄褐色土ブロックが20%混じる
- 9 褐色土 褐色土に明黄褐色土ブロックが5%混じる
- 10 明褐色土 明褐色土に最大10cmの明黄褐色土ブロックが20%混じる
- 11 褐色土 黄褐色土ブロックを含まず、きめの細かい層
- 12 暗褐色土 φ10~20mmの明黄褐色土ブロックを10%含む
- 13 暗褐色土 φ10~50mmの明黄褐色土ブロックを10%含む
- 14 にぶい黄褐色土 φ10~20mmの明黄褐色土ブロックを10%含む
- 15 にぶい黄褐色土 φ10~20mmの明黄褐色土ブロックを10%含む
- 16 明黄褐色土 中部ローム土ブロックの隙間に褐色土が混じる
- 17 にぶい黄褐色土 φ10~20mmの明黄褐色土ブロックを10%含む
- 18 黒褐色土 粒の細かい黒褐色土と褐色土、明黄褐色土が混じる層
- 19 灰黄褐色土 粒の細かい灰黄褐色土にφ30mmの中部ローム土ブロックが混じる
- 20 灰黄褐色土 粒の細かい灰黄褐色土にφ20mmの中部ローム土ブロックが数個混じる
- 21 灰黄褐色土 粒の細かい灰黄褐色土
- 22 にぶい黄褐色土 粒子の細かい黄褐色土 明黄褐色土ブロックが混じらず自然堆積層にみえる
- 23 明黄褐色土 にぶい黄褐色土にφ10mm以上の明黄褐色土ブロックが混じる
- 24 褐色土 粒子の細かい褐色土 明黄褐色土ブロックが混じらず自然堆積層にみえる
- 25 黒褐色土 黒褐色土にφ20mm前後の明黄褐色土ブロックが5%混じる
25層以下注記なし

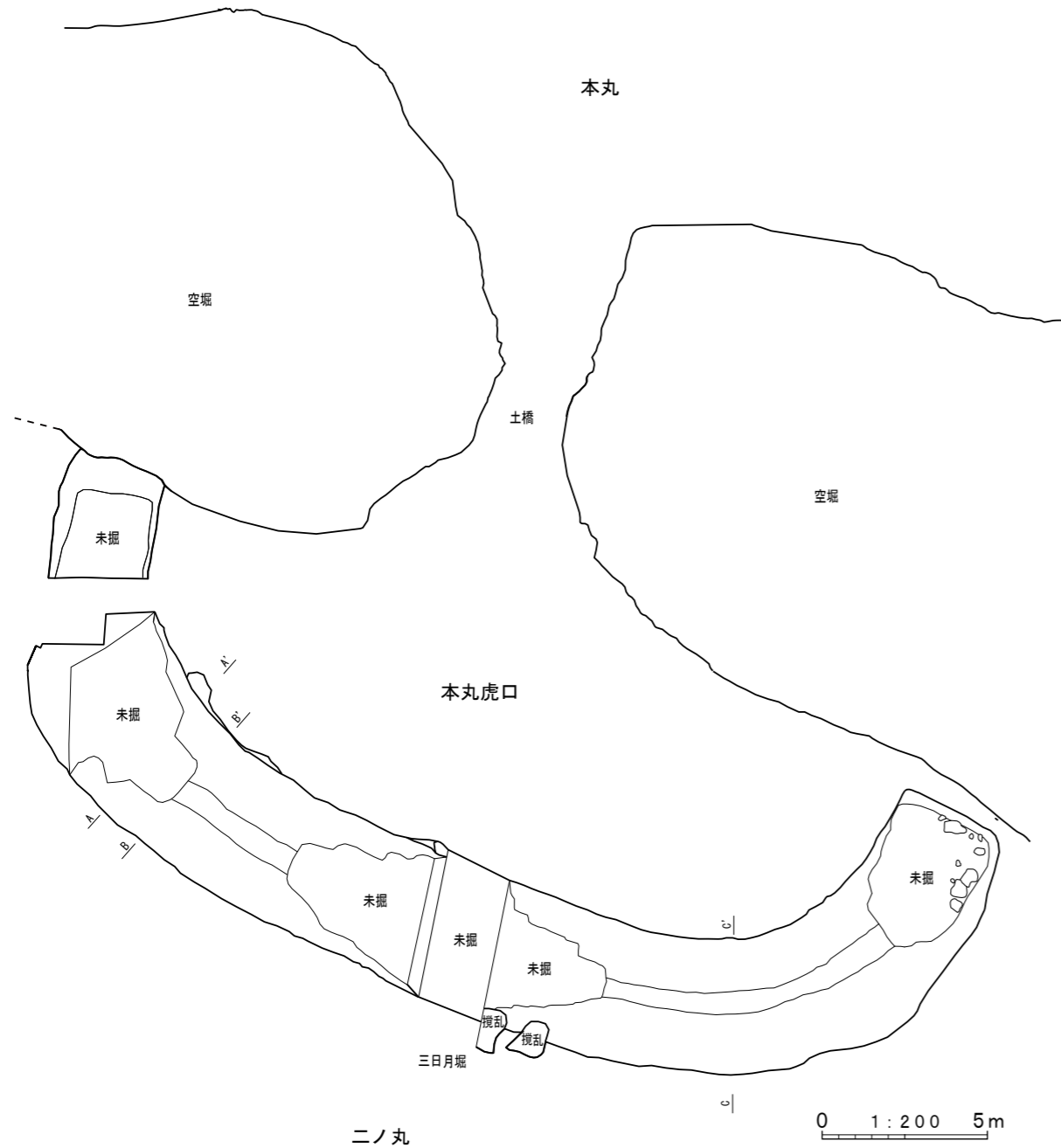
第23図 本丸 空堀断面図



本丸空堀 C-C'

- 1 暗褐色土 やや締まりが有り粘性無し φ2~5mmのスコリア10%、φ1~2mmの炭化物2%を含む
- 2 暗褐色土 締まりが無く粘性無し φ1~2mmのスコリア5%、φ1~2mmの炭化物2%を含む
- 3 灰黄褐色土 締まりが無く粘性無し φ1~2mmのスコリア5%、φ10~30mmの黒色土10%を含む
- 4 にぶい黄褐色土 締まりが無く粘性無し φ10~20mmの黒色土3%を含む
- 5 にぶい黄褐色土 締まりが無く粘性無し φ1mmのスコリア1%、北部にφ5~10mmの黒色土(BBⅦ層)20%を含む
- 6 黒褐色土 締まりが無く粘性無し φ1~2mmのスコリア1%を含み黒く見えるサラサラの土
- 7 黒褐色土 締まりが無く粘性無し φ1~2mmのスコリア3%、φ5~20mmの黒色土10%、φ5~20mmのローム土20%、φ5mmの砂利10%、φ10mmの炭化物1%を含む
- 8 黒褐色土 締まりが無く粘性無し φ1~2mmのスコリア2%、φ5~10mmの砂利20%、φ2~5mmの炭化物3%を含む
- 9 暗褐色土 締まりが無く粘性無し φ10~20mmのローム土5%、φ10mmの炭化物1%を含む
- 10 暗褐色土 締まりが無く粘性無し φ10~150mmローム土30%、φ5~10mmの炭化物2%を含む
- 11 暗褐色土 締まりと粘性有り φ1~5mmのスコリア2%、φ10~20mmの炭化物2%、φ5~20mmのローム土5%を含む
- 12 黒褐色土 締まりと粘性有り φ20~50mmの黄色ローム土10%、φ2~5mmのスコリア1%を含む
- 13 暗褐色土 締まりが有り粘性無し φ50~100mmのローム土30%を含む
- 14 黒褐色土 かなり締まりと粘性有り φ1~2mmのスコリア2%、φ2~3mmの炭化物1%を含む
- 15 暗赤褐色土 締まりが無く粘性無し φ20mmのローム土3%を含む
- 16 黒褐色土 締まりが無く粘性無し φ1~2mmのスコリア5%を含みローム土ベース
- 17 黒褐色土 締まりが無く粘性無し ローム土ベース、φ1~2mmのスコリア7%、φ2~5mmの黒色土2%を含む
- 18 黒褐色土 締まりが無く粘性無し φ10~20mmのローム土1%を含む

第24図 本丸 空堀平・断面図(平成17年度調査地点)



第 25 図 本丸 三日月堀平面図

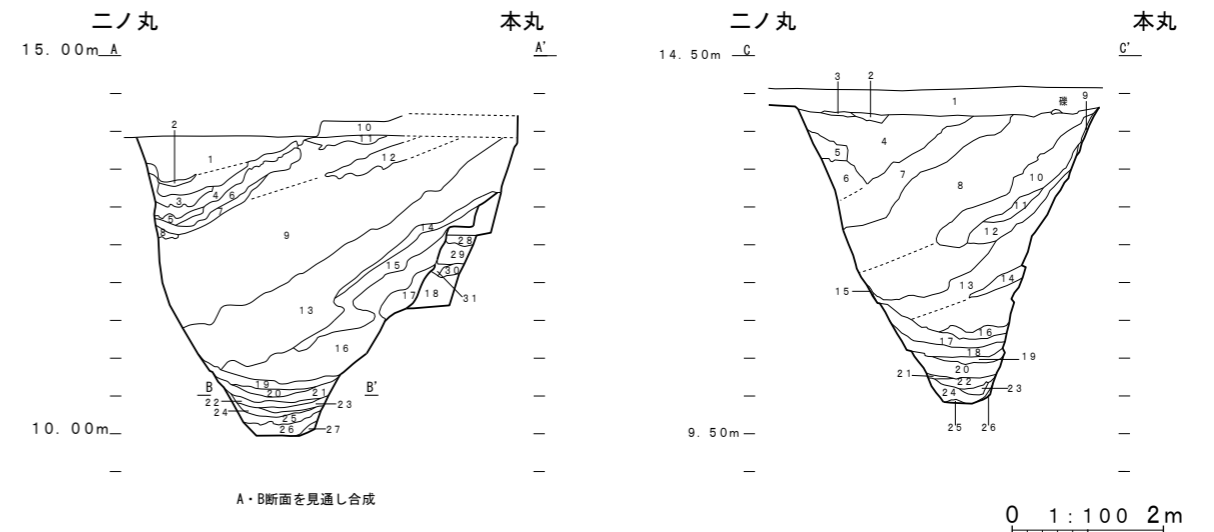
で逆台形を呈す。標高 11.7 m 付近にわずかな段差が生じており、堆積状況からこの面で空堀 2 から空堀 1 へと改修された可能性があるが、本丸虎口ほど明瞭ではない。なお底から 2 m の高さのところにおいて北・南両側に段差が生じているが、こちらは後世の耕作による改変と推測される。

出土遺物には土橋の硬化面から近世初頭の志戸呂の鉢がある。空堀（西）からは大窯 1 段階～登窯第 2 小期に位置づけられる遺物が、空堀（東）からは大窯期の瀬戸美濃の他に、志戸呂や初山が出土している。

本丸三日月堀（第 25・26 図）

本丸三日月堀は、城絵図にも記されていない遺構である。平成 16 年度の調査で平面プランを確認し、平成 18 年度に堀底までの詳細な調査を行った。本丸空堀と組み合わせると、丸馬出を形成している。

堀の規模は全長が 37.3m、最大堀幅は 4.3m、深さは 3.8m である。堀の端部は検出面で西側は 2.8m、東側は 3.0 m を測り、およそ 4.0m の堀幅で本丸虎口の前方を半周している。また、西側端部の立ち上が



本丸三日月堀 A-A' B-B'

- 1 黒褐色土 砂利混在 炭化物、小礫を含む
- 2 黒褐色土 砂利混在
- 3 黒褐色土 φ5cm以下の中部ローム土ブロック含む
- 4 黒褐色土 φ10cm以下の中部ローム土ブロック、黒色土ブロックを含む
- 5 黒褐色土 φ3cm以下の中部ローム土ブロック、赤褐色スコリアを含む
- 6 暗褐色土 φ10cm以下の中部ローム土ブロック、小礫を含む
- 7 黒褐色土 炭化物、小礫、赤褐色スコリアを含む
- 8 黒褐色土 赤褐色スコリアを含む
- 9 灰褐色土 中部ローム土ブロック群
- 10 灰黄褐色土 φ3cm以下の中部ローム土ブロック、砂利混在、炭化物を含む
- 11 暗黄褐色土 炭化物有り砂利混在
- 12 灰黄褐色土 -
- 13 黒褐色土 φ10cm以下の中部ローム土ブロック、φ5cm以下の黒色土ブロックを含む
- 14 黒褐色土 -
- 15 暗褐色土 φ5cm以下の中部ローム土ブロックを含む
- 16 黒褐色土 φ10cm以下の中部ローム土ブロック、小礫を含む
- 17 黒褐色土 φ5cm以下の中部ローム土ブロックを含む
- 18 灰黄褐色土 φ20cm以下の中部ローム土ブロック、黒色土ブロックを含む
- 19 灰褐色土 小礫有り
- 20 暗褐色土 -
- 21 暗褐色土 φ10cm以下の中部ローム土ブロック、砂利混在
- 22 黒褐色土 -
- 23 黒褐色土 -
- 24 黒褐色土 黒色土ブロックを含む
- 25 黒褐色土 φ10cm以下の中部ローム土ブロックを含む
- 26 暗褐色土 砂利混在
- 27 褐色土 粘性有り
- 28 褐色土 -
- 29 灰黄褐色土 -
- 30 暗褐色土 -
- 31 黒褐色土 -

本丸三日月堀 C-C'

- 1 黒褐色土 埋土
- 2 黒褐色土 埋土
- 3 黒褐色土 埋土
- 4 黒褐色土 中部ローム土ブロック埋土層
- 5 黒褐色土 埋土
- 6 暗褐色土 中部ローム土ブロック混土層
- 7 暗褐色土 φ10cm以下の中部ローム土ブロックを含む
- 8 暗赤褐色土 φ10cm以下の中部ローム土ブロックを含む
- 9 暗褐色土 φ5~10mmの中部ローム土ブロックを含む
- 10 暗褐色土 YL層土、SC層土の混土層
- 11 黒褐色土 φ1cm位の砂利の混土層
- 12 黒褐色土 YL層土の埋土
- 13 暗褐色土 φ5~10mmの中部ローム土ブロックを含む
- 14 黒褐色土 -
- 15 黒褐色土 φ2cm以下の小礫有り
- 16 黒褐色土 -
- 17 黒褐色土 炭化物有り
- 18 暗赤褐色土 砂利混在
- 19 暗褐色土 -
- 20 暗褐色土 中部ローム土ブロック、φ5cm以下の小礫有り
- 21 黒褐色土 砂利混在、炭化物を含む
- 22 暗褐色土 -
- 23 暗褐色土 φ2cm以下の小礫有り
- 24 黒褐色土 -
- 25 暗褐色土 -
- 26 暗褐色土 -
- 27 暗褐色土 -
- 28 暗褐色土 -
- 29 暗褐色土 -
- 30 暗褐色土 -

第 26 図 本丸 三日月堀断面図



写真 1 本丸三日月堀完掘状況



写真 2 本丸三日月堀東側端部と本丸

りが、本丸空堀に切られており、平面プラン上では両者の共存が難しい。このため、本丸三日月堀と共存していた本丸空堀は、堀幅が広げられる本丸空堀 1 段階ではなく、幅狭の本丸空堀 2 段階と考えられる。

堀底幅は 0.6m で、断面構造は葉研を呈し、底から 0.8m の高さまでは自然堆積が認められる。この自然堆積層からは大窯 3 段階前半の瀬戸美濃産播鉢（第 IV 章 遺物番号 320）が出土している。

これより上位の堆積層は本丸側から二ノ丸側に向かっての流れ込みで、本丸側から一度に埋められた状況を示している。出土遺物も多く、多量のかわけの他に大窯前半段階の瀬戸美濃製品が出土している。ただし先述のように下層の自然堆積層には大窯 3 段階の遺物が認められることから、大窯前半段階の遺物は、三日月堀の北側に存在したであろう土塁に含まれていた遺物と考えられる。

また中央ベルト付近では堀の内側の壁に段差が生じている部分があり、この部分に土が貼り付けられているような痕跡が認められ、堀の補修の痕跡と考えられる（第 26 図 28～31 層）。

上層からの出土遺物は、1 点のみ大窯 4 段階にまで下る可能性をもつ播鉢底部片（324）が出土しているが、これを除けば最も新しいものでも大窯 3 段階である。また他の地点では一定量が出土している志戸呂の出土が一切認められないことから、大窯 4 段階には埋没していたと考えられる。本遺構が絵図に描かれないのも廃城時にはすでに埋没し、表面に現れていなかったからであろう。

(3) 本丸中央部の遺構

本丸中央部の調査は平成 16・17 年度に実施した。先述の通り、本丸は後世の攪乱によって遺構の残存状況は良好でなかったが、部分的な遺構の確認があった。（第 27 図）。

2 号溝・3 号溝（SD2・3 第 27・28 図）

SD2 は本丸中央部の南側、SD3 は SD2 より約 25 m 北側で検出された。SD2 については、15-27Gr. 付近で北へ方向を変えており、2 つの SD は組み合わせると、コの字形に巡っている。SD2・3 の幅は検出面では 2.0 m で、深さは SD2 が 0.5 m、SD3 は層厚が極めて薄い箇所もあり、断面計測地点で幅 0.9 m、深さ 0.2 m である。SD1 を切っていることから、SD1 より新しい遺構であるが、出土遺物は少ない。

古代から近世の遺物が確認されるが、近代のものは出土していないため、近世（廃城後か）に位置づけられる。

2 号礎石建物跡・4 号溝（SS2・SD4 第 29 図）

SD1 の北端、14-30Gr. にて検出した。石は方形に散乱しているが、建物プランについては不明瞭であるため、東西 11 m×南北 10 m の範囲に大きく広がる総体として SS2 と呼称する。検出面は SD1 を構築する礫と同じ高さである。SS2 の中にも礫の集中箇所が数箇所数えられ、礎石の可能性のある上面の平坦な石が直線的に並んでいる部分も認められる。

また SS2 の北側に重なるように SD4 が検出された。掘り下げは行っていないが、検出された延長は 3.8 m を測る。SS2 との重複関係が不明瞭であるため、SS2 との時期差は不明である。

1 号不明遺構（SX1 第 28 図）

16-30Gr. にて検出した方形の土坑である。規模は東西 1.9 m×南北 1.6 m、深さは 1.0 m である。完掘は行わず、半裁とした。遺物の出土はなく、時期等は不明である。

(4) 本丸北西部（第 30・31 図）

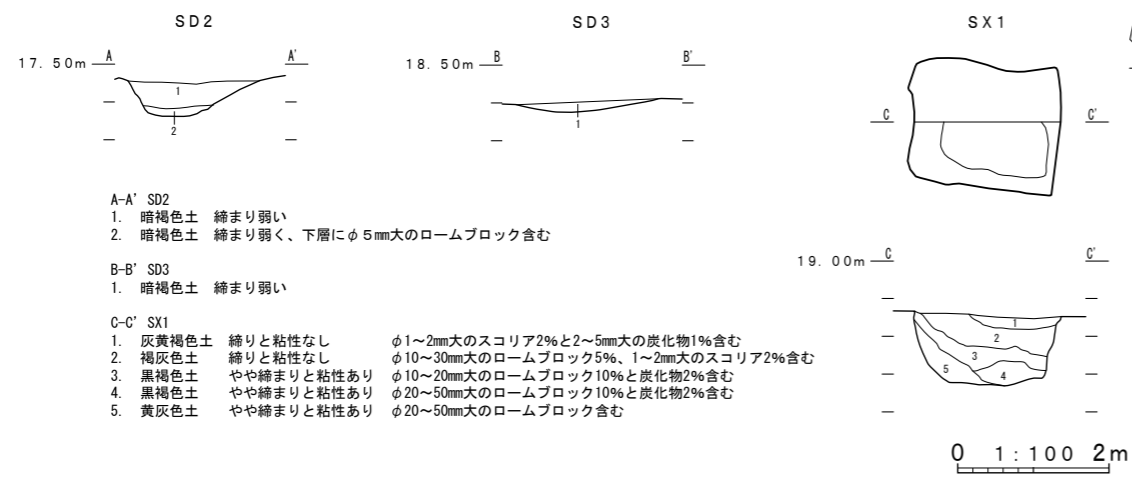
本丸北西部の調査は平成 15 年度に実施した。調査区の南側は大きく攪乱を受けており、明確に城との関連を示す遺構は検出されなかったが、北側には時期不明の集石遺構（SG1～3）と PT 群が検出された。

1 号集石～3 号集石（SG1～3 第 30・32 図）

本丸奥に構築された施設に使われていた可能性も考えられるが、性格が特定できないため、集石遺構



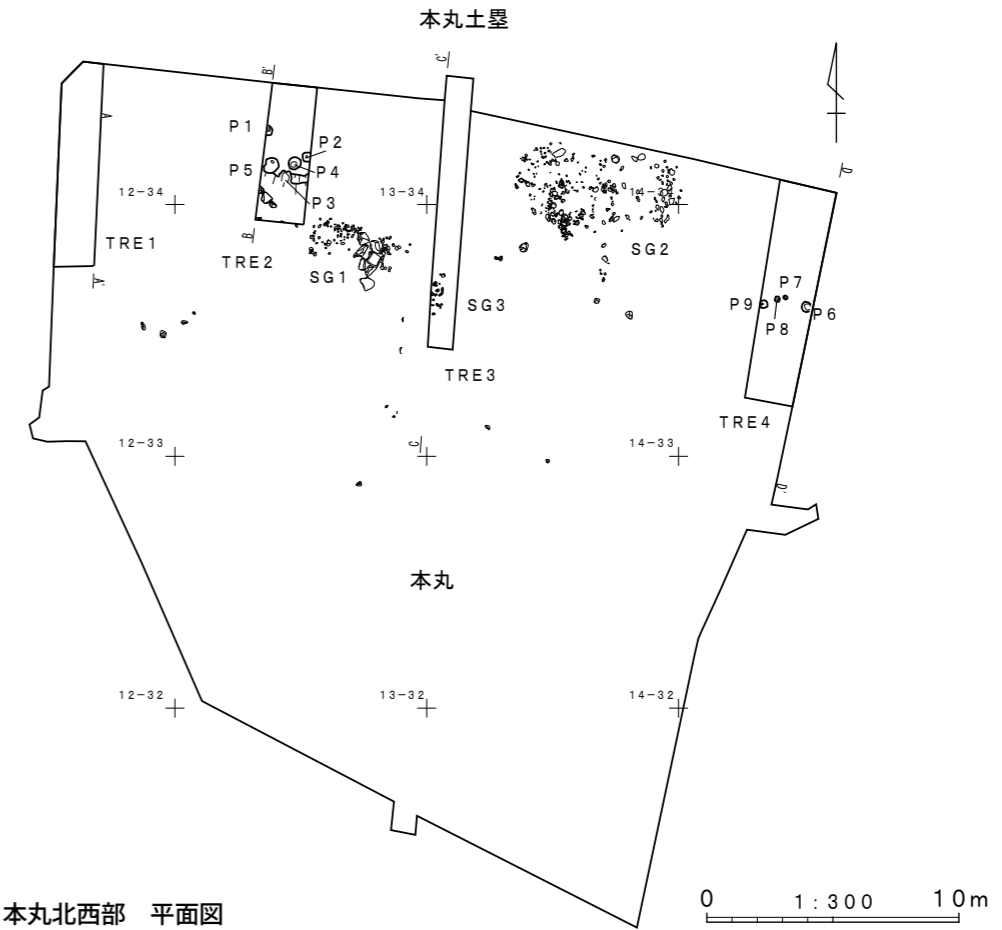
第 27 図 本丸中央部 平面図



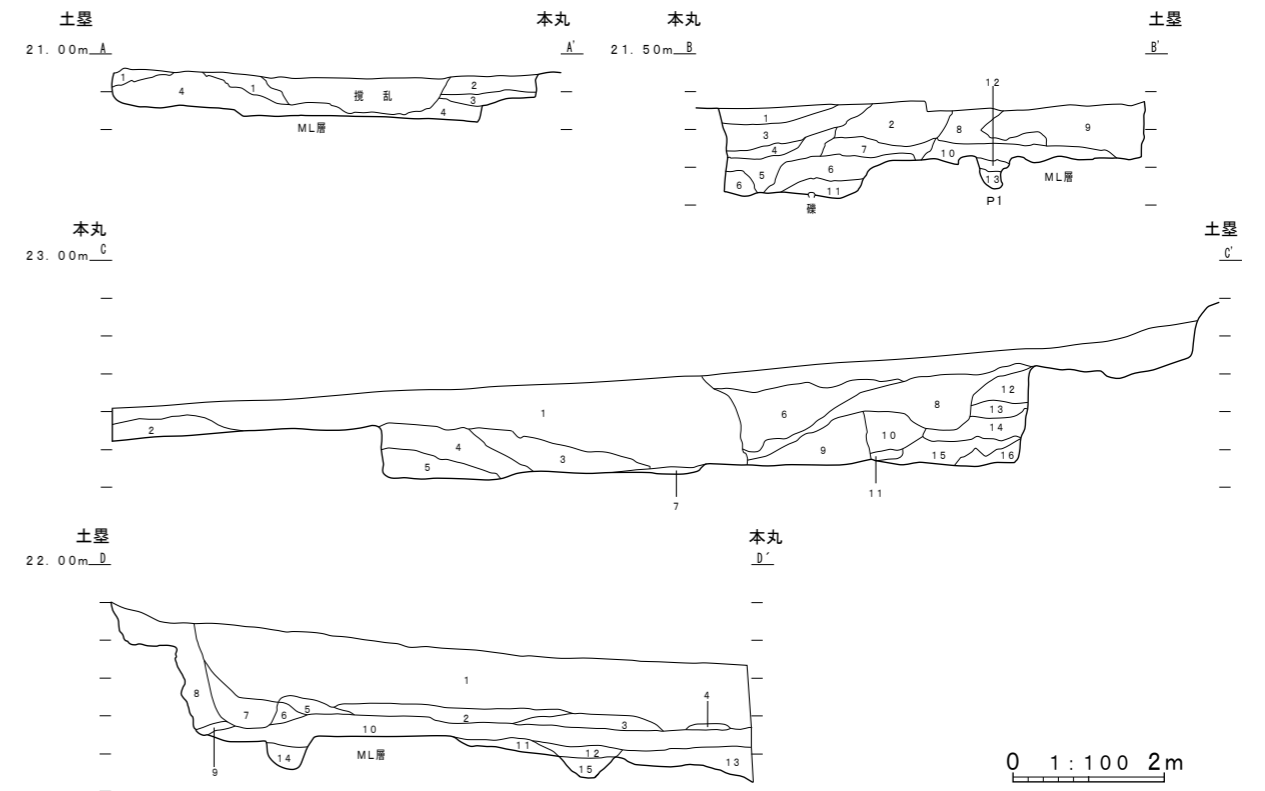
第28図 SD2・SD3・SX1 平・断面図



第29図 SS2・SD4 平面図



第30図 本丸北西部 平面図



第31図 本丸北西部 平・断面図

本丸北西部 A-A'

- 1 暗灰色土 やや締まりが有り柔らかい φ2mm~3cmの中部ローム土ブロック5%、φ2~3mmのスコリア3%を含み、ビニールゴミ混入
- 2 褐色土 締まりが無く柔らかい φ3mm~3cmの中部ローム土ブロック7%、φ3mm~2cmの砂利3%を含む
- 3 褐色土 やや締まりが有る φ2~5mmの中部ローム土ブロック3%を含む
- 4 黄灰色土 締まりが無く柔らかい φ5~20mmの中部ローム土ブロックが非常に多い

本丸北西部 B-B'

- 1 灰黄褐色土 やや締まりが有り柔らかい φ3~10mmの中部ローム土ブロック20%、φ3~5mmのスコリア1%を含む
- 2 黒褐色土 締まりが無く柔らかい φ1mm~1cmの中部ローム土ブロック7%を含む
- 3 暗灰色土 締まりが無くやや堅い(造成土) φ2~10mmの中部ローム土ブロック15%、φ1~3mmのスコリア3%を含む
- 4 灰黄褐色土 非常に締まりが有りやや堅い(ローム層土) φ1~3mmの中部ローム土ブロック3%、φ1~3mmのスコリア3%、φ1~5mmの炭化物1%を含む
- 5 黄灰色土 あまり締まりが無く柔らかい φ1mm~1cmの中部ローム土ブロック3%、φ1~3mmのスコリア3%、φ1mmの炭化物1%を含む
- 6 暗黄褐色土 締まりが無く柔らかい φ3mm~5cmの中部ローム土ブロック3%、φ1~3mmのスコリア1%、φ1~3mmの炭化物1%を含む
- 7 褐色土 締まりがあまり無く柔らかい φ1mm~1cmの中部ローム土ブロック7%、φ1~3mmのスコリア3%を含む
- 8 黒褐色土 締まりが無く柔らかい φ1mm~1cmの中部ローム土ブロック5%、φ1~10cmの黒色帯土ブロック7%を含む
- 9 黄褐色土 中部ローム土ブロック
- 10 黄灰色土 やや締まりが有り堅い φ1mm~15cmの中部ローム土ブロック10%、φ1~3mmのスコリア1%、φ3~5mmの炭化物3%を含む
- 11 褐色土 粒子が粗く締まりがまったく無し φ5mm~2cmの中部ローム土ブロック7%、φ5mm大の砂利5%を含む
- 12 褐色土 φ1~5mmの中部ローム土ブロック7%を含む
- 13 - φ3~5cm大の中部ローム土ブロックを含む

本丸北西部 C-C'

- 1 - 表土・耕作土 φ5mm~5cmの中部ローム土ブロック10%を含み、ゴミ混入
- 2 - 表土 やや締まりが有り φ5mm~3cmの中部ローム土ブロック5%を含み、ナイロン紐混入
- 3 - やや締まりが有り φ5mm~20cmの中部ローム土ブロックを含む
- 4 黒色土 やや締まりが有り柔らかい φ3mm~5cmの中部ローム土ブロック15%、φ1~3mmのスコリア1%、φ3~5mmの炭化物3%を含む
- 5 褐色土 やや締まりが有り φ3mm~3cmの中部ローム土ブロック20%を含む
- 6 - 締まり無し φ5~20mmの中部ローム土ブロック50%を含みナイロン紐混入
- 7 暗灰色土 かなり締まりが有り堅い φ3mm~5cmの中部ローム土ブロック15%、φ1~3mmのスコリア1%、φ1~3mmの炭化物1%を含む
- 8 黄灰色土 粒子が粗く締まりがまったく無い φ2~5mmの中部ローム土ブロック3%、φ1~3mmのスコリア10%を含む
- 9 - φ2~15cmの中部ローム土ブロック40%を含む
- 10 褐色土 締まりがまったく無し φ1mm~3cmの中部ローム土ブロック30%を含む
- 11 灰色土 粒子が粗く締まりがまったく無い φ1mm~1cmの中部ローム土ブロック30%を含む
- 12 黄灰色土 締まりがまったく無し φ1mm~1cmの中部ローム土ブロック10%を含む
- 13 褐色土 やや粒子が粗く締まりがまったく無し φ1~3mmの中部ローム土ブロック1%、φ1~3mmのスコリア3%を含む
- 14 灰黄褐色土 締まりがまったく無し φ5mm~20cmの中部ローム土ブロックを100%含む
- 15 黒褐色土 粒子が柔らかく締まりがまったく無し φ1mmの中部ローム土ブロック1%、φ1~3mmのスコリア1%を含む
- 16 灰オリーブ色土 やや粒子が粗く締まりがまったく無し φ1~3mmの中部ローム土ブロック10%を含む

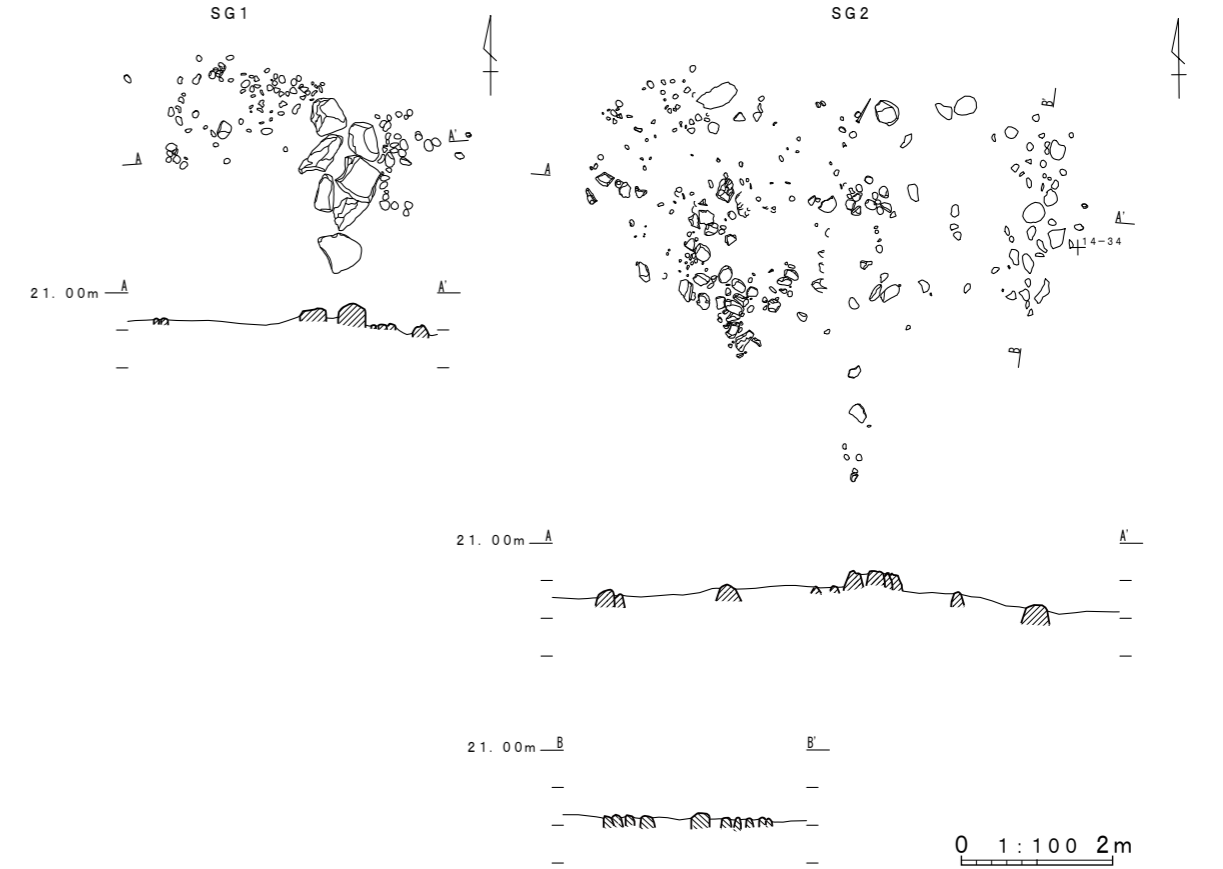
本丸北西部 D-D'

- 1 - 表土・耕作土
- 2 オリーブ褐色土 締まりが無く柔らかい φ1mm~1.5cmの中部ローム土ブロック10%、φ1mmのスコリア5%、φ5mm大の砂利2%を含む
- 3 褐色土 締まりが無く柔らかい φ3mm~1cmの中部ローム土ブロック3%、φ1mmのスコリア5%を含む
- 4 黒褐色土 締まりが無く柔らかい φ5mm~1cmの中部ローム土ブロック1%、φ1~2mmのスコリア3%を含む(3層の方が黒味は少ないが基本的には同層)
- 5 灰黄褐色土 締まりはあまり無く柔らかい φ1mm~1cmの中部ローム土ブロック5%、φ5mm~1cmの砂利7%を含む
- 6 にぶい黄褐色土 やや締まりが有りやや堅い φ1mm~1cmの中部ローム土ブロック5%、φ1mmのスコリア1%、φ5mm大の砂利1%を含む
- 7 灰黄褐色土 締まりが無く柔らかい φ1~5cmの中部ローム土ブロック5%、スコリア1%を含み炭化物無し
- 8 褐色土 締まりが無く柔らかい φ1mm~10cmの中部ローム土ブロック50%含む その為に全体として明黄褐色に見える 土壁の崩壊した土
- 9 灰色土 締まりが無く柔らかい φ2mm~2cm大の中部ローム土ブロック5%、φ2mmの炭化物1%、φ5mm~3cmの砂利1%を含む
- 10 灰色土 かなり締まりが有りやや堅い φ1mmのスコリア3%、φ3mm~1.5cm大の砂利3%を含む
- 11 褐色土 締まりがあまり無くやや堅い φ1~20cmの中部ローム土ブロックを非常に多く含む
- 12 褐色土 締まりが無くやや堅い φ3~5cmの中部ローム土ブロック3%、φ3mm大の砂利1%、φ1~3mmの炭化物3%を含む
- 13 褐色土 やや締まりが有りやや堅い φ1~10cmの中部ローム土ブロック40%、φ2~5cmの砂利1%、φ1~5cm大の炭化物3%を含む
- 14 灰黄褐色土 締まり無し(中部ローム土ブロック)
- 15 褐色土 締まりが無く柔らかい φ3mm~5cm中部ローム土ブロック25%を含む

とした。SG1は東西4.0m×南北2.5mの範囲に広がり、他と比べてやや大形の礫が東側に集中する。SG2は東西6.3m×南北5.0mの範囲に方形に広がり、SG3は東西0.5m×南北1.5mの範囲に広がる。ただしSG3についてはトレンチ内の検出であり、全容は明らかでない。

PT群(第5表)

TRE2及びTRE4においてPTを9基検出し、規模等は計測表を示した。幅は0.17m~0.65m、深さは0.09m~0.83mを測る。トレンチ調査であるため配列等は明らかではなく、また遺物も出土していない。規模については計測表を付した。



第32図 SG1・SG2平・断面図



写真3 本丸SG1 検出状況(西から)



写真4 本丸SG2 検出状況(南から)

第5表 本丸 PT群計測表

遺構名	幅(m)	深さ(m)	備考	遺構名	幅(m)	深さ(m)	備考
PT1	0.365	0.308		PT6	0.383	0.205	未完掘
PT2	0.511	0.253		PT7	0.171	0.249	
PT3	0.476	0.548	未完掘	PT8	0.206	0.092	
PT4	0.517	0.832		PT9	0.307	0.159	
PT5	0.656	0.793					

第2節 石火矢台

(1) 調査の経過と概要

本丸の東南に残存する土塁平坦部を石火矢台と呼称している。第II章にて示したように、石火矢「台」とあることから、正確な位置としては南側の土塁平坦部を指すことになるが、本書ではこの平坦地の北側に広がる小曲輪までを含めて石火矢台と記す。

石火矢台の調査は平成14年度の試掘調査を経て、平成17年度において、ほぼ全面に対し面的な調査を行った(第33・34図)。試掘調査によって、石火矢台は後世に大きく改変されていることが判明しており、今回の調査でも明確な城郭遺構は検出されなかったが、絵図に描かれている土塁の痕跡などを確認した。また北曲輪や東の谷に下る道(溝)も検出された。

(2) 石火矢台

明確な遺構の検出はなかったため、ここでは造成状況と絵図との対比が可能な土塁と道について記載する。

試掘調査の結果、現在の地表面より約3mほど下まで近現代の埋め立て土であることが判明していたが、さらに整地層に含まれる近代遺物から、近代になって南側の土塁等を崩して、平坦に整地されている状況が明らかになった(第36図)。

土塁1・土塁2(第37～39図)

石火矢台の西側、本丸との境において、南から北へ伸びる土塁1と本丸土塁から南へ延伸する土塁2が食い違っている構造を確認した。ともに上部構造は失われていたため、規模等は不明である。この構造は絵図とも対比可能であることから、ここに石火矢台へ至る虎口があったと考えられる。本丸にて検出した石列3及び石列4は土塁1の西側の土留であろう。

カクシ口(第35・37・39図)

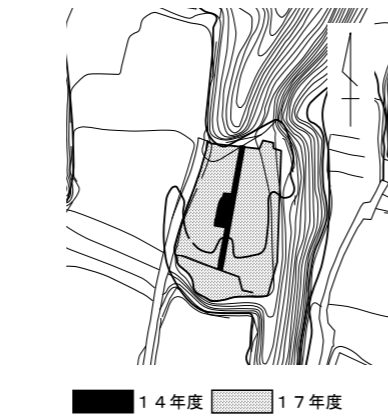
絵図に描かれる「カクシ口」については、特定することはできなかったが、比較的攪乱を受けていない北東側と東側において、狭い溝状の間口が検出された。これらは、「北曲輪」へ通じる通路と東側の「東外堀」へ下る道と考えられる。さらに2つの通路の間には地山が掘り残されていることが確認された。このことから、この地山の掘り残しは「カクシ口」を構成する土塁基盤を検出した可能性がある。なお、土層観察から複数時期の道の存在が想定される。

1号集石・2号集石(SG1・SG2 第40・41図)

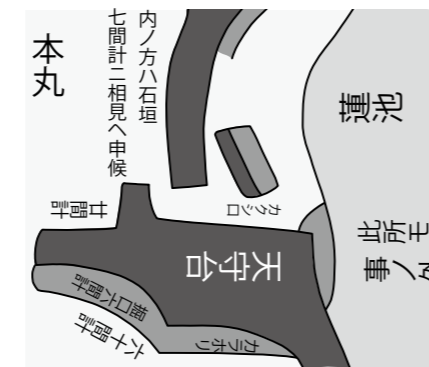
SG1は石火矢台の北西部、本丸土塁の南側(17-28Gr)にて検出した。検出された標高は19.0mで、曲輪の現況面と大差はない。遺物は出土していないため、時期は不明である。SG2は北曲輪へ至る通路の上層(第39図 C-C'セクション18層)にて確認された。遺物の出土はないが、通路に堆積した覆土内からの検出であり、近世以後と考えられる。



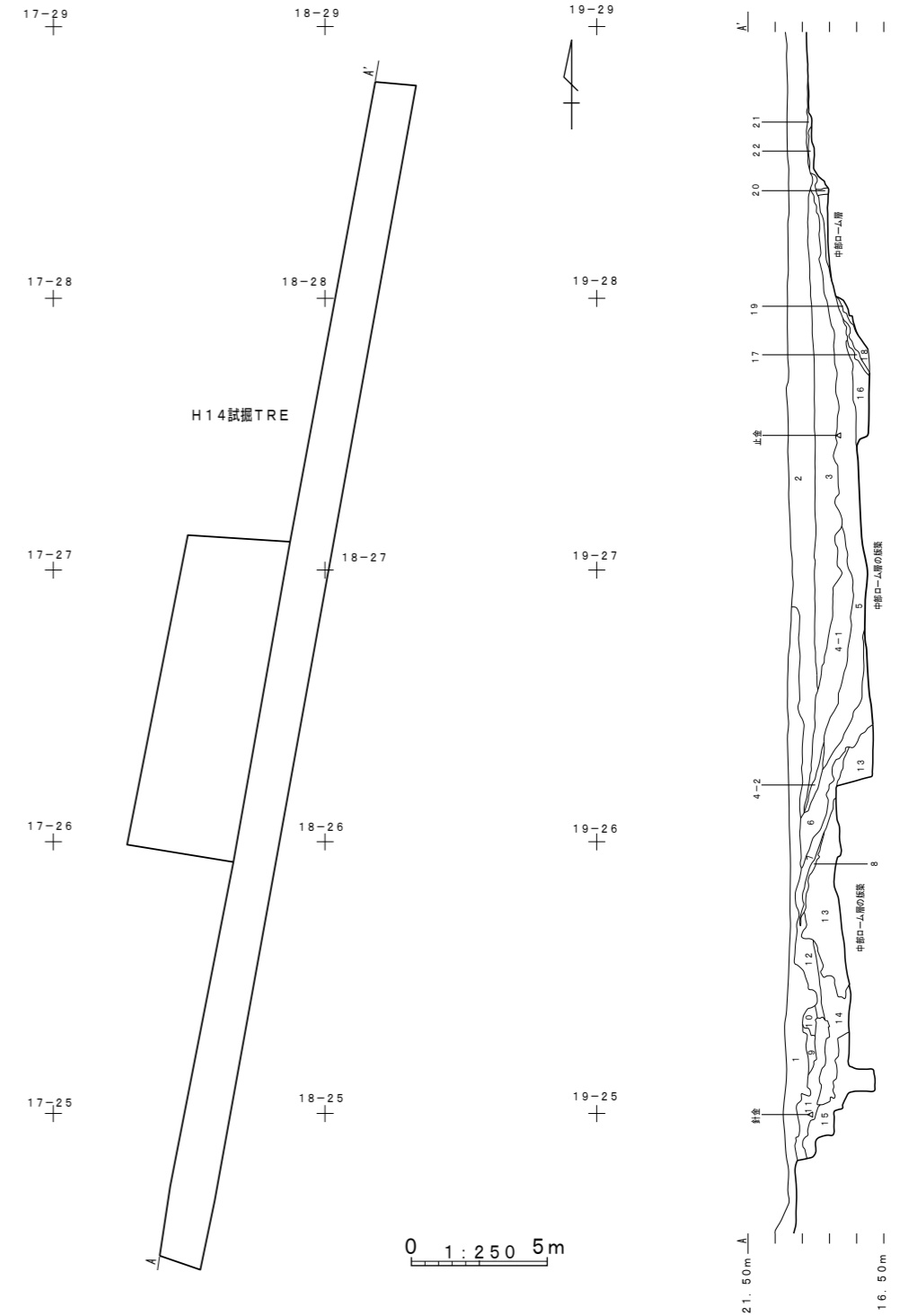
第37図 石火矢台 調査位置図



第34図 石火矢台 年度別調査地点図

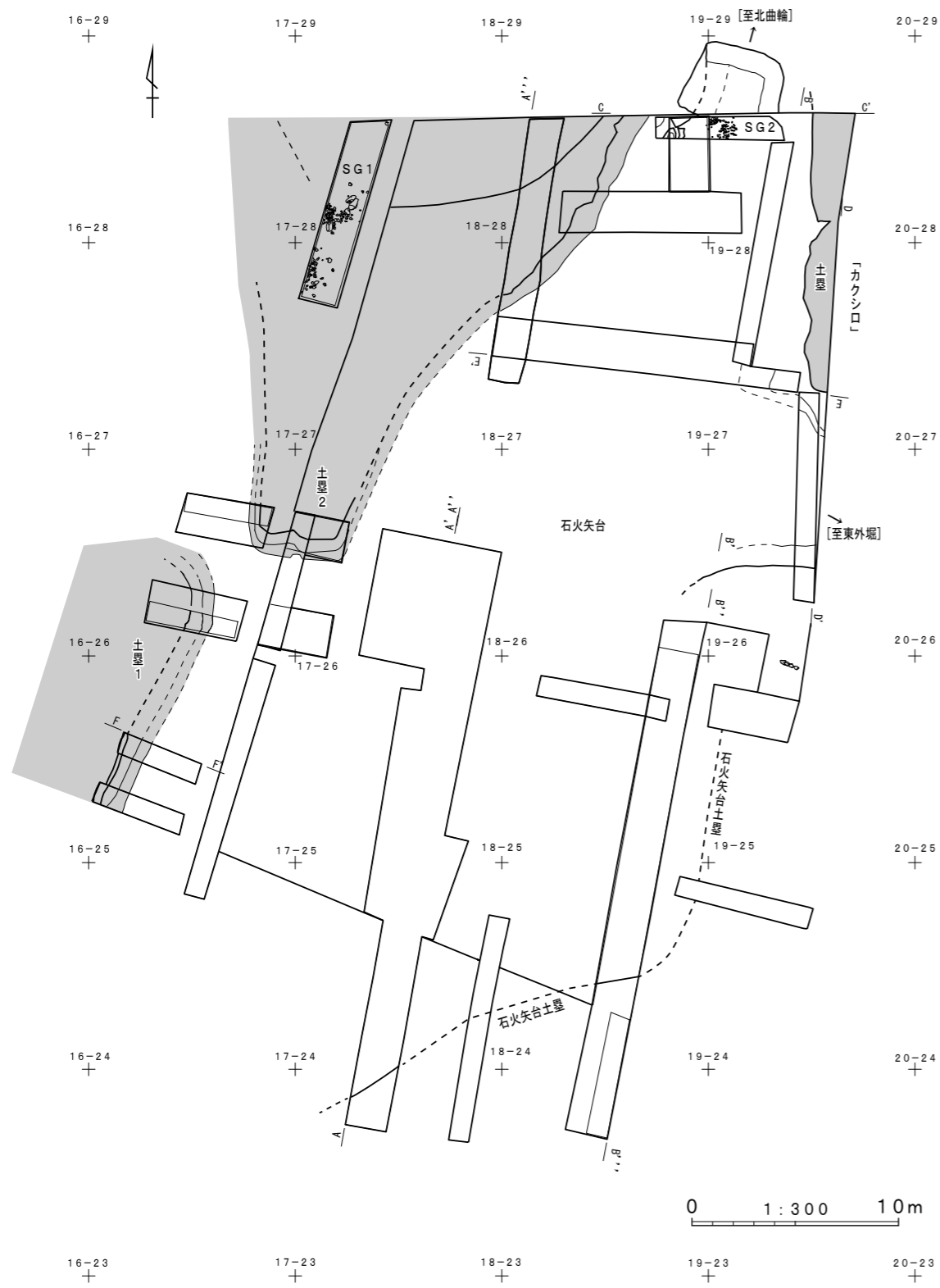


第35図 石火矢台周辺の絵図(拡大)

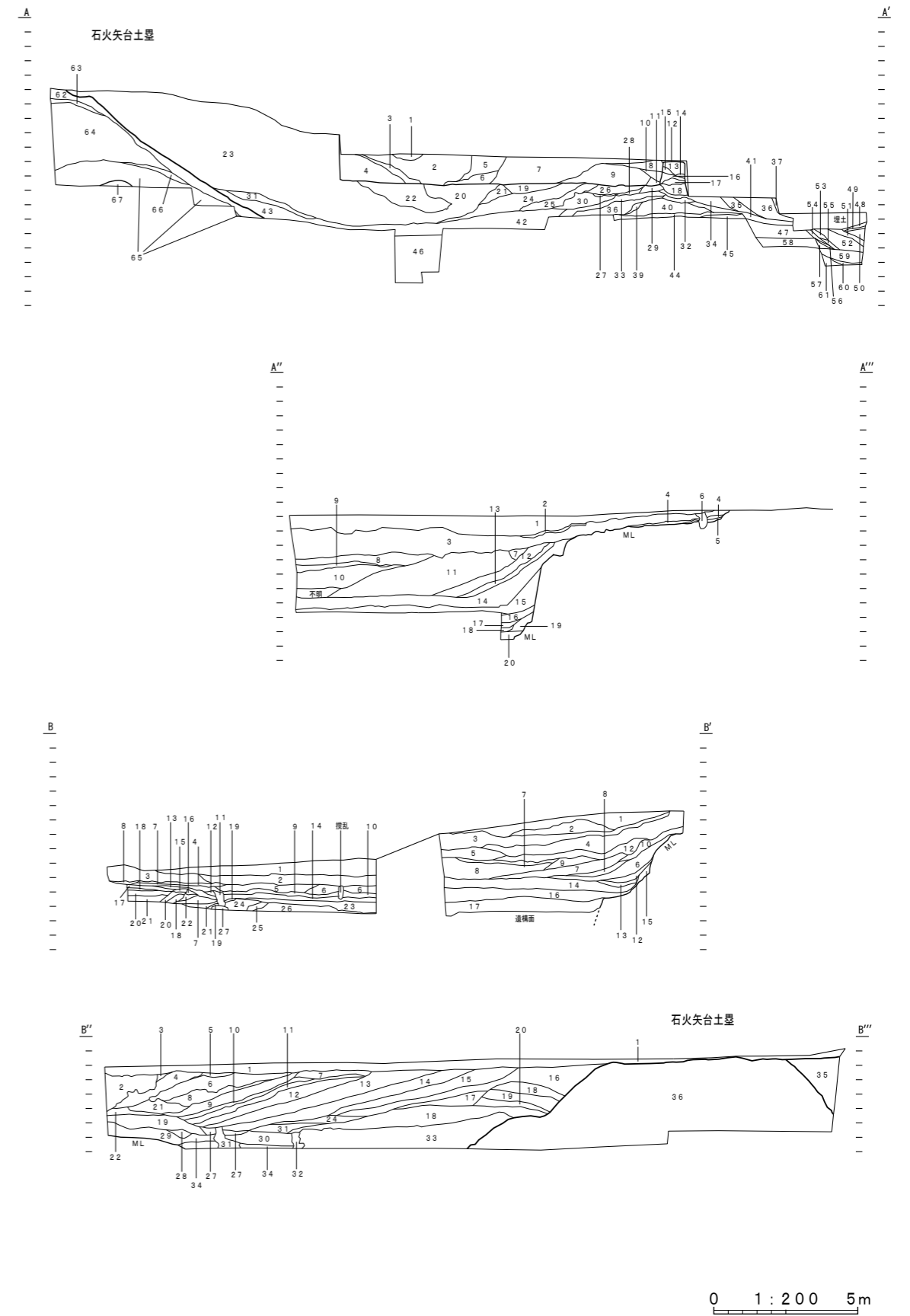


A-A'	1	暗褐色土	昭和の埋土	12	黒褐色土
	2	灰褐色土	昭和の埋土	13	黒褐色土
	3	黒褐色土	昭和の埋土	14	黒褐色土
	4-1	黒褐色土	昭和の埋土	15	黒褐色土
	4-2	黒褐色土	昭和の埋土	16	暗褐色土
	5	灰褐色土	昭和の埋土	17	黒褐色土
	6	黒褐色土	近世～近代の堆積	18	黒褐色土
	7	黒褐色土		19	褐色土
	8	黒色土	炭化物	20	黒褐色土
	9	黒褐色土	昭和の埋土	21	黒褐色土
	10	灰褐色土	昭和の埋土	22	灰褐色土
	11	灰褐色土	昭和の埋土		

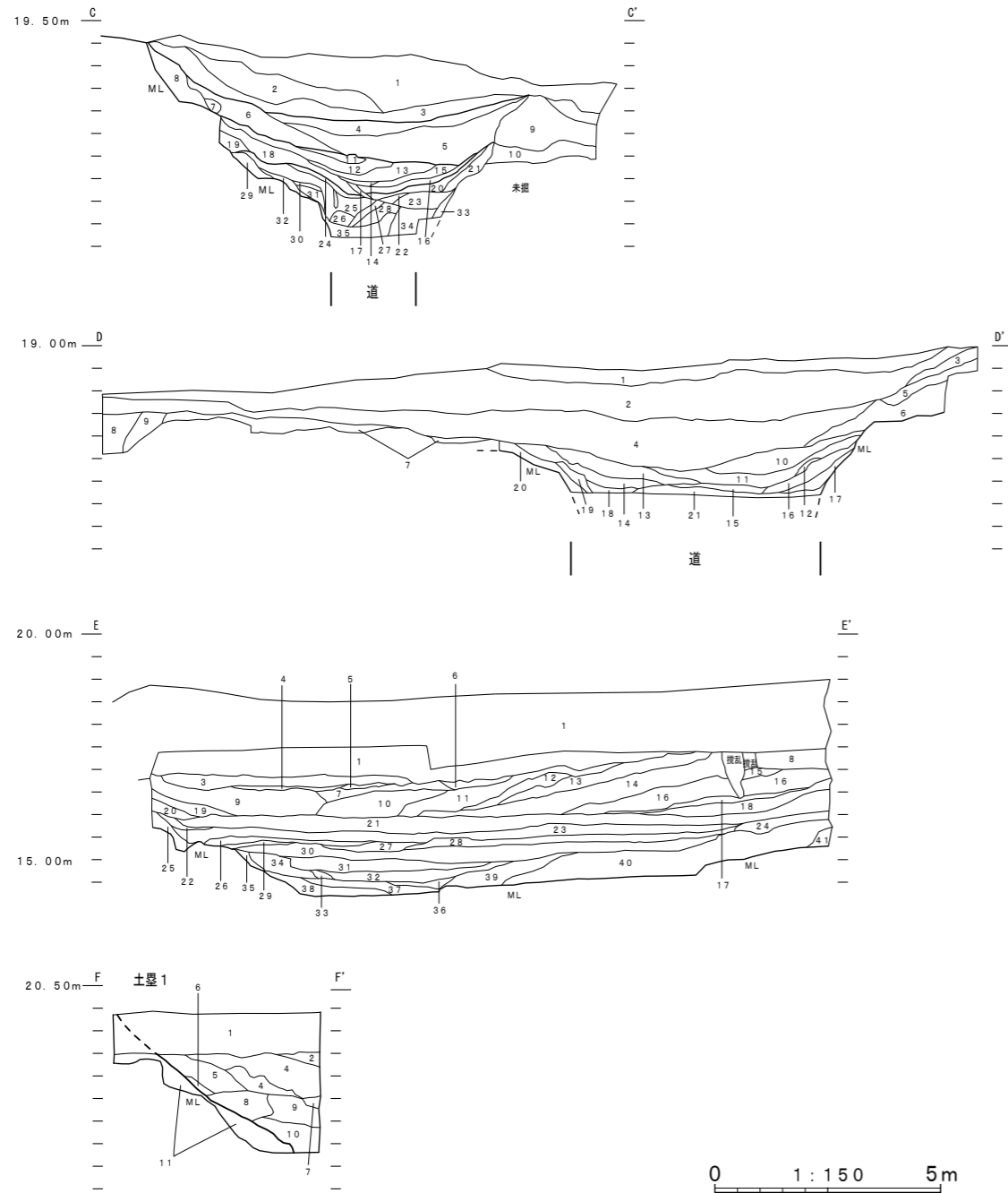
第36図 平成14年度石火矢台試掘調査 平・断面図



第 37 図 石火矢台 全体平面図



第 38 図 石火矢台 断面図 (1)



第39図 石火矢台 断面図(2)

石火矢台 A-A'

- 1 暗オリーブ灰色土 締まりが無く粘性無し φ20mmの黒色土5%、φ1~2mmのスコリア5%を含む
- 2 灰褐色土 φ50~100mmのブロック、黒色土とローム土が混じる φ5~20mmの炭化物40%を含む ロームブロックが所々に含まれスコリア層が有る φ2~5cm位の石もまばらに有る
- 3 灰褐色土 やや締まりと粘性有り φ2~5mmのスコリア5%、φ10~15mmの黒色土20%を含む
- 4 暗褐色土 やや締まりと粘性有り φ2~5mmのスコリア5% (粒が細かく下部ほど粗くなる)、φ5~10mmの黒色土10%を含む
- 5 灰褐色土 締まりが無く粘性無し φ20~50mmのローム土20%、φ20~50mmの黒色土が混じる
- 6 灰褐色土 やや締まりと粘性有り φ50~100mmのローム土、φ20~50mmの黒色土10%を含む
- 7 灰褐色土 締まりが有り粘性無し φ50~100mmのブロック土5%を含む
- 8 灰褐色土 締まりが有り粘性無し φ20~50mmの灰黄褐色土ブロックを含む
- 9 灰褐色土 やや締まりが有り粘性無し φ50~150mmのブロック土5%、φ50~200mmの礫を含む
- 10 灰褐色土 やや締まりが有り粘性無し φ50~200mmのブロック土、φ30~150mmのブロック土が混じる
- 11 灰褐色土 締まりが有り粘性無し φ50~100mmのブロック土2%を含む
- 12 黄灰色土 やや締まりが有り粘性無し φ2~10mmのスコリア3%、φ10~20mmの黒色土5%を含む
- 13 黒褐色土 締まりが無くやや粘性無し φ2~5cmのローム土とφ2~5cmの黒色土の混じり
- 14 暗オリーブ褐色土 締まりが無くやや粘性有り 13層に似ているが黒色土が若干多い
- 15 暗褐色土 やや締まりが有り粘性無し 黒色土ブロックにより形成 φ2~5cmのローム土ブロックを含む

- 16 暗褐色土 締まりが無く粘性無し φ1cm程度のローム土・黒色土混じり、φ10cm程度のローム土ブロック5% (礫を含む)
- 17 黒褐色土 締まりが無く粘性無し φ2~5cmの黒色土ブロック主体でφ5cmのローム土5%、φ2~5cmのローム土ブロック2%を含む
- 18 暗赤褐色土 締まりが無く粘性無し φ1cm程度のローム土・黒色土の混じりでφ10cmのローム土ブロック5%、SG1を含む
- 19 暗褐色土 締まりが有り粘性無し φ10cmのローム土・黒色土が主体でφ5cmのローム土・黒色土を含む
- 20 黒褐色土 締まりが無くやや粘性有り φ5~20cm以上のローム土及び黒色土ブロックからなり礫を含む
- 21 暗褐色土 やや締まりと粘性有り φ2~3cmのローム土・黒色土が混じる
- 22 暗褐色土 やや締まりが有り粘性有り φ2~3cmのローム土・黒色土からなる
- 23 灰黄褐色土 上面はサラサラした土だが下に行くにつれ粘り気が生じる φ5~30mmの黒色土ブロックが全体に40%
- 24 暗褐色土 締まりが有り粘性無し ローム土・黒色土混じりで礫を多量に含む
- 25 暗褐色土 やや締まりが有り粘性無し φ2~3cmのローム土・黒色土ブロック混じりで礫を含む
- 26 暗褐色土 締まりが無くやや粘性有り φ2~3cmのローム土ブロックで構成
- 27 暗褐色土 ローム土ベースで礫を多量に含む
- 28 暗褐色土 26層とほぼ同じだが若干締まっている φ2~5cmのローム土ブロックが主体で、炭化土・砂利を含む
- 29 黄灰色土 やや締まりと粘性有り φ10cmのローム土ブロックにより構成
- 30 暗褐色土 やや締まりと粘性有り φ5cm大のローム土ブロックと礫からなる
- 31 オリーブ褐色土 やや粘性が有る土 帯状の黒色の線が所々に見られφ2~3mmの赤いスコリア20%を含む
- 32 暗褐色土 18層とほぼ同じだがきめが粗い
- 33 暗褐色土 締まりと粘性有る流れ込みの層 ローム土ベースで黒色土10%を含む
- 34 黒褐色土 やや締まりと粘性有り 比較的粘性の有るローム土からなり礫も含む
- 35 黒褐色土 やや粘性有り φ1~2mmの赤褐色スコリア1%、φ1~50mmも中部ローム土ブロック10%、φ1~100mmの黒色土ブロック10%、礫を30%含む
- 36 灰赤色土 粘性有り 中部ローム土中にφ1~15mmの黒色土ブロック10%を含む
- 37 トレンチ埋土
- 38 暗褐色土 締まりが有り粘性無し φ5cmのローム土ブロックで100%構成 若干礫有り
- 39 暗褐色土 やや締まりが有り粘性有り ローム土ベースで礫をかなり含む
- 40 礫
- 41 暗褐色土 礫城造成の時の埋土
- 42 にぶい黄褐色土 締まりが無くやや粘性有り φ2~5cmのローム土からなり礫を含む 上部に(礫を含む)1cm中の黒い帯
- 43 灰黄褐色土 粘性が有る黄褐色の有るローム土 φ5~20mmの黒色土ブロック20%、赤いスコリアを多少含む
- 44 黒褐色土 締まりが有り粘性有り φ5cmのローム土ブロックとφ5cmの黒色土ブロックの2つで構成
- 45 黒褐色土 粘性強い φ1~2mmの赤褐色スコリア15%、φ1~40mmの黒色土ブロック40%、φ1~15mmの炭化物1%未満を含む
- 46 暗褐色土 締まりが無く粘性無し ローム土ブロックベースでφ5~10cmの礫5%を含む
- 47 褐色土 粘性強い φ1~3mmの赤褐色スコリア1%未満を含む中部ローム土
- 48 黒褐色土 ザラザラの土 φ1~2mmの赤褐色スコリア3%、φ1~70mmの中部ローム土ブロック、φ1~2mmの炭化物、φ1~30mmの黒色土ブロック1%未満を含む
- 49 黒褐色土 やや粘性有り φ1~2mmの赤褐色スコリア3%、φ1~30mmの中部ローム土ブロック10%を含む
- 50 黒褐色土 粘性有り φ1~5mmの赤褐色スコリア2%、φ1~50mmの中部ローム土ブロック5%を含む
- 51 黒褐色土 粘性強い φ1~5mmの赤褐色スコリア1%、φ1~70mmの中部ローム土ブロック70%、φ1~4mmの炭化物1%未満を含む
- 52 黒褐色土 粘性強い φ1~3mmの赤褐色スコリア10%、φ1~60mmの中部ローム土ブロック2%、φ1~30mmの炭化物1%未満を含む
- 53 黒褐色土 ザラザラの土 φ1~3mmの赤褐色スコリア2%、φ1~25mmの中部ローム土ブロック3%を含む
- 54 黒褐色土 ザラザラの土 φ1~2mmの赤褐色スコリア1%、φ1~15mmの中部ローム土ブロック1%を含む
- 55 黒褐色土 やや粘性有り φ1~2mmの赤褐色スコリア2%、φ1~30mmの中部ローム土ブロック1%、φ1~2mmの炭化物1%未満を含む
- 56 黒褐色土 粘性有り φ1~3mmの赤褐色スコリア3%、φ1~3mmの褐色スコリア30%を含む
- 57 黒褐色土 ややザラザラの土 φ1~2mmの赤褐色スコリア1%未満、φ1~2mmの赤褐色スコリア10%を含む
- 58 灰褐色土 粘性強い φ1~2mmの赤褐色スコリア10%を含む中部ローム土
- 59 黒褐色土 粘性強い φ1~40mmの赤褐色スコリア1%未満、φ1~70mmの中部ローム土ブロック40% φ1~25mmの黒色土ブロック1%を含む
- 60 黒褐色土 粘性強い φ1~3mmの炭化物3%、φ1~150mm中部ローム土ブロック70%、焼土を含む
- 61 黒褐色土 粘性強い φ1~5mmの赤褐色スコリア10%、φ1~50mmの中部ローム土ブロック15%、φ1~35mmの炭化物5%を含む
- 62 褐色土 φ50~100mmの黒色土ブロック40%、φ2~7mmの赤色スコリア40%、ローム土ブロック20%、φ2~5mmの炭化物を多少含む
- 63 黒褐色土 やや粘性が有る φ2~10mmの黒色土ブロック30%、φ1~2mmの赤色土ブロックを含む
- 64 灰黄褐色土 粘性が有る土で黒色スコリアも帯状に出てサラサラしている φ5~40mmの黒色土ブロック20%、ローム土ブロック50%、
- 65 灰黄褐色土 φ2~4mmの黒色土ブロックが混じったスコリア層が有り φ2~5mmの炭化物を多少、ローム土ブロック40%を含む
- 66 暗褐色土 全体に粘性が有る黄褐色土ロームで φ1~3mmの赤色土ブロックが全体に見られ、φ10~20mmの黒色土ブロック10%を含む
- 67 暗褐色土 全体は黒赤褐色土でφ3~5mmの炭化物を含みφ2~3mmの赤色スコリアが見られる

石火矢台 A''-A'''

- 1 褐色土 締まりが有り粘性無し φ20~100mmのローム土ブロックベースでφ20~50mmの黒色土ブロック30%、φ5~10mmのスコリア10%を含む
- 2 赤灰色土 やや締まりが有り粘性無し φ2~5mmのスコリア5%を含む
- 3 褐色土 締まりが無く粘性無し φ10~20mmのローム土ブロック5%、φ2~5mmのスコリア2%を含む
- 4 黒褐色土 やや締まりが有り粘性無し φ10~50mmのローム土ブロック2%、φ1~2mmのスコリア1%を含む
- 5 赤灰色土 締まりが無く粘性無し φ20~50mmのローム土ブロック30%を含む
- 6 褐色土 やや締まりが無く粘性無し φ5~10mmのローム土20%、φ1~2mmのスコリア10%、φ5~10mmの黒色土5%を含む
- 7 赤灰色土 締まりが無く粘性無し φ10~20mmのローム土ブロック10%、φ1~2mmのスコリア2%を含む
- 8 黒褐色土 締まりが無く粘性無し φ2~5cmのローム土ブロック15%を含む
- 9 暗紫灰色土 締まりが無く粘性無し φ1~2cmのローム土とφ1~2cmの黒色土を含む
- 10 黒褐色土 締まりと粘性無し 黒色土ベースでφ2~3cmのローム土10%を含む
- 11 褐色土 締まりが無く粘性無し φ2~5mmのスコリア1%を含む
- 12 黒褐色土 締まりが無く粘性無し φ5~10mmのローム土ブロック10%、φ5~10mmの黒色土3%を含む
- 13 黒褐色土 締まりが無く粘性無し ローム土、黒色土を各10%、φ1~2cmのローム土10%を含み、耕作土・黒色土・ローム土が混じる
- 14 褐色土 締まりが無く粘性無し φ30~50mmのローム土ブロック3%、φ1~2mmのスコリア2%を含む
- 15 黒褐色土 締まりが無く粘性無し φ1~2cmのローム土10%と礫を多く含む
- 16 黒褐色土 締まりが無く粘性無し φ5cmのローム土5%、φ1cm以下のローム土・黒色土10%を含むφ
- 17 黒色土 締まりが無く粘性無し φ1cm以下のローム土5%と礫を含む
- 18 黒褐色土 締まりが無く粘性無し φ5cmのローム土ブロック20%と礫を含む
- 19 黒褐色土 粘性無し φ2~5cmのローム土ブロック10%、φ2~5cmの黒色土ブロック10%を含む
- 20 暗褐色土 締まりが無く粘性無し 耕作土からなりφ2~5cmのローム土ブロック、φ2~5cmの黒色土ブロックを含む

石火矢台 B－B′ 左

- 黒褐色土 やや締まりと粘性無し φ2～3cmのローム土ブロック15%、φ5cmのローム土ブロック7%を含む
- 黒褐色土 締まりが無く粘性無し φ1～2mmのローム土粒7%を含む
- 黒褐色土 締まりが無く粘性無し φ2～3cmのローム土ブロック15%、φ2～3cmの礫20%、φ10cmの礫2%を含む
- 黒褐色土 締まりが有り粘性が有る φ5cmのローム土ブロックからなる
- 暗赤褐色土 締まりが無く粘性無し φ1～2mmのローム土粒7%、φ2～5mmのローム土粒5%を含む
- 黒褐色土 締まりが無く粘性無し φ1～2mmのローム土粒5%、φ2～5mmのローム土粒3%を含む
- 黒褐色土 やや締まりと粘性有り φ2～3cmのローム土粒15%、φ2～3cmの礫を含む
- 黒褐色土 締まりが無く粘性無し φ1～2mmのローム土由来のスコリア5%を含む
- 黒褐色土 締まりが無く粘性無し φ1～2mmのローム土由来のスコリア10%、φ2～5mmのスコリア3%、φ2～3cmのローム土粒7%を含む
- 黒褐色土 締まりが無く粘性無し φ2～5mmのローム土粒5%を含む
- 黒褐色土 締まりが無く粘性無し 攪乱か？
- 黒褐色土 締まりと粘性無し
- 黒褐色土 締まりが無く粘性無し φ2～3cmのローム土ブロック5%を含む
- 黒褐色土 締まりが無く粘性無し 2・6・10層に比べるとやや粘性有り
- 黒褐色土 締まりが無く粘性無し φ2～3cmのローム土粒5%を含む
- 黒褐色土 締まりが無く粘性無し φ2～5mmのローム土粒2%、φ2～3cmのローム土粒2%を含む
- 黒褐色土 締まりが無く粘性無し φ1～2mmのローム土由来?のスコリア2%を含む
- 黒褐色土 やや締まりが有り粘性無し φ2～3cmのローム土ブロック5%を含む
- 黒褐色土 締まりが無く粘性無し 黒色土と炭化物からなる
- 黒褐色土 締まりが無く粘性無し φ2～3cmのローム土ブロック15%と礫を含む
- 黒褐色土 締まりが有り粘性有り φ2～3cmのローム土ブロック5%、φ2～3cmの礫10%を含む
- 黒褐色土 締まりが無く粘性有り φ2～3cmのローム土粒5%と礫を含む
- 黒褐色土 締まりが無く粘性無し φ2～3cmの礫5%を含む
- 黒褐色土 やや締まりと粘性有り φ2～3cmのローム土ブロックと砂からなる
- 黒褐色土 締まりが無く粘性無し φ2～5cmのローム土ブロック5%を含む
- 黒褐色土 締まりが有り粘性有り φ5cmのローム土ブロック10%、φ2～5cmのローム土ブロック10%を含む

27 ー 注記なし

石火矢台 B－B′ 右

- 黒褐色土 締まりが無く粘性無し φ2～5mmのローム土粒15%を含む
- 黒褐色土 締まりが有りやや粘性有り φ5cmのローム土ブロック10%を含む
- 暗赤灰色土 締まりが無く粘性無し φ2～5mmのローム土粒15%を含む
- 暗褐色土 締まりが無く粘性無し φ2～5mmのローム土粒15%を含む
- 暗褐色土 締まりが無く粘性無し φ1～2mmのローム土粒5%を含む
- 暗褐色土 締まりが無く粘性無し φ2～3mmのローム土粒3%、φ1～2mmのローム土粒15%を含む
- 暗灰色土 締まりが無く粘性無し φ2～5cmのローム土ブロック5%、φ2～5mmのローム土15%を含む
- 暗褐色土 締まりが無く粘性無し φ10～30cmのローム土ブロック50%、φ5cmのローム土ブロック20%を含む
- 暗赤褐色土 締まりが無くやや粘性有り φ5cmのローム土ブロック5%、φ2～3cmのローム土粒30%を含む
- 黒褐色土 締まりが無くやや粘性有り φ1～2mmのローム土粒25%、φ2～3cmのローム土粒5%、φ5cmのローム土ブロック2%を含む
- 暗赤褐色土 締まりが無く粘性有り φ5cmのローム土ブロック30%、φ2～3cmのローム土粒5%を含む
- 黒褐色土 締まりが無く粘性有り φ2～3cmのローム土粒3%、φ1～2mmのローム土粒10%を含む
- 黒褐色土 締まりが有り粘性有り φ2～3cmのローム土粒2%、φ1～2mmのローム土粒5%を含む
- 黒褐色土 やや締まりが有り粘性無し φ1～2mmのローム土粒10%を含む
- 暗褐色土 締まりが無くやや粘性有り 締まりが無いローム土粒からなり黒色土5%を含む
- 黒褐色土 やや締まりと粘性有り φ1～2mmのローム土粒5%、φ2～5cmの礫、φ10cmの礫を含む
- 黒褐色土 締まりが無くやや粘性有り φ2～5cmのローム土ブロック25%、φ5～10cmの礫を含む

石火矢台 B″－B″

- 暗褐色土 φ2～3mmの赤褐色スコリア1%と炭化物を含むサラサラとした土
- 3/4 ー 攪乱層
- 4 ー 礫層
- 暗褐色土 φ1～3mmの赤褐色スコリア1%未満を含むサラサラした土
- 暗褐色土 やや粘性有り φ1～2mmの赤褐色スコリア7%、φ1～2mmの黒色土1%未満
- 暗赤褐色土 やや粘性有り φ1mm未満の赤褐色スコリア、φ1～2mmの黄褐色スコリア、φ1mmの黒色土を角に2%含む
- 暗褐色土 粘性有り φ1mm未満の赤褐色スコリア、φ1～2mmの黄褐色スコリア、φ1mmの黒色土を各2%含む
- 暗褐色土 粘性有り φ1mmの赤褐色スコリア10%、φ1mm未満の黄褐色・黒色土を各7%、3×5mm角の板状の黒色土を含むを有する黄褐色土1%未満、20×15mmの角の黒色版状土層1%未満、10×10mm角の中部ローム土80% 20×15mmの板状の黒色土を含む
- 暗褐色土 粘性有り φ3～5mmの赤褐色スコリア7%、20×70mmの板状の黒色土1%、40×60mm角の中部ローム土を含む
- 暗褐色土 やや粘性有り φ3～7mmの赤褐色スコリア3%、φ2～5mmの黒色土3%、150×150mm角の中部ローム土を含む
- 暗褐色土 粘性有り φ3～5mmの赤褐色スコリア3%、φ1～3mmの黒色土1%、3×3mm・10×10mm角の中部ローム土を含む
- 黒褐色土 やや粘性有り φ5～7mmの赤褐色スコリア3%、φ7～10mmの黒色土2%、50×70mm角の中部ローム土を含む
- 黒褐色土 粘性有り φ3～5mmの赤褐色スコリア7%、φ20～30mmの黒色土5%、φ30mmの中部ローム土2%を含むの中部ローム土3%が点在している中部ローム土1%未満、φ20mmの中部ローム土が点在している
- 暗褐色土 粘性有り φ3～5mmの赤褐色スコリア3%、φ20mmの黒色土7%を含む
- 暗褐色土 粘性有り φ1mm未満の赤褐色スコリア2%、φ20mm角の黒色土2%、8×10mm角の中部ローム土10%が点在する
- 黒褐色土 やや粘性有り φ1～2mmの赤褐色スコリア3%、φ5～20mmの黒色土3%、70×70mm角の中部ローム土10%を含む
- 暗褐色土 やや粘性有り φ1mm未満の赤褐色スコリア2%、黄褐色土と黒色土の斑状
- 暗褐色土 やや粘性有り φ1mm未満の赤褐色及び黄褐色のスコリア2%、φ5mmの黒色土1%未満
- 暗褐色土 φ1mm未満の赤褐色及び黄褐色のスコリア10%、φ10mmの黒色土7%、8×5mm角の中部ローム土10%
- 暗褐色土 粘性有り φ1～2mmの赤褐色及び黄褐色スコリア5%、70×70mm角の中部ローム50%を含む黒色土ブロック7%、10×10mm角の中部ローム土8%を含む
- 黒褐色土 サラサラとした土 φ5～7mmの赤褐色スコリア2%、φ20mmの黄褐色土ブロックを7～10%含む
- 暗褐色土 やや粘性有り φ3～5mmの赤褐色スコリア2%、φ1～2mmの黄褐色スコリア1%未満、φ5mmの黒色土2～3%を含む
- 暗褐色土 やや粘性有り φ1～3mmの赤褐色スコリア5%、φ5～7mmの黒色土10%
- 暗褐色土 粘性有り φ3～5mmの赤褐色スコリア3%、黄褐色土と黒色土の斑状（水玉模様のような）の土層が占める

- 黒褐色土 やや粘性有り φ3～7mmの赤褐色スコリア2%、φ3～7mmの黒色土1%、3×4mmのの中部ローム土4%を含む
- 暗褐色土 粘性強い φ1～2mmの赤褐色スコリア10%、φ1～3mmの黒色土4%を含む7×10mm角の中部ローム土2～3%含む
- 暗褐色土 粘性有り φ1～3mmの赤褐色・橙色スコリア7%、φ1mm未満の黒色土7%
- 暗褐色土 粘性有り φ3～5mmの赤褐色・黄褐色スコリア8%、φ1～2mmの黒色土4%
- 黒色土 やや粘性有り φ5～7mmの赤褐色スコリア5%、5×7mm角の中部ローム土3%を含む
- 黒褐色土 φ5～7mmの赤褐色スコリア50%と15×20mm角の中部ロームを含む
- 黒褐色土 粘性有り φ5×7mmの赤褐色スコリア20%、φ2～3mmの黒色土2%、3×5mm角の中部ローム土7%、2×8mmの黒色土で板状構造1%を含む
- 暗褐色土 粘性有り φ3～5mmの赤褐色スコリア10%を含み、10×10mm角の中部ローム土が点在
- 暗褐色土 粘性有り φ2～5mmの赤褐色スコリア3%、8×10mm角の中部ローム土ブロック25%を含む
- 暗褐色土 やや粘性有り φ1～2mmの赤褐色スコリア2%、φ1～2mmの黒色土3%、7×20mm角の中部ローム土10%を含む黒色土1%、20mm角の黒色土ブロック7%を含む中部ローム土
- 暗褐色土 粘性強い φ1～2mmの赤褐色スコリア10%、φ1mm未満の黄褐色スコリア1%、φ1～2mmのを含むの黒色土10%、50×200mm角の中部ローム10%を含む中部ローム土7%を含む10×20mmの黒色土固まり状を含む 中部ローム土が土層内の50%を占める

石火矢台 C－C′

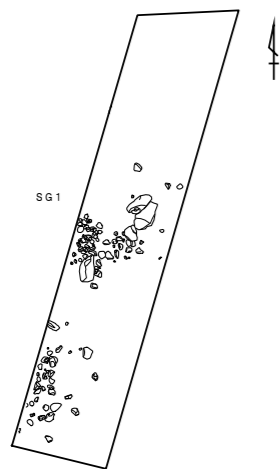
- 暗灰黄色土 締まりが無く粘性無し φ10～100mmのローム土20%を含む
- 灰色土 締まりが無く粘性無し φ5～20mmのローム土10%を含み黒が強く見える
- 黄灰色土 締まりが無く粘性無し φ10～50mmのローム土10%を含む 灰黄褐色ローム土
- 黄灰色土 締まりが無く粘性無し φ10～50mmのローム土10%を含む 灰黄褐色ローム土
- 褐灰色土 締まりが無く粘性無し φ10～50mmのローム土10%を含む 灰黄褐色ローム土
- 褐灰色土 締まりが無く粘性無し φ10～50mmのローム土10%を含む
- 暗赤褐色土 締まりが無く粘性無し 根の攪乱
- 灰褐色土 締まりが有り粘性無し ローム土（地山）
- 灰褐色土 やや締まりが有り粘性無し φ10～20mmのローム土10%、φ5～10mmの黒色土5%を含む
- 灰褐色土 締まりが有り粘性無し φ5～10mmのローム土とφ300mmのローム土がベース、φ5mmの黒色土10%を含む
- 暗褐色土 締まりが無く粘性無し 黒色土とローム土が混じる
- 黒褐色土 締まりが無く粘性無し φ2～5cmのローム土ブロック15%、φ5～10mmのローム土ブロック5%を含む
- 黒褐色土 締まりが無く粘性無し φ2～5cmのローム土ブロック7%、φ2～5cmの黒色土ブロック7%を含む
- 黒褐色土 締まりが無く粘性無し φ2～5cmのローム土ブロック5%を含み、黒色土、耕作土が混じる
- 黒褐色土 締まりが無く粘性無し 江戸時代からの耕作土でφ1～2mmのローム土10%、φ2～5cmのローム土ブロック10%、礫を含む
- 黒褐色土 締まりが無く粘性無し 江戸時代からの耕作土でφ1～2mmのローム土10%、φ2～5mmのローム土5%を含む
- 黒褐色土 締まりが無くやや粘性有り φ2～5mmのローム土5%を含む
- 黒褐色土 締まりが無く粘性無し 耕作土ベース?でφ1～2mmのローム土10%を含む
- 黒褐色土 締まりが無く粘性無し φ1～2mmのローム土15%を含む 黒色土が若干混じり20層よりもローム土が多い
- 黒褐色土 締まりが無く粘性無し 江戸時代からの耕作土でφ1～2mmのローム土10%、礫を含む
- 黒褐色土 締まりが無く粘性無し φ1～2cmのローム土40%を含み残りは耕作土
- 黒褐色土 締まりが無く粘性無し 礫を含む 耕作土か？
- 暗褐色土 やや締まりが有り粘性無し φ2～5cmのローム土ブロックを含み残りは耕作土
- 黒色土 締まりが無く粘性無し φ1～2mmのローム土10%を含み、黒色土、耕作土が混じる
- 黒褐色土 締まりが無く粘性無し φ2～5mmのローム土5%、φ1～2mmのローム土10%を含む
- 黒褐色土 締まりが無くやや粘性有り φ1～2mmのローム土10%、φ5cmのローム土ブロックを含む
- 黒色土 やや締まりが有り粘性無し φ2～5mmのローム土5%、φ2～5mmの黒色土2%を含む 耕作土か？
- 黒褐色土 やや締まりが有り粘性無し φ2～5mmのローム土10%、礫を含む 耕作土か？
- 黒褐色土 締まりが無く粘性無し ローム土、黒色土、その他の流れ込みで礫を含む
- 黒褐色土 締まりが無くやや粘性有り 耕作土ベースでφ1～2cmのローム土25%を含む
- 黒色土 締まりが無くやや粘性有り 黒色土ベースでφ1～2mmのローム土10%、φ2～5cmのローム土ブロック15%を含む
- 暗褐色土 締まりが有り粘性無し ローム土ブロック及び黒色土の流れ込みの層
- 黒褐色土 締まりが有り粘性無し φ1～2cmのローム土及び耕作土
- 暗褐色土 締まりが有り粘性無し φ2～5cmのローム土ブロック15%、φ2～5mmのローム土15%を含む
- 黒褐色土 やや締まりが有り粘性無し φ2～5mmのローム土5%、礫を含む 耕作土か？

石火矢台 D－D′

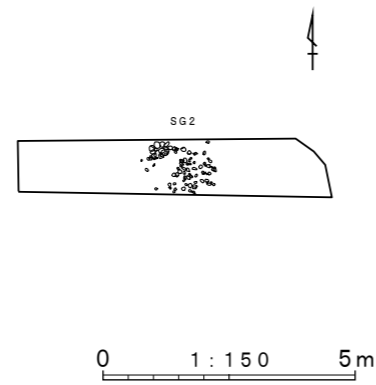
- 1 表土
- 暗赤褐色土 締まりが無く粘性無し φ10～50mmの礫含む
- 灰褐色土 2層のサラサラ黒色土がはまり込む
- 灰褐色土 やや締まりが有り粘性無し φ10～100mmのローム土ベース、サラサラな黒色土10%を含む 8・9層とほぼ同じ
- 灰褐色土 締まりが有り粘性無し φ5～100mmのローム土15%、φ10～50mmの黒色土5% 乾電池を含む
- 暗オリーブ色土 やや締まりと粘性有り
- 褐灰色土 締まりが無く粘性無し サラサラ黒色土ベース φ20mmのローム土2% ゴミを含む
- 褐灰色土 やや締まりが有り粘性無し φ10～100mmのローム土50%、サラサラな黒色土30%を含む 4・9層とほぼ同じ
- 灰褐色土 φ20～50mmのローム土ベース 下部にサラサラの黒色土がはまっている 1・2層とほぼ同じ
- 暗褐色土 締まりが無くやや粘性有り
- 暗褐色土 締まりが無くやや粘性有り φ2～5cmの中部ローム土ブロックを含む
- 黒褐色土 締まりが無く粘性無し φ2～5cmのローム土ブロック10%、φ20cm以上のローム土ブロック5%を含む
- 黒褐色土 締まりが無く粘性無し ローム土と黒色土との混じりが流れ込んでいる層
- 黒褐色土 締まりが無く粘性無し ローム土5%、黒色土10%を含む
- 暗褐色土 やや締まりと粘性有り φ5～10cmのローム土ブロック流れ込んでいる層
- 黒褐色土 締まりが無く粘性無し φ10cmのローム土ブロック5%、φ2～5cmのローム土ブロック20%を含む
- 黒褐色土 締まりが無く粘性無し 黒色土がベース
- 暗褐色土 締まりが無く粘性無し φ2～5cmのローム土ブロック5%、φ15cm以上のローム土ブロック5%を含む
- にぶい黄褐色土 やや締まりが有り粘性無し φ10cm以上のローム土ブロックにより形成された層
- 暗褐色土 締まりが無く粘性無し φ2～5cmのローム土ブロック10%を含む
- 暗褐色土 締まりが無く粘性無し φ1～2mmのローム土30%を含む

石火矢台E-E'		
1 灰褐色土	締まりが無く粘性無し	φ1~30mmのローム土5%、φ5~10mmの炭化物1%を含む
2 灰褐色土	締まりが無く粘性無し	φ1~30mmのローム土5%、φ5~10mmの炭化物1%を含む
3 暗赤灰色土	締まりが無く粘性無し	φ1~2mmのローム土10%、φ1~2cmのローム土5%を含む
4 暗赤灰色土	締まりが無く粘性無し	ローム土ブロックにより形成された層(耕作土と混じる)
5 暗赤灰色土	締まりが無く粘性無し	ローム土ブロックにより形成された層(耕作土と混じる)
6 暗赤灰色土	締まりが無く粘性無し	φ5cm程度のローム土ブロックと耕作土混じりの層
7 暗赤灰色土	締まりが無く粘性無し	φ10cm程度のローム土ブロックにより形成された層で黒色土40%を含む
8 黒褐色土	締まりが無く粘性無し	φ20cm以上のローム土ブロックにより形成された層
9 暗赤灰色土	締まりが無く粘性無し	φ20cm以上のローム土ブロックにより形成された層
10 暗赤灰色土	締まりが無く粘性無し	φ20cm以上のローム土ブロックにより形成された層
11 暗赤灰色土	締まりが無く粘性無し	φ10cm程度のローム土ブロック及び5cm程度のローム土ブロック、細やかなローム土粒を含む耕作土との混じり
12 暗赤灰色土	締まりが無く粘性無し	φ10cm以上のローム土ブロック及び5cm程度のローム土ブロックからなる層
13 暗赤灰色土	締まりが無く粘性無し	φ5~10cmのローム土ブロックを主体とした層
14 暗赤灰色土	締まりが無く粘性無し	φ10cmのローム土ブロック10%、φ5cmのローム土ブロック15%を含み16層より明るい色
15 黒褐色土	締まりが無く粘性無し	φ10cmのローム土ブロック10%、φ5cmのローム土ブロック15%を含み16層より明るい色
16 黒褐色土	やや締まりが有り粘性無し	φ5cmのローム土ブロック10%、φ2~5cmを20%、φ1~2cmを10%を含む
17 黒褐色土	締まりが無く粘性無し	ローム土粒25%を含む
18 暗オリーブ褐色土	締まりが無く粘性無し	φ5~10cmのローム土ブロック20%、φ2~5cmのローム土ブロック30%を含む
19 黒褐色土	締まりが無く粘性無し	φ20cm以上のローム土により形成された層
20 極暗褐色土	締まりが無く粘性無し	ゆるいローム土からなる
21 黒褐色土	締まりが無く粘性無し	φ1~2mmのローム土粒7%を含む
22 暗赤灰色土	締まりが無く粘性無し	緩いローム土からなる
23 黒褐色土	締まりが無く粘性無し	φ2~5mmのローム土粒5%を含む
24 暗褐色土	締まりが無く粘性無し	礫を多く含む
25 極暗褐色土	極めて締まりが無く粘性無し	
26 黒褐色土	締まりが無く粘性無し	23層に近い。礫を含む
27 黒褐色土	締まりが無く粘性無し	
28 黒褐色土	締まりが無く粘性無し	φ2~5cmの礫を含み22層よりやや黒い
29 黒褐色土	締まりが無く粘性無し	地山のローム土ブロック15%を含む
30 黒褐色土	締まりが無く粘性無し	φ2~5cmのローム土ブロック5%、赤色土、礫を含む
31 黒褐色土	やや締まりが有り粘性無し	φ2~5cmのローム土ブロック25%、礫を含む
32 黒褐色土	締まりが無く粘性有り	φ1~2mmのローム土粒10%、φ2~5cmのローム土ブロック5%、礫を多く含む
33 黒褐色土	締まりが無くやや粘性有り	φ2~3cmのローム土ブロック5%を含む
34 黒褐色土	締まりが無く粘性無し	φ1~2cmのローム土粒、φ2~3mmのローム土5%、φ5cmのローム土2%、礫を含む
35 黒褐色土	締まりが無く粘性無し	φ5cmローム土ブロック10%を含む
36 暗褐色土	締まりが無く粘性無し	φ2~5cmのローム土ブロック5%、赤色土10%、礫を含む
37 黒褐色土	やや締まりが有り粘性無し	φ10cmのローム土ブロック15%、φ5cmのローム土ブロック5%を含む
38 黒褐色土		
39 黒褐色土	やや締まりが有り粘性無し	φ5cmのローム土ブロック20%を含む
40 黒褐色土	締まりが無く粘性無し	φ5~10cmのローム土ブロックに砂が混じる
41 暗褐色土		φ2~5cmの礫層

石火矢台F-F'		
1 暗灰黄色土	締まりと粘性が有り	ローム土がベースで黒色土が20%混じる 下層の境目に砂利を含む
2 赤色土	締まりが無く粘性有り	ローム土がベースで黒色土が若干混じる
3 赤褐色土	締まりが無く粘性無し	φ2~5mmのローム土及び黒色土ブロックにより形成 黒色土30%、ローム土70%を含む
4 暗赤褐色土	締まりが無く粘性無し	φ5~10mmのローム土ブロック及びφ2~5cmのローム土、φ2~5cmの黒色土20%からなる
5 黒褐色土	やや締まりが有り粘性無し	φ5cm以下のローム土主体で黒色土15%を含む
6 黒褐色土	締まりが無く粘性無し	φ2~5mmのローム土及び黒色土により形成 5層に類似
7 暗褐色土	締まりが有りやや粘性有り	φ10cm程度のローム土ブロック、黒色土ブロックからなる黒色土15%を含む
8 暗紫灰色土	4層に近いが若干締まりが無い	
9 黒褐色土	締まりが無くやや粘性有り	φ10cm程度のローム土ブロックと黒色土ブロックからなる
10 暗褐色土	締まりが無く粘性無し	φ1~2mmのローム土30%を含み細かいφ1~2mm程度の黒色土からなる層
11 黒褐色土	締まりが有りやや粘性有り	9層とほぼ同じだが、ローム土ブロック20%を含み炭化物と砂利を含む帯状の層が中に入る



第40図 石火矢台 SG1 平面図



第41図 石火矢台 SG2 平面図

第3節 二ノ丸

(1) 調査の経過と成果

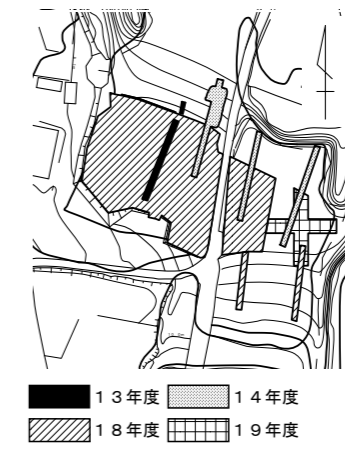
二ノ丸では、試掘調査を平成13・14年度に、詳細な遺構確認調査を平成18・19年度に実施した(第42・43図)。平成18年度には本丸の調査において三日月堀が検出されていたことから、三日月堀の調査を中心に行われた(三日月堀は本丸虎口に付属する施設であることから、第1節にて掲載)。

平成18年度の二ノ丸西側の調査は、グリッドに沿って土層観察用ベルトを残しながら平面調査を行った。絵図でも二ノ丸には施設等は描かれていないが、表土直下で早々に地山面が検出されたところも多く、遺構は検出されなかった(第45~47図)。本丸南側の様相から、本来は二ノ丸でも造成面の上に施設等が作られていた可能性が高いが、後世の造成によって滅失したと考えられる。

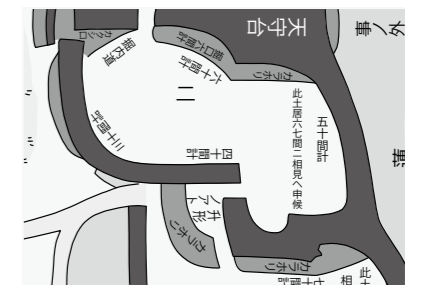
平成18・19年度に実施した二ノ丸の東側も土取りによって大幅に掘削されてしまっていることが判明した。このため、遺構は検出されなかった。さらに二ノ丸南東部においても、平成18年度には2本のトレンチを南北に設定して二ノ丸土塁の確認を行ったが、所々に地山を大きく削る穴が掘られており、この箇所でも完全に遺構が滅失していた(第45・47・48図)。



第42図 二ノ丸 調査位置図



第43図 二ノ丸 年度別調査地点図



第44図 二ノ丸絵図(拡大)



写真5 二ノ丸 調査状況(南から)



写真6 二ノ丸 土塁確認トレンチ調査前(北から)



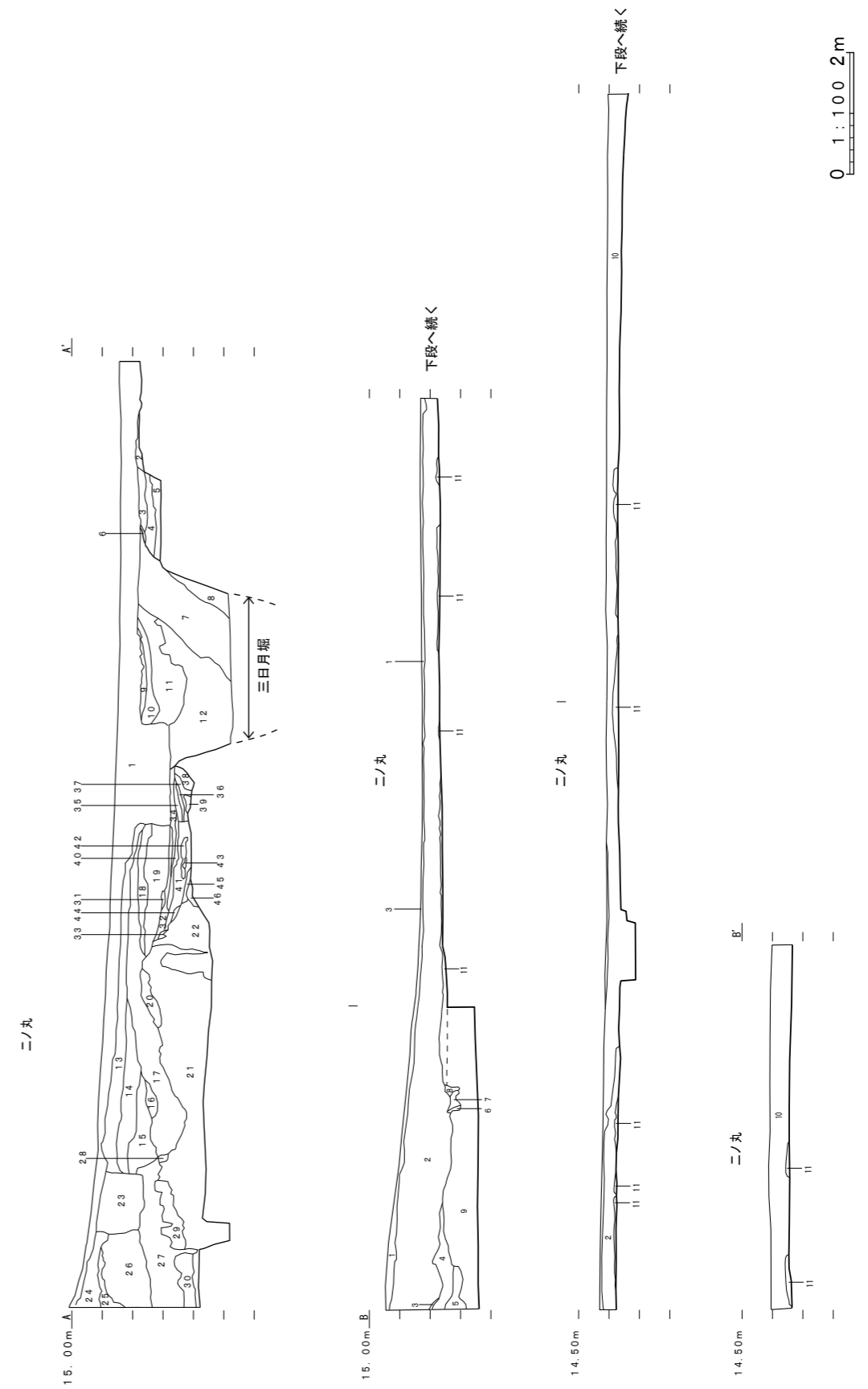
第45図 二ノ丸 全体平面図



写真7 本丸三日月堀 現場見学会



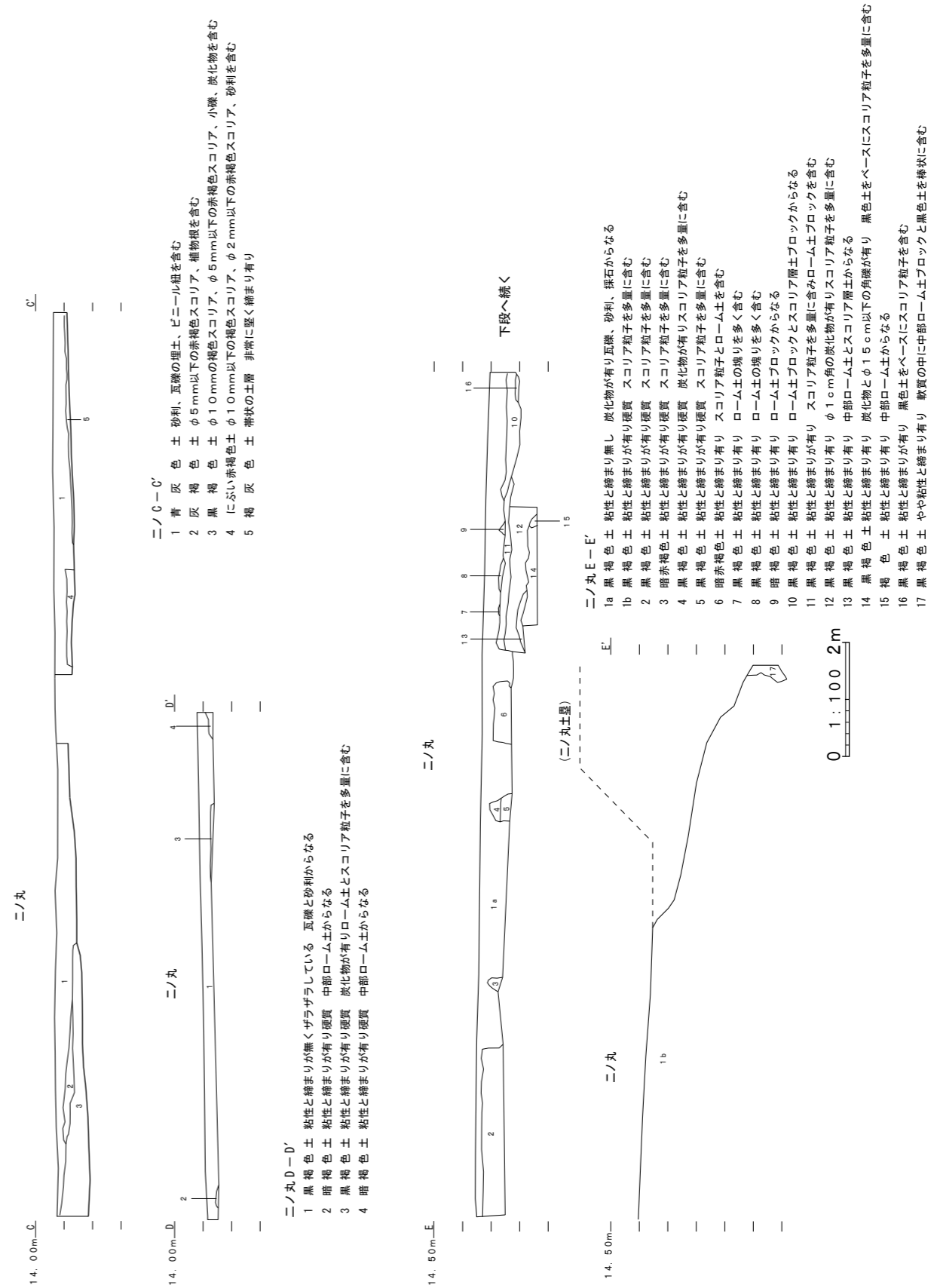
写真8 本丸三日月堀 検討会



第46図 二ノ丸 断面図(1)

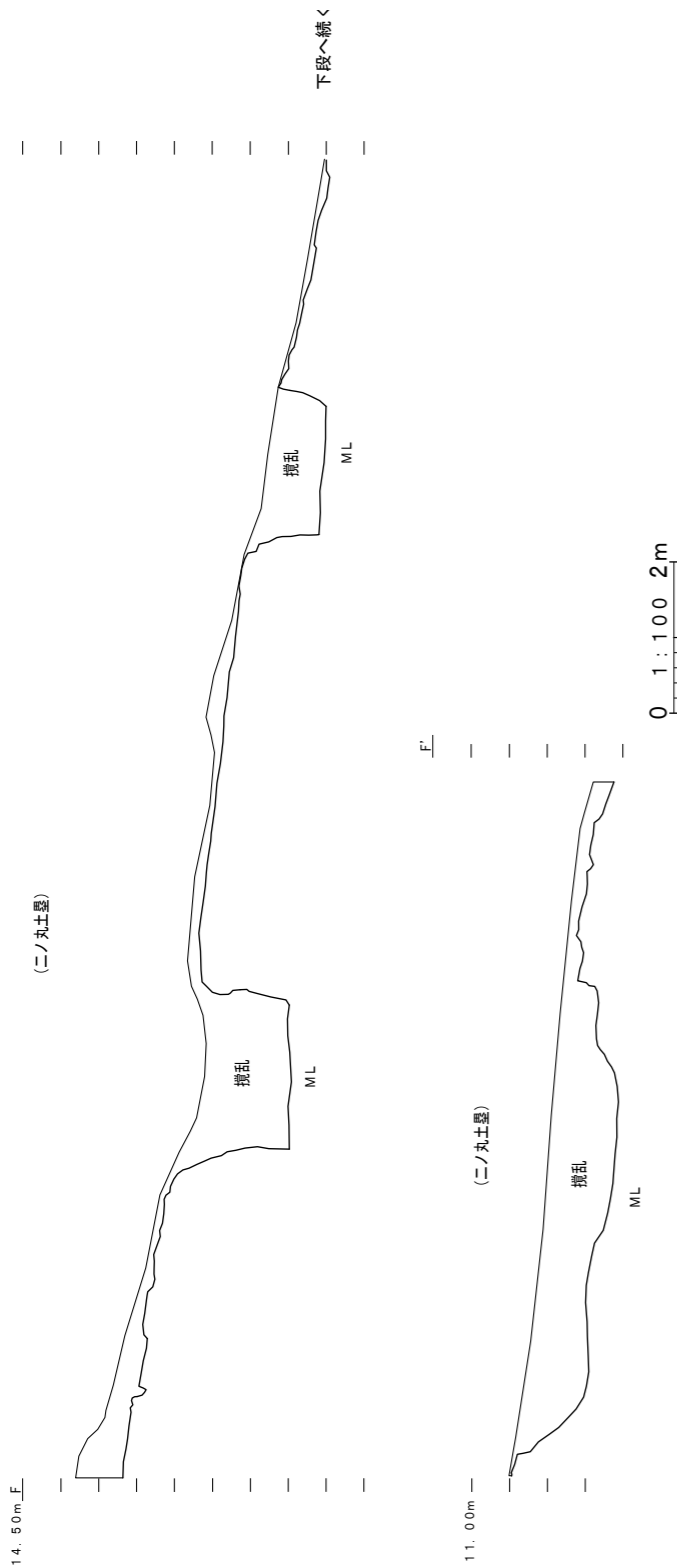
- 二ノ丸 A-A'
- 1 黒褐色土 φ10cm以下の中部ローム、φ2cm以下の赤褐色スコリア、φ5cm黒色土ブロック、小礫を含む
 - 2 灰黄褐色土 φ2mm以下の褐色スコリアを含む
 - 3 暗褐色土 φ2mm以下の赤褐色スコリアを含む
 - 4 暗褐色土 -
 - 5 黒褐色土 φ2cm以下の褐色土ブロック、φ2mm以下の赤褐色スコリアを含みや粘性有り
 - 6 暗赤褐色土 焼土様 粘性無く炭化物有り
 - 7 黒褐色土 φ10cm大の中部ローム土ブロック、φ5cm大の黒色土ブロック、小礫の混入
 - 8 黒褐色土 φ5cm大の中部ローム土ブロック、小礫、炭化物を含む
 - 9 褐色土 φ8cm大の中部ローム土ブロック、混入
 - 10 にぶい黄褐色土 φ5cm大の中部ローム土ブロック、砂利を含む
 - 11 褐色土 φ10cm大の中部ローム土ブロック、混入
 - 12 灰褐色土 φ20cm大の中部ローム土ブロック、混入
 - 13 黒褐色土 φ5mm以下の褐色スコリア、φ5mm以下の赤褐色スコリア、炭化物、小礫を含む
 - 14 黒褐色土 φ5mm以下の褐色スコリア、φ2mm以下の赤褐色スコリア、炭化物、砂利を含む
 - 15 暗赤褐色土 φ3cmの褐色スコリア、φ2mmの赤褐色スコリアを少しと小礫、炭化物を含む
 - 16 暗赤褐色土 φ1cmの褐色スコリアを含み締まり無し
 - 17 黒褐色土 φ1cmの褐色スコリア、φ3mm以下の赤褐色スコリア、炭化物を含む
 - 18 黒褐色土 φ5mmの中部ローム土ブロック、φ5mm以下の赤褐色スコリア、砂利を含む
 - 19 暗赤褐色土 φ5mm中部ローム土ブロック、φ5mm以下赤褐色スコリア、黒色土ブロックを含む
 - 20 灰褐色土 強く締まりが有り φ2mm以下の赤褐色スコリアを多く含む
 - 21 褐色土 やや粘性が有り φ2mm以下の赤褐色スコリアを含む
 - 22 灰褐色土 強く粘性有り φ5mmの赤褐色スコリアを含む
 - 23 黒褐色土 植物根を多く含み小礫を含む、締まりが無し(埋土)
 - 24 黒褐色土 植物根、小礫を含む
 - 25 赤黒色土 φ1mm以下の赤褐色スコリア、φ1mm以下の褐色スコリアを含む
 - 26 黒褐色土 -
 - 27 黒褐色土 -
 - 28 灰赤色土 φ3mm以下の赤褐色スコリアが多い 強く締まり有り
 - 29 灰赤色土 φ3mm以下の赤褐色スコリアを含む
 - 30 灰赤色土 φ3mm以下の赤褐色スコリアを含む
 - 31 灰褐色土 φ3mm以下の赤褐色スコリアを含む
 - 32 灰褐色土 φ3mm以下の赤褐色スコリアを帯状に含む
 - 33 灰褐色土 φ1mm以下の赤褐色スコリアを少し含む
 - 34 灰赤色土 灰黄褐色土層が帯状に見える
 - 35 暗褐色土 φ5mm以下の赤褐色スコリアを多くと砂利を含む
 - 36 黒褐色土 赤褐色・黒色の混入砂利を含む
 - 37 暗褐色土 φ8cm以下の中部ローム土ブロックを含む
 - 38 黒褐色土 締まり無し
 - 39 黒褐色土 締まりが無く炭化物を含む
 - 40 灰赤色土 帯状の黒色土混在 φ5mm以下の赤褐色スコリアを含む
 - 41 黒褐色土 φ8mm以下の中部ローム土ブロックを含む
 - 42 黒褐色土 φ4cmの大礫1個 締まりが無い黒色土
 - 43 暗褐色土 強く締まりが有り φ1mm以下の赤褐色スコリアを含む
 - 44 暗褐色土 -
 - 45 暗褐色土 φ3mm以下の赤褐色スコリアを含む
 - 46 灰黄褐色土 強く締まり有り φ2mm以下の赤褐色スコリアが多い

- 二ノ丸 B-B'
- 1 黒褐色土 表土 植物根有り
 - 2 黒褐色土 φ2cm以下の褐色スコリア3%、φ2mm以下の赤褐色スコリア1%、炭化物、小礫、植物根を含む
 - 3 黒褐色土 φ10mm以下の褐色スコリア5%、植物根を含み締まり無し
 - 4 黒褐色土 φ2cm以下の褐色スコリア、φ2mm以下の赤褐色スコリア1%、炭化物、植物根を含む
 - 5 黒褐色土 φ5mm以下の褐色スコリア2%、φ2mm以下の赤褐色スコリア1%、植物根を含む
 - 6 黒褐色土 φ2mm以下の褐色スコリア2%、小礫、植物根を含み締まり無し
 - 7 暗赤褐色土 焼土、小礫を含みレン方調の色調
 - 8 黒褐色土 φ2mm以下の褐色スコリア2%、φ5mm以下の赤褐色スコリア3%、炭化物、植物根を含む
 - 9 黒褐色土 φ2mm以下の褐色スコリア1%、φ8mm以下の赤褐色スコリア20%、植物根を含み、強く締まりが有り粘性もある
 - 10 黒褐色土 φ1mm以下の褐色スコリア1%、植物根を含む
 - 11 黒褐色土 φ8mm以下褐色スコリア10%、φ2mm以下赤褐色スコリア2%、炭化物、植物根を含む



第47図 二ノ丸 断面図(2)

- 二ノ丸 D-D'
- 1 黒褐色土 粘性と締まりが無くザラザラしている 瓦礫と砂利からなる
 - 2 暗褐色土 粘性と締まりが有り硬質 中部ローム土からなる
 - 3 黒褐色土 粘性と締まりが有り硬質 炭化物が有りローム土とスコリア粒子を多量に含む
 - 4 暗褐色土 粘性と締まりが有り硬質 中部ローム土からなる
- 二ノ丸 C-C'
- 1 青灰色土 砂利、瓦礫の埋土、ビニール紐を含む
 - 2 灰褐色土 φ5mm以下の赤褐色スコリア、植物根を含む
 - 3 黒褐色土 φ10mmの褐色スコリア、φ5mm以下の赤褐色スコリア、小礫、炭化物を含む
 - 4 にぶい赤褐色土 φ10mm以下の褐色スコリア、φ2mm以下の赤褐色スコリア、砂利を含む
 - 5 褐色土 帯状の土層 非常に強く締まり有り
- 二ノ丸 E-E'
- 1a 黒褐色土 粘性と締まり無し 炭化物が有り瓦礫、砂利、探石からなる
 - 1b 黒褐色土 粘性と締まりが有り硬質 スコリア粒子を多量に含む
 - 2 黒褐色土 粘性と締まりが有り硬質 スコリア粒子を多量に含む
 - 3 暗赤褐色土 粘性と締まりが有り硬質 スコリア粒子を多量に含む
 - 4 黒褐色土 粘性と締まりが有り硬質 炭化物が有りスコリア粒子を多量に含む
 - 5 黒褐色土 粘性と締まりが有り硬質 スコリア粒子を多量に含む
 - 6 暗赤褐色土 粘性と締まり有り スコリア粒子とローム土を含む
 - 7 黒褐色土 粘性と締まり有り ローム土の塊りを多く含む
 - 8 黒褐色土 粘性と締まり有り ローム土の塊りを多く含む
 - 9 暗褐色土 粘性と締まり有り ローム土ブロックからなる
 - 10 黒褐色土 粘性と締まり有り ローム土ブロックとスコリア層土ブロックからなる
 - 11 黒褐色土 粘性と締まりが有り スコリア粒子を多量に含みローム土ブロックを含む
 - 12 黒褐色土 粘性と締まり有り φ1cm角の炭化物が有りスコリア層土を含む
 - 13 黒褐色土 粘性と締まり有り 中部ローム土とスコリア層土からなる
 - 14 黒褐色土 粘性と締まりが有り 炭化物とφ15cm以下の角礫が有り 黒色土をベースにスコリア粒子を多量に含む
 - 15 褐色土 粘性と締まりが有り 中部ローム土からなる
 - 16 黒褐色土 粘性と締まりが有り 軟質の中に中部ローム土ブロックと黒色土を帯状に含む
 - 17 黒褐色土 やや粘性と締まり有り



第48図 二ノ丸 断面図(3)



写真10 二ノ丸土塁確認トレンチ(2)



写真9 二ノ丸土塁確認トレンチ(1)

第4節 二ノ丸虎口

(1) 調査の経過と概要

二ノ丸虎口は、史跡指定以前の平成2年に実施した調査において、本丸へ向かう道路下に二ノ丸空堀が残存していることが確認されていた。このため、平成22年度及び平成25年度～28年度にかけて、この空堀を中心に二ノ丸虎口の構造を解明するための調査を行った(第49・50図)。

絵図(第51図)では三日月形に描かれる西側の空堀(以下、二ノ丸空堀(西))であるが、平成22年度にはこの構造を把握するためのトレンチ調査を行った。その結果、実際は三度の折れをもつ構造であったことが確認された。

平成25年度は、平成2年のトレンチ(H2TRE)よりも東側に南北方向のトレンチを入れるとともに、土橋推定地点にもトレンチを設定した。この結果、二ノ丸空堀の東側(以下、二ノ丸空堀(東))の幅や深さが確定されたとともに、さらに土橋付近には石積が存在していることが確認された。続く平成26年度には、絵図において空堀の東端が収束していることから、この構造が正しいか否かを確認するとともに、土橋付近の石積を面的に調査した。昨年度では石積と考えていたが、この調査によって二ノ丸虎口には裏込めをもった石垣が伴っていることが確認された。

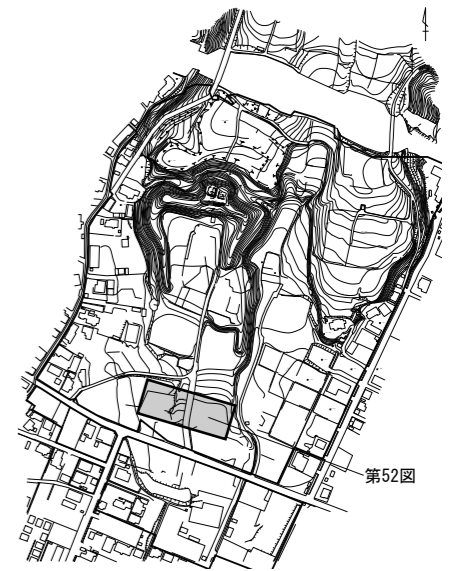
石垣は伝天守台下を除けば初の検出事例であったため、翌年には土橋を含んだ石垣よりも西側の構造を把握するためにトレンチを設定して調査を行った。その結果、絵図には記されていない4条の石積が検出された。これによって二ノ丸虎口は何度かの改修を経て、石垣構造へと変化したと想定されるに至ったため、平成28年度にはこれら石積から石垣への変遷過程を把握することとした(第52図)。

(2) 二ノ丸空堀(西)(第54・55図)

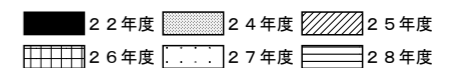
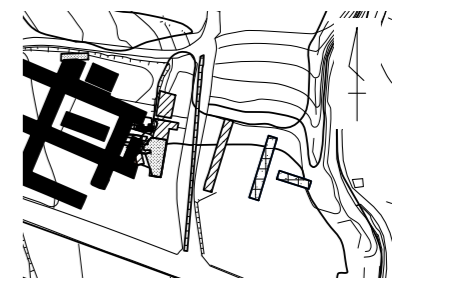
二ノ丸虎口の西側を形成する二ノ丸空堀(西)付近は、近代に大きく土取りされており、現在の平坦面は当時の曲輪造成面ではない。土取りが及んでいない面(第54図SD3・4付近)との標高差は約3mを測る(61頁 写真13)。そのため遺構はすでに大部分が滅失しており、空堀の堀底付近しか遺構の構造が把握できなかった。

したがって堀底に近い位置での情報となるが、二ノ丸空堀(西)は先述のように三日月形ではなく、三度の折れを持ち、土橋付近で一度幅を狭くする。検出された総延長は約45mで、幅はAセクション地点にて約7.0m、土橋付近のBセクション地点では約4.0m、上部は失われているが、深さは1.0mを測る。なお、明治期に描かれた「根古屋村絵図」には、堀は後世にも道として利用されたことが示されている(第53図 全体は史料編第五章 史料番号29に掲載)。

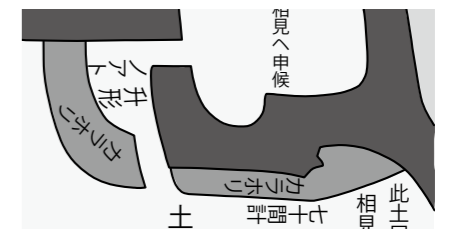
空堀の中にはSDやPTが伴っている(第56・57図)。PTは列をなすわけではないが、PT3やPT8のように空堀の両端に認められるものもある。またSDも空堀の端に伴うものもあれば、中央に空堀と軸を同じくして南北に走るものもある。これら小規模遺構群と空堀との関係は不明であり、また時期も



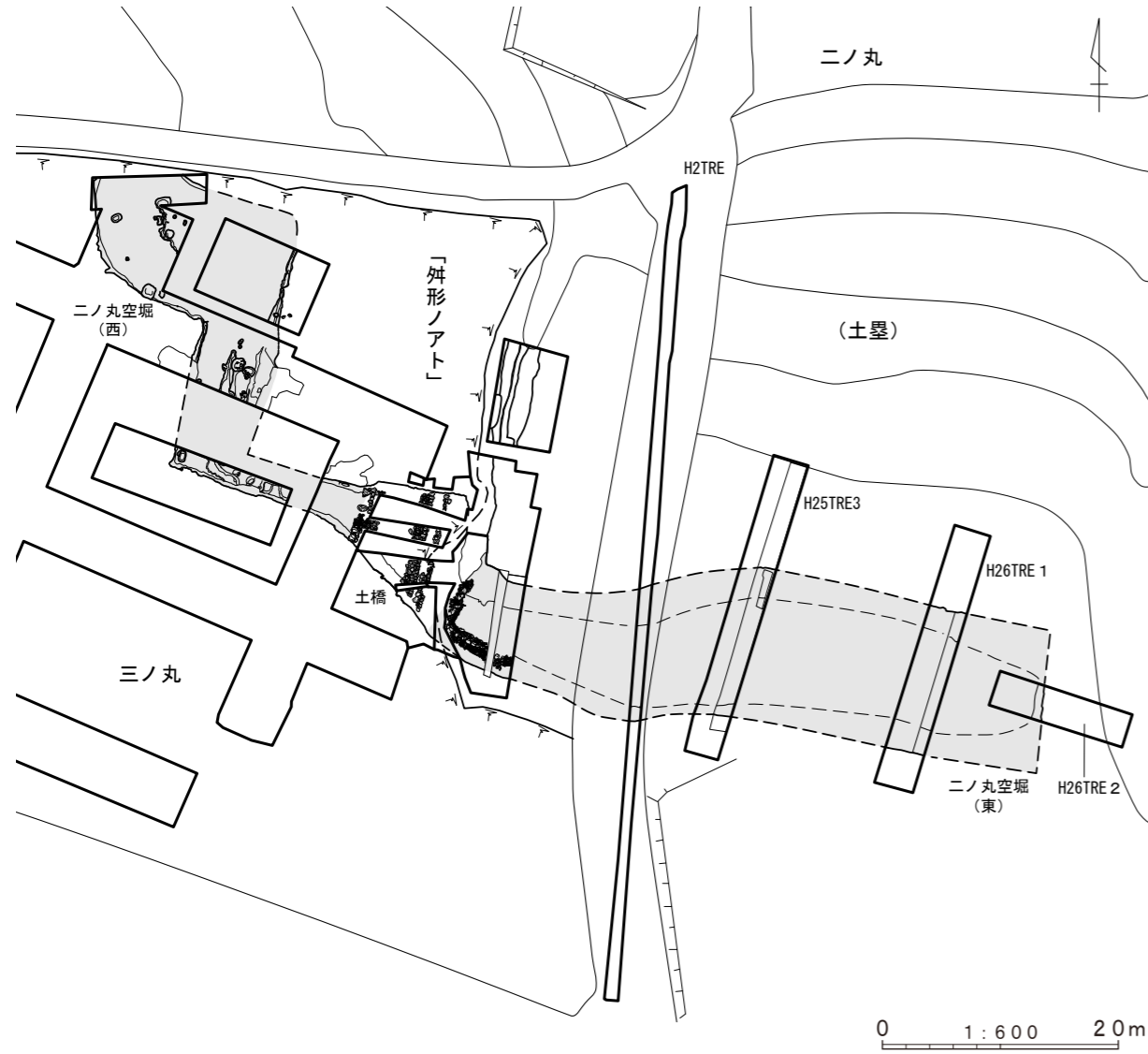
第49図 二ノ丸虎口 調査位置図



第50図 二ノ丸虎口年度別調査地点図



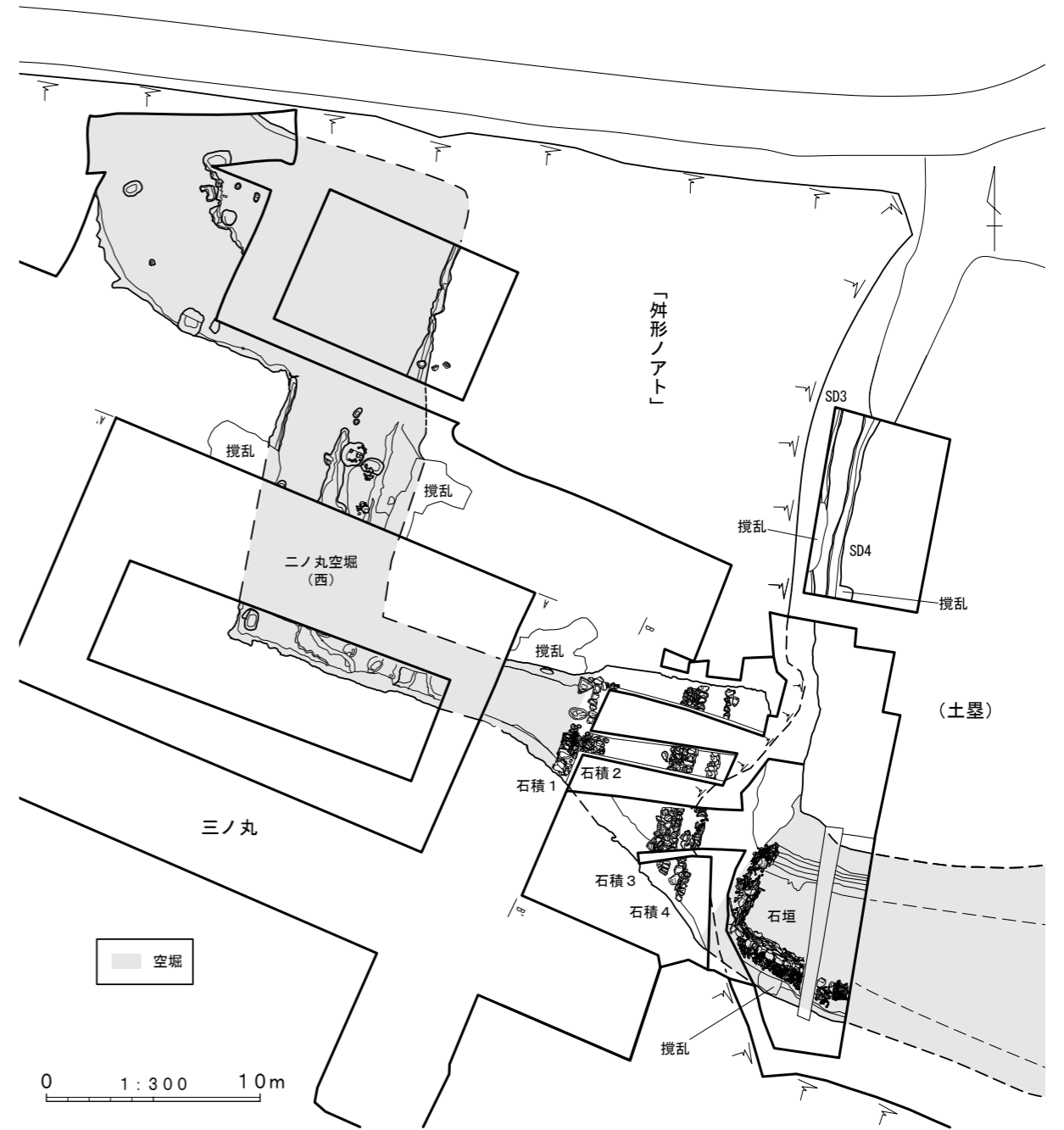
第51図 二ノ丸虎口絵図(拡大)



第52図 二ノ丸虎口 全体図



第53図 二ノ丸虎口・三ノ丸 根小屋村絵図(拡大)



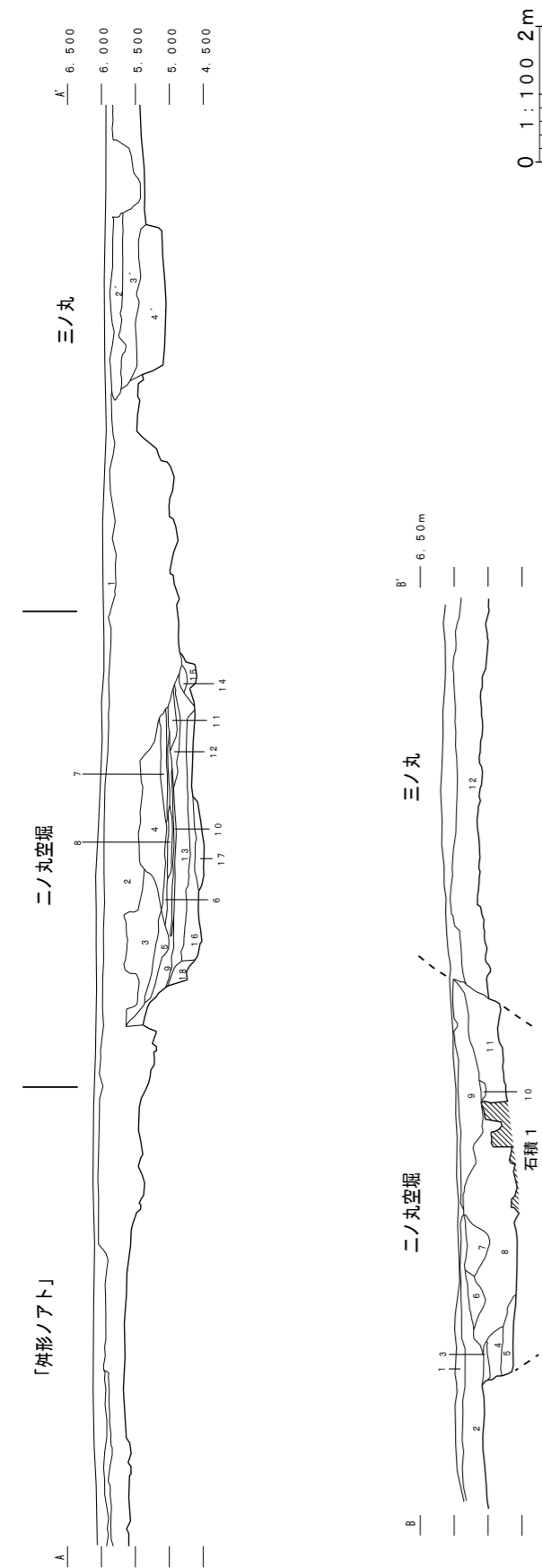
第54図 二ノ丸虎口西側 全体図

未確定である。しかし曲輪が土取りされているにも関わらず、PTやSDは残存していることから、これらが城郭遺構と仮定すれば、相当に深く掘り込まれた遺構となる。これらの規模等は別途集計表を付した(第6表)。

3号溝・4号溝(SD3・SD4 第58図)

SD3・SD4は二ノ丸空堀内の遺構ではないが、土橋から二ノ丸へ進入した「舁形ノアト」地点にて検出された。「根小屋村絵図」と比較すれば、土塁の西側に位置する。城郭段階の遺構かは不明であるが、土塁から流れる雨水処理のために掘られた溝の可能性はある。

検出された延長はSD3が9.0m、SD4は8.8mである。SDの南側は後世の攪乱を受けて滅失している。幅はSD3が0.2m、SD4が0.3m、深さはSD3が0.2m、SD4が0.3mを測る。



第55図 二ノ丸空堀(西) 断面図

- 二ノ丸空堀西側 A-A'
- 1 黒褐色土 攪乱を多量に含む層
 - 2 黒褐色土 締まりの無い粘性土 5~10mmの中部ロームブロック1%と2~3mmのスコリア1%を含む
 - 3 黒褐色土 締まりの無い粘性土 3~5mmのスコリア1%と5mmの炭化物を少量含む
 - 4 黒褐色土 締まりの無い粘性土 (泥炭層) 1~2mmのスコリア1%と2~3mmの炭化物を少量含む
 - 5 暗褐色土 締まりの無い粘性土 1~2mmのスコリアを少量含む
 - 6 暗褐色土 締まりの無い粘性土 1~2mmのスコリアを少量含む
 - 7 暗褐色土 締まりの無い粘性土 1mm以下のスコリア1%と5mmの炭化物を少量含む
 - 8 暗褐色土 締まりが無くやや粘性が有る粘性土 1~2mmのスコリアを少量含む
 - 9 暗褐色土 締まりが有りやや粘性が有る粘性土 1mm以下のスコリア1%と5mmの炭化物を少量含む
 - 10 暗褐色土 締まりが有りやや粘性が有る粘性土 スコリア等はほとんど含まない
 - 11 暗褐色土 締まりの無い粘性土 1~2mmの中部ロームブロック1%と1~2mmのスコリア1%を含む
 - 12 暗褐色土 締まりの無い粘性土 3~10mmの中部ロームブロック1%と1~2mmのスコリア3%を含む
 - 13 暗褐色土 締まりの無い粘性土 10~20mmの中部ロームブロック5%と1~2mmのスコリアを少量含む
 - 14 暗褐色土 締まりが無く粘性が強い粘性土 2~3mmのスコリア1%を含む
 - 15 暗褐色土 締まりが無く粘性が強い粘性土 炭化物を非常に多く含む層有り
 - 16 暗褐色土 締まりが無く粘性土 10~80mmの中部ロームブロック20%と10~15mmの炭化物を少量含む
 - 17 暗褐色土 締まりが無く粘性土 50mmの中部ロームブロック10%と20mmのスコリアを少量含む、80mmの礫有り
 - 18 暗褐色土 堅く締まった粘性土 1~2mmのスコリアを少量含む
 - 20' 黒褐色土 耕作土 攪乱が混じる
 - 3' 暗褐色土 中部ロームブロック主体の層 1~2mmのスコリアを少量含む
 - 4' 暗褐色土 攪乱 砕石混じりの層
- 二ノ丸空堀西側 B-B'
- 1 砕石層
 - 2 暗褐色土 締まりの無い砕石混じりの耕作土 中部ロームブロックを少量と1~2mmのスコリア1%を含む
 - 3 黒褐色土 締まりの無い粘性土 5~10mmの中部ロームブロックを少量と、1~2mmのスコリア1%、2~5mmの炭化物を少量含む
 - 4 暗褐色土 やや締まりの有る粘性土 10~20mmの中部ロームブロック5%と2~3mmのスコリア1%を含む
 - 5 黒褐色土 締まりが有る中部ロームブロックを主体とした粘土層 2~3mmのスコリアを少量含む
 - 6 黒褐色土 締まりの無い粘性土 攪乱・砕石が混じる
 - 7 黒褐色土 締まりの無い粘性土 2~3mmのスコリア1%を含み攪乱・砕石が混じる
 - 8 暗褐色土 やや締まりが有り粘性が有る粘性土 10~120mmの大型の中部ロームブロックを少量と5x20mmの炭化物の層を所々に含む
 - 9 暗褐色土 締まりの無い粘性土 (砕石混じりの耕作土) 5~10mmの中部ロームブロック1%と5mmの炭化物5%を少量含む
 - 10 黒褐色土 締まりの無い粘性土 5~20mmの中部ロームブロック5%と1~2mmのスコリアを少量含む
 - 11 黒褐色土 やや締まりの有る粘性土 10~50mmの中部ロームブロック10%と2~3mmのスコリア1%を含む
 - 12 暗褐色土 締まりの無い粘性土 攪乱が混じる

0 1:100 2m

第56図 二ノ丸空堀(西)内遺構 平面図(1)

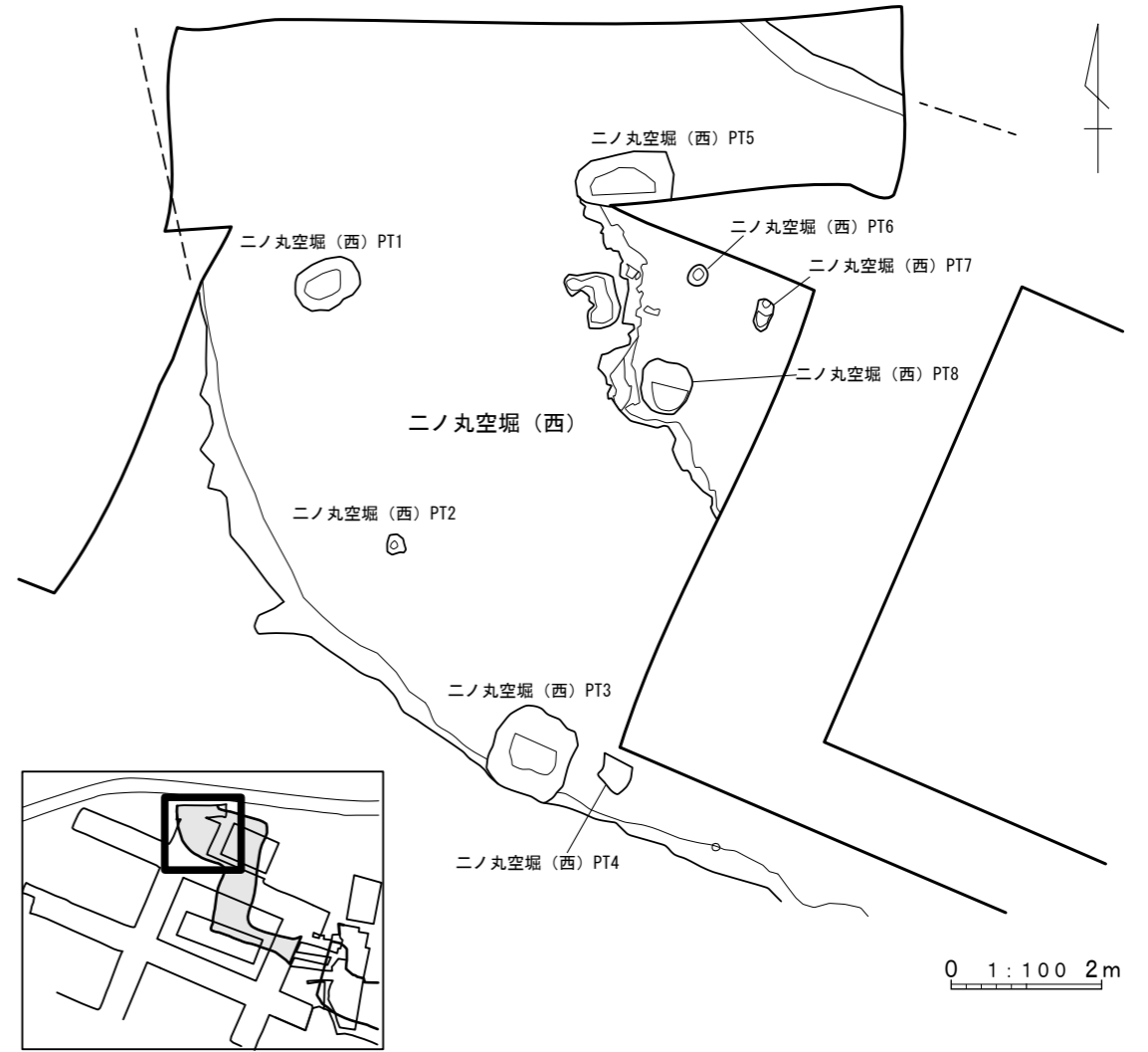
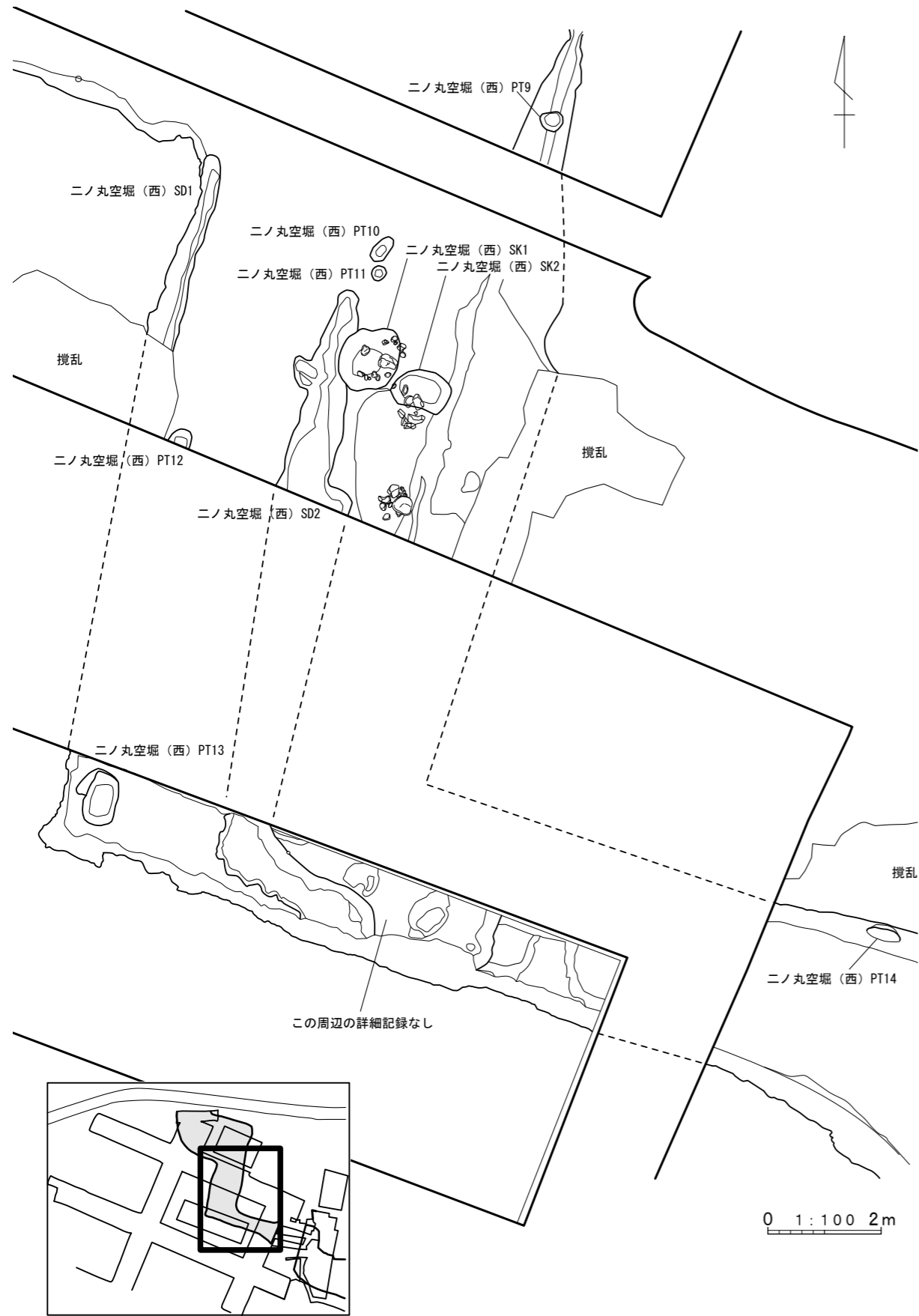


写真11 二ノ丸空堀(西) セクション



写真12 二ノ丸空堀(西) PT1周辺(北から)





第57図 ニノ丸空堀（西）内遺構 平面図（2）

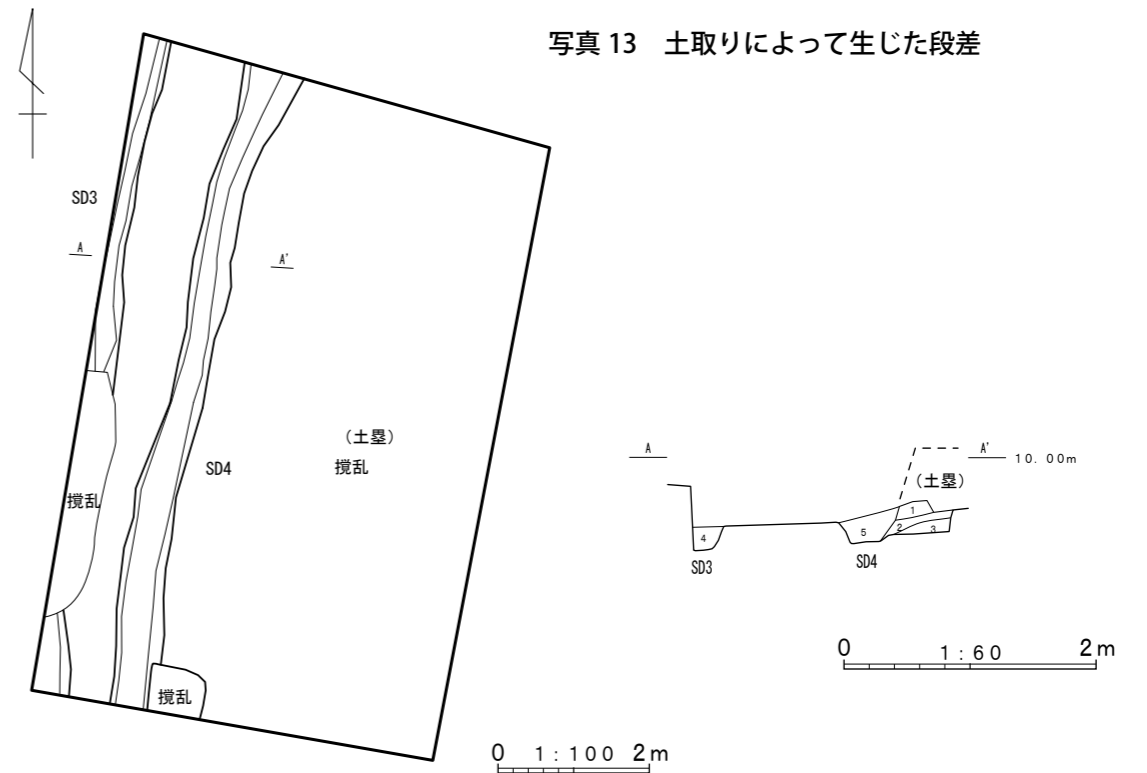
第6表 ニノ丸空堀（西）内遺構 計測表

遺構名	幅 (m)	深さ (m)	備考
PT1	0.65	0.177	
PT2	0.23	0.205	
PT3	1.03	0.946	
PT4	0.41	未完掘	
PT5	0.26	0.056	
PT6	0.23	0.185	
PT7	0.21	0.344	
PT8	0.70	0.108	
PT9	0.33	0.235	
PT10	0.25	0.072	
PT11	0.23	0.113	
PT12	0.37	0.158	
PT13	0.55	0.242	
PT14	0.62	0.196	

遺構名	幅 (m)	深さ (m)	備考
SK1	1.02	0.374	礫あり
SK2	0.66	0.078	礫あり
SD1	0.53	0.371	
SD2	1.34	0.12	



写真13 土取りによって生じた段差



ニノ丸虎口SD3・SD4 A-A'

- 1 青灰色土 締まりやや弱 粘性やや弱 中部ローム主体の層で上部ロームのスコリア土を20%含む
- 2 暗赤灰色土 締まり強 粘性やや弱 SD4の東肩でφ2~3mmの黄色ロームブロックを3%含む
- 3 褐灰色土 締まり強 粘性やや強 中部ロームブロックと上部ロームスコリア土を50%ずつ含む
- 4 褐色土 締まりやや弱 粘性やや強 SD3の覆土 中部ロームブロック主体
- 5 褐色土 締まりやや弱 粘性やや強 SD4の覆土 中部ロームブロック主体

第58図 ニノ丸虎口 SD3・SD4 平・断面図

(3) 二の丸虎口土橋 (第59図)

二ノ丸虎口では、石積によって補強された土橋が検出された。石積は4列が並び、石積1と石積2が西に面を向け、石積3と石積4は東に面を向いている。さらに石積4の東側では石垣が検出された。興国寺城跡において石垣は伝天守台下と本地点の2箇所しか認められない。

石積1・石積2・石積3・石積4 (第59・60図)

土橋は堀の中に客土を版築状に充填し、その側面に石積を積んで補強されている。土橋西側面において検出した石積2は、人頭大の礫が5段ほど堀底から積まれ、また裏込めにも同程度の礫があり、検出された全長は9.3m、幅は最大1.2m、高さは最大0.9mを測る。その外側(西側)にて検出した石積1は、石積2の前面に構築されているが、石積2の外側に存在した空堀を0.5m埋め、さらに側面を黒色土で固めて台形に整えた上で、その造成土上に約3段で積まれている。したがって根石や石積の天端の高さは、石積2よりも上部にある。石積1の検出された全長は4.7m、石積の幅は0.8mと、石積2の方が広く、より強固である。

土橋東側に認められる石積3と石積4も石積1・2と同じく、より内側の石積3は空堀の堀底である地山直上から積まれているが、石積4は石積3の前面に充填された黒色土の上に積まれている。石積3の全長は9.0m、石積4の全長は10.2mで、石積の幅は西側と同じく石積3の方が広い。

以上のことから、平面上は4列の石積が並行するように見えるが、積み始めの高さを単位とした場合、石積2・石積3によって両側を補強された「土橋1」から、石積2・3の外側を埋めた後に黒色土を積んでから構築した石積1・石積4による「土橋2」への変遷があったと考えられる。「土橋1」の土橋の幅は石積2・石積3の間で5.4mを測り、幅が広がる「土橋2」では幅は7.2mである(第61図)。

「土橋1段階」では石積の内部より大窯4段階、古く見ても大窯3段階後半に位置づけられる瀬戸美濃播鉢(第Ⅳ章 遺物番号501)が出土している。このことから「土橋1」の構築年代は16世紀末以降である。なお、本遺構については出土した炭化物にて自然科学分析を実施している(第Ⅴ章)。

石垣 (第62・63図)

石積4の東側にて検出した。二ノ丸空堀(東)の西端において南面と西面のみ積まれており、上面の延長は10.7m、下面は9.6m、高さは最大2.0mである。石垣の積み始めは中部ローム層を基盤としており、胴木は確認されず、根石には大小様々な大きさの礫が使用されている。立ち上がりの角度は西面が約65～75度、南面が約75度を測る。明確な矢穴の痕跡は認められない。

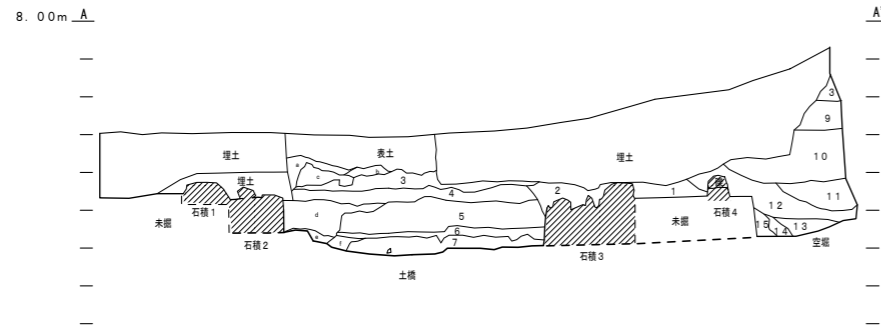
使用されている石は最大で幅が50cmほどある大形の安山岩系の礫から拳大程度の小さい礫を組み合わせられており、積み方はいわゆる野面積みで、奥行0.5m程度の裏込め石が充填されている。堀の北面には石垣は検出されていないが、三段の階段状に中部ローム層が削り込まれている。南面は西面よりも残存状況は悪く、特に南東隅(土層観察ベルトより東側)は大きく崩れている。したがって、第63図の立面図は土層観察用ベルトより西側のみを対象とした。

石垣に補強される土橋は「土橋1・2」と比べて軸がやや東にずれているが、土橋2の石積を利用して土橋を東側に拡幅している。これを「土橋3」とする。しかし「土橋3」の対となる土橋西側の様相は明らかではなく、石積1より西側に石垣は検出されていない。今回検出した土橋東側も堀全面に石垣が施されているわけではなく、平成2年度に実施した試掘調査箇所(H2TRE)では石垣の検出はない。そのため、土橋東側からH2TREまでの間の、長くても15m程度にしか石垣は施されなかったと考えられる。

出土遺物には堀底から大窯4段階の瀬戸美濃播鉢(遺物番号506)が出土している(写真18・19)。「土橋1」の構築年代が大窯3段階後半から第4段階であることを考慮すると、二度に渡る土橋の改修は、16世紀末～17世紀初頭(興国寺城の廃城は1607年)という短期間で行われたと判断される。

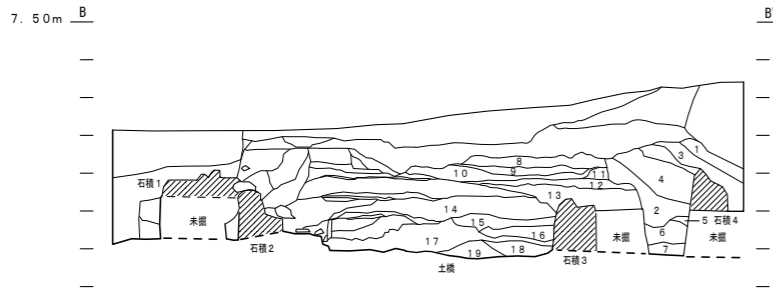


第59図 二ノ丸虎口 土橋付近平面図



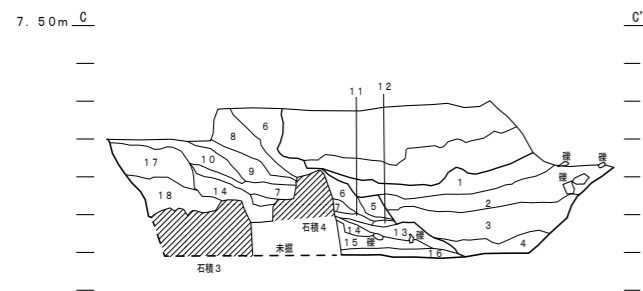
二ノ丸虎口土橋A-A'

- | | | | |
|--------|-----------------------------|---------|------------------------------|
| 1 暗灰色土 | φ 1~3mm大のロームブロック 1%を含む | 9 灰褐色土 | ロームブロック主体で3~9層同じ土が若干含まれる |
| 2 黒褐色土 | φ 1cm以下のローム粒 5%を含む | 10 灰褐色土 | ロームブロック主体層 |
| 3 褐色土 | ロームブロック主体 | 11 黒褐色土 | φ 3cm以下のロームブロック 3%を含む |
| 4 黒褐色土 | 粒子の異なる砂質土互層 | 12 黒褐色土 | 締まりが無い砂質土で、φ 1cm大のローム粒 1%を含む |
| 5 黒褐色土 | 砂質土と粘土層の互層 | 13 黒褐色土 | φ 1cm大ローム粒を若干含む砂質土で鉄分層を含む |
| 6 黒褐色土 | 粘土層主体で砂質土を一部はさみ鉄分層を含む | 14 黒褐色土 | 砂質で鉄分の為か締まっている |
| 7 黒褐色土 | ローム主体で粘質化している | 15 黒褐色土 | 砂質混じり土でφ 1cm大のロームブロック 1%を含む |
| 8 黒褐色土 | 締まりが無くφ 5cm以下のロームブロック 1%を含む | | |



二ノ丸虎口土橋B-B'

- | | | | |
|---------|------------------------------|---------|-------------------------------------------|
| 1 黒褐色土 | 締まりが無い砂質土で、φ 1cm大のローム粒 1%を含む | 11 暗灰色土 | 緻密 |
| 2 暗灰色土 | φ 1~3cm大のロームブロック 1%を含む | 12 黒褐色土 | 砂質土でφ 1cm以下のローム粒 5%を含む |
| 3 黒褐色土 | φ 1~3cm大のロームブロック 1%を含む | 13 褐色土 | φ 1cm以下のローム粒 5% |
| 4 褐色土 | φ 1~5cm大ロームブロック 15%を含む | 14 褐色土 | 砂質土でφ 3cm以下のロームブロック 1%を含み鉄分層をはさみ互層状になっている |
| 5 黒褐色土 | 粘質土 | 15 黒褐色土 | |
| 6 黒褐色土 | 粘質土でφ 3cm大のロームブロック 1%を含む | 16 黒褐色土 | |
| 7 黒褐色土 | 粘質土で2~3層よりやや明るい | 17 黒褐色土 | |
| 8 黒褐色土 | φ 3cm以下ロームブロック 10%を含む | 18 黒褐色土 | |
| 9 暗赤灰色土 | 砂質土でφ 1cm以下のローム粒 5%を含む | 19 黒褐色土 | |
| 10 黒褐色土 | φ 2cm以下のロームブロック 10%を含む | | |



二ノ丸虎口土橋C-C'

- | | | | |
|---------|------------------------|---------|--------------------------|
| 1 黒褐色土 | 黒色土 ロームブロック混じり | 10 黒褐色土 | 暗黄褐色土・黒色土互層 |
| 2 黒褐色土 | φ 5cm大ロームブロック 30% | 11 黒褐色土 | 粘質土 |
| 3 暗赤灰色土 | φ 3~10cm大ロームブロック 5% | 12 黒褐色土 | 褐色・暗褐色互層 |
| 4 黒褐色土 | φ 3~10cm大ロームブロック 30% | 13 黒褐色土 | 粘質土 |
| 5 黒褐色土 | 褐色土・暗褐色土互層 | 14 黒色土 | φ 1~10cm大ロームブロック含む 15% |
| 6 黒褐色土 | φ 1cm大ローム粒 1%砂質土 締まりなし | 15 黒褐色土 | φ 3cm大ロームブロック含む 1% 粘質土 7 |
| 7 黒色土 | φ 1~3cm大ロームブロック含む 1% | 16 黒褐色土 | 粘質土 15よりやや明るい |
| 8 黒褐色土 | φ 1~3cm大ロームブロック 1% | 17 黒褐色土 | 黒色土・褐色土・ロームブロックの互層 |
| 9 褐色土 | φ 1~5cm大ロームブロック 15% | 18 灰褐色土 | ローム主体 |

0 1:100 2m

第60図 二ノ丸虎口 土橋 断面図

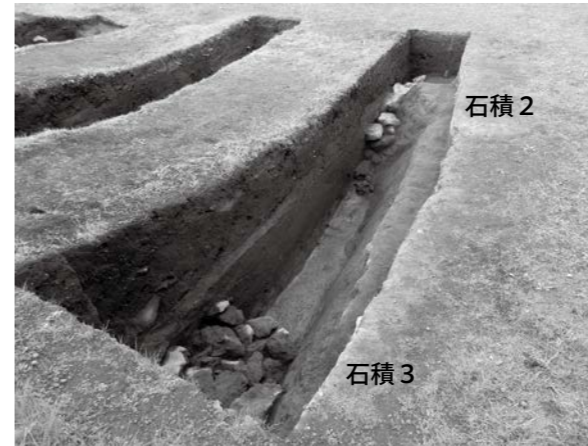


写真14 二ノ丸虎口 土橋1 (A-A'セクション)

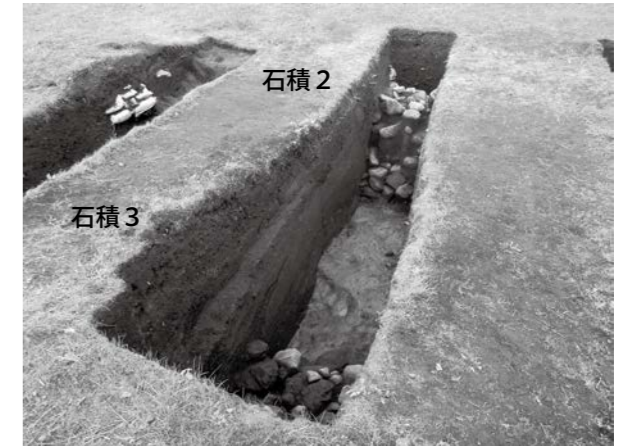


写真15 二ノ丸虎口 土橋1 (B-B'セクション)



写真16 二ノ丸虎口 石積1・2

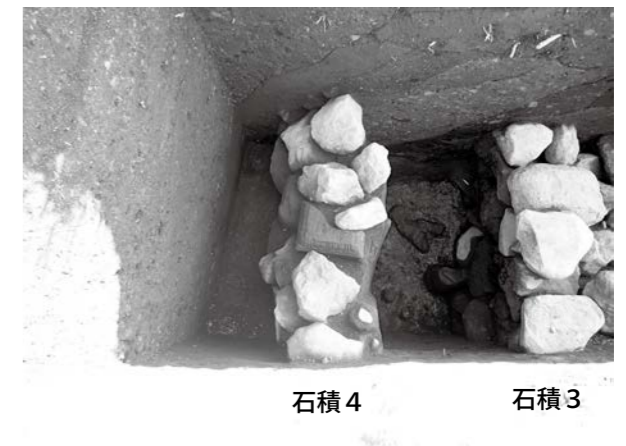
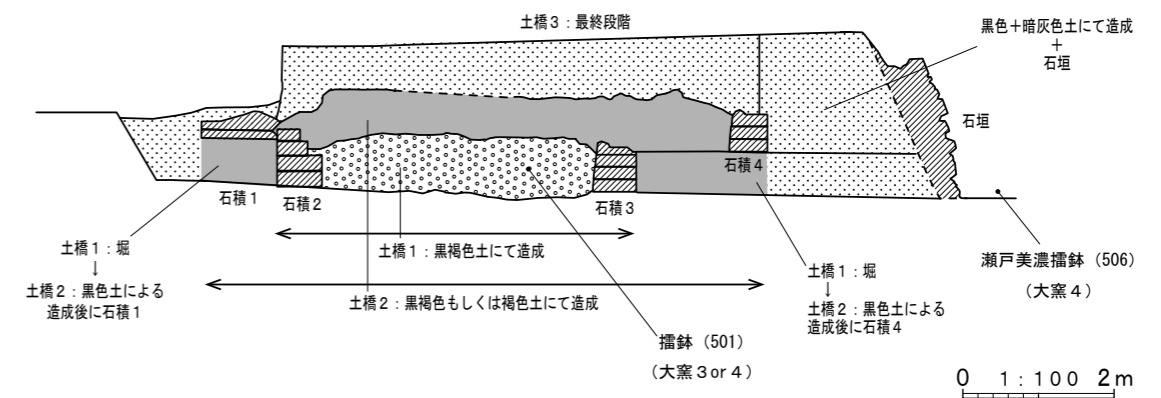
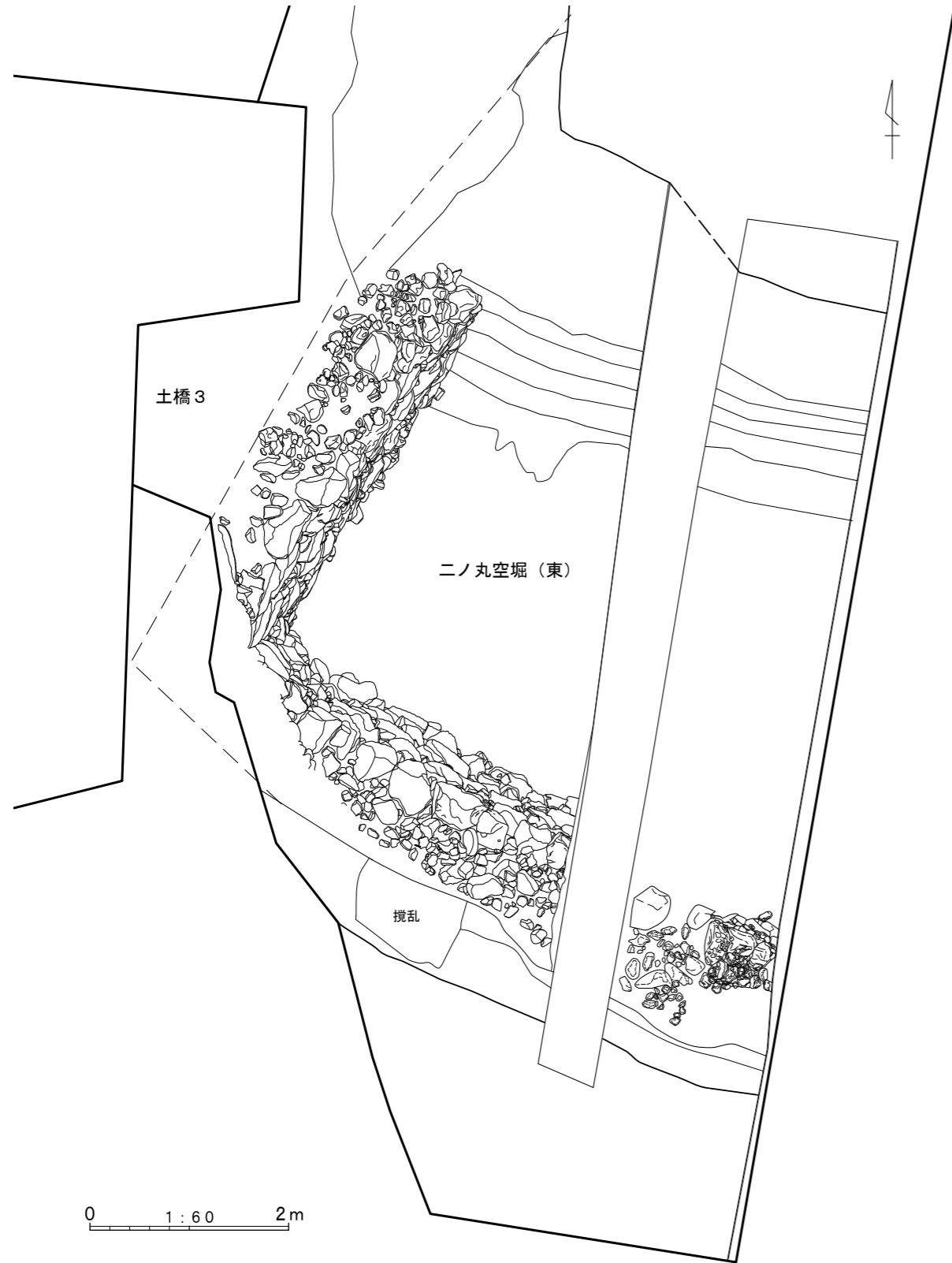


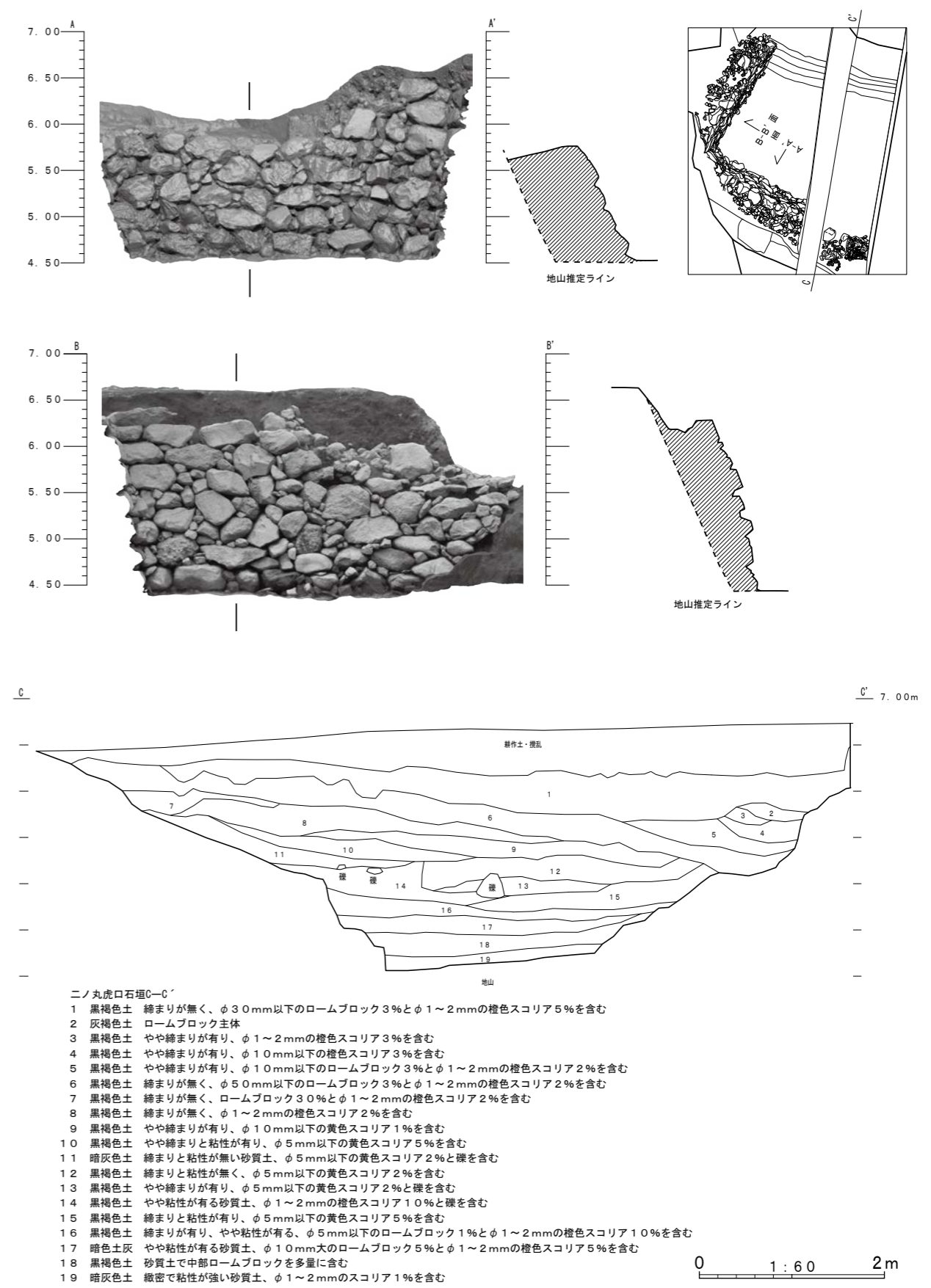
写真17 二ノ丸虎口 石積3・4 石塔転用



第61図 遺物出土位置図と土橋の変遷概念図



第62図 二ノ丸虎口 石垣 平面図



第63図 二ノ丸虎口 石垣 立面・エレベーション図

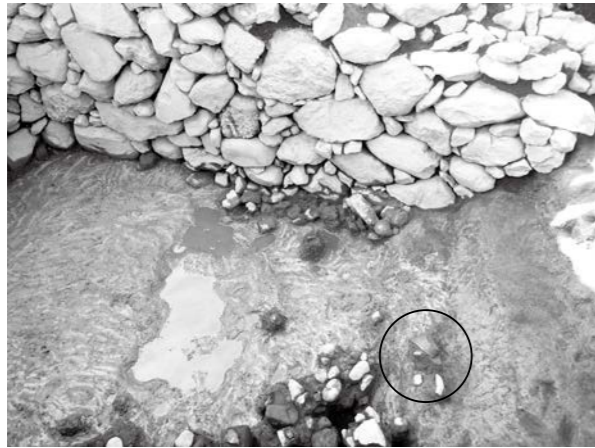


写真 18 二ノ丸虎口 堀底遺物出土状況（遠景）



写真 19 堀底遺物出土状況（遺物番号 506）

（4）二ノ丸空堀（東）（第 64・65 図）

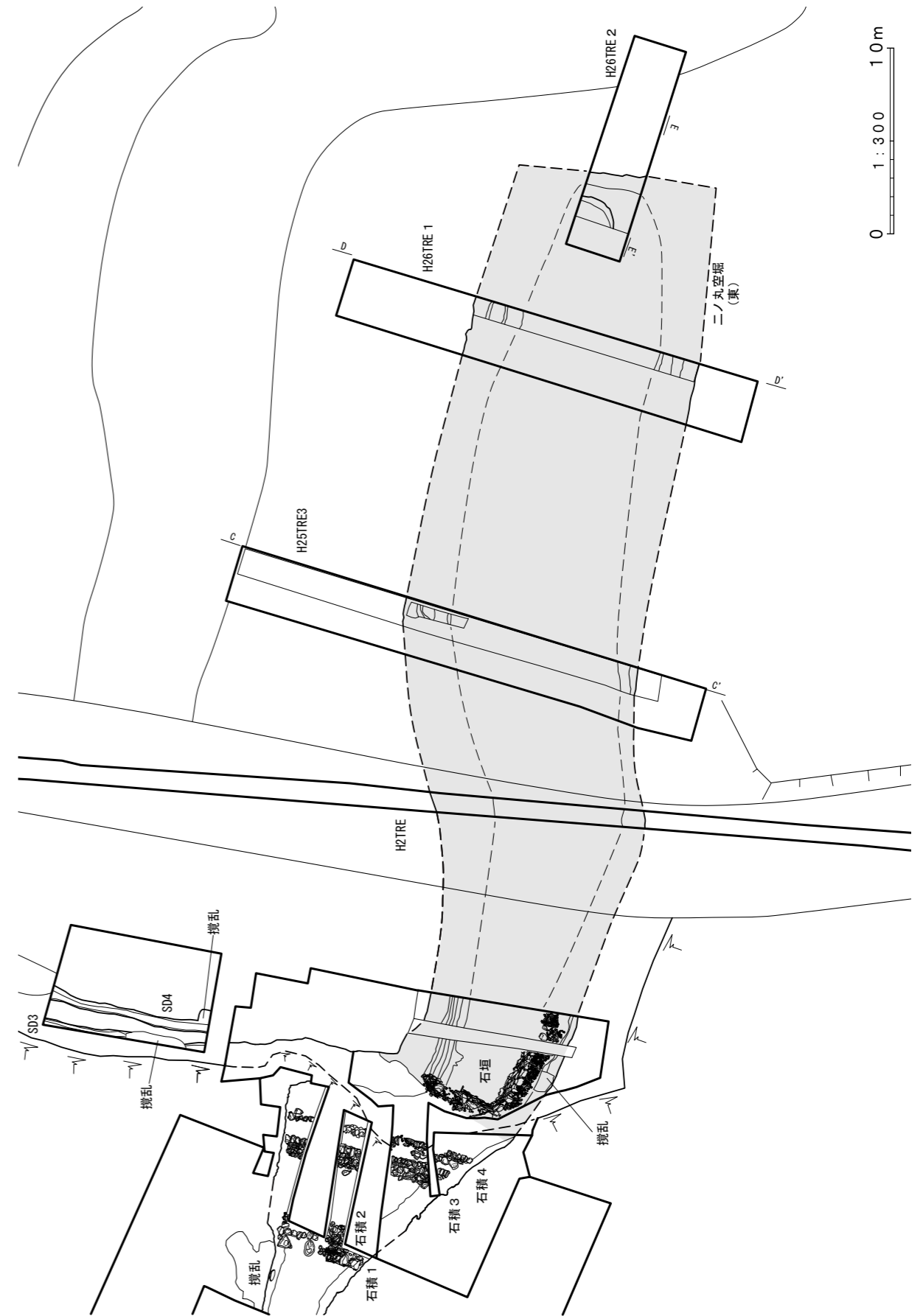
石垣よりも東側は、物流倉庫となっていたため、上面は大きく削平されており、検出された遺構は二ノ丸空堀（東）だけであった。絵図と比較すると、空堀の北側には土塁が存在していたはずであるが、H25TRE3 の北側において土塁の基部となる可能性を持つ均質土が検出されたのみで、これ以外に明確な痕跡は確認できていない。

二ノ丸空堀（東）は、西端に前述の石垣が伴っているものの、この他には石積や石垣は検出されず、中部ローム層を掘り込んだ素掘りの堀である。堀幅は H25TRE3 や H26TRE1 では、12 m～13 m であるが、西側は H2TRE あたりから狭まり、東端は H26TRE2 で収束する。この形状は「城築規範」や「根古屋村絵図」などの絵図にも描かれている。さらに「根古屋村絵図」には、二ノ丸空堀（東）が、廃城後も堀の形状をとどめたまま、畑として利用されていたことが記されている。

堀底については平坦であり、幅は約 6.9 m、H25TRE3 で約 9.3 m、H26TRE1 で約 7.5 m を測ることから空堀の上端と同じく、東西両端に向かって狭くなる状況が認められる。なお、堀底からの立ち上がりについては、三ノ丸側（南側）より土塁側（北側）がやや急傾斜となっており、このことは防衛的な効果を示唆しているものと考えられる。

空堀の深さは H25TRE3 において検出面から 1.5 m を測る。堀底の標高は約 5.7 m で、石垣部分の堀底は 2.2 m であり、H26TRE2 の堀底は 3.7 m である。このことから二ノ丸空堀（東）は中央付近が高く、東西両側に傾斜している。

H26TRE2 の堀底にはロームブロックを含む締まりのない砂質土層とスコリア主体層が堆積している。これが人為的か自然堆積であるかは判断がつかないが、北側から東側に存在した土塁の構築土が混入したと考えられる。したがって堀の下部は近接する北側の土塁の構築土によって埋まり、その上層（第 65 図 E-E' セクション 7 層以上）には締まりがない炭化物を含んだ砂質土によって埋まっていることから、上層については「根古屋村絵図」に記されている畑の土と想定できる。



第 64 図 二ノ丸虎口東側 全体図



写真 20 H25TRE1 北端部土層セクション



写真 21 H25TRE1 空堀 北肩部 土層堆積



写真 22 H25TRE1 空堀 南肩部 土層堆積



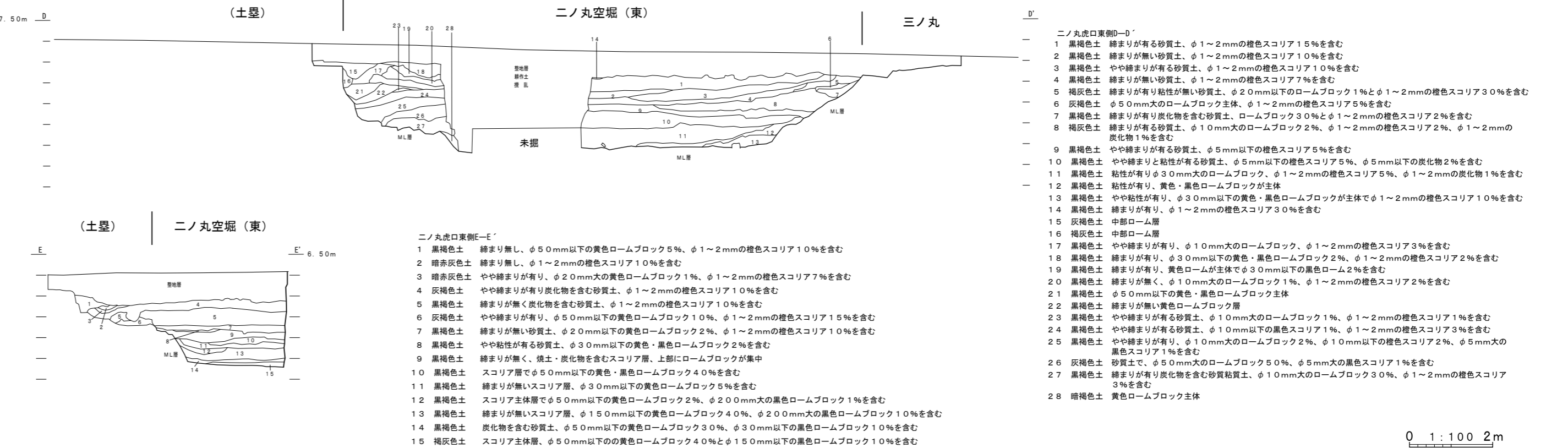
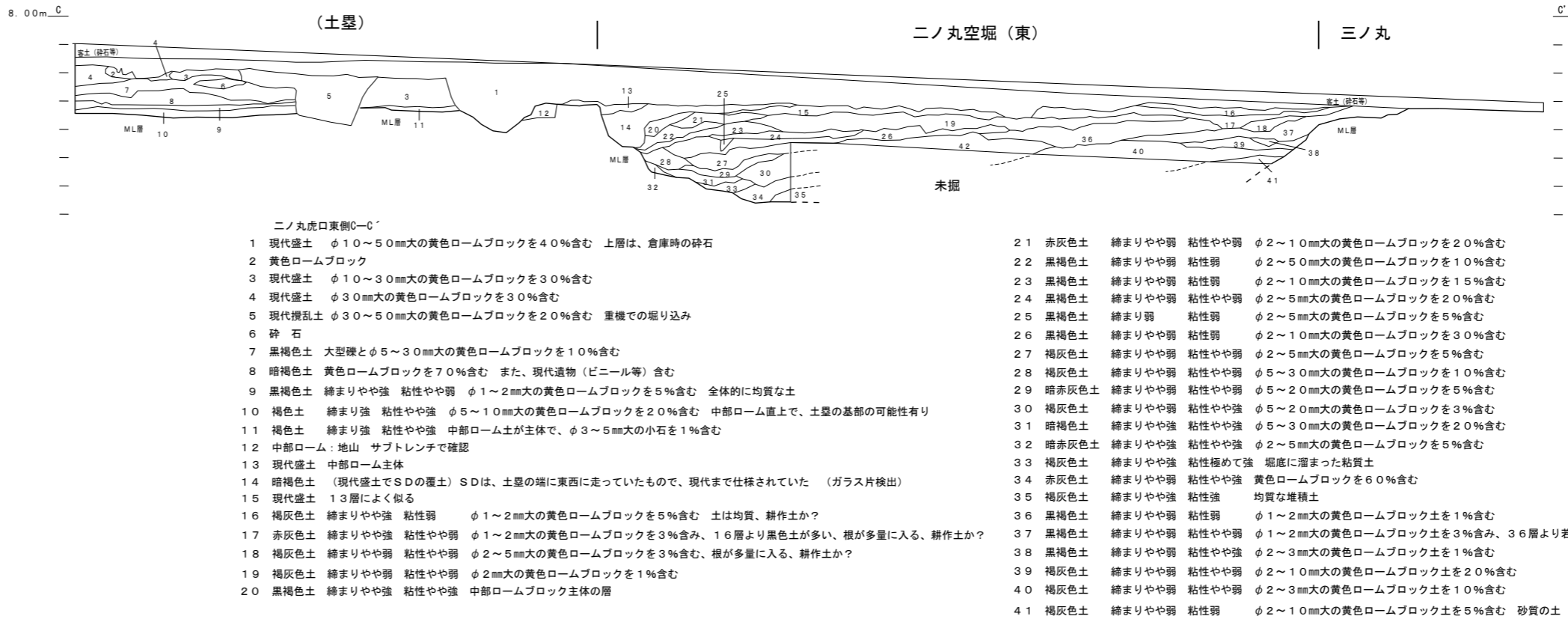
写真 23 H26TRE1 空堀



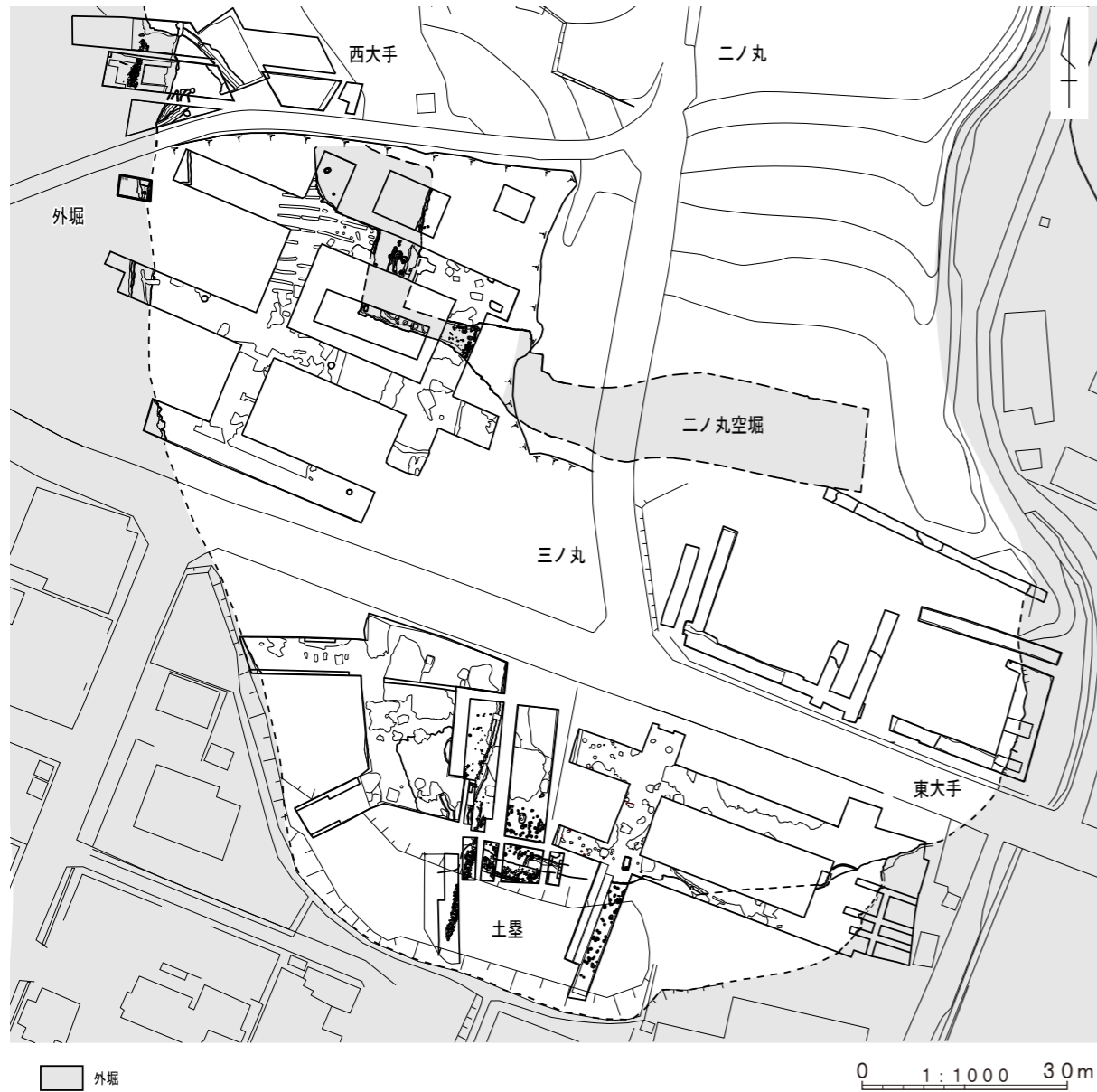
写真 24 H26TRE2 堀底堆積 (北から)



写真 25 H26TRE2 堀底堆積 (北東から)



第 65 図 ニノ丸虎口東側 断面図



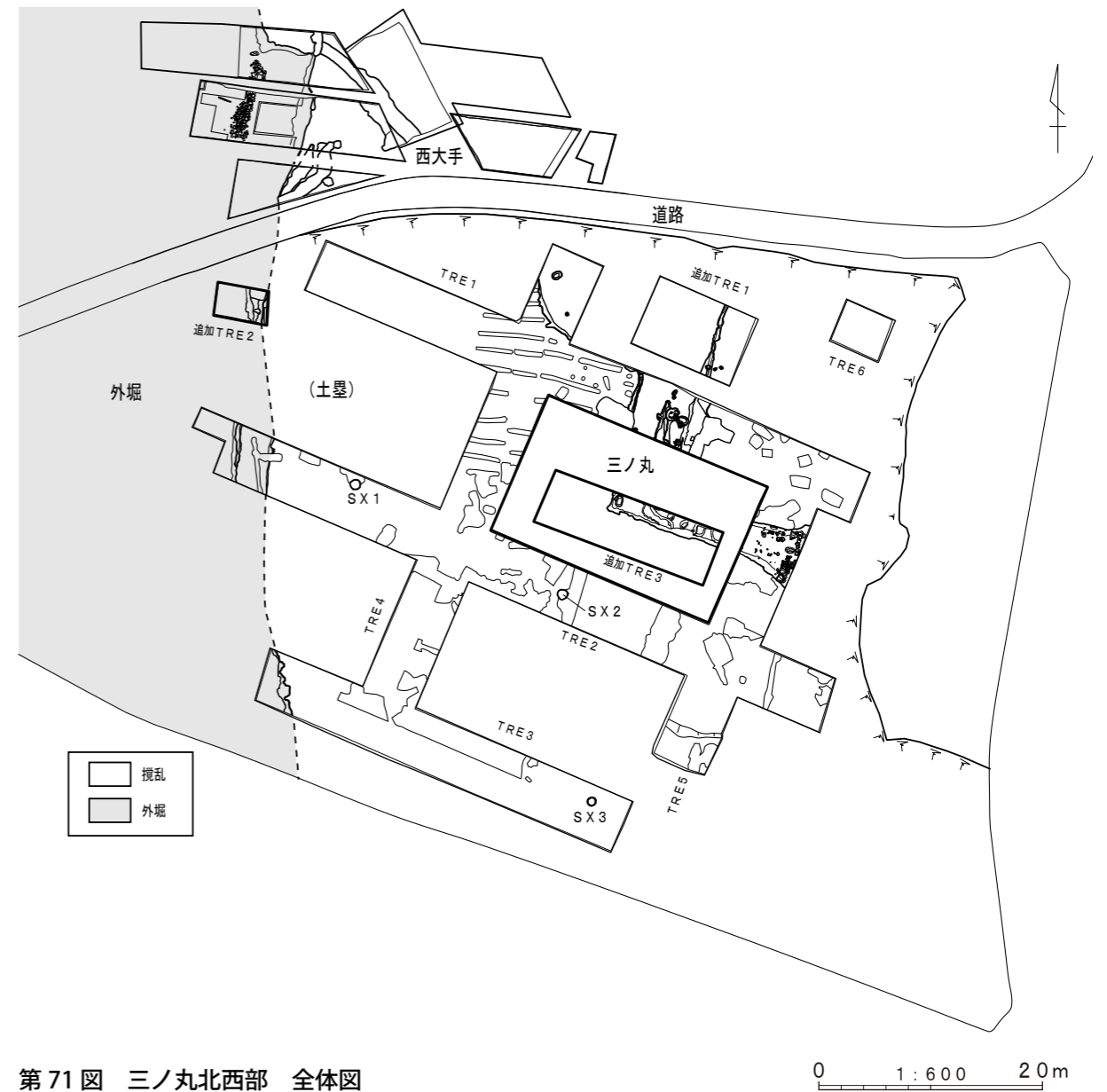
第70図 三ノ丸・外堀 全体図

西部にのみ残存しているが、これも近隣のグラウンド建設に伴って上部は土取りされてしまい、基部のみの残存である。

三ノ丸及び外堀の調査は、平成21年度には西外堀を、平成22年度には三ノ丸北西部と南西・南東部、東外堀などにトレンチを設定して、遺構の分布把握に努めた。平成23年度には前年度までの成果を元に、遺構が集中する箇所に面的に調査区を広げて、個々の遺構の詳細について調査を行った。また南西部に残存する土塁にトレンチを入れることで、基部構造の解明を試みた。平成24年度は、前年度に完了できなかった西大手のSD3の追加調査を行い、平成27・28年度には二ノ丸虎口の調査と併行して、三ノ丸北東部のトレンチ調査を行った(第68・70図)。

(2) 三ノ丸北西部(第71図)

三ノ丸北西部の調査は西大手地点を除いて、平成22年度に実施している。前節において記載したように、本地点は大きく土取りされて、当時の生活面が残されていないことから、深く掘り込まれている二ノ丸空堀(西)の調査が中心となった。ただし二ノ丸空堀(西)については前節に記したため、ここ



第71図 三ノ丸北西部 全体図

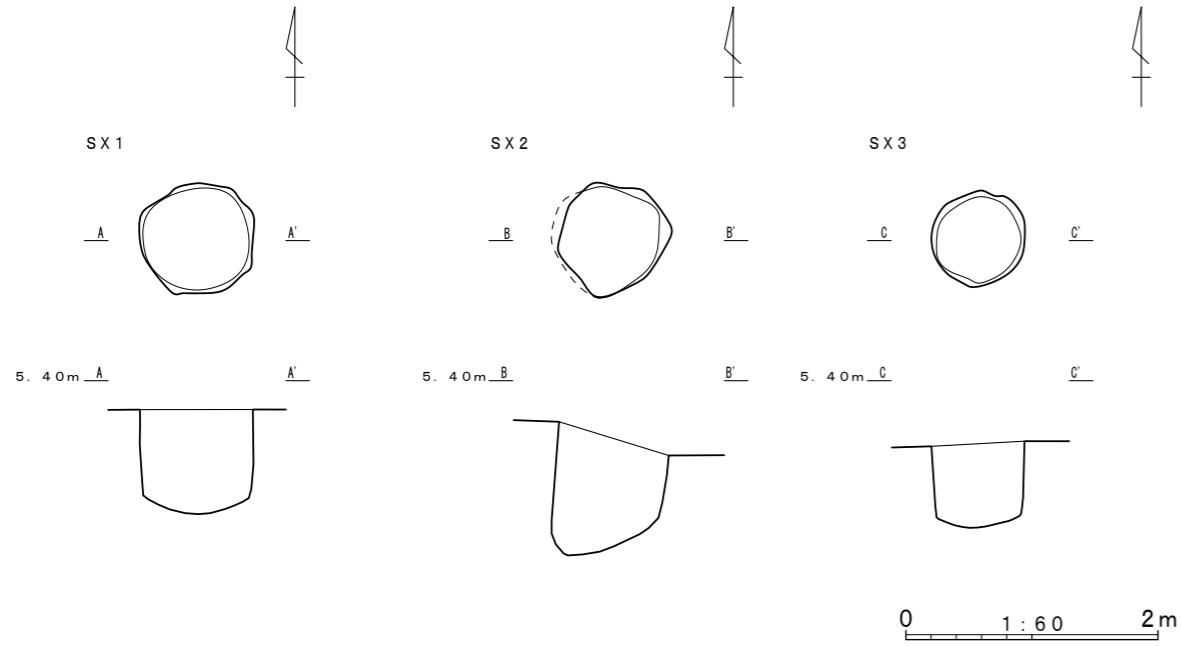
では空堀以外の遺構、すなわち3基の不明遺構と外堀について報告する。

1号不明遺構・2号不明遺構・3号不明遺構(SX1・SX2・SX3 第67図)

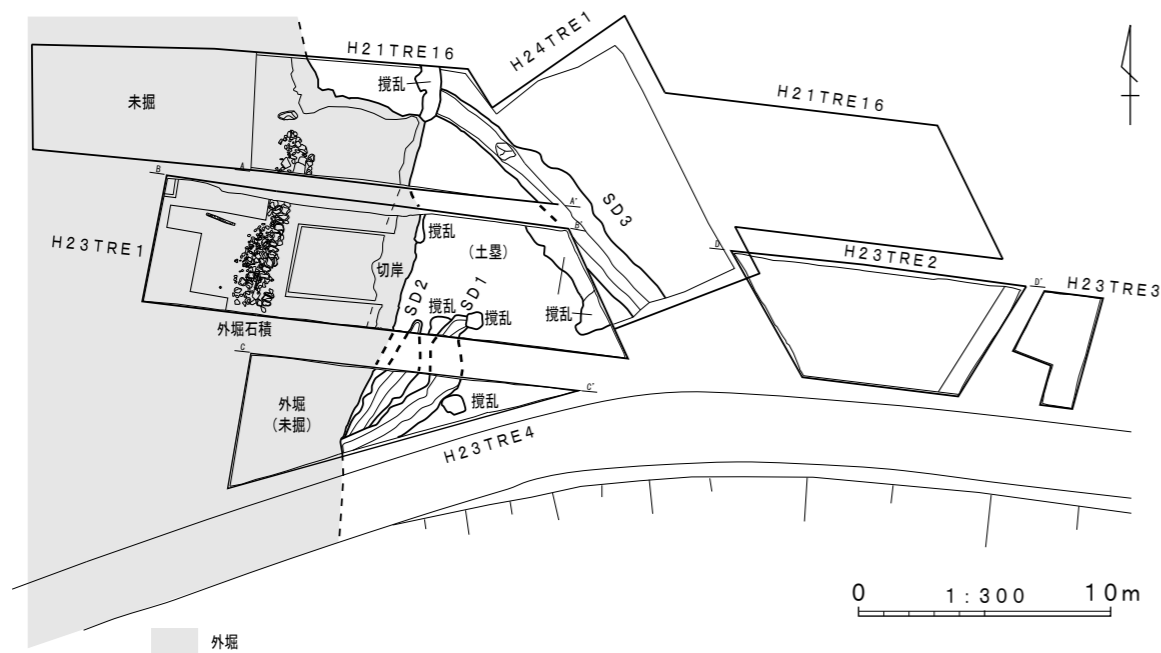
いずれも上部が土取りにあっていることから、下部のみの検出である。当初井戸と想定されたが、湧水はない。SX1は幅0.9m、深さ0.9m、ややいびつな円形で、垂直に掘り込まれて、底面は皿形である。検出された位置は、現在は失われた土塁と重複している。SX2はSX1よりもより平面形はいびつな形状で、底面は西側にオーバーハングしている。幅は0.9m、深さは1.0mである。SX3は3基の中では最も円形に近く、掘り方も垂直で底面は比較的平坦である。幅は0.7m、深さは0.7mを測る。いずれのSXからも遺物の出土はなく、城郭段階のものであるかの判断は困難である。

西外堀(第71図)

絵図では「此堀フチ事ノ外足入」とある地点で、西大手地点では堀底までを確認しているが、西大手より南側では堀の東側の落ち込みをTRE2・TRE3・追加TRE2の3箇所を平面的に確認したのみである。なお、西側の立ち上がりまでは確認をしていない。



第72図 三ノ丸 SX1・SX2・SX3 平・断面図



第73図 三ノ丸西大手 全体図

(3) 三ノ丸西大手 (第73～75図)

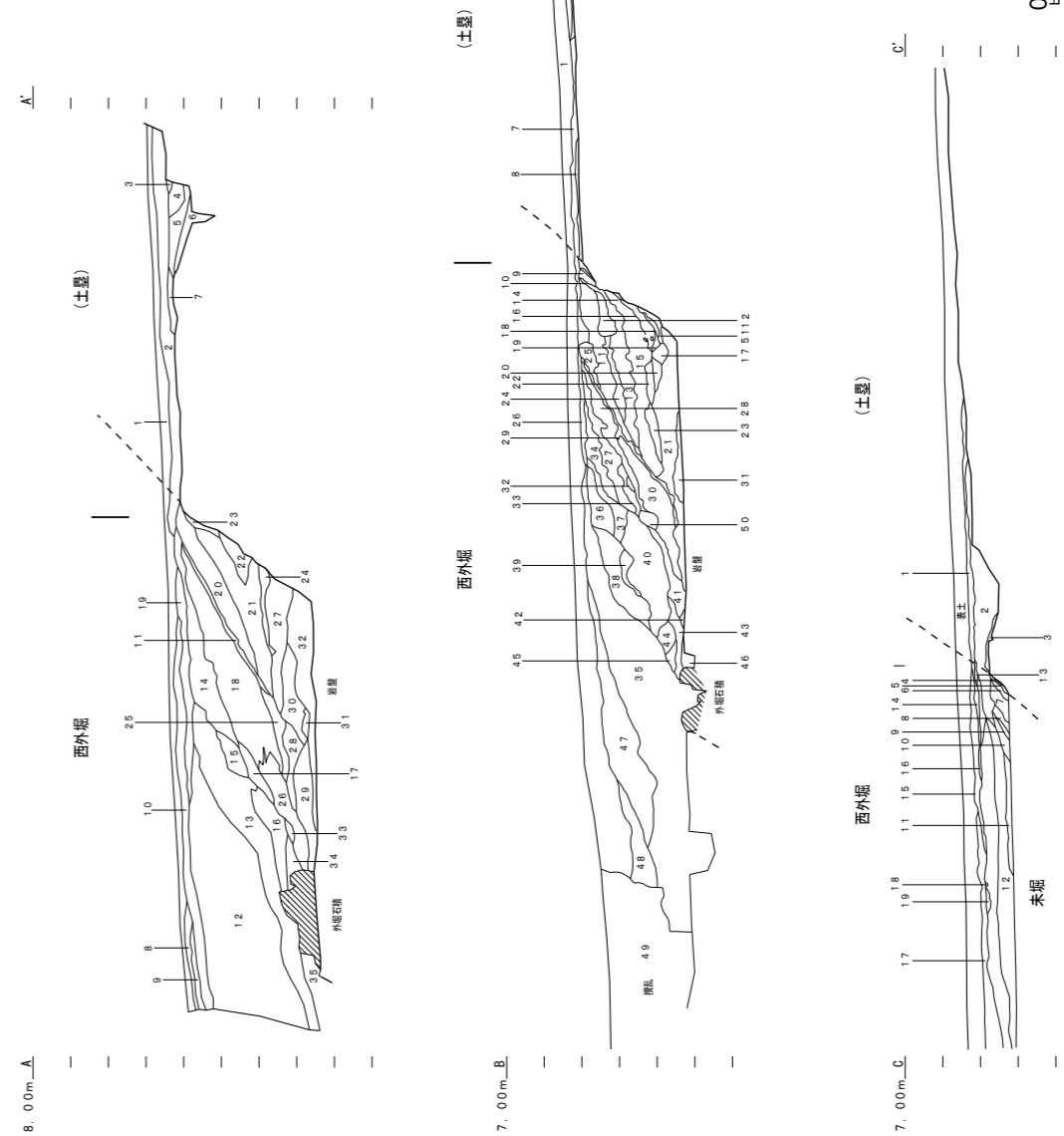
西大手の調査は平成21・23・24年度に実施した。平成21年度では外堀において石積が確認されたため、平成23年度の調査(H23TRE1)では調査区を面的に広げて、石積の構造把握に努めた。平成24年度は、平成22年度の調査において二ノ丸空堀が外堀に向かっていることが判明していたため、二ノ丸空堀と外堀との接続部の調査を行った。西大手において検出された遺構は、前述の西外堀、外堀石積のほか、溝が3条(SD1～3)である。

西外堀・外堀石積 (第73～76図)

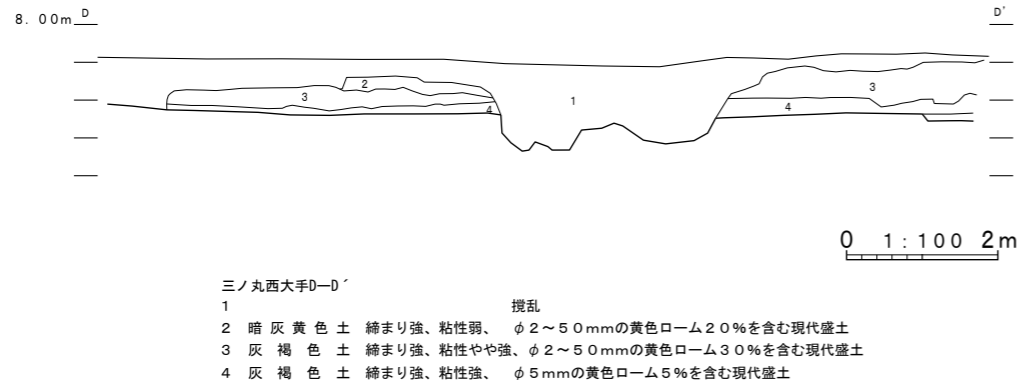
外堀は岩盤層を削り込んで構築されている。角度は55度を測り、H23TRE1では検出面より深さ1.3mの地点で岩盤を平坦に削って面を作り、その西側には石積が構築されている。石積より西側は再度下



写真26 H23TRE1 北側セクション (南から)



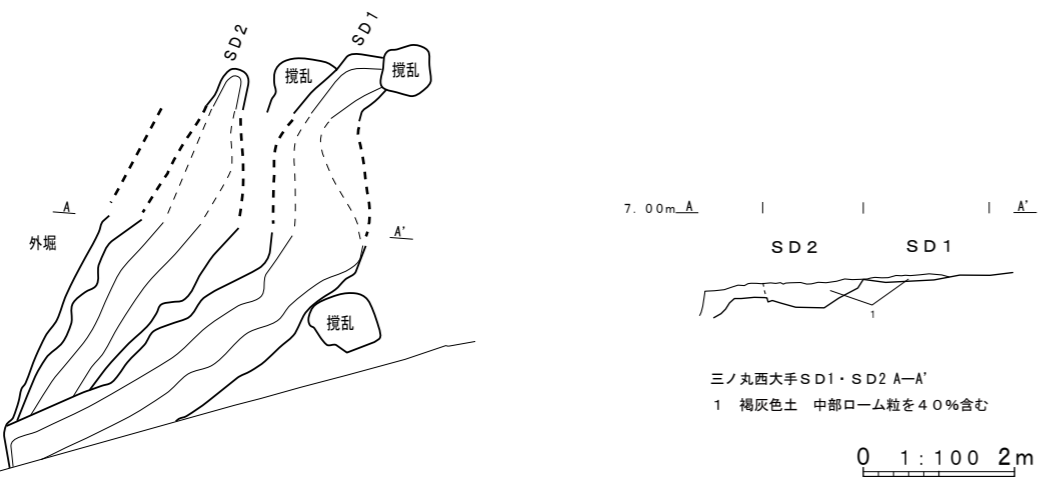
第74図 三ノ丸西大手周辺 断面図(1)



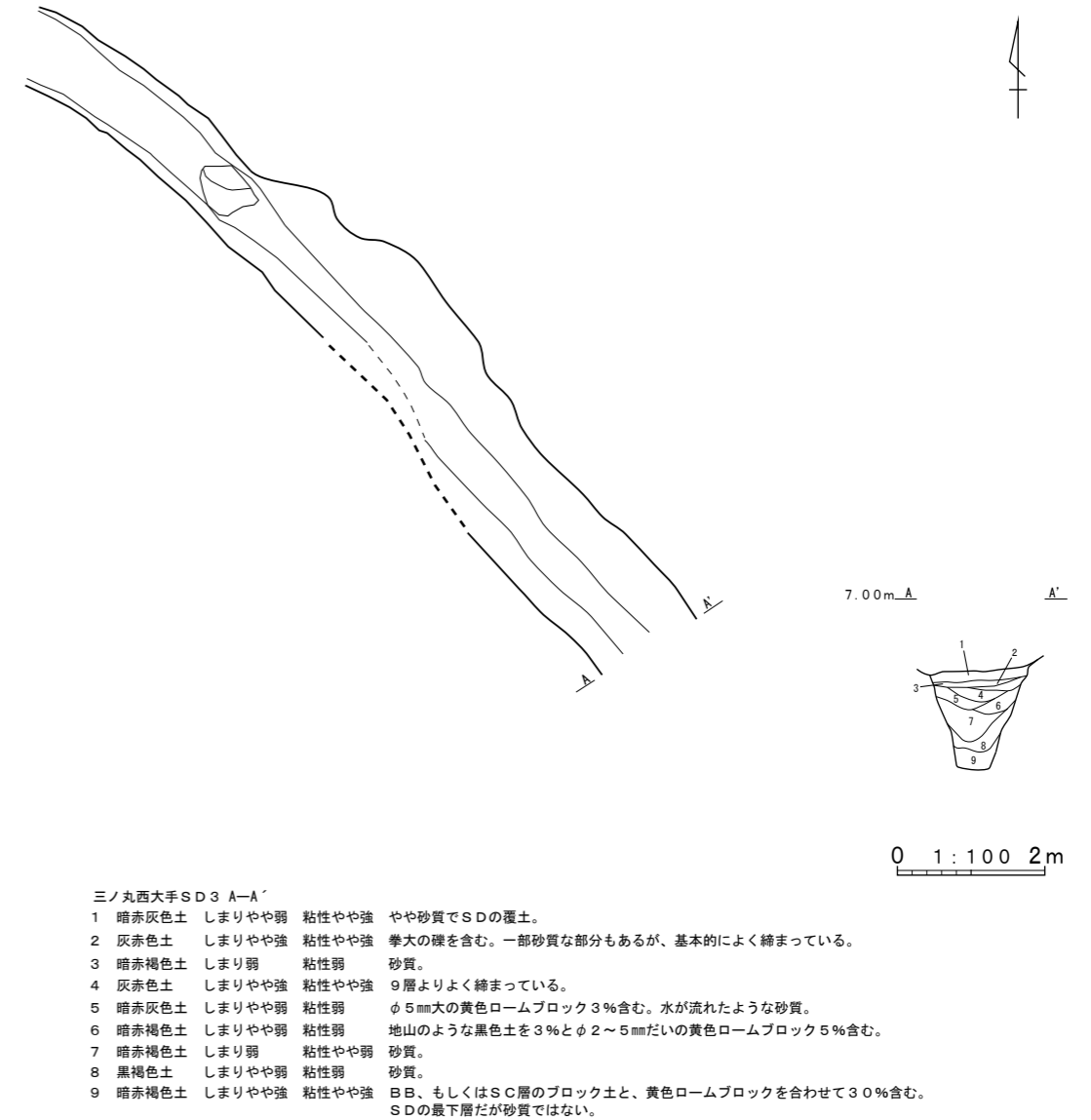
第75図 三ノ丸西大手周辺 断面図(2)



第76図 三ノ丸西大手外堀石積 平・断面図



第77図 三ノ丸西大手 SD1・SD2 平・断面図



第78図 三ノ丸西大手 SD3 平・断面図

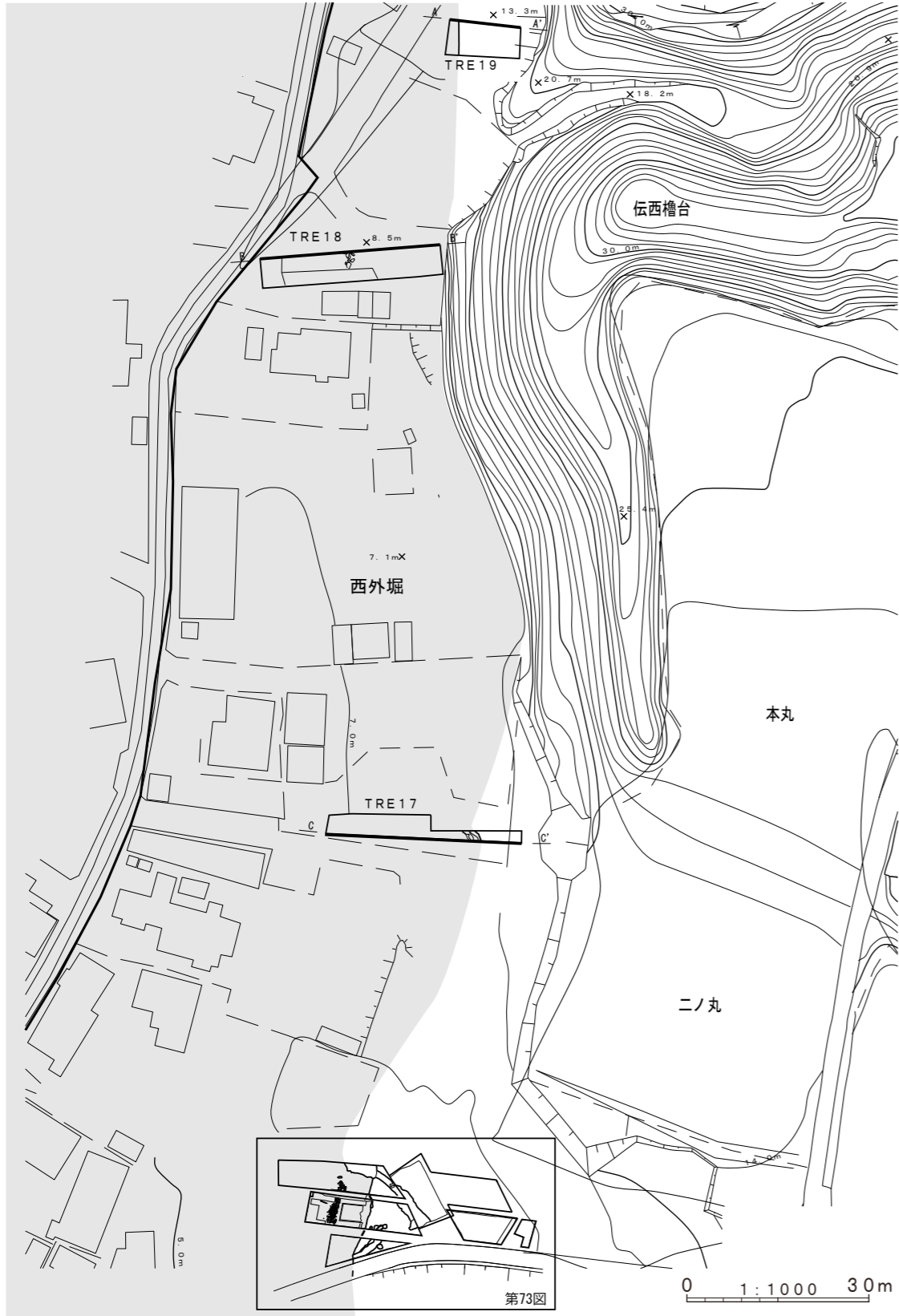
年度に実施し、その設定位置は、西大手口を南端とした第79図に示した。トレンチ名については、平成21年度に使用したTRE17~TRE19をそのまま用いる。また平成23年度には指定地南西端において、通称「竹田道」と呼ばれる南北道路があるため、城郭に関する遺構の有無を確認する目的でH23-Fトレンチを設定した。

TRE17・TRE18・TRE19 (第80図)

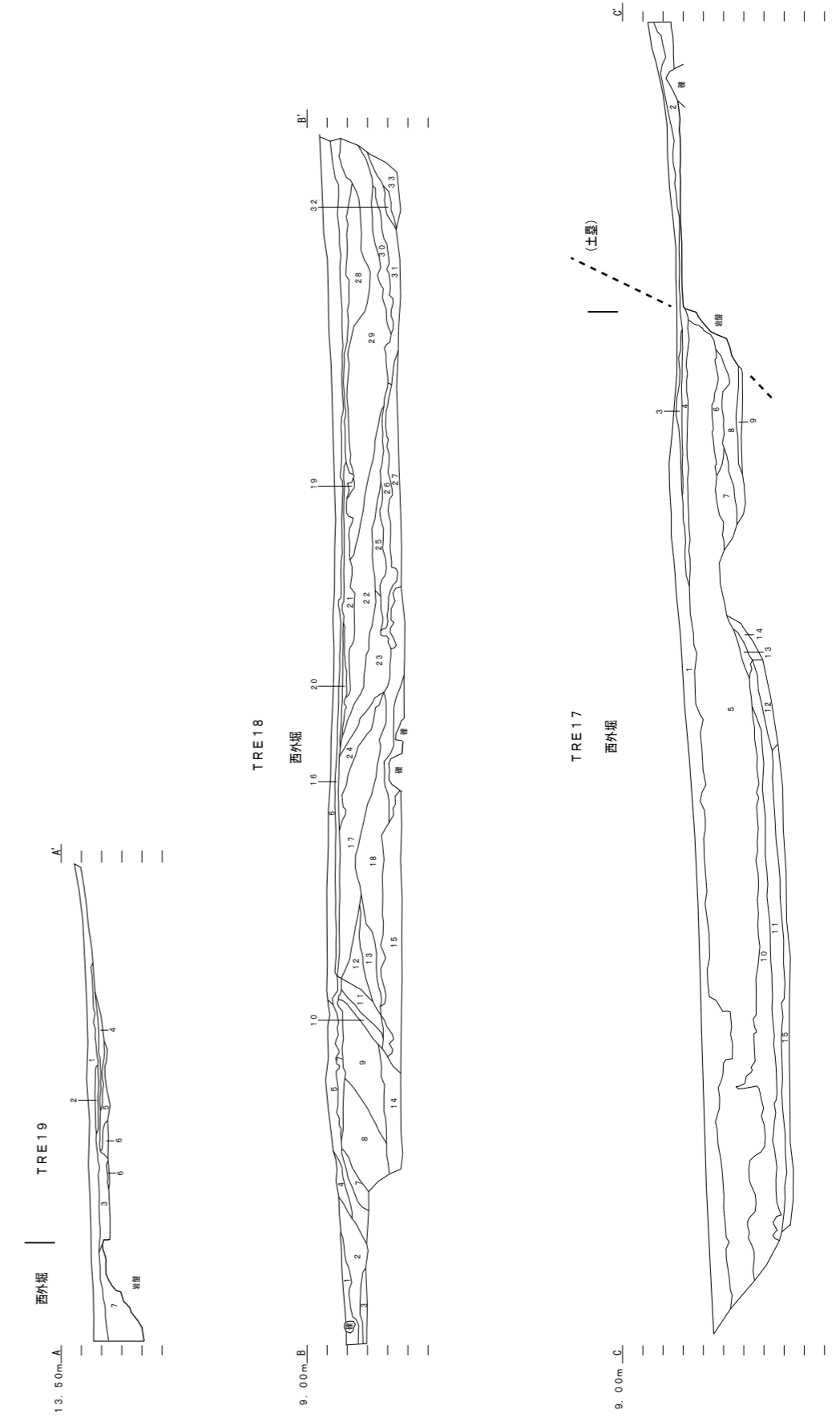
西大手地点における外堀の形態とは違い、平坦面は確認されなかった。TRE17とTRE19では外堀の東肩を検出しているが、TRE18では未検出である。またTRE18では岩盤上に遺構の可能性のある石列を検出しているが、調査は限定的で詳細は明らかではない。なお、これらのトレンチでは遺物は出土していない。

H23-Fトレンチ (第81図)

指定地南西端部に設定した。検出された礎石には現代遺物が伴っており、城郭段階の遺構は検出されなかった。検出された礎石は、外堀の中ということもあってか地盤が弱いために建物基礎として用いられたと考えられる。絵図にある竹田道も検出されなかったが、調査区西端において近代まで残っていた川の土留と考えられる石列を検出している。遺構の検出がなかったため、平面図のみ掲載した。



第 79 図 西外堀 トレンチ全体平面図



第 80 図 西外堀 トレンチ断面図

西外堀 A-A'

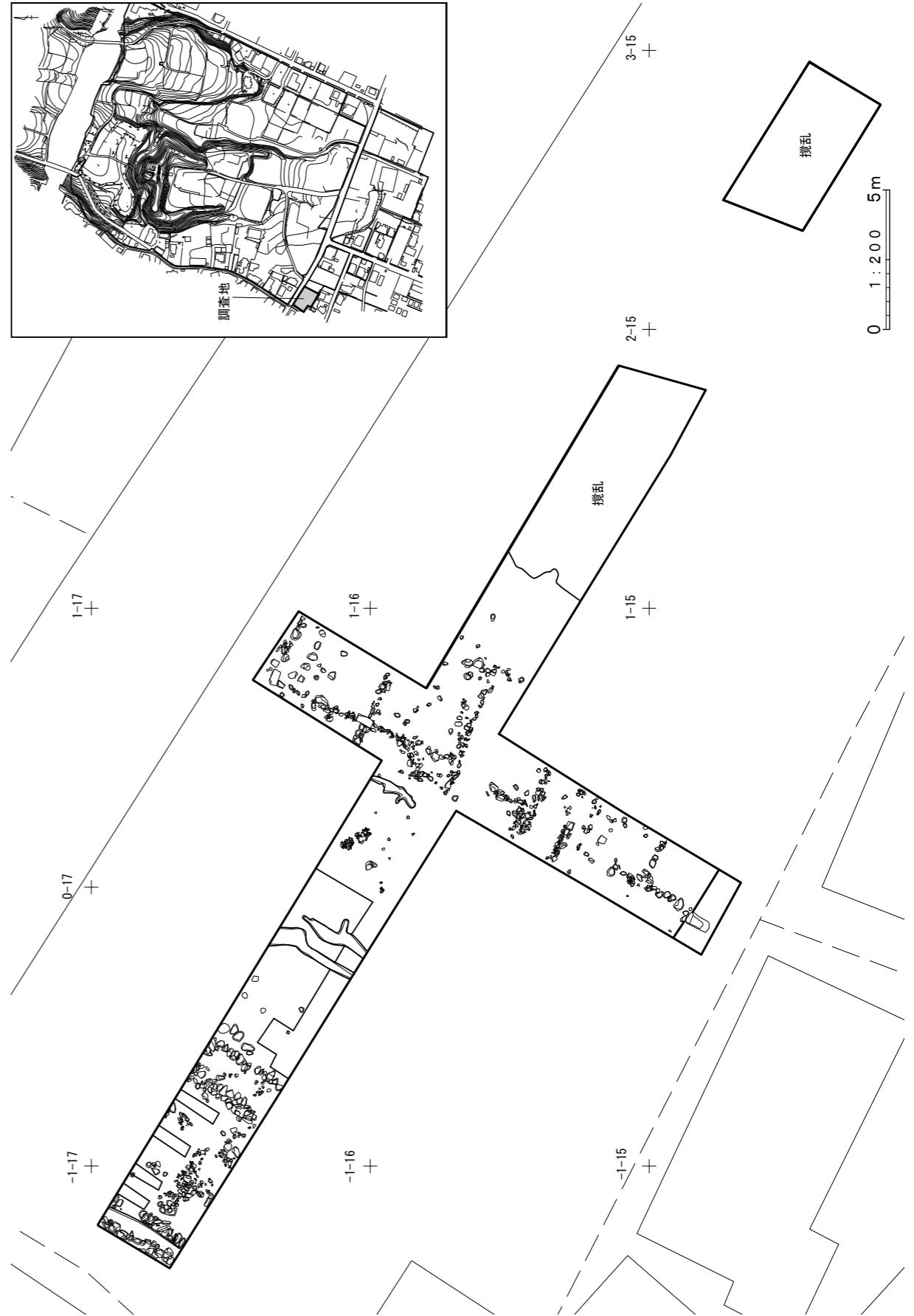
- 1 暗褐色土 やや軟質で小礫、瓦、焼土、炭を混入する、攪乱層
- 2 黄褐色土 ローム土と褐色土の混成層 硬質で小礫を混入する
- 3 暗黄褐色土 硬質で礫を多く含み中部ローム土を混入する
- 4 暗褐色土 色調はやや灰色を帯び、褐色土、黒色土、岩盤崩壊礫の混成層をなす 硬質
- 5 灰褐色土 岩盤崩壊の礫を主とした層で硬質である
- 6 黄褐色土 硬質でローム土を主とした層で硬質である
- 7 暗黄褐色土 中部ローム土と小礫を主とした層で非常に硬質である 地山の岩盤層の真上にあたる

西外堀 B-B'

- 1 褐色土 客土1 ローム土と黒色土の混成層 硬質で掻き固められている
- 2 黄褐色土 客土2 ローム土と岩盤崩壊の礫の混成層
- 3 暗褐色土 客土3 岩盤崩壊の礫の混成層
- 4 黒褐色土 客土4 軟質だが締まりが良い 砕石片を混入する
- 5 黄褐色土 客土5 ローム土を主とし、暗褐色土を従とする混成土 大きな礫を混入する 砂質
- 6 褐色土 客土6 硬質で良く締まる 破砕片を多く混入する
- 7 黒褐色土 客土7 良く締まり小礫を混入する
- 8 暗褐色土 客土8 締まりが悪く、乾燥すると崩壊する 硬質だが脆い 下部に黒色土（礫の隙間に充填する） やや灰色を帯びる
- 9 灰褐色土 客土9 硬質で砕石多い 締まりが良い 混成土
- 10 暗褐色土 客土10 褐色土と砕石の混成土 乾燥すると脆い
- 11 明褐色土 客土11 ローム土と砕石片の混成土 硬質で締まりが良い
- 12 暗褐色土 客土12 暗褐色土と礫片、岩盤破砕礫の混成層 締まりが悪く脆い 黒色土ブロックも混入する
- 13 暗褐色土 客土13 硬質だが脆い 暗褐色土と礫片、岩盤破砕礫の混成層
- 14 暗褐色土 締まりが悪く脆い 礫片の隙間に灰色粘土が混入する 褐鉄を多く含み、橙褐色状を呈す 黒色土ブロックも混入する
- 15 黒灰色粘土 粘土層 軟質で粘性強い 粒子が細かく小礫を混入する
- 16 黄褐色土 客土14 整地層 硬質で非常に堅い ローム土を固め、その上に砕石の粉状を掻き固める
- 17 褐色土 客土15 硬質だが締まりは悪い 大小の礫が多く混入する 混成土
- 18 暗褐色土 暗褐色土の混成土
- 19 紫灰色砂礫 客土16 硬質だが脆い
- 20 紫灰色砂礫 客土17 19層と同質
- 21 黄褐色土 客土18 硬質でローム土ブロックを主とする 黒色土や小礫を多く含む 粘性高い
- 22 暗褐色土 客土19 硬質で粘性有り 礫、ローム土ブロック、黒色土、スコリア粒を混入する
- 23 明褐色粘土 客土20 粘土層 粘性強く軟質で粒子細かい ローム土粒、スコリア粒を少量混入する
- 24 暗褐色土 客土21 やや軟質で粘性有り 黒色土、ローム土粒を含む 角礫（φ20cm大）を含む またφ3～5cm大の礫の混入有り
- 25 暗褐色土 ローム土の崩壊土と褐色土との混成層 やや軟質で粘性は強い スコリアの塊を混入する
- 26 暗褐色土 軟質で粘性有り ローム土ブロックを混入する 上層との境界に赤褐色の鉄分が浸透する
- 27 黒褐色土 旧水田の床土でくさい臭いがする 極めて軟質で粘性は強い 有機物の植物が混入する
- 28 紫灰色砂礫 客土22 19層と同質
- 29 暗褐色土 客土23 やや軟質で粘性有り 脆い φ5cm大の礫及びローム土ブロックを多く含む
- 30 暗褐色土 色調は赤味を帯びる（鉄分の影響力？） やや軟質で粘性有り 粒子細かい
- 31 暗褐色土 ローム土と礫（φ5～10cm大）の混成層 やや脆く粘性は普通
- 32 黒褐色土 旧水田の床土でくさい臭いがする 極めて軟質で粘性は強く粒子は細かい
- 33 赤褐色土 上部は粘土が多く、下部はほとんど礫（φ5～10cm大）となる

西外堀 C-C'

- 1 暗褐色土 表土・攪乱層・整地層
- 2 褐色土 締まりが良い ローム土ブロックを多く混入する やや軟質で粘性強い
- 3 青灰色砂 客土 海砂
- 4 暗褐色土 攪乱層 礫を多く混入する
- 5 明褐色土 やや軟質で締まりが良い ローム土ブロック、岩盤溶岩礫、黒色土ブロック、スコリア等を多く混入する 少量の礫有り
- 6 暗褐色土 やや硬質でやや赤味を帯びる φ1cm以下の小礫を含み炭化した木材片が有り粘性弱い
- 7 暗褐色土 やや硬質で赤味を帯びる 小礫を含み赤い粗粒が多い
- 8 暗褐色土 硬度は普通でφ0.5～2cm大の小礫を多く混入する ローム土の粗粒を混入し、粘性は普通
- 9 暗褐色土 やや軟質で粒子が細かく締まりは良い 粘性が有り鉄分の粗粒が若干有り
- 10 暗褐色粘土 粘土層 軟質で粒子が細かい ドブの臭いが漂う 鉄分を含み下層との境界に黒いビニールが検出される
- 11 黒褐色土 軟質で粒子は細かい 粘性は強く旧水田の床土をなす
- 12 黒褐色土 4層より黒い 軟質で粘性強いφ1～2cm大の小礫を多く混入する
- 13 暗褐色土 軟質で粘性強い
- 14 赤褐色土 鉄分（褐鉄）を含む 軟質で粘性有り スコリアの粗粒を混入する
- 15 暗褐色土 軟質で粘性強い ローム土ブロックの小さな塊が混入する



第 81 図 西外堀 トレンチ (H23-F) 平面図

（4）三ノ丸南西部（第 82 図）

三ノ丸南西部は、商業施設によって大きく汚染されており、安全のためにも調査は汚染土壌の除去を必要とした。そのため、攪乱と判断された地点以外でも重機によって除去した地点もある。

三ノ丸南西部の調査は、2つの調査目標を立てて実施した。1つ目は土取りされてしまった外郭土塁に対し、その残存状況を確認するとともに土塁と外堀の境を確定すること、2つ目は三ノ丸内部の遺構分布を把握することである。

前者の目的を達成するために、平成 22 年度と 23 年度に計 4 本のトレンチ（土塁トレンチ 1～4）を設定して掘削を行った。土塁トレンチ 4 は三ノ丸南東側にて記載するため、本項では土塁トレンチ 1～3 について報告する。なお、土塁トレンチ 3 では、暗渠構造をもつ石組水路（SD4）を検出したため、その北側の延長を調べることを目的として、土塁トレンチ 3-2 を設定し調査を行った。

後者は面的な第 1 調査区の他に土層観察用ベルトを残しながら TRE1～TRE5 を設定して調査した。この結果、土坑 1 基、古段階の土塁跡、版築遺構 1 基、溝 3 条、PT 群などを検出している。

土塁トレンチ 1（第 83 図）

現存する土塁の断割を行って、基部の確認を行うとともに外堀との境を確定させた。土塁の上部は土取りで滅失しているが、少なくとも第Ⅵ黒色帯（BBⅥ層）以上の地山層を基盤としている。トレンチの西端では外堀の落ち込みが確認されたため、土塁の幅は約 15 m と判明した。

断割は行っているが、時期を特定できるような遺物は出土しなかった。

土塁トレンチ 2（第 84 図）

外堀との境は検出できず、基盤層の確認のみにとどまった。基盤層は土塁トレンチ 1 で確認した第Ⅵ黒色帯（BBⅥ層）よりも上層にある休場ローム層（YL 層）である。通常 YL 層から 1～2 m 以上の下層にて BBⅥ層が検出されることから、城郭の南端は大きな削平を受けておらず、曲輪の造成には北側を削平することで行われたと考えられる。

土塁トレンチ 3-1・3-2・4 号溝（SD4 第 85～87 図）

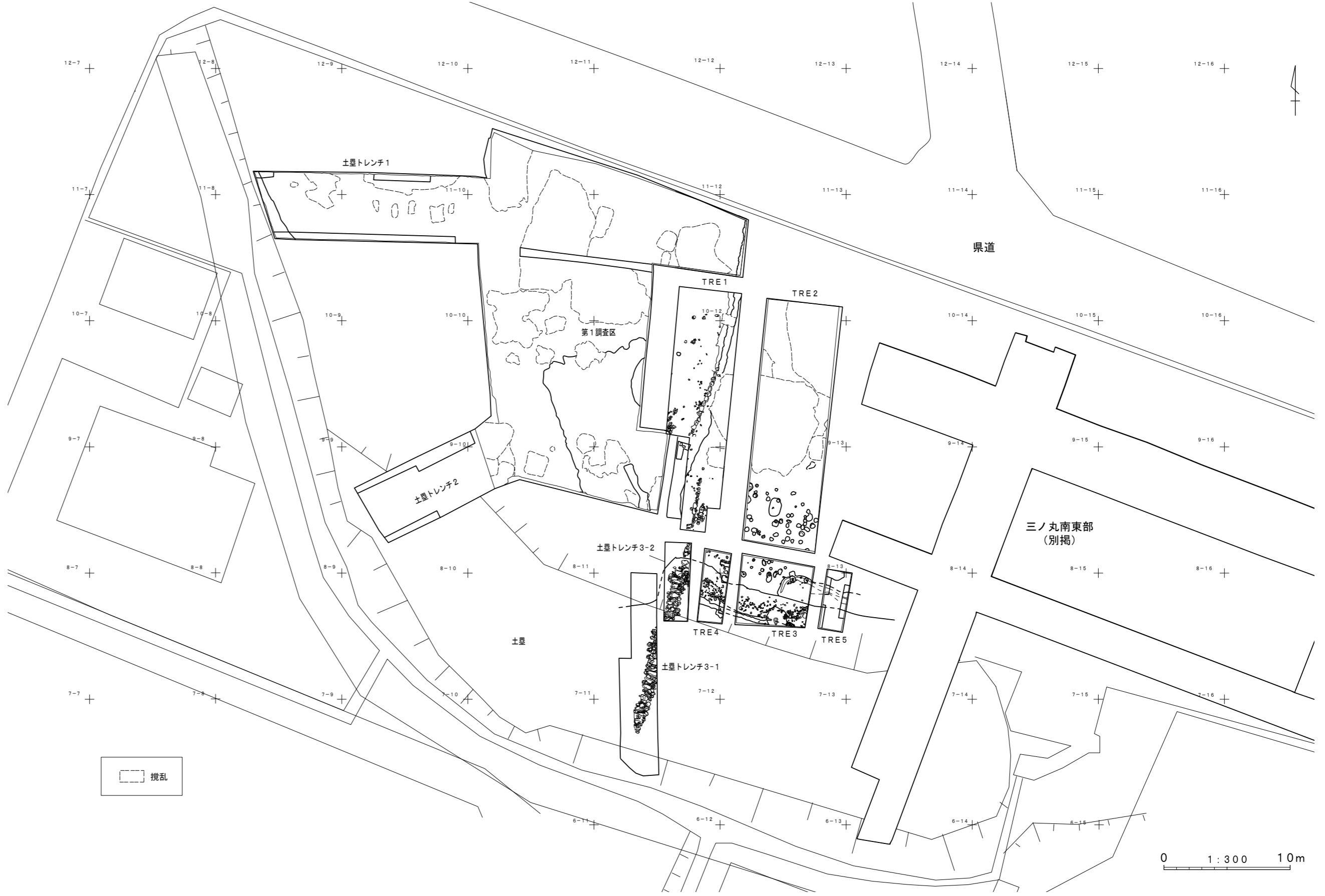
土塁の断割を行い、土塁の下層から SD4 を検出した。SD4 は土塁の下層に造られているが、暗渠構造となっているため、構築時期は土塁と同時期と考えられる。その証左として、土塁の外となる TRE1 にて検出した SD4 の北側は蓋を伴わない開渠構造になっている。暗渠部は検出された延長で 16 m、開渠部は 4 m、計 20 m を測り、本丸などで見られた石組水路と同じ安山岩系の石が使用されている。使用されている石は 0.5 m を超えるものも見られ、これらを箱型に組み合わせて 0.6 m ほどの中空の空間を造り、その主軸は北東 - 南西方向で、外堀に向かって緩やかに傾斜している。SD4 はローム層地山に直接構築されており、後述する古土塁の削平面及び SD6 を埋め戻した面に造られている。

断ち割った土塁は、黒または褐色土と黄褐色のローム土を交互に付き固めた版築土で成っており、その幅は約 17 m である。出土遺物としては暗渠付近から登窯 1 小期に位置づけられる瀬戸美濃天目茶碗（遺物番号 542）、開渠付近では大窯 4 段階前半の瀬戸美濃播鉢（543）がある。さらに、SD4 より下層に位置づけられる SD6 には、埋め戻した覆土内において大窯 4 段階併行に位置づけられる志戸呂播鉢が出土していることから、その構築時期は 16 世紀末以降である。

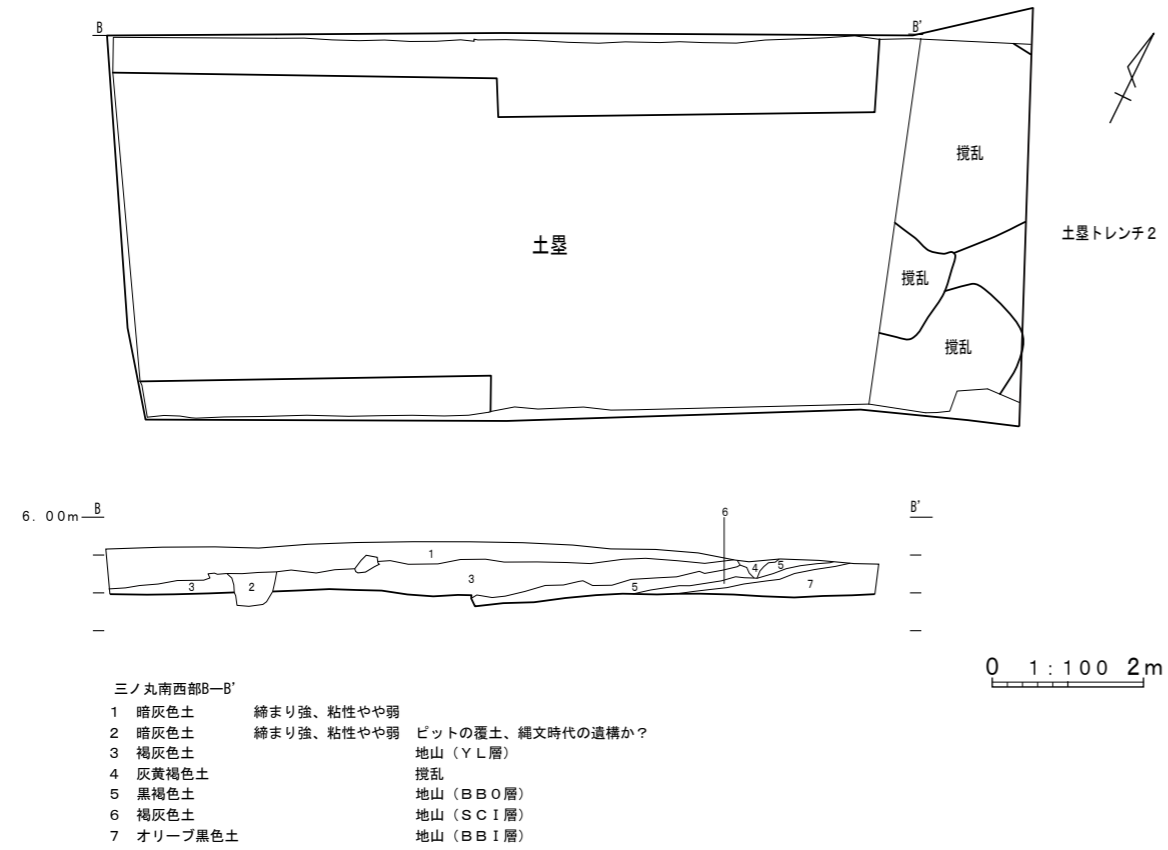
第 1 調査区・TRE1 の遺構

1 号土坑（SK1 第 88・89 図）

第 1 調査区の東側 9-11Gr. にて検出した。掘削開始から 0.5 m ほどで水が湧き出たため、掘削を中止した。直径は約 4 m で、東半は調査区外へと続く。井戸の可能性があるが、出土遺物はなく、性格や時期は不明である。



第 82 図 三ノ丸南西部 全体図



第84図 三ノ丸南西部 土壘トレンチ 2平・断面図



写真27 土壘トレンチ1 土壘基部

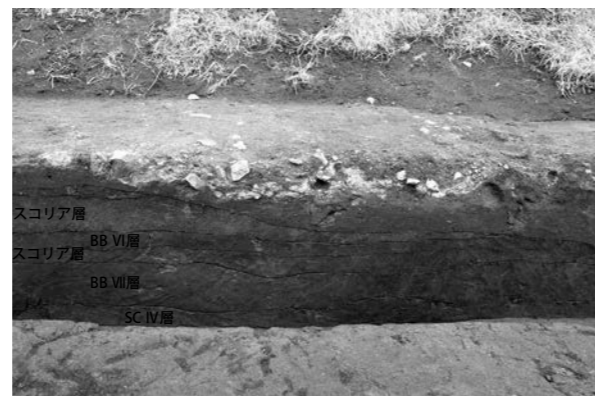


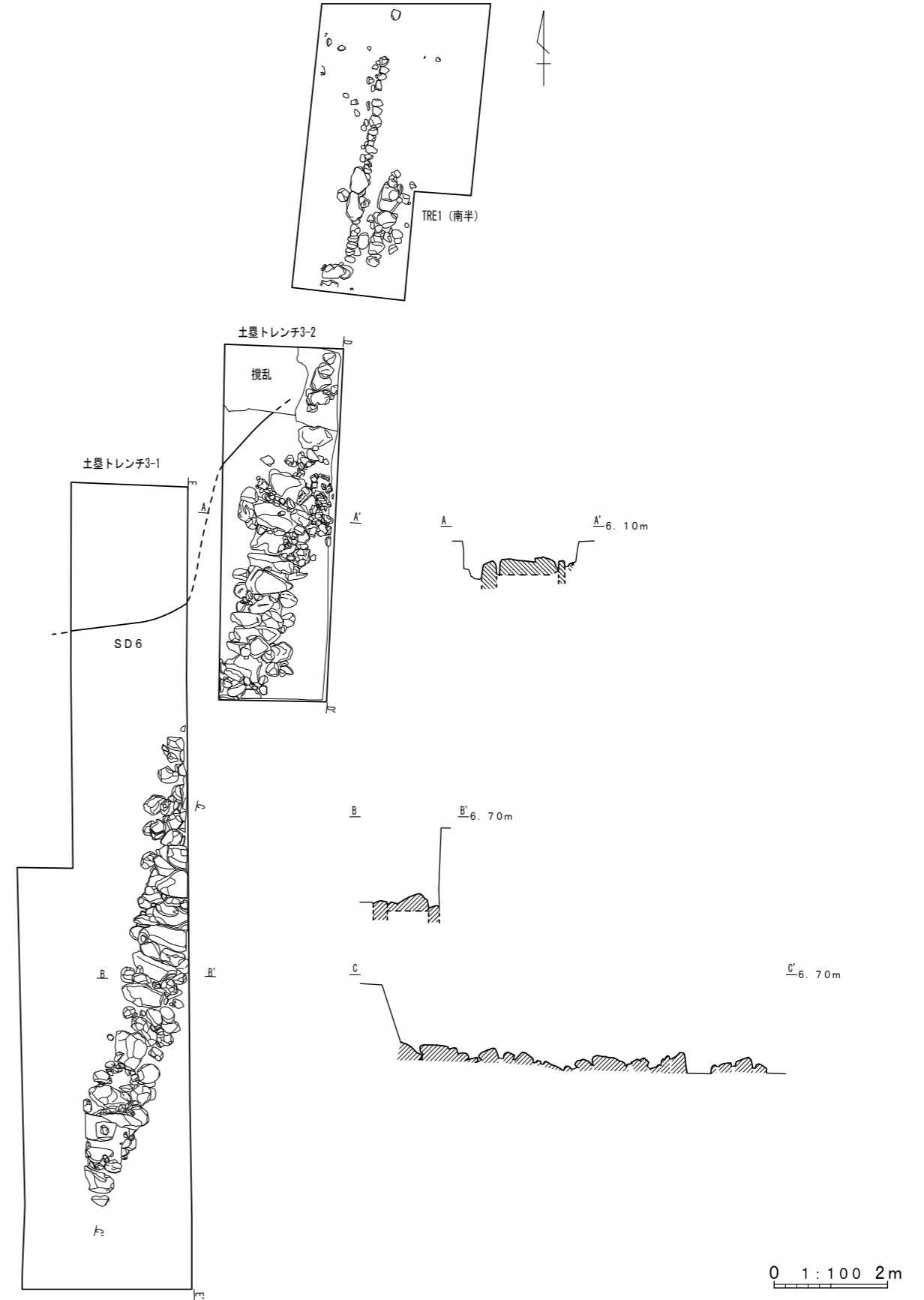
写真28 土壘トレンチ1 土壘基部 (近景)



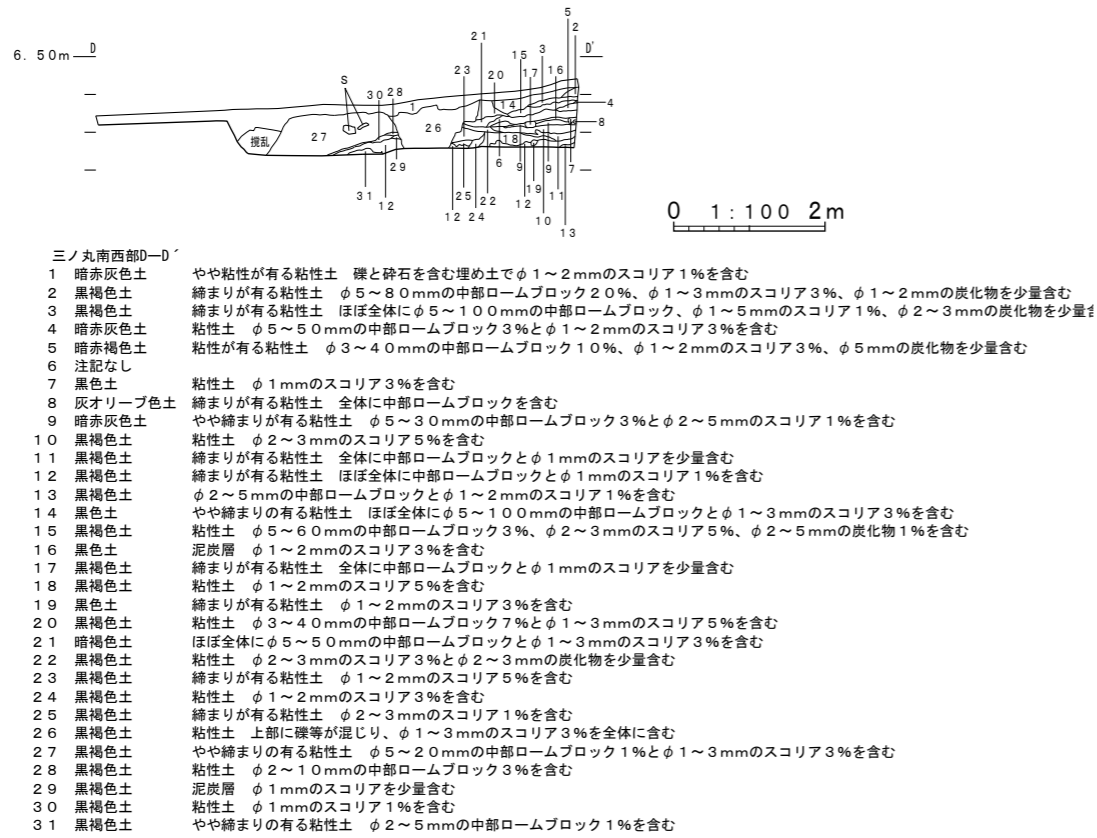
写真29 土壘トレンチ2 土壘基部



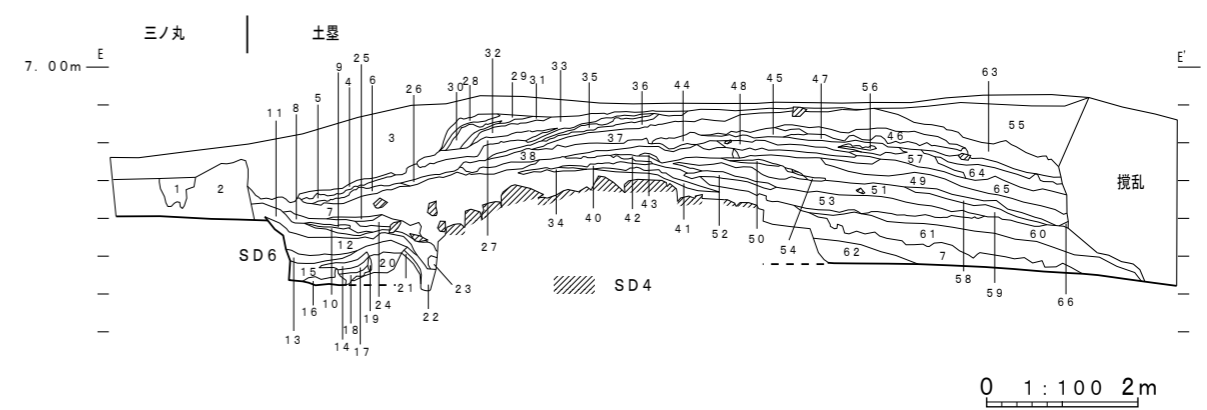
写真30 土壘トレンチ2 土壘基部 (近景)



第85図 三ノ丸南西部 土壘トレンチ3-1・3-2 SD4 平・断面図 (1)



第86図 三ノ丸南西部 土塁トレンチ3-1・3-2 SD4 断面図(2)



第87図 三ノ丸南西部 土塁トレンチ3-1・3-2 SD4 断面図(3)



写真31 SD4及び土塁土層断面



写真32 SD4及び土塁土層断面(B-B')

古土塁 (第 88・89 図)

第 1 調査区の B セクションにて確認した。B セクション付近は土壤汚染が進んでおり、平面的な遺構確認が困難であったため、重機を使用して土層観察用ベルトを残して掘削を進めた。その後、セクションを精査したところ、外郭土塁よりも城内側において古土塁の痕跡を断面にて検出するに至った。

南半は攪乱を受けて滅失しているが、土塁の基部は黄色ロームブロックを混ぜ込んで強く締められている。土塁の基部は中部ローム層で、標高は 4.5 m である。上述の理由により、古土塁は平面的な検出ができなかったが、B セクションより東側の TRE1 において SD4 が古土塁を削平した面に構築されていること (写真 33)、またそれが後述する TRE2 の断面 (写真 42) にも認められることから、B セクションとほぼ並行に東へ伸びていると考えられる。一方、西側には地山 (中部ローム層) の掘り残しが認められる (写真 34) ことから、B セクション付近で北西へ軸を変えていると想定される。

さらに古土塁が及んだであろう範囲の南側には、古土塁とセット関係を持つ SD6 (後述) が検出されている。SD6 は人為的に埋め戻されていることから、古土塁も城域の拡大に伴って、外郭土塁を構築する際に上部は削平され、その上面に SD4 などの諸施設が造られたと考えられる。古土塁に伴う遺物は出土していないが、SD6 に大窯 4 段階併行の志戸呂播鉢が出土していることから、古土塁削平もこの時期に行われたと想定される。

4 号不明遺構 (SX4 第 88 図)

第 1 調査区南側にて検出した。地山は本来東から西へ斜面堆積しているが、SX4 の範囲のみ西から東へむけて小規模な窪みが認められる。時期や性格等は不明であるが、古土塁の西側に残る地山掘り残しと軸方向 (北西-南東方向) が一致することから、古土塁に関連する可能性がある。

版築遺構 (第 90 図)

TRE1 では版築遺構とそれに伴う石列を検出した。検出面は標高 4.5 m で、同じ TRE1 で検出されている SD4 (開渠部分) と比べて、約 0.7 m 低い位置からでの検出である。版築土は黒褐色土が用いられているが、A-A' セクションの 5・6 層は黄色の中部ロームブロックが主体となる。

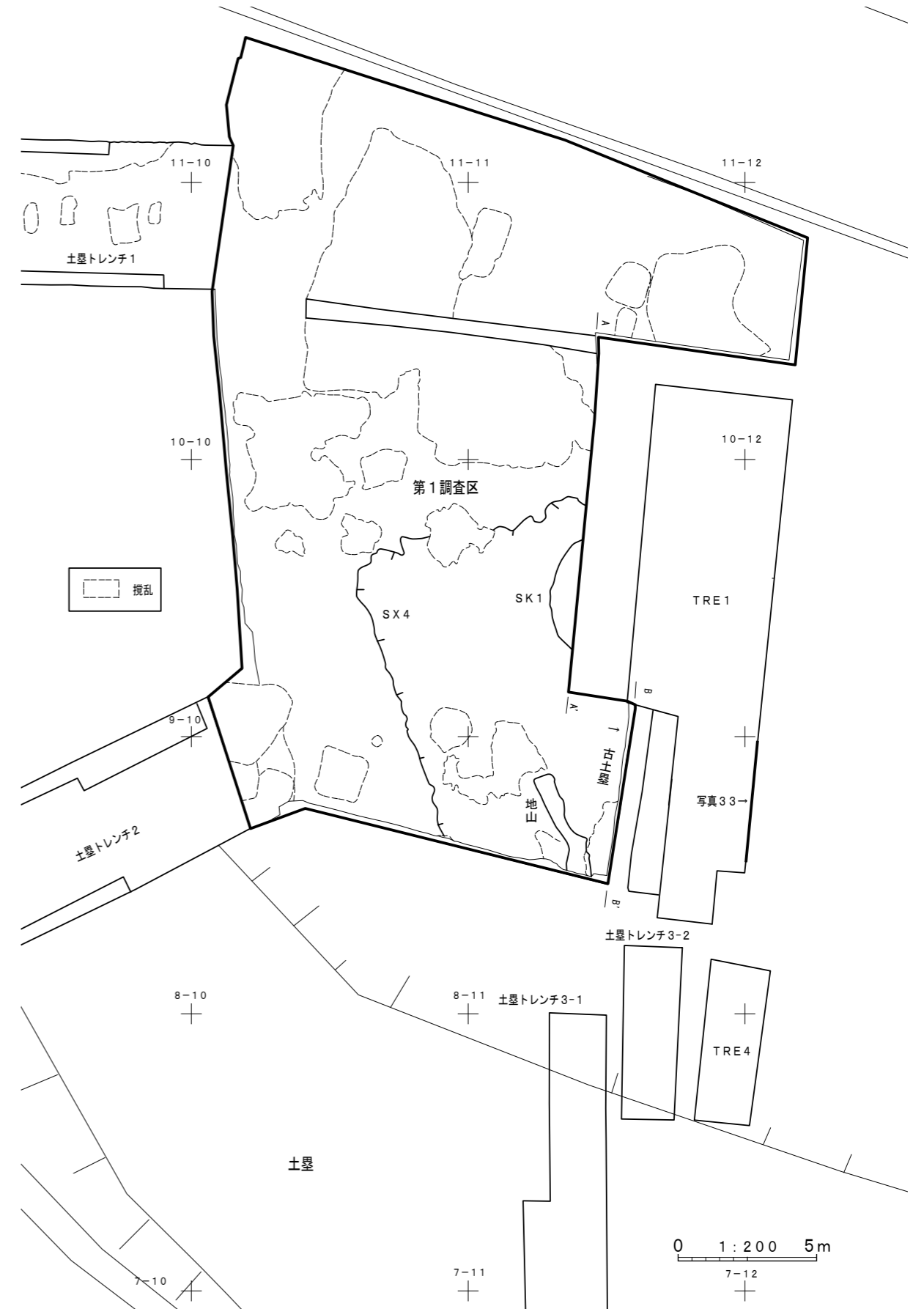
版築土の上には、まばらに礫が散乱しているほかに東側には版築土上において石列が伴っている。石列は 1 段のみで、検出された延長は約 6.0 m を測るが、北側には石列が並んでいた可能性を持つ落ち込みが続いている。一方南側は、南端を確認するトレンチ内において西へ L 字に曲がっていることが確認されている。したがって、西半は攪乱を受けて明らかではないものの、石列は方形に施されている可能性が高い。石列の東側には地山との間に溝が検出されているが、これは石列とは異なり、西には曲がらず、軸を変えずに南へと続いている。また溝には半円形の工具にて掘り込まれた痕跡が残っている。

SD4 よりも下層での検出であることから、部分的な調査ではあるが、版築遺構からは染付碗 C 群 (遺物番号 544)、後Ⅳ新期もしくは大窯 1 段階の瀬戸美濃播鉢片 (小片のため未掲載)、後Ⅳ新期の瀬戸美濃腰折皿 (同) のほか、個体復元が可能なかわらけ (遺物番号 546・547) などが出土している。かわらけの年代は不明であるが、染付及び瀬戸美濃から 15 世紀後半～末ごろの遺構と考えられる。この年代は三ノ丸の中でもとりわけ深い位置からの検出であることと矛盾がなく、興国寺城跡全体においても最古級の遺構と位置づけられる。

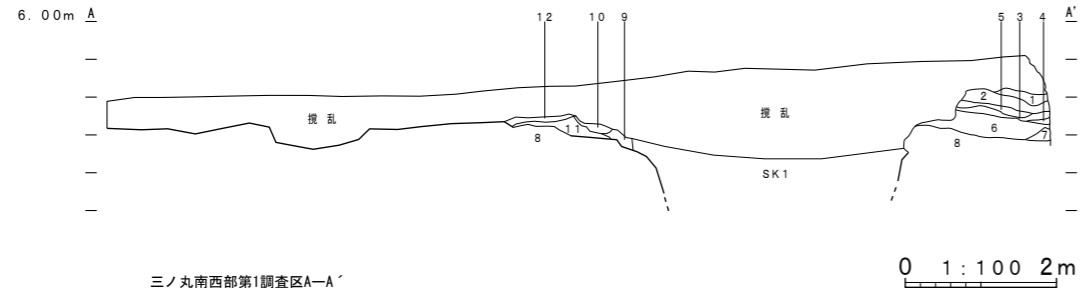
TRE2・3・4・5 の遺構 (第 91・92 図)

5 号溝・6 号溝 (SD5・SD6 第 93 図)

SD5 は TRE3・5 にて検出した。SD5 の西端は検出されているが、東側は調査区外へと続いている。SD5 は SD6 と重複しており、SD6 との重複箇所は掘底までは調査を実施していない。北西部には少量の礫とその周辺に焼土と炭化物が認められ、焼土からは完形のかかわらけが 4 枚重なって出土している (遺

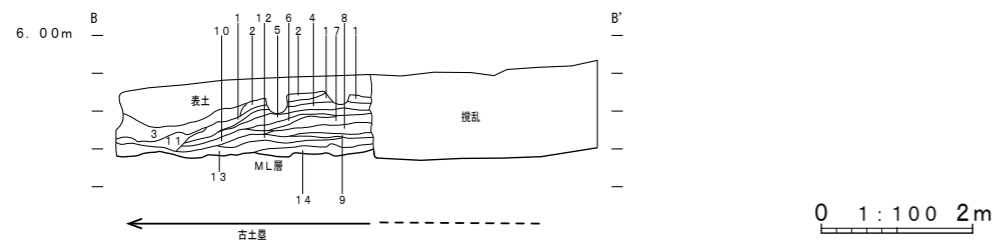


第 88 図 三ノ丸南西部 第 1 調査区 全体平面図



三ノ丸南西部第1調査区A-A'

- 1 黄灰色土 締まり弱、粘性弱、黄色ロームブロックを含む
- 2 暗紫灰色土 締まりやや弱、粘性弱、φ1mm~2mm以下の黄色ロームとスコリアブロックを含む
- 3 暗褐色土 締まり弱、φ5mm次のロームブロックを全体にまばらに含む土層の上に乗る土
- 4 褐色土 締まりやや弱、粘性弱、φ1~2mm次のロームブロックとスコリアブロックを極少量含む赤褐色
- 5 灰黄褐色土 締まりやや弱、粘性やや強、10cm次の黄色ロームブロックとスコリアブロックを含む
- 6 褐色土 締まりやや弱、粘性やや強、φ1~2mm次の黄色ロームを含む
- 7 灰色土 締まりやや弱、粘性やや弱、特大のスコリアブロックを含む
- 8 黄灰色土 地山(中部ローム)
- 9 灰色土 締まり強、粘性やや弱、φ2~5mm次の黄色ロームブロックを含みやや砂質
- 10 暗灰黄色土 締まり強、粘性やや強、φ2~5mm次の黄色ロームブロックを含む、砂利をまばらに含む現代層か?
- 11 黄灰色土 締まり強、粘性強、中部ロームを積み直した土
- 12 暗灰黄色土 締まり強、粘性やや強、φ2~3mm次の黄色ロームを含む



三ノ丸南西部第1調査区A-A'

- 1 灰色土 締まり弱、粘性やや弱、現代遺物を含む
- 2 赤灰色土 締まりやや強、φ1~5mm次の黄色ロームを含む残存する土層の最上層
- 3 暗褐色土 締まりやや弱、粘性弱、φ5mm次のロームブロックを全体にまばらに含む古い土層の上に乗る土
- 4 褐色土 締まり強、粘性やや強、φ2~5mm次の黄色ロームを極少量含む
- 5 灰色土 締まりやや強、粘性強、φ1~2mm次の黄色ロームを極少量含む
- 6 褐色土 締まりやや強、粘性強、φ2~5mm次の黄色ロームをまばらに含む
- 7 褐色土 締まりやや強、粘性やや強、φ2~5mm次の黄色ロームブロックを含む
- 8 褐色土 締まりやや強、粘性やや強、φ1~5mm次の黄色ロームと10cm次のロームブロックを含む
- 9 褐色土 締まりやや弱、粘性弱、φ1~2mm次のロームブロックを少量含む砂質土
- 10 褐色土 締まり強、粘性強、φ1~5mm次の黄色ロームを含む
- 11 赤灰色土 締まりやや弱、粘性やや強、φ2~3mm次の黄色ロームブロックを含む古い土層より上の土
- 12 褐色土 締まりやや強、粘性やや強、φ1~5mm次の黄色ロームと5cm次のロームブロックを含む土層最下層
- 13 褐色土 締まりやや弱、粘性弱、φ1~2mm次のロームブロックとスコリアブロックをまばらに含む土層を積み直した土
- 14 暗赤褐色土 締まりやや強、粘性やや強、φ1~5mm次の黄色ロームを含む古い土層より下の層

第89図 三ノ丸南西部 第1調査区 断面図



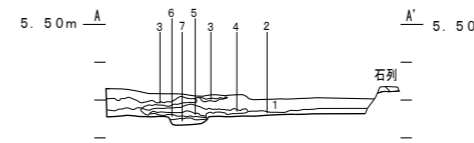
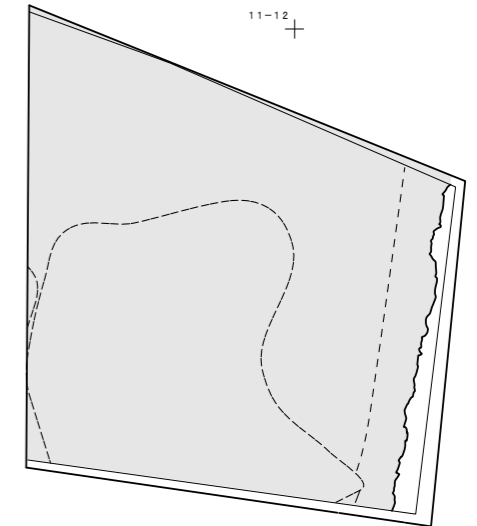
写真33 SD4と断面に残る古土塁



写真34 古土塁と地山掘り残し(北西から)



写真35 溝に残る工具痕

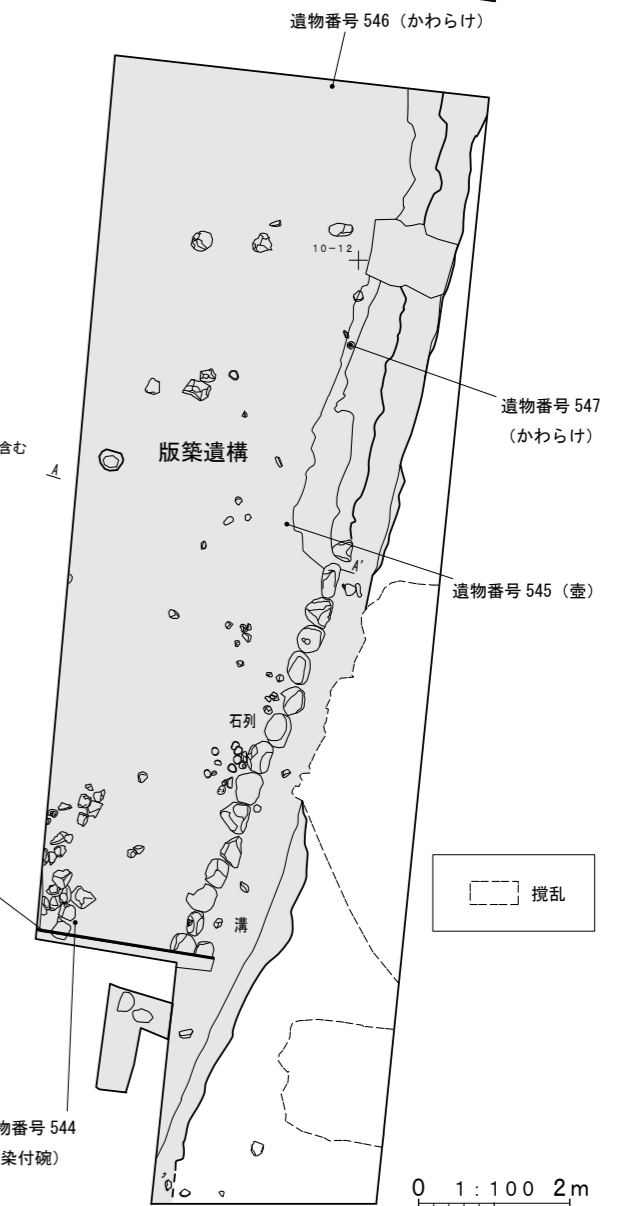


三ノ丸南西部版築遺構A-A'

- 1 暗赤褐色土 粘性土 中部ロームが主体でφ1mmのスコリア1%を含む
- 2 黒褐色土 やや締まりの有る粘性土 φ1~2mmのスコリア1%を含む
- 3 黒褐色土 やや粘性の有る粘性土 φ1mmのスコリアを少量含む
- 4 黒褐色土 粘性の有る粘性土 φ1~2mmのスコリアを少量含む
- 5 黒褐色土 締まりの有る粘性土 中部ロームが主体でφ1mmのスコリアを少量含む
- 6 暗赤褐色土 締まりと粘性の有る粘性土 中部ロームが主体の層
- 7 黒褐色土 やや締まりの有る粘性土 φ1~2mmのスコリアを少量含む



写真36 版築遺構・石列・溝(北から)



第90図 三ノ丸南西部 版築遺構 平・断面図

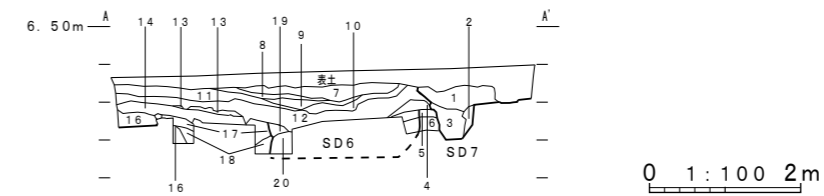


第91図 三ノ丸南西部 TRE2・3・4・5 平面図

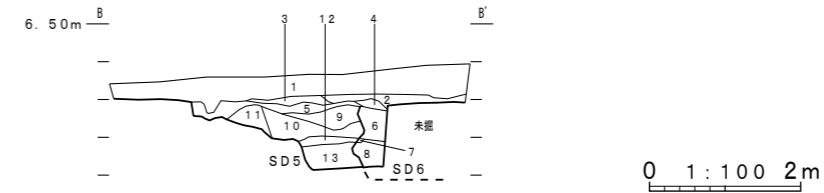
物番号 549～552)。その他の出土遺物として、羽釜（同 548）、古瀬戸中Ⅰ・Ⅱ期の仏花瓶（小片のため未掲載）、大窯3段階の瀬戸美濃稜皿（同）がある。調査が部分的であるため、時期の特定は困難であるが、大窯4段階の遺物が出土するSD6より古い遺構である。

SD6はTRE3・4・5及び土塁トレンチ3-1、3-2、そして三ノ丸南東部において検出された。SD6の幅は2.2m、部分的に確認したトレンチから深さは0.8mである。多量の礫とともに埋め戻され、さらに外郭土塁がその上を覆っている。したがって、遺構の重複関係から、SD5→SD6→外郭土塁という構築順となる。

SD6の西端部は明らかではないが、東端部は三ノ丸南東部にて検出した外堀と合流することから、SD6は規模は小さいものの外郭土塁が築かれる前段階の外堀であったと想定される。さらにSD6の北側には第1調査区において断面を確認した古土塁（第89図）が検出されていることから、城郭最終段階よりも古い段階には古土塁とSD6によって外郭が規定されていたと考えられる。SD6は廃棄礫とともに、大窯4段階の志戸呂播鉢（遺物番号553）や初山丸碗（同554・555）などが出土しており、その後に外郭土塁が造られていることから、SD6の廃棄及び外郭土塁構築は、16世紀末～17世紀初頭に位置づけられる。



- 三ノ丸南西部TRE4 A-A'
- | | | |
|----|---------|--------------------------------------------------------|
| 1 | 黒褐色土 | 締まりやや弱、粘性やや弱、φ1～2mm大の黄色ロームをまだらに含む（3%） |
| 2 | 黒褐色土 | 締まりやや弱、粘性やや弱、1層よりやや黄色ロームが多い、SD7の覆土（10%） |
| 3 | 赤灰色土 | 締まり弱、SD7の覆土（10%） |
| 4 | 褐色土 | 締まりやや強、粘性やや強、φ1～3mm大の黄色ロームとスコリアブロックを含む（黄3%、赤5%） |
| 5 | 黒褐色土 | 締まりやや強、粘性強、φ1～2mm大の黄色ロームを少量と赤色スコリア5%を含む |
| 6 | 黒褐色土 | 締まりやや強、粘性強、スコリアを多量と赤褐色スコリア15%を含み、削るとガリガリする |
| 7 | 暗オリーブ色土 | 締まり強、粘性やや強、φ1～5mm大の黄色ロームを含む、旧耕作土（2%） |
| 8 | 黒褐色土 | 締まり強、粘性やや弱、1層の質と良く似る |
| 9 | 暗灰色土 | 締まり強、粘性やや弱、φ1～2mm大の黄色ロームを含み、8層と11層に挟まれている、下部層に鉄分15%が有る |
| 10 | 暗灰色土 | 締まりやや強、粘性やや弱、φ2～5mmの黄色ロームを含む、12層堆積後に人工的に埋め立て地（7%） |
| 11 | 黒褐色土 | 締まり強、粘性やや弱、φ1～3mm大の黄色ローム3%を含む |
| 12 | 黒褐色土 | 締まり強、粘性やや弱、φ2～3mm大の黄色ロームをまだらに含む、古い土塁を埋める自然堆積層（5%） |
| 13 | 黒褐色土 | 締まりやや弱、粘性やや弱、φ2～5mm大の黄色ロームを多量に含む（20%） |
| 14 | 黒褐色土 | 締まりやや弱、粘性弱、φ1～5mm大の黄色ロームと少量の砂利、炭（10%）を含む |
| 16 | 暗灰色土 | 締まりやや強、粘性やや強、φ1～2mm大の黄色ロームを含む、古い土塁時の造成面か？（7%） |
| 17 | 黒褐色土 | 締まり弱、粘性やや弱、φ2～3mm大の黄色ロームをまだらに含む（7%） |
| 18 | 黒褐色土 | 締まりやや強、粘性やや弱、φ2～3mm大の黄色ロームを少量含む（5%） |
| 19 | 黒褐色土 | 締まり弱、粘性やや強、5cm大の黄色ロームブロックを含む、SD6の覆土（10%） |
| 20 | 黒褐色土 | 締まりやや強、粘性やや強、φ1～3mm大の黄色ロームを含む、SD6の覆土（3%） |



- 三ノ丸南西部TRE5 B-B'
- | | | |
|----|-------|-------------------------------------------------------|
| 1 | 表土 | コンクリート層 |
| 2 | 黄灰色土 | 締まりやや弱、粘性やや弱、φ2～3mm大と10mm大の黄色ロームを含む（黄7%） |
| 3 | 黄灰色土 | 締まりやや強、粘性やや弱、φ2～3mm大の黄色ブロックを含む（10%） |
| 4 | 黄灰色土 | 締まり強、粘性やや弱、φ3mm大の黄色ブロックを含む（5%） |
| 5 | 黄灰色土 | 締まり弱、粘性やや弱、φ2～5mm大の黄色ローム（5%） |
| 6 | 暗灰黄色土 | 締まり強、粘性やや強、非常に堅く締まっており地山ブロックがそのまま入っている、φ5～10mm大の黄色ローム |
| 7 | 褐灰色土 | 締まりやや弱、粘性弱、φ2～5mmの黄色ロームを含む（15%） |
| 8 | 黄灰色土 | 締まりやや強、粘性やや強、φ1～2mm大の黄色ロームを含む（3%） |
| 9 | 褐灰色土 | 締まり強、粘性強、地山ブロックをそのまま投げ込んだ様な土、φ5～10mm大の黄（10%） |
| 10 | 黄灰色土 | 締まり強、粘性やや強、φ10mm大の黄色ブロックと赤色スコリアを含む（黄5%、赤10%） |
| 11 | 黄灰色土 | 締まり強、粘性やや強、赤色スコリアブロックを含む（10%） |
| 12 | 暗灰黄色土 | 締まりやや強、粘性やや強、赤色ロームブロックを含む（10%） |
| 13 | 黒褐色土 | 締まり強、粘性やや強、地山をそのまま入れた様な土、φ5～10mm大の黄色ローム（10%） |

第92図 三ノ丸南西部 TRE2・3・4・5 断面図

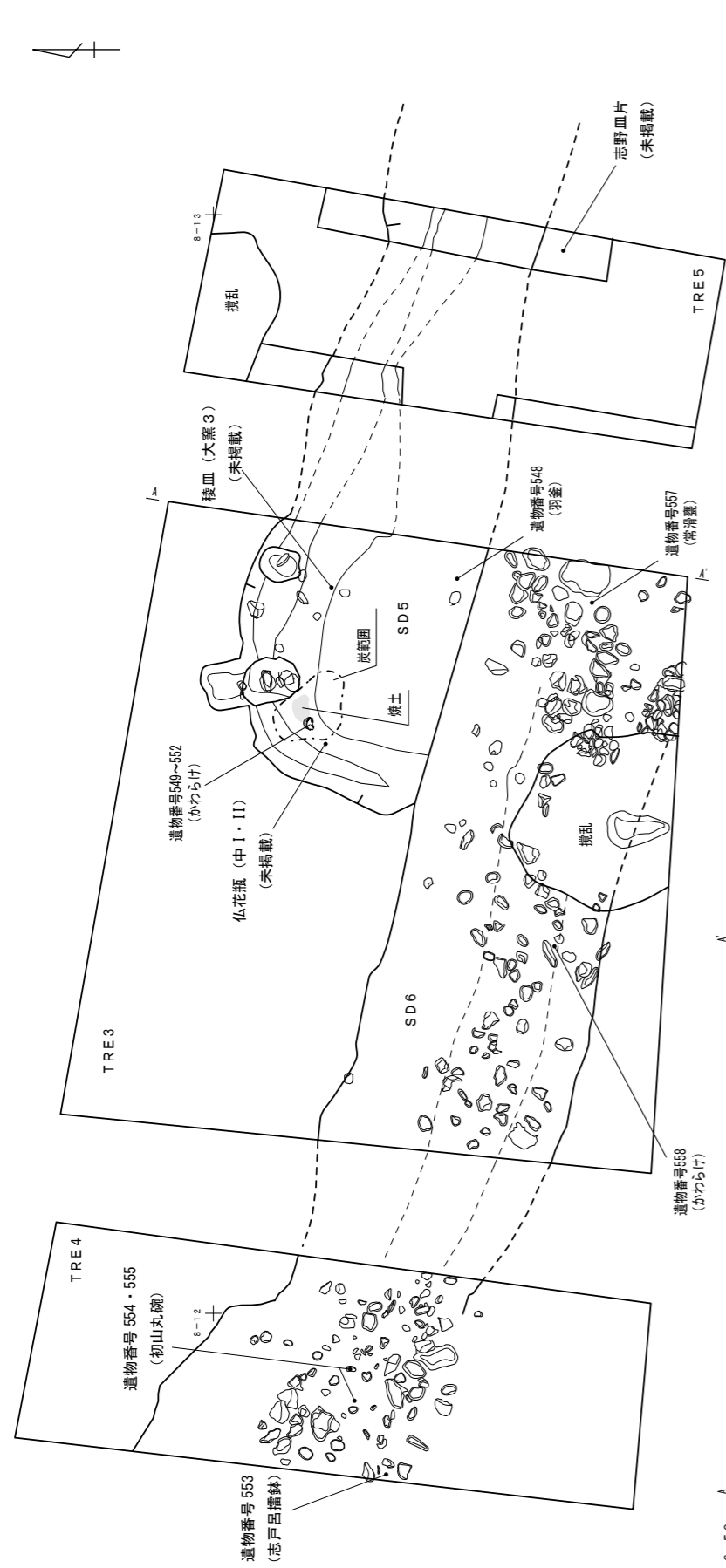
7号溝 (SD7 第94図)

SD6の南側に東西に走る小規模な溝である。幅は1.0m、深さ0.7mを測る。外郭土塁と並行しており、上端は表土層直下である。外郭土塁の内側に掘られた溝と考えられるが、構築時の外郭土塁の端部はSD7より内側である。したがってSD7は外郭土塁が現在の形になってから、すなわち後世の改変後に掘られた溝と判断される。出土遺物には16世紀代に位置づけられる常滑甕があるが、この他に詳細時期を特定できる遺物は出土していない。

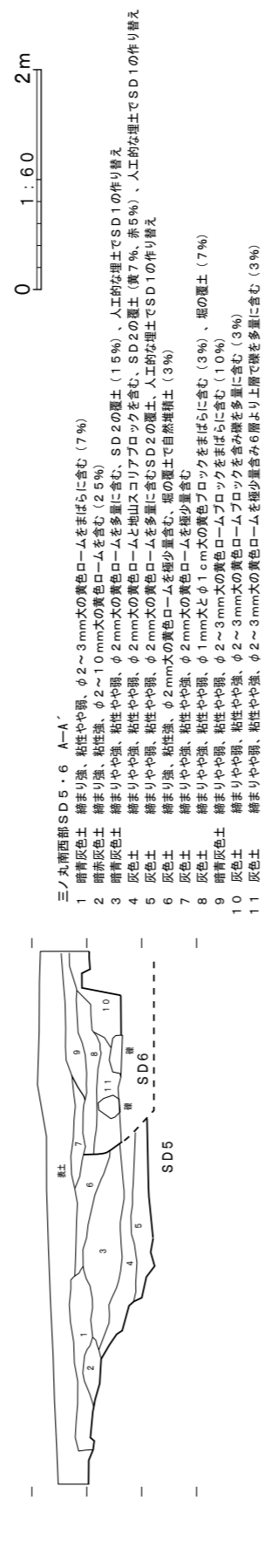
PT群 (第95図・第7表)

TRE2の南半及びTRE3にて計62基を検出した。すべて半裁としたが、ひととき大きいPT11のみ4分割で掘削を行っている。建物を構成するような配列には成っておらず、その性格は不明である。ただしPT群は古土塁よりも下層に存在する造成土に掘り込まれており、遺物はPT12（遺物番号560）とPT53（同561）からそれぞれ大窯1もしくは2段階の丸皿等が出土している。したがって、大窯4段階に破棄されている古土塁とは層位・遺物の年代ともに矛盾はなく、16世紀前半の遺構と考えられる。

第95図には、規模の大きいPT11と遺物の出土したPT12・53の図を掲載したが、その他のPTの規模等については計測表を付した。

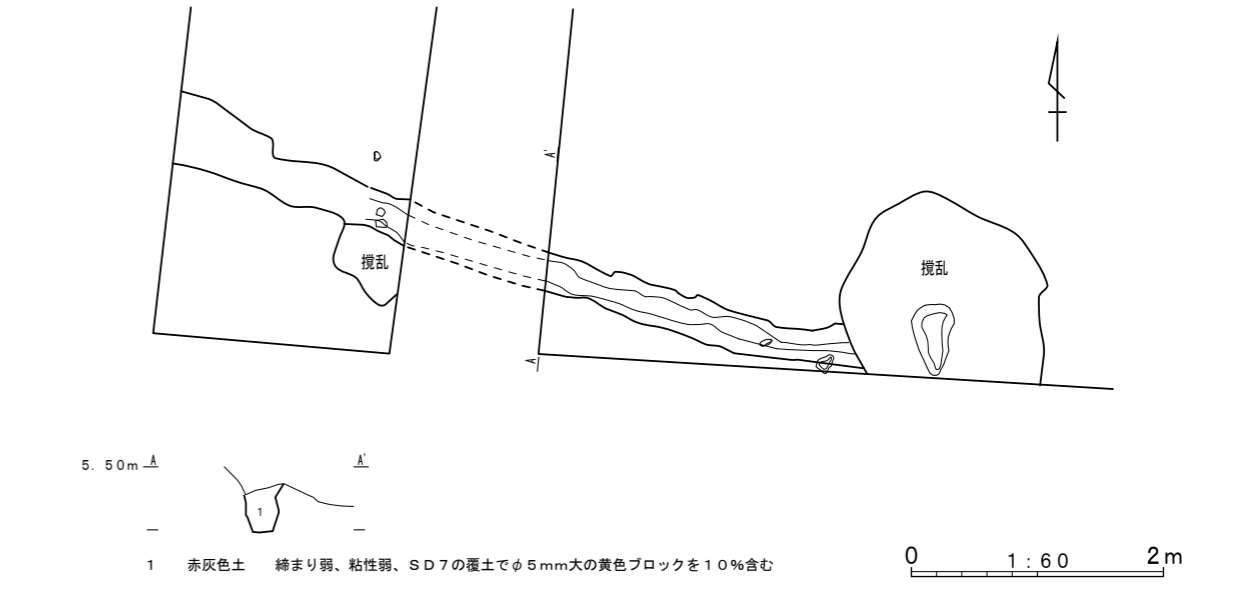


第93図 三ノ丸南西部 SD5・6 平・断面図



三ノ丸南西部SD5・6 A-A'

- 1 暗青灰色土 粘り強、粘性や強、φ2~3mm次の黄色ロームをまばらに含む(7%)
- 2 暗赤灰色土 粘り強、粘性強、φ2~10mm次の黄色ロームを含む(25%)
- 3 暗青灰色土 粘り強、粘性や強、φ2mm次の黄色ロームを多量に含む、SD2の覆土(15%)、人工的な埋土でSD1の作り替え
- 4 灰色土 粘り強、粘性や強、φ2mm次の黄色ロームと地山スクリップブロックを含む(黄7%、赤5%)、人工的な埋土でSD1の作り替え
- 5 灰色土 粘り強、粘性や強、φ2mm次の黄色ロームを少量含む、埋土で自然堆積土(3%)
- 6 灰色土 粘り強、粘性や強、φ2mm次の黄色ロームを少量含む
- 7 灰色土 粘り強、粘性や強、φ1mm次とφ1cm次の黄色ブロックをまばらに含む(3%)、埋土(7%)
- 8 暗青灰色土 粘り強、粘性や強、φ2~3mm次の黄色ロームブロックをまばらに含む(10%)
- 9 灰色土 粘り強、粘性や強、φ2~3mm次の黄色ロームを少量含む6層より上層で礫を多量に含む(3%)
- 10 灰色土 粘り強、粘性や強、φ2~3mm次の黄色ロームを少量含む6層より上層で礫を多量に含む(3%)
- 11 灰色土



第94図 三ノ丸南西部 SD7 平・断面図



写真37 TRE2・3・4・5 全景 (北東から)



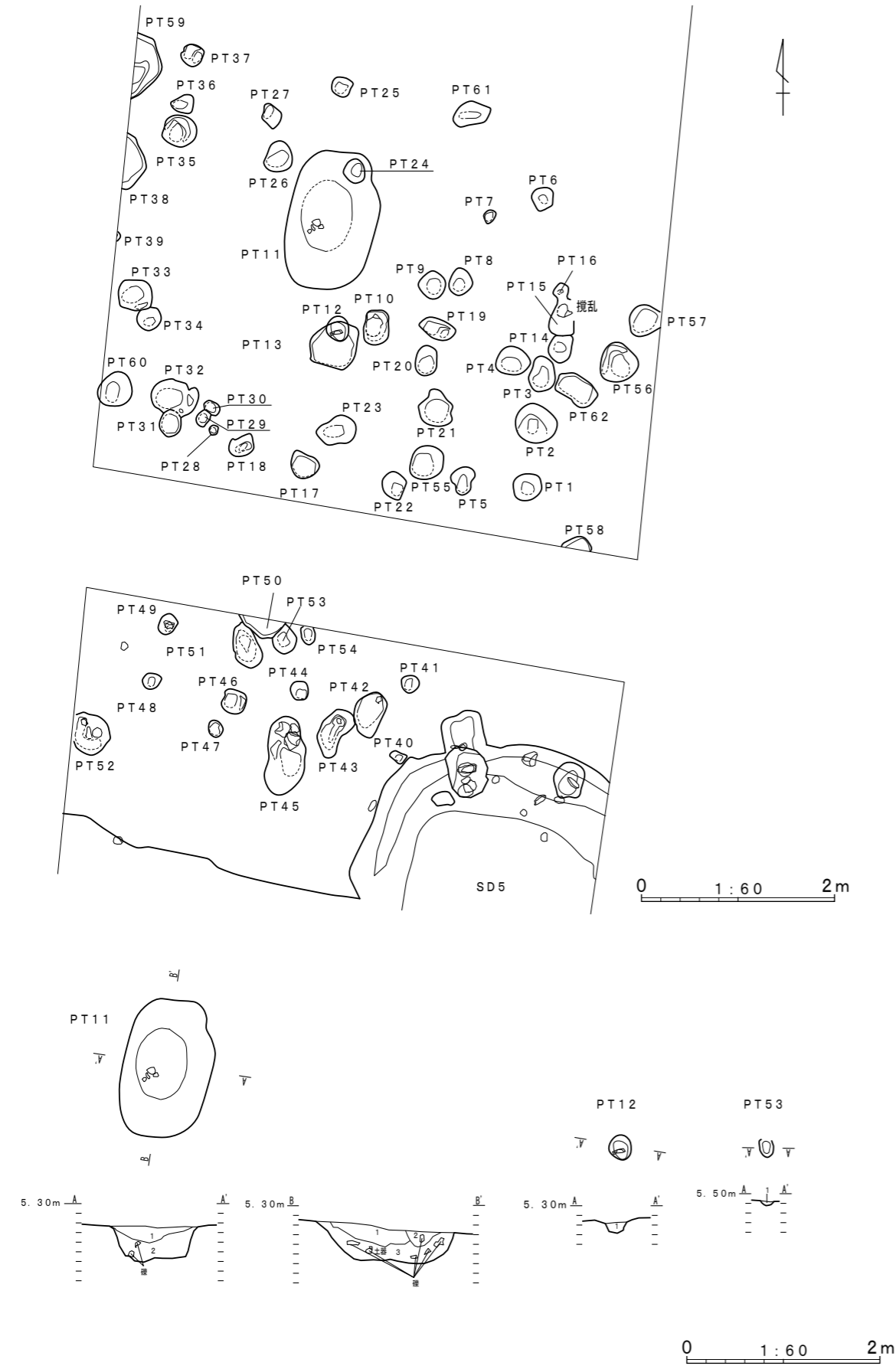
写真38 TRE3 SD5・SD6 (北から)



写真39 TRE4 SD6 (北から)



写真40 TRE4 遺物出土状況 (遺物番号553)



第95図 三ノ丸南西部 PT群 平・断面図

- PT11 A-A' 1 灰オリーブ色土 締まりやや弱い、粘性やや弱い、φ1~2mm大の黄色ローム土を全体に含む黄色が強い(15%)
- 2 暗灰黄色土 締まりやや強い、粘性強い
- PT11 B-B' 1 暗灰黄色土 締まりやや弱い、粘性やや弱い、φ1~2mm大の黄色ローム土を全体に含む黄色が強い(15%)
- 2 暗灰黄色土 締まりやや強い、粘性やや強い、φ1~3mm大の黄色ローム土をまばらに含む
- 3 灰色土 締まりやや強い、粘性強い
- PT12 A-A' 1 暗灰黄色土 締まりやや弱い、粘性やや強い
- PT53 A-A' 1 灰色土 締まりやや弱い、粘性やや強い、φ2~3mm大の黄色ローム土を5%含む

第7表 三ノ丸南西部 PT群計測表

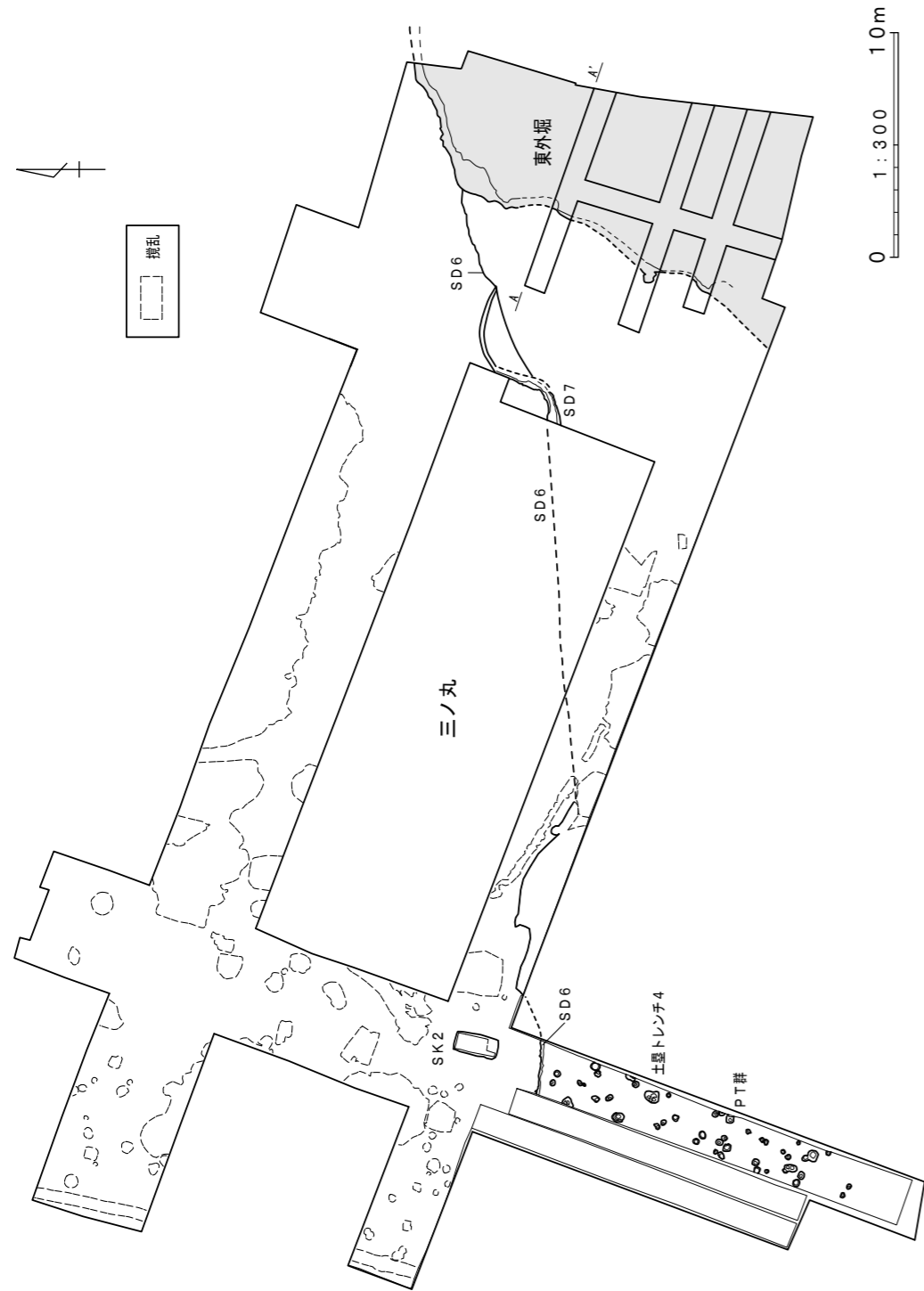
遺構名	幅(m)	深さ(m)	備考	遺構名	幅(m)	深さ(m)	備考	遺構名	幅(m)	深さ(m)	備考
PT1	0.311	0.164		PT22	0.279	0.254		PT43	0.511	0.236	
PT2	0.43	0.307		PT23	0.408	0.21		PT44	0.208	0.084	
PT3	0.36	0.215		PT24	0.242	0.322		PT45	0.791	0.531	礫含む
PT4	0.35	0.277		PT25	0.238	0.14		PT46	0.268	0.279	
PT5	0.281	0.165		PT26	0.314	0.195		PT47	0.172	0.089	
PT6	0.242	0.112		PT27	0.248	0.412		PT48	0.199	0.297	
PT7	0.144	0.063		PT28	0.103	0.133		PT49	0.21	0.139	礫含む
PT8	0.262	0.225		PT29	0.176	0.116		PT50	0.41	0.228	
PT9	0.278	0.097		PT30	0.17	0.031		PT51	0.482	0.336	
PT10	0.369	0.207		PT31	0.276	0.054		PT52	0.447	0.402	
PT11	1.484	0.559	礫含む	PT32	0.477	0.194		PT53	0.311	0.073	
PT12	0.251	0.154		PT33	0.379	0.242		PT54	0.19	0.049	
PT13	0.552	0.204		PT34	0.249	0.393		PT55	0.384	0.279	
PT14	0.293	0.315		PT35	0.36	0.318		PT56	0.396	0.312	
PT15	0.083	-	掘削なし	PT36	0.226	0.193		PT57	0.345	0.076	
PT16	0.168	0.13		PT37	0.227	0.212		PT58	0.329	0.046	
PT17	0.296	0.19		PT38	0.53	0.217		PT59	0.627	0.269	
PT18	0.281	0.133		PT39	0.097	0.12		PT60	0.356	0.577	
PT19	0.361	0.241		PT40	0.153	0.131		PT61	0.394	0.143	
PT20	0.306	0.222		PT41	0.178	0.185		PT62	0.443	0.114	
PT21	0.379	0.152		PT42	0.434	0.332					



写真41 TRE2 PTが掘り込まれる造成土の確認
トレンチ(トレンチ内は地山)



写真42 TRE2 PT検出面の上に残る古土塁



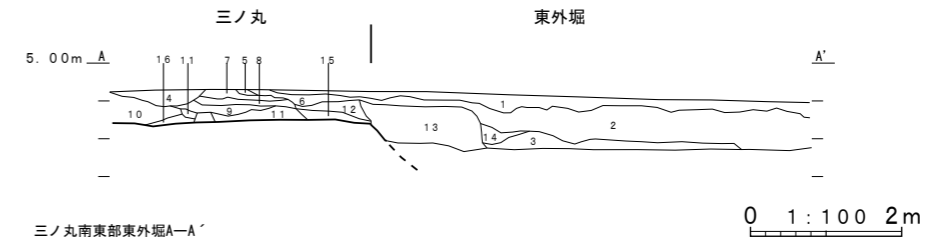
第96図 三ノ丸南東部 全体図

(5) 三ノ丸南東部 (第96・97図)

三ノ丸南東部も他の三ノ丸調査地点と同様大きく攪乱を受けている地点である。平成22年度に土壘トレンチ4と曲輪内にトレンチをいれ、平成23年度には曲輪と外堀の境界を調査した。その結果、三ノ丸南西部から続くSD6のほかに、土壘の下層からPT群、土坑1基(SK2)、SD6と重複する溝1条(SD7)、東外堀とその改修痕跡を検出した。

6号溝・東外堀 (SD6 第96図)

三ノ丸南西部から続いており、東外堀へと接続している。SD6は平面検出のみで掘削は行っていな



- 三ノ丸南東部東外堀A-A'
- | | | |
|----|---------|------------------------------------------------------|
| 1 | 黒褐色土 | 締まり弱、粘性やや強、φ1~2mm大のキロロームブロックを極少量含む |
| 2 | にぶい赤褐色土 | 締まりやや強、粘性やや強、地山ロームを投げ込んでいるようで8割程地山ロームブロックが占める、人工的な埋土 |
| 3 | 黒色土 | 締まりやや弱、粘性強、掘り底上層の土で有り江戸時代の遺物を含む人工的な埋土 |
| 4 | 黒褐色土 | 締まり弱、粘性やや弱 掘2の覆土 |
| 5 | 黒褐色土 | 締まり弱、粘性やや弱 |
| 6 | 灰黄褐色土 | 締まりやや弱、粘性やや弱、φ1~2mm大の黄色ロームを含む |
| 7 | 明黄褐色土 | 締まりやや弱、粘性やや強、φ1~5mm大の黄色ロームを多量に含む土壘 |
| 8 | 褐灰色土 | 締まりやや弱、粘性やや強、φ1~5mm大の黄色ロームを含む土壘 |
| 9 | にぶい黄褐色土 | 締まりやや強、粘性やや強、黄色ロームブロックを多量に含む土壘 |
| 10 | 灰黄褐色土 | 締まりやや弱、粘性やや強、ブロックを含む |
| 11 | 黒色土 | 締まりやや弱、粘性やや強、黄色ロームブロックと赤色スコリアブロックを含む |
| 12 | 黒褐色土 | 締まりやや強、粘性やや強 |
| 13 | 黒色土 | 締まりやや弱、粘性強、自然堆積層 |
| 14 | 黒褐色土 | 締まりやや弱、粘性強、地山ロームブロックを含む人工的な埋土 |
| 15 | 黒褐色土 | 締まり弱、粘性やや強 |
| 16 | にぶい黄褐色土 | 締まりやや弱、粘性強 |

第97図 三ノ丸南東部 東外堀 断面図



写真43 東外堀下層確認トレンチ (南から)



写真44 外堀検出状況 (南から)

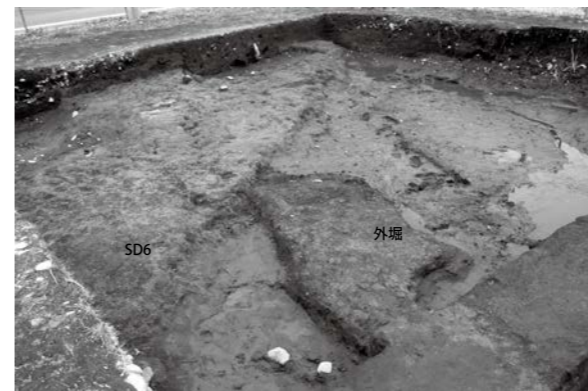


写真45 SD6から外堀への改修痕

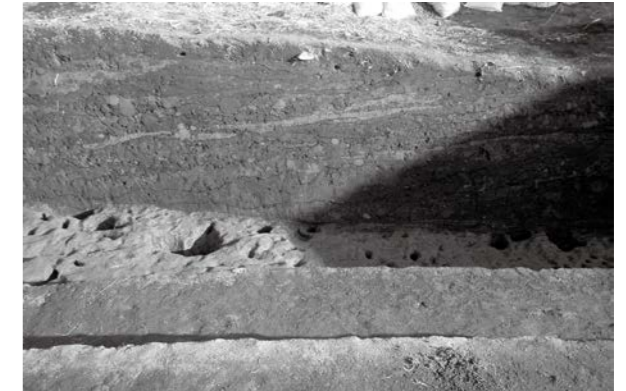
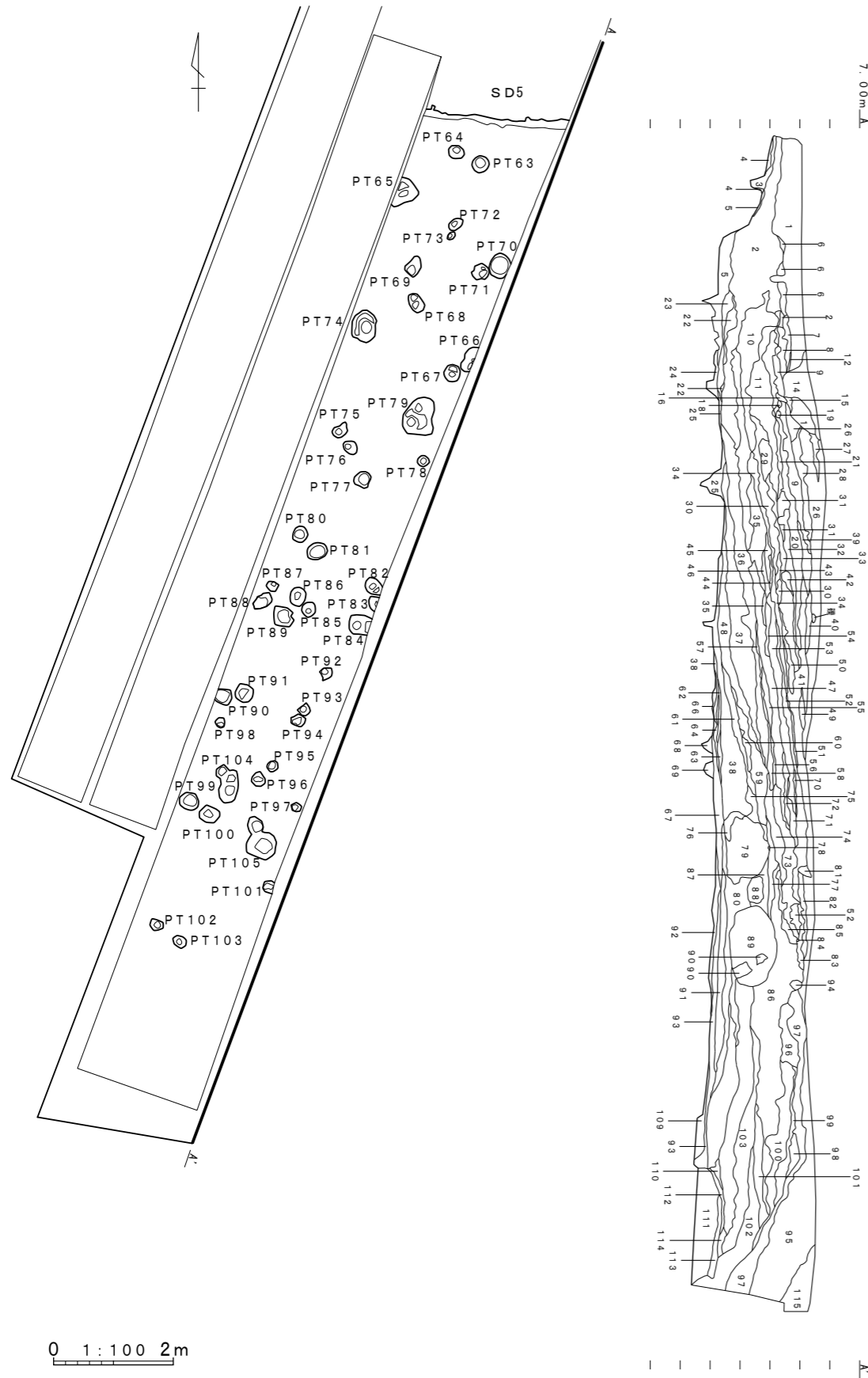


写真46 土壘トレンチ4 外郭土壘とPT群

いが、南北方向に軸を持つ東外堀に東端が切られている。三ノ丸南西部の調査においては、最終段階以前に位置づけられるSD6 (古段階の外堀) 及び古土壘 (本地点では未検出) を破壊したうえで、現存する外郭土壘と外堀が構築されていることが判明しているが、本地点でも南西-北東軸をもつSD6が南北方向に軸を持つ東外堀に切られており、外郭ラインがより外側に広がっていることが確認できる。

土壘トレンチ4・PT群 (第98図・第8表)

外郭土壘の断割トレンチである。黒褐色土と黄色ローム土を用いて版築されている。下層からはPT群が検出されたことから、地山までは掘削を行っていないが、基盤層が平たくなっていることから、



三ノ丸南東部 土壘トレンチ4 A-A'

- 1 黒褐色土 粘性土 φ2~5mmのスコリア5%、φ5mmの炭化物1%、碎石がやや混じりφ30mmの礫有り
- 2 暗赤灰色土 粘性土 φ150~200mm大の締まったブロックが全体に広がりφ2~5mmのスコリア10%を含む
- 3 黒褐色土 粘性土 φ1~5mmの中部ローム土ブロック3%とφ1mmのスコリアを少量含む
- 4 灰褐色土 締まりと粘性が有る粘性土 中部ローム土でφ1mmのスコリアを少量含む
- 5 灰褐色土 締まりと粘性が有る粘性土 中部ローム土でφ1mmのスコリアを少量含む
- 6 黒褐色土 粘性土 ブロック部分は締まりが有り全体に中部ローム土ブロックとφ1~2mmのスコリアを少量含む
- 7 黒褐色土 やや粘性が有る粘性土 φ5~120mmの中部ローム土ブロック10%とφ1~2mmのスコリアを少量含む
- 8 暗灰色土 締まりが有りやや粘性が有る粘性土 全体にφ200mmの中部ローム土ブロックとφ1~3mmのスコリア3%を含む
- 9 黒褐色土 粘性が有る粘性土 φ5~100mm以上の中部ローム土ブロック20%とφ1~2mmのスコリア3%を含む
- 10 黒褐色土 締まりと粘性が有る粘性土 全体に粘性土のブロック(φ300mm以上)とφ2~3mmのスコリア5%を含む
- 11 黒褐色土 粘性土 φ5~20mmの中部ローム土ブロック、φ2~3mmのスコリア3%を含み粘性土ブロック(φ50mm)を多く含む
- 12 黒色土 炭化物層 幅20mm×長さ150mm程度
- 13 黒褐色土 締まりと粘性が有る粘性土 全体にφ30~150mmの中部ローム土ブロックとφ1~2mmのスコリア3%を含む
- 14 黒褐色土 粘性土 φ2~5mmのスコリア1%を含み根が多くφ50mmの礫有り
- 15 灰褐色土 粘性土 φ15~100mmの中部ローム土ブロックとφ1mmのスコリアを少量含む
- 16 暗赤灰色土 締まりの有る粘性土 φ1mmのスコリア3%を含む
- 17 暗赤灰色土 締まりの有る粘性土 φ1~2mmのスコリア1%を含む
- 18 暗赤灰色土 締まりの有る粘性土 φ1mmのスコリア3%を含む
- 19 黒褐色土 締まりと粘性が有る粘性土 φ1mmのスコリアを少量含む
- 20 黒褐色土 粘性が有る粘性土 φ1mmのスコリア1%とφ2~5mmの炭化物を少量含む
- 21 暗赤褐色土 締まりが有り粘性が強い粘性土 φ1~2mmのスコリア1%とφ5mmの炭化物を少量含む
- 22 黒褐色土 粘性が有る粘性土 φ2~5mmの中部ローム土ブロックとφ1~2mmのスコリア3%を含む
- 23 暗灰色土 締まりと粘性が有る粘性土 φ1~3mmのスコリア3%を含む
- 24 赤黒色土 泥炭層 φ1mmの赤いスコリアを少量含む
- 25 暗褐色土 締まりと粘性が有る粘性土 φ2mmのスコリア1%を含む
- 26 黒褐色土 締まりの有る粘性土 φ2~3mmのスコリア3%を含み粘性土のブロック(φ10~60mm)を全体的に含む
- 27 黒褐色土 粘性が有る粘性土 φ2~3mmのスコリア1%を含む
- 28 黒褐色土 粘性が有る粘性土 φ1~2mmのスコリア1%と粘性土の(φ5~50mm)20%を含む
- 29 灰色土 粘性土 φ1~3mmのスコリア3%を含み大型の粘性土のブロックを全体的に含む
- 30 黒褐色土 粘性土 φ10~15mmの中部ローム土ブロックを少量、φ1~2mmのスコリア3%、
- 31 黒褐色土 粘性が有る粘性土 φ5~10mmの中部ローム土ブロック3%、φ2~3mmのスコリア3%、
- 32 黒褐色土 締まりと粘性が有る粘性土 中部ローム土ブロックのみの層でφ1mmのスコリア1%を含み粘性土のブロック(φ30~60mm)10%を含む粘性土のブロック(φ5~50mm)10%を含む
- 33 暗赤褐色土 粘性が有る粘性土 φ1~2mmのスコリア1%と粘性土のブロック(φ10~50mm)を多く含む
- 34 暗赤褐色土 粘性が有る粘性土 φ1~2mmのスコリア1%と粘性土のブロック(φ10~50mm)を多く含む
- 35 黒褐色土 粘性が有る粘性土 φ30~40mmの中部ローム土ブロック3%、φ1~3mmのスコリア3%、
- 36 黒褐色土 締まりと粘性が有る粘性土 φ10~30mmの中部ローム土ブロック10%とφ3~5mmのスコリア5%を含み粘性土のブロック(φ10~50mm)を多く含む
- 37 黒褐色土 粘性土
- 38 灰褐色土 締まりと粘性が有る粘性土 中部ローム土でφ1mmのスコリア1%を含む
- 39 暗赤灰色土 締まりの有る粘性土 φ2~10mmの中部ローム土ブロック5%とφ1~3mmのスコリア3%を含む
- 40 暗赤灰色土 締まりの有る粘性土 φ1~2mmのスコリア1%を含む
- 41 暗紫灰色土 締まりの有る粘性土 φ2~10mmの中部ローム土ブロック1%とφ1~3mmのスコリア5%を含む
- 42 暗紫灰色土 締まりが強くやや粘性が有る粘性土 φ2~3mmのスコリア10%を含む
- 43 暗赤灰色土 粘性が有る粘性土 φ10~20mmの中部ローム土ブロック3%とφ1mmのスコリア1%を含む
- 44 暗赤灰色土 粘性土 φ1~2mmのスコリア1%を含む
- 45 暗赤褐色土 やや締まりが有り粘性が有る粘性土
- 46 暗赤灰色土 粘性土 φ1~2mmのスコリア1%を含む
- 47 暗灰色土 やや締まりが有り粘性が有る粘性土 φ10~40mmの中部ローム土ブロック10%とφ1~3mmのスコリア3%を含む
- 48 黒褐色土 締まりの有る粘性土 φ5~10mmの中部ローム土ブロックを少量とφ1~3mmのスコリア3%を含む
- 49 暗赤灰色土 粘性土 φ5~20mmの中部ローム土ブロックとφ1~3mmのスコリア3%を含む
- 50 黒褐色土 粘性が有る粘性土 φ1mmのスコリアを少量含む
- 51 黒褐色土 やや粘性が有る粘性土 φ2~15mmの中部ローム土ブロック5%とφ3mmのスコリアを少量含む
- 52 暗赤灰色土 締まりの有る粘性土 φ2~5mmのスコリア10%を含む
- 53 暗赤褐色土 粘性が有る粘性土 φ2~3mmのスコリア3%を含む
- 54 暗赤灰色土 やや粘性が有る粘性土 φ2~3mmのスコリア1%を含む
- 55 黒褐色土 粘性が有る粘性土 φ5mmのスコリア3%とφ1~2mmのスコリア3%を含む
- 56 黒褐色土 粘性が有る粘性土 φ5mmのスコリア3%とφ1~2mmのスコリア3%を含む
- 57 黒褐色土 締まりと粘性が有る粘性土 φ1mmのスコリアを少量含む
- 58 黒褐色土 締まりと粘性が有る粘性土 φ1mmのスコリアを少量含む
- 59 黒褐色土 締まりが有り粘性がやや有る粘性土 φ10~40mmの中部ローム土ブロック5%とφ1~3mmのスコリア3%を含む
- 60 暗赤灰色土 粘性土 φ1~2mmのスコリア3%を含む
- 61 黒褐色土 粘性が有る粘性土 φ5~60mmの中部ローム土ブロック10%、φ2~5mmのスコリア3%、φ3mmの炭化物を少量含む
- 62 黒褐色土 粘性が有る粘性土 φ3~10mmの中部ローム土ブロックを少量とφ3~5mmの炭化物1%を含む
- 63 黒色土 粘性が有る粘性土 φ3~10mmの中部ローム土ブロックを少量とφ5~10mmの炭化物1%を含む
- 64 暗赤褐色土 粘性が有る粘性土 黄色い粘土の層
- 65 黒色土 粘性が有る泥炭層 焼土の様な赤い粘土の層を含む
- 66 暗褐色土 粘性が有る粘性土 赤っぽい粘土の層を少し含む
- 67 暗褐色土 粘性が有る粘性土 赤っぽい粘土の層を少し含む
- 68 暗赤灰色土 粘性土 φ3~5mmの炭化物を少量含む
- 69 暗赤灰色土 やや粘性が有る粘性土 φ2~5mmの中部ローム土ブロック3%とφ5mmの炭化物3%を含む
- 70 暗赤灰色土 粘性土 φ1~3mmのスコリア3%を含む
- 71 暗赤灰色土 締まりの有る粘性土 φ3~20mmの中部ローム土ブロックとφ2~3mmのスコリア5%を含む

第98図 三ノ丸南東部 土壘トレンチ4 PT群 平・断面図

- 72 暗赤灰色土 粘性土 φ2～3mmのスコリア5%を含む
- 73 暗赤灰色土 締まりの有る粘土層 φ3～50mmの中部ローム土ブロック10%、φ2～5mmのスコリア5%、粘性土ブロックを多く含む
- 74 暗紫灰色土 粘性土 φ2～5mmのスコリア3%を含む
- 75 黒褐色土 やや粘性が有る粘性土 φ5～20mmの中部ローム土ブロック5%、φ3～10mmのスコリア3%、
- 76 暗灰色土 やや粘性が有る粘性土 φ1mmのスコリアを少量含む
- 77 黒褐色土 やや粘性が有る粘性土 φ5～30mmの中部ローム土ブロックとφ1～2mmのスコリア3%を含む
- 78 黒褐色土 締まりが有りやや粘性が有る粘性土 φ1～2mmのスコリア1%を含む
- 79 暗赤灰色土 粘性土 φ1～2mmのスコリアを少量含む φ100mmの礫有り
- 80 暗赤灰色土 粘性土 φ2～3mmのスコリアを少量とφ2～5mmの炭化物を少量含む
- 81 暗赤灰色土 粘性土 φ2～3mmのスコリアを3%とφ3～5mmの炭化物を3%含む
- 82 暗赤灰色土 やや粘性が有る粘性土 φ3～10mmの中部ローム土ブロック3%、φ2～3mmのスコリア1%、
- 83 暗赤褐色土 締まりと粘性が有る粘性土 φ1mmのスコリアを少量含む
- 84 黒褐色土 締まりの有る粘性土 φ1mmのスコリアを少量含む
- 85 暗赤褐色土 粘性土 φ5～40mmの中部ローム土ブロック10%とφ1mmのスコリア1%を含む
- 86 黒褐色土 粘性土 φ10～20mmの中部ローム土ブロック3%、φ1～3mmのスコリア3%、φ300mmの粘性土のブロックを多く含む
- 87 暗赤灰色土 粘性土 φ1～3mmのスコリア1%を含む
- 88 暗赤灰色土 粘性土 粘性土のブロックを中心とする層でφ2～5mmのスコリア10%を含む
- 89 暗赤灰色土 粘性土 φ1～2mmのスコリアを少量含む
- 90 黒褐色土 粘性土 やや締まりが有り粘性が有る黄色い粘性土 φ1～2mmのスコリアを少量含む
- 91 黒褐色土 やや粘性が有る粘性土 φ1mmのスコリアを少量とφ3～10mmの炭化物1%を含む
- 92 暗赤灰色土 粘性土 部分的に焼土や中部ローム土ブロックを含む
- 93 赤黒色土 泥炭層 φ10mmの中部ローム土ブロック1%を含む
- 94 暗褐色土 締まりの有る粘性土 中部ローム土の塊り
- 95 暗赤灰色土 やや締まりの有る粘性土 φ2mmのスコリア1%を含む
- 96 黒褐色土 締まりの有る粘性土 φ中部ローム土ブロックが主体の層でφ1～2mmのスコリア1%を含む
- 97 暗赤灰色土 やや粘性が有る粘性土 φ10mmの中部ローム土ブロック7%とφ1～2mmのスコリア1%を含む
- 98 黒褐色土 粘性土 φ3～5mmの中部ローム土ブロック3%とφ2～3mmのスコリアを少量含む
- 99 黒褐色土 やや粘性が有る粘性土 φ5～20mmの中部ローム土ブロック10%とφ2～3mmのスコリアを少量含む
- 100 暗赤灰色土 やや粘性が有る粘性土 φ5～40mmの中部ローム土ブロック3%とφ2～3mmのスコリア3%を含む
- 101 暗赤灰色土 やや粘性が有る粘性土 φ1～2mmのスコリア3%を含む
- 102 黒褐色土 粘性土 φ3～5mmのスコリア1%とφ2～5mmの炭化物1%を含む
- 103 暗赤灰色土 粘性土 φ1～2mmのスコリア1%とφ3～5mmの炭化物3%を含む
- 104 黒褐色土 やや粘性が有る粘性土 φ1～2mmのスコリア1%とφ5mmの炭化物3%を含む
- 105 極暗赤褐色土 締まりと粘性が有る粘性土 φ1～3mmのスコリア1%とφ3～8mmの炭化物を少量含むφ2～3mmの炭化物1%を含む
- 106 暗赤灰色土 やや粘性が有る粘性土 φ2～3mmのスコリア3%とφ2～5mmの炭化物3%を含む
- 109 暗赤褐色土 締まりと粘性が有る粘性土 φ1～2mmのスコリア1%を含む
- 110 黒褐色土 やや粘性が有る粘性土 φ2～5mmの炭化物を少量含む
- 111 暗灰色土 締まりの有る粘性土 φ1～2mmのスコリア1%を含む
- 112 暗紫灰色土 締まりが有りやや粘性が有る粘性土 φ2～3mmのスコリア3%を含む
- 113 暗紫灰色土 締まりが有る粘性土 φ2～5mmのスコリア10%を含む
- 114 暗紫灰色土 粘性土 φ1～2mmのスコリア1%を含む
- 115 暗紫灰色土 粘性土 φ5～10mmの中部ローム土ブロック1%を含む

第8表 三ノ丸南東部 PT群計測表

遺構名	幅 (m)	深さ (m)	備考	遺構名	幅 (m)	深さ (m)	備考	遺構名	幅 (m)	深さ (m)	備考
PT63	0.277	0.570		PT78	0.195	0.268		PT93	0.214	0.452	
PT64	0.213	0.230		PT79	0.674	0.697		PT94	0.240	0.376	
PT65	0.497	0.519		PT80	0.269	0.248		PT95	0.193	0.162	
PT66	0.457	0.353		PT81	0.347	0.24		PT96	0.244	0.183	
PT67	0.274	0.242		PT82	0.328	0.231		PT97	0.223	0.302	
PT68	0.343	0.254		PT83	0.249	0.176		PT98	0.171	0.185	
PT69	0.337	0.23		PT84	0.416	0.516		PT99	0.325	0.390	
PT70	0.421	0.182		PT85	0.249	0.383		PT100	0.342	0.487	
PT71	0.292	0.183		PT86	0.315	0.368		PT101	0.229	0.122	
PT72	0.263	0.162		PT87	0.206	0.292		PT102	0.220	0.132	
PT73	0.153	0.095		PT88	0.315	0.537		PT103	0.239	0.185	
PT74	0.523	0.259		PT89	0.412	0.614		PT104	0.636	0.596	
PT75	0.290	0.307		PT90	0.322	0.185		PT105	0.739	0.694	
PT76	0.247	0.405		PT91	0.330	0.214					
PT77	0.269	0.411		PT92	0.234	0.293					

PT群が掘り込まれた造成土より積み始めが行われていると考えられる。

土塁の下層にて検出したPT群は計43基である。規模は比較的揃っているが、配列などは不明である。規模・深さについては第8表に付した。

2号土坑 (SK2 第96図)

土塁トレンチ4の北側にて検出した方形の土坑である。調査時には井戸と考えられ、覆土内から出土した炭化物(平成29年度分析 資料番号3)を分析したが、160±20BPという廃城後の年代が示されている。規模は南北2.0m×東西0.8mを測る。

(6) 三ノ丸北東部 (第99～101図)

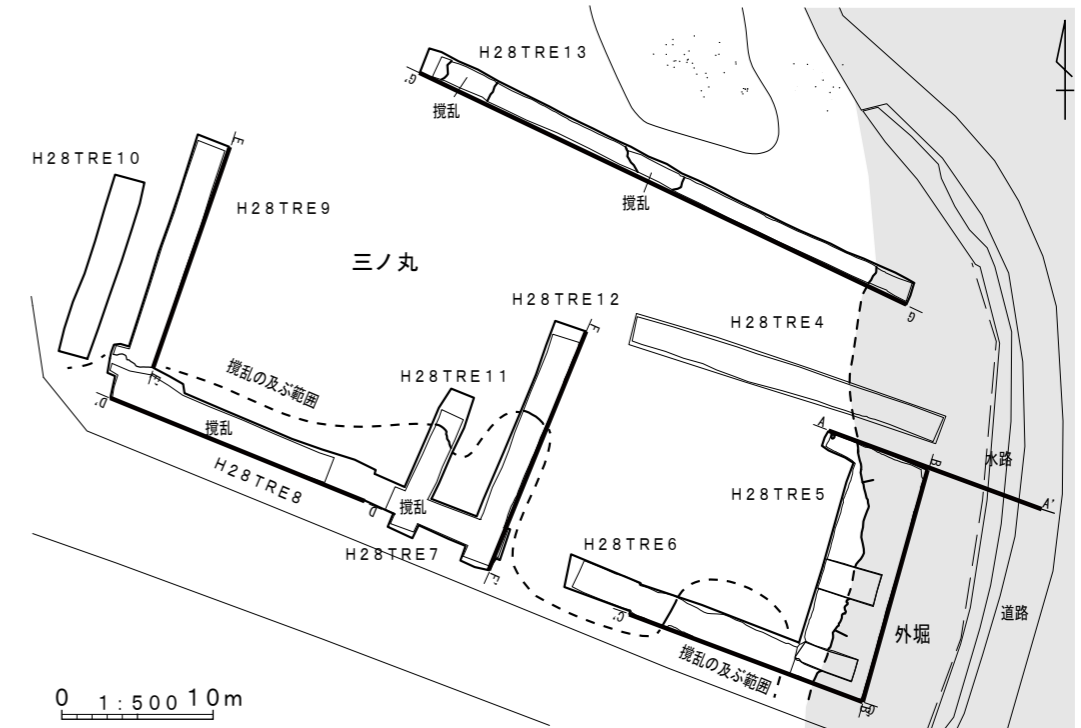
三ノ丸北東部は東大手口の構造を確認するために平成28年度にトレンチ調査を実施した。東外堀と曲輪との境は検出できたものの、全面的に攪乱が及んでおり、本来は存在したであろう土塁や大手門などの遺構は検出されなかった。

第6節 大空堀

(1) 調査の経過と概要

大空堀の調査は平成21年度に実施した。伝天守台の北側が張り出しており、横矢が掛かる構造になっている。現状でも大空堀の堀幅は最大で約30m、伝天守台からの標高差は15mを測る。興国寺城跡の最大の空堀である。ここにトレンチを5本設定して堀底の検出に努めた。

大空堀の東側には南北に並行する2条の空堀が存在している。北側の堀は直線的に東西に走り、TRE1とTRE2の間で南側の空堀に切られる。したがって、北側の空堀を「大空堀(古)」とし、南側の空堀を「大空堀」と呼称する。(第102図)



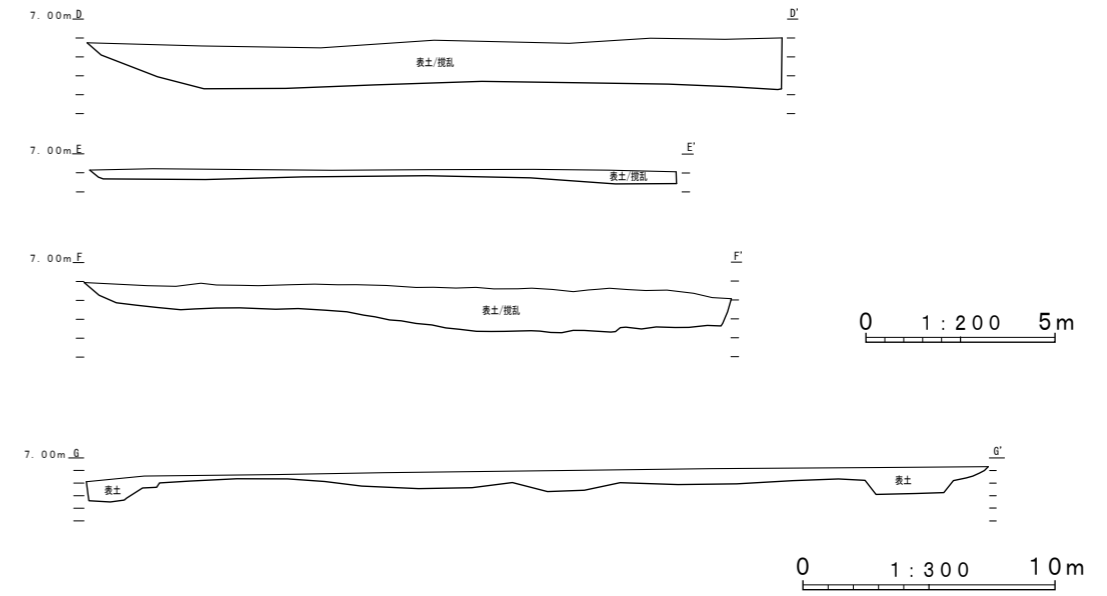
第99図 三ノ丸北東部 全体平面図



三ノ丸北東部 A-A'・B-B'・C-C'

- 1 表土=埋土
- 2 暗赤褐色土 褐色土層、締りなし、旧表土、現代遺物が混入。粘性弱い
- 3 暗赤褐色土 中部ローム土ブロックが多量に混じる φ200mmまで締りなし 粘性やや強い、現代遺物混じる 大小炭化物も混じる
- 4a 暗褐色土 締りなし、粘性弱い、褐色土、赤褐色の微粒子を多量に含む 中世から近世遺物を含む
- 4b 黒褐色土 黒褐色土層径20mmまでの中部ローム土ブロックφ2mmの橙色スコリア粒が混じる 中世から近世遺物を含む
- 4c 褐色土 褐色土層、締りややあり、粘性強い 中世の遺物を含む
- 4d 暗褐色土 暗褐色土に黄褐色土ブロックφ30mmが混じる。締りなし、粘性弱い
- 4e 褐色土 褐色土層、締りなし、粘性弱い、若干黄色ローム土が混じる
- 4f 黄色土 中部ローム土ブロック
- 4g 褐色土 褐色土層中に、径20mmの黄褐色土ブロックと黒色土が混じる。締りやや強い、粘性やや強い
- PT1 褐色土 締りなし、粘性弱い、褐色土、200mm程度の石が3つ詰まっている 方形、柱痕または芋穴

第 100 図 三ノ丸北東部 断面図 (1)



第 101 図 三ノ丸北東部 断面図 (2)



写真 47 H28TRE5 外堀検出状況 1 (東から)



写真 48 H28TRE5 外堀検出状況 2 (北から)

(2) 大空堀

大空堀 TRE1 (第 103 図)

TRE1 は東外堀との接続部に設定し、大空堀及び大空堀(古)の規模等を確認することを目的とした。大空堀(古)は幅 4.7 m で、岩盤層を掘り込んでおり、堀底は未検出であるが、確認できている範囲で深さ約 2.0 m を測る。堀底の標高は大空堀と同等、もしくはそれ以上の深さである。

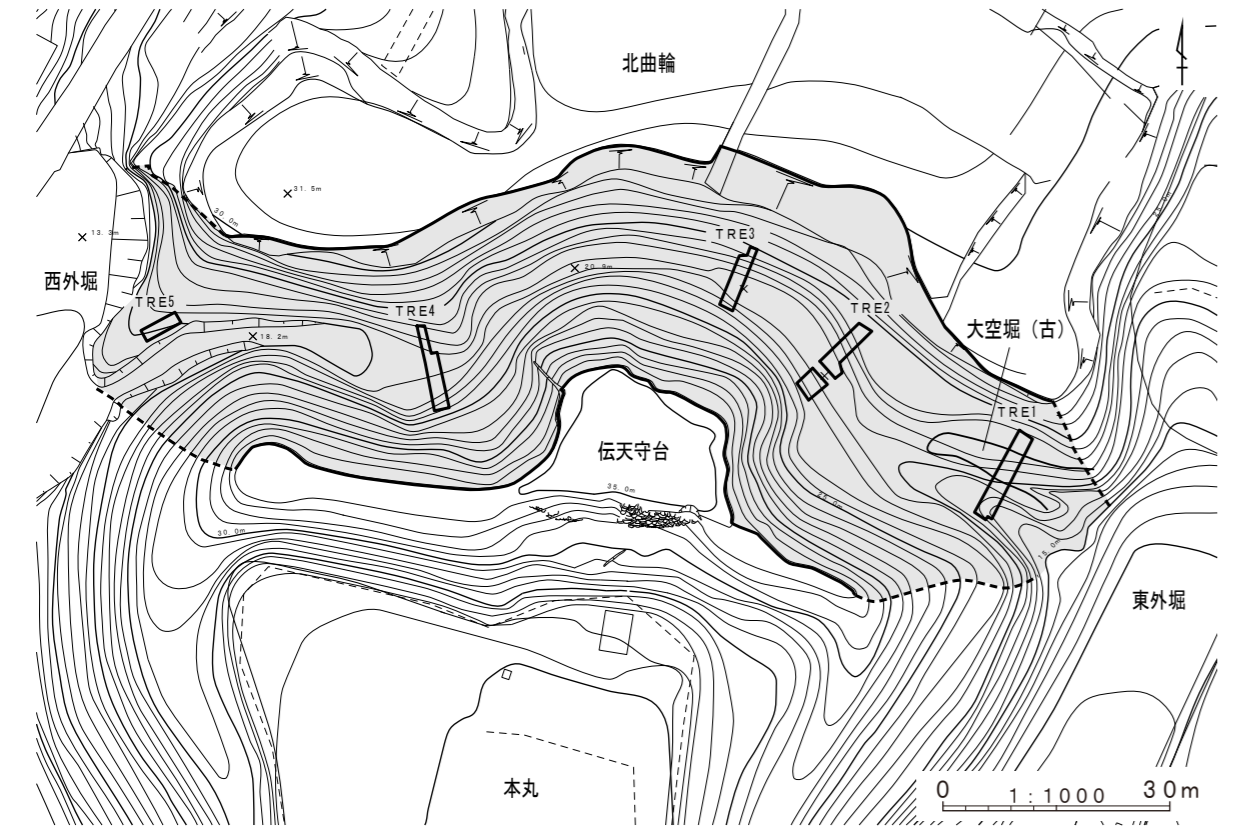
一方、南側の大空堀は北側肩部と堀底までの調査を実施している。堀底幅はトレンチ西側セクションでは 1.0 m であるが、谷へ下っていく東側では 0.3 m と狭くなっている。堀底の形態は西側では箱堀で、狭くなった東側では葉研堀(断面 V 字状)である。東側の堀底の標高は 15.0 m で、伝天守台との比高差は約 20.0 m を測る。遺物は出土していない。

大空堀 TRE2 (第 104 図)

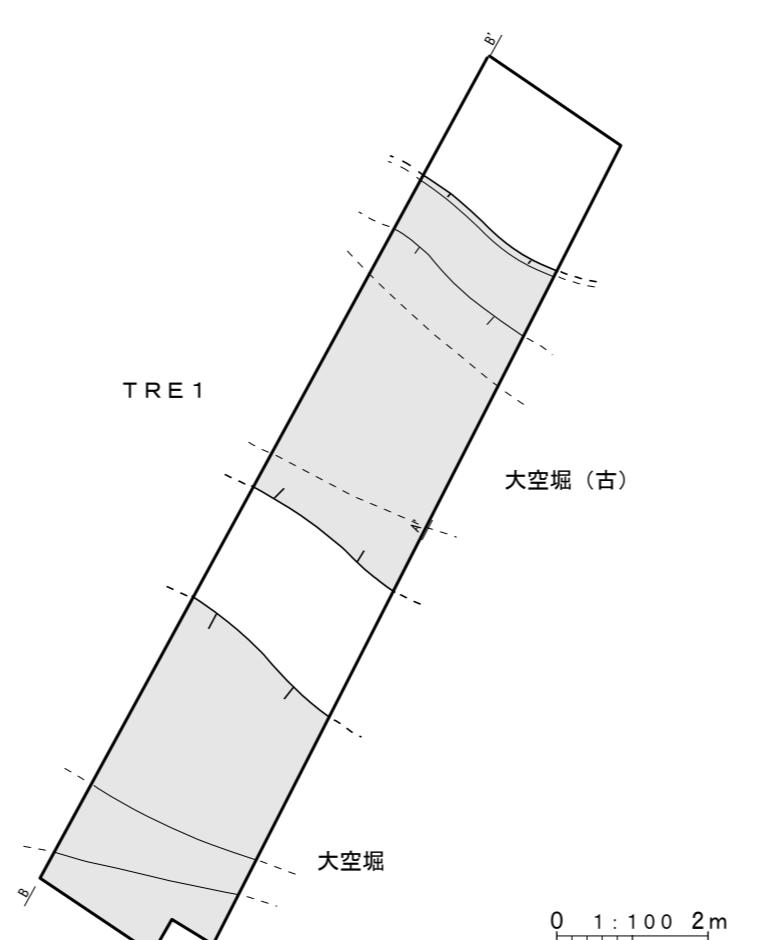
伝天守台の北東側に設定し、大空堀の中段から堀底までを調査した。北曲輪側には標高 21 m の地点で、幅約 3.0 m の平坦面が認められ、その上層には整地層が確認されている。平坦面から堀底までは深さ 4.5 m で、約 70 度で岩盤が掘り込まれている。堀底の標高は 16.5 m で、その形態は半分のみの調査であるが、箱形を呈していると考えられ、その幅は約 2.5 m である。近代までの遺物が出土するが、中世～近世初頭の出土遺物には大窯 3 段階後半の初山耳付水注(遺物番号 616)がある。

大空堀 TRE3 (第 105 図)

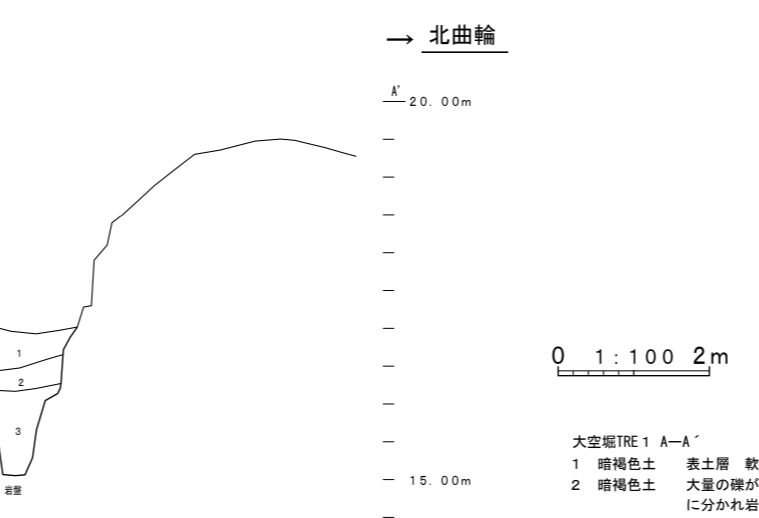
TRE3 は伝天守台の北側に設定した。大空堀の中段と堀底の確認調査である。また TRE2 と同様、北曲輪側に平坦面が認められるが、こちらは 2 段ある。上段の平坦面 1 が確認される標高は 22.5 m、下段の平坦面 2 は 21.7 m で、平坦面 2 は TRE2 と大きな差はないが、その幅は 1.5 m と狭く、またそこから堀底までの深さも約 2.5 m と TRE2 と比べて浅くなっている。TRE2 より掘り込みが 2.0 m 浅いため、堀底の標高は 18.5 m で、堀底幅は 2.0 ～ 2.5 m を測る。出土遺物にはかわらけ(遺物番号 617)がある。



第 102 図 大空堀 トレンチ配置図



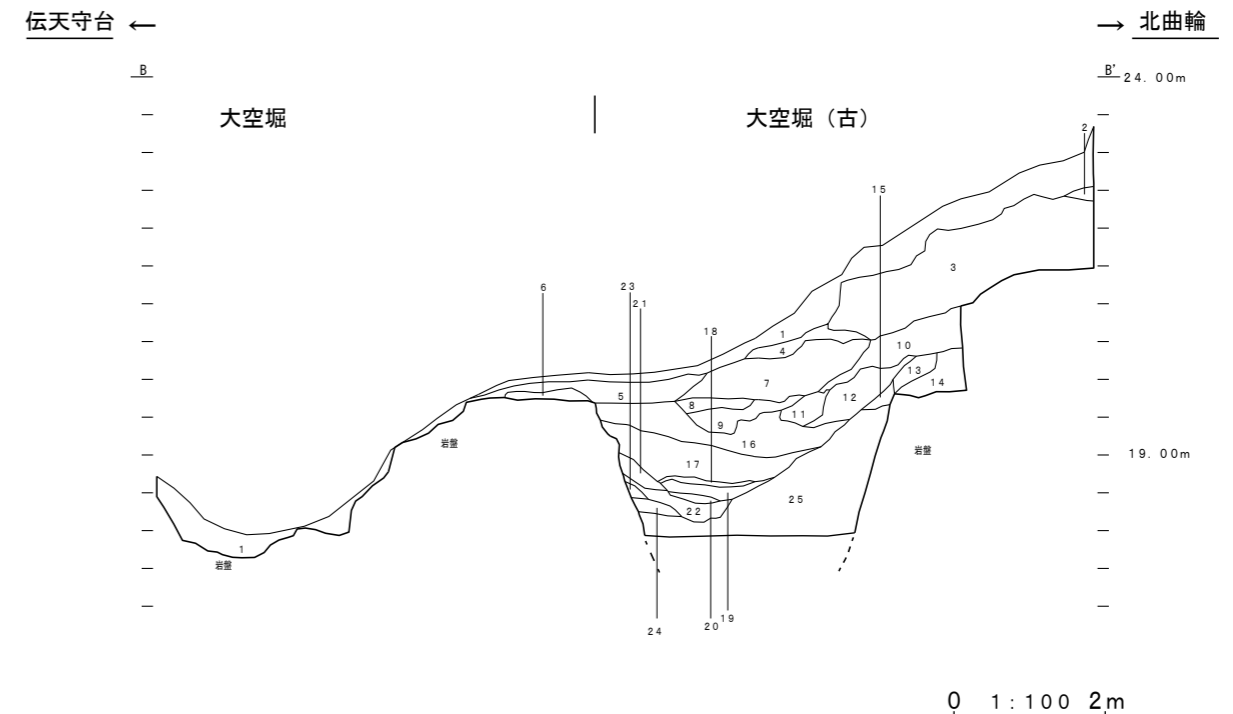
0 1:100 2m



大空堀 TRE1 A-A'

- 1 暗褐色土 表土層 軟質で細かく粘性弱い 角礫を混入するも少量
- 2 暗褐色土 大量の礫が混入し礫の隙間に土が存在する、軟質で締まりが無く粘性弱い、φ1～3cm 大の礫と φ10～20cm 大の礫(ぼとんど角)に分かれ岩盤が崩れたものと思われる
- 3 黒褐色土 軟質で締まり無く粘性弱い、上層に似るが礫の混入度合いは若干少なく φ50～60cm 大の大礫も含まれる

第 103 図 大空堀 TRE1 平・断面図



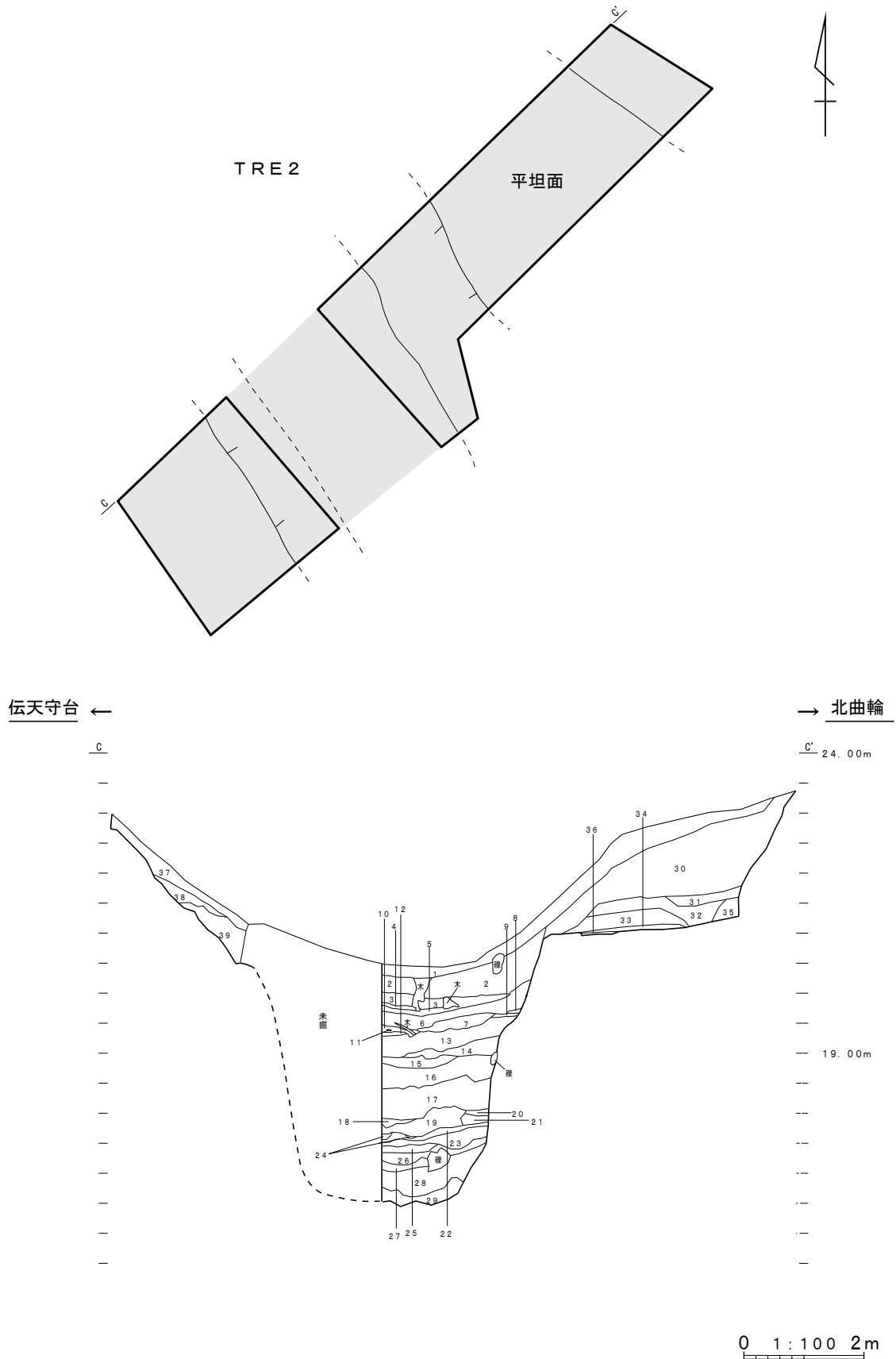
0 1:100 2m

- 大空堀 TRE1 B-B'
- 1 褐色土 表土層 中部ロームブロック(小)を多く混入する
 - 2 黒褐色土 締まりは普通で粒子は細かくローム粒を含む
 - 3 黄褐色土 硬質で中部ロームの塊との間に黒色土混入する、ロームは非常に硬質で移挿ゴテに跳ね返る
 - 4 暗褐色土 黒色土とロームの混土層、軟質でスカスカ、粘性弱い
 - 5 黒褐色土 やや軟質で粒子はやや細かく粘性は弱い、ローム・スコリア粗粒を多く含む
 - 6 暗褐色土 やや硬質で粒子細く小礫を混入する、やや粘性有り
 - 7 黒褐色土 ローム(黄褐色土)の混土層、北側はローム、黒の部分は軟質で粘性弱い、ローム部分はやや締まりが悪く黒土が入り込む
 - 8 黒褐色土 やや脆く粘性弱い、ロームの小ブロックを混入する
 - 9 黄褐色土 ロームを主体として黒土が少量混入する、全体に締まりが悪く粘性は弱い
 - 10 黄褐色土 硬質で中部ロームの塊と間の褐色土との混成層、脆い
 - 11 黄褐色土 ロームを主とした層、やや硬質で粘性有り
 - 12 暗黄褐色土 ロームブロックの崩壊土、非常に脆く粘性は強い
 - 13 黒褐色土 やや軟質だが締まりは普通で粘性弱い、ロームの小ブロックを混入する
 - 14 黄褐色土 非常に硬質でやや粘性強く中部ロームそのものか? 乾燥すると脆く崩壊する
 - 15 暗褐色土 やや硬質で締まりは良く粘性弱い、ロームの粗粒を混入する
 - 16 黒褐色土 ロームとの混土層、真ん中付近で混じり合う(北側はロームが多い)全体に締まりは悪く北側では締まりが良くなり粘性も強くなる
 - 17 黒色土 粒子は細かく緻密で良く締まっている、硬度は低くロームの細粒を混入する
 - 18 黒褐色土 締まりが悪くサラサラと流れる、軟質で粒子は粗い、赤色スコリア粒を混入する
 - 19 黒褐色土 硬質で締まりは良い、粒子は細かく粘性も弱い
 - 20 黒褐色土 締まりが悪くサラサラ、18層と同質
 - 21 黒褐色土 硬質で締まりが良く緻密、19層と同質
 - 22 黒褐色土 硬質で締まりは良く粒子は細かく粘性弱い
 - 23 暗褐色土 硬度、粘度は普通で粒子は細かい
 - 24 褐色土 褐色土と岩盤崩壊層の混成層、全体に締まりは良くやや硬質でロームも混入する
 - 25 褐色土 やや硬質で締まりは良い、粘性は普通でロームの粗粒やスコリア粒と φ10cm 大のロームブロックを混入し下部でロームが少なくなる

大空堀 TRE1 B-B'

- 1 褐色土 表土層 中部ロームブロック(小)を多く混入する
- 2 黒褐色土 締まりは普通で粒子は細かくローム粒を含む
- 3 黄褐色土 硬質で中部ロームの塊との間に黒色土混入する、ロームは非常に硬質で移挿ゴテに跳ね返る
- 4 暗褐色土 黒色土とロームの混土層、軟質でスカスカ、粘性弱い
- 5 黒褐色土 やや軟質で粒子はやや細かく粘性は弱い、ローム・スコリア粗粒を多く含む
- 6 暗褐色土 やや硬質で粒子細く小礫を混入する、やや粘性有り
- 7 黒褐色土 ローム(黄褐色土)の混土層、北側はローム、黒の部分は軟質で粘性弱い、ローム部分はやや締まりが悪く黒土が入り込む
- 8 黒褐色土 やや脆く粘性弱い、ロームの小ブロックを混入する
- 9 黄褐色土 ロームを主体として黒土が少量混入する、全体に締まりが悪く粘性は弱い
- 10 黄褐色土 硬質で中部ロームの塊と間の褐色土との混成層、脆い
- 11 黄褐色土 ロームを主とした層、やや硬質で粘性有り
- 12 暗黄褐色土 ロームブロックの崩壊土、非常に脆く粘性は強い
- 13 黒褐色土 やや軟質だが締まりは普通で粘性弱い、ロームの小ブロックを混入する
- 14 黄褐色土 非常に硬質でやや粘性強く中部ロームそのものか? 乾燥すると脆く崩壊する
- 15 暗褐色土 やや硬質で締まりは良く粘性弱い、ロームの粗粒を混入する
- 16 黒褐色土 ロームとの混土層、真ん中付近で混じり合う(北側はロームが多い)全体に締まりは悪く北側では締まりが良くなり粘性も強くなる
- 17 黒色土 粒子は細かく緻密で良く締まっている、硬度は低くロームの細粒を混入する
- 18 黒褐色土 締まりが悪くサラサラと流れる、軟質で粒子は粗い、赤色スコリア粒を混入する
- 19 黒褐色土 硬質で締まりは良い、粒子は細かく粘性も弱い
- 20 黒褐色土 締まりが悪くサラサラ、18層と同質
- 21 黒褐色土 硬質で締まりが良く緻密、19層と同質
- 22 黒褐色土 硬質で締まりは良く粒子は細かく粘性弱い
- 23 暗褐色土 硬度、粘度は普通で粒子は細かい
- 24 褐色土 褐色土と岩盤崩壊層の混成層、全体に締まりは良くやや硬質でロームも混入する
- 25 褐色土 やや硬質で締まりは良い、粘性は普通でロームの粗粒やスコリア粒と φ10cm 大のロームブロックを混入し下部でロームが少なくなる

大空堀 TRE1 B-B'



第 104 図 大空堀 TRE2 平・断面図

- 大空堀TRE2 C—C´
- 1 暗褐色土 表土 やや軟質で粒子は細かい、サラサラした状態
 - 2 黒褐色土 やや硬質で締まりは普通、粒子は細かく、ローム粗粒とスコリア粒が混入する、岩盤の溶岩流（φ10cm）の塊を少量含む、砂粒状の流れの部分有
 - 3 暗褐色土 やや暗い色調を帯びる、締まりは良く粒子は細かい、ローム・スコリア粒を多く含む、砂粒状の流れ有り
 - 4 黒褐色土 締まりは普通、粗砂粒を混入し、ローム粗粒やスコリア粒も含む
 - 5 黒褐色土 4層よりやや明るい、締まりは普通で粒子は細かい、やや軟質でローム粗粒を多く含む、スコリア粗粒や砂粒を混入する
 - 6 暗褐色土 締まりは良好で粒子は細かい、ローム・スコリア粒を含む、岩盤の崩れた塊を混入する、粘性有り
 - 7 暗褐色土 やや脆く締まりが悪い、粒子は細くローム小ブロック及びスコリア粒を多量に含む
 - 8 暗褐色土 7層に近い、締まりが悪くサラサラしている、粒子は細く締まりが悪くローム粒を含み粘性弱い
 - 9 暗褐色土 締まりが悪くサラサラしている、粒子は細くローム粒を含み粘性弱い
 - 10 暗褐色土 締まりは良く粒子は細かい、硬質で粘性は有る、ローム・スコリア粗粒を含む
 - 11 褐色土 サラサラして締まり無く、砂粒状を呈する、粘性弱い
 - 12 暗褐色土 硬質で粒子細かく粘性有り
 - 13 暗褐色土 硬質で粒子細かく粘性有り、ブロック状の砂粒の塊が有り、ロームの粗粒を混入する
 - 14 暗褐色土 上層よりやや暗い、粗粒とローム粗粒を主とした混成層、粘性が極めて弱く、φ3～4mmの砂礫を含む
 - 15 暗褐色土 非常に硬質で粒子が細かい、ロームブロックを混入しローム粗粒も含む
 - 16 黒褐色土 硬度は普通だが締まりは良い、やや粘性が有り粒子は細かい
 - 17 明褐色土 硬質で締まりが良い、ロームを主としやや粘性有り
 - 18 明褐色土 上層よりやや暗く硬度もやや低い、粘性は極めて弱くロームの粗粒を混入する
 - 19 褐色土 硬質だが全体に脆い、ローム・スコリア粗粒の塊を斑状に含み小礫～φ10cm大の角礫を混入する
 - 20 暗褐色土 締まりが悪く脆い、ローム・スコリア粗粒を含む
 - 21 黒褐色土 岩盤破砕片が多量に混じり、粒子は細かい
 - 22 黒褐色土 硬質で締まりが良く緻密で粒子は細かい
 - 23 暗褐色土 岩盤破砕片が多量に混じり、粘性は強い、粒子は細くφ2～10cm大の礫を混入する
 - 24 褐色土 非常に硬質で締まりが良い、粒子が細かく粘性有り、拳大の礫を含む
 - 25 暗褐色土 硬質で締まりが良い、粘性が弱く粒子は粗い
 - 26 黒褐色土 軟質だが締まりは良い、粒子は細かく小礫を含む
 - 27 黒褐色土 砂砂利の礫を多量と岩盤破砕片を混入し5cm大の礫も含まれる、硬質だが脆くやや粘性有り
 - 28 黒褐色土 上層に酷似する、φ10～20cm大の礫がやや大きくなる
 - 29 黒褐色土 27層に酷似する、φ5～10cm大の礫及び1cm大前後の小礫を多数混入する
 - 30 暗褐色土 硬質で締まりが良い、粒子は細かく極少量だが5cm大のロームブロックを混入する
 - 31 褐色土 やや軟質で締まりは良い、ロームの粗粒を混入しやや粘性有り、造成地業の整地された層
 - 32 暗褐色土 30層よりやや明るい、軟質だが締まりは良い、ロームブロック（φ0.5～3cm大）を混入する、造成地業の整地された層
 - 33 褐色土 ロームと褐色土との混成層 上部にφ0.5cm大の小礫が混入する、造成地業の整地された層
 - 34 暗褐色土 岩盤の真上に位置する、やや軟質で脆く小礫を含む
 - 35 暗褐色土 やや軟質だが締まりは良い、ローム及びローム粗粒を混入する、造成地業？
 - 36 黄褐色土 岩盤
 - 37 暗褐色土 表土層 締まりが無く軟質でフワフワしている
 - 38 明褐色土 中部ロームの崩壊土を主とする、若干の暗褐色土を混入し、軟質で締まり無し
 - 39 暗褐色土 ロームと褐色土との混成層、軟質で締まり無し

大空堀 TRE4（第 106 図）

伝天守台西側に設定した TRE4 では平坦面と堀底を確認した。平坦面は TRE2 や TRE3 と比べて凹凸が激しい。平坦面が確認される標高は 20.2 m～20.5 m で、TRE3 よりも 1.5 m ほど低い。幅は約 3.0 m である。平坦面から堀底までは 2.0 m の深さを測り、堀底の標高は 18.2 m である。出土遺物には大窯 2 段階の瀬戸美濃稜皿（遺物番号 614）がある。

大空堀 TRE5（第 107 図）

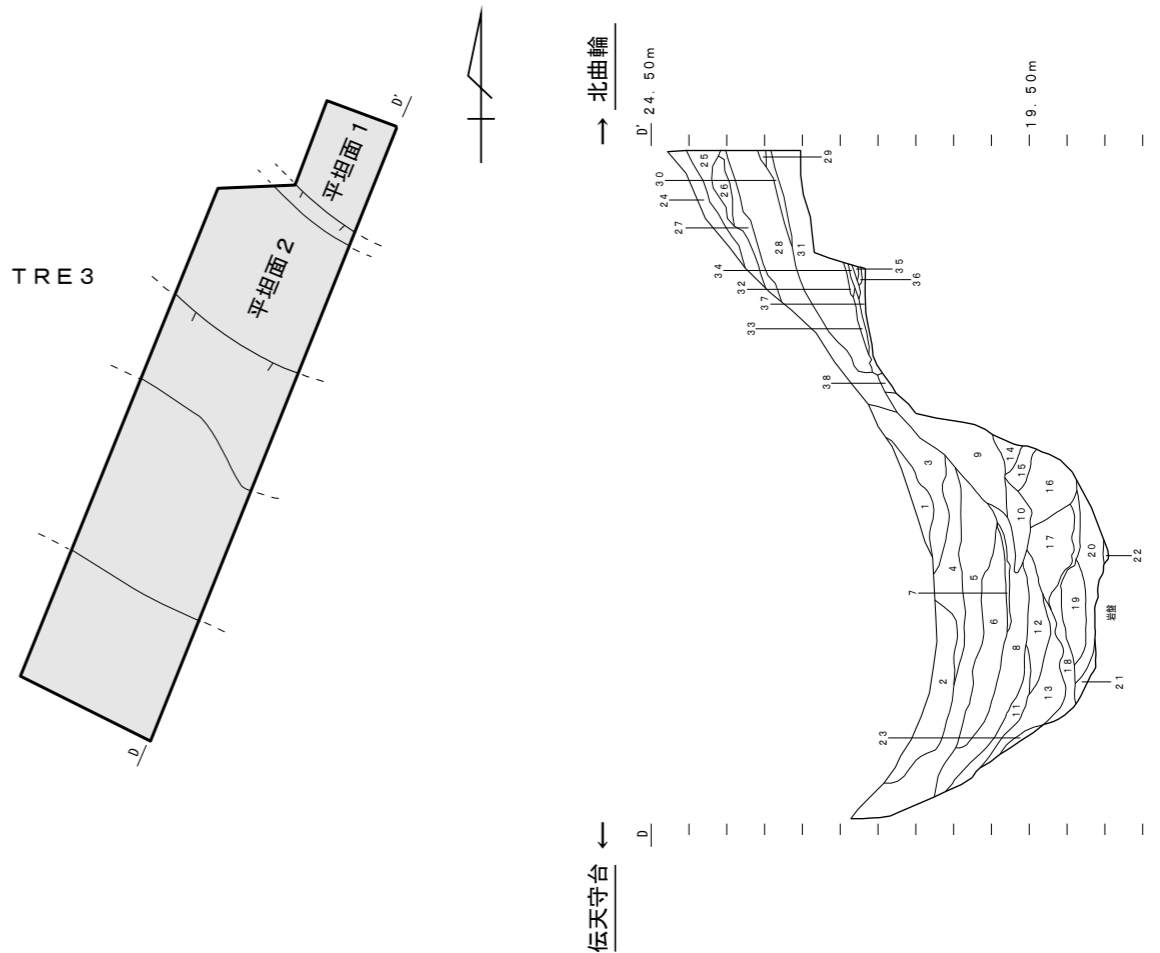
大空堀と西外堀との接続部にトレンチを設定した。トレンチ内すべてにおいて、平坦に削平された岩盤層が検出されたため、堀底を確認していると考えられる。岩盤を確認した標高は約 19.5 m で、トレンチは 5.0 m 幅であることから、本地点の堀底は少なくとも 5.0 m 以上である。出土遺物には登窯第 4・5 小期の瀬戸美濃反皿（遺物番号 615）がある。

第 7 節 北曲輪

(1) 調査の経過と概要

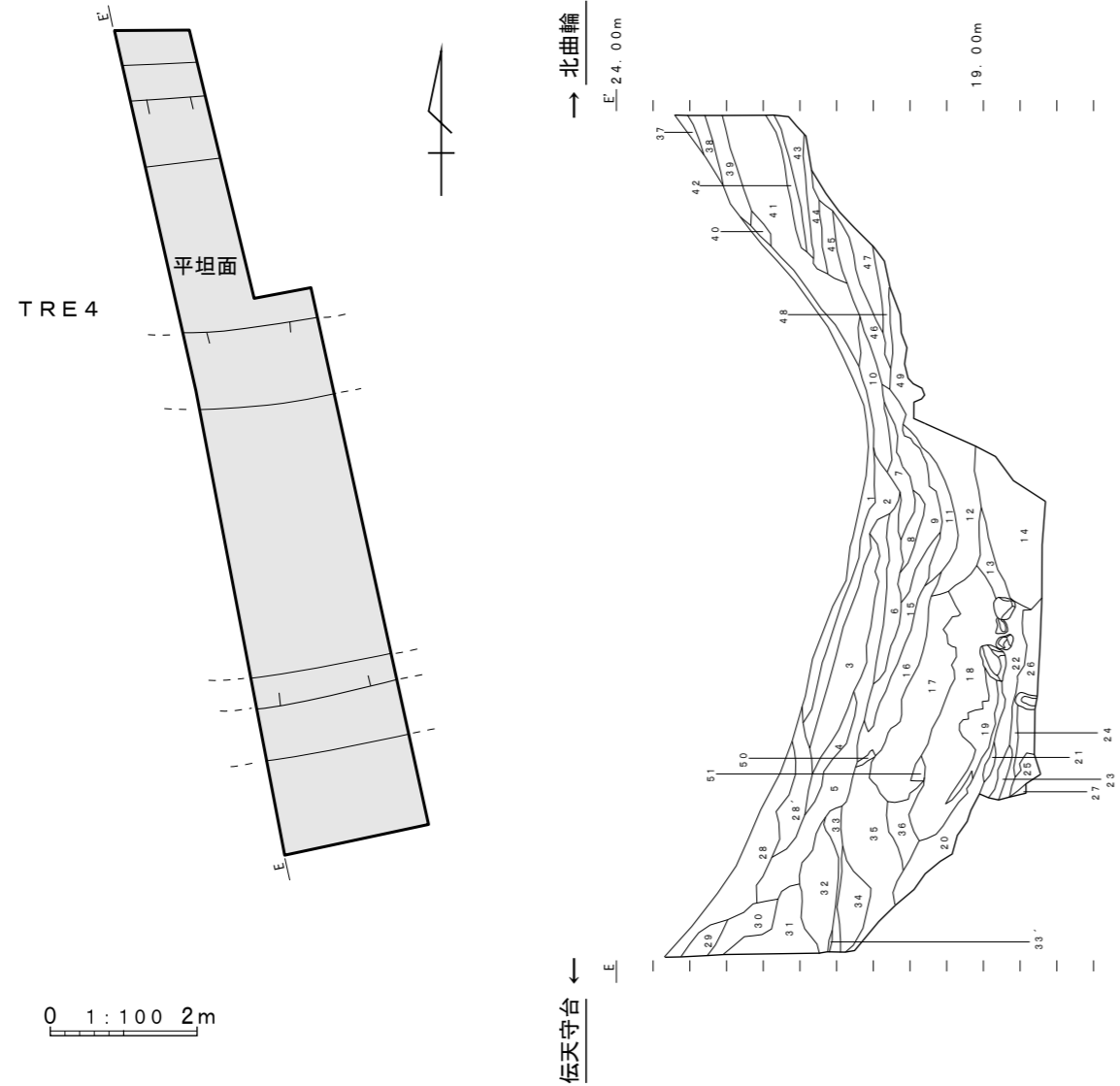
北曲輪は、興国寺城跡の最北端の曲輪で、曲輪の南西部には南西へ張り出した小曲輪が付随する。北端は新幹線によって滅失している。平成 13・14 年度に空堀 1 の試掘調査を経て、平成 19～21・29・30 年度に本格的な調査を実施した（第 108・109 図）。調査範囲は、曲輪のほぼ全面に及んでいるが、平成 20 年度の調査は平面的に空堀 2 の遺構プランの確認を行ったのみで、下部までの調査は実施していない。そのため、本項では平面確認を行った地点以外の調査区を第 1～第 7 調査区と便宜的に分割して報告する（第 112・113 図）。

絵図において城郭の北端は大空堀となっており、北曲輪は「此間一面二原」とあって、「土居」の存在は描かれているものの、詳細な内容は残されていない（第 110 図）。しかし興国寺城の絵図と類似性が指摘される「城築規範」の「駿河禅徳寺城」（史料編 第五章 史料番号 11）には、馬出と南西の小



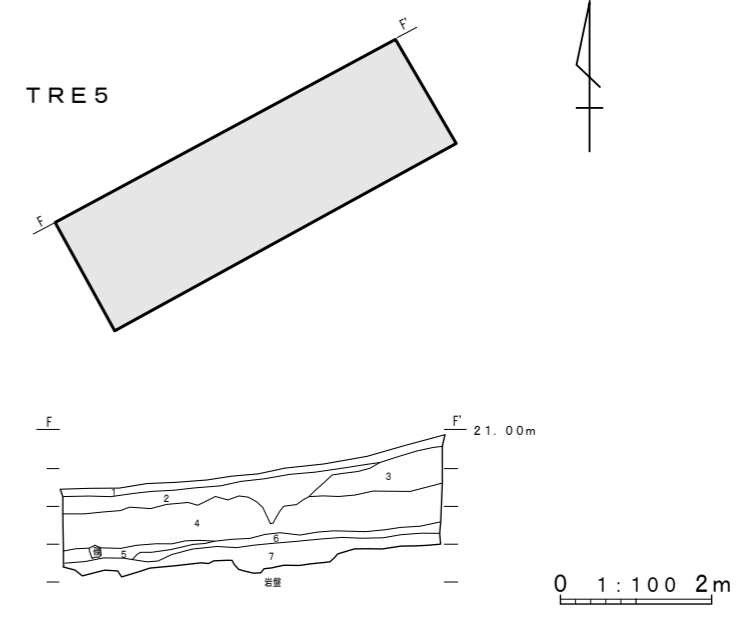
- 大空堀TRE 3 D—D´
- 1 黒褐色土 やや軟質でバサバサしている、粘性弱い
 - 2 黒褐色土 軟質で粒子は細かく粘性は弱い
 - 3 暗褐色土 締まりは良く粘性は普通、板状の溶岩片を混入する
 - 4 暗褐色土 非常に硬質で踏み固められている、粗粒は水平堆積をし、薄い層をなす、ローム粗粒を含む
 - 5 暗褐色土 砂質だが締まりは良い、ローム粒を含み5cm大の礫を混入する
 - 6 褐色土 ロームブロックと黒色土の混成層、互層をなし全体に締まりは良い、粘性は普通
 - 7 黒色土 非常に硬質で踏み固められている、粒子は細かく粘性は普通、かつての道路の痕跡
 - 8 黒色土 全体に締まりが良く踏み固められている、4回の互層が確認できる、ロームブロック及び5cm大の礫を混入する
 - 9 暗褐色土 やや軟質で締まり・粘土は普通、ローム小ブロック・ローム粗粒・スコリア粗粒を混入する
 - 10 暗褐色土 北側に黒色土、南側に褐色ロームの流入土となる、締まりが悪く粘性は普通
 - 11 暗褐色土 硬質で締まりは良く粘性弱い、ロームの小ブロック、スコリア粗粒を多く含む
 - 12 暗褐色土 硬質で締まりが良く粘性弱い、ロームの小ブロックを多く含む、スコリア粗粒を多く含む
 - 13 黒褐色土 硬質だがやや脆い、ローム小ブロック・黒色土ブロック・ローム粗粒を多く含む、砂粒は流入層をなす
 - 14 褐色土 締まりが無く脆い、ロームに黒褐色土が混入したものでサラサラしている、15・16層が一層に流入したもので締まりが無く脆い、ややサラサラした感じ
 - 15 暗褐色土
 - 16 暗褐色土 ロームを主とした黒褐色土
 - 17 暗褐色土 硬質で締まりは普通で粘性は弱い、粗い黒土の粒子及び破砕片を混入する
 - 18 褐色土 硬度は普通でやや粘性有り、北はロームが多く南は褐色土で硬質、ロームブロック（第三スコリア）多量に混入する
 - 19 暗褐色土 色調は黒い、硬質で締まりは普通で粘性は弱い、破砕片を混入する
 - 20 暗褐色土 粒子は細かく締まりは良好、硬質で粘性は弱い、ロームの粗粒を多く含む
 - 21 暗褐色土 色調は黒味を帯びる、硬質で脆く粘性は弱い、破砕片、ロームの粗粒を多く含む
 - 22 黒褐色土 脆く締まりは悪い、粗い砂粒を含む
 - 23 明褐色土 粒子は細かく粘性は強くやや軟質
 - 24 黒褐色土 表土層 軟質で粒子細かくサラサラしている、粘性は弱い
 - 25 暗褐色土 軟質で粒子が細かく粘性は弱い、サラサラして締まりが悪い
 - 26 褐色土 ロームブロックと褐色土との混成土、締まりが悪く脆いが粘性は強い
 - 27 黄褐色土 締まりは非常に良く粘性は強い、ローム土を主とする
 - 28 黒色土 やや軟質だが締まりは良い、粒子が細かく粘性は弱い、ローム粒子、岩盤に破砕片を混入する
 - 29 明褐色土 締まりは良好でやや粘性有り、ローム土を主とする崩壊土、ローム粗粒を含む
 - 30 褐色土 やや硬質で締まりは良い、やや粘性が有り小礫を混入する
 - 31 明褐色土 締まりは非常に良い、下部ロームの地山か？硬質で粘性強い、粒子が細かく芋石混入する、岩盤の破砕片は細かく粘性が有り多量に混入する
 - 32 暗褐色土 硬質で良く締まる、粘性が弱く小礫・破砕片を多く混入する
 - 33 暗褐色土 32層より黒味を帯びる、小礫・破砕片を多く混入する
 - 34 明褐色土 硬質で締まりが良く細かい、粘性が有り小礫を混入する
 - 35 黒褐色土 硬質で粘性が弱くやや脆い、ローム粒を含み小礫を混入する
 - 36 明褐色土 硬質で締まりが良く粘性は普通、粒子は細かくサラサラしている
 - 37 黒褐色土 やや軟質で締まりは良い、粘性は弱くローム粒を含む
 - 38 明褐色土 ロームを主とし軟質で粘性は普通、締まりは良い

第 105 図 大空堀 TRE3 平・断面図



- 大空堀TRE4 E-E'
- 1 暗褐色土 表土層 やや軟質で締まりは良く粒子は細かい
 - 2 暗褐色土 やや軟質だが締まりは良い、ローム小ブロック及びローム粗粒、黒土ブロックを混入する
 - 3 暗褐色土 硬度は普通で粘性は弱い、ローム粗粒を含む
 - 4 暗褐色土 色調は黒味を帯びる、比較的軟質で粘性は普通、ローム粒を混入する
 - 5 褐色土 やや硬質で締まりは良い、粘性は普通でローム小ブロック及びローム粗粒を混入する
 - 6 黒褐色土 色調はやや明るみを帯びて、軟質で粘性は弱い
 - 7 黒褐色土 6層よりやや明るい、軟質で粘性は弱い、ローム小ブロックと粗粒を多く混入する
 - 8 暗褐色土 やや軟質だがやや強い、締まりは悪くローム小ブロックと粗粒を混入する
 - 9 暗褐色土 ロームブロックと褐色土との混成層、締まりは悪く脆い、モザイク状を呈する
 - 10 暗褐色土 1層よりやや暗い、非常に硬質で良く締まっている、粒子は細かくやや粘性が有る
 - 11 黒褐色土 硬質で締まりが良い、粒子が細かく粘性弱い、ロームとスコリアの粗粒を混入する
 - 12 褐色土 ローム崩壊土、南側では影響を受け黒味を増す、1~2cm大の小礫や砂利を混入締まりは良く粘性はやや強い
 - 13 暗褐色土 やや軟質で締まりは普通、スコリアの粗粒を混入する、礎石状の大礫がままとって検出される
 - 14 黄褐色土 ローム崩壊土、色調はモザイク状を呈し、ロームの隙間に黒色土が重鎮される
 - 15 黒褐色土 硬質で脆い、北側から崩落した流入土と思われる
 - 16 褐色土 粒子は細かく締まりは良い、やや硬質だが粘性は弱い、ローム・スコリアの粗粒を混入する
 - 17 黒色土 やや軟質だが締まりは良い、ロームの粗粒が層状になしロームブロックも流入する
 - 18 褐色土 やや硬質で締まりが有り、粒子は細かい、粘性は弱く部分的にロームブロックの第三スコリア帯や褐色土を混入する、ロームの粗粒を少量含む
 - 19 褐色土 黒土とスコリア粗粒(ロームを含む)ロームの混成層、全体としては脆く、19層と同一か?
 - 20 明褐色土 やや軟質で粘性は弱い、オレンジ色のスコリア群が層状になる、18層と同一か?
 - 21 明褐色土 硬質で締まりは非常に良い、移植ゴテで削るとジョリジョリ音がする
 - 22 明褐色土 粘性は普通で、中部ロームの崩壊土の流れと思われる
 - 23 明白灰褐色土 締まりは非常に良く硬度は普通で白い部分は粘性が高い
 - 24 明褐色土 色調は20層より明るい、やや軟質で締まりは良くない、粒子は粗いがサラサラしている
 - 25 暗褐色土 粘性は弱く扁平礫が検出される
 - 26 暗褐色土 オレンジ色を帯び軟質で脆くサラサラしている、スコリア粗粒を主とし粘性弱い
 - 27 暗褐色土 軟質で粘性弱い、粒子は細かいがローム粗粒を混入する
 - 28 暗褐色土 オレンジ色を帯び、23層に似るやや軟質で脆い、スコリア粗粒を主とする、粘性弱い
 - 29 暗褐色土 全体に良く締まり白い粘土状(岩盤破砕片)は軟質、褐色土、ローム土、破砕片の混成層で粘土は高い、5cm大の角礫が混入する
 - 30 暗褐色土 やや硬質で締まりが良い、粘性が非常に高い
 - 31 暗褐色土 表土層 軟質で締まりが悪い
 - 32 暗褐色土 やや硬質で締まりが良い、ローム小ブロックやローム粗粒を混入する
 - 33 褐色土 硬質だが脆い、ロームブロック群、小礫を混入する
 - 34 黒色土 硬質で締まりは良く粘性弱い、少量のロームブロックやローム流入土を含む
 - 35 褐色土 褐色土とロームの混成層、全体に脆く粒子は粗い、サラサラした感じで粘性は弱い
 - 36 黒褐色土 ローム及び黒土ブロックは下部に多い
 - 37 黒褐色土 硬質で締まりは良い、粘性は弱く、ローム崩壊土や褐色土が層状に流入する
 - 38 黒色土 硬質で締まりは良い、粘性は弱く粒子は細かい、粘土を混入する
 - 39 注記資料不明
 - 40 暗褐色土 やや軟質で締まりは普通、全体にやや脆くスコリア粗粒を主とする
 - 41 黒褐色土 粘性弱く褐色土が混入する
 - 42 暗褐色土 暗褐色土と黒褐色土の混成層、モザイク状を呈する、硬質の部分も有るが脆くて軟質
 - 43 暗褐色土 白灰色粘土状の塊有り
 - 44 暗褐色土 黒土・褐色土・ロームの混成層 全体に締まるが粒子は粗い部分有り
 - 45 明褐色土 締まりが無く軟質、5cm大の礫を含む、上方から流入有り
 - 46 暗褐色土 やや硬質で締まり良い粘性が弱くローム・スコリア粗粒を多く含む
 - 47 明褐色土 やや軟質で脆く締まり無く粒子は粗い、ややオレンジ色を帯び岩盤の破砕片を含む
 - 48 暗褐色土 41層に比べやや暗い
 - 49 暗褐色土 軟質で締まり無く、フワフワして崩れやすい
 - 50 暗褐色土 39層に比べ明るく締まりが有り塵土と思われる、粘性弱くサラサラしている
 - 51 暗褐色土 芋石、岩盤は細片など多く混入する(多少上方に多い)
 - 52 暗褐色土 硬質で締まり良い、ローム小ブロックや岩盤は細片を混入する
 - 53 暗褐色土 粒子が粗く締まりが無い、ポロポロと崩れやすい
 - 54 暗褐色土 オレンジ色の色調を帯び少量の破砕片を混入する
 - 55 暗褐色土 硬質で締まりが良い粘性有り、破砕片を若干混入する
 - 56 暗褐色土 粒子が粗く締まりが悪く崩れやすい
 - 57 暗褐色土 粒子が粗くややオレンジ色を呈す、脆く崩れやすく粘性弱い、少量の礫を含む
 - 58 暗褐色土 非常に脆く崩れやすい、粒子も粗く少量の小礫を含む
 - 59 暗褐色土 硬質だが脆くポロポロと崩れる、岩盤は細片を主とする
 - 60 暗褐色土 粘土の種だが粘性はほとんど無い
 - 61 暗褐色土 硬質で粘性が強く締まりは非常に良い、表面はクラック状で
 - 62 暗褐色土 天日にあたっていた可能性が高い
 - 63 暗褐色土 軟質
 - 64 暗褐色土 ロームブロック(第三スコリア)

第 106 図 大空堀 TRE4 平・断面図



- 大空堀TRE5 F-F'
- 1 暗褐色土 軟質で粒子が細かく粘性は弱い
 - 2 暗褐色土 硬度は普通で粒子は細かい、粘性は普通でロームの小ブロック及びローム粒を含む
 - 3 褐色土 硬度は普通で粘性はやや有る、ロームの粗粒を多く含む、下層は10~15cm大のロームブロックを敷いた様な状態
 - 4 明褐色土 硬質で締まりが良く粘性も高い、粒子は細かく安山岩の角礫を少量混入する、ロームの小ブロック及びローム粗粒を少量含む
 - 5 明褐色土 硬質で締まりが良く粘性も高い、部分的に角礫が群となって層をなす
 - 6 明褐色土 硬質で締まりが良く粘性は高い、小礫を少量混入する
 - 7 黄褐色土 硬度はかなり有り、岩盤硬化の粘土状の岩の間に入る込んでいる(移植ゴテで剥ぎ取ること可)小礫、ロームブロックを少量混入する
 - 8 黒褐色土 粘性が弱くローム粒子を多く含む

第 107 図 大空堀 TRE5 平・断面図



写真 49 大空堀 TRE1 調査前 (北西から)



写真 50 大空堀 TRE2・3 調査前 (東から)



写真 51 大空堀 TRE3・4 調査前 (東から)



写真 52 大空堀 岩盤露出状況 (TRE5 付近)

曲輪が描かれ、さらには伝天守台から小曲輪や北曲輪への至る道があったことが描かれている（第111図）。

北曲輪は、「興国寺城」の絵図において「原」と書かれていること、さらに昭和27年撮影の航空写真には三日月堀や空堀1が写っているものの、現在は三日月堀はすでに滅失してしまっていて調査が不可能となっていることなど、不明な点が多い曲輪であった。そのため、調査では以下の3点を主目的とした。

- 1) 昭和27年の航空写真に写る空堀1とすでに滅失してしまった三日月堀端部の構造確認（第1・2調査区）
- 2) 曲輪内の埋没遺構の確認と曲輪使用時期の解明（第3・4調査区）
- 3) 南西に付随する小曲輪の遺構確認（第5調査区）

調査の結果、空堀1の南側には未知の空堀が存在している（以下、空堀2）ことが確認されたため、平成29・30年度には第6・7調査区を設定して、空堀2の構造解明に努めた。なお、第6・7調査区は調査後からの期間が短く、整理作業が充分でないことから、本報告では概要報告にとどめ、詳細については将来的に刊行予定である「市内遺跡調査報告」に掲載を予定している。

以上の調査によって、北曲輪では複数の造成面が存在していることと、北曲輪が複雑に改修を受けて、想定よりも長期間に渡って利用されていたことが判明した。また北曲輪は本丸以下の主要曲輪群のように中部ローム層まで造成されている状況とは異なり、上部ローム層を基盤としており、そのため、弥生時代の遺構（方形周溝墓）も滅失することなく残存していることも判明した。以下では調査区ごとに検出遺構について報告する。

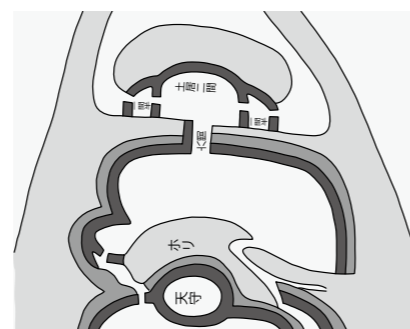
(2) 第1調査区（第114～117図）

第1調査区は、滅失した三日月堀の端部の構造を確認することを目的とした調査区である。本調査区は現況でも中央部が大きく窪んでおり、この窪地を堀の痕跡と捉え、さらにその東西の高まりと合わせて計3本のトレンチを設定した。

TRE1は三日月堀の内側となることから、土塁が存在していたと想定され、土層堆積でもロームブロッ



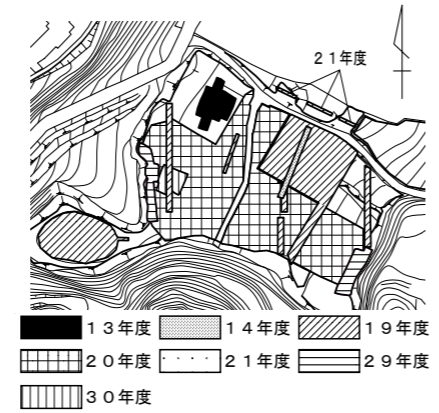
第110図 北曲輪絵図(拡大)



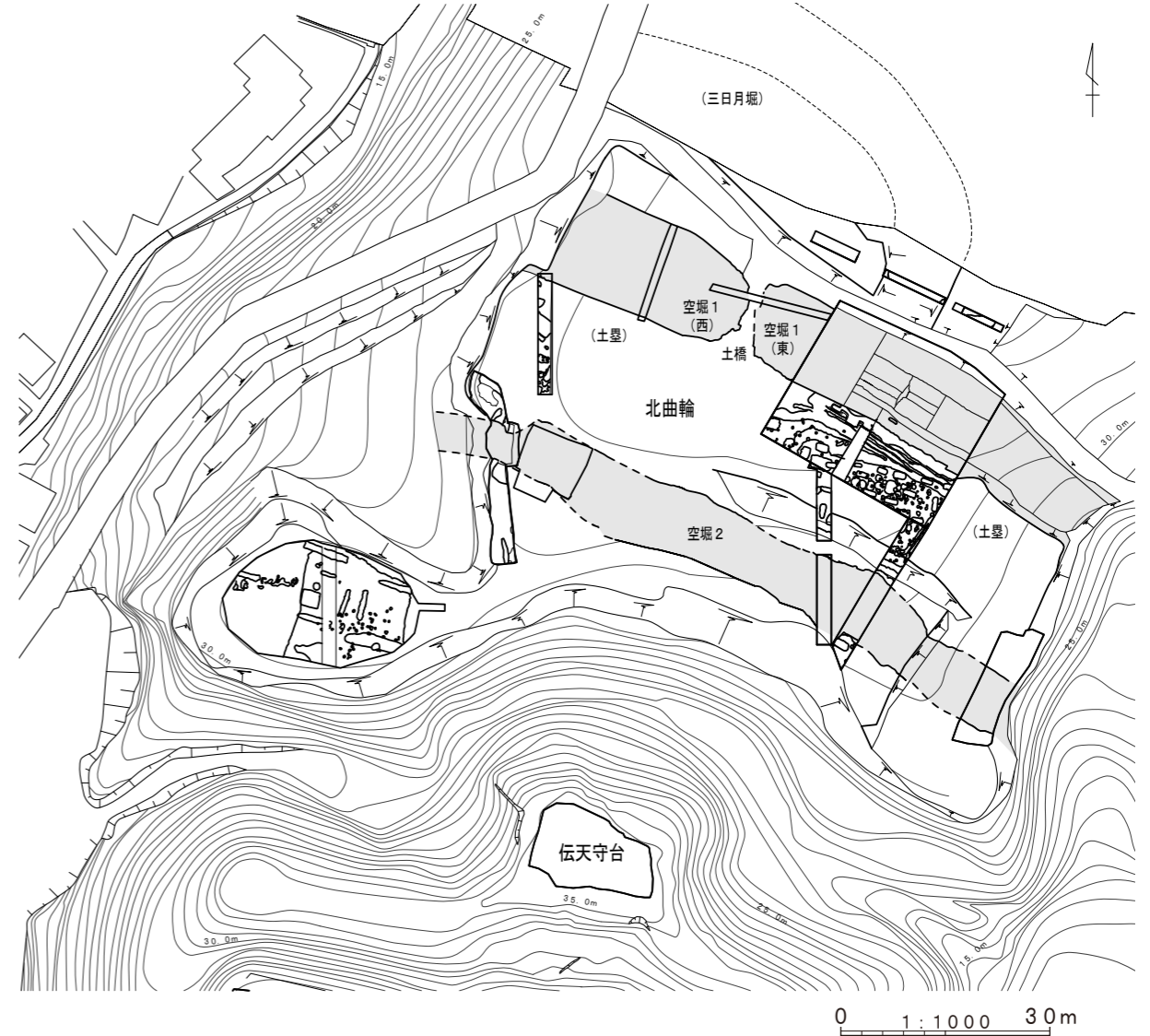
第111図 城築規範「駿河禅徳寺城」(拡大)



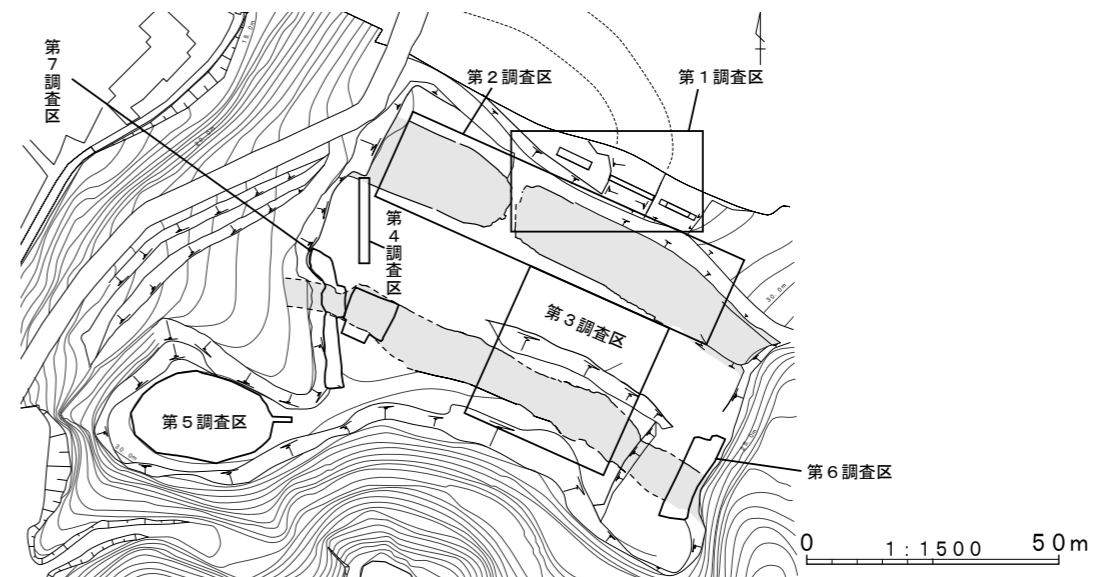
第108図 北曲輪 調査位置図



第109図 北曲輪 年度別調査地点図



第112図 北曲輪 全体図



第113図 北曲輪 調査区配置図

クを大量に含んだ盛土層が確認されている。TRE2は三日月堀の構造を確認することを主目的としていたが、堀底までは調査を行うことができなかった。確認した下部においては締りがある覆土も認められるが、上層の締りは弱い。TRE2から遺物の出土はない。三日月堀の外側（城外）となるTRE3では、1号溝（SD1）が確認された。上面確認のみ実施しており、幅は3.7 mを測る。時期は不明で、城郭に伴う遺構であるかも判断できない。

（3）第2調査区（第118図）

第2調査区は、現状でも完全に埋没していない北曲輪空堀1の調査区である。平成13年度には試掘調査（H13試掘TRE）では空堀1（西）の堀底を確認し、平成19年度には空堀（東）を堀底まで確認した。平成20年度には土橋付近を調査した。土橋付近では下層まで大きな掘削は行わず、平面的に土橋の構造を確認することを試みたが、地山掘り残しの構造であることは判明したものの、東西ともに攪乱を受けていたため、本来の幅を確定することはできていない。したがって部分的な記録からの推定となるが、土橋の幅は約3.0 mと推測される。

空堀1（東）（第118・119図）

最大幅は約15.0 mで、堀底には段差が認められる。ここでは便宜的により堀底が低い東側をAエリア、一段高くなった付近をBエリアと呼称する。Aエリアの堀底は深さ6.5 mを測り、堀底幅は1.5 mで、土幅と比べて急激に狭くなっている。しかし本丸空堀でも見られたように、覆土の中層、標高約29～29.5 m付近にて黄色ローム層を用いた整地層（43層）が確認されることから、北曲輪空堀1でも幅の狭い葉研堀から箱堀への改修があったと考えられる。箱堀段階の堀底幅は約5.0 m、深さは約3.5 mである。

Bエリアの最大幅は12.5 mで、こちらでも標高29.5 m付近にて角度変換点と黄色ロームを用いた整地層が認められ、整地層（34層）は締りがある。35層も堆積状況を見る限り、箱堀改修時の整地層である可能性は高いと考えられるが、35層はローム土を多く含むものの、締りは弱い。したがって、34層を基準とした時、箱堀段階の堀底幅は5.1 m、深さは3.5 m、35層を基準とした時、堀底幅は4.2 m、深さは4.0 mを測る。これらの数値、特に34層を基準とした時、堀底幅や深さはAエリアとほぼ同じとなることから、箱堀段階ではAエリアとBエリアでは段差は生じていなかったと考えられる。

空堀1（西）（第119図）

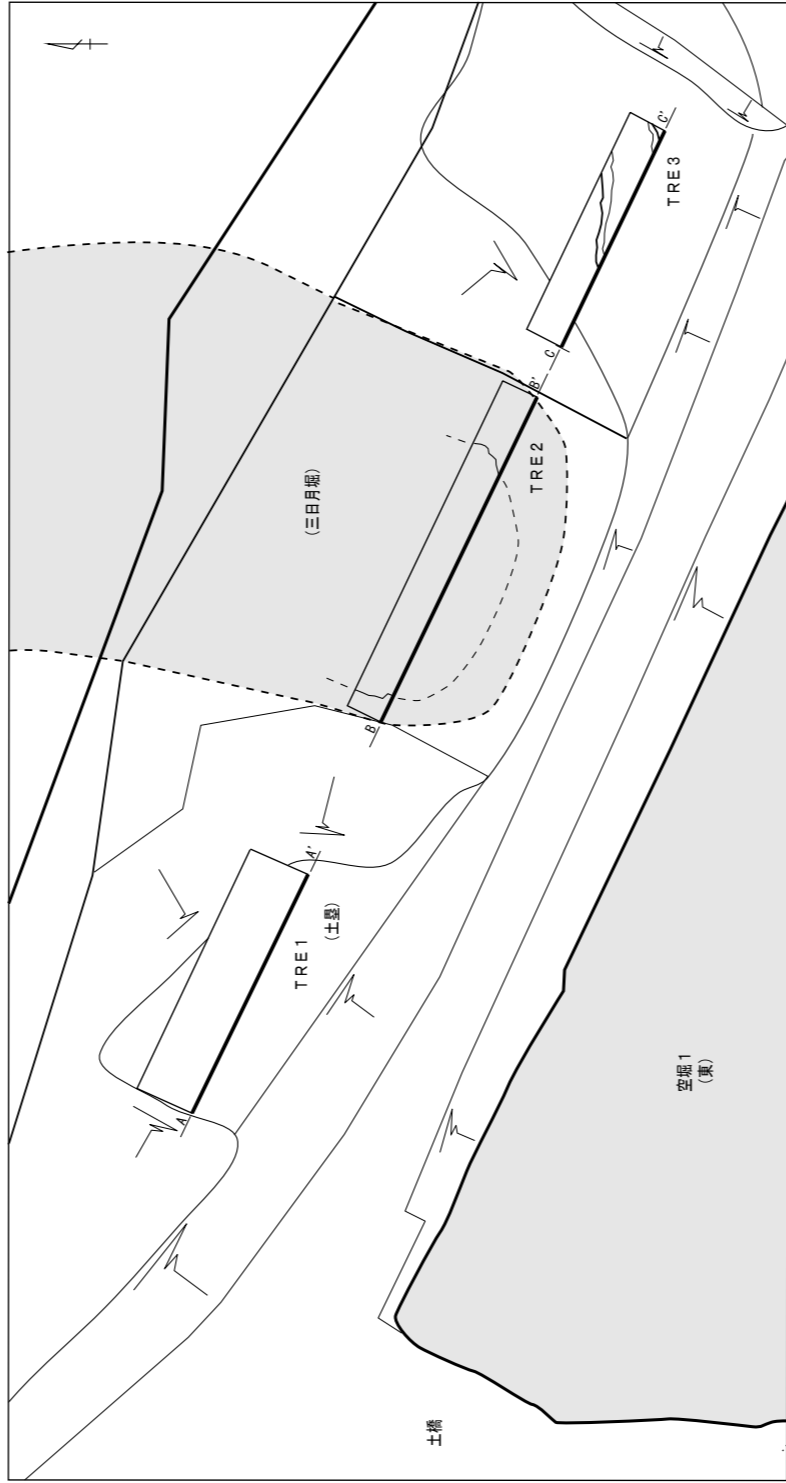
平成13年度にトレンチ調査を行っており、堀底まで確認している。北側の上端は攪乱によって失われているが、堀の推定上幅は約13.5 m、深さは6.7 mを測る。ここでも覆土中層にローム土主体の土層が確認されており、これらも空堀（東）と同じ整地層と考えられるが、空堀（東）のように明確な箱形への整地ではない。しかしこれら整地層は標高28.0～29.0 mで確認されることから、この数値は空堀（東）とほぼ同じであり、空堀（東）と同じく箱堀への改修時に充填されたものであろう。箱堀の堀底幅は約3.0 mで、深さは4.2 mで空堀（東）よりも幅は狭いが、より深くなっている。

出土遺物は昭和まで完全に埋没していなかったことから、空堀（東）空堀（西）ともに近代までの遺物が出土している。ただし中世から近世前半に限定すれば、主体となるのは大窯～登窯段階である。

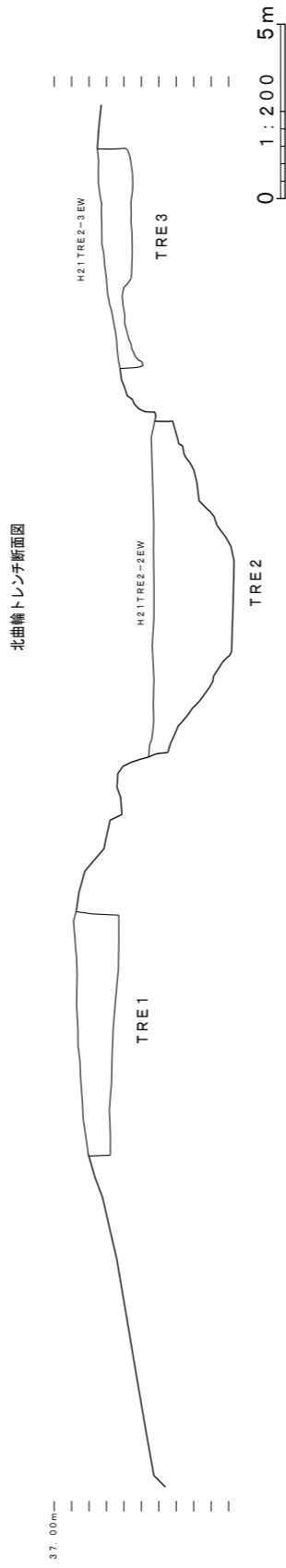
（4）第3調査区

第3調査区は、空堀1の南側に設定した面的な調査区である。平成19年度に調査を行った。当初は、空堀1の南側に存在したであろう土塁の痕跡を確認することを目的としていたが、土塁はすでにほぼ滅失しており、調査区南側にその可能性がある落ち込みを検出するにとどまっている。

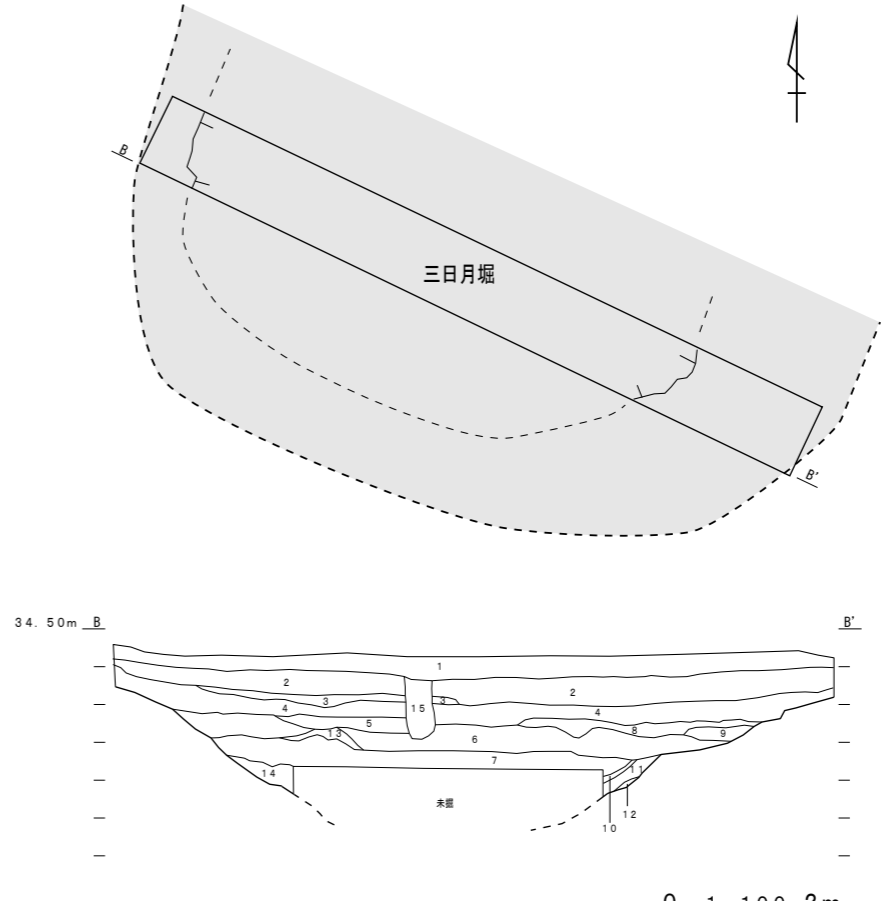
第3調査区の北側では溝(SD)、方形土坑(SK)、性格不明円形土坑(SX)、PT群などを検出し、平場となっていた第3調査区南側では、絵図には描かれていない空堀2を検出した。



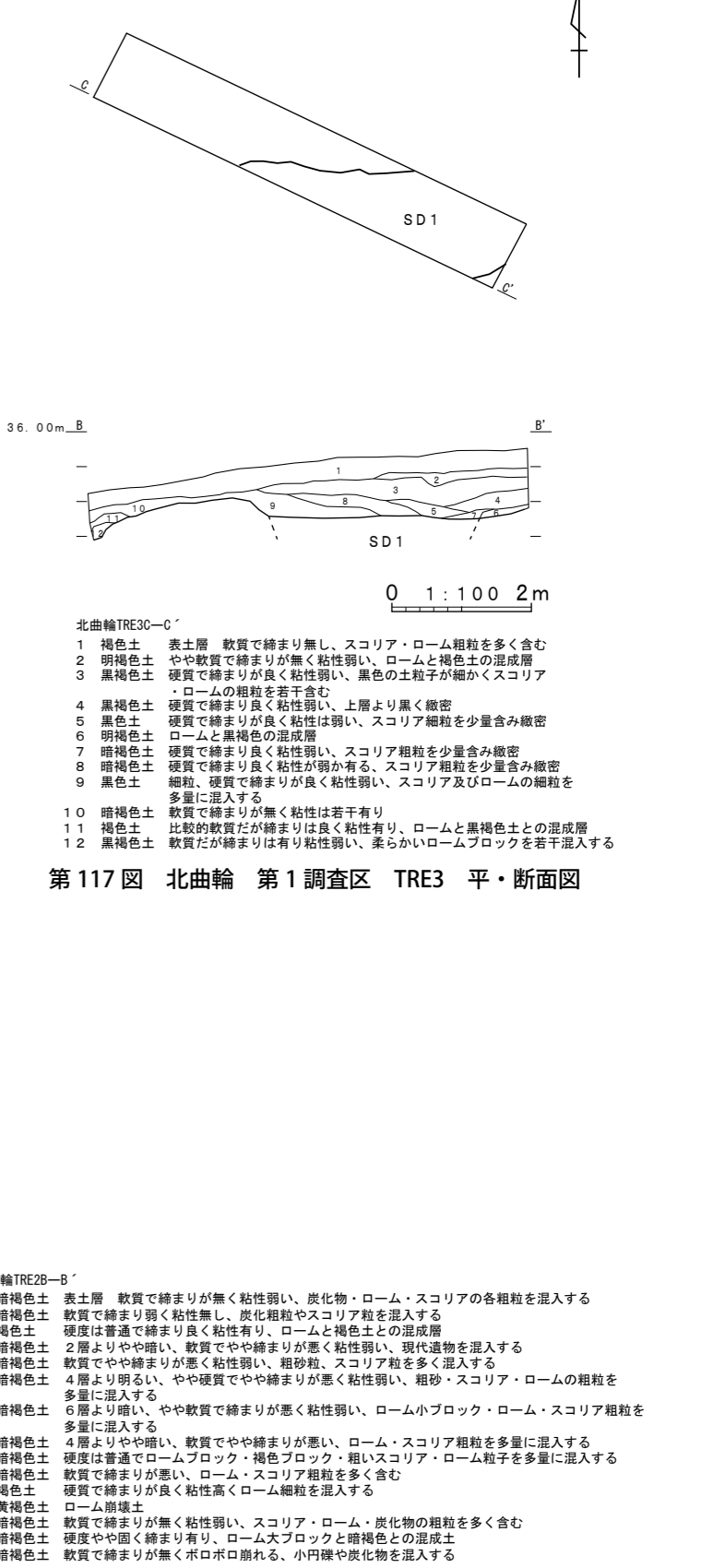
第114図 北曲輪 第1調査区 全体図



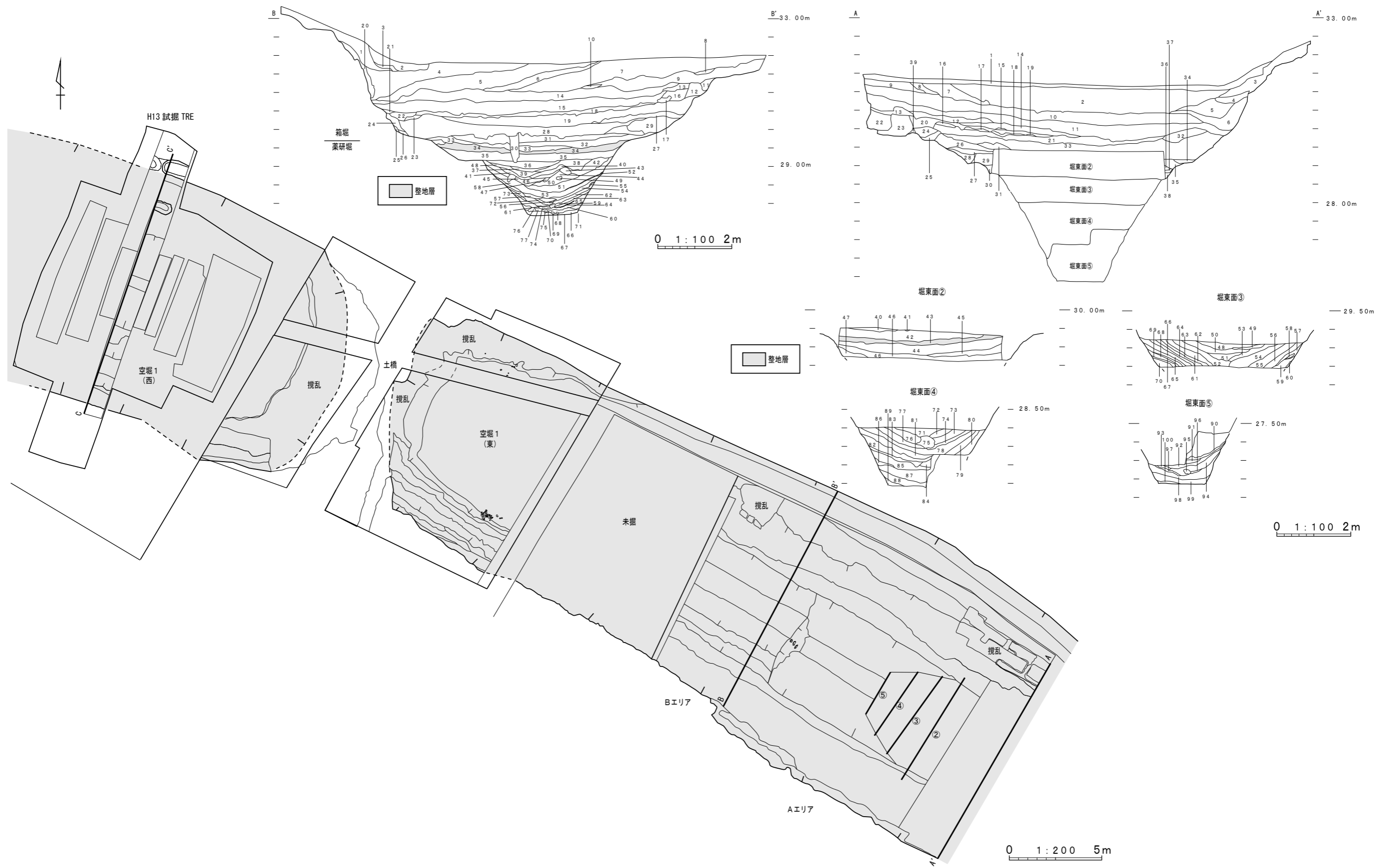
第115図 北曲輪 第1調査区 TRE1 平・断面図



第116 北曲輪 第1調査区 TRE2 平・断面図



第117図 北曲輪 第1調査区 TRE3 平・断面図



第118図 北曲輪 第2調査区 空堀1 平・断面図

北曲輪 第2調査区 空堀 1A-A'

1	黒褐色土	表土	
2	黒褐色土	粘性で締まり無し	φ5cm以下のローム土ブロックとφ10cm以下のSCⅢ層土ブロックとφ4cm以下の黒色土ブロックが全体に入っている
3	オリーブ黒色土	表土	
4	オリーブ黒色土	粘性で締まり無し	黒色土の中にスコリアの粗粒を含む
5	オリーブ黒色土	粘性で締まり無し	φ5cm以下のSCⅢ層土ブロックとスコリアの粗粒を含む
6	オリーブ黒色土	粘性で締まり無し	黒色土をベースにφ2cm以下のローム土ブロックとスコリアの粗粒を少量含む
7	黒褐色土	粘性で締まり無し	φ10cm大のローム土ブロックとφ8cm以下のSCⅢ層土ブロックと黒色帯土ブロックが多量に含まれる
8	黒褐色土	粘性が無くやや締まり有り	黒色土をベースにローム土と細やかなスコリアを少量含む
9	黒褐色土	粘性が無くやや締まり有り	黒色土をベースにφ5cm以下のSCⅢ層土ブロックとφ2cm以下のローム土ブロックとスコリア粒子を少量含む
10	黒褐色土	粘性で締まり無し	黒色土をベースにφ3cm以下のローム土ブロックとスコリア粒子を少量含む
11	黒褐色土	粘性で締まりが無く非常に脆い	φ1cm以下のローム土ブロックとスコリアの粗粒を含む、炭化物有り
12	黒褐色土	粘性で締まり無し	黒色土の中にφ2cm以下のローム土ブロックとφ3cm以下のSCⅢ層土ブロック有り
13	黒色土	粘性で締まりが無く脆い	黒色土の中にスコリア粒子を少量含む
14	黒褐色土	粘性で締まり無し	φ2cm以下のローム土ブロックとスコリア粒子を少量含む
15	黒褐色土	粘性で締まり無し	ローム土とスコリア粒子からなる
16	黒褐色土	粘性で締まり無し	黒色土の中にφ2cm以下のローム土ブロックを少量含む
17	黒褐色土	粘性で締まり無し	黒色土の中にφ2cm以下のローム土ブロックを少量含む
18	黒褐色土	粘性で締まり無し	黒色土の中にφ2cm以下のSCⅢ層土ブロックを含み炭化物有り
19	黒褐色土	粘性で締まり無し	黒色土の中にφ2cm以下のローム土ブロック有り
20	黒褐色土	粘性で締まりが無く脆い	ローム土とスコリア粒子からなる
21	黒褐色土	粘性で締まり無し	ローム土とスコリアの粗粒の混成土、炭化物有り
22	黒褐色土	粘性で締まりが無く脆い	黒色土の中にφ2cm以下のローム土ブロックを含む
23	黒褐色土	粘性で締まり有り	脆い黒色土とローム土の混成土、スコリア粒子も有り
24	黒褐色土	粘性で締まり無し	非常に脆い黒色土とローム土の混成土
25	暗褐色土	粘性で締まり有り	ローム土からなる
26	黒褐色土	粘性で締まり無し	φ8cm以下のローム土ブロックとスコリア粒子を含む、炭化物有り
27	黒褐色土	粘性で締まり無し	φ2cm以下のSCⅢ層土ブロック有り
28	黒褐色土	粘性で締まり無し	φ2cm以下のSCⅢ層土ブロック有り
29	黒褐色土	粘性で締まり無し	スコリア粒子を少量含む
30	黒褐色土	粘性で締まり無し	ローム土とスコリア粒子からなる
31	黒褐色土	粘性で締まり無し	φ5cm以下のローム土ブロックとスコリア粒子を含む
32	オリーブ黒色土	粘性で締まり無し	黒色土をベースにローム土粒とスコリア粒子を少量含む
33	オリーブ黒色土	粘性が無くやや締まり有り	黒色土をベースにφ2cm以下のローム土ブロックとスコリア粒子を少量含む
34	オリーブ黒色土	粘性が無くやや締まり有り	ローム土粒子を含む
35	オリーブ黒色土	粘性が無くやや締まり有り	黒色土をベースにローム土粒子とスコリア粒子を含む
36	黒褐色土	粘性が無くやや締まり有り	黒色土とローム土の混じり
37	オリーブ黒色土	粘性で締まり無し	黒色土とローム土の混じり、φ3cm以下のローム土ブロック有り
38	黒褐色土	粘性で締まり無し	ローム土の中に黒色土が少し混じる
39	黒褐色土	粘性で締まり無し	黒色土とローム土の混成土
40	黒褐色土	粘性で締まり無し	ローム土の粗粒を多量を含む
41	黒褐色土	粘性で締まり無し	ローム土の粗粒を少量含む
42	黒褐色土	粘性で締まりが無くサラサラしている	ロームの粗粒とスコリア粒子を多量を含む
43	褐灰色土	やや粘性で締まり有り	ローム土をベースに黒色土を少量含む
44	黒褐色土	粘性で締まり無し	ロームとスコリア粒子を多量を含む
45	暗灰色土	粘性で締まり無し	黒色土を帯状に含みφ5cm以下のローム土ブロックと角礫有り、スコリア粒子も多量を含む
46	黒褐色土	粘性で締まりが無くサラサラしている	ローム土の細やかな粒子とスコリア粒子を多量を含む
47	黒褐色土	粘性が無くやや締まり有り	ローム土粒子を多量を含む
48	暗青灰色土	粘性で締まりが無く非常に脆く炭化物有り、スコリア粒子も多量を含む	
49	暗灰色土	粘性でやや締まり有り	黒色土をベースにSCⅢ層土を多量を含む
50	暗茶灰色土	粘性で締まりが無くサラサラしている	φ2cm以下のSCⅢ層土ブロック有り 黒色土を棒状に含む
51	暗赤灰色土	粘性で締まり無し	スコリア粒子を多量に含みφ5cm以下のSCⅢ層土ブロック有り
52	黒褐色土	粘性で締まりが無く非常に脆い	炭化物が有りスコリア粒子を多量を含む
53	暗灰色土	粘性で締まり無し	炭化物有り、スコリア粒子を多量に含み3cm未満のローム土ブロック有り
54	黒褐色土	粘性で締まり無くスコリア粒子を多量に含む、φ10cm以下のSCⅢ層土ブロックとφ1~2cmのローム土ブロック少量有り	
55	黒褐色土	粘性で締まりが無くサラサラしている非常に脆い	φ1cm以下のローム土ブロックが有りスコリア粒子を多量に含む
56	黒褐色土	粘性で締まりが無く非常に脆い	ローム土とスコリア粒子の混成土
57	灰黄褐色土	粘性で締まり有り	ローム土からなる
58	黒褐色土	粘性で締まりが無く非常に脆い	黒色土の中にスコリア粒子を多量に含む
59	黒褐色土	粘性で締まり無し	細やかなスコリア粒子からなる
60	褐灰色土	粘性で締まり有り	ローム土からなる
61	黒褐色土	粘性で締まりが無くサラサラしていて非常に脆い	スコリア粒子を多量に含み5cm大のSCⅢ層土ブロック有り
62	黒褐色土	粘性で締まりが無くサラサラしていて非常に脆い	スコリア粒子を多量に含む
63	黒褐色土	粘性で締まりが無くサラサラしていて非常に脆い	スコリア粒子を多量に含む
64	黒褐色土	粘性で締まり無し	スコリア粒子の中にローム土を少量含む
65	暗紫灰色土	粘性で締まり有り	ローム土とスコリアの混成土
66	黒褐色土	粘性で締まり無し	スコリアの粗粒からなる
67	黒褐色土	粘性で締まり無し	黒色土の中にスコリア粒子を多量に含む
68	黒褐色土	粘性で締まりが無くサラサラしている、スコリア粒子からなる	
69	黒褐色土	粘性で締まり無し	黒色土の中にスコリアの粗粒を多量に含む
70	灰褐色土	やや粘性で締まり有り	ローム土とスコリア粒子の混成土
71	暗赤灰色土	粘性で締まり無し	スコリア粒子の中にφ15cm未満のローム土ブロックとφ3cm未満のSCⅢ層土ブロック有り
72	暗赤灰色土	粘性で締まり無し	スコリア粒子の中にφ15cm未満のローム土ブロックとφ3cm未満のSCⅢ層土ブロック有り
73	暗灰色土	粘性で締まり無し	スコリア粒子の中にφ5cm未満のローム土ブロック有り

74	黒褐色土	粘性で締まりが無く非常に脆い、スコリア粒子からなる
75	黒褐色土	粘性は無いが締まり有り、SⅢ層土ブロックからなる
76	暗灰色土	粘性で締まり無し 黒色土とスコリア粒子の混成土
77	暗灰色土	粘性で締まり無し スコリアに粗粒を多量に含み黒色土ブロックとローム土ブロック有り
78	暗赤灰色土	粘性で締まり無し スコリアに粗粒を多量に含みSⅢ層土ブロックとローム土ブロック有り
79	黒褐色土	粘性で締まりが無く非常に脆い 細やかなスコリア粒子からなりφ3cm未満のローム土ブロック有り
80	暗褐色土	粘性で締まり無し 軟質でローム土とスコリア粒子の混成土
81	黒褐色土	粘性で締まりが無くザラザラしている ローム土の粗粒を多量に含みローム土ブロック混在
82	黒褐色土	やや粘性と締まりが有り 黒色土とローム土の混成土
83	黒褐色土	粘性で締まり無し スコリア粒子を多量に含み、φ15cm未満のSⅢ層土有り
84	黒褐色土	粘性が無くやや締まり有り スコリア粒子とSⅢ層土からなる
85	黒褐色土	粘性で締まり無し スコリアの粗粒と細やかな粒子の混じり、ローム土ブロックを少量含む
86	黒褐色土	粘性は無くやや締まり有り 黒色土と細やかなスコリア粒子の混成土
87	黒褐色土	粘性で締まり無し スコリアの粗粒とローム土の混成土
88	黒褐色土	粘性は無いが締まり有り 黒色土とスコリア粒子を多量に含む
89	黒褐色土	やや粘性と締まり有り ローム土からなる
90	黒褐色土	粘性で締まり無し スコリアの粗粒とローム土の混成土
91	黒褐色土	粘性は無いが締まり有り 黒色土とスコリア粒子を多量に含む
92	黒褐色土	粘性で締まり無し スコリア粒子からなる
93	黒褐色土	粘性で締まり無し ローム土とスコリア粒子の混成土
94	黒褐色土	粘性で締まり無し ローム土をベースにスコリア粒子を含む
95	暗赤灰色土	粘性は無いが締まり有り (SⅢ層土)
96	黒褐色土	粘性で締まり無し 黒色土からなる
97	黒褐色土	粘性で締まり無し 黒色土からなる
98	黒褐色土	粘性で締まり無し ローム土をベースに黒色土とスコリア粒子を含み黒色土が帯状に流れ込んでいる
99	黒褐色土	粘性は無いがやや締まり有り 黒色土をベースにスコリアの粗粒を多量に含む
100	黒褐色土	粘性は無くやや締まり有り ローム土とスコリア粒子の混成土

北曲輪 第2調査区 空堀1B-B'

1	暗赤灰色土	粘性で締まり無し 耕作土とローム土の細やかな粒子混在、土器片有り
2	暗赤灰色土	締まりが少し有り φ3cm以下の黒色土ブロックとSⅢ層土ブロックを35%含む
3	暗赤灰色土	粘性で締まり無し SⅢ層土のスコリア粒子を普通に混在、小円礫有り
4	黒褐色土	粘性で締まり無し SⅢ層土粒子を多量に含みφ10cm以下のSⅢ層土ブロック混在、小円礫有り
5	暗灰色土	粘性で締まり無し SⅢ層土粒子を多量に含みφ10cm以下のSⅢ層土ブロックとφ5cm以下の中部ローム土ブロックあり、炭化物有り
6	黒褐色土	粘性で締まり無し SⅢ層土粒子を多量に含み、φ5cmのSⅢ層土ブロック、φ5cm以下の中部ローム土ブロック、φ2cm以下の黒色土ブロック混在
7	黒褐色土	φ1mm程度のローム土、スコリア、黒色土が混じる、φ2～3mmも同様 φ5～10cm程度は若干有り、φ20cm程度もあり、円礫、角礫5%、ビニール有り
8	黒褐色土	粘性で締まり共に非常に無し φ1cmの中部ローム土ブロック1個(耕作土)を含む
9	黒褐色土	粘性で締まり無し SⅢ層土粒子を均一に含む
10	黒褐色土	粘性で締まり無し スコリア質からなる
11	暗褐色土	地山より若干締まり無し 中部ローム土からなる
12	黒褐色土	粘性で締まり無し φ5cm大のSⅢ層土ブロック有り φ2cm以下の中部ローム土ブロック混在
13	黒褐色土	粘性で締まり無し φ3cmのSⅢ層土ブロックと小円礫有り
14	黒褐色土	粘性で締まり無し SⅢ層土粒子を均一に含む 炭化物混在
15	黒褐色土	粘性で締まり無し φ3cmのSⅢ層土ブロックが有りφ3cmの中部ローム土ブロック混在、φ2cmの黒色土ブロックを含み、炭化物とφ3cmの角礫有り
16	暗赤灰色土	粘性で締まり無し φ5cm以下の中部ローム土ブロック有り φ2cm以下の中部ローム土ブロックとローム土の粒子混在
17	暗赤灰色土	締まり非常に無し スコリア層土(SⅢ層土相当)
18	暗赤灰色土	締まり非常に無し 若干スコリア質が強い φ5cm以下のSⅢ層土ブロック有り(耕作土)
19	暗赤灰色土	粘性で締まり無し φ5cm以下の中部ローム土ブロック有り
20	暗灰色土	締まり非常に無し φ5cm以下のSⅢ層土ブロックとφ5cmの角礫有
21	暗灰色土	やや締まりが有り φ5mm以下の中部ローム土ブロック混在
22	暗赤灰色土	粘性で締まり無し φ5mm以下の中部ローム土ブロック混在
23	暗灰色土	粘性で締まり無し φ3cm以下のSⅢ層土ブロック有り スコリア層土(SⅢ層土相当)
24	暗赤灰色土	粘性で締まり無し 細やかなローム土粒子からなる
25	暗赤褐色土	やや粘性有り 中部ローム土
26	暗赤灰色土	やや締まり有り 細やかなローム土粒子からなる
27	黒褐色土	粘性で締まり無し φ10cm以下の中部ローム土ブロックがSⅢ層土粒子の中に含まれる(耕作土ではない)
28	暗灰色土	粘性で締まり無し φ8cm以下のSⅢ層土ブロック有り
29	黒褐色土	粘性が弱く軟質で締まり無し 中部ローム土ブロックを多く含む混成土 褐色土と黒色土が主体となっている
30	黒色土	粘性で締まり無くサラサラしている φ2cm未満の中部ローム土を微量に含む
31	黒色土	粘性で締まり無し 円礫と角礫有り φ1cm未満の中部ローム土混在
32	黒褐色土	粘性で締まり無し SⅢ層土とローム土粒子を多量に含む
33	黒色土	粘性で締まり無し φ1cm未満のローム土ブロックとスコリア粒子を含む
34	暗赤褐色土	粘性はないが締まり有り スコリア粒子とローム土ブロックの混成土
35	黒褐色土	粘性で締まり無し SⅢ層土とローム土粒子を多量に含む
36	黒色土	粘性で締まり無し 炭化物が有りスコリア粒子からなる
37	黒色土	粘性で締まり無し スコリア粒と黒色土粒の混成土 休場層土のブロックを含む
38	黒褐色土	粘性で締まり無くザラザラしている ローム土を含む層
39	黒褐色土	粘性無くやや締まり有り 黄褐色と褐色スコリアを少量含み炭化物有り
40	黒褐色土	やや粘性と締まり有り 黒色土の中にスコリアを含む
41	黒褐色土	粘性で締まり無し φ2cm以下のSⅢ層土ブロックを含む
42	黒褐色土	やや粘性と締まり有り 炭化物を少量含みSⅢ層土層土と黒色土層からなる
43	黒褐色土	粘性で締まり有り 休場層のブロックからなる
44	黒褐色土	粘性で締まり無し 黒色土の中にYⅡ層相当土を含む
45	赤黒色土	粘性で締まり無し 黒色土にスコリアを多量に含む
46	黒褐色土	粘性で締まり無し スコリアの粗粒粒子を多量に含む休場層のブロック有り

47	黒褐色土	硬質で締まり有り SⅢ層土ブロック
48	黒褐色土	粘性で締まり無し φ2cm以下の黒色土ブロック有り 褐色・赤褐色スコリアを少量含む
49	黒褐色土	硬質で締まり有り SⅢ層土ブロック
50	黒褐色土	非常に脆くザラザラしている スコリアの粗粒を多量に含む
51	黒褐色土	粘性で締まりが無く非常に脆くザラザラしている スコリアの粗粒からなる
52	黒褐色土	黒色土の流入土(薄い)で非常に脆い
53	黒褐色土	締まりが無く非常に脆い φ3cm以下のSⅢ層土ブロックが有りスコリアの粗粒を多量に含む
54	黒褐色土	スコリア粒子の中にφ5cm以下の休場層のブロック有り
55	黒褐色土	黒色土の流入土(薄い)で非常に脆い
56	黒褐色土	粘性で締まり無し φ5cm以下のSⅢ層土ブロック有り
57	黒褐色土	粘性で締まり無し φ8cm以下のSⅢ層土ブロック有り
58	暗褐色土	やや粘性は有るが締まり無し ローム土粒子を多量に含む
59	暗褐色土	粘性で締まり有り 中部ローム土ブロックからなる
60	黒褐色土	粘性で締まり有り YⅡ層土ブロックからなる
61	黒褐色土	粘性で締まり無く非常に脆い
62	暗褐色土	粘性は有るが締まり無し ローム土の粗粒を多量に含む
63	黒褐色土	粘性が無く締まりが悪くザラザラしている
64	暗赤褐色土	粘性で締まり無し ローム土とスコリアの粗粒粒子を多量に含み黒色土も混入する
65	暗褐色土	粘性は有るが締まり無し ローム土の粗粒を多量に含む
66	黒褐色土	粘性で締まりが無く非常に脆い
67	暗褐色土	粘性で締まり有り 硬質で中部ローム土ブロックからなる
68	暗褐色土	粘性で締まり有り 硬質で中部ローム土ブロックからなる
69	暗褐色土	粘性で締まり有り 硬質で中部ローム土ブロックからなる
70	暗褐色土	粘性で締まり有り 硬質で中部ローム土ブロックからなる
71	黒色土	やや粘性と締まり有り φ1cm以下の中部ローム土ブロック有り
72	黒褐色土	粘性で締まり無し スコリア粒子の中にφ6cm以下のYⅡ層土ブロックを含む
73	暗褐色土	やや粘性と締まり有り ローム土からなる
74	暗褐色土	やや粘性と締まり有り ローム土からなる
75	暗褐色土	粘性で締まりが無く非常に脆い
76	黒褐色土	粘性で締まりが有り硬質(黒色調)SⅢ層土ブロックからなる
77	黒褐色土	粘性で締まりが有り硬質 SⅢ層土ブロックからなる



写真 53 北曲輪空堀 1 A セクション



写真 54 北曲輪空堀 1 B セクション

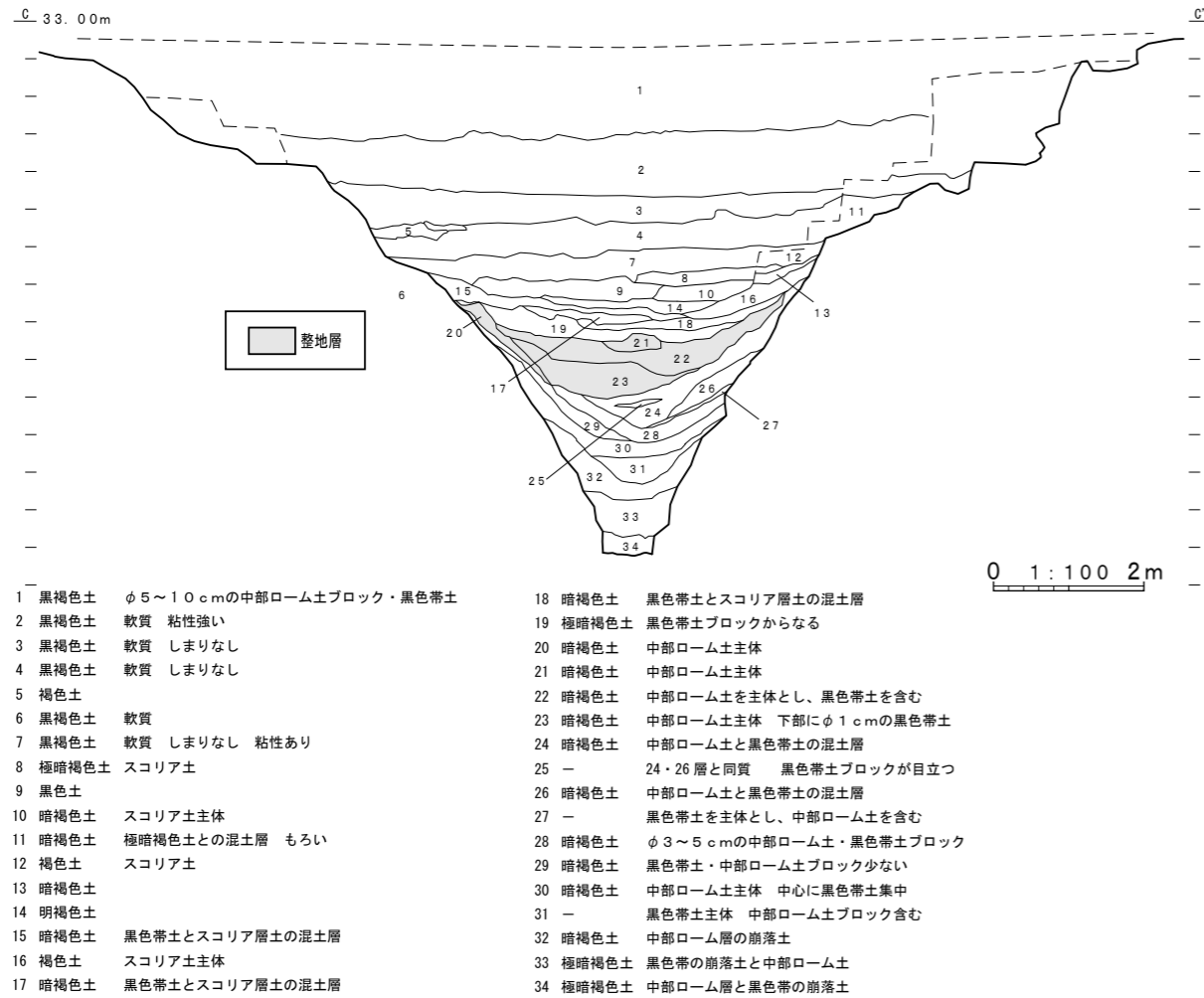
空堀2 (第121図)

第3調査区南部にて検出した絵図に記されていない空堀である。平成19年度には深さ2.2mまで掘削したが、堀底は確認できなかった。その後、平成20年度に平面確認を行って、空堀2が曲輪を東西に横断していることを確認し、平成29・30年度(第6・7調査区)には堀底の調査までを行って、深さを確定させた。平成29年度の調査では2条の空堀が重複していることが確認されているが、本地点で確認されたのは1条のみである。

本地点における最大幅は6.0mで、遺物は出土していない。

2号溝～7号溝(SD2～SD7 第122～124図)

SD2～SD6は空堀1と並行に走る溝で、重複関係は、(古)SD7→SD6→SD3・4・5→SD2(新)である。さらにいくつかの土坑や柱穴群がSD群を掘り込んでいる。いずれのSDでも遺物は出土しておらず、時期は不明である。以下、幅と深さを記す。



第119図 北曲輪 第2調査区 空堀1(西) 断面図

SD2:幅0.3~1.0m、深さ:0.2~0.5m SD3:幅0.5m、深さ:0.3~0.6m

SD4:幅0.6m、深さ:0.1~0.2m SD5:幅1.0~2.2m、深さ:0.5m

SD6:幅0.5~1.0m、深さ:0.1~0.2m SD7:幅1.0m、深さ:0.3m

8号溝・9号溝・10号溝 (SD8・SD9・SD10 第120図)

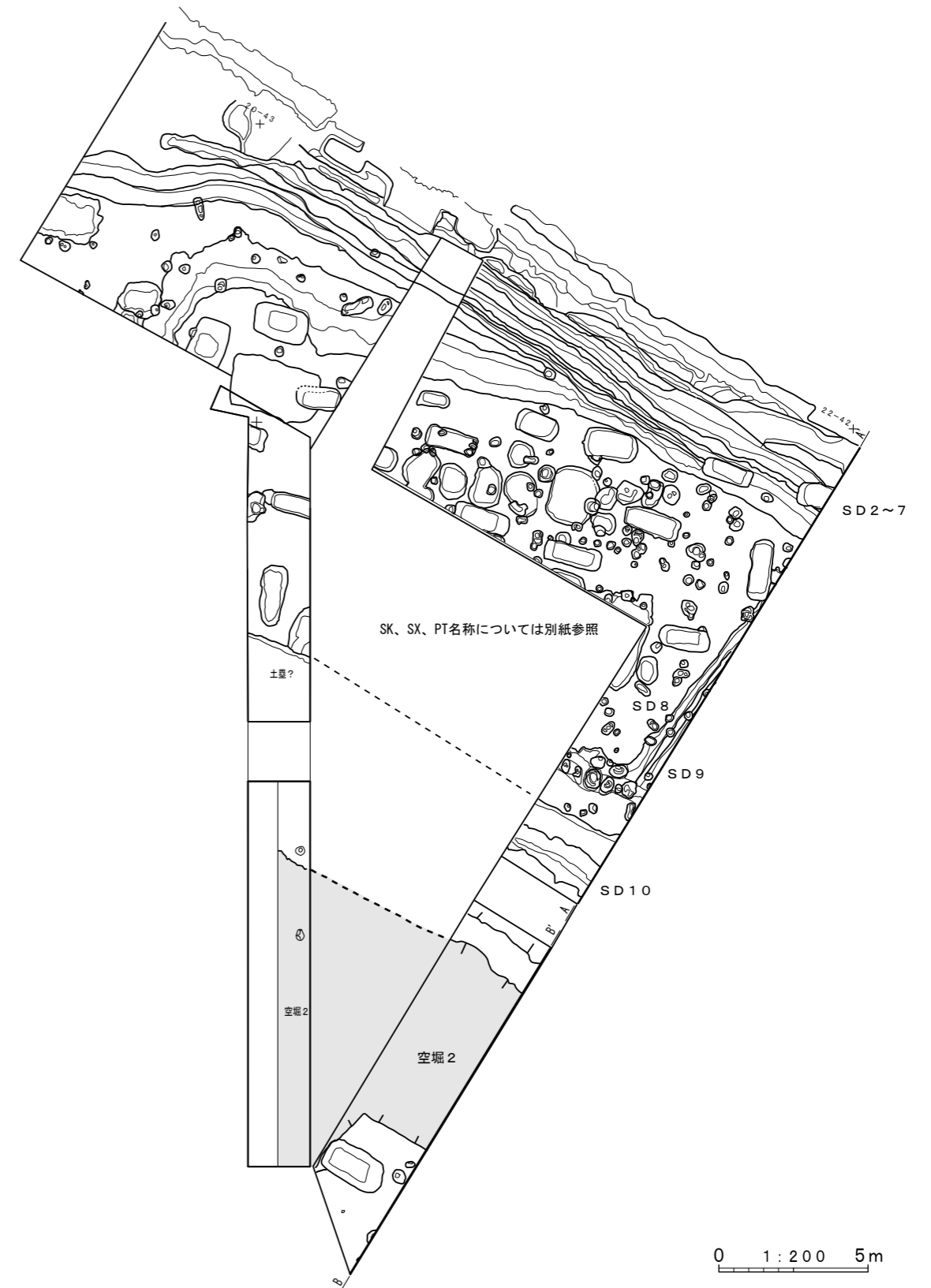
調査区の東端にて一部のみを検出した。SD8は総延長は約9.5mで、北から8.0mの地点でL字に曲がっている。SD9はSD8に切られており、検出された延長は約7.0mである。SD10は空堀2と並行する。検出された延長は3.0m、深さは1.0mを測る。

土坑群 (SK1~23 第125~128図)

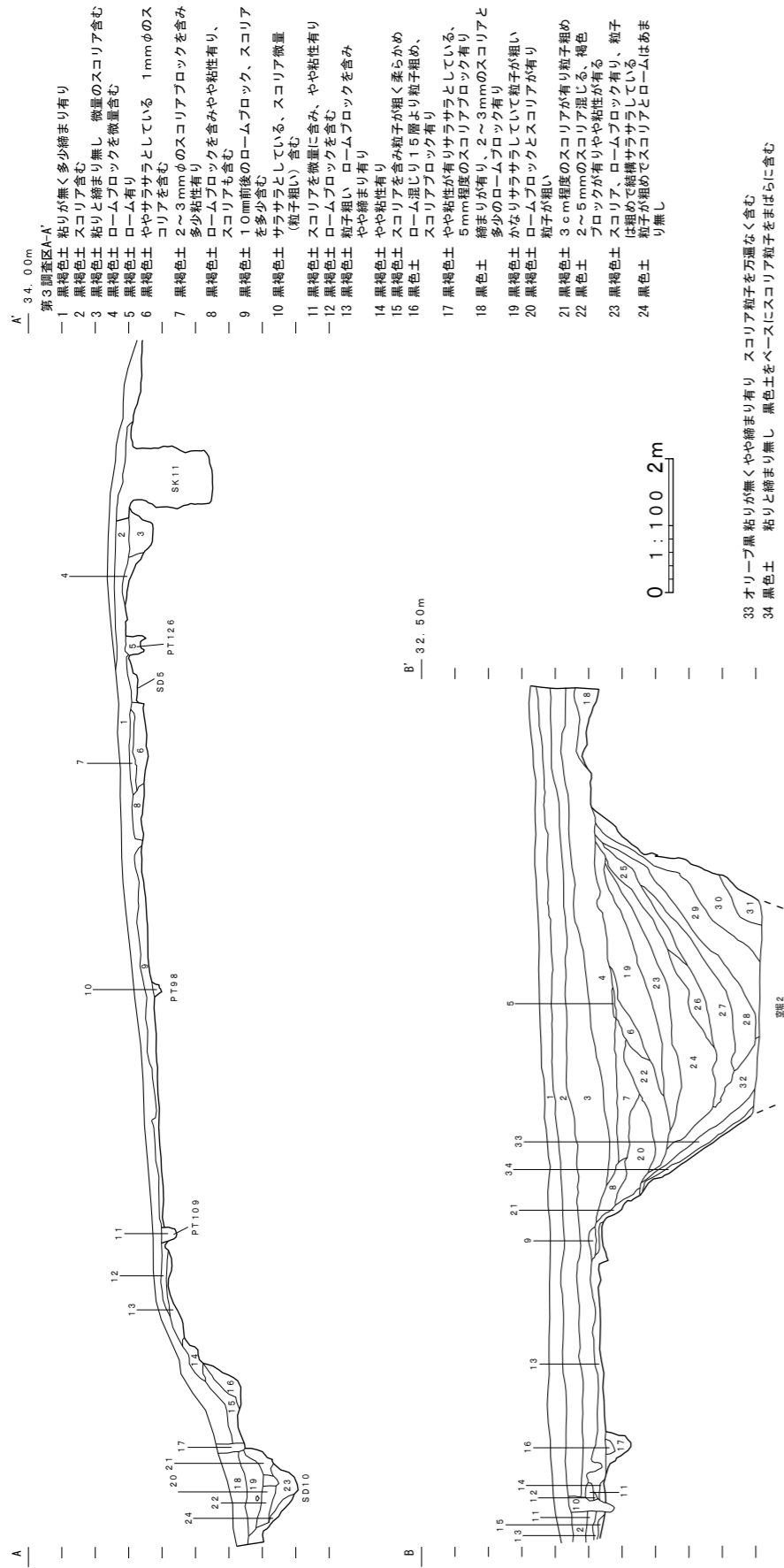
SD2~7の南側を中心に検出した方形の土坑群である。覆土には締りが強いものが多く、ロームブロックを多量に含んでいる。時期を特定できる遺物はなく、性格は不明である。SD群を切っており、SK16・4・6・9・10・11のように等間隔ではないが、列をなしているものもある。

不明遺構群 (SX1~14 第129~131図)

SKやPT群と重複するが、大形の円形の掘り込みをSKと区別してSXとした。SKよりもそれぞれが隣接している。SX1のように休場層(YL層)を主体とする造成土を掘り込んでいるものもある。遺物はSX7を除いて出土していない。

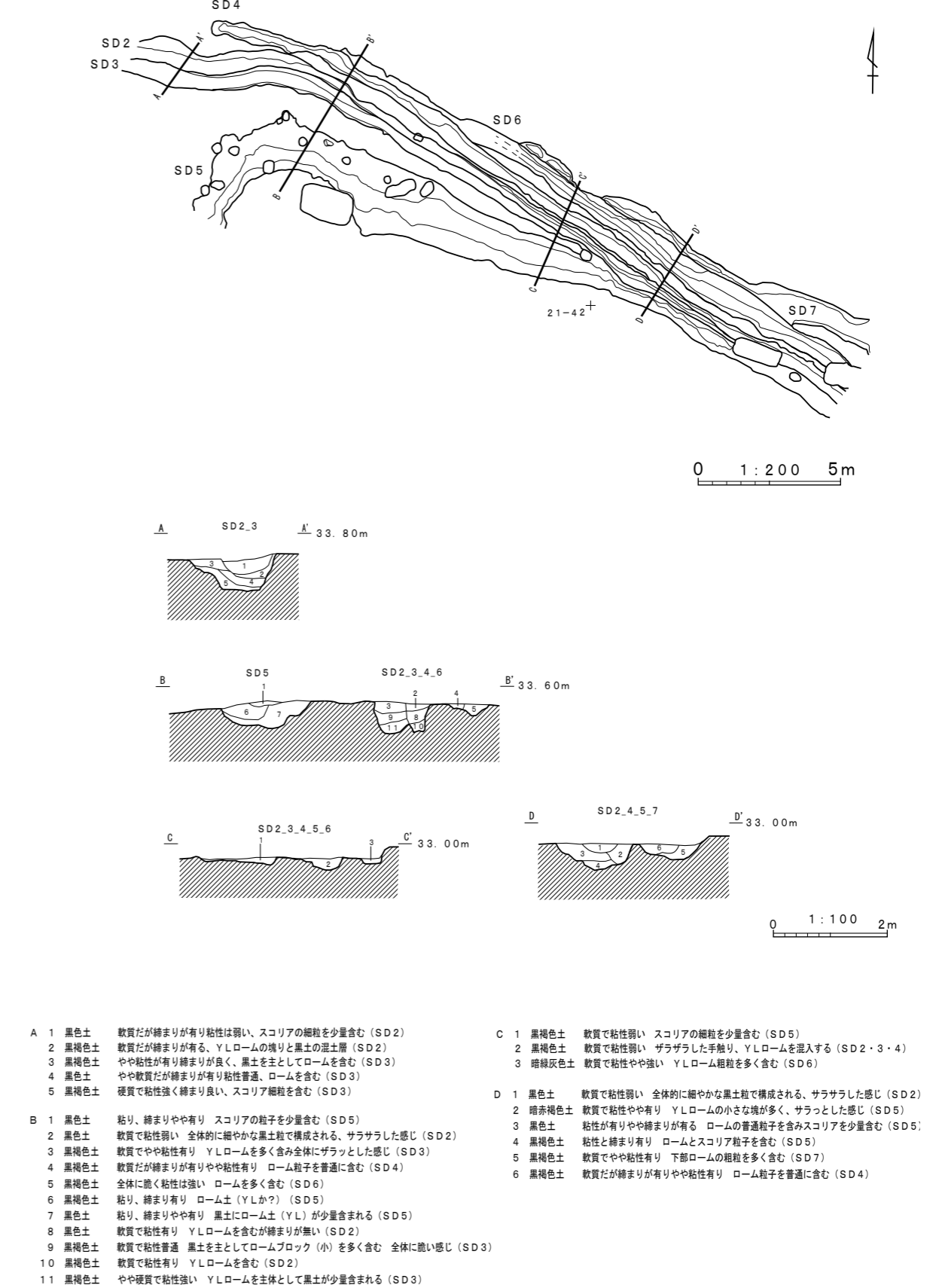


第120図 北曲輪 第3調査区 全体平面図



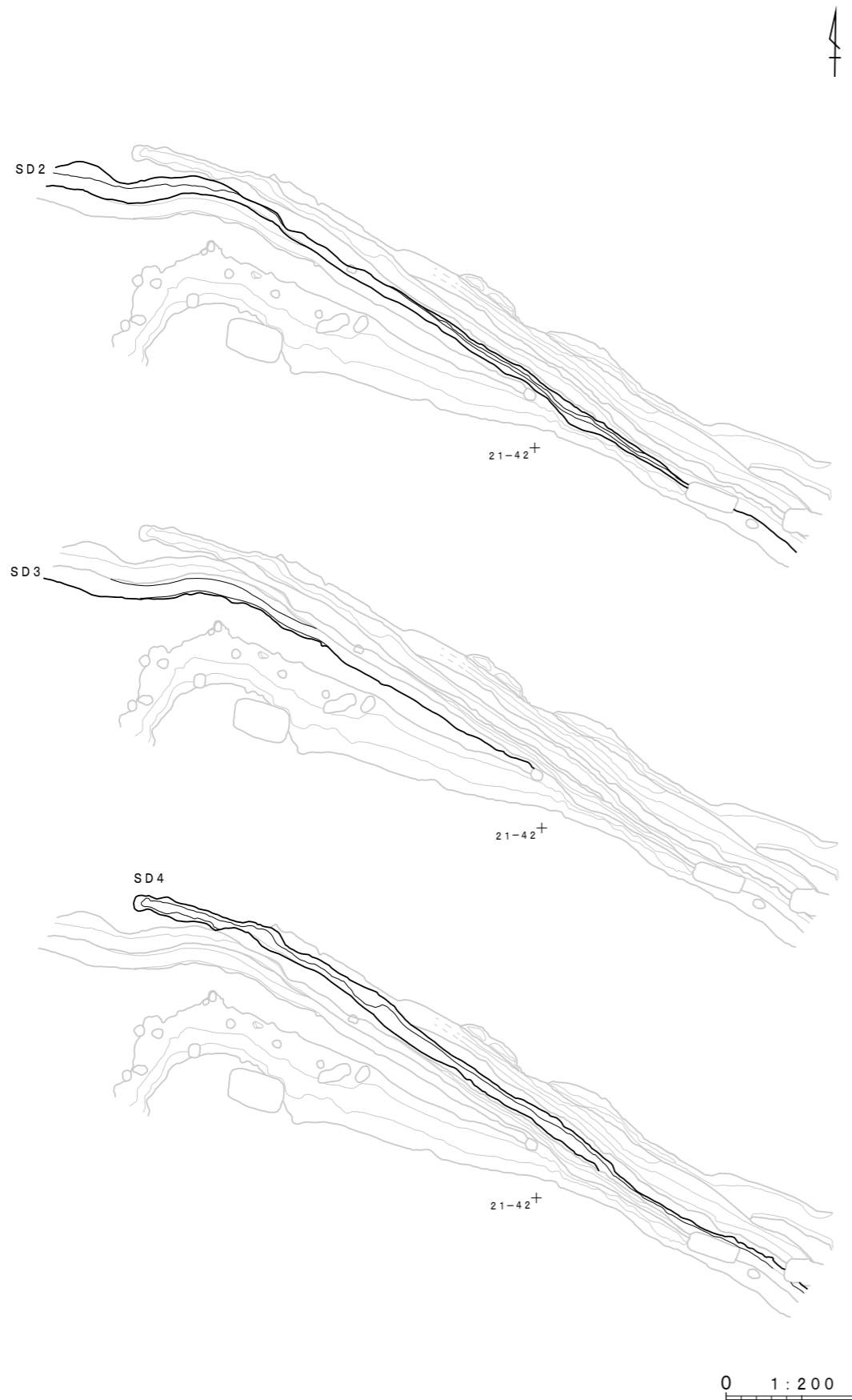
第121図 北曲輪 第3調査区 断面図

- 第3調査区A-A'
- 1 黒褐色土 粘りが無く多少締まり有り
 - 2 黒褐色土 スコリアを含む
 - 3 黒褐色土 粘りと締まり無し 微量のスコリアを含む
 - 4 黒褐色土 ロームブロックを少量含む
 - 5 黒褐色土 ローム有り
 - 6 黒褐色土 ややサラサラとしている 1mmφのスコリアを含む
 - 7 黒褐色土 2~3mmφのスコリアアプロブロックを含む
 - 8 黒褐色土 多少粘性有り やや粘性有り、ロームブロックを多少含む
 - 9 黒褐色土 10mm前後のロームブロック、スコリアを多少含む
 - 10 黒褐色土 サラサラとしている、スコリア微量(粘土相)を含む
 - 11 黒褐色土 スコリアを微細に含む、やや粘性有り
 - 12 黒褐色土 ロームブロックを含む、
 - 13 黒褐色土 粘土相のロームブロックを含む
 - 14 黒褐色土 やや粘性有り
 - 15 黒褐色土 スコリアを粗い粒子が粗く柔らかめ
 - 16 黒褐色土 スコリアを粗い15層より粗く、ロームブロック有り
 - 17 黒褐色土 スコリアアプロブロック有り
 - 18 黒褐色土 やや粘性が有りサラサラとしている、5mm程度のスコリアアプロブロック有り
 - 19 黒褐色土 締まりが有り、2~3mmφのスコリアと多少のロームブロック有り
 - 20 黒褐色土 かなりサラサラしていて粘土が粗いロームブロックとスコリアが有り
 - 21 黒褐色土 3cm程度のスコリアが有り粗い粒子が粗い
 - 22 黒褐色土 2~5mmφのスコリアを粗く、褐色ブロックが有り
 - 23 黒褐色土 スコリア、ロームブロック有り、粗くは粗めで結構サラサラしている
 - 24 黒褐色土 粗くは粗めでスコリアとロームはあま
- 第3調査区B-B'
- 1 黒褐色土 粘りと締まり無し スコリア粒子を少量含む 耕作土
 - 2 黒褐色土 粘りが有り、1cm以下のローム土を少量含む
 - 3 黒褐色土 粘りが有り、1cm以下のローム土を少量含む
 - 4 黒褐色土 粘りが有り、1cm以下のローム土を少量含む
 - 5 黒褐色土 粘りが有り、1cm以下のローム土を少量含む
 - 6 黒褐色土 粘りが有り、1cm以下のローム土を少量含む
 - 7 黒褐色土 粘りが有り、1cm以下のローム土を少量含む
 - 8 黒褐色土 粘りが有り、1cm以下のローム土を少量含む
 - 9 黒褐色土 粘りが有り、1cm以下のローム土を少量含む
 - 10 黒褐色土 粘りが有り、1cm以下のローム土を少量含む
 - 11 黒褐色土 粘りが有り、1cm以下のローム土を少量含む
 - 12 黒褐色土 粘りが有り、1cm以下のローム土を少量含む
 - 13 黒褐色土 粘りが有り、1cm以下のローム土を少量含む
 - 14 黒褐色土 粘りが有り、1cm以下のローム土を少量含む
 - 15 黒褐色土 粘りが有り、1cm以下のローム土を少量含む
- 33 オリーブ黒 粘りが無くやや締まり有り スコリア粒子を万遍なく含む
- 34 黒色土 粘りと締まり無し 黒色土をベースにスコリア粒子をまばらに含む

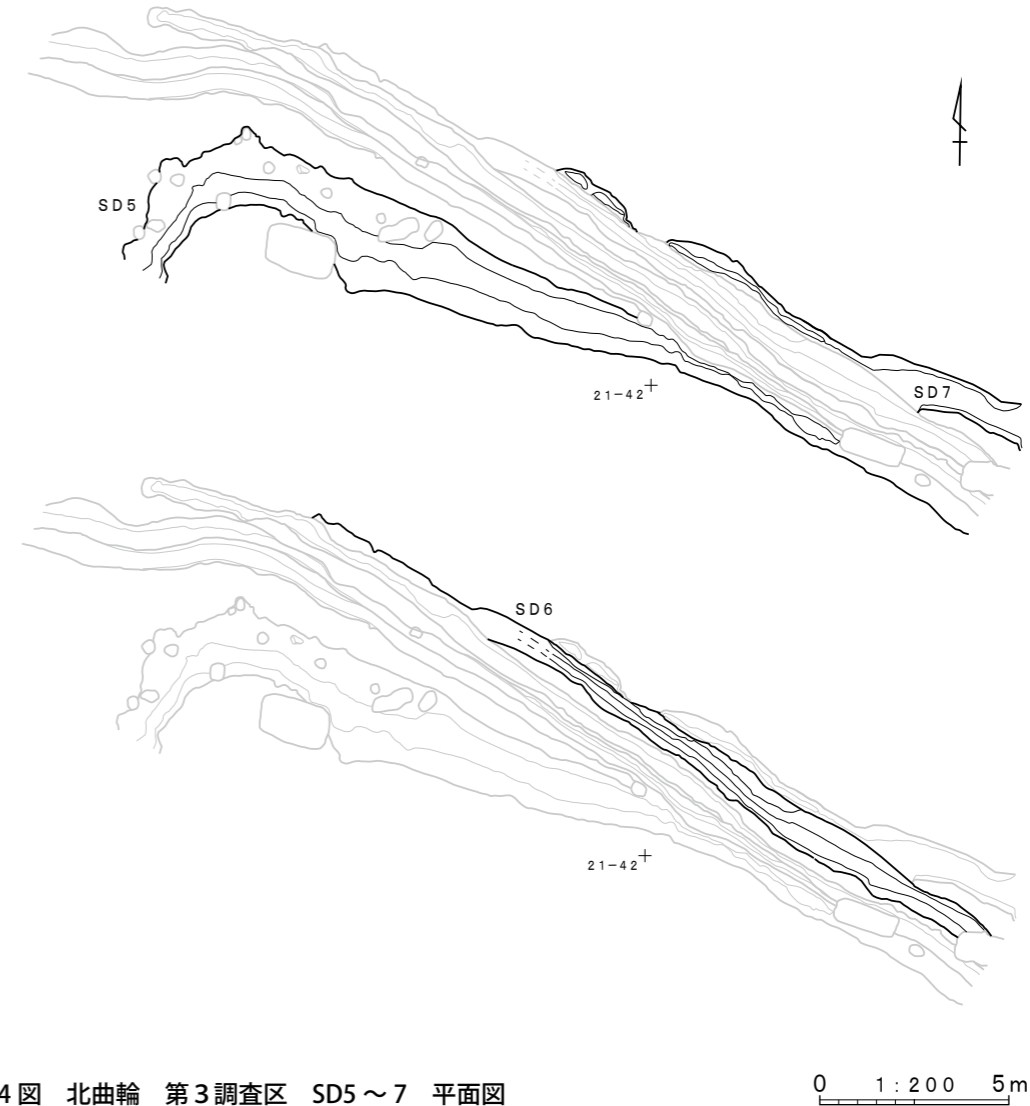


第122図 北曲輪 第3調査区 SD2~7 平・断面図

- A
- 1 黒色土 軟質だが締まりが有り粘性は弱い、スコリアの細粒を少量含む (SD2)
 - 2 黒褐色土 軟質だが締まりが有り、Y.L.ロームの塊りと黒土の混成土 (SD2)
 - 3 黒褐色土 やや粘性が有り締まりが良く、黒土を主としてロームを含む (SD3)
 - 4 黒色土 やや軟質だが締まりが有り粘性普通、ロームを含む (SD3)
 - 5 黒褐色土 硬質で粘性強く締まり良い、スコリア細粒を含む (SD3)
- B
- 1 黒色土 粘り、締まりやや有り スコリアの粒子を少量含む (SD5)
 - 2 黒色土 軟質で粘性弱い 全体的に細やかな黒土粒で構成される、サラサラした感じ (SD2)
 - 3 黒褐色土 軟質でやや粘性有り Y.L.ロームを多く含む全体にサラサラとした感じ (SD3)
 - 4 黒褐色土 軟質だが締まりが有りやや粘性有り ローム粒子を普通に含む (SD4)
 - 5 黒褐色土 全体に強く粘性は強い ロームを多く含む (SD6)
 - 6 黒褐色土 粘り、締まり有り ローム土 (Y.L.か?) (SD5)
 - 7 黒色土 粘り、締まりやや有り 黒土にローム土 (Y.L.) が少量含まれる (SD5)
 - 8 黒色土 軟質で粘性有り Y.L.ロームを含むが締まりが無い (SD2)
 - 9 黒褐色土 軟質で粘性普通 黒土を主としてロームブロック (小) を多く含む 全体に脆い感じ (SD3)
 - 10 黒褐色土 軟質で粘性有り Y.L.ロームを含む (SD2)
 - 11 黒褐色土 やや硬質で粘性強い Y.L.ロームを主体として黒土が少量含まれる (SD3)
- C
- 1 黒褐色土 軟質で粘性弱い スコリアの細粒を少量含む (SD5)
 - 2 黒褐色土 軟質で粘性弱い ゼラザラした手触り、Y.L.ロームを混入する (SD2・3・4)
 - 3 暗緑灰色土 軟質で粘性やや強い Y.L.ローム粗粒を多く含む (SD6)
- D
- 1 黒色土 軟質で粘性弱い 全体的に細やかな黒土粒で構成される、サラサラした感じ (SD2)
 - 2 暗赤褐色土 軟質で粘性やや有り Y.L.ロームの小さな塊が多く、サラサラとした感じ (SD5)
 - 3 黒色土 粘性が有りやや締まりが有る ロームの普通粒を多く含むスコリアを少量含む (SD5)
 - 4 黒褐色土 粘性と締まり有り ロームとスコリア粒子を含む (SD5)
 - 5 黒褐色土 軟質でやや粘性有り 下部ロームの粗粒を多く含む (SD7)
 - 6 黒褐色土 軟質だが締まりが有りやや粘性有り ローム粒子を普通に含む (SD4)



第123図 北曲輪 第3調査区 SD2～4 平面図



第124図 北曲輪 第3調査区 SD5～7 平面図

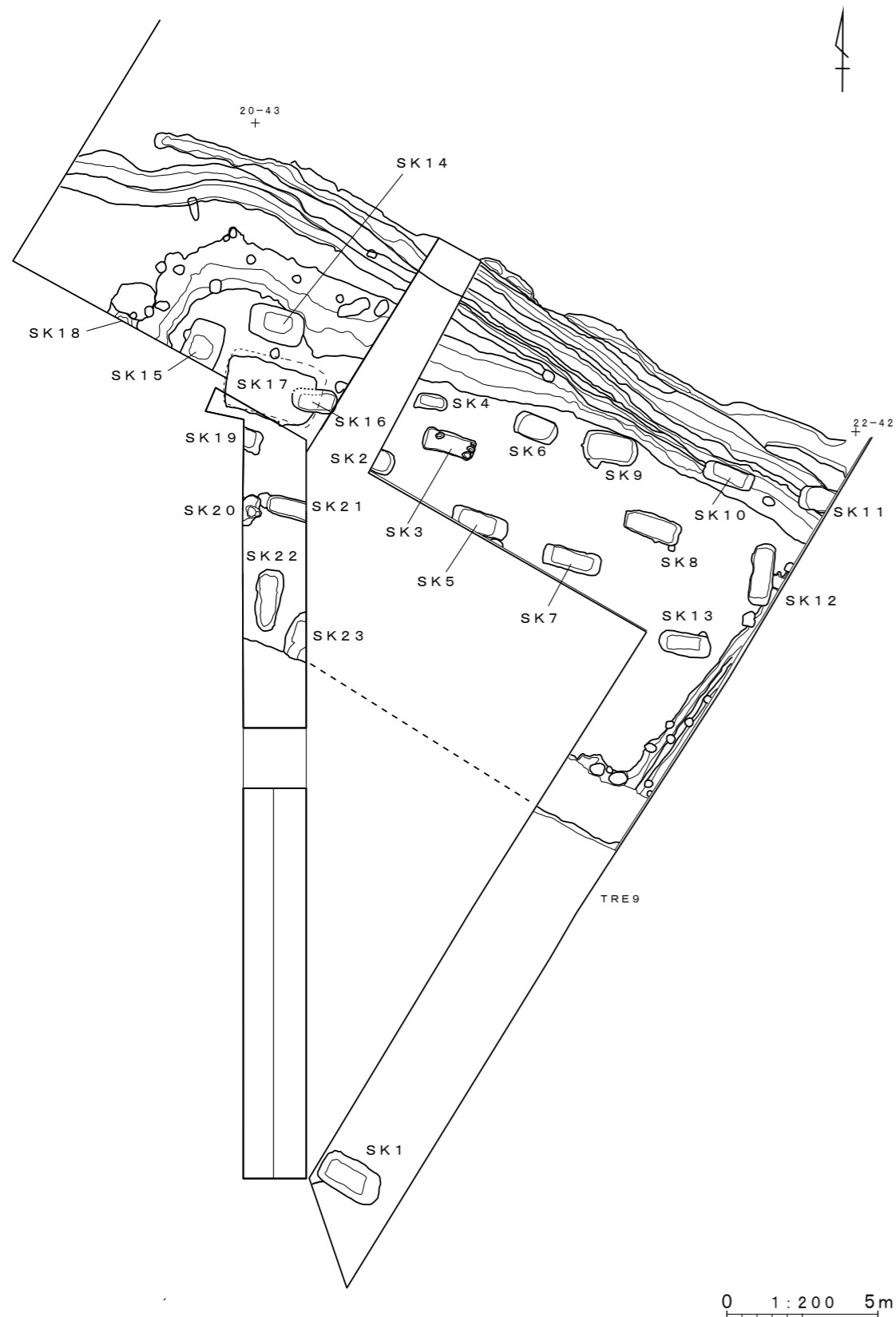


写真55 SD及びSK群 (南から)
PT群 (第132図 第9表)

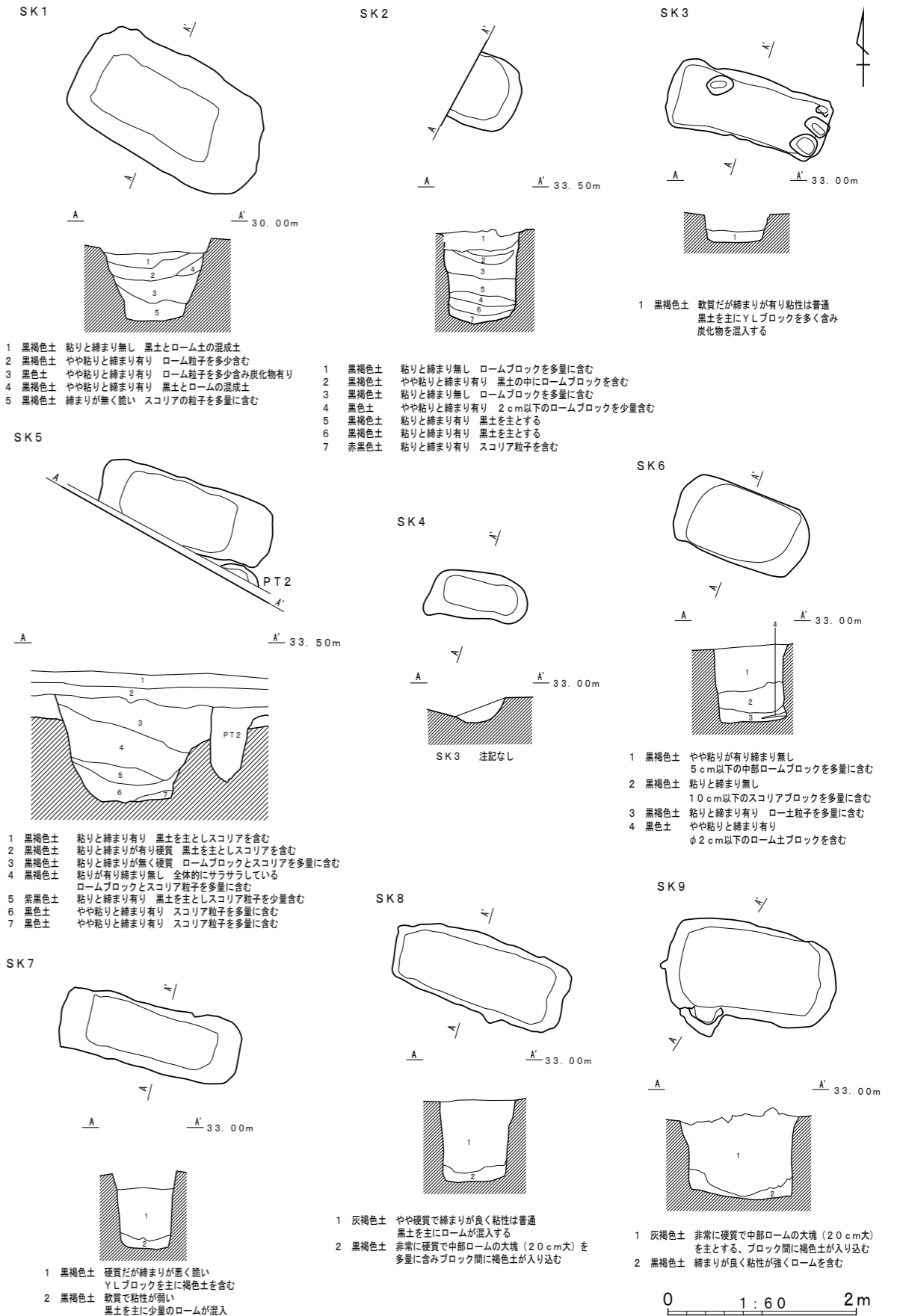


写真56 SD5 (東から)

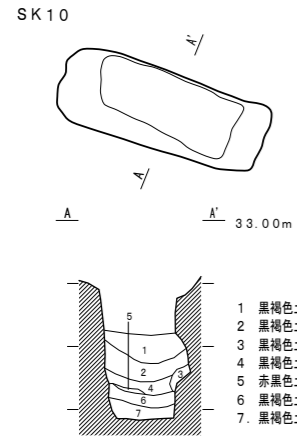
SD、SK、SXなどとともに、空堀1の南で検出した。PT91-50-51-52-28-86や、PT119-120-122-117-113-112などのように列をなすPT群もある。空堀1や空堀2に隣接するため、柵などの可能性があるが、土層注記などの記録がなく、詳細は不明である。規模は第9表に付した。



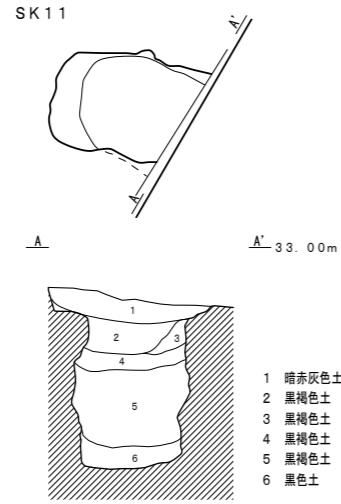
第125図 北曲輪 第3調査区 SK群 平面図(1)



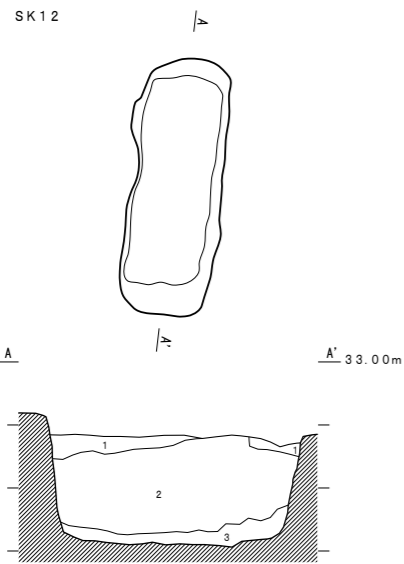
第126図 北曲輪 第3調査区 SK群 平・断面図(2)



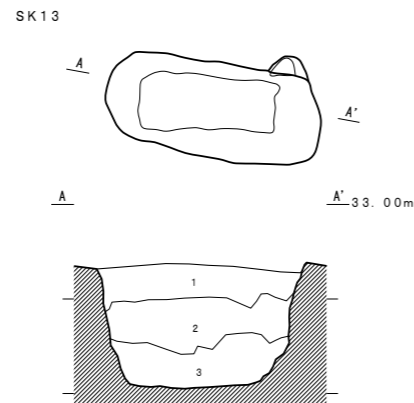
- 1 黒褐色土
- 2 黒褐色土
- 3 黒褐色土
- 4 黒褐色土
- 5 赤黒色土
- 6 黒褐色土
- 7 黒褐色土



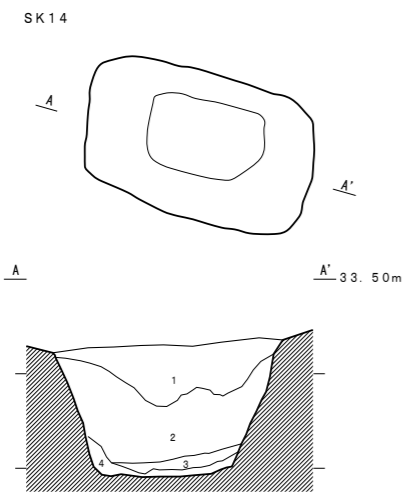
- 1 暗赤灰色土 やや粘りと締まり有り ローム粒子を含む (SDの覆土)
- 2 黒褐色土 粘りと締まり有り ローム粒子を多量に含む
- 3 黒褐色土 粘りと締まり有り ローム粒子を多量に含む
- 4 黒褐色土 やや粘りと締まり有り 軟質で全体にローム粒子を含む
- 5 黒褐色土 粘りと締まり有り ロームとスコリア粒子を含む
- 6 黒色土 粘りと締まりが無くザラザラしているスコリアの粗粒を多く含む



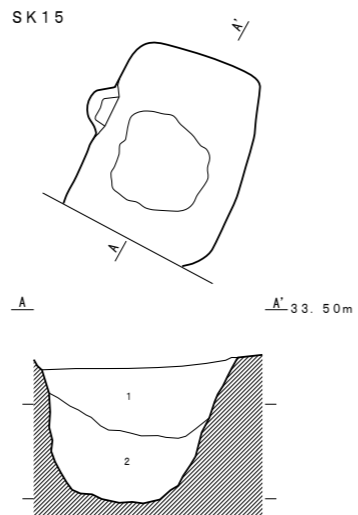
- 1 黒褐色土 粘りと締まり無し 橙色の1~2mmφのスコリアを含みローム土が若干流れ込む
- 2 黒褐色土 中部ブロック15mm~50mmφよりなる 隙間にローム土、黒色粒子が入り込む
- 3 黒褐色土 2~3cmφ程度の中部ブロックを含む、ローム粒子、1~2mmφの粒スコリアを含み砂質が強い



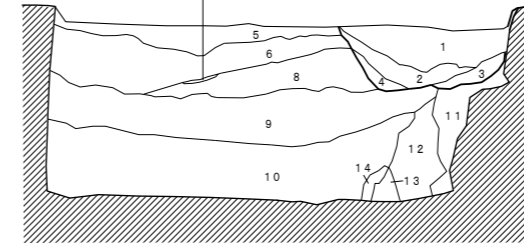
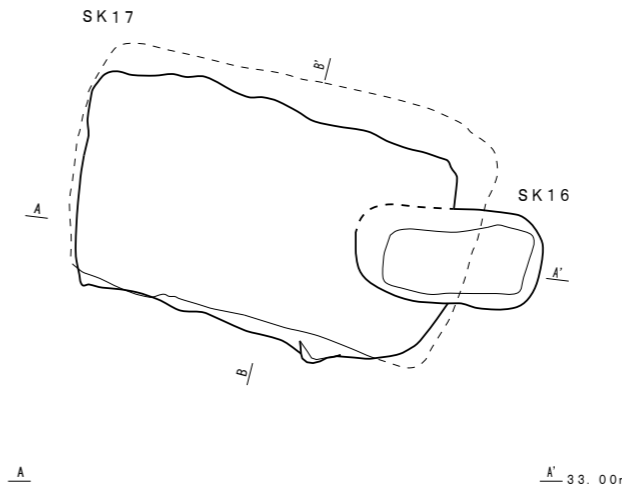
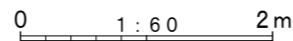
- 1 黒褐色土 中部ローム、黒色土層のブロック (BB7か?) 10~20cm、ローム土2~3cmφのブロックからなる
- 2 黒色土 10~20cmの中部部録、黒色土 (BB7?) のブロックからなる
- 3 黒色土 下部にローム土の流れ込み有り



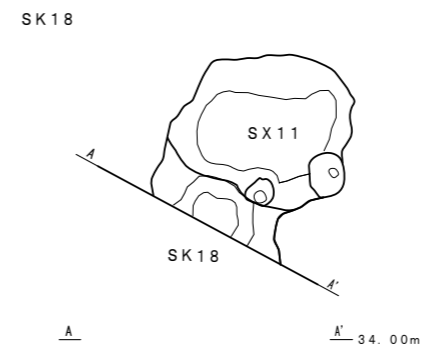
- 1 黒褐色土 2~5cmの中部ブロックとロームブロックがスコリア粒子の中に多量に含まれる
- 2 黒褐色土 2層よりやや締まり有り 15cmの中部ブロックと第三スコリアブロックの混成土
- 3 黒褐色土 やや締まりが有り硬質 スコリア粒子を多量とロームブロックを少量含む
- 4 黒色土 硬質で締まりが良く、粘性が強い、ロームを含む第三スコリアの層からなる



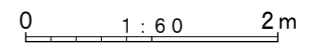
- 1 暗赤灰色土 非常に脆い土層の中に10cm大の中部ロームブロックと第三スコリアブロックを多く含む
- 2 黒褐色土 黒土をベースにスコリアを多少含む



- 1 暗赤灰色土 脆い土層の中に10cm未満の中部ブロックと第三スコリアブロックを含む
- 2 黒色土 やや粘りと締まり有り 黒土を主体とする中にローム土が多少含まれる
- 3 黒褐色土 やや粘りと締まり有り スコリア粒子を少量含む
- 4 黒褐色土 やや粘りと締まり有り スコリア粒子を少量含む
- 5 赤黒色土 粘りと締まり無し 黒土を主体にしてスコリア粒子が多少含まれる
- 6 黒褐色土 やや粘りと締まり有り 2cm以下の第三スコリアブロックを含む
- 7 黒色土 軟質で黒土を主体としている
- 8 黒色土 やや粘りと締まり無し 5cm未満の第三スコリアブロックをスコリア含む
- 9 黒色土 やや粘りと締まり有り 硬質でスコリア粒子を多量に含み5cm以下の第三スコリアブロックを普通に含む
- 10 黒褐色土 粘り有り 第三スコリアブロック間に粗粒を含む、全体としては締まり有り
- 11 黒褐色土 硬質で第三スコリアの層
- 12 黒色土 やや粘りと締まり有り 10cm未満の第三スコリアブロックが少量有り
- 13 黒褐色土 脆い土層の中に2cm以下の第三スコリアブロックが含まれる
- 14 黒色土 粘りと締まり有り 黒土を主体にしてスコリアが多少含まれる
- 15 黒色土 粘りと締まり有り 黒土をベースとし、YLのローム土と第三スコリアブロックを含む

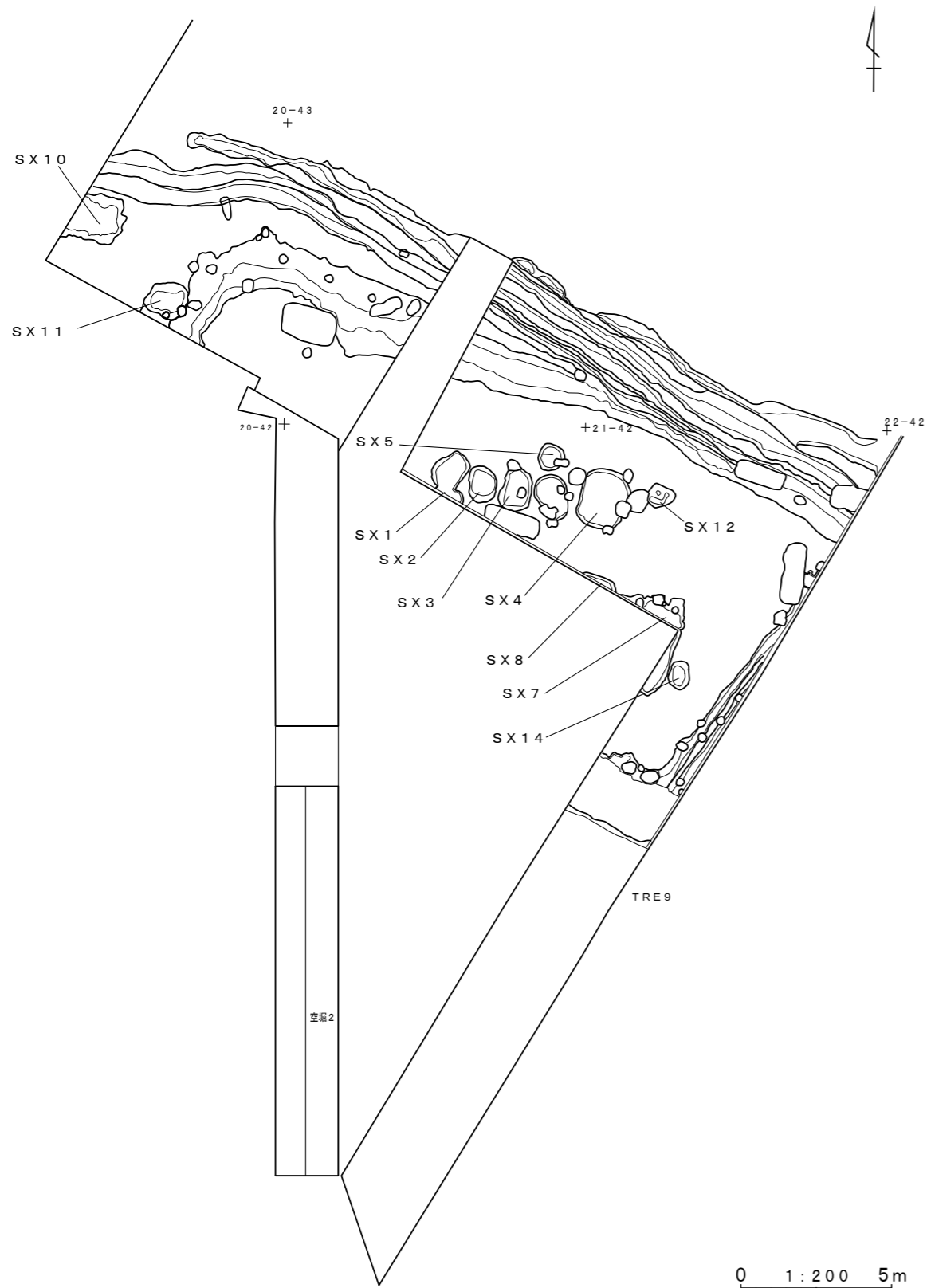


- 1 オリーブ黒色土 耕作土
- 2 オリーブ黒色土 粘りと締まり有り 2cm未満のローム土と少量のスコリア粒子を含む
- 3 黒褐色土 硬質の中に10cm未満のロームブロックとスコリアブロックを含む
- 4 暗赤灰色土 粘りと締まり有り 黒土の中にスコリアの粒子を多量に含む
- 5 暗赤灰色土 粘りと締まり有り スコリアの粒子を少量含む
- 6 緑褐色土 硬質でやや粘りと締まり有り スコリアを少量含む
- 7 暗赤灰色土 硬質でやや粘りと締まり有り ローム土と黒土の混成土、スコリア少量有り
- 8 黒褐色土 軟質の中にローム土が多量に含まれている
- 9 オリーブ黒色土 粘りと締まりが無く脆い 黒土とローム土の混成土

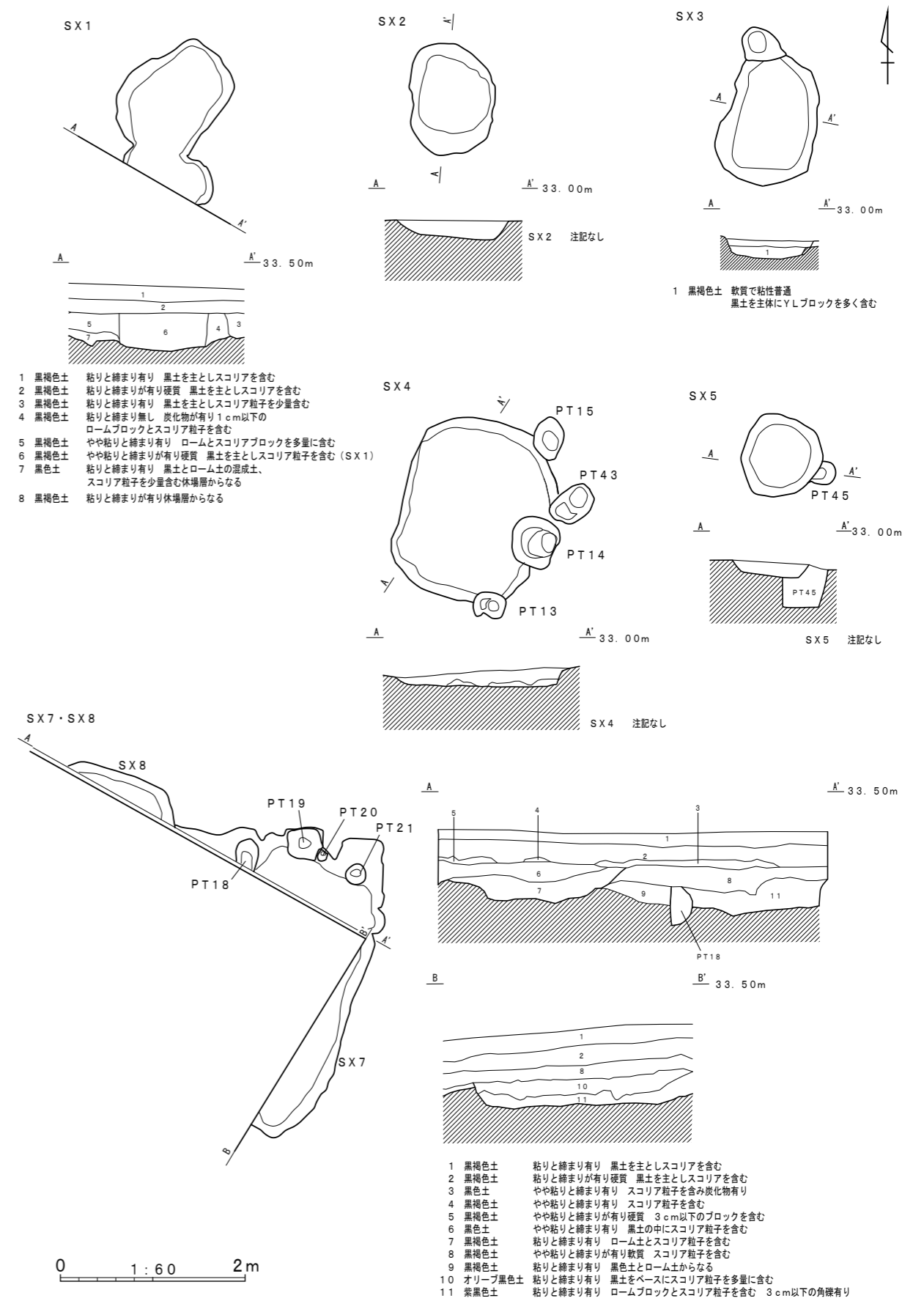


第128図 北曲輪 第3調査区 SK群 平・断面図(4)

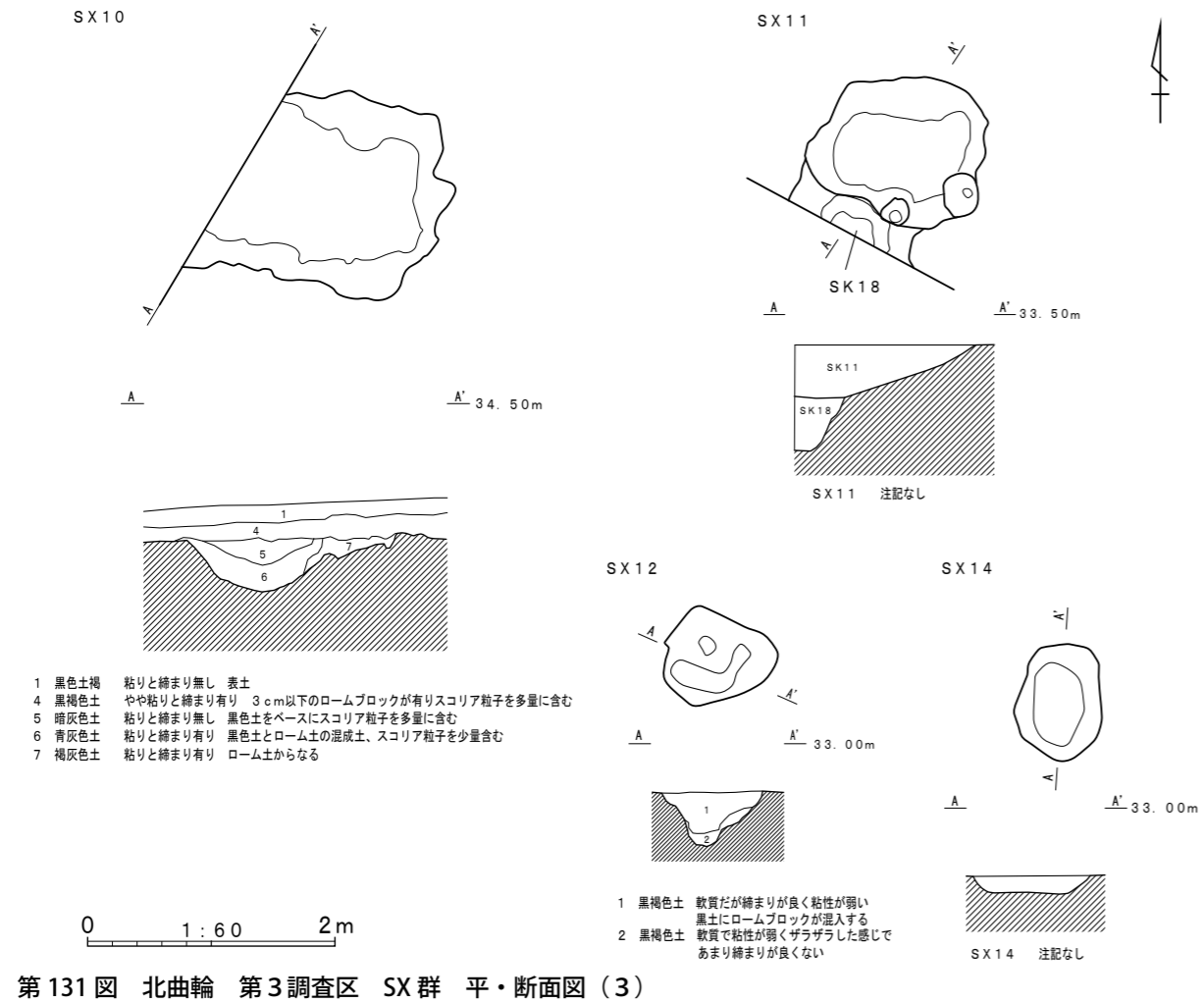
第127図 北曲輪 第3調査区 SK群 平・断面図(3)



第129図 北曲輪 第3調査区 SX群 平面図(1)



第130図 北曲輪 第3調査区 SX群 平・断面図(2)



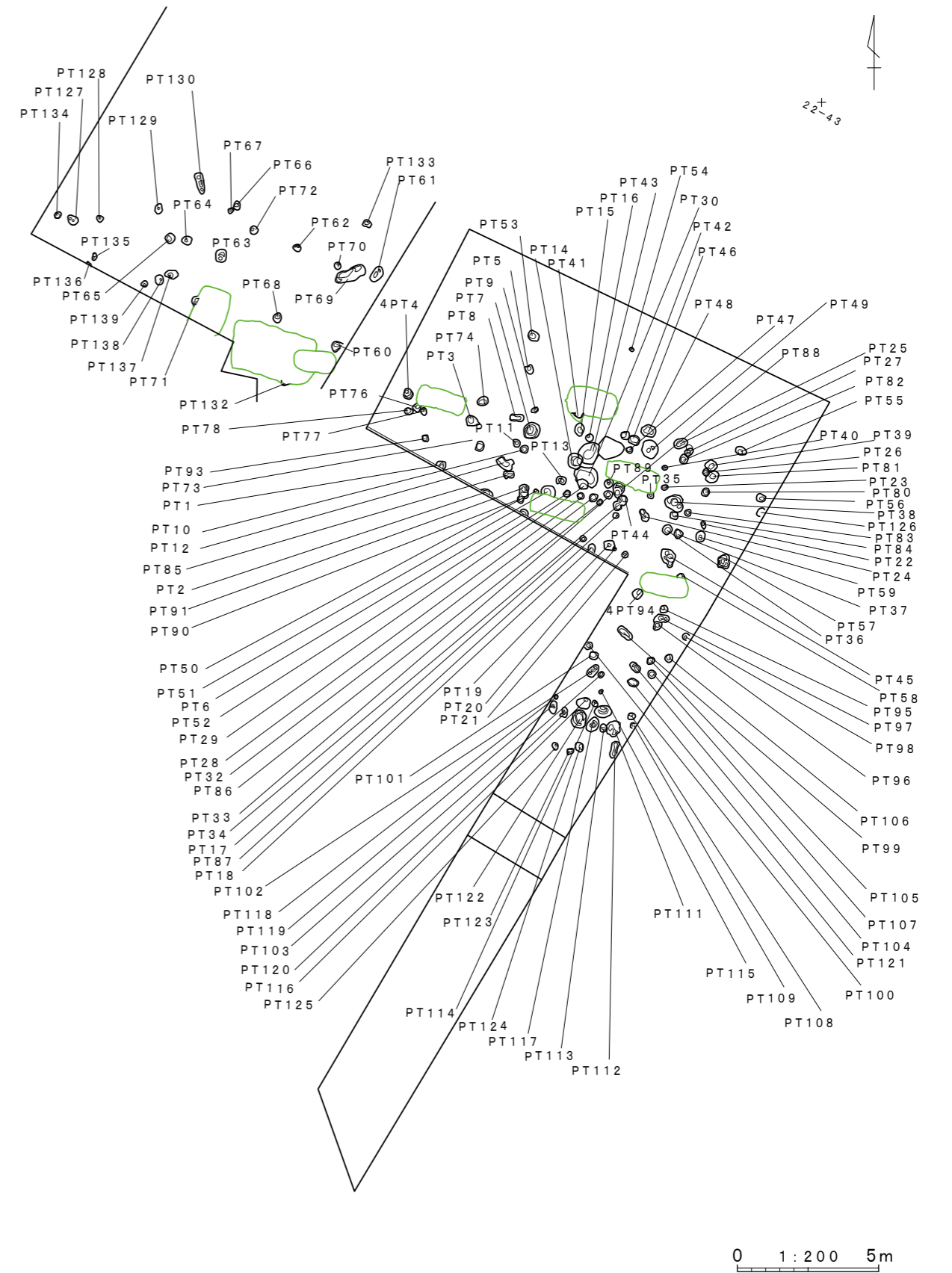
第131図 北曲輪 第3調査区 SX群 平・断面図(3)



写真57 北曲輪第3調査区 SK群およびPT群



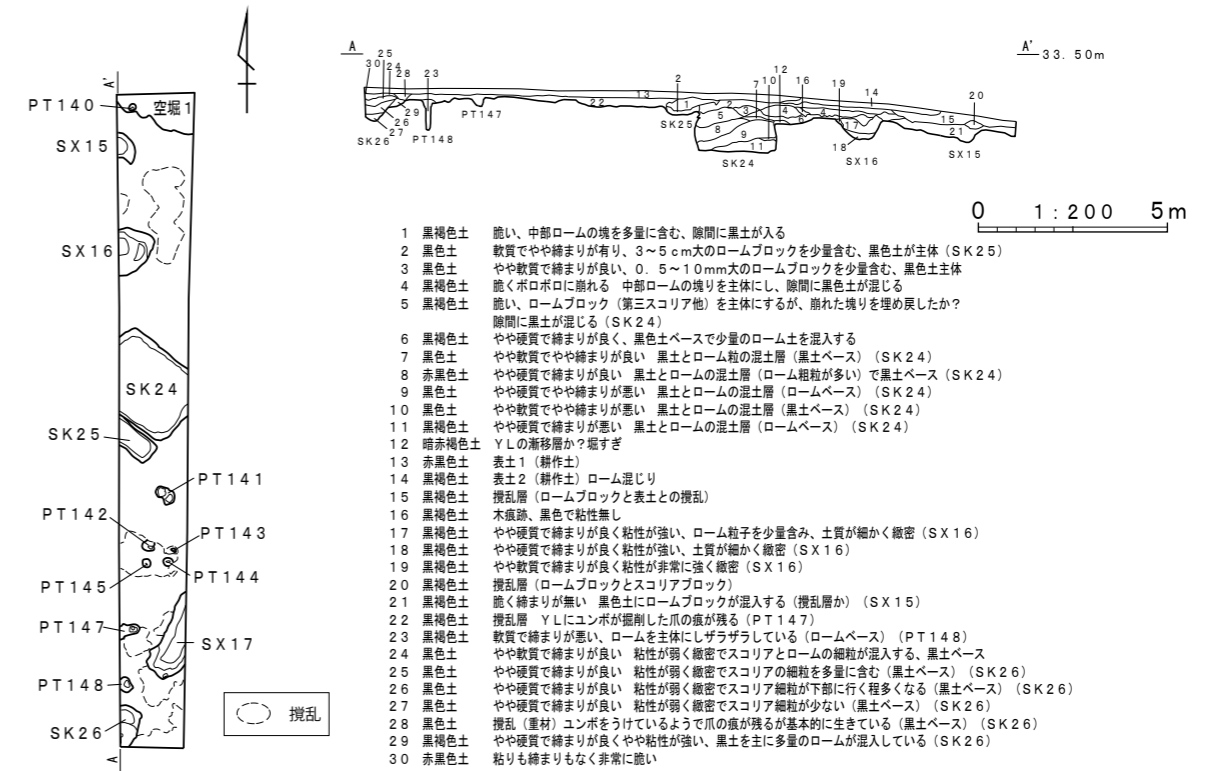
写真58 北曲輪第3調査区 SK土層断面



第132図 北曲輪 第3調査区 PT群 平面図

第9表 北曲輪 第3調査区 PT群計測表

遺構名	幅 (m)	深さ (m)	備考	遺構名	幅 (m)	深さ (m)	備考	遺構名	幅 (m)	深さ (m)	備考
PT1	0.341	0.418		PT48	0.522	0.254		PT95	0.292	0.589	
PT2	0.382	0.563		PT49	0.662	0.521		PT96	0.352	0.275	
PT3	0.504	0.472		PT50	0.180	0.242		PT97	0.509	0.408	
PT4	0.384	0.467		PT51	0.502	0.869		PT98	0.253	0.310	
PT5	0.323	0.445		PT52	0.235	0.195		PT99	0.614	0.625	
PT6	0.291	0.139		PT53	0.423	0.604		PT100	0.286	0.242	
PT7	0.622	0.524		PT54	0.164	0.323		PT101	0.327	0.458	
PT8	0.489	0.460		PT55	0.404	0.537		PT102	0.500	0.304	
PT9	0.248	0.253		PT56	0.326	0.488		PT103	0.227	0.239	
PT10	0.292	0.300		PT57	0.499	0.712		PT104	0.431	0.358	
PT11	0.288	0.152		PT58	0.294	0.714		PT105	0.289	0.262	
PT12	0.593	0.482		PT59	0.398	0.221		PT106	0.283	0.301	
PT13	0.344	0.202		PT60	0.414	0.657		PT107	0.290	0.285	
PT14	0.586	0.724		PT61	0.575	0.721		PT108	0.271	0.420	
PT15	0.466	0.782		PT62	0.276	0.552		PT109	0.185	0.172	
PT16	0.267	0.659		PT63	0.475	0.373		PT110	0.617	0.717	
PT17	0.221	0.108		PT64	0.343	0.450		PT111	0.576	0.339	
PT18	0.308	0.328		PT65	0.349	0.393		PT112	0.598	0.206	
PT19	0.384	0.702		PT66	0.323	0.575		PT113	0.281	0.154	
PT20	0.130	0.226		PT67	0.234	0.354		PT114	0.224	0.540	
PT21	0.228	0.276		PT68	0.349	0.295		PT115	0.161	0.217	
PT22	0.268	0.346		PT69	1.115	0.641		PT116	0.474	0.665	
PT23	0.223	0.166		PT70	0.258	0.604		PT117	0.539	0.383	
PT24	0.458	0.279		PT71	0.391	0.047		PT118	0.166	0.263	
PT25	0.483	0.424		PT72	0.295	0.604		PT119	0.450	0.442	
PT26	0.330	0.272		PT73	0.331	0.563		PT120	0.345	0.441	
PT27	0.325	0.527		PT74	0.396	0.433		PT121	0.385	0.219	
PT28	0.241	0.205		PT75	—	—	欠番	PT122	0.633	0.575	
PT29	0.432	0.697		PT76	0.299	0.329		PT123	0.255	0.444	
PT30	0.885	0.742		PT77	0.278	0.291		PT124	0.345	0.729	
PT31	—	—	欠番	PT78	0.294	0.284		PT125	0.259	0.403	
PT32	0.320	0.128		PT79	—	—	欠番	PT126	0.331	—	
PT33	0.301	0.364		PT80	0.306	0.022		PT127	0.395	0.199	
PT34	0.321	0.360		PT81	0.491	0.243		PT128	0.234	0.293	
PT35	0.324	0.243		PT82	0.253	0.242		PT129	0.367	0.750	
PT36	0.349	0.315		PT83	0.249	0.221		PT130	0.756	0.359	
PT37	0.314	0.324		PT84	0.289	0.400		PT131	0.262	0.578	
PT38	0.653	0.641		PT85	0.377	0.433		PT132	0.316	0.440	
PT39	0.431	0.351		PT86	0.219	0.256		PT133	0.305	0.241	
PT40	0.193	0.141		PT87	0.217	0.311		PT134	0.260	0.299	
PT41	0.322	0.664		PT88	0.579	0.769		PT135	0.271	0.323	
PT42	0.314	0.700		PT89	0.338	0.426		PT136	—	—	欠番
PT43	0.494	0.208		PT90	0.259	0.204		PT137	0.465	0.495	
PT44	0.257	0.320		PT91	0.493	0.381		PT138	0.353	0.295	
PT45	0.651	0.820		PT92	0.382	0.414		PT139	0.229	0.374	
PT46	0.391	0.787		PT93	0.249	0.159					
PT47	0.231	0.171		PT94	0.376	0.503					



第133図 北曲輪 第4調査区 平・断面図

(5) 第4調査区 (第133図)

北曲輪西側に設定したトレンチである。表土直下のローム層も重機での攪乱を受けており、検出された遺構群も城郭段階のものではない可能性が高い。また一部では富士黒層 (FB層) と休場層 (YL層) の間に存在する漸移層 (Zn層) と考えられる層位が確認されており、城郭段階では大きな造成を受けていないことがわかる。ただしトレンチ調査であることや遺物が出土していないことから、検出遺構や造成状況については明らかではない。

(6) 第5調査区 (第134図)

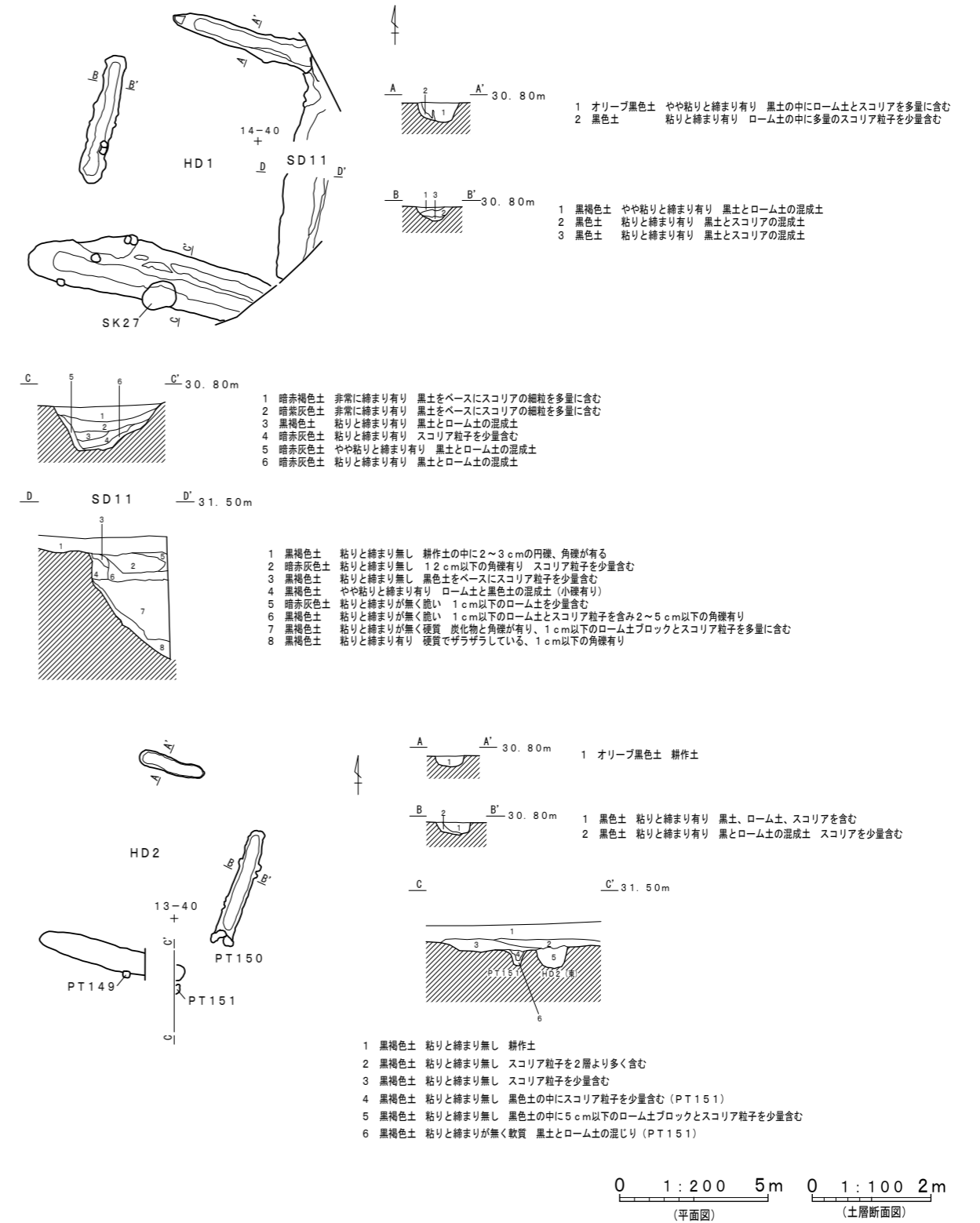
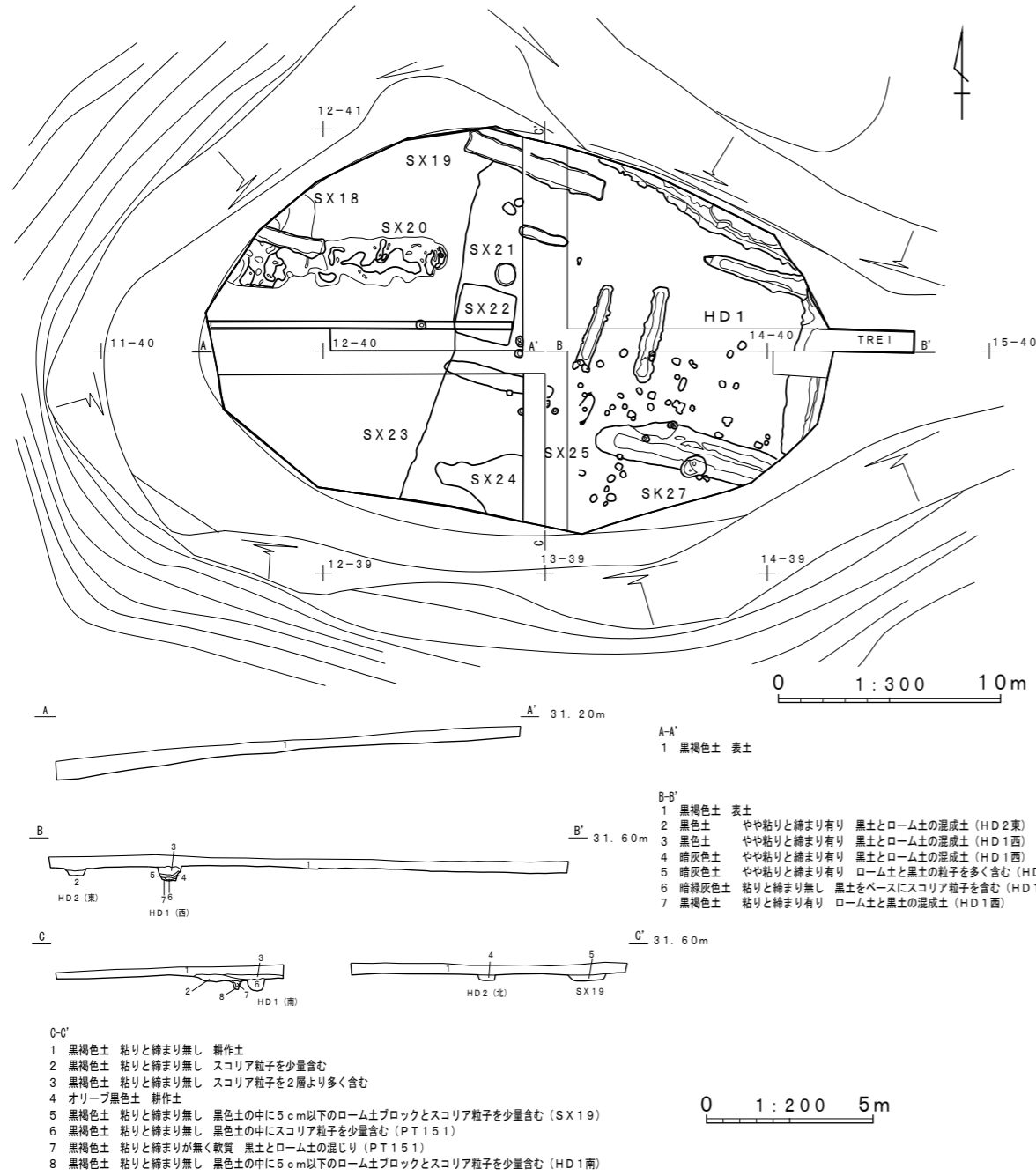
北曲輪南西に位置する小曲輪の遺構確認を目的に面的な調査を実施した。当初は「禅徳寺城」絵図において、伝天守台と道が繋がって描かれていることから、橋などの遺構の検出を予見していたが、明確な城郭段階と位置づけることができる遺構は検出できず、弥生時代中期の方形周溝墓2基 (HD1・HD2)、時期不明の11号溝 (SD11)、土坑 (SK27) 及び不明遺構 (SX) の確認にとどまった。ただし、SD11は小曲輪と北曲輪との境に2.0m以上掘り込まれている溝であり、北曲輪とを画す溝として城郭段階の遺構に位置づけられる可能性がある。なお、墳丘は滅失しているものの弥生時代の遺構が残存していることから、城郭段階において本性曲輪の造成は小規模であったと考えられる。

1号方形周溝墓・11号溝 (HD1・SD11 第135図)

墳丘は残存しておらず、溝のみの検出であった。東側の溝は、SD11によって滅失している。また後世の攪乱を受けている可能性もあるが、南側の溝は北と西の溝と比べて幅が広く、幅1.8m、深さ0.8mを測る。最小の溝は西側で最大幅0.7m、深さは0.3mである。弥生土器の壺形土器が出土したが、城郭遺構でないため、写真のみの掲載とした (写真60)。

2号方形周溝墓 (HD2 第135図)

四隅切れの方形周溝墓で、西側の溝はSX23に切られており、検出されなかった。北と東の溝は完掘し



第135図 北曲輪 第5調査区 HD1・SD11・HD2 平・断面図



写真 59 HD1 検出状況

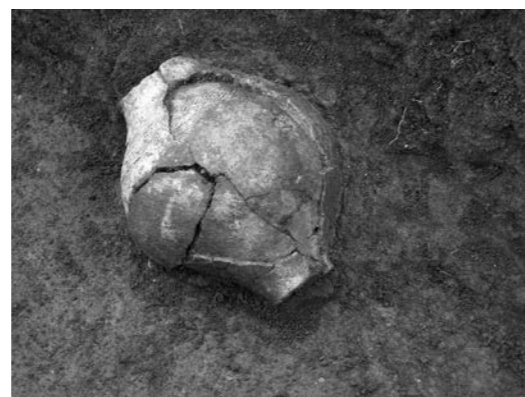


写真 60 HD1 遺物出土状況

たが、南側の溝は一部のみの掘削とした。規模は3方ほど一定で、0.5～0.8 m、深さは0.2～0.3 mを測る。
27号土坑・不明遺構群 (SK27・SX18～25 第134図)

SK27はHD1南溝の上面、SX群は第5調査区の西側にて検出した。SXは、SX19を除いて平面的な検出にとどまっている。SX23はHD2の西側の溝を滅失させているため、弥生時代以降の掘り込みであり、曲輪拡張の造成ラインの可能性もある。

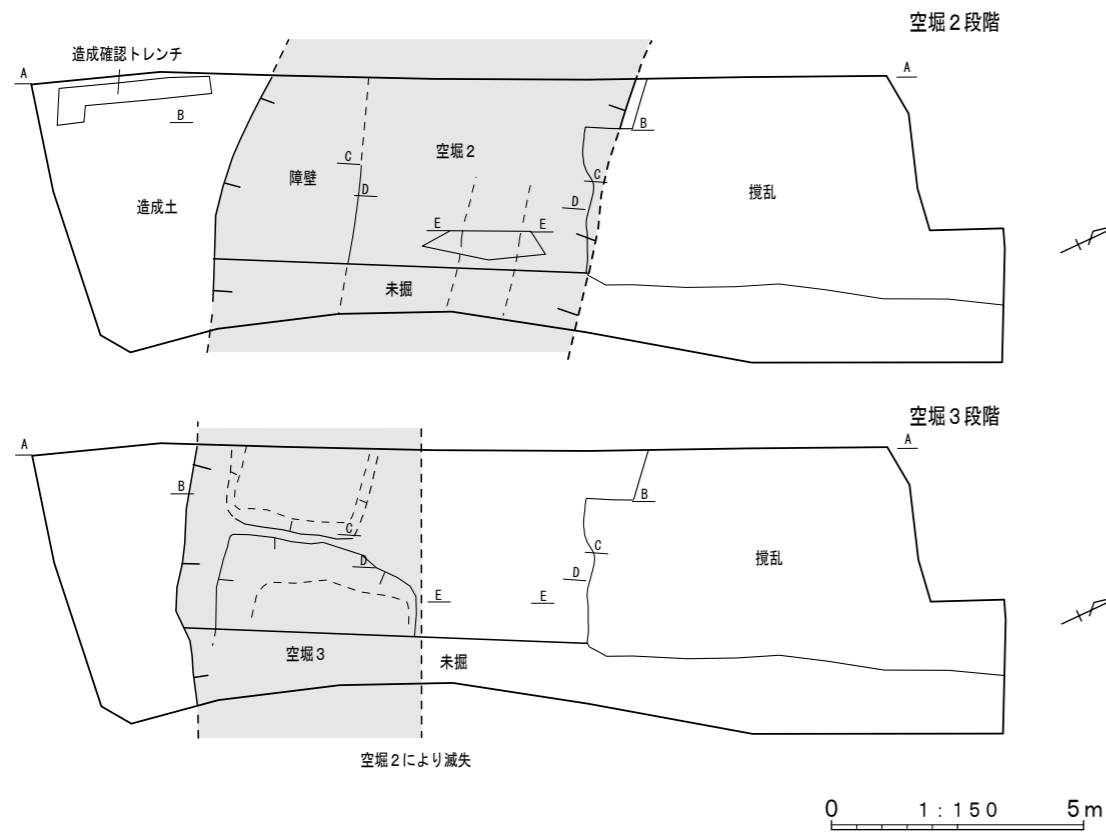
(7) 第6調査区 (第136・137図)

平成29年度に実施した空堀2の確認調査区である。平面的に確認していた空堀2の東端部にトレンチを設定して堀底までを調査した。調査途中で、空堀2の南側の肩部が岩盤屑を多量に含んだ土砂によって構築されていることが判明し、これを断ち割ったところ、空堀2よりも古い空堀が存在することが確認された。これを空堀3と呼称する。なお、本調査区は十分な整理期間が取れなかったため、概要のみの報告とする。

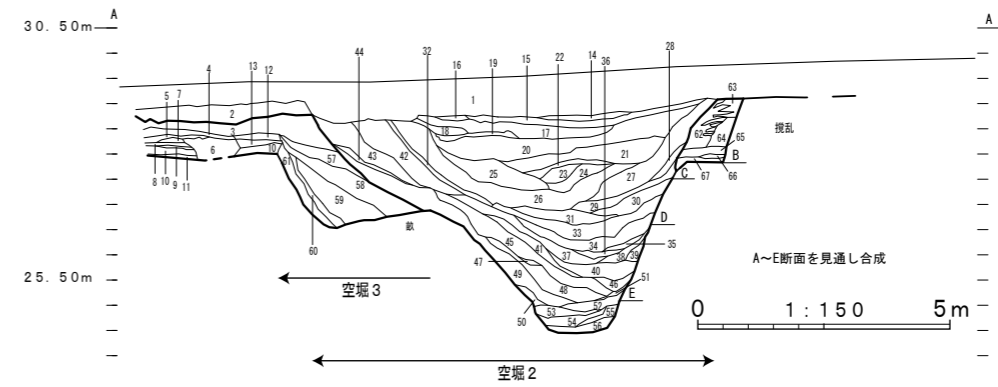
空堀2 (第136図上段・137図)

空堀3が岩盤屑を多量に含んだ土砂で埋め戻されてから、新たに掘り込まれた素掘りの堀である。堀幅は7.5 m、深さ4.1 mを測る。北側は基本的に中部ローム層を肩部とするが、上面は地山のローム土を水平に削平した後に、黒色と黄色の土を用いて造成している。

出土遺物には1点のみ覆土上層にて志戸呂大窯4段階の徳利が出土しているが、この他はすべて染付皿E群や大窯前半段階の播鉢などの16世紀中葉以前のものである。また北側の造成土(第137図67層)から大窯1段階の緑釉小皿(未掲載)が出土している。以上のことから、現段階では志戸呂は混入と捉え、空堀2の年代は16世紀中葉以降であって、最終段階には埋没していると想定される。このことは絵図に空堀2が記載されていないことと符合する。



第136図 北曲輪 第6調査区 空堀2・3 平面図



第137図 北曲輪 第6調査区 空堀2・3 断面図

- 北曲輪 第6調査区 A-A'～E-E'
- 1 黒色土 しまりやや弱い 粘性弱い 表土
 - 2 明黄褐色土 しまりやや弱い 粘性弱い φ50～200mm 大の礫を30%と中部ローム土混合
 - 3 明黄褐色土 しまりやや弱い 粘性弱い φ5～10mm 大の礫を5%含む
 - 4 褐灰色土 しまりやや弱い 粘性弱い φ10～50mm 大の黄色ローム土ブロックを10%含む
 - 5 黒褐色土 しまりやや強い 粘性やや強い SCIV層土のブロック層や黄色ローム土ブロックを10%含む
 - 6 黒褐色土 しまりやや弱い 粘性やや弱い 上部ローム土のブロック混じる
 - 7 黒色土 しまりやや強い 粘性やや強い 黄色ローム土ブロックを30%含む
 - 8 褐灰色土 しまりやや強い 粘性やや強い φ1～2mm 大の赤色スコリア粒をごく少量含む
 - 9 明黄褐色土 しまりやや強い 粘性やや強い 中部ローム土主体
 - 10 灰色土 しまりやや強い 粘性やや強い φ1～2mm 大の赤色スコリア粒をごく少量含む
 - 11 — SCIV層(地山)
 - 12 明黄褐色土 しまりやや強い 粘性やや強い 中部ローム土主体
 - 13 黒褐色土 しまりやや強い 粘性やや弱い φ5～50mm 大の黄色ローム土ブロックを10%含む
 - 14 にぶい黄褐色土 しまりやや強い 粘性強い 黄色ローム土主体層
 - 15 黒褐色土 しまりやや強い 粘性やや強い 上部ローム土のブロック20%混合土
 - 16 明黄褐色土 しまりやや強い 粘性やや強い 黄色ローム土ブロック主体層
 - 17 褐灰色土 しまりやや強い 粘性やや強い φ2～30mm 大の黄色ローム土ブロックを10%含む
 - 18 黒色土 しまりやや強い 粘性やや強い φ2～30mm 大の黄色ローム土ブロックを3%含む
 - 19 明黄褐色土 しまりやや強い 粘性やや強い 中部ローム土主体
 - 20 黒褐色土 しまりやや強い 粘性やや強い φ2～10mm 大の黄色ローム土ブロック10%と小石5%を含む
 - 21 暗褐色土 しまりやや強い 粘性やや弱い φ1～2mm 大の赤色スコリア粒とφ50～100mm 大の黄色ローム土ブロック5%を含む
 - 22 黒褐色土 しまりやや強い 粘性やや弱い φ1～2mm 大の赤色スコリア粒を3%とφ2～30mm 大の黄色ローム土ブロック5%を含む
 - 23 にぶい黄褐色土 しまりやや弱い 粘性やや弱い φ2～20mm 大の黄色ローム土ブロックを10%含む
 - 24 黒褐色土 しまりやや弱い 粘性やや弱い φ1～2mm 大の赤色スコリア粒3%とφ5～10mm 大の黄色ローム土ブロック3%を含む
 - 25 黒色土 しまりやや弱い 粘性やや弱い φ5～30mm 大の黄色ローム土ブロックを20%含む
 - 26 灰黄褐色土 しまりやや強い 粘性やや弱い φ5～20mm 大の黄色ローム土ブロックを20%含む
 - 27 黒褐色土 しまりやや強い 粘性やや弱い φ5～20mm 大の黄色ローム土ブロックを5%含む
 - 28 黒色土 しまりやや弱い 粘性弱い φ5mm 大の黄色ローム土ブロックを3%含む
 - 29 黒色土 しまりやや弱い 粘性弱い φ5～15mm 大の黄色ローム土ブロックを5%含む
 - 30 黒褐色土 しまりやや強い 粘性弱い φ5～20mm 大の黄色ローム土ブロックを7%含む
 - 31 黒褐色土 しまりやや弱い 粘性弱い φ5～10mm 大の黄色ローム土ブロックを10%含む
 - 32 黒褐色土 しまりやや弱い 粘性弱い φ1～2mm 大の黄色ローム土ブロックを3%含む
 - 33 黒色土 しまりやや強い 粘性やや強い φ5～50mm 大の黄色ローム土ブロックを40%含む
 - 34 暗褐色土 しまりやや弱い 粘性やや強い φ5～50mm 大の黄色ローム土ブロックを15%含む
 - 35 黒褐色土 しまりやや弱い 粘性やや強い φ5～50mm 大の黄色ローム土ブロックを30%含む
 - 36 黒褐色土 しまりやや弱い 粘性やや強い φ2～30mm 大の黄色ローム土ブロックを15%含む
 - 37 黄褐色土 しまりやや強い 粘性やや強い 中部ローム土ブロック主体で黒色土を15%含む
 - 38 褐色土 しまりやや弱い 粘性やや弱い φ5～20mm 大の黄色ローム土ブロックを15%含む
 - 39 暗褐色土 しまりやや弱い 粘性やや弱い φ30mm 大の黄色ローム土ブロックを7%含む
 - 40 黒褐色土 しまりやや強い 粘性やや弱い φ20mm 大の黄色ローム土ブロックを5%含む
 - 41 暗褐色土 しまりやや弱い 粘性弱い φ2～20mm 大の黄色ローム土ブロックを7%含む
 - 42 褐灰色土 しまりやや弱い 粘性やや弱い φ5～40mm 大の黄色ローム土ブロック10%とφ5～10mm 大の小石を3%含む
 - 43 黒褐色土 しまりやや強い 粘性やや弱い φ2～20mm 大の黄色ローム土ブロックを7%とφ30～50mm 大の礫を少量含む
 - 44 黒色土 しまりやや弱い 粘性やや弱い φ2～5mm 大の黄色ローム土ブロックを5%含む
 - 45 黒褐色土 しまりやや強い 粘性やや弱い φ2～5mm 大の黄色ローム土ブロックを5%と小石を3%含む
 - 46 灰黄褐色土 しまりやや強い 粘性やや強い 上部ローム土ブロック混合土
 - 47 黒褐色土 しまりやや強い 粘性やや強い φ1～2mm 大の赤色スコリア10%と黄色ローム土ブロック5%を含む
 - 48 褐灰色土 しまりやや強い 粘性やや弱い φ2mm 大の小石とφ100mm 大の礫を含む
 - 49 黒褐色土 しまりやや強い 粘性やや強い φ5～60mm 大の黄色ローム土ブロック20%とφ50mm 大の礫を3%含む

- 50 黒褐色土 しまりやや強い 粘性やや弱い φ1～2mm大の赤色スコリアを3%含む
- 51 明褐色土 しまりやや弱い 粘性弱い SC IV層攪乱土
- 52 黒褐色土 しまりやや強い 粘性やや強い φ20mm大の黄色ローム土ブロックを7%含む
- 53 灰褐色土 しまりやや弱い 粘性やや弱い φ1～2mm大の赤色スコリア粒を20%含む
- 54 暗褐色土 しまりやや弱い 粘性やや弱い φ1～2mm大の黄色ローム土ブロックを5%含む
- 55 暗褐色土 しまりやや弱い 粘性弱い φ1～2mm大の黄色ローム土ブロックを5%含む
- 56 明褐色土 しまり弱い 粘性弱い 黄色ローム土主体層
- 57 明黄褐色土 しまりやや弱い 粘性やや弱い 黄色ローム土主体層で礫を20%含む
- 58 灰黄褐色土 しまりやや弱い 粘性弱い φ100～500mm大の礫層
- 59 褐灰色土 しまりやや弱い 粘性弱い φ2～10mm大の礫と砂が混じる
- 60 褐灰色土 しまりやや弱い 粘性弱い φ10～30mm大の礫層
- 61 灰黄褐色土 しまりやや弱い 粘性弱い 砂層
- 62 黒色土 しまりやや強い 粘性やや弱い 63・64層の中部ロームブロック主体層と互層になって堀の方を形成している
- 63 明黄褐色土 しまりやや強い 粘性強い 中部ロームブロック主体層で、φ5～10mm大の小石を含む
- 64 明黄褐色土 しまりやや強い 粘性強い 中部ロームブロック主体層であるが、63層より65層の土をより多く含む。φ5～10mm大の小石を含む
- 65 褐灰色土 しまりやや強い 粘性弱い φ5～10mm大の小石を多量に含む達成土
- 66 暗赤褐色土 しまりやや強い 粘性弱い スコリア(SC IV層?)のブロックを多量に含んだ達成土
- 67 褐灰色土 しまりやや強い 粘性弱い 大窯1段階の縁輪はさみ皿小片とかわらけ小片出土

空堀3 (第136図下段・137図)

空堀3は空堀2によって北側肩部が滅失していることから、堀幅は不明であり、また調査区が狭小であったことから、堀底までの確認は行っていない。しかし深さ約1.5mで中部ローム層を掘り残した「畝」の上面が検出されている。畝の上面幅は0.1mである。

空堀3の南側の肩部は、第Ⅶ黒色帯(BBⅦ層)、第Ⅳスコリア層(SCⅣ層)とその下層の中部ローム層であり、肩部の南側では確認トレンチ内においてSCⅣ層を水平に削平して、これを基盤とし、ローム土を用いて造成がなされていることが確認された。

覆土には岩盤層が多量に含まれており、人為的に埋め戻されていると考えられるが、岩盤層の量は西側と比べて畝の東側で、より多くなる。出土遺物はなく、空堀2への改修時期は不明であるが、空堀2が16世紀中葉以降の年代と想定できることから、空堀3はそれ以前の遺構である。なお、空堀2への改修に伴って使用された岩盤層が何処からもたらされたのかは明らかでないが、空堀3を埋めて、より北側に空堀2を掘り直していることから、この段階に大規模な造成が行われたと考えられる。

(8) 第7調査区 (第138・139図)

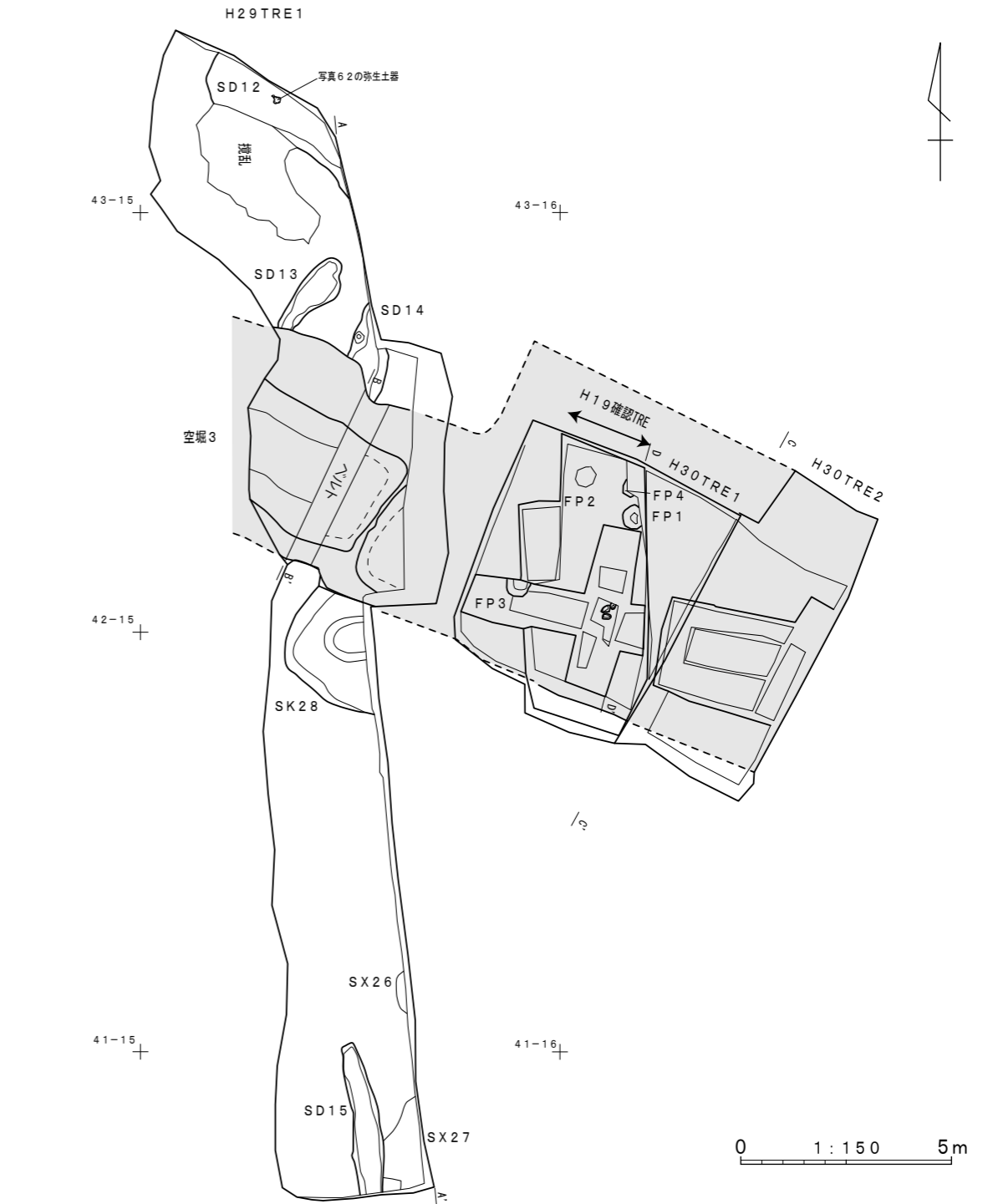
平成29・30年度に実施した空堀2の確認調査区である。平成19年度に確認トレンチを入れ、平成29年度の調査では、その西側にトレンチを設定した。その結果、空堀に畝が付随することが確認されたため、障子堀の可能性を考慮し、平成19年度の調査区を拡張して平成30年度の調査を行った。

当初は空堀2の確認調査であったが、第7調査区にて検出された空堀は、岩盤層を多量に含んでいることから、第6調査区の成果から空堀3と考えられる。なお、空堀2の大半は平面的な調査にとどまっているため、北曲輪のどの地点で2条の空堀が分岐するのかが明らかにできていない。

本調査区で検出された遺構は、空堀3、焼土と粘土を伴った焼土土坑4基(FP1～4)、4条の溝(SD12～15)、土坑1基(SK28)、不明遺構2基(SX26・27)である。

空堀3・造成面1・造成面2 (第138～141図)

本調査区の空堀3は堀幅はH29TRE1で4.5m、H30TRE1では北側肩部は検出できなかったため、北側の形状は明らかでないが、H30TRE2の北端で地山層(YL層)を確認したことから、6.0mに広がっていると考えられる。深さは1.8m～2.7mで、曲輪西側が浅くなっている。畝の西側の覆土には多量の岩盤層が含まれているが、東側では少量である。東側(H30TRE1 第141図)での土層観察によれば、南側からの土砂の流入で、42層以下は自然堆積と考えられるが、それより上位は人為的に埋め戻されている。岩盤層(小石)を含むのは28～31層で、その上にはFPが掘り込まれる造成面1(25層)が認められる。さらに造成面より約0.2m上位には黄色ロームを用いた造成面2(20・21層)が確認されている。

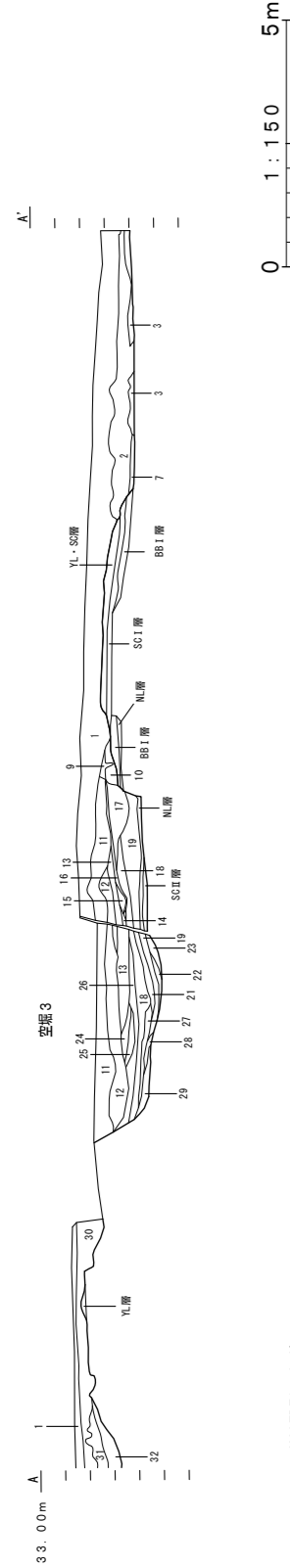


第138図 北曲輪 第7調査区 平面図

造成面1にはかわらけが多量に含まれており、またこの面から、かわらけの完形品を伴うFPが掘り込まれている。かわらけの年代が未確定であり、将来的な検討を要するものの、北曲輪第6調査区において空堀3を人為的に埋め戻した後に、再度掘り込んで構築される空堀2の年代が16世紀中葉以降となるならば、本調査区においても空堀3を人為的に埋め戻し、造成を行ったのもこれと同時期と考えられる。

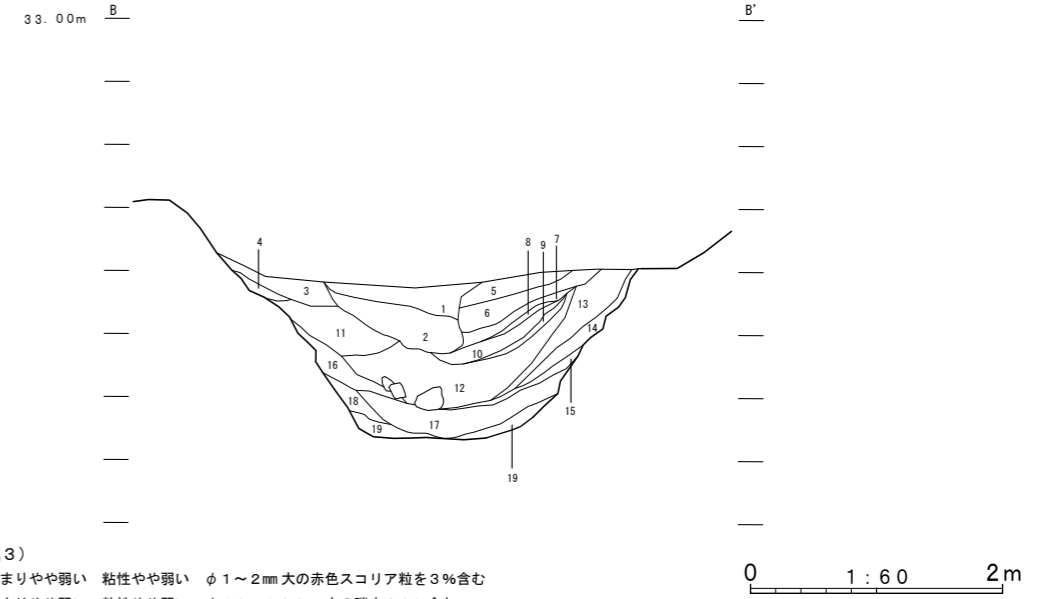
1号～4号焼土土坑(FP1～FP4 第138・141図)

造成土1から掘り込まれる焼土伴った土坑である。トレンチ内にて4基検出した。土坑の側面と底面には粘土が貼られているが、粘土は焼けていない。したがって焼土は廃棄の際に混入したものと考え



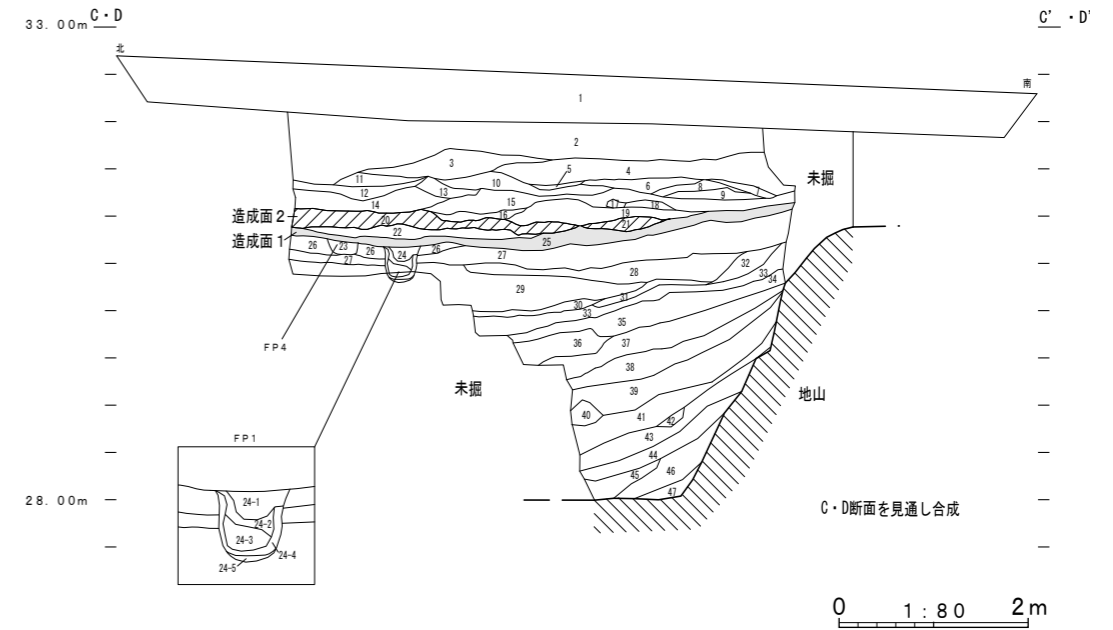
- H29TRE1 A-A'
- 1 暗褐色土 しまりやや弱い、粘性弱い、表土
 - 2 黒褐色土 しまりやや強い、粘性やや強い、φ2~3mm大の赤色スコリア粒を2%含む、遺物包含層
 - 3 黒色土 しまりやや強い、粘性やや強い、φ1~3mm大の赤色スコリア粒を7%含む、遺構覆土（弥生時代）
 - 7 褐色土 しまりやや弱い、粘性やや強い、φ1~2mm大の赤色スコリア粒を1%とBB1層土ブロックを含む
 - 9 暗褐色土 しまりやや弱い、粘性やや強い、φ5mm大の黄色ローム土ブロックを2~3%含む
 - 10 暗褐色土 しまりやや強い、粘性やや強い、YL層土と黒色層土の混土
 - 11 黒褐色土 しまりやや強い、粘性やや強い、φ5~40mm大の礫を25%含む
 - 12 暗褐色土 しまりやや強い、粘性やや強い、YL層土と黒色土粒の混土でφ5~50mm大の礫を3%含む
 - 13 黒褐色土 しまりやや強い、粘性やや強い、YL層土と中部ローム土ブロックの混土でφ5mm大の礫、φ1~2mm大の赤色スコリア粒を1%含む
 - 14 黒褐色土 しまりやや強い、粘性やや強い、φ1~3mm大の黄色ローム土ブロックを3%含む
 - 15 褐色土 しまりやや弱い、粘性やや弱い、φ1~5mm大の赤色スコリア粒を25%含む
 - 16 暗褐色土 しまりやや強い、粘性強い、にぶい褐色の粘土質の土を50%含む
 - 17 褐色土 しまりやや弱い、粘性やや弱い、YL層土と黒色層土の混土で、φ5~40mm大の礫を7%含む
 - 18 暗褐色土 しまりやや強い、粘性やや弱い、SCI層土と黒色層土の混土
 - 19 黒褐色土 しまりやや強い、粘性やや強い、YL層土を主体としながらBB1層土を20%含む
 - 21 褐色土 しまりやや強い、粘性やや強い、YL層土を主体としながらBB1層土20%とSCI層土を1~2%含む
 - 22 暗褐色土 しまりやや強い、粘性やや強い、YL層土50%とBB1層土50%の混土
 - 23 黒褐色土 しまりやや強い、粘性やや強い、黒色土層を主体として、φ2~10mm黄色ローム土ブロックを30%含む
 - 24 黒褐色土 しまりやや強い、粘性やや強い、黒色土層を主体として、φ2~50mm大の黄色ローム土ブロックを25%含む
 - 25 黒褐色土 しまりやや強い、粘性やや強い、黒色土層を主体として、φ2~30mm大の黄色ローム土ブロック7%と赤色スコリア粒を7%含む
 - 26 暗褐色土 しまりやや強い、粘性やや強い、黄色ローム土ブロックを主体としながら、赤色スコリア粒を3%含む
 - 27 黒褐色土 しまりやや弱い、粘性やや弱い、かわらけを多量に含み、φ1~3mm大の黄色ローム土ブロックを3%含む、またφ30mm大の礫を2%含む
 - 28 褐色土 しまりやや強い、粘性やや強い、きめ細かい粘質土
 - 29 にぶい黄褐色土 しまりやや弱い、粘性やや弱い、φ30~50mm大の礫層
 - 30 黒褐色土 しまりやや強い、粘性やや強い、YL層土との混土で、φ1~3mm大の黄色ローム土ブロックを3%含む
 - 31 褐色土 しまり弱い、粘性弱い、YL層土を主体とした造成土
 - 32 黒褐色土 SD12覆土 しまり弱い、粘性弱い、黒色土を主体とし黄色ローム土ブロックを30%含む、弥生土器出土

第139図 北曲輪 第7調査区 断面図(1)



- H29TRE1 B-B' (空堀3)
- 1 暗褐色土 しまりやや弱い 粘性やや弱い φ1~2mm大の赤色スコリア粒を3%含む
 - 2 黒褐色土 しまりやや弱い 粘性やや弱い φ10~200mm大の礫を30%含む
 - 3 灰黄褐色土 しまり弱い 粘性弱い φ10~100mm大の礫を40%含む
 - 4 黒褐色土 しまりやや弱い 粘性やや弱い φ1mm大の赤色スコリア粒を2%含む
 - 5 にぶい黄褐色土 しまり弱い 粘性弱い φ2~5mm大の赤色スコリア粒を3%含む
 - 6 にぶい黄褐色土 しまり弱い 粘性弱い φ2~3mm大の赤色スコリア粒を2%とφ10~50mm大の礫を20%含む
 - 7 にぶい黄褐色土 しまり弱い 粘性弱い φ10mm大の礫を10%含む
 - 8 にぶい黄褐色土 しまり弱い 粘性弱い φ30mm大の礫を30%含む
 - 9 暗褐色土 しまり弱い 粘性弱い φ10~50mm大の礫を主体とする
 - 10 暗褐色土 しまり弱い 粘性弱い φ1~5mm大の黄色土粒を5%とφ10~30mm大の礫を20%含む
 - 11 にぶい黄褐色土 しまりやや弱い 粘性弱い φ10~30mm大の礫を5%と赤色スコリア粒を3%含む やや砂質
 - 12 にぶい黄褐色土 しまりやや弱い 粘性弱い 岩盤屑を多量に含んだ礫層
 - 13 褐色土 しまりやや弱い 粘性弱い φ10~30mm大の黄色ローム土ブロックを2%とφ10~30mm大の礫を10%含む
 - 14 褐色土 しまりやや弱い 粘性弱い φ1~3mm大の赤色スコリア粒を2%とφ10~30mm大の礫を10%含む
 - 15 黒褐色土 しまりやや弱い 粘性弱い φ1~3mm大の赤色スコリア粒を10%とφ10~30mm大の礫を7%含む
 - 16 黒褐色土 しまりやや弱い 粘性やや弱い φ3~15mm大の黄色ローム土ブロックを10%と赤色スコリア粒を1~2%含む
 - 17 暗褐色土 しまりやや強い 粘性やや強い φ1~3mm大の赤色スコリア粒を3%と黄色ローム土ブロック1~2%含む
 - 18 黒褐色土 しまりやや弱い 粘性弱い φ1~3mm大の赤色スコリア粒を10%とφ5mm大の黄色ローム土ブロックを3%含む
 - 19 黒褐色土 しまりやや弱い 粘性弱い φ1~3mm大の赤色スコリア粒を5%

第140図 北曲輪 第7調査区 断面図(2)



第141図 北曲輪 第7調査区 断面図(3)

H30TRE1 C-C'・D-D'			
1	暗褐色	土	しまり弱い 粘性やや弱い
2	褐色	土	しまり弱い 粘性弱い S CⅢ層土かS CⅣ層土ブロック主体
3	褐色	土	しまりやや強い 粘性やや強い φ2~100mm次の黄色ローム土（中部ローム層相当土）ブロックを30%含む
4	黒褐色	土	しまりやや弱い 粘性やや強い φ2~10mm次の黄色ローム土ブロック及び、S CⅢ層土or S CⅣ層土ブロックを20%含む
5	暗褐色	土	しまりやや強い 粘性強い φ2~10mm次の黄色ローム土ブロック及び、S CⅢ層土or S CⅣ層土ブロックを20%含む
6	黒褐色	土	しまり強い 粘性強い φ2mm次の黄色ローム土ブロックを3%含む
7	黒褐色~暗褐色	土	しまり強い 粘性強い φ2~5mm次の黄色ローム土ブロックを5%含む
8	暗褐色	土	しまりやや強い 粘性やや強い φ2~3mm次の黄色ローム土ブロックを10%と、φ2mm次の小石をまばらに含む
9	灰褐色	土	しまりやや弱い 粘性やや強い S CⅢor S CⅣ層土ブロック及び、黄色ローム土ブロックを3%含む
10	暗褐色	土	しまりやや強い 粘性やや弱い φ2~10mm次の黄色ローム土ブロックを5%と、φ2mm次の小石をまばらに含む
11	灰褐色	土	しまりやや強い 粘性やや強い S CⅢ層土or S CⅣ層土ブロック及び、黄色ローム土ブロックを5%含む
12	暗褐色	土	しまりやや弱い 粘性やや弱い
13	暗褐色	土	しまりやや強い 粘性やや強い φ2~30mm次の黄色ローム土ブロックを20%含む
14	灰褐色	土	しまりやや強い 粘性やや強い φ2~50mm次の黄色ローム土ブロックを50%含む
15	灰褐色	土	しまりやや強い 粘性強い φ2~3mm次の黄色ローム土ブロックを3%含む
16	黒褐色	土	しまりやや強い 粘性やや強い φ2~10mm次の黄色ローム土ブロックを20%、S CⅢ層土or S CⅣ層土ブロックを5%含む
18	暗褐色	土	しまりやや強い 粘性強い φ2~10mm次の黄色ローム土ブロックを20%含む
19	暗褐色	土	しまりやや強い 粘性やや強い φ2mm次のスコリア粒と黄色ローム土ブロックを主体とする
20	にぶい黄褐色	土	しまり強い 粘性強い 黄色ローム土ブロックを主体とする造成土
22	褐色	土	しまり強い 粘性やや強い φ2~20mm次の黄色ローム土ブロックを20%含む
23	褐色	土	しまりやや弱い 粘性やや弱い φ2mm次の黄色ローム土ブロックを10%、焼土及び炭化物を含む
25	灰褐色	土	しまりやや強い 粘性やや強い φ2~5mm次の黄色ローム土ブロックを5%と、少量の焼土・炭化物及び多量のかわらけ片を含む
26	にぶい黄褐色	土	しまりやや弱い 粘性やや強い φ2~5mm次の黄色ローム土ブロックを10%と、赤色スコリアを10%含む
27	灰褐色	土	しまりやや強い 粘性やや強い B層のブロックと、φ2~5mm次の黄色ローム土ブロックを10%含む
28	暗褐色	土	しまりやや強い 粘性やや強い φ2~10mm次の黄色ローム土ブロックを10%と、φ1~2mm次の小石をまばらに含む
29	灰褐色	土	しまりやや強い 粘性やや強い φ2~30mm次の小石を10%と、φ2~10mm次の黄色ローム土ブロックを5%含む 小石は西側のほうが密に含まれる
30	灰褐色	土	しまりやや弱い 粘性やや強い φ1~2mm次の小石を少量と、φ1~2mm次の黄色ローム土ブロック及び赤色スコリア粒を3%含む
31	暗褐色	土	しまりやや強い 粘性やや強い φ1~2mm次の小石を少量と、φ2~5mm次の黄色ローム土ブロックを5%含む
32	黒褐色	土	しまりやや弱い 粘性やや弱い 黒褐色土と黄色ローム土ブロックとの混合土
33	黒褐色	土	しまりやや弱い 粘性やや弱い 黒褐色土を主体として、黄色ローム土ブロックを10%含む
34	黒褐色	土	しまりやや弱い 粘性やや強い 黒褐色土と黄色ローム土ブロックとの混合土
35	褐色	土	しまりやや強い 粘性やや強い φ1~10mm次の黄色ローム土ブロックを30%と、赤色スコリア粒を5%含む
36	暗褐色	土	しまりやや強い 粘性やや強い φ1~30mm次の黄色ローム土ブロックを20%と、赤色スコリア粒を少量含む
37	暗褐色	土	しまりやや弱い 粘性やや強い φ1~50mm次の黄色ローム土ブロックを10%と、黒褐色土ブロックを少量含む
38	暗褐色	土	しまりやや強い 粘性やや強い φ1~40mm次の黄色ローム土ブロックを10%と、赤色スコリア粒を3%含む、黒褐色土との混合土
39	黒褐色	土	しまりやや強い 粘性やや強い φ100~200mm次の黄色ローム土ブロックを30%含む
40	黄褐色	土	しまりやや強い 粘性強い 黄色ローム土ブロック
41	黒褐色	土	しまりやや強い 粘性やや強い φ2~50mm次の黄色ローム土ブロックを30%含む
42	褐色	土	しまりやや強い 粘性やや強い φ1mm次の赤色スコリア粒を1%含む
43	暗褐色	土	しまりやや強い 粘性やや弱い φ1mm次の黄色ローム土ブロックを1%含む
44	暗褐色	土	しまり強い 粘性やや弱い φ1mm次の黄色ローム土ブロックを3%含む
45	黒褐色	土	しまりやや強い 粘性やや弱い φ1mm次の赤色スコリア粒を3%含む
46	黒褐色	土	しまりやや弱い 粘性やや弱い φ2~3mm次の黄色ローム土ブロックを5%含む
47	褐色	土	しまりやや弱い 粘性やや弱い φ2~3mm次の黄色ローム土ブロックを30%含む
FP1-24-1	黒褐色	土	しまり弱い 粘性弱い φ1mm次の赤色スコリアを3%、焼土・炭化物を少量含む
24-2	褐色	土	しまりやや弱い 粘性やや弱い 焼土・炭化物・骨を含む 上部構造のものが落ちたものか？
24-3	黒褐色	土	しまりやや弱い 粘性やや弱い φ1mm次の小石を1%と、焼土・炭化物を少量含む かわらけが集中する土
24-4	灰褐色	粘土	しまり強い 粘性強い 粘土 側壁及び底面全面に貼られている
24-5	黒褐色	土	しまりやや強い 粘性やや弱い ビット掘方 φ1~3mm次の小石を含む

られる。この廃棄土にはかわらけが伴っている。ただし、かわらけは先述の通り、造成土1内にも多量に含まれている。FP1が粘土の残存が最もよく、径0.35 m、深さ0.4 m、粘土の厚さは0.2 mを測る。

平成19年度調査で、かわらけ(722)が出土しているが、出土位置からFP2に伴っていた可能性がある。12号溝~15号溝(SD12~SD15 第138図)

トレンチ内で検出した溝である。SD12を除いて覆土は締まりがない黒色土である。SD13は幅0.7 m、深さ0.3 m、SD14は幅0.9 m、深さ0.1 m、SD15は幅0.9 m、深さ0.1 mを測る。後世の攪乱の可能性もあるが、確証がないため、平面図のみ掲載した。

SD12は土層観察ベルトを残して東半のみを掘削していたところ、掘削最中に弥生時代の壺形土器が出土したため、掘削を中止した。方形周溝墓の周溝と考えられる。幅1.0 m、深さ0.4 mを測る。

28号土坑(SK28 第138・139図)

空堀3に切られる隅丸方形の土坑である。底面はニセローム層(NL層)で、検出幅は2.5 m、0.5 mを測る。覆土には上部ロームのブロックを含むが、遺物の出土はなく時期は不明である。



写真 61 SD12 出土 壺形土器

第8節 清水曲輪

(1) 調査の経過と概要

清水曲輪は、北曲輪から谷を挟んだ東側に位置する曲輪である(第142図)。現状では4段の平坦面が存在する。北曲輪と同様、絵図に描かれていない曲輪であるが、昭和27年撮影の航空写真には空堀の形状をした畑が写っている。

調査は指定前の平成9年に地権者である茶農家から農地改良の申し出があったことから、これに伴い試掘調査を実施した。この結果、空堀と平坦面に残る柱穴群が確認されており、この成果は沼津市教育委員会編「長塚古墳・清水遺跡発掘調査報告書」(1999年発行)にまとめられている。

指定後の調査は平成24・29年度に実施した(第143図)。平成24年度は昭和27年の航空写真に写る空堀の調査(第144図第1・2調査区)と曲輪西側に南北トレンチ(同第3調査区)及び南端にトレンチ4条(同第5調査区)、北側にトレンチ3条(同第6調査区)を設定して遺構確認を図った。平成29年度は、残る東半の用地が取得されたことから、東西・南北に3条のトレンチ(同第4調査区)を設定して遺構確認を行った。

この結果、当初の想定通り空堀の検出に至り、2箇所まで掘底までを調査している。空堀は本丸空堀や北曲輪空堀1と同様、覆土中層で整地層が認められ、幅の狭い薬研堀から箱堀へ改修されていることが確認された。また曲輪内に残る4段の平坦面の境には溝が巡っていることが判明した。

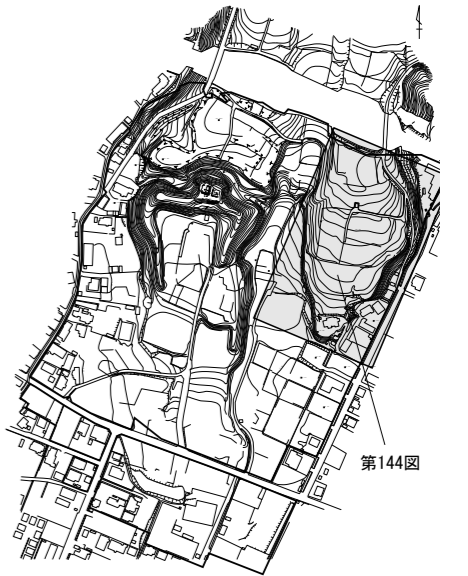
この他には多数の柱穴群を検出したが、中世及び近世の遺物が伴うものは少ない。この段階の遺物は少ないが、特に第4調査区では多量の古代土師器片が出土しており、平面確認のみにとどまっているが、竪穴建物跡やそれに伴うカマド粘土の検出がある。したがって、城郭段階では北曲輪同様、大きな造成は行われておらず、また検出した柱穴群も城郭段階でない可能性が高い。

以下には、便宜的に設定した調査区ごとに成果を記載する。なお、調査区の区分図は第144図に示した。

第1調査区(第145図)

空堀の確認トレンチである。このトレンチにおいても空堀が確認されたことから、空堀は西側の谷へ向かい、そのまま落ちていると考えられる。覆土中層にて整地層が認められ、その南側には平坦面が検出されている。

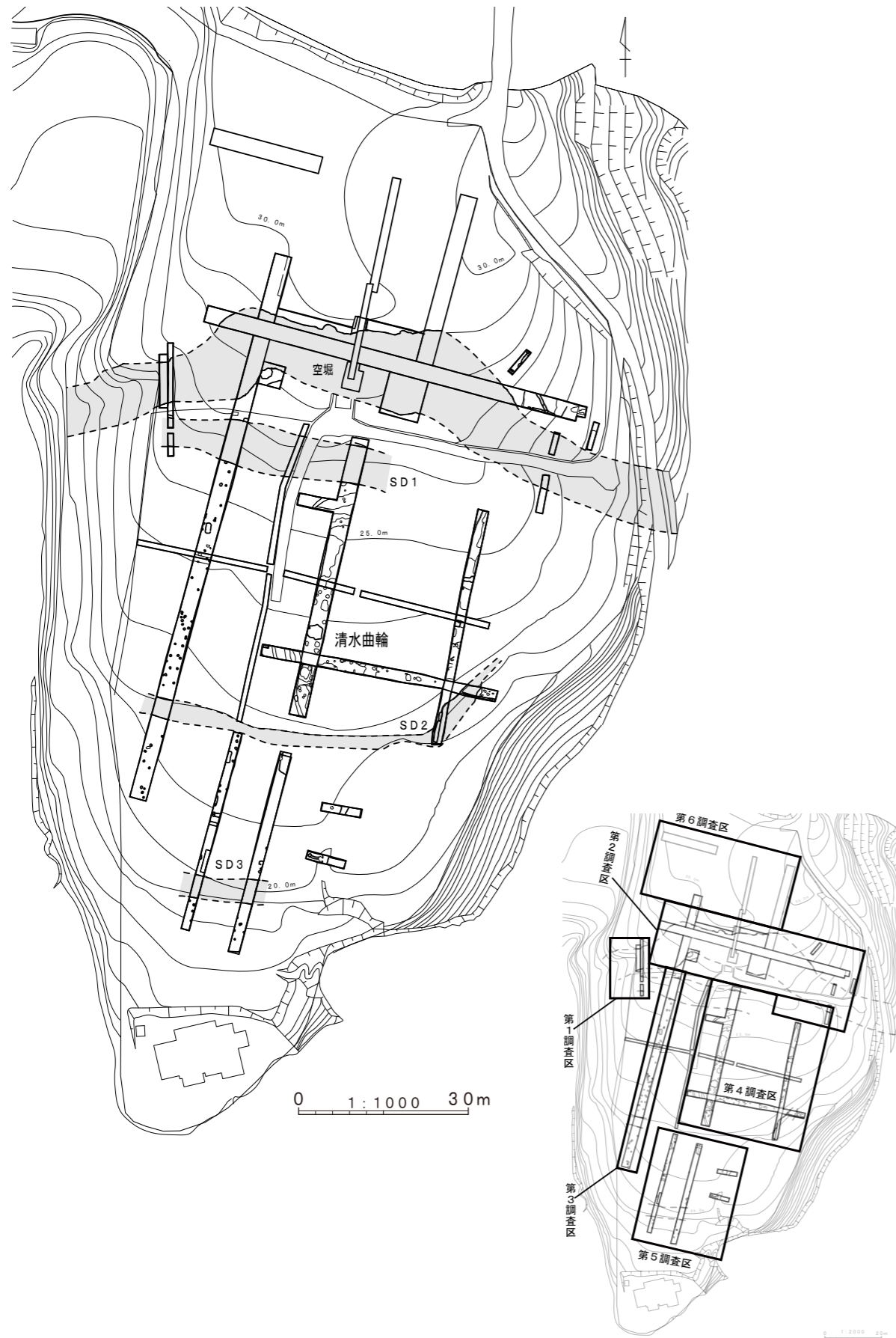
トレンチ内での堀の上幅は約6.5 m、整地層までの深さは1.2 m、堀底までは2.1 mを測る。下層は自然堆積層で、整地層はそれをさらうことなく、そのまま平らとし、堀底を箱形へ広げている。空堀の南側で検出されているSD1は、平坦面に設けられた段に付随する溝である。



第142図 清水曲輪 調査位置図



第143図 清水曲輪 年度別調査地点図



第 144 図 清水曲輪 全体図・分割図

第 2 調査区 (清水曲輪空堀 第 146・147 図)

第 2 調査区は清水曲輪空堀の形状及び堀底の確認を主目的とした。空堀は北側に凸型に張り出し、その形状は大空堀と共通性をもつ。堀幅は一定ではなく 13.5 m～15.0 m を測る。A セクションと D セクションで堀底を確認した。

A セクション付近では、堀幅は 12.0 m、深さは 3.4 m を測る。整地層 (A セクション 25 層) と同じ高さで南側に平坦面が認められる。箱堀への改修と考えられ、堀底幅は 3.3 m である。整地層の平坦面の西側には、地山の堀残しが認められ、調査区外へ至ることから詳細は不明であるものの、土橋の可能性はある。ただしその場合曲輪の生活面よりもかなり標高が下がった位置での検出であるため、この堀残しがどのような機能を果たしていたのかは追加の調査が必要である。

C セクション付近では、北側の斜度がゆるいが、D セクション付近で急激に角度を変えて落ちている。堀の中間層にはロームブロック土を強く締め固めた整地面 (D セクション 58 層) が認められ、整地面の南側には平坦面が存在することから、ここを境に箱堀へと改修していると考えられる。整地面より下層は自然堆積層であり、上面からの深さは 3.5 m を測り、箱堀への改修は下層の堆積土を攪うことなく、行われている。こうした状況は本丸空堀や北曲輪空堀 1 と共通している。

出土遺物は少ないが、瀬戸美濃古瀬戸後Ⅳ期～大窯 1 段階のものが認められ、志戸呂や初山の出土はない。ただし、前述の通り、航空写真に空堀の形状をなす畑が写っているため、廃城後も空堀は開口していたと考えられる。1 点のみの出土だが、登窯 1 小期の天目茶碗片からもこのことが裏付けられる。

なお、空堀の北東部には時期不明の溝が検出されている。

第 3 調査区 (第 148 図)

曲輪の西側に南北に設定したトレンチである。表土直下約 0.4 m で休場ローム層 (YL 層) に達し、以降の確認はこの面に行っている。基本的に検出された遺構は半裁での掘削にとどめた。表土からは弥生土器片や土師器片などが出土しているが、本調査区の PT 群からは中世遺物の出土はなかった。したがって、ここでは曲輪の平坦面の境に検出された 1 号溝 (SD1) と 2 号溝 (SD2) について記載する。

1 号溝・2 号溝 (SD1・SD2 第 148 図)

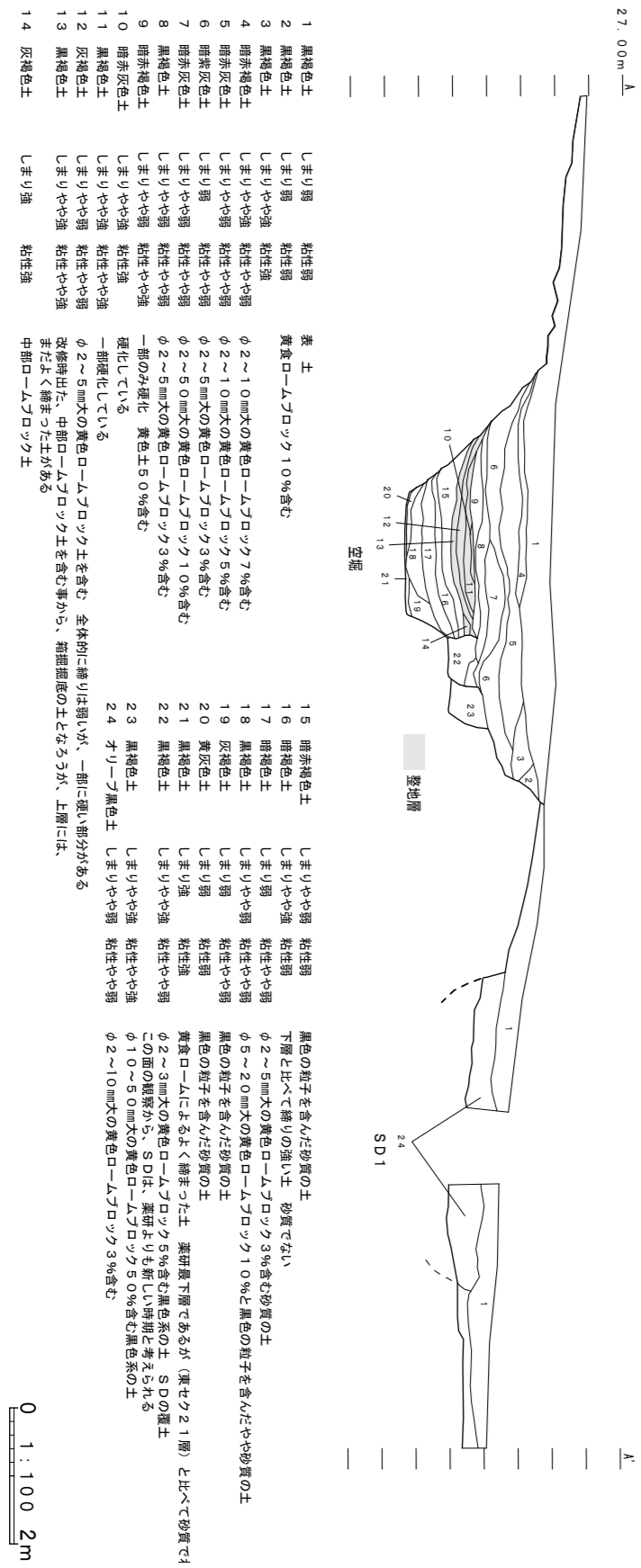
より上段で検出されたのが SD1 で、南側の立ち上がりは北側よりも緩やかである。幅 8.0 m、深さ 0.5 m を測る。底部には水性堆積層が認められ、平坦面端部の雨水を流す役割が想定される。

南側で検出されたのが SD2 で SD1 と同じく南側の立ち上がりは緩やかで、幅は 4.0 m、深さは 0.5 m を測る。等高線から判断すれば、第 4 調査区の南東部において検出された溝も SD2 と考えられる。覆土には中部ローム層を由来とする黄色ロームブロック土が混じるが、締りは弱い。

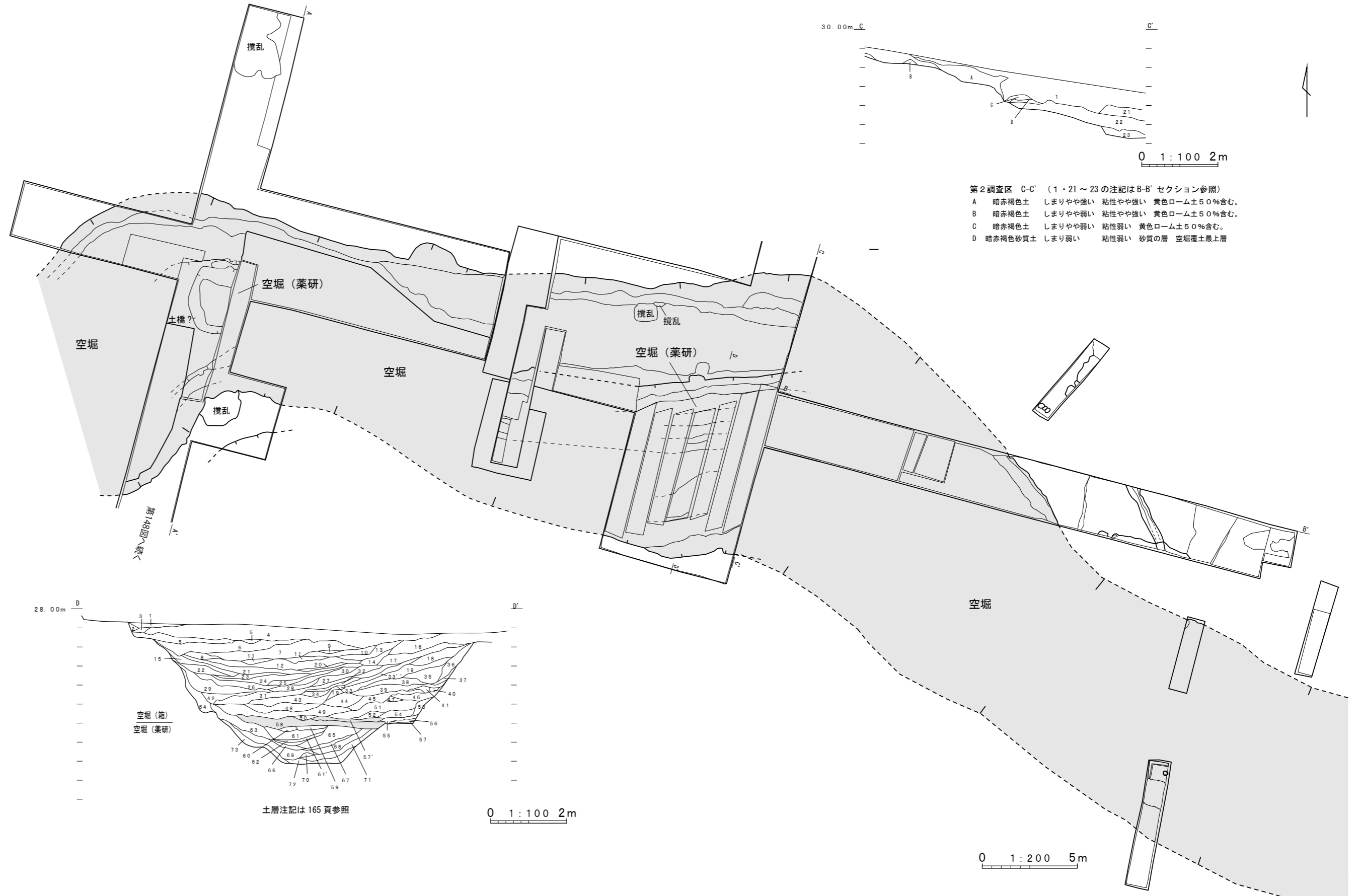
第 4 調査区 (第 149・150 図)

平成 29 年度に調査を行った。数多くの遺構検出があったが、これとともに多量の土師器片が出土している調査区である。竪穴建物跡やカマド粘土の検出もあり、遺構の多くは古代に属すると考えられる。SD1 と SD2、そして不明遺構の SX1 のみ掘削をし、その他の遺構は委員会検討を経て、掘削を行わないこととした。古代の遺構が残存していることから、清水曲輪の南側は城郭段階において中部ローム層まで削り出すような造成は行っていないと考えられる。

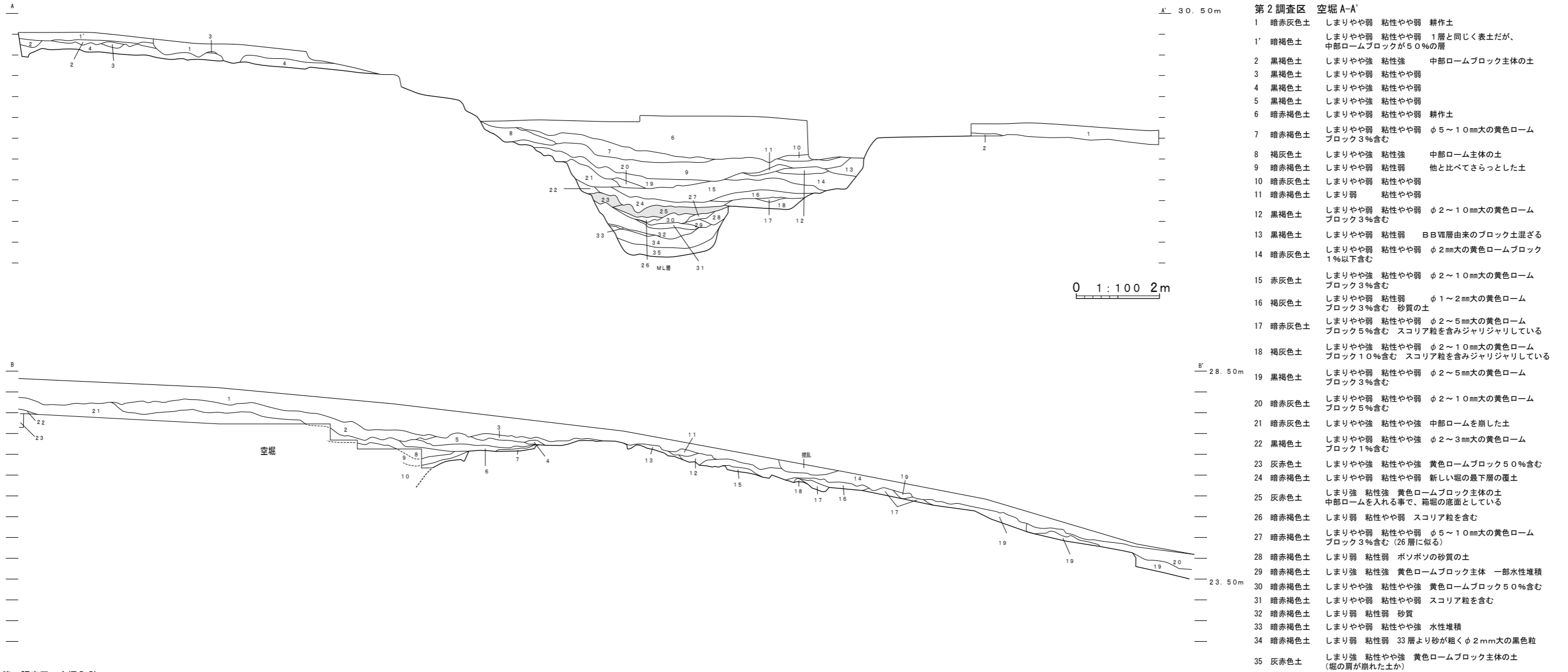
SD1 と SD2 についてはセクションを第 150 図に記載した。SX1 は南半のみ掘削した結果、近世の土坑で有ることが判明したため、北半の掘削は行わずに完了とした。



第145図 清水曲輪 第1調査区 空堀 平・断面図



第146図 清水曲輪 第2調査区 空堀 平・断面図(1)



第2調査区 空堀 A-A'

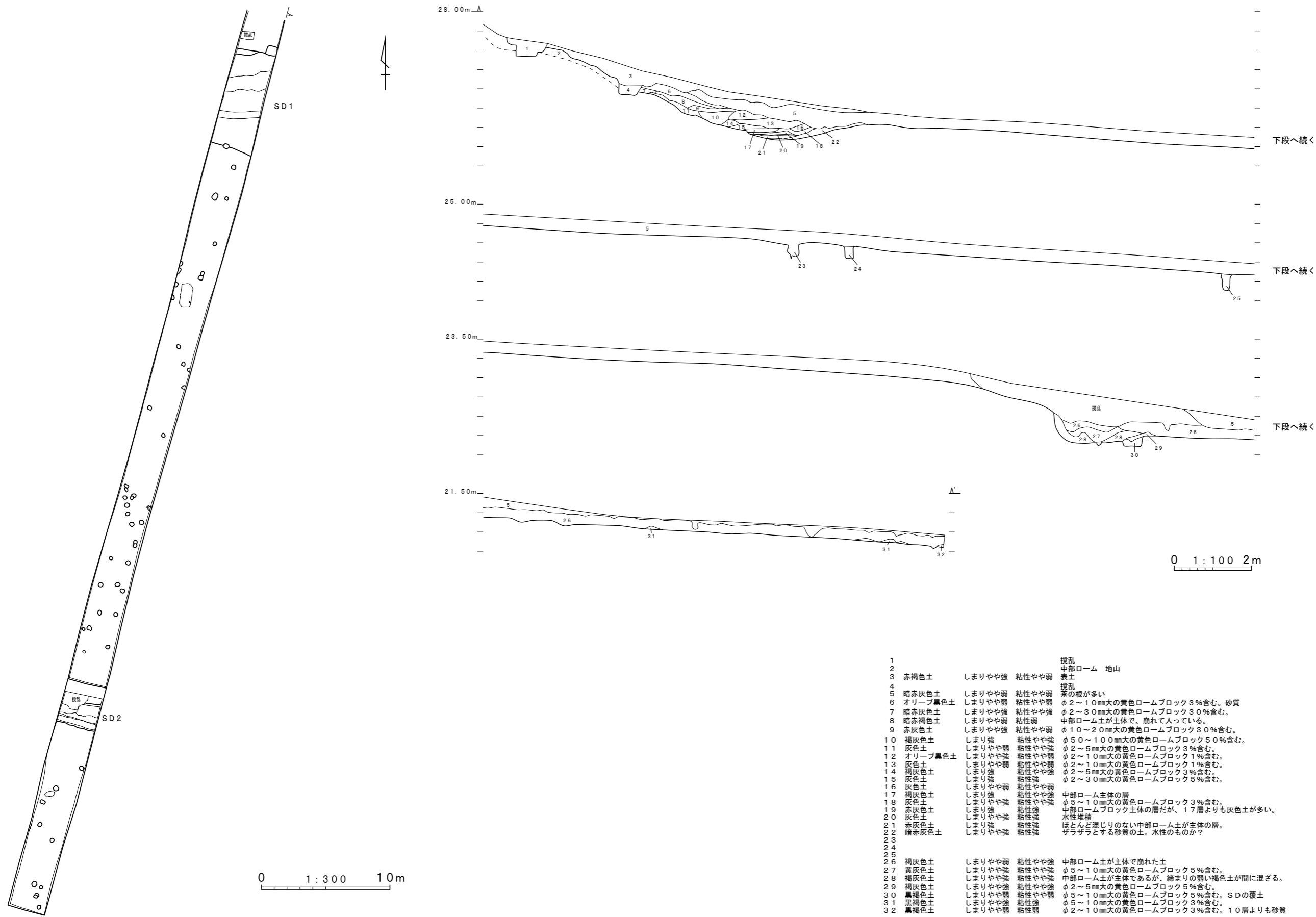
1	暗赤灰色土	しまりやや弱	粘性やや弱	耕作土
1'	暗褐色土	しまりやや弱	粘性やや弱	1層と同じく表土だが、中部ロームブロックが50%の層
2	黒褐色土	しまりやや強	粘性強	中部ロームブロック主体の土
3	黒褐色土	しまりやや弱	粘性やや弱	
4	黒褐色土	しまりやや強	粘性やや弱	
5	黒褐色土	しまりやや強	粘性やや弱	
6	暗赤褐色土	しまりやや弱	粘性やや弱	耕作土
7	暗赤褐色土	しまりやや弱	粘性やや弱	φ5~10mm大の黄色ロームブロック3%含む
8	褐灰色土	しまりやや強	粘性強	中部ローム主体の土
9	暗赤褐色土	しまりやや弱	粘性弱	他と比べてさらっとした土
10	暗赤灰色土	しまりやや弱	粘性やや弱	
11	暗赤褐色土	しまり弱	粘性やや弱	
12	黒褐色土	しまりやや弱	粘性やや弱	φ2~10mm大の黄色ロームブロック3%含む
13	黒褐色土	しまりやや弱	粘性弱	B/BVII層由来のブロック土混ざる
14	暗赤灰色土	しまりやや弱	粘性やや弱	φ2mm大の黄色ロームブロック1%以下含む
15	赤灰色土	しまりやや強	粘性やや弱	φ2~10mm大の黄色ロームブロック3%含む
16	褐灰色土	しまりやや弱	粘性弱	φ1~2mm大の黄色ロームブロック3%含む 砂質の土
17	暗赤灰色土	しまりやや弱	粘性やや弱	φ2~5mm大の黄色ロームブロック5%含む スコリア粒を含みジャリジャリしている
18	褐灰色土	しまりやや強	粘性やや弱	φ2~10mm大の黄色ロームブロック10%含む スコリア粒を含みジャリジャリしている
19	黒褐色土	しまりやや弱	粘性やや弱	φ2~5mm大の黄色ロームブロック3%含む
20	暗赤灰色土	しまりやや弱	粘性やや弱	φ2~10mm大の黄色ロームブロック5%含む
21	暗赤灰色土	しまりやや強	粘性やや強	中部ロームを崩した土
22	黒褐色土	しまりやや弱	粘性やや強	φ2~3mm大の黄色ロームブロック1%含む
23	灰赤色土	しまりやや強	粘性やや強	黄色ロームブロック50%含む
24	暗赤褐色土	しまりやや弱	粘性やや弱	新しい堀の最下層の覆土
25	灰赤色土	しまり強	粘性強	黄色ロームブロック主体の土 中部ロームを入れる事で、箱堀の底面としている
26	暗赤褐色土	しまり弱	粘性やや弱	スコリア粒を含む
27	暗赤褐色土	しまりやや弱	粘性やや弱	φ5~10mm大の黄色ロームブロック3%含む (26層に似る)
28	暗赤褐色土	しまり弱	粘性弱	ボンボノの砂質の土
29	暗赤褐色土	しまり強	粘性強	黄色ロームブロック主体 一部水性堆積
30	暗赤褐色土	しまりやや強	粘性やや強	黄色ロームブロック50%含む
31	暗赤褐色土	しまりやや弱	粘性やや弱	スコリア粒を含む
32	暗赤褐色土	しまり弱	粘性弱	砂質
33	暗赤褐色土	しまりやや弱	粘性やや強	水性堆積
34	暗赤褐色土	しまり強	粘性弱	33層より砂が粗くφ2mm大の黒色粒
35	灰赤色土	しまり強	粘性やや強	黄色ロームブロック主体の土 (堀の肩が崩れた土か)

第2調査区 空堀 B-B'

1	褐灰色土	しまりやや弱い	粘性弱い	φ2~5mm大の黄色ローム土ブロック3%含む
2	黒褐色土	しまりやや弱い	粘性弱い	φ2~5mm大の黄色ローム土ブロック3%含む
3	黒褐色土	しまり弱い	粘性弱い	黄色ローム土主体の土(50%)
4	黄灰色土	しまりやや強い	粘性やや強い	黄色ローム土主体の土(90%)
5	黒褐色土	しまりやや弱い	粘性やや弱い	φ2~20mm大の黄色ローム土5%含む。
6	灰オリーブ色土	しまりやや強い	粘性やや強い	中部ローム土主体の土。
7	黄灰色土	しまりやや強い	粘性やや強い	
8	褐灰色土	しまりやや弱い	粘性弱い	φ5~50mm大の黄色ローム土ブロック10%含む。
9	黒褐色土	しまりやや強い	粘性やや強い	φ2~5mm大の黄色ローム土ブロック1%含む。堀切覆土最上層
10	灰色土	しまりやや弱い	粘性やや強い	φ2~3mm大の黄色ローム土ブロック1%以下含む。
11	黄灰色土	しまりやや弱い	粘性やや弱い	黄色ローム土ブロック50%含む。
12	黄灰色土	しまりやや弱い	粘性やや弱い	11層と比べ黄色ローム土ブロック少ない30%含む。
13	暗灰黄色土	しまり強い	粘性やや強い	黄色ローム土主体の土。
14	暗灰黄色土	しまりやや強い	粘性弱い	φ2~5mm大の黄色ローム土ブロック3%含む。
15	灰黄色土	しまり強い	粘性やや強い	13層と同質の土。

16	灰黄色土	しまりやや強い	粘性弱い	赤色スコリア層土ブロック含む。
17	灰色土	しまりやや強い	粘性強い	SDの覆土 赤色スコリア層土ブロック5%含む。
18	灰色土	しまりやや強い	粘性強い	土は17層に似るが赤色スコリアが入っていない。
19	暗灰黄色土	しまりやや強い	粘性弱い	黄色ローム土主体の層。
20	灰黄色土	しまり弱い	粘性弱い	耕作土。
21	黒褐色土	しまりやや弱い	粘性やや弱い	8層より上層の土 耕作土か?
22	褐灰色土	しまりやや弱い	粘性弱い	φ5~50mm大の黄色ローム土ブロック10%含む。
23	黒褐色土	しまりやや強い	粘性やや強い	φ2~5mm大の黄色ローム土ブロック1%含む

第147図 清水曲輪 第2調査区 空堀 断面図(2)

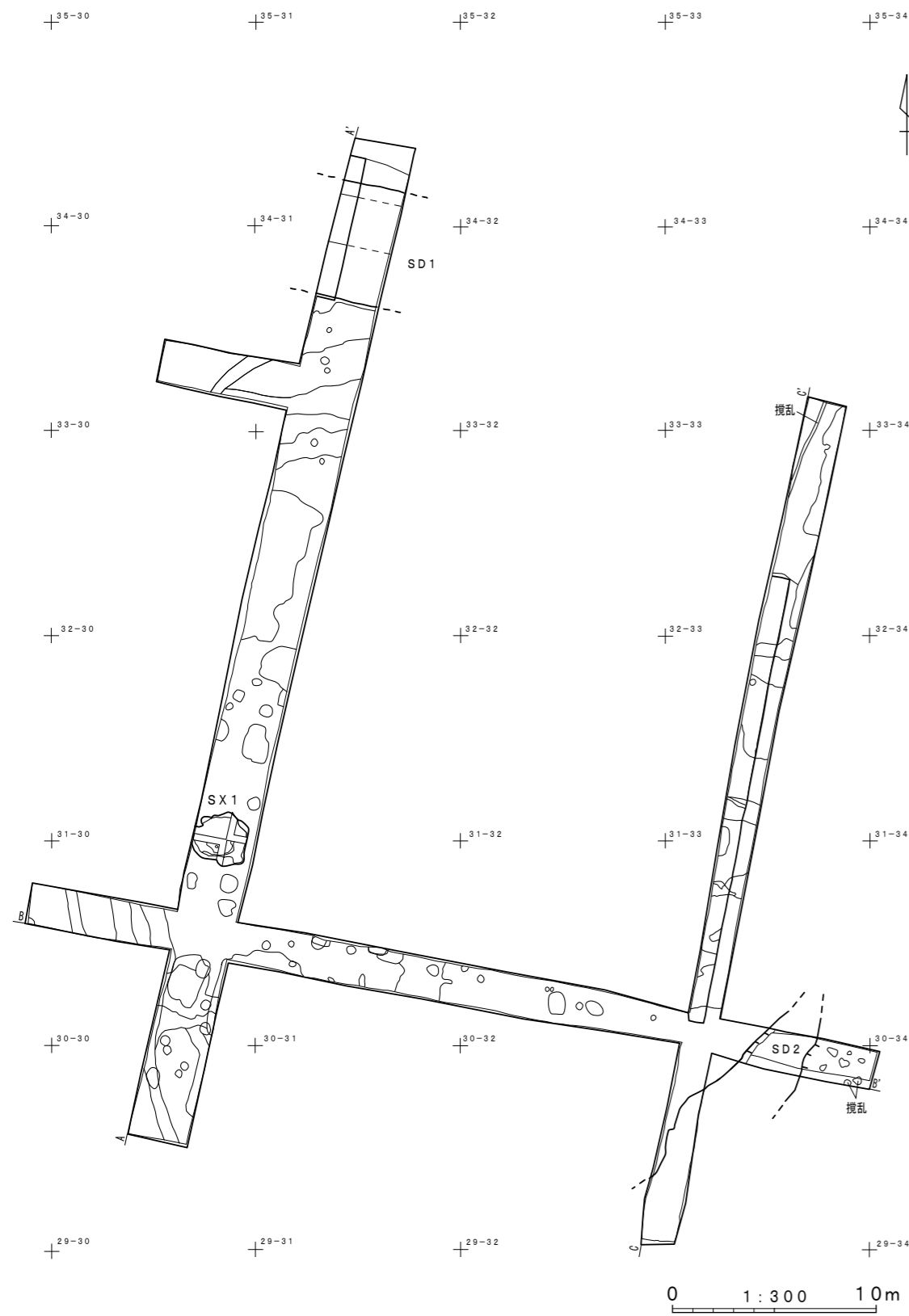


第148図 清水曲輪 第3調査区 平・断面図

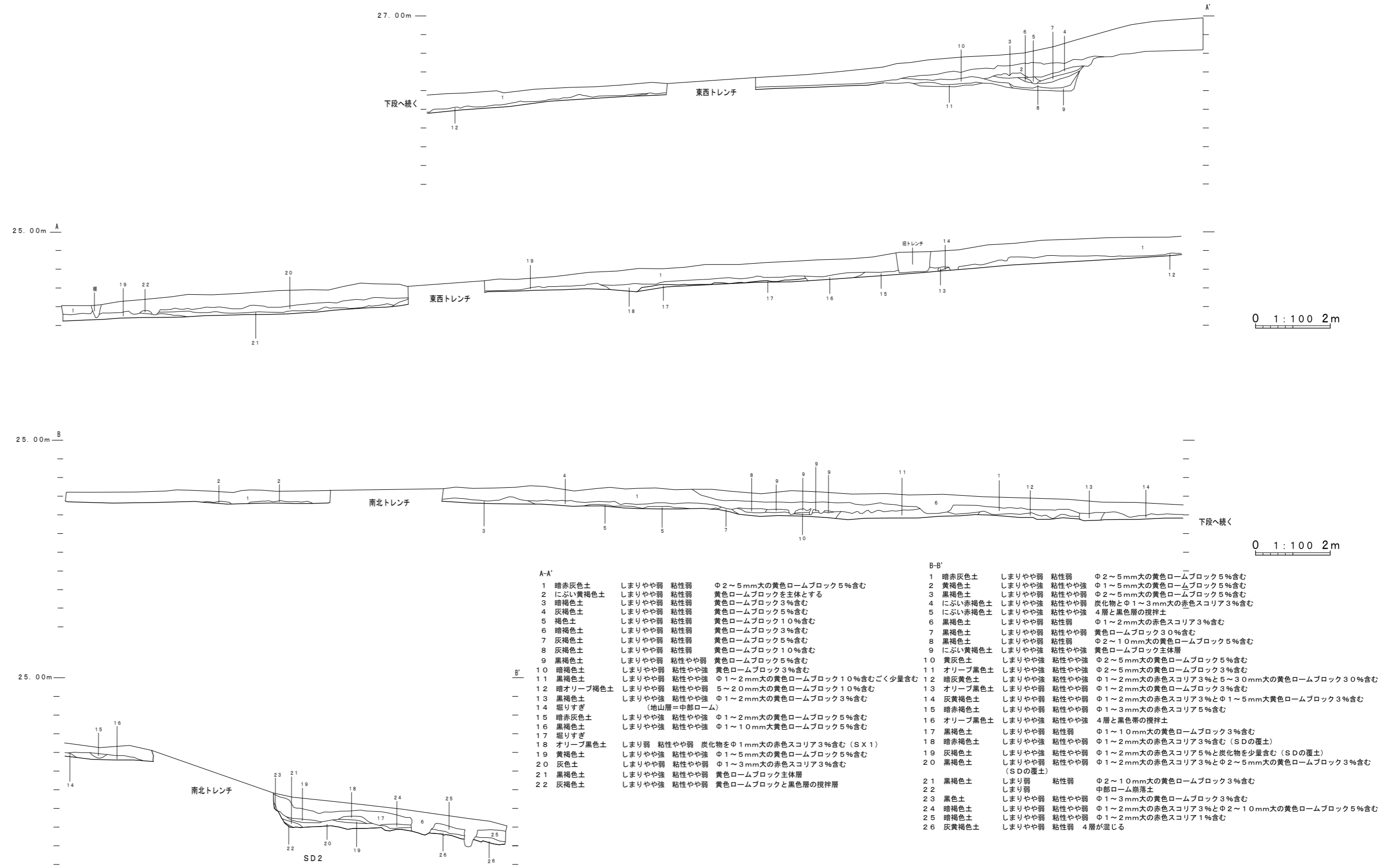
1			攪乱
2			中部ローム 地山
3	赤褐色土	しまりやや強 粘性やや弱	表土
4			攪乱
5	暗赤灰色土	しまりやや弱 粘性やや弱	茶の根が多い
6	オリーブ黒色土	しまりやや弱 粘性やや弱	φ2~10mm大の黄色ロームブロック3%含む。砂質
7	暗赤灰色土	しまりやや強 粘性やや強	φ2~30mm大の黄色ロームブロック30%含む。
8	暗赤褐色土	しまりやや弱 粘性弱	中部ローム土が主体で、崩れて入っている。
9	赤灰色土	しまりやや強 粘性やや弱	φ10~20mm大の黄色ロームブロック30%含む。
10	褐灰色土	しまり強 粘性やや強	φ50~100mm大の黄色ロームブロック50%含む。
11	灰色土	しまりやや弱 粘性やや強	φ2~5mm大の黄色ロームブロック3%含む。
12	オリーブ黒色土	しまりやや強 粘性やや弱	φ2~10mm大の黄色ロームブロック1%含む。
13	灰色土	しまりやや弱 粘性やや弱	φ2~10mm大の黄色ロームブロック1%含む。
14	褐灰色土	しまり強 粘性やや強	φ2~5mm大の黄色ロームブロック3%含む。
15	灰色土	しまり強 粘性強	φ2~30mm大の黄色ロームブロック5%含む。
16	灰色土	しまりやや弱 粘性やや弱	
17	褐灰色土	しまり強 粘性やや強	中部ローム主体の層
18	灰色土	しまりやや強 粘性やや強	φ5~10mm大の黄色ロームブロック3%含む。
19	赤灰色土	しまり強 粘性強	中部ロームブロック主体の層だが、17層よりも灰色土が多い。
20	灰色土	しまりやや強 粘性強	水性堆積
21	赤灰色土	しまり強 粘性強	ほとんど混じりのない中部ローム土が主体の層。
22	暗赤灰色土	しまりやや強 粘性強	ザラザラとする砂質の土。水性のものか？
23			
24			
25			
26	褐灰色土	しまりやや弱 粘性やや強	中部ローム土が主体で崩れた土
27	黄灰色土	しまりやや強 粘性やや強	φ5~10mm大の黄色ロームブロック5%含む。
28	褐灰色土	しまりやや強 粘性やや強	中部ローム土が主体であるが、締まりの弱い褐色土が間に混ざる。
29	褐灰色土	しまりやや強 粘性やや強	φ2~5mm大の黄色ロームブロック5%含む。
30	黒褐色土	しまりやや弱 粘性やや弱	φ5~10mm大の黄色ロームブロック5%含む。SDの覆土
31	黒褐色土	しまりやや強 粘性強	φ5~10mm大の黄色ロームブロック3%含む。
32	黒褐色土	しまりやや弱 粘性弱	φ2~10mm大の黄色ロームブロック3%含む。10層よりも砂質

第2調査区 空堀D-D'

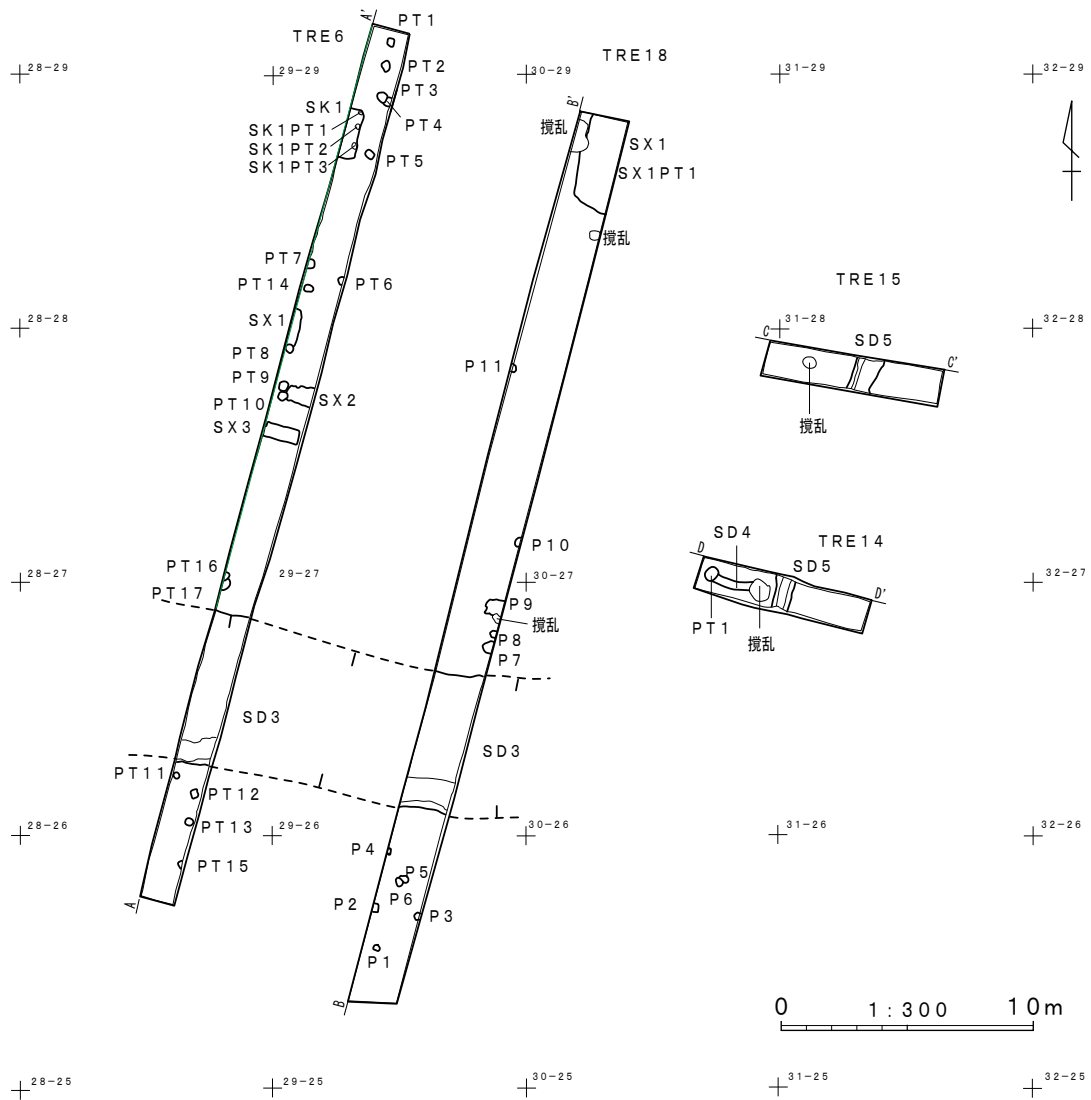
1	暗赤褐色土	しまり弱	粘性やや弱	小砂利混じり
2	暗赤灰色土	しまり弱	粘性やや弱	
3	暗褐色土	しまり弱	粘性弱	中部ローム主体
4	暗赤褐色土	しまりやや弱	粘性弱	φ1~3mm大の黄色ロームブロック1%含む 小砂利混じり
5	黒褐色土	しまりやや弱	粘性弱	φ2~5mm大の黄色ロームブロック3%含む
6	暗赤灰色土	しまりやや弱	粘性やや弱	小砂利混じり
7	暗赤灰色土	しまりやや弱	粘性やや弱	6層と異なり砂利を含まない
8	暗赤褐色土	しまりやや弱	粘性やや弱	φ2~5mm大の黄色ロームブロック3%含む
9	暗赤褐色土	しまりやや弱	粘性やや強	黄色ローム土が主体
10	黒褐色土	しまりやや弱	粘性やや強	φ3~5mm大の黄色ロームブロック3%含む
11	黒褐色土	しまりやや弱	粘性やや強	黄色ローム土が主体
12	黒褐色土	しまりやや弱	粘性やや強	φ5~10mm大の黄色ロームブロック3%含む
13	黒褐色土	しまりやや弱	粘性やや弱	φ2~5mm大の黄色ロームブロック1%含む
14	暗赤褐色土	しまりやや弱	粘性やや強	φ2~5mm大の黄色ロームブロック3%含む
15	灰褐色土	しまりやや弱	粘性やや強	黄色ローム土が主体
16	黒褐色土	しまりやや弱	粘性やや弱	φ2~5mm大の黄色ロームブロック1%含む
17	黒褐色土	しまりやや強	粘性やや弱	φ5~10mm大の黄色ロームブロック1%含む
18	黒褐色土	しまりやや強	粘性やや弱	φ10~30mm大の黄色ロームブロック5%含む
19	黒褐色土	しまりやや強	粘性やや強	φ2~5mm大の黄色ロームブロック1%以下(極少量)含む
20	黒褐色土	しまりやや弱	粘性やや弱	φ5mm大の黄色ロームブロック3%含む
21	黒褐色土	しまりやや弱	粘性やや強	
22	褐灰色土	しまりやや弱	粘性やや強	中部ロームブロック主体の層だが、灰褐色土の割合が2層より多い含む
23	黒色土	しまりやや弱	粘性やや弱	φ2~5mm大の黄色ロームブロック3%含む
24	黒褐色土	しまりやや弱	粘性やや強	φ1~2mm大の黄色ロームブロック15%含む
25	灰褐色土	しまりやや弱	粘性やや強	φ1~2mm大の黄色ロームブロック15%含む
26	黒褐色土	しまりやや弱	粘性やや強	φ5~10mm大の黄色ロームブロック5%含む
27	黒褐色土	しまりやや弱	粘性やや強	φ2~5mm大の黄色ロームブロック3%含む
28	黒褐色土	しまりやや強	粘性やや強	φ2~5mm大の黄色ロームブロック1%含む(2層より暗い)
29	黒褐色土	しまりやや強	粘性やや強	φ10~30mm大の黄色ロームブロック5%含む
30	黒褐色土	しまりやや弱	粘性やや強	φ1~3mm大の黄色ロームブロック3%含む(2層より暗い)
31	黒褐色土	しまりやや強	粘性やや強	φ5~10mm大の黄色ロームブロック5%含む 混ざりのない土 自然堆積か?
32	黒褐色土	しまりやや強	粘性やや強	黒褐色の土のみで、黄色ロームブロックを含まない
33	黒褐色土	しまり弱	粘性やや弱	しまりの弱い柔らかい土 黄褐色土を20%含む
34	オリブ黒色土	しまり強	粘性やや強	φ5~10mm大の黄色ロームブロック5%含む
35	オリブ黒色土	しまりやや強	粘性やや強	φ2mm大の黄色ロームブロック1%含む
36	オリブ黒色土	しまりやや強	粘性やや強	φ5~10mm大の黄色ロームブロック1%含む
37	暗褐色土	しまりやや弱	粘性やや強	黄色ローム土が、主体の層
38	黒褐色土	しまりやや弱	粘性やや強	φ2~10mm大の黄色ロームブロック3%含む
39	黒褐色土	しまりやや強	粘性やや強	黒色の強い層
40	黒褐色土	しまりやや弱	粘性やや弱	φ2~20mm大の黄色ロームブロック20%含む
41	暗褐色土	しまりやや弱	粘性やや強	中部ロームが崩れた土が主体
42	オリブ黒色土	しまりやや強	粘性やや弱	φ1~10mm大の黄色ロームブロック3%含む
43	黄灰色土	しまりやや強	粘性やや弱	φ2~5mm大の黄色ロームブロック1%含む
44	黒褐色土	しまりやや弱	粘性やや弱	φ1~5mm大の黄色ロームブロック3%含む
45	黒褐色土	しまりやや強	粘性やや弱	φ2~5mm大の黄色ロームブロック3%含む
46	褐灰色土	しまりやや弱	粘性やや強	中部ロームブロック主体の土
47	灰褐色土	しまりやや弱	粘性やや弱	黄色ローム土主体で、4層より暗い
48	黒褐色土	しまりやや強	粘性やや強	φ1~2mm大の黄色ロームブロック1%含む
49	褐灰色土	しまりやや強	粘性やや弱	φ2~5mm大の黄色ロームブロック3%含む
50	黒褐色土	しまりやや強	粘性やや強	
51	暗灰黄色土	しまりやや弱	粘性やや強	φ2~3mm大の黄色ロームブロック3%含む
52	黒褐色土	しまりやや弱	粘性やや強	5層よりやや砂質で暗い
53	黄灰色土	しまりやや弱	粘性強	
54	黄灰色土	しまりやや強	粘性やや強	5層と比べ黄色が強い
55	暗オリブ褐色土	しまり弱	粘性弱	箱堀の最下層に堆積した土で、粒子が細かい。黄色ロームブロック80%含む
56	灰黄褐色土	しまりやや強	粘性やや弱	黄色ローム土主体の土 よく締まっている
57	黒褐色土	しまりやや強	粘性強	5層と同一の高さであり5層と共によく締まっていることから、箱堀底面か?
57'	暗灰黄色土	しまりやや強	粘性やや強	箱堀最下層に溜まった水性堆積
58	暗灰黄色土	しまり強	粘性強	箱堀改修時に削った中部ロームが貼られており、箱堀の底面を造っている。
59	オリブ褐色土	しまり強	粘性強	5層と共によく締まっているが、中部ロームブロックは、ほとんど含まれない(5%) 箱堀改修時にしめられた土か?
60	暗灰黄色土	しまりやや弱	粘性弱	φ5~20mm大の黄色ロームブロック30%含む しまりが弱いことから、改修前の覆土か?
61	暗灰黄色土	しまりやや弱	粘性弱	6層と同質の土だが、黄色ロームブロック1%含む(砂質)
62	黄灰色土	しまりやや強	粘性やや弱	φ10mm大の黄色ロームブロック1%含む
63	黄灰色土	しまりやや弱	粘性やや弱	φ2~5mm大の黄色ロームブロック3%と炭化物を含む
64	褐灰色土	しまりやや弱	粘性やや弱	φ2~5mm大の黄色ロームブロック3%含む
65	黄灰色土	しまり弱	粘性弱	砂質
66	黄灰色土	しまりやや強	粘性やや強	極少量だが、炭含む
67	灰黄褐色土	しまり弱	粘性弱	砂質
68	灰黄褐色土	しまりやや弱	粘性弱	砂質 6層と同質の土
69	灰黄褐色土	しまりやや弱	粘性弱	砂質 φ5mm大の炭を含み 砂利土 削るとガリガリする
70	灰黄褐色土	しまり弱	粘性やや強	φ10~20mm大の黄色ロームブロック30%含む
71	黒褐色土	しまり弱	粘性強	砂質 粒子が細かく均一
72	暗褐色土	しまり弱	粘性やや強	7層と比べ粘性が強く、赤色の粒子を多く含む 薬研堀最下層の土
73	黒褐色土	しまりやや弱	粘性強	6層と同質の土だが、粒子が細かく炭も少量しか含まない。薬研堀最下層の土



第149図 清水曲輪 第4調査区 平面図



第150図 清水曲輪 第4調査区 断面図



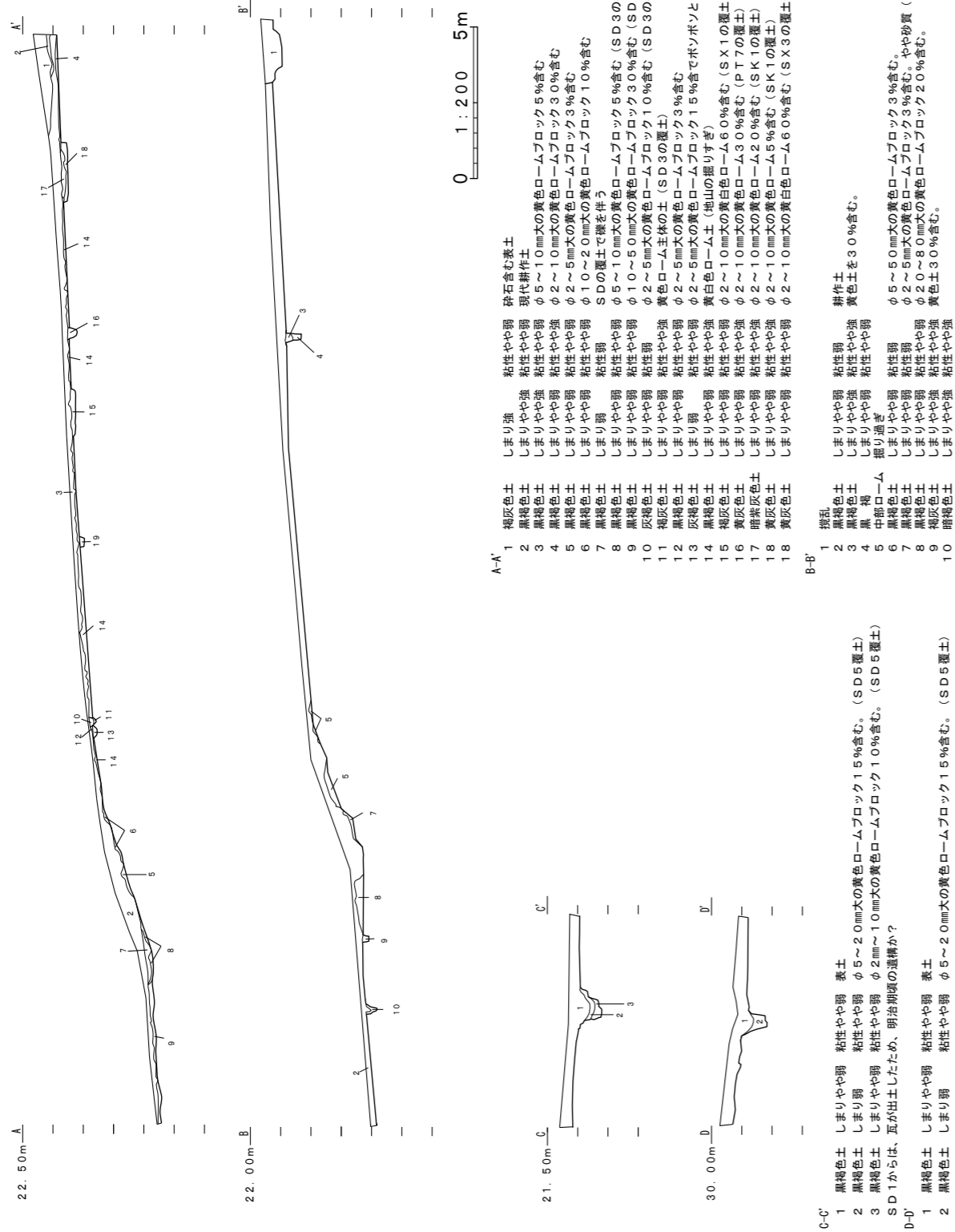
第 151 図 清水曲輪 第 5 調査区 平面図

第 5 調査区 (第 151・152 図)

第 5 調査区では清水曲輪の最北の平坦面にトレンチを設定した。第 4 調査区と同等の遺構が検出されている。曲輪南端の平坦面との境には SD3 が検出されている。SD を除いて基本的には遺構の掘削は行わなかった。

第 6 調査区 (第 144 図)

清水曲輪北端にトレンチを設定したが、いずれのトレンチも重機による大きな攪乱を受けており、遺構は検出されなかった。したがって、全体平面図にトレンチ位置のみを掲載した。



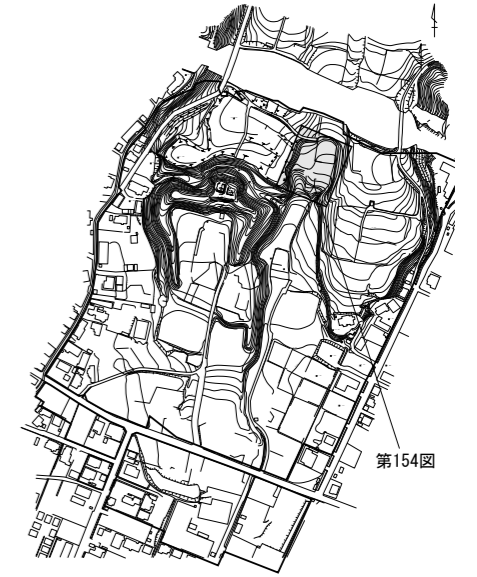
第152図 清水曲輪 第5調査区 断面図

第9節 清水小曲輪

(1) 調査の経過と概要

清水小曲輪は、北曲輪と清水曲輪に挟まれた谷に存在する平坦面である。絵図にも記載がないため、「清水」の字名を用いて、清水小曲輪と呼称している(第153図)。

平成20年度にトレンチを入れ、翌年の21年度にトレンチを面的に広げて遺構確認を行った。検出された遺構はいずれも遺物がなく、年代がはっきりしないが、溝3条(SD1~3)、石列1条、集石1基(SG1)、不明遺構1基(SX1)の検出があった(第154・155図)。また調査区南西側では、段切とした曲輪造成の痕跡が、北西部では岩盤が確認されている(PL.46・47)。



第154図 清水小曲輪 調査地点

(2) 清水小曲輪の遺構

1号溝・2号溝・3号溝(SD1~SD3 第156図)

曲輪のほぼ中央において検出された。SD1は東西方向、SD2とSD3は南北方向に走る。

(古)SD3→SD2→SD1(新)の順で重複関係が認められる。SD1の東の延長上に石列1が通り、SD2の覆土中位にも礫の集中が見られる。SD群の規模等は以下の通りである。

SD1:幅2.3m、深さ0.3m SD2:幅3.1m、深さ0.6m SD3:幅1.8m、深さ0.2m

石列1(第157図)

SD1の延長上に検出された石列で、総延長は8.5mである。

1号集石(SG1 第158図)

集中箇所は2箇所認められるが、合わせてSG1とした。南側の集中にはやや大形の礫が伴う。北側の集中は東西2.0m×南北2.0mに、南側の集中は東西0.7m×南北2.6mの範囲に広がる。

1号不明遺構(SX1 第159図)

調査区北東で検出された方形の掘り込みで、検出された規模は東西2.5m×南北3.0mで、深さは0.1mと浅い。

第10節 東外堀(伝東船着場)

(1) 調査の経過と概要

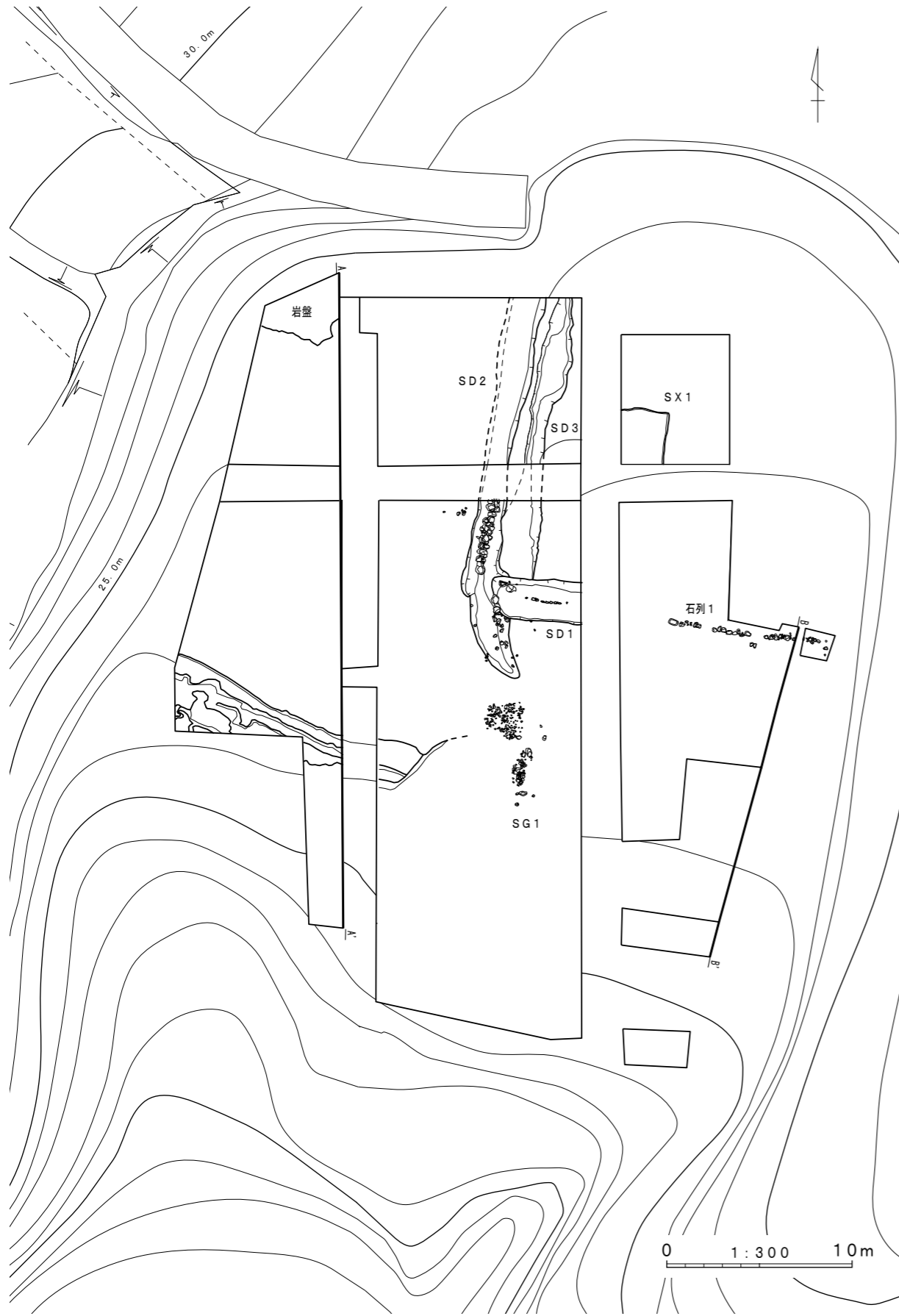
本節では、平成21・22年度に実施した東外堀内の調査成果を一括で報告する。清水小曲輪の南側は「東船着場」と伝わる地点であり、昭和57年の調査では遺物が採取されている。この地点周辺も含めて平成21年度には3地点にトレンチを設定した(第160図)。トレンチ名は調査時に使用していたTRE11・13・15を用いる。この他に、三ノ丸南東部における東外堀下層確認トレンチ(第96図)のさらに東側においても、東大手の痕跡の確認を目的として平成22年度に調査を行っている。

(2) 平成21年度東外堀確認トレンチ(第160・161図)

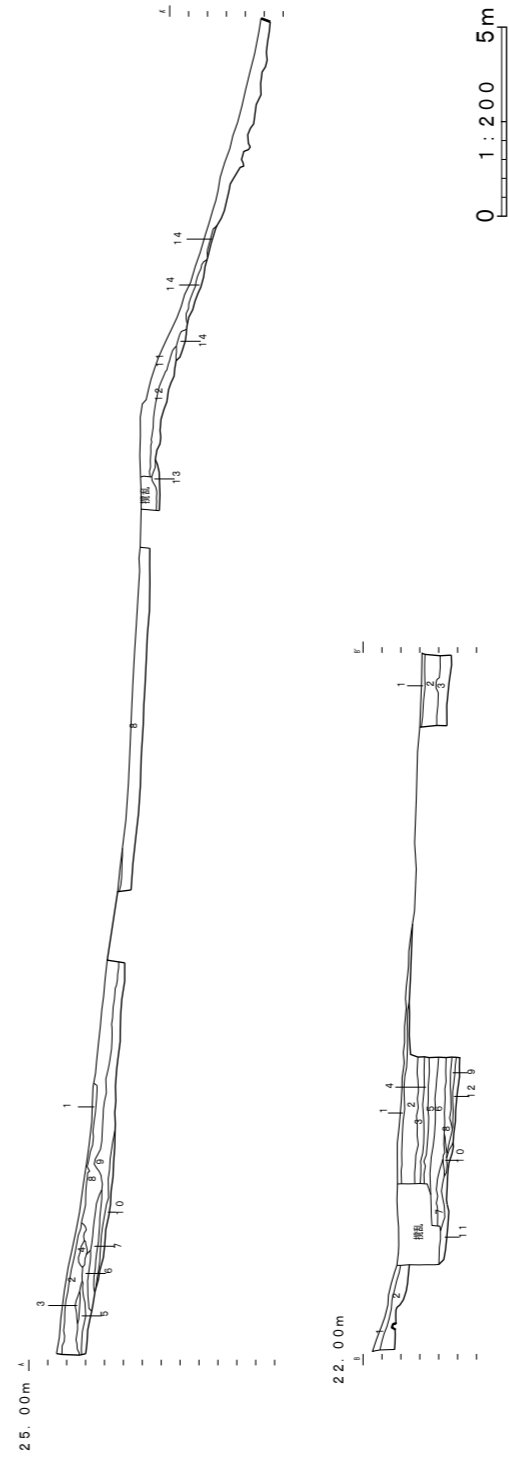
絵図には「蓮池」と描かれ、深さ約0.6mで近代以後の旧水田層に達する。TRE11では清水曲輪への立ち上がりが確認された他は、明確な遺構の検出はなかった。

(3) 平成22年度東外堀確認調査

平成22年度に東大手の南側の構造を把握するために面的な調査を実施したが、大手の痕跡は検出さ

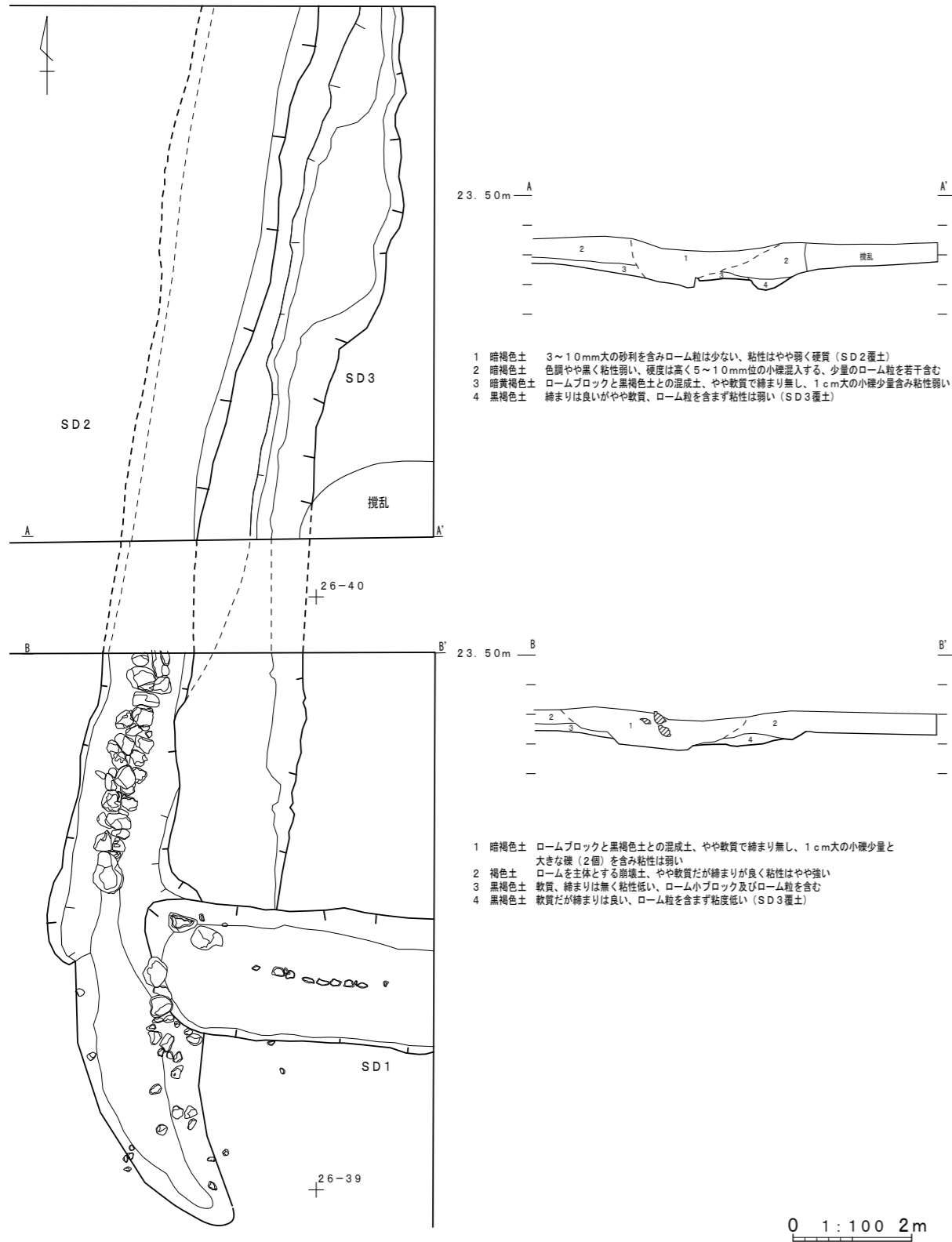


第 154 図 清水小曲輪 全体平面図

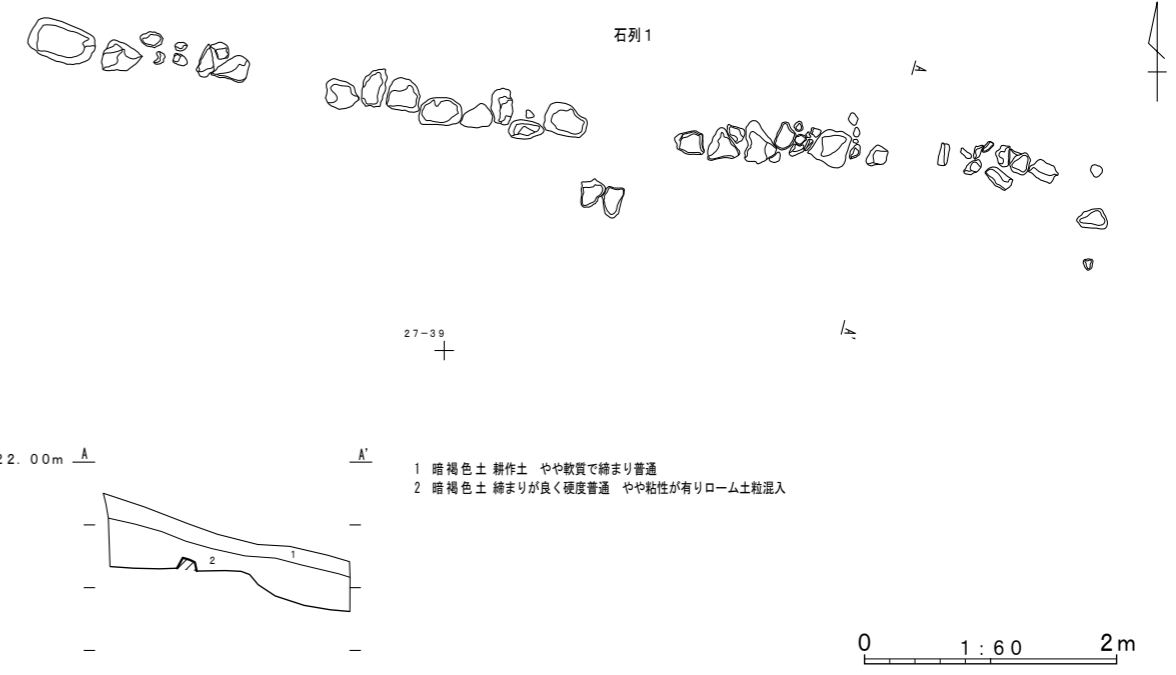


第 155 図 清水小曲輪 断面図

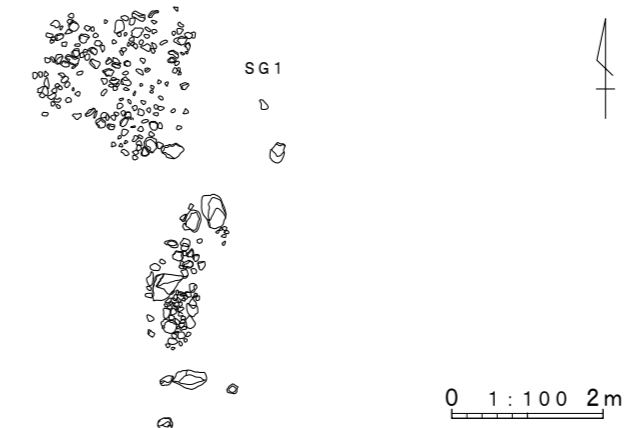
- 清水小曲輪 A-A'
- 1 黒褐色 土層
 - 2 暗褐色 土層
 - 3 褐色 土層
 - 4 黒褐色 土層
 - 5 暗褐色 土層
 - 6 暗褐色 土層
 - 7 暗褐色 土層
 - 8 暗褐色 土層
 - 9 暗褐色 土層
 - 10 暗褐色 土層
 - 11 暗褐色 土層
 - 12 暗褐色 土層
 - 13 暗褐色 土層
 - 14 暗褐色 土層
- 清水小曲輪 B-B'
- 1 暗褐色 土層
 - 2 暗褐色 土層
 - 3 暗褐色 土層
 - 4 暗褐色 土層
 - 5 暗褐色 土層
 - 6 暗褐色 土層
 - 7 暗褐色 土層
 - 8 暗褐色 土層
 - 9 暗褐色 土層
 - 10 暗褐色 土層
 - 11 暗褐色 土層
 - 12 暗褐色 土層
- 清水小曲輪 A-A' (continued)
- 1 黒褐色 土層
 - 2 暗褐色 土層
 - 3 褐色 土層
 - 4 黒褐色 土層
 - 5 暗褐色 土層
 - 6 暗褐色 土層
 - 7 暗褐色 土層
 - 8 暗褐色 土層
 - 9 暗褐色 土層
 - 10 暗褐色 土層
 - 11 暗褐色 土層
 - 12 暗褐色 土層
 - 13 暗褐色 土層
 - 14 暗褐色 土層
- 清水小曲輪 B-B' (continued)
- 1 暗褐色 土層
 - 2 暗褐色 土層
 - 3 暗褐色 土層
 - 4 暗褐色 土層
 - 5 暗褐色 土層
 - 6 暗褐色 土層
 - 7 暗褐色 土層
 - 8 暗褐色 土層
 - 9 暗褐色 土層
 - 10 暗褐色 土層
 - 11 暗褐色 土層
 - 12 暗褐色 土層



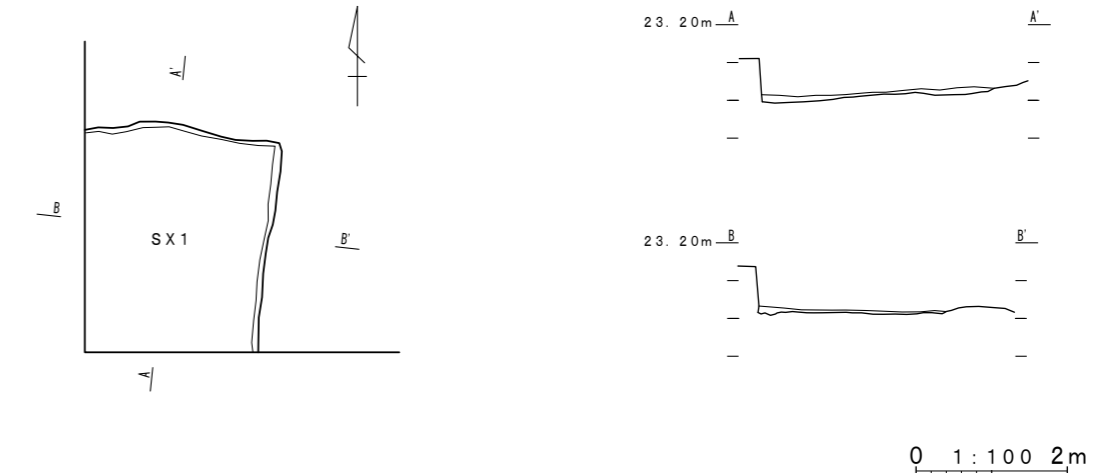
第156図 清水小曲輪 SD1~3 平・断面図



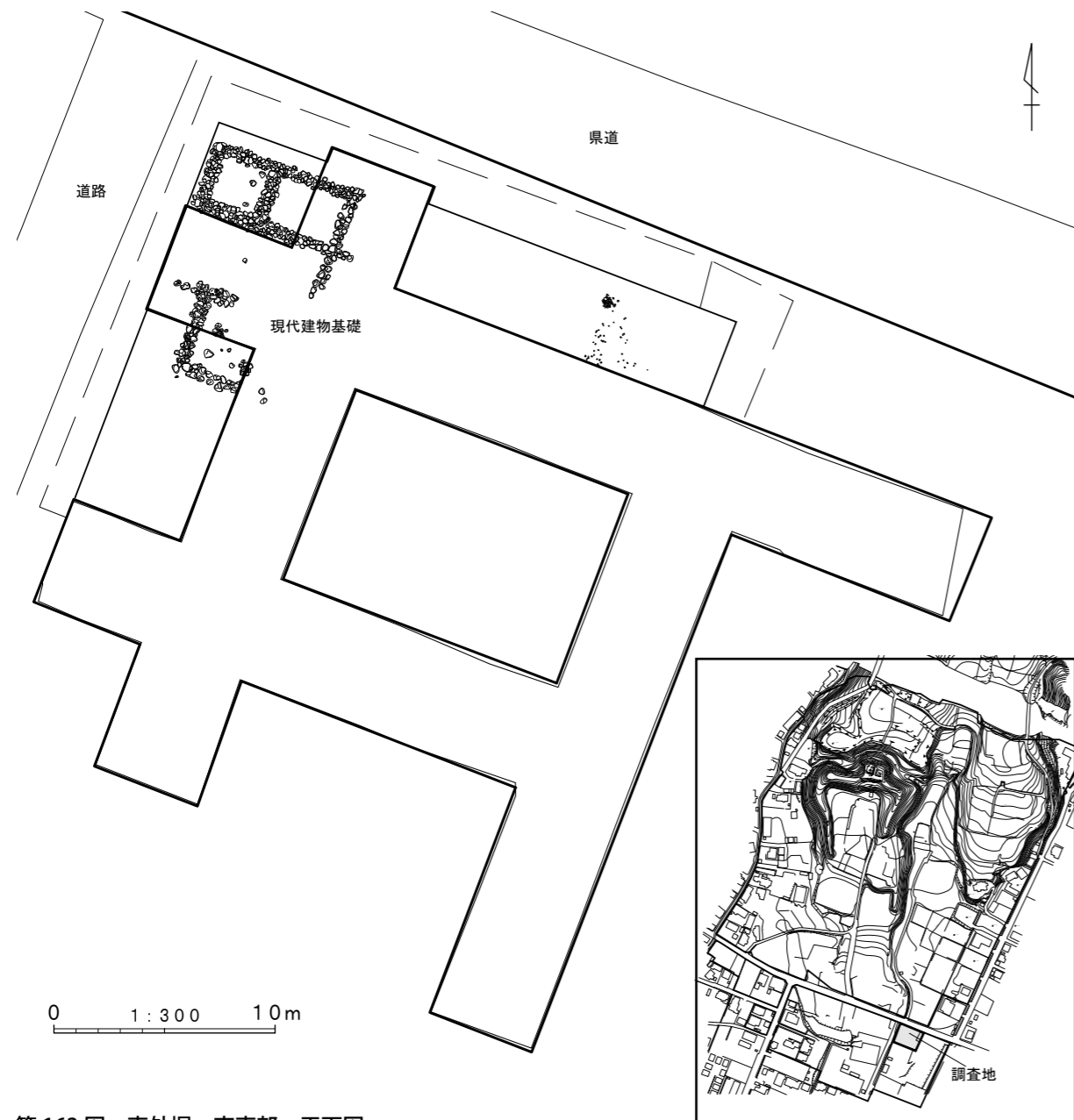
第157図 清水小曲輪 石列1 平・断面図



第158図 清水小曲輪 SG1 平面図



第159図 清水小曲輪 SX1 平・断面図

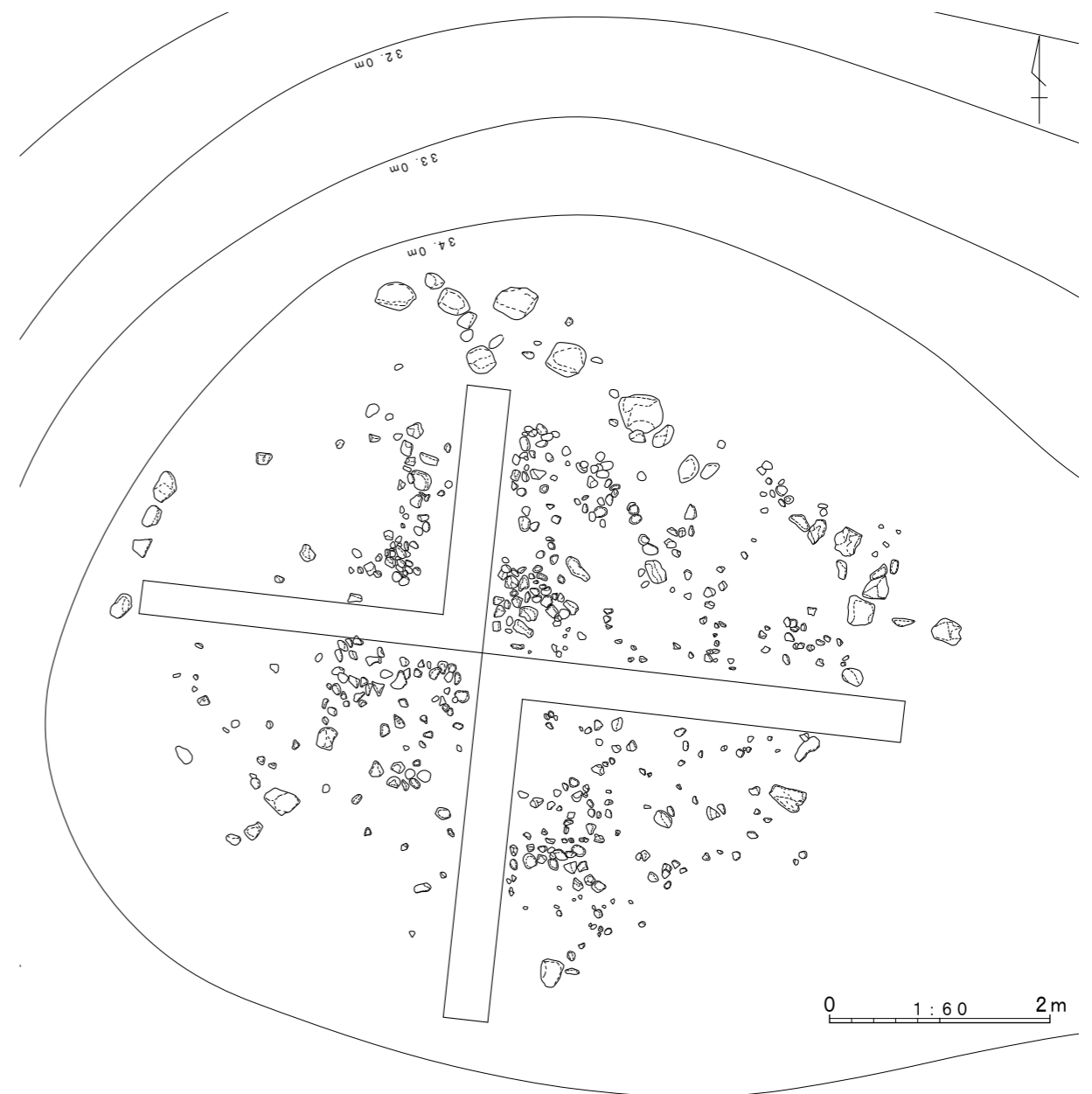


第 162 図 東外堀 南東部 平面図

れなかった。検出されたのは、現代遺物を伴った建物礎石のみであり、これは西外堀（第 81 図）と同様である。外堀内に位置することから、地盤の沈下を防止するためのものであろう。現代構築物のみの検出であったため、平面図と写真のみ掲載した（第 162 図・写真 62）。



写真 62 現代基礎全景（東から）



第 163 図 伝西櫓台 平面図

第 11 節 伝西櫓台

伝天守台の西側には絵図に「櫓台」と描かれる地点があり、これを根拠に「伝西櫓台」と呼称している地点がある。現在でも礫が露出している状況であったため、平成 29 年度に土層観察用ベルトを残しながら掘り下げを行ったところ、やや大形の礫が方形にめぐり、その中に川原石を含む小形の垂円礫が充填されている建物跡が検出された（第 163 図）。検出は表土直下 0.1～0.2 m である。

南西側は損壊していて配列は明らかではないが、建物跡の規模は 1 辺約 5.0 m 程度と推測される。櫓台に沿った方位ではなく、本丸中央部へ向けた北西 - 南東に軸方向を持っている。

なお、伝西櫓台と対になる伝東櫓台でも垂円礫の散布が認められることから、建物跡の存在が想定される（未調査 PL.48）。このことから、伝天守台は中央と両翼に礎石建物を備える構造になっていると考えられる。

第IV章 遺物

興国寺城跡の発掘調査で出土した中世遺物は、13世紀から16世紀の長期間に及ぶ。このうち、多くを占めるのは、城が機能していたと想定される15世紀後半から16世紀末であり、貿易陶磁・瀬戸美濃・常滑・志戸呂・初山などの陶磁器類、かわらけ・鍋などの土師質製品、銭貨、石製品、鉄製品、木製品などが出土している。また、17世紀前半の瀬戸美濃・志戸呂などの近世陶器も一定量認められる。このほか、中世遺物以外の弥生・古墳時代の遺物や近世・近代までの遺物が出土しているが、今回の報告では戦国城郭に関わると思われる中世から近世初頭にかけての遺物を中心に図化・報告を行った。発掘調査では複数年度にわたって1つの曲輪を調査している場合もあるが、試掘調査を除き、遺物の記述、図の掲載は曲輪ごとに行う。

(1) 試掘調査出土遺物

平成13年度試掘調査 (第164図1～7 PL.48)

平成13年度試掘調査では、13世紀から近世後期の遺物が出土している。図示可能な中世陶器では、13世紀代の常滑片口鉢1類(2)、中世後半の常滑甕(3)、土師質のものは16世紀代の羽釜(4)やかわらけ(5～7)がある。かわらけは器高の低いもの(5・6)と、断面逆台形で環形の小皿(7)とがある。6は白色の胎土で、搬入品の可能性がある。近世後期の遺物として、肥前産の蛇の目高台の染付皿(1)が出土している。

平成14年度試掘調査 (第165図8～14 PL.48・61)

平成14年度試掘調査の出土遺物は7点を図示した。瀬戸美濃では大窯3段階前半の稜皿(8・9)や播鉢(10)がある。11は高台の付く丸皿で、胎土からは初山と推定されるが、同製品にこのような付高台が見当たらないため、近世初頭の志戸呂の可能性もある。このほか常滑の甕(12・13)が出土しているが、12は13世紀のものである。14は北宋銭「元豊通宝」である。

(2) 本丸出土遺物

1号礎石建物跡 SS1 (第166図15・16 PL.49)

SS1周辺ではかわらけが出土しているものの、遺構の時期を特定できるような陶磁器は出土していない。図化したかわらけは、口径が13.9cmの大形のもの(15)と10cm以下(16)の2点である。

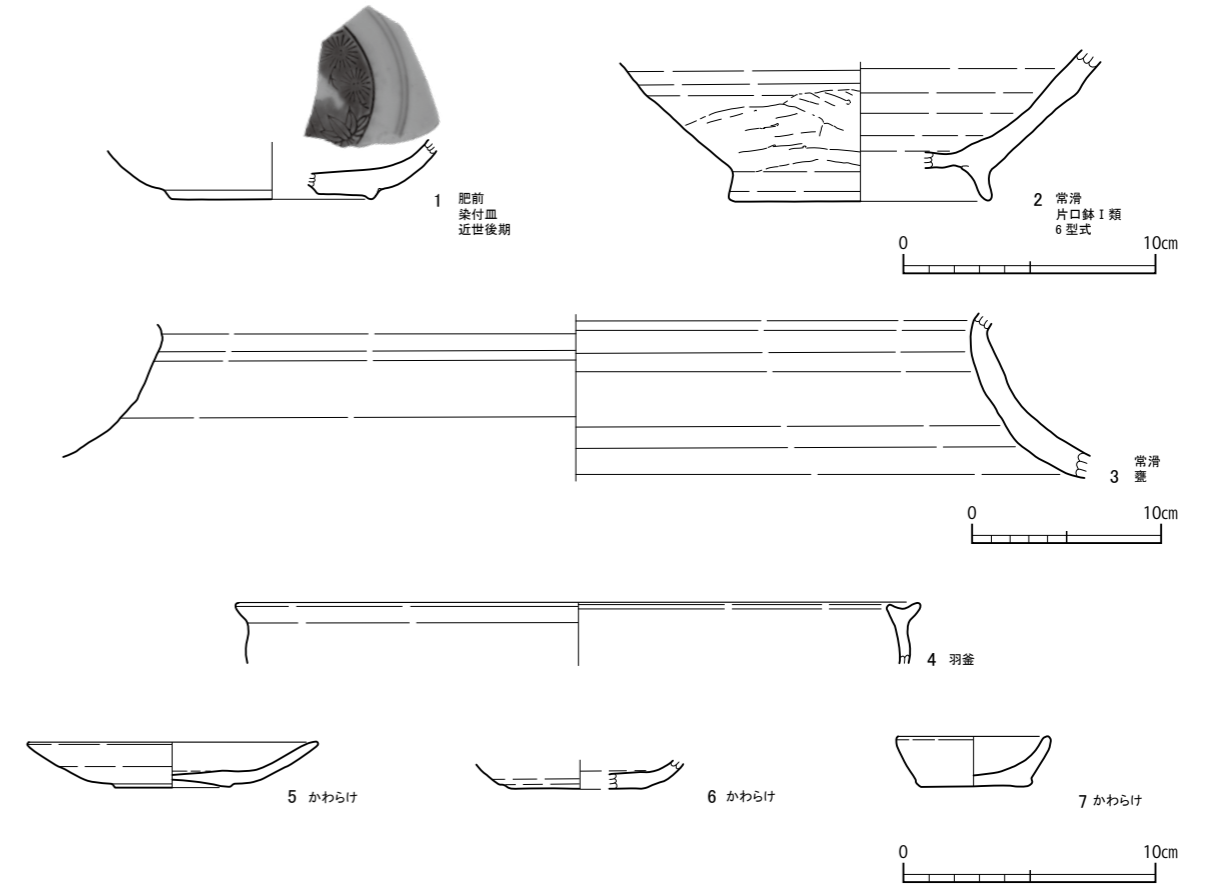
1号溝 SD1 (第167図17～27 PL.49)

本遺構の周辺では古墳時代から近世までの遺物が出土している。図化していないが、最も新しい遺物は近世の肥前磁器4点であることから、近世まで機能していた可能性もある。

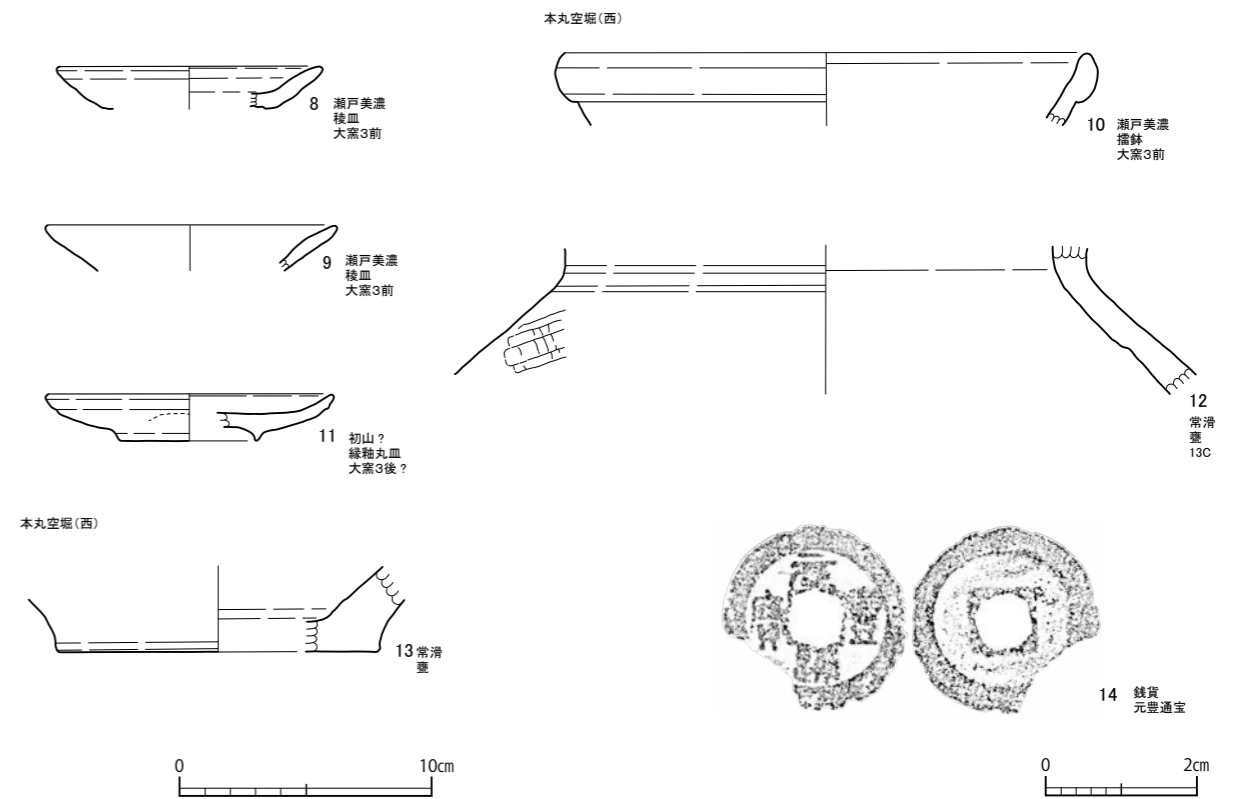
陶磁器では瀬戸美濃と志戸呂が一定量出土している。瀬戸美濃は古瀬戸後IV新期の腰折皿(19)が1点あるほかは大窯2～4段階の天目茶碗(17)、丸皿(18)や登窯第1小期の志野皿など計12点出土している。志戸呂は丸皿(20)、小杯(21)、皿(22)、播鉢(23)など6点あり、すべて大窯3段階後半～4段階併行である。かわらけはまとめて出土したが、破片資料が多く、図示可能遺物は25～27の3点である。また、内耳鍋1点(24)が出土した。

2号溝 SD2 (第168図28～31 PL.49)

SD2から出土した陶磁器は少なく、瀬戸美濃播鉢(28)と登窯第3・4小期の菊皿小片の2点のみである。播鉢は破片のため詳細な時期は比定できないが、大窯段階のものである。土師質では羽釜(29)、かわらけ(30・31)が出土している。



第164図 平成13年度試掘調査出土遺物



第165図 平成14年度試掘調査出土遺物

本丸空堀（第169図32～38 第170図39～60 PL.49・61）

本丸空堀に挟まれた本丸土橋から出土した遺物は鉢の底部（32）1点のみである。胎土等から志戸呂と考えられるが、類例がないため時期判断が難しい。近世初頭であろうか。

本丸空堀から出土した陶磁器は、貿易陶磁の青磁盤1点、瀬戸美濃20点、志戸呂8点、初山1点、常滑2点である。瀬戸美濃は古瀬戸前期の壺が1点あるほかは、古瀬戸後IV新时期から登窯第4小期までの製品が出土している。以下、空堀（西）と空堀（東）に分けて記述する。

空堀（西）の出土遺物では、瀬戸美濃大窯1段階の緑釉はさみ皿（33）、播鉢（35）、登窯第2小期の志野鉄絵皿（34）が出土している。常滑甕（36）は13世紀代のものである。このほか、かわらけ（37）、瓦質の内耳鍋破片（38）が図示可能であった。

空堀（東）では、貿易陶磁として、14世紀代の青磁盤（39）が1点出土している。瀬戸美濃は古瀬戸後期から登窯第3・4小期までの遺物が認められた。このうち、古瀬戸後IV新时期のものは播鉢（45・46）、口広有耳壺（48）、大窯段階のものは天目茶碗（40～42）、播鉢（47）などである。近世では登窯第3・4小期の菊皿（43）、志野皿（44）などが出土している。また、志戸呂では大窯3段階後半～4段階併行の志戸呂の播鉢（50・51）がある。52の丸皿は胎土等の判断が難しいが、初山と思われる。常滑の片口鉢Ⅱ類（53）は10型式に比定される。このほか、かわらけ（54～57）や鉄砲玉（58）、永楽通宝（59）、寛永通宝（60）が出土した。

以上のように、本丸空堀では14世紀代の貿易陶磁や15世紀後半の瀬戸美濃が出土する一方で、17世紀後半の瀬戸美濃の登窯製品や寛永通宝まで含まれており、長期にわたる遺物が認められた。したがって本丸空堀は東西いずれも近世前半までは完全に埋没していなかったと考えられる。

遺構外（第171図61～88 第172図89～107 第173図108～129 第174図130～149

第175図150～199 第176図200～225 第177図226～230 PL.50～52・59・60・61・62）

本丸出土遺物のうち、遺構に伴わないものを第171～177図に示した。以下、種別ごとに概要を記す。

貿易陶磁は10点出土している。13世紀代の龍泉窯系青磁碗B1類（61）、15～16世紀の青磁碗・皿（62～64）、白磁皿（65）、染付皿（66）が出土している。67は染付の漳州窯系大皿で、17世紀初頭に位置づけられる。

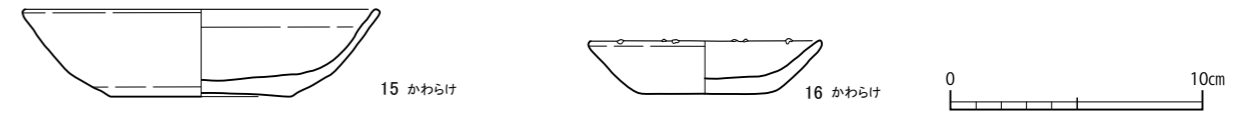
瀬戸美濃は古瀬戸後期から近世の登窯段階まで長期間にわたる多様な器種が出土し、135点を数える。天目茶碗は大窯段階（68～73）と登窯段階（74～76）がある。77の丸碗も登窯段階の製品である。皿類は古瀬戸後IV新时期から登窯段階までのものがある。古瀬戸後IV新时期では腰折皿（78・79）、大窯段階では緑釉はさみ皿（80～82）、端反皿（83）、丸皿（84～86）、稜皿（87～91）、折縁皿（92）がある。また、登窯段階でも志野皿（93・95～98）や菊皿（94）など一定量の遺物が認められる。鉢・大皿類では、古瀬戸後IV新时期の折縁深皿（99）や大窯3段階前半の大皿（100）がある。播鉢はすべて大窯段階のもので、大窯1段階から4段階後半までに及ぶ（101～115）。このほか、古瀬戸後IV期の花瓶（117）や、近世の四耳壺（116）などが出土している。

志戸呂は38点出土し、碗類（118～120）、皿類（121～128）、鉢（129）、播鉢（130～138）がある。大窯4段階併行期のものがほとんどであるが、130の播鉢は古瀬戸後IV期併行、138は近世のものである。初山は7点で、天目茶碗（139）と丸皿（140～142）があり、大窯3段階後半併行である。ただし、141・142は胎土の判別が困難で、志戸呂の可能性もある。

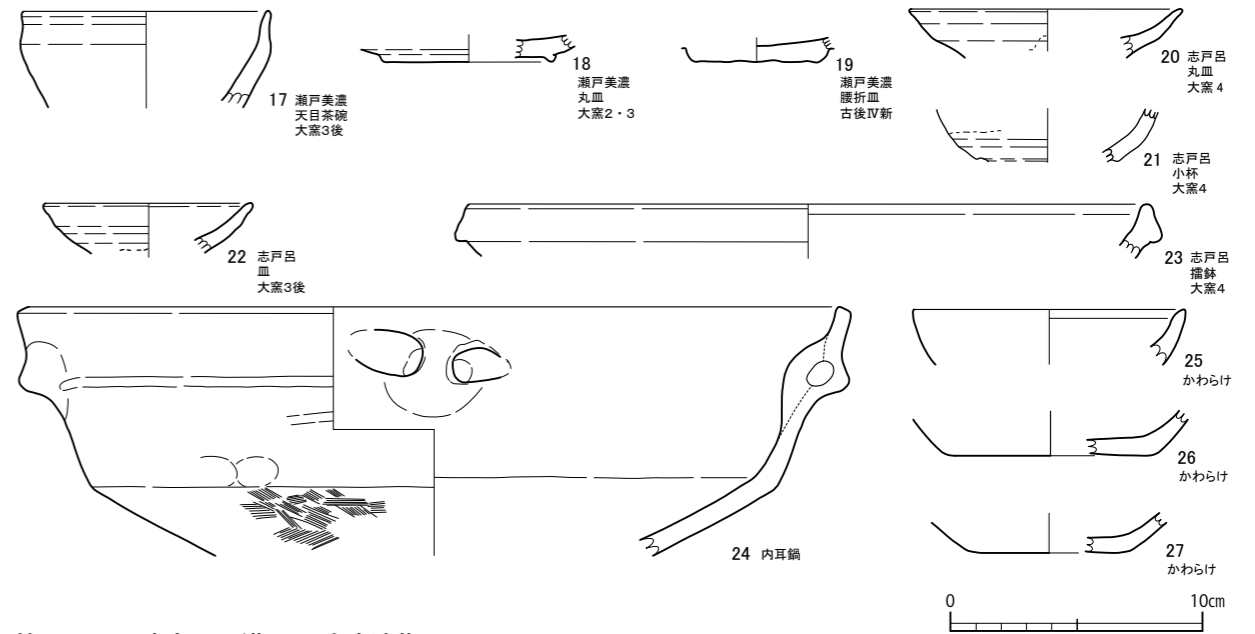
常滑は片口鉢Ⅱ類（143～145）、甕（146～149）など32点出土した。やや古手の148の甕以外は14～15世紀に位置づけられる。

羽釜は瓦質（150）と土師質（151）の各1点出土した。

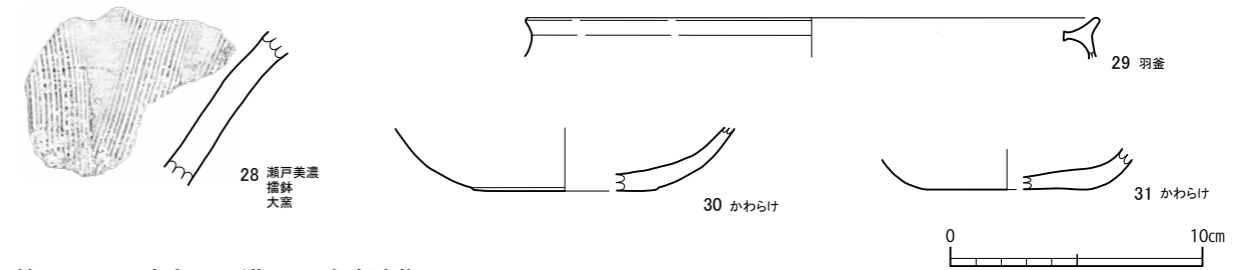
かわらけは多数出土しているが、破片が多く全体形状がわかるものは152～175で、他は底部破



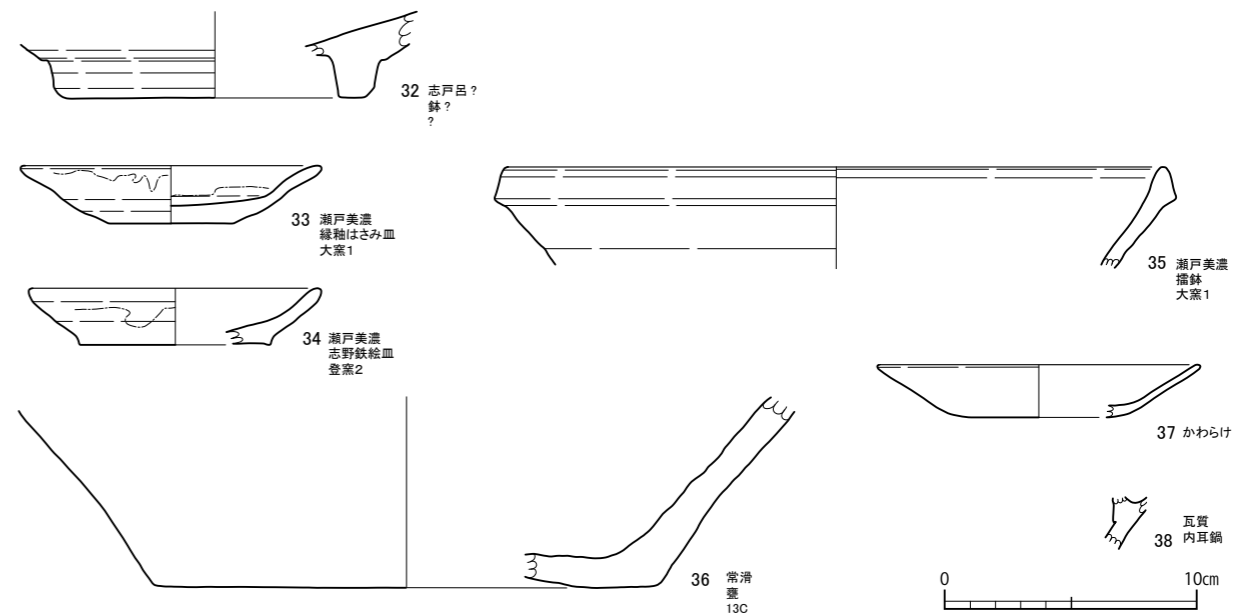
第166図 本丸1号礎石建物跡SS1出土遺物



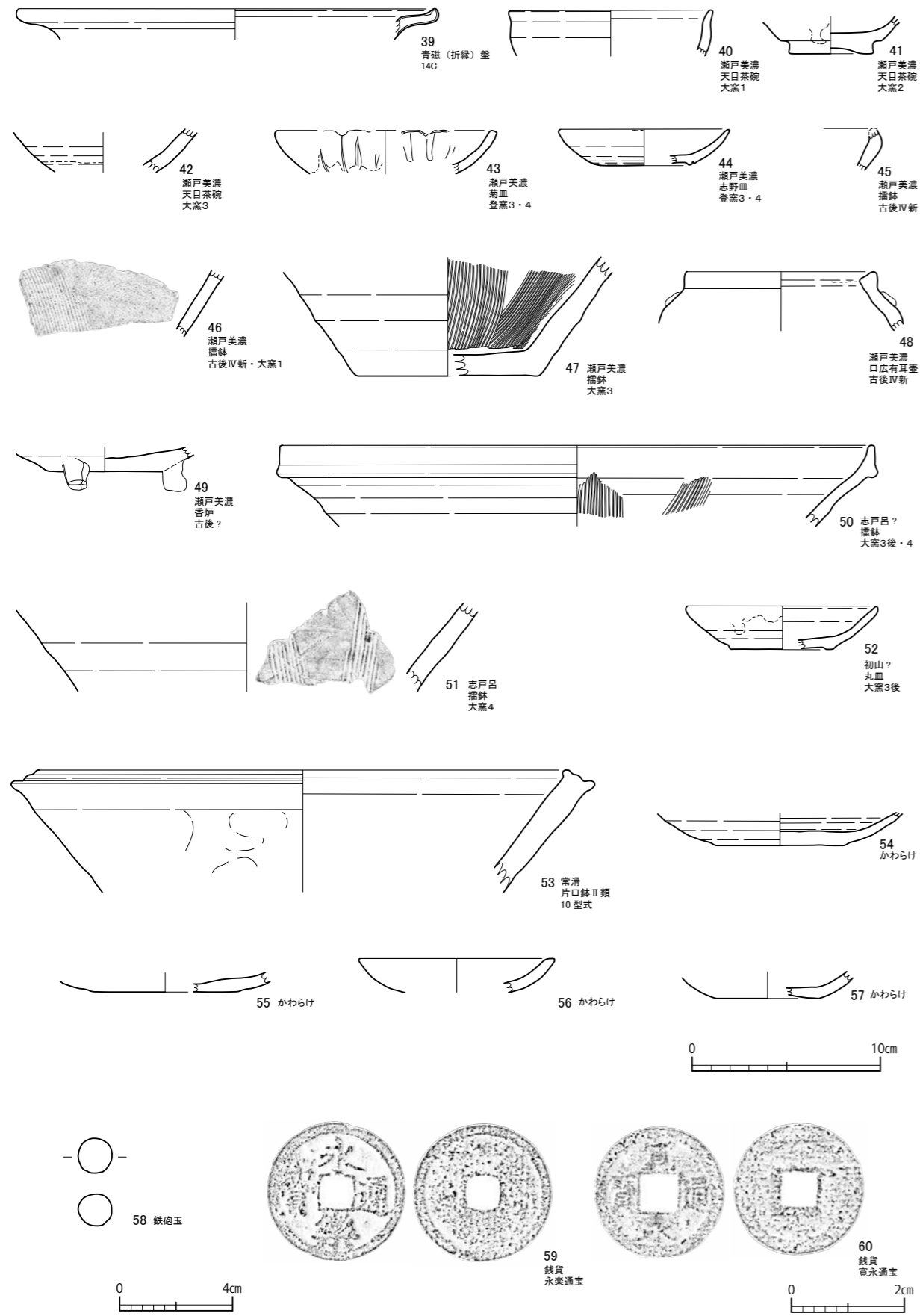
第167図 本丸1号溝SD1出土遺物



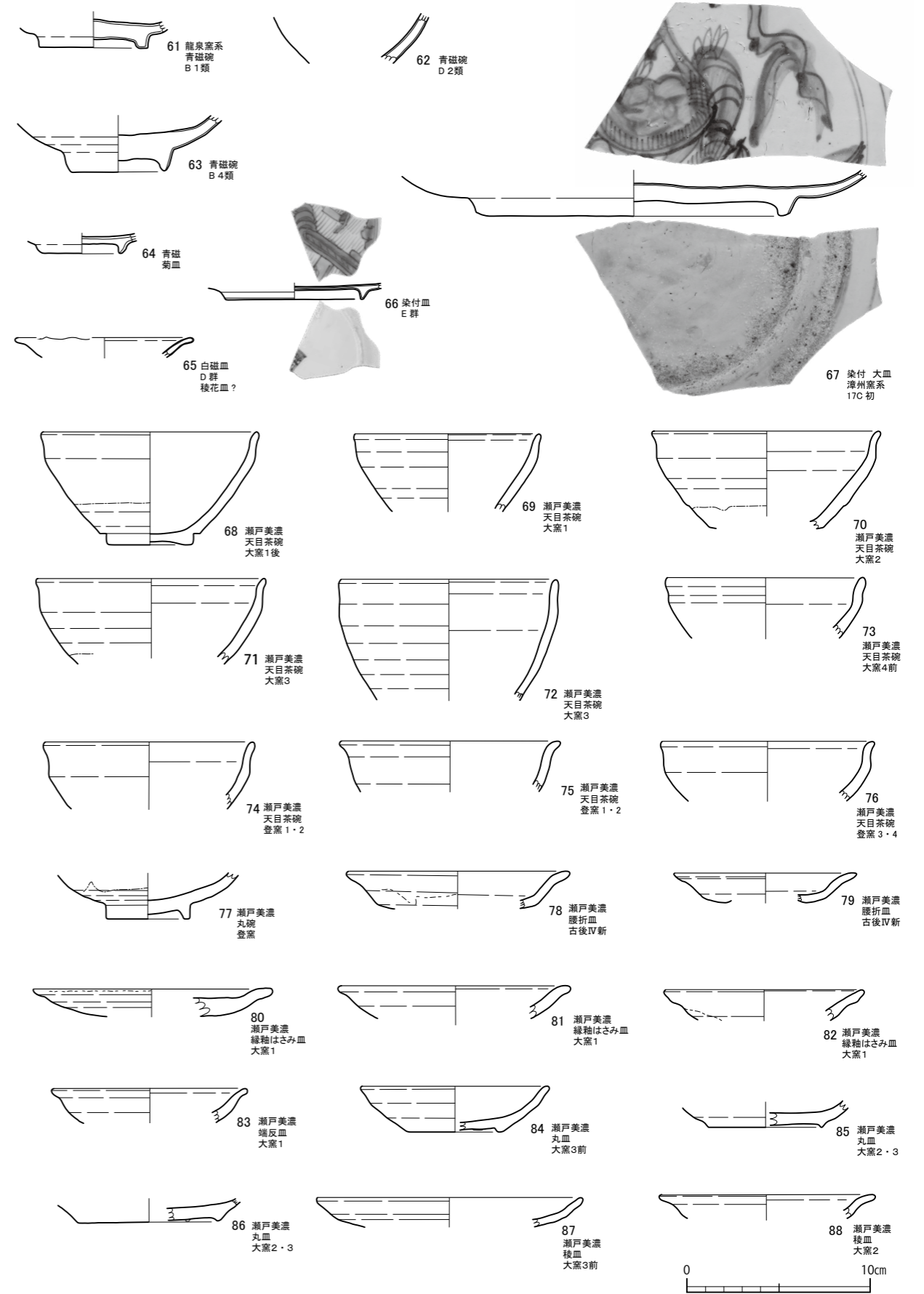
第168図 本丸2号溝SD2出土遺物



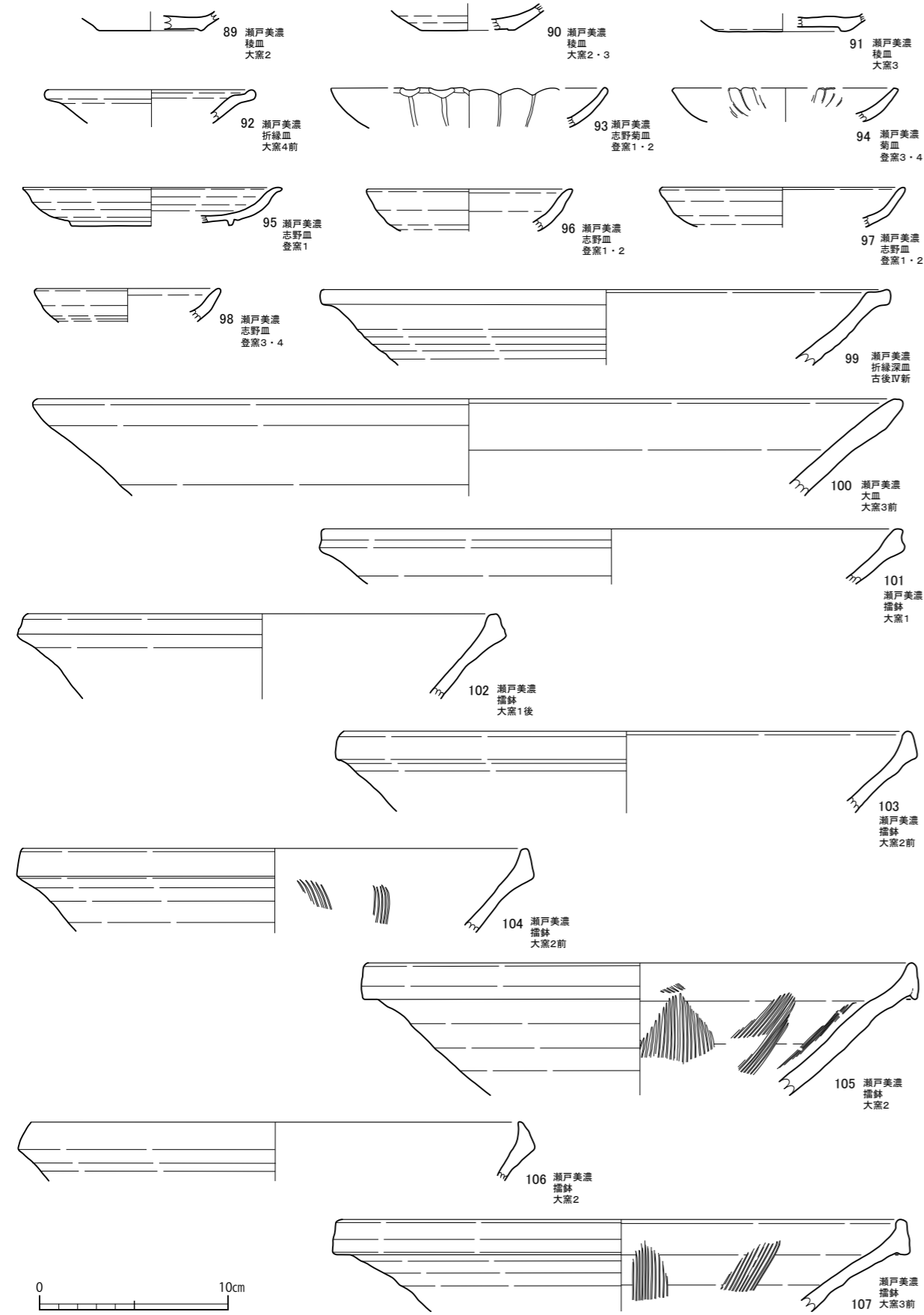
第169図 本丸空堀（西）出土遺物



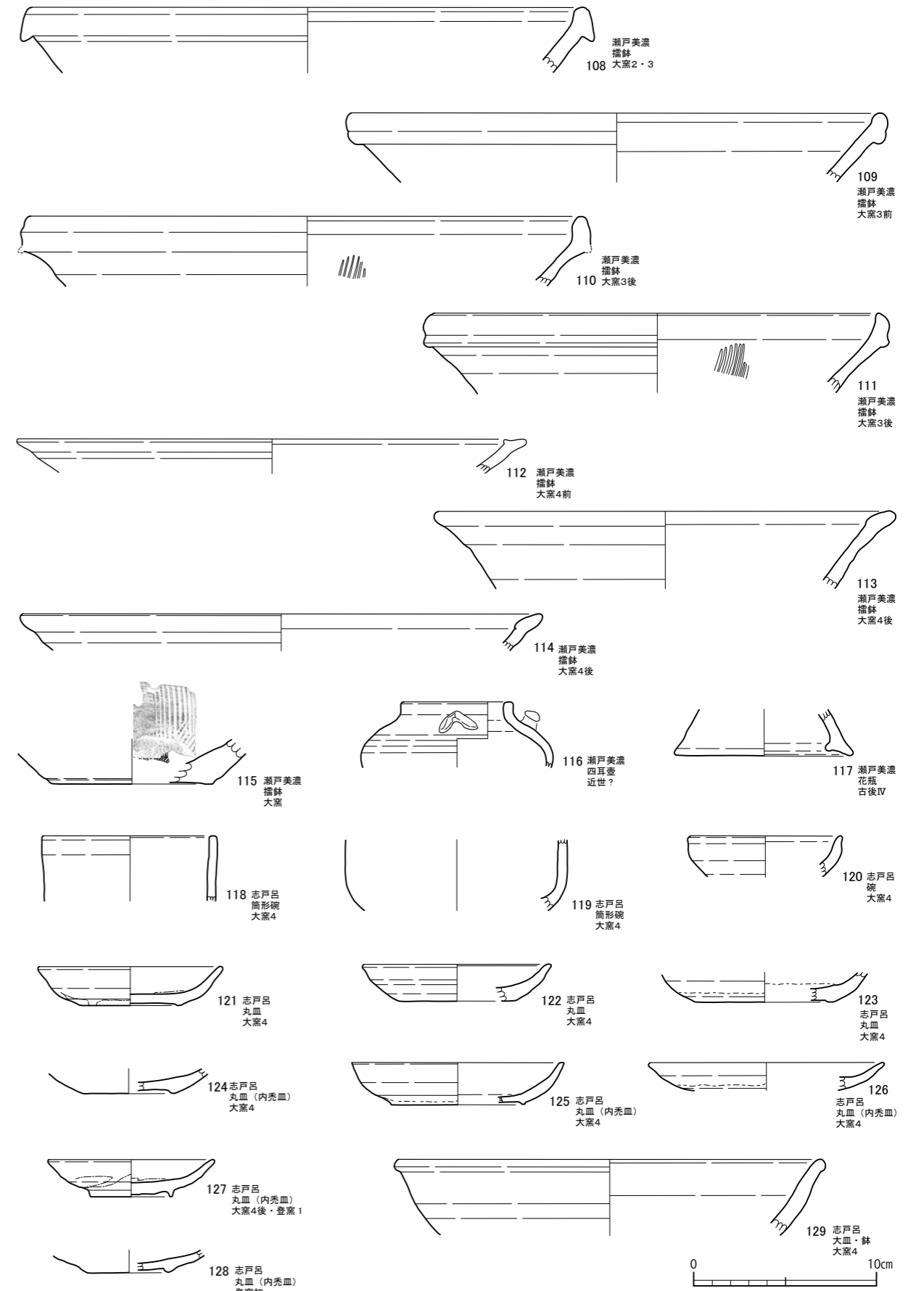
第170図 本丸空堀(東)出土遺物



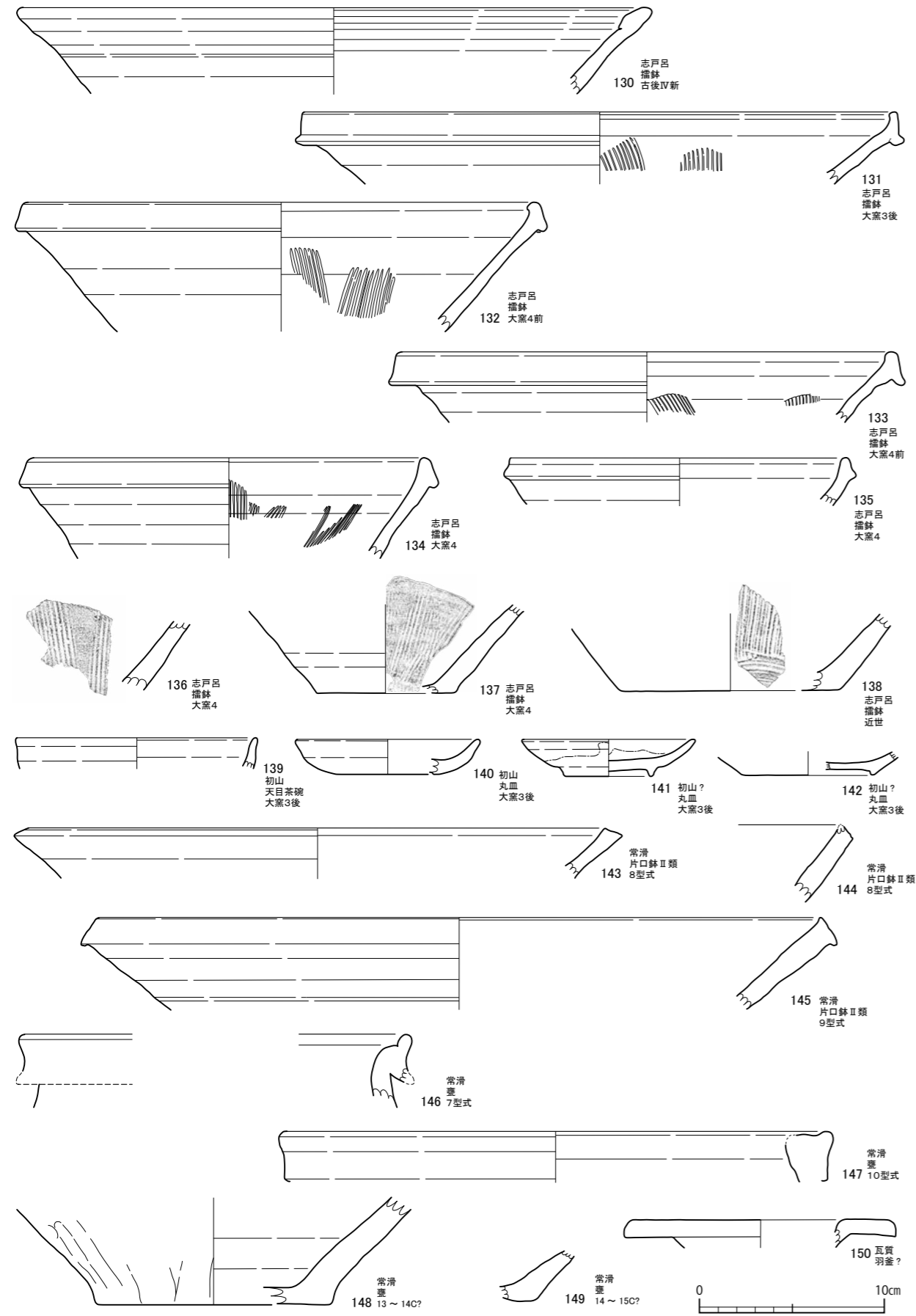
第171図 本丸遺構外出土遺物(1)



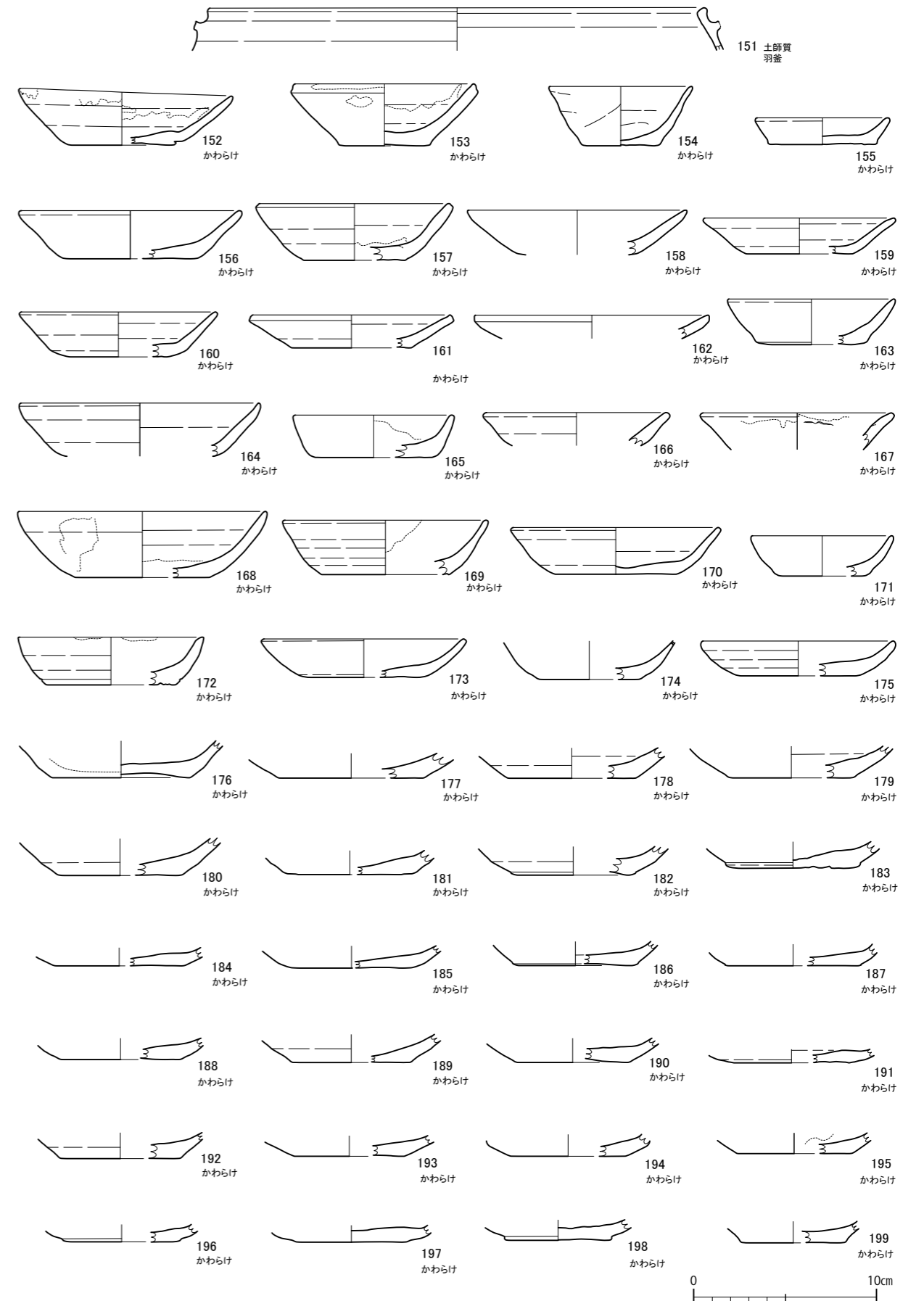
第172図 本丸遺構外出土遺物(2)



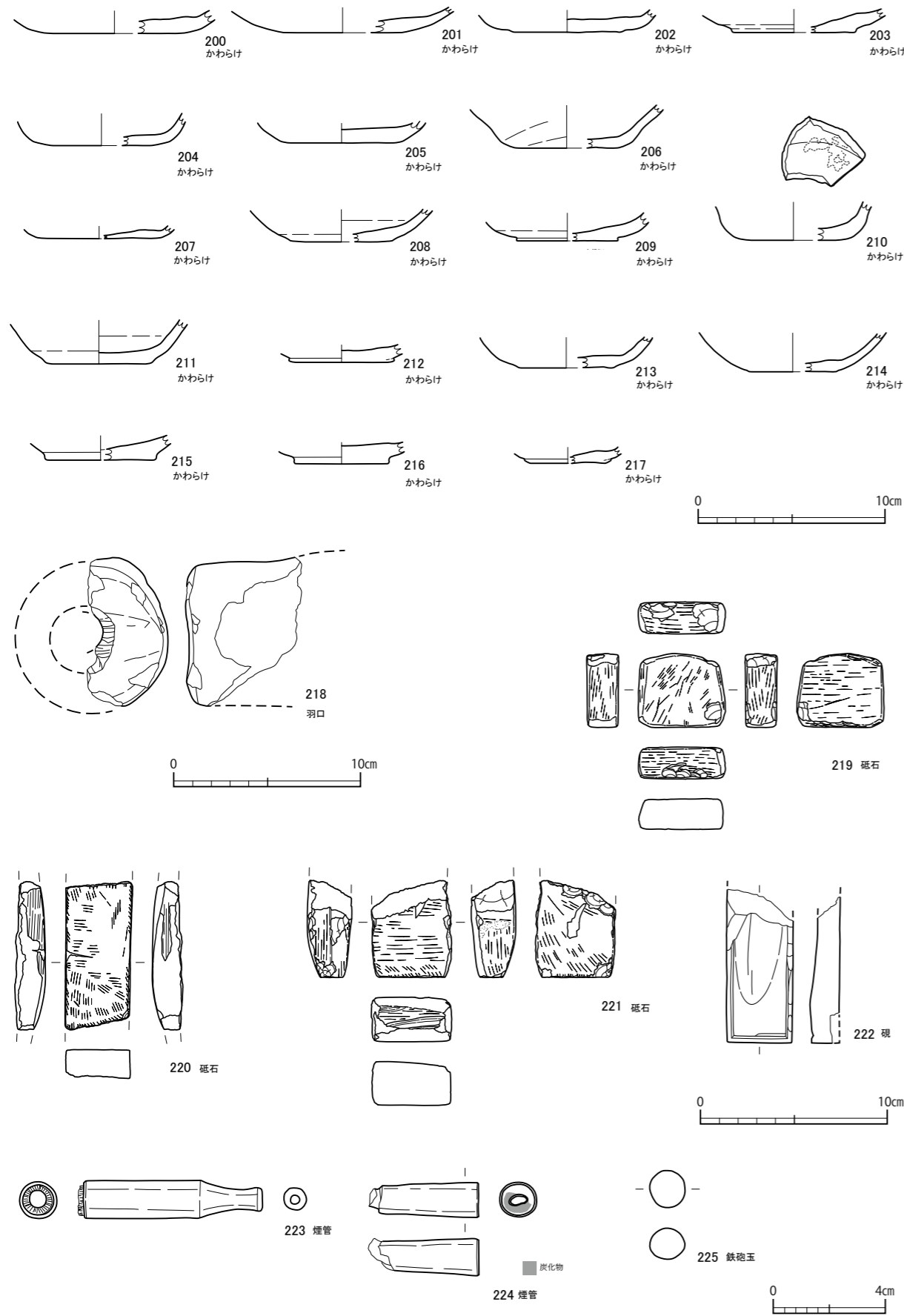
第173図 本丸遺構外出土遺物(3)



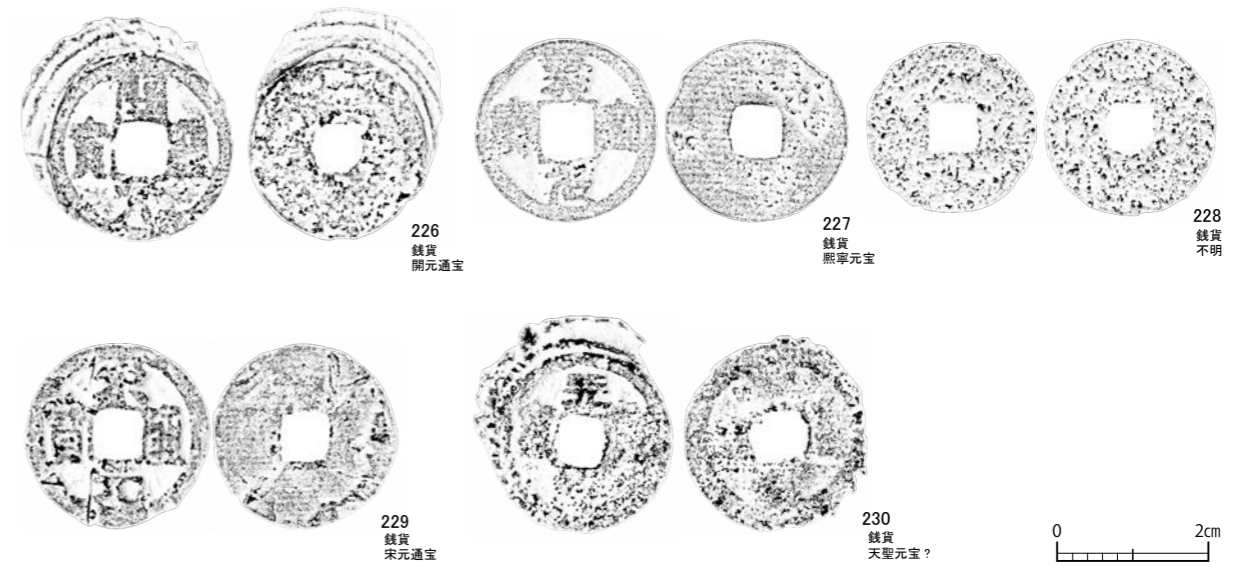
第174図 本丸遺構外出土遺物(4)



第175図 本丸遺構外出土遺物(5)



第176図 本丸遺構外出土遺物(6)



第177図 本丸遺構外出土遺物(7)

片である。器高が高く逆台形を呈すもの(153・154)や低いもの(155・159・161・162・173・175)、その中間で環形のもの(152・156・157・168・169・170など)があり、また法量はそれぞれ大(168)、中(152・153・154・157・169・170など)、小(155・171など)に分けることができる。口縁部や体部に煤の付着するもの(152・153・157・165・167・168・169・172))も多く認められた。

このほか陶磁器・土器以外では、ファイゴの羽口(218)、砥石(219～221)、硯(222)などの石製品、煙管(223・224)、鉄砲玉(225)、北宋銭などの銭貨(226～230)が出土した。

(3) 石火矢台遺構外出土遺物 (第178図 231～252 第179図 253～290 第180図 291～297 PL.51・52・59・61・62)

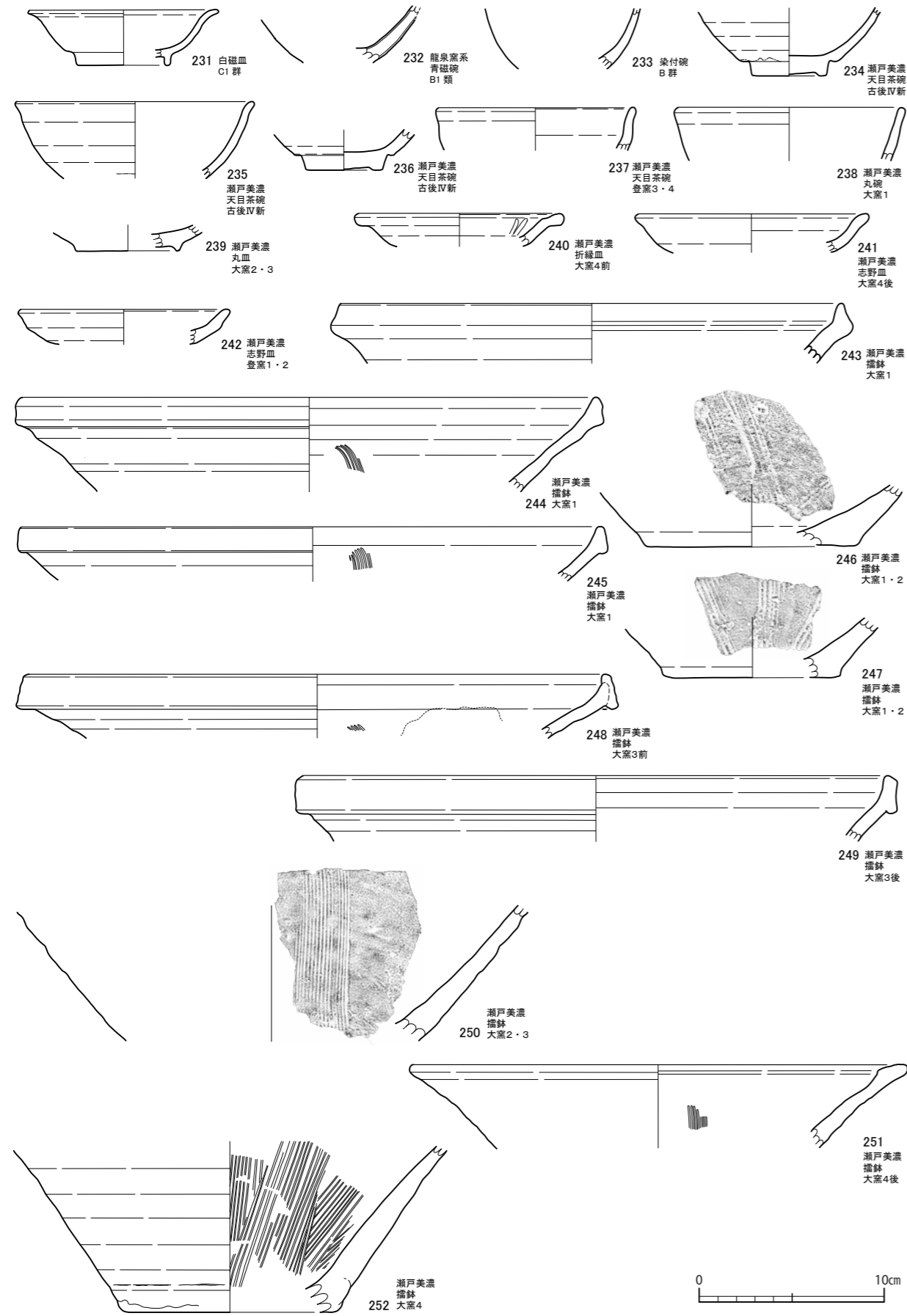
石火矢台では明確に遺構に伴う遺物は確認できなかったことから、すべて遺構外出土として扱う。貿易陶磁は4点出土しているが、13世紀代の龍泉窯系青磁碗B1類(232)が古いもので、白磁皿C1群(231)、染付碗B群(233)は15～16世紀に位置づけられる。

瀬戸美濃は古瀬戸後IV期から近世の登窯第2小期までの製品、43点出土している。天目茶碗は古瀬戸後IV新时期(234～236)、登窯第3・4段階(237)のものがある。丸碗(238)は大窯1段階に比定され、皿類(239～241)は大窯2～4段階である。登窯第1・2小期の志野皿(242)が出土している。播鉢は古瀬戸後IV新时期から大窯段階までのものが出土しているが、図示した243～252はすべて大窯段階である。このほか図示はしていないが、古瀬戸前期の四耳壺が出土していることは注目される。

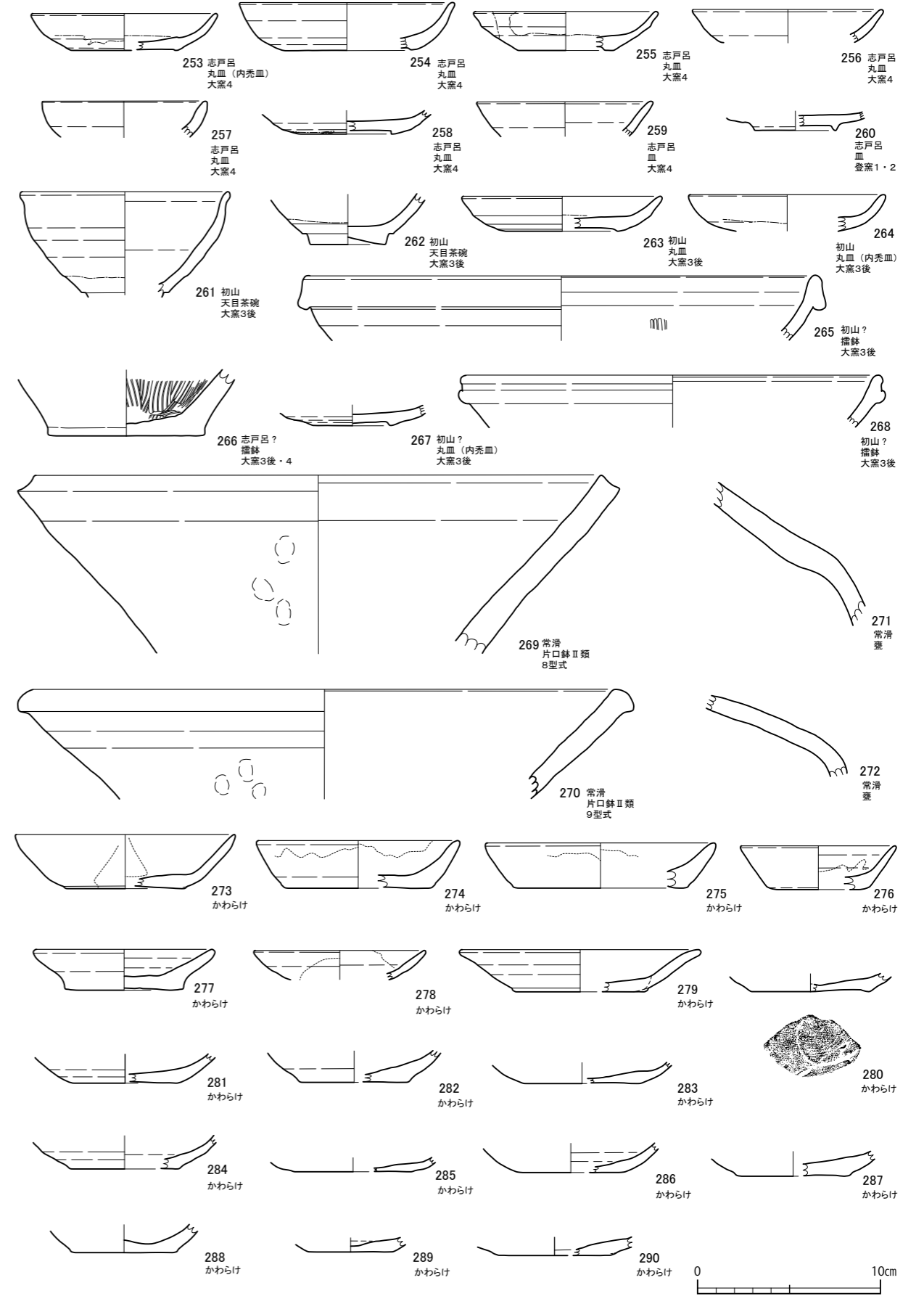
志戸呂は12点あり、皿類(253～260)が多く、260が登窯第1・22小期に比定されるほかは、すべて大窯4段階併行期のものがある。播鉢(266)は大窯3段階後半から4段階併行と思われる。初山は7点で、天目茶碗(261・262)、皿類(263・264・267)、播鉢(268)が出土している。すべて大窯3段階後半併行である。

常滑は片口鉢Ⅱ類(269・270)、甕(271・272)など12点出土しているが、時期がわかるものは14～15世紀の片口鉢Ⅱ類である。

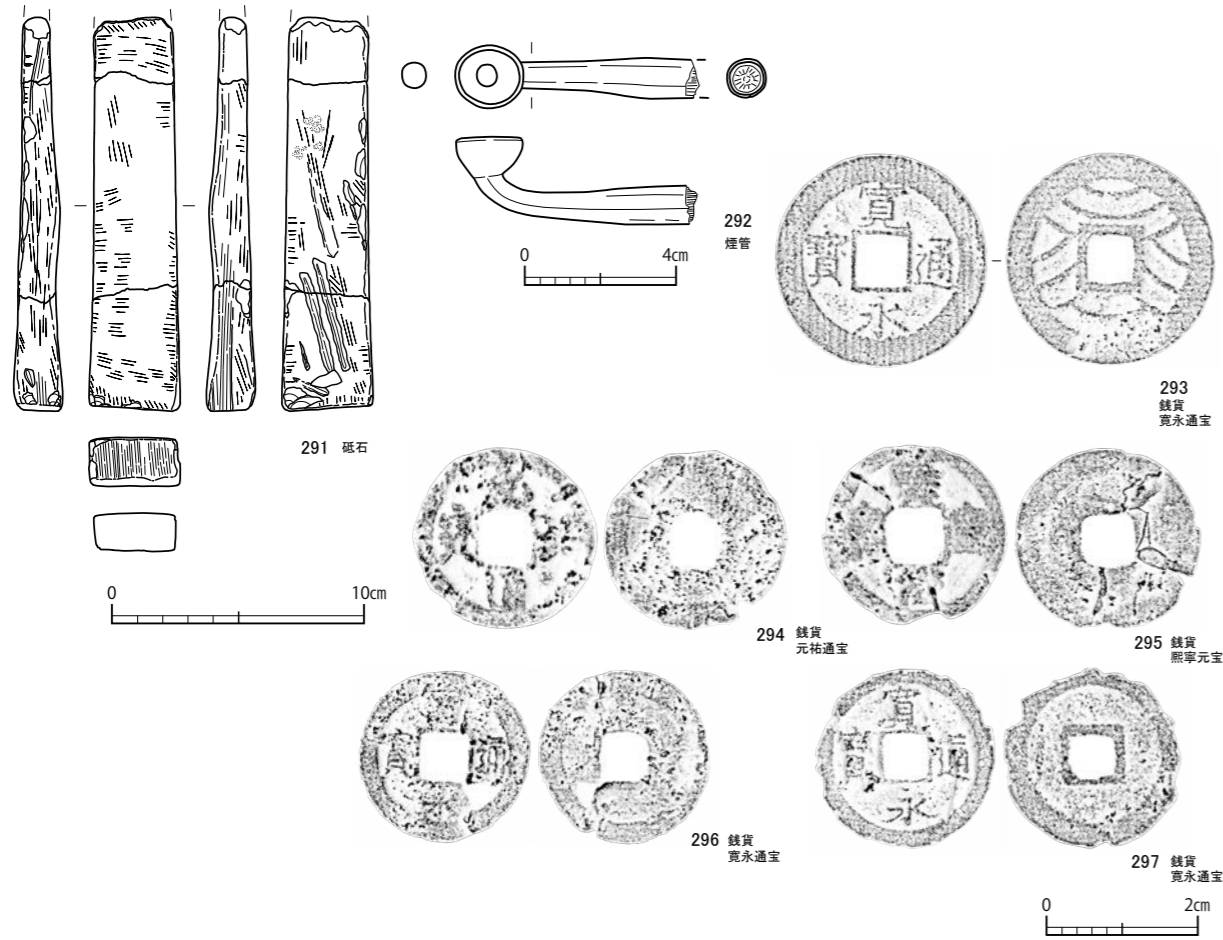
かわらけは多数出土しているが、破片が多く全体形状がわかるものは少ない。環状を呈すもの(273～277)と器高の低い皿状のもの(279)がある。このほか、砥石(291)、煙管(292)、北宋銭(294・



第178図 石火矢台遺構外出土遺物(1)



第179図 石火矢台遺構外出土遺物(2)



第180図 石火矢台遺構外出土遺物(3)

295)、寛永通宝(293・296・297)が出土している。

(4) 二ノ丸出土遺物

本丸三日月堀 (第181図298～322 第182図323～365 第183図366～427 第184図428～443 PL.52・53・54・60・62)

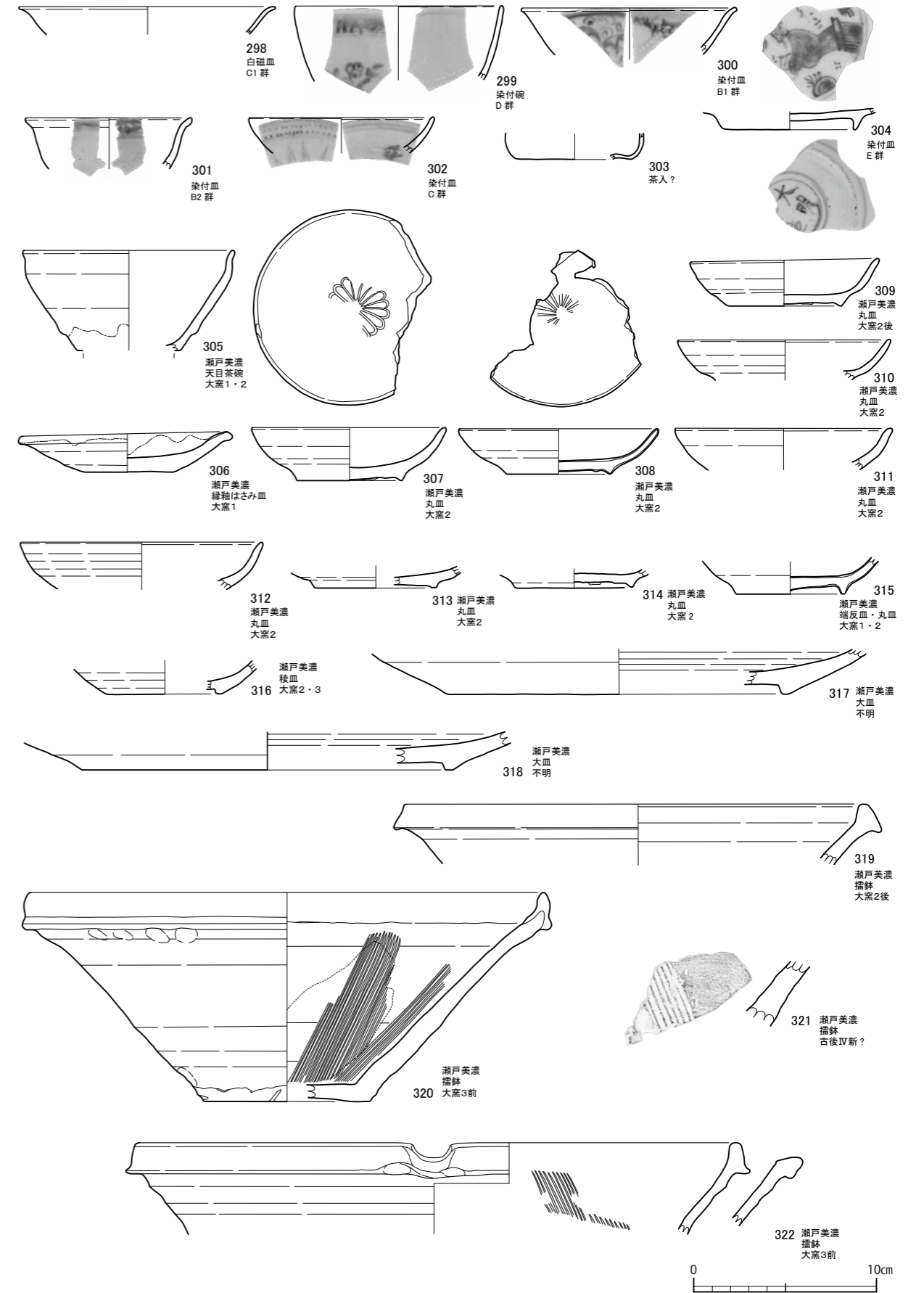
本丸三日月堀は、本来本丸の防御施設であるが、検出地点が城郭最終段階における二ノ丸であるため、本欄にて記載する。貿易陶磁・瀬戸美濃・常滑・渥美・かわらけなど多数の遺物が出土した。

貿易陶磁は11点出土したが、図示可能なものは白磁皿C1群(298)や染付碗D群(299)・皿B1群(300)、皿B2群(301)、皿C群(302)、皿E群(304)で、いずれも15世紀後半から16世紀代に位置づけられる。303は陶器の茶入である。

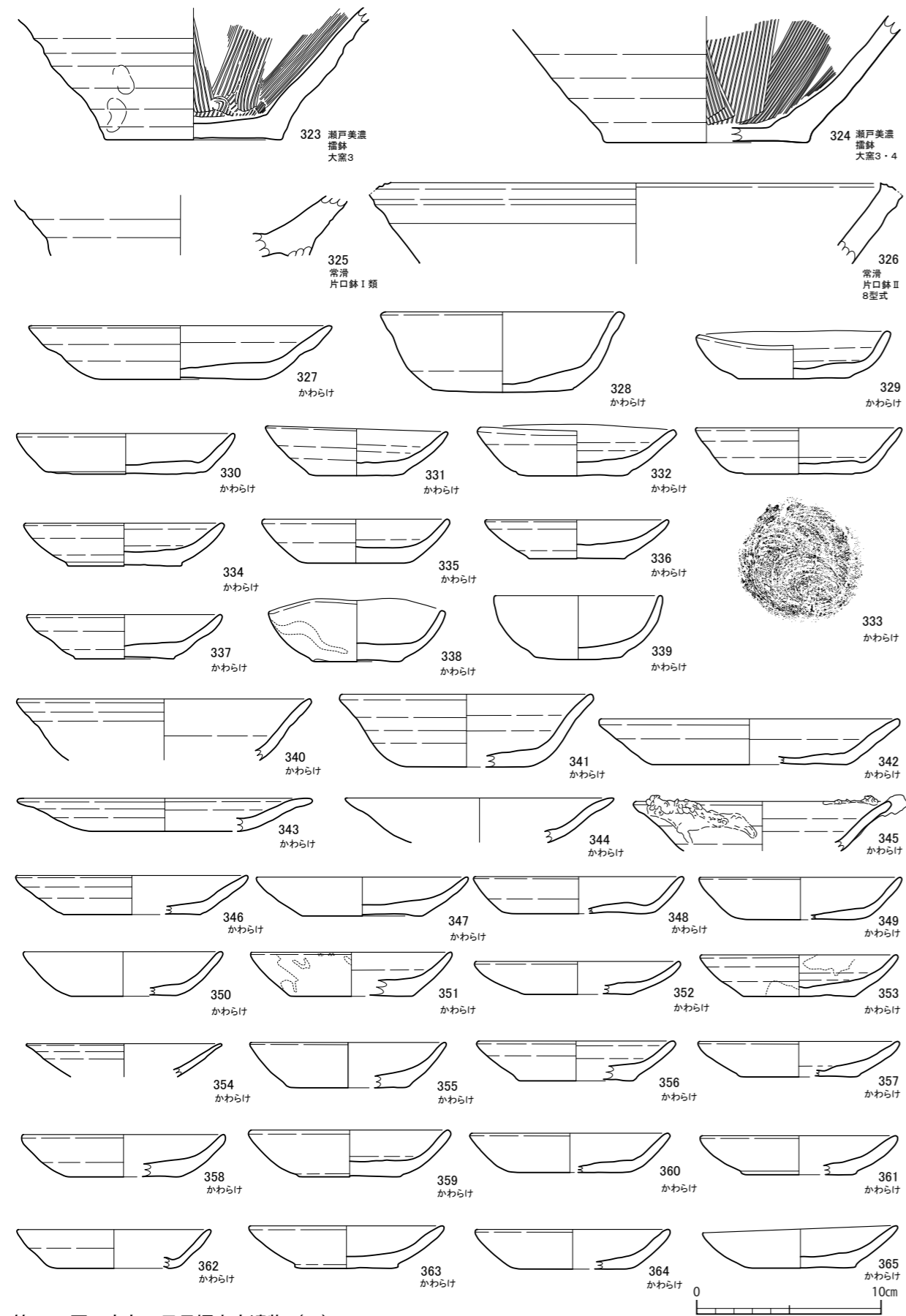
瀬戸美濃は古瀬戸後IV新期から大窯段階まで28点出土しているが、大窯1～3段階のものが多い。天目茶碗(305)は大窯1・2段階である。丸皿・縁釉はさみ皿などの皿類(306～316)は大窯1～2段階が主体である。317・318の大皿は大窯段階と思われるが詳細は不明である。播鉢(319～324)は大窯2～3段階のものが多いが、321は古瀬戸後IV新期の可能性がある。

常滑は、12～13世紀の片口鉢I類(325)、片口鉢II類(326)と甕の各1点が出土している。

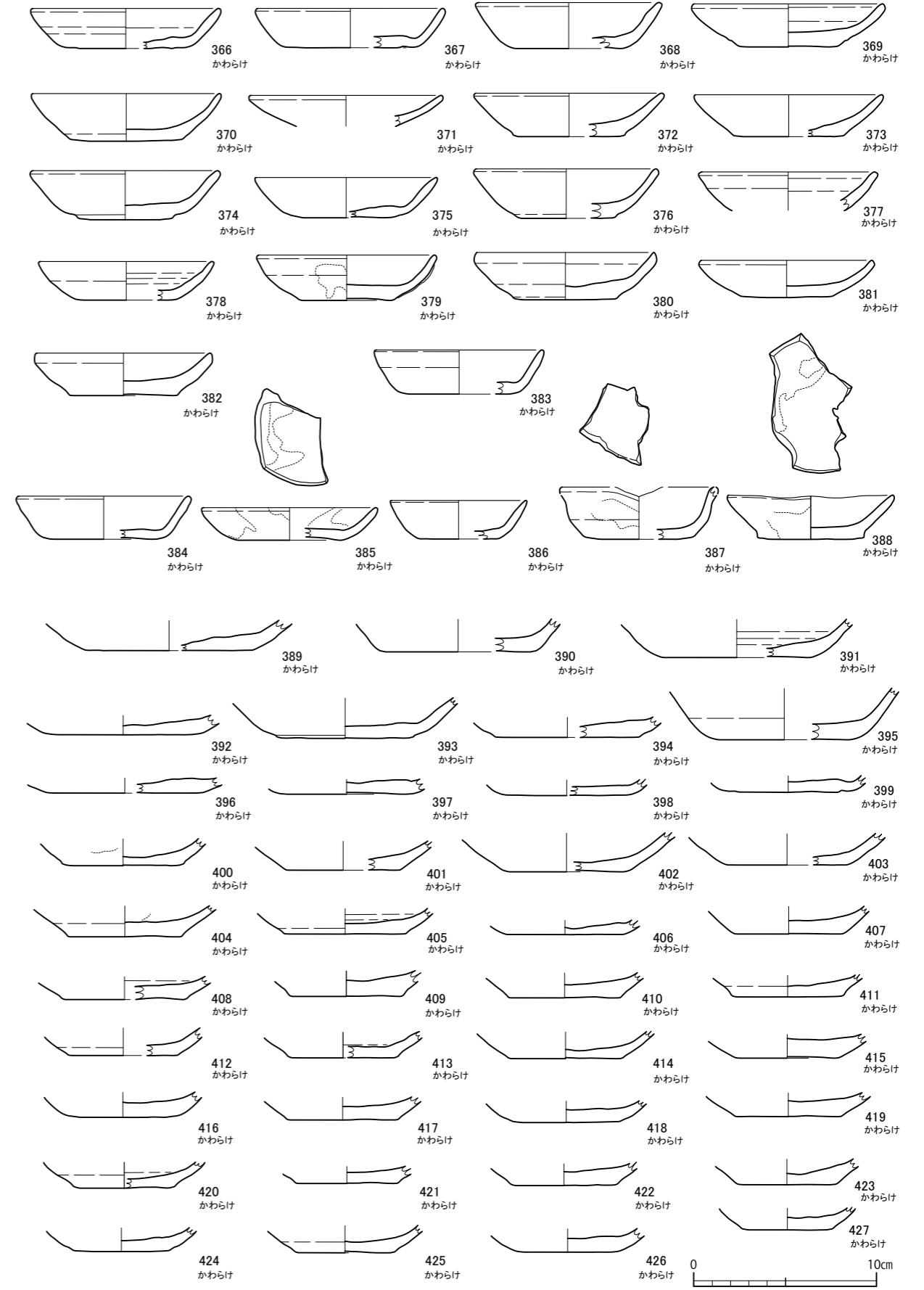
かわらけは多数出土しており、皿状や坏状など多様な器形・法量がみられる。皿状のものは大(327・342・343)・中(330・346～348)・小(385)、坏状のものは大(328)・中(331～337・359・363・369・370など)・小(386)と、それぞれ3法量が確認できるが、両者の中間的な器形もある。口縁部や体部に煤の付着するもの(338・351・353・385・387・388)も多く認められた。また、



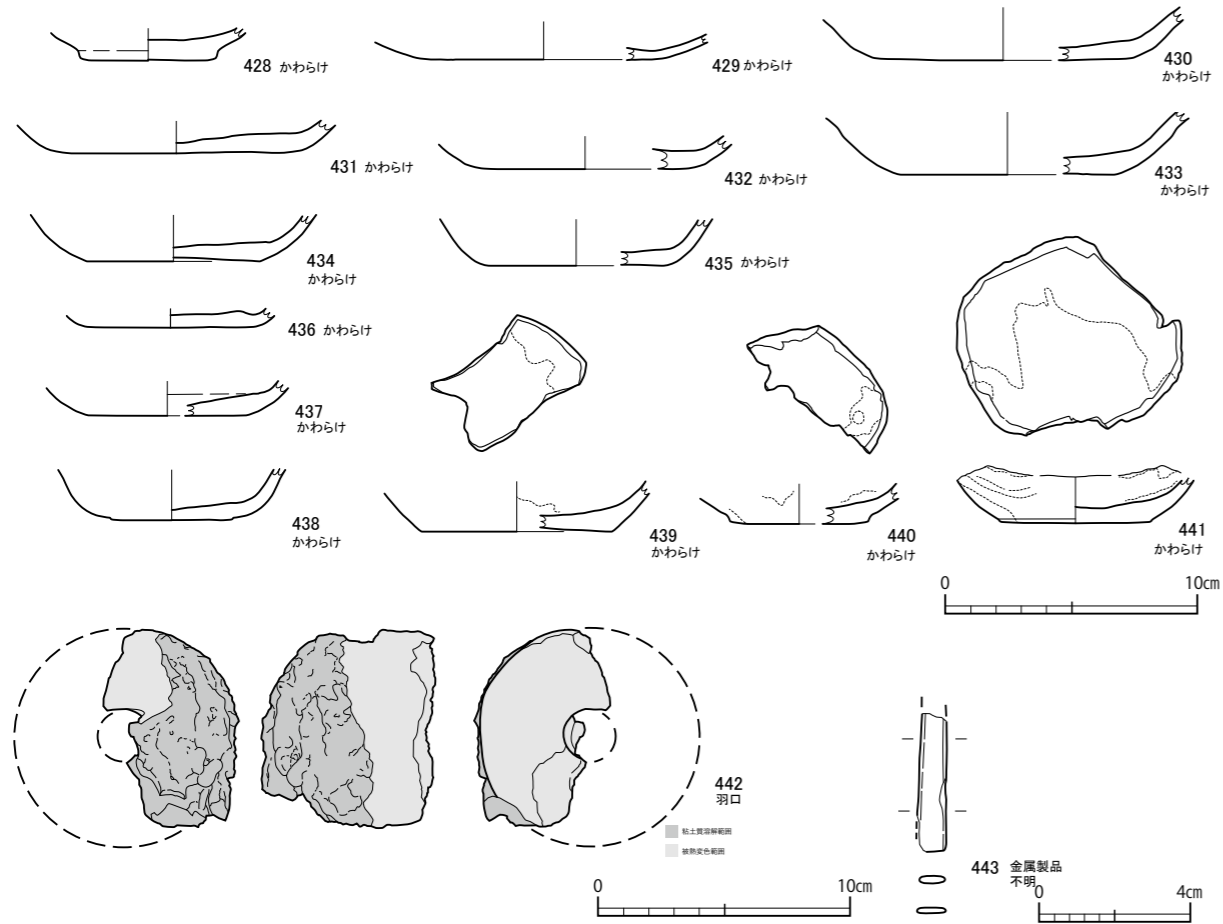
第181図 本丸三日月堀出土遺物(1)



第 182 図 本丸三日月堀出土遺物 (2)



第 183 図 本丸三日月堀出土遺物 (3)



第 184 図 本丸三日月堀出土遺物（4）

345 の口唇部から体部にかけて鉄滓が付着しており、小鍛冶等に使用したと考えられる。

このほか、フイゴの羽口（442）や不明鉄製品（443）が出土している。

遺構外（第 185 図 444 ~ 474 第 186 図 475 ~ 500 PL.54・59・61・62）

二ノ丸出土遺物のうち、遺構に伴わないものを第 185・186 図に示した。以下、種別ごとに概要を記す。

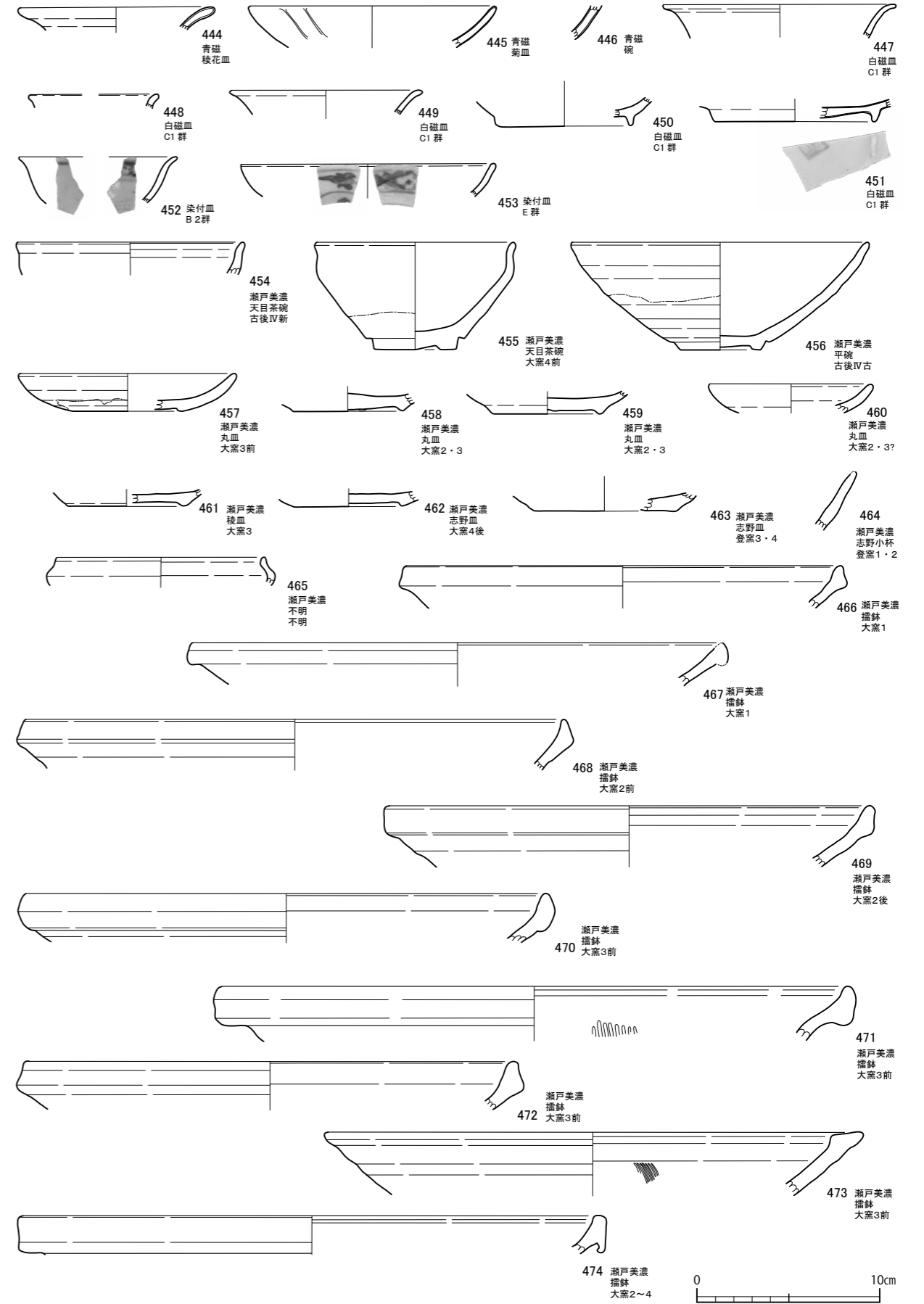
貿易陶磁は 10 点で、青磁の 15 ~ 16 世紀の稜花皿（444）、16 世紀中～後葉の菊皿（445）、時期不明の青磁碗（446）がある。白磁は皿 C1 群（447 ~ 451）、染付は皿 B2 群（452）、皿 E 群（453）が出土している。

瀬戸美濃は古瀬戸後IV古期から近世の登窯第 3 小期段階まで長期間にわたり、計 75 点が出土した。天目茶碗は古瀬戸後IV新期（454）と大窯 4 段階前半（455）がある。456 の平碗は古瀬戸後IV古期に比定され、二ノ丸の瀬戸美濃では最も古いものである。丸皿・志野皿などの皿類（457 ~ 463）は大窯 2 ~ 3 段階が多いが、463 の志野皿は登窯第 3 ~ 4 小期で最も新しい。播鉢（466 ~ 480）は大窯 1 ~ 4 段階のものがすべて出土している。

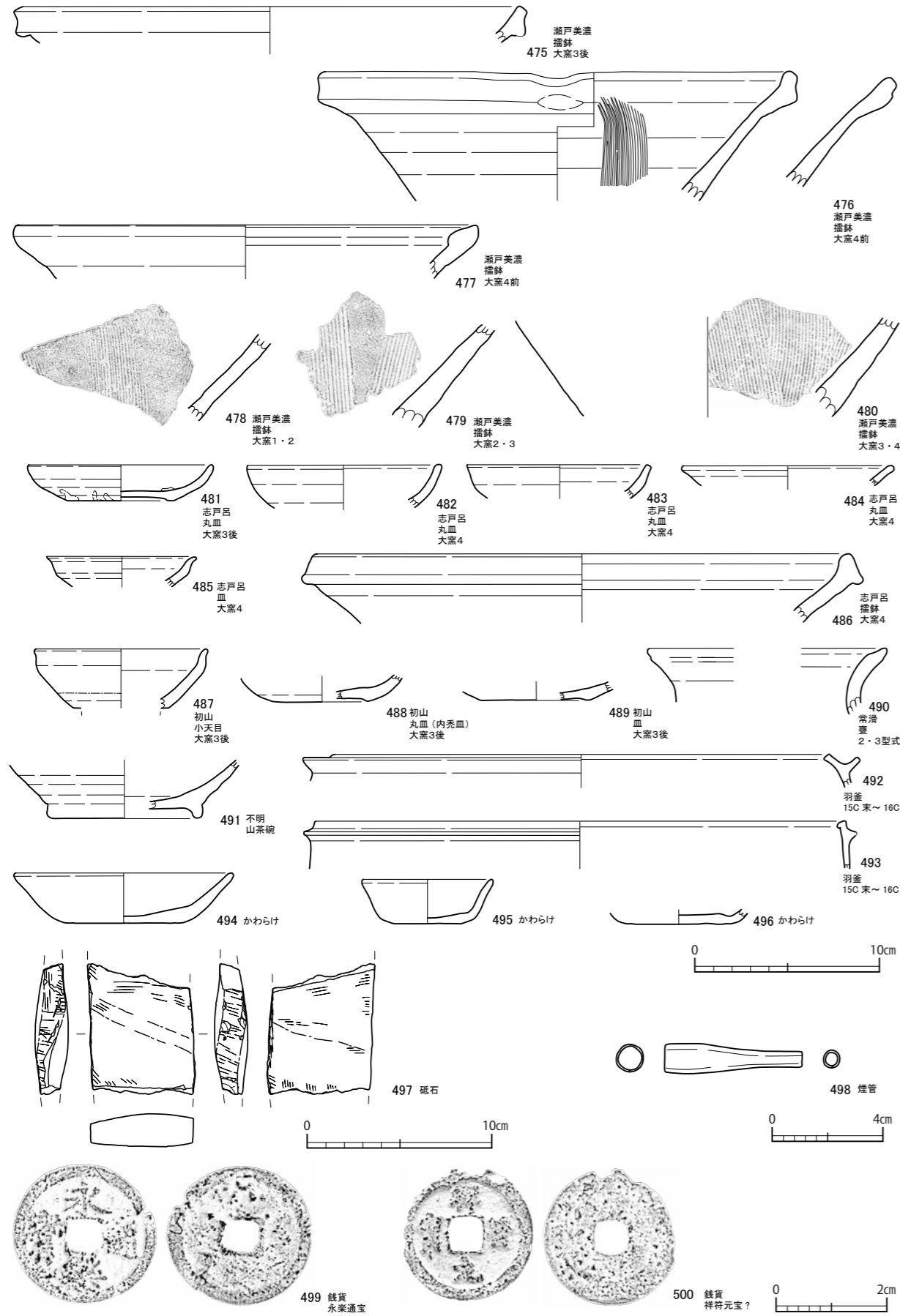
志戸呂は 15 点出土し、丸皿などの皿類（481 ~ 485）、播鉢（486）があり、大窯 3 段階後半から 4 段階併行である。初山は小天目茶碗（487）、丸皿等（488・489）など、計 4 点出土している。

常滑は甕・壺など 6 点出土しているが、図示した 490 は 12 世紀代で、築城以前の遺物である。491 の山茶碗も 13 世紀代に遡る。

土師質では、15 世紀末から 16 世紀代の羽釜（492・493）、坏形のかわらけの大小（494・495）などがある。このほか、砥石（497）や中国の銭貨（499・500）が出土した。



第 185 図 二ノ丸遺構外出土遺物（1）



第186図 ニノ丸遺構外出土遺物(2)

(5) ニノ丸虎口 (第187図501~506 第188図507~525 PL.55・59・61)

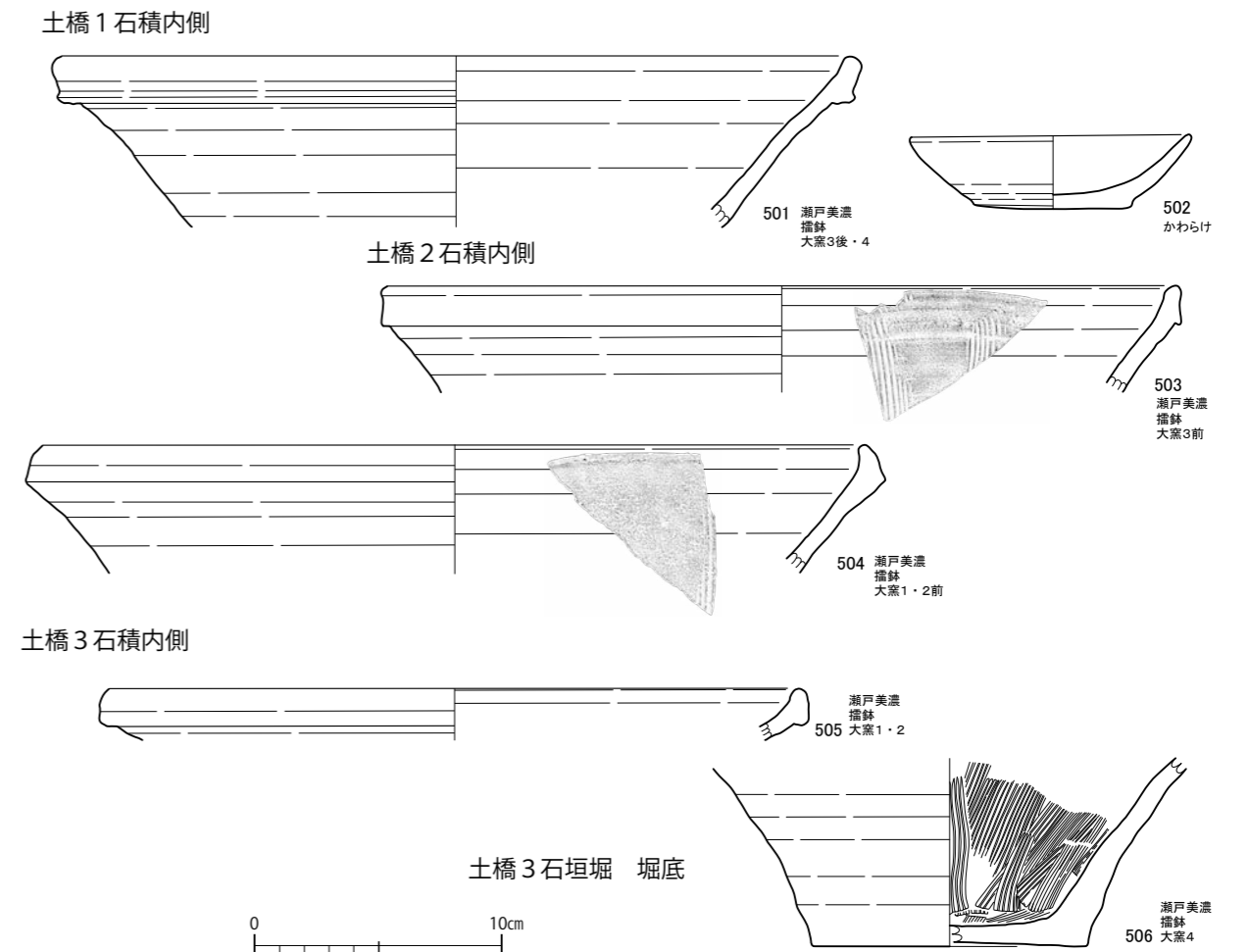
ニノ丸虎口の土橋付近からは瀬戸美濃播鉢とかかわらけ(502)が出土している。このうち、土橋1の石積内側出土の播鉢は大窯3・4段階(501)、土橋2の石積内側出土の播鉢は大窯3段階前半(503)と大窯1・2段階(504)、土橋3出土の播鉢(505)は大窯1・2段階、土橋3段階の石垣堀堀底出土の播鉢(506)は大窯4段階である。

ニノ丸虎口の土橋構築時期は、土橋1で大窯第4段階、古く見ても大窯第3段階後半に比定され、最終段階の土橋3の石垣堀の堀底から出土した播鉢の底部は大窯第4段階に比定される。したがって、土橋1から土橋3の時間幅はそれほど長期でなく、4半世紀の中で2度の改修があったことになる。

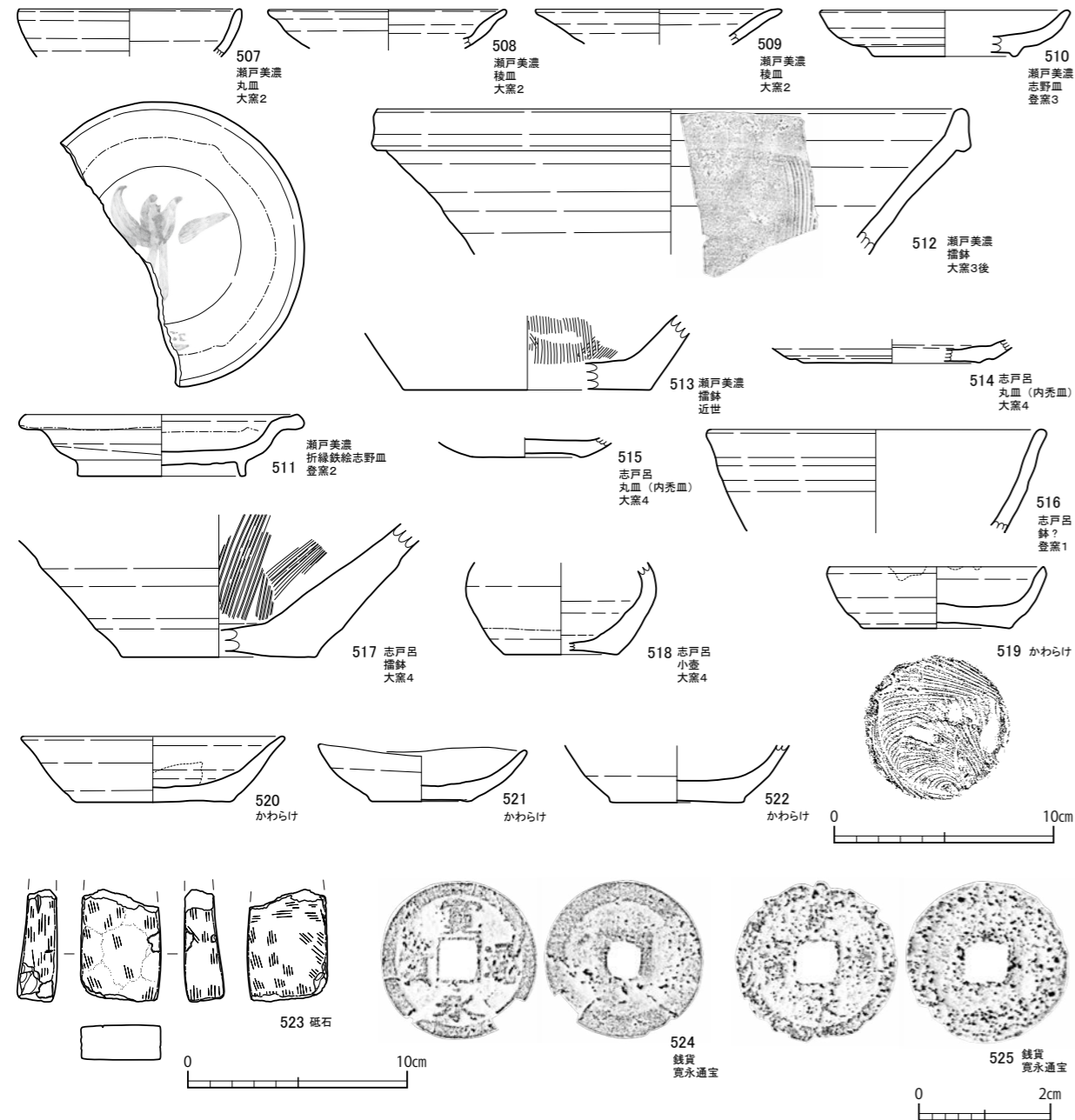
ニノ丸空堀では、瀬戸美濃・志戸呂・初山・常滑などの陶器類やかかわらけが出土している。瀬戸美濃は古瀬戸後期から登窯第3小期まで26点出土している。皿類が多く、大窯2段階の丸皿(507)、稜皿(508・509)や登窯第3小期の志野皿(510・511)などがある。播鉢は大窯3段階後半のもの(512)のほか、大窯1段階や近世のもの(513)が出土している。

志戸呂は7点で、皿(514・515)、鉢類(516)、播鉢(517)、小壺(518)などが出土しており、516の鉢が近世のほかはすべて大窯4段階併行期のものである。このほか、図示はできなかったが、初山4点、常滑甕・壺5点がある。

図示したかわらけ(519~522)はすべて坏形である。このほか、砥石(523)、寛永通宝(524・525)が出土した。



第187図 ニノ丸虎口出土遺物(1)



第188図 ニノ丸虎口出土遺物(2)

(6) 三ノ丸出土遺物

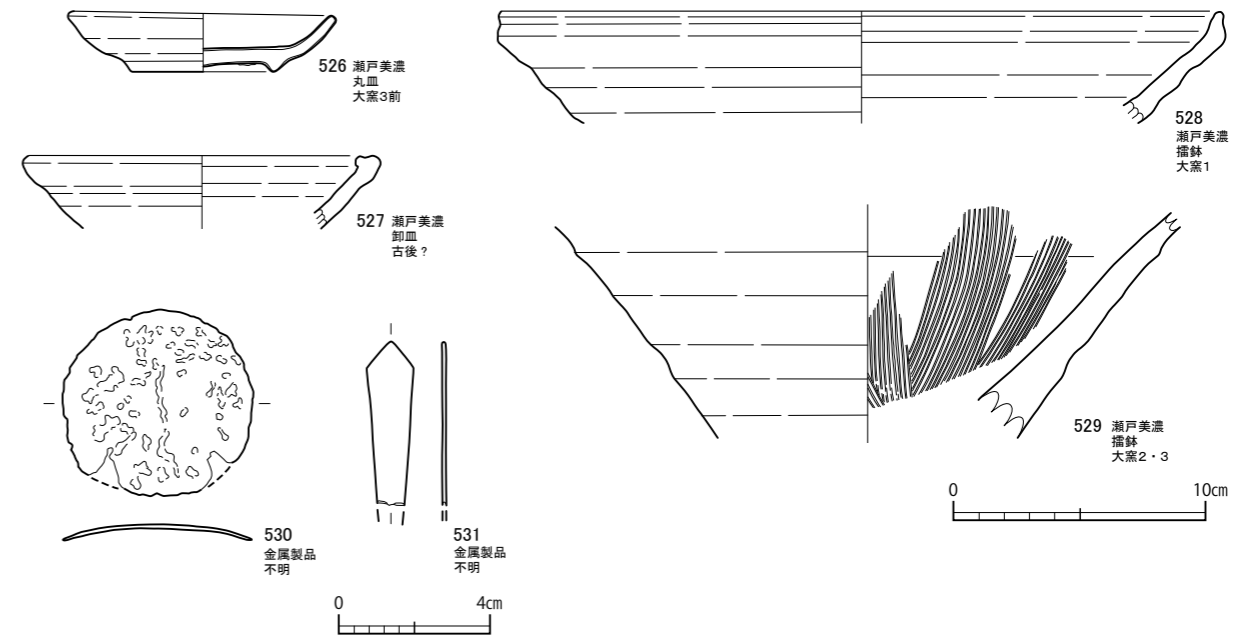
三ノ丸 北西部 (第189図 526～531 PL.55・62)

三ノ丸では近現代に大幅な土地改変が行われており、いずれの地点においても中世の遺物は少ない。北西地点では貿易陶磁はなく、瀬戸美濃は大窯段階を中心に11点出土している。大窯3段階前半の丸皿(526)、1～3段階の播鉢(528・529)などがあるが、古瀬戸後期の卸皿(527)が出土していることは注目される。このほか、大窯4段階併行の志戸呂丸皿や常滑・渥美の甕も出土しているが、破片資料のため図示はできなかった。

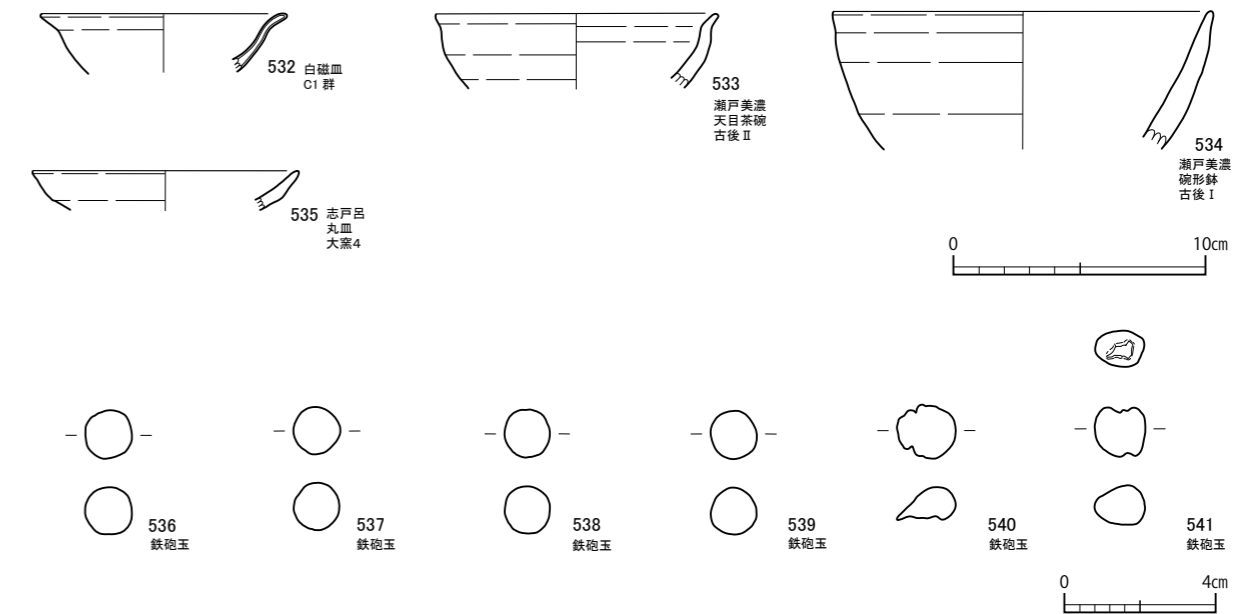
金属製品では円盤状(530)、板状(531)のものがあるが、種別は不明である。

三ノ丸 北東部 (第190図 532～541 PL.55・61)

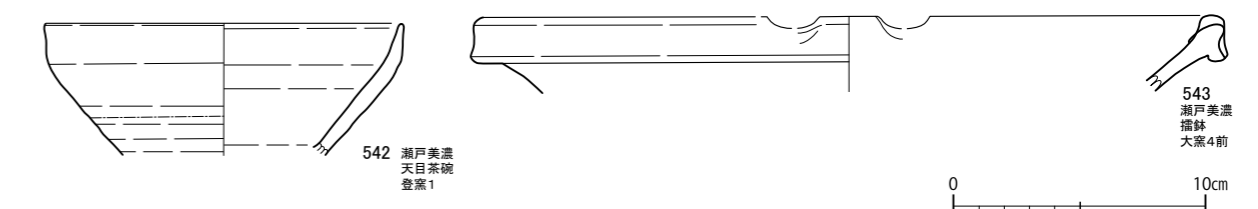
三ノ丸北東部において貿易陶磁は白磁皿C1群(532)1点のみ出土した。瀬戸美濃は大窯段階のものではなく、古瀬戸後期の製品が4点出土している。古瀬戸後II期の天目茶



第189図 三ノ丸北西部出土遺物



第190図 三ノ丸北東部出土遺物



第191図 三ノ丸南部4号溝SD4出土遺物

碗(533)、後I期の碗形鉢(534)など、比較的古いものがみられる。志戸呂は大窯4段階の丸皿(535)が1点ある。また、図示はしていないが、常滑の甕2点や渥美の甕1点などが出土している。

また本地点では鉄砲玉(536～541)が東外堀周辺にてまとまって出土した。

三ノ丸 南部

遺構の記載では南西部と南東部と分けたが、遺物では南部として一括で記載する。

4号溝 SD4 (第191図542・543 PL.55)

SD4の石組暗渠部からは瀬戸美濃登窯第1小期の天目茶碗(542)、SD4の開渠部付近からは瀬戸美濃大窯4段階前半の播鉢片(543)が出土している。

版築遺構(第192図544～547 PL.55)

版築遺構から染付碗C群(544)、産地不明であるが、古瀬戸後IV期ごろに比定される可能性のある壺の底部(545)、かわらけ(546・547)が出土している。547のかわらけは歪みが大きく、内面には多量の煤が付着している。

5号溝 SD5 (第193図548～552 PL.56)

SD5からは羽釜(548)のほか、小片のため図化しなかった古瀬戸中I・II期の仏花瓶や大窯3段階の瀬戸美濃稜皿がある。またSD5の北西部からはかわらけが4枚(549～552)、焼土と炭化物を伴って出土した。いずれも坏形を呈する。

6号溝 SD6 (第194図553～559 PL.56)

SD5と重複するSD6からは、大窯4段階の志戸呂播鉢(553)、大窯第3段階後半の初山丸碗(554・555 接合しなかったが同一個体か)、常滑の玉縁口縁壺(556)、常滑の甕(557)、かわらけ(558・559)が出土している。

PT群(第195図560・561 PL.55)

三ノ丸南西部では多数のピットが検出され、このうちPT12から大窯1段階の瀬戸美濃丸皿(560)、PT53から大窯1・2段階の瀬戸美濃丸皿か端反皿(561)が出土している。

三ノ丸南部 遺構外(第196図562～582 第197図583～600 PL.55・56・59・60・61・62)

貿易陶磁は白磁皿C1群(562)1点が出土している。

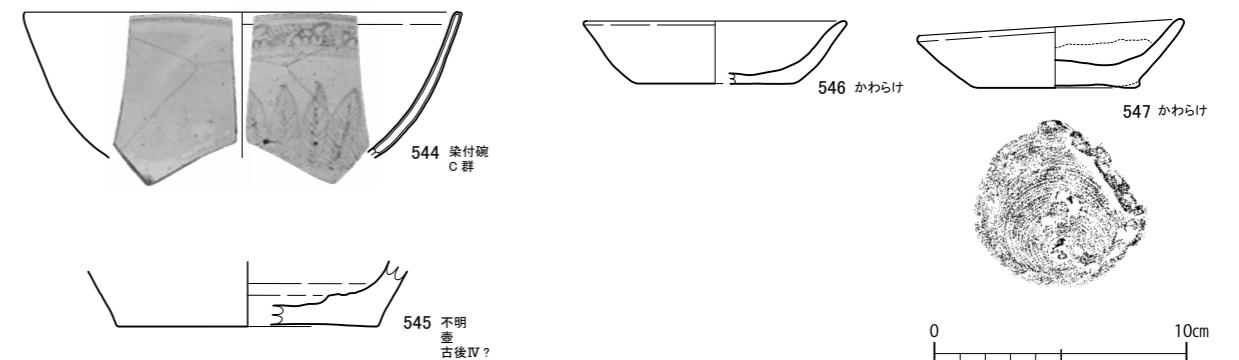
瀬戸美濃は合子(569)など古手のものから、18世紀末の登窯第8小期までの長期間にわたる製品が計45点出土している。天目茶碗は大窯4段階(563)や登窯第1小期(564・565)がある。皿類は大窯1段階の縁釉はさみ皿(570)、2段階の丸皿(571・572)などのほか、登窯第3・4小期の志野皿(573)、菊皿(574)もある。575は大窯段階の皿か碗と思われるが詳細は不明である。播鉢は8点あるが、大窯2～3段階のもの(576～578)が主体である。

志戸呂は皿類や播鉢(579)などが計9点出土している。すべて大窯3段階後半～4段階のものである。初山も天目茶碗、丸碗(580)、播鉢(581)など4点出土した。このほか、常滑が甕(582)など17点、渥美の甕1点などがある。

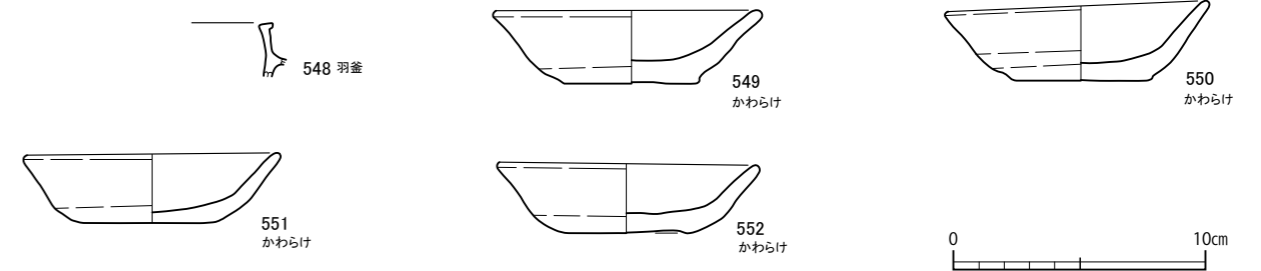
土師質では、かわらけ(583～589)、瓦質の内耳鍋(590)などがある。584は口径17cmを超える大型の皿形を呈すものである。搬入品の可能性がある。

石製品は、滑石製鍋(591)や砥石(592～595)がある。滑石製鍋は、東国においては12～13世紀に流通するものであり、渥美甕や古瀬戸中期の製品の存在を考慮すれば、本地点は12世紀から戦国時代に至るまで継続的に遺跡が営まれていたと考えられる。

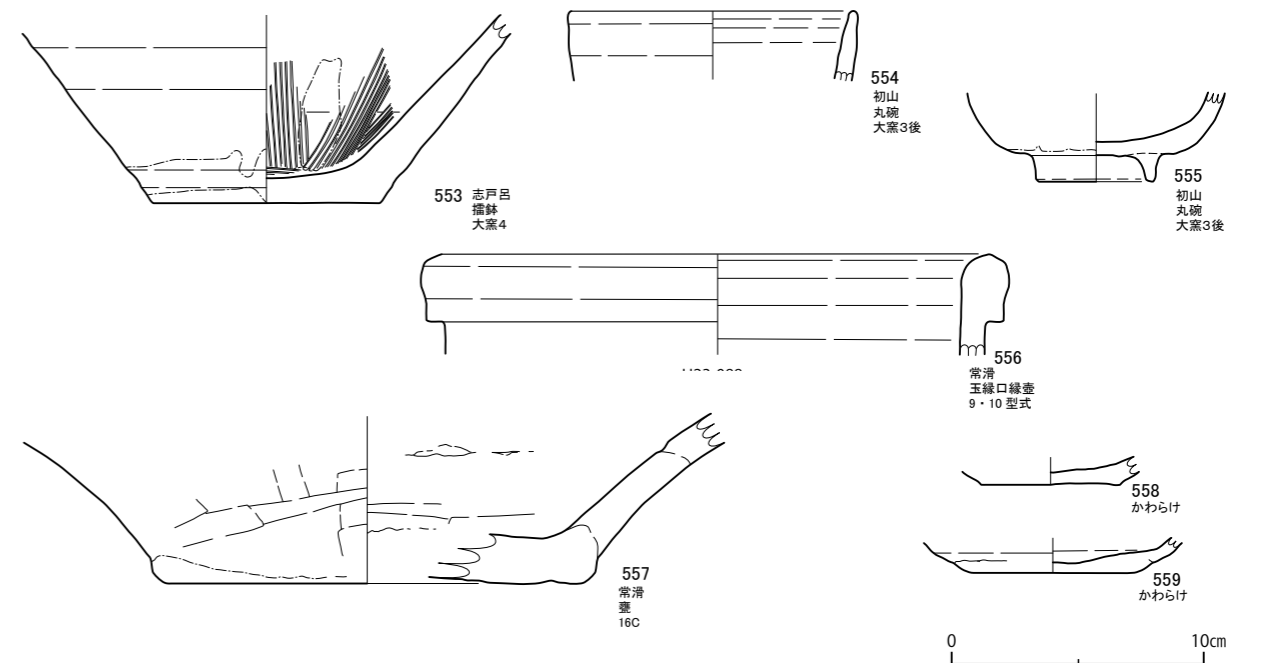
このほか、近世の煙管(596)、寛永通宝(597・598)や、杭(599)、下駄(600)などの木製品も出土している。599・600は三ノ丸南東部外堀確認トレンチからの出土である。



第192図 三ノ丸南部版築遺構出土遺物



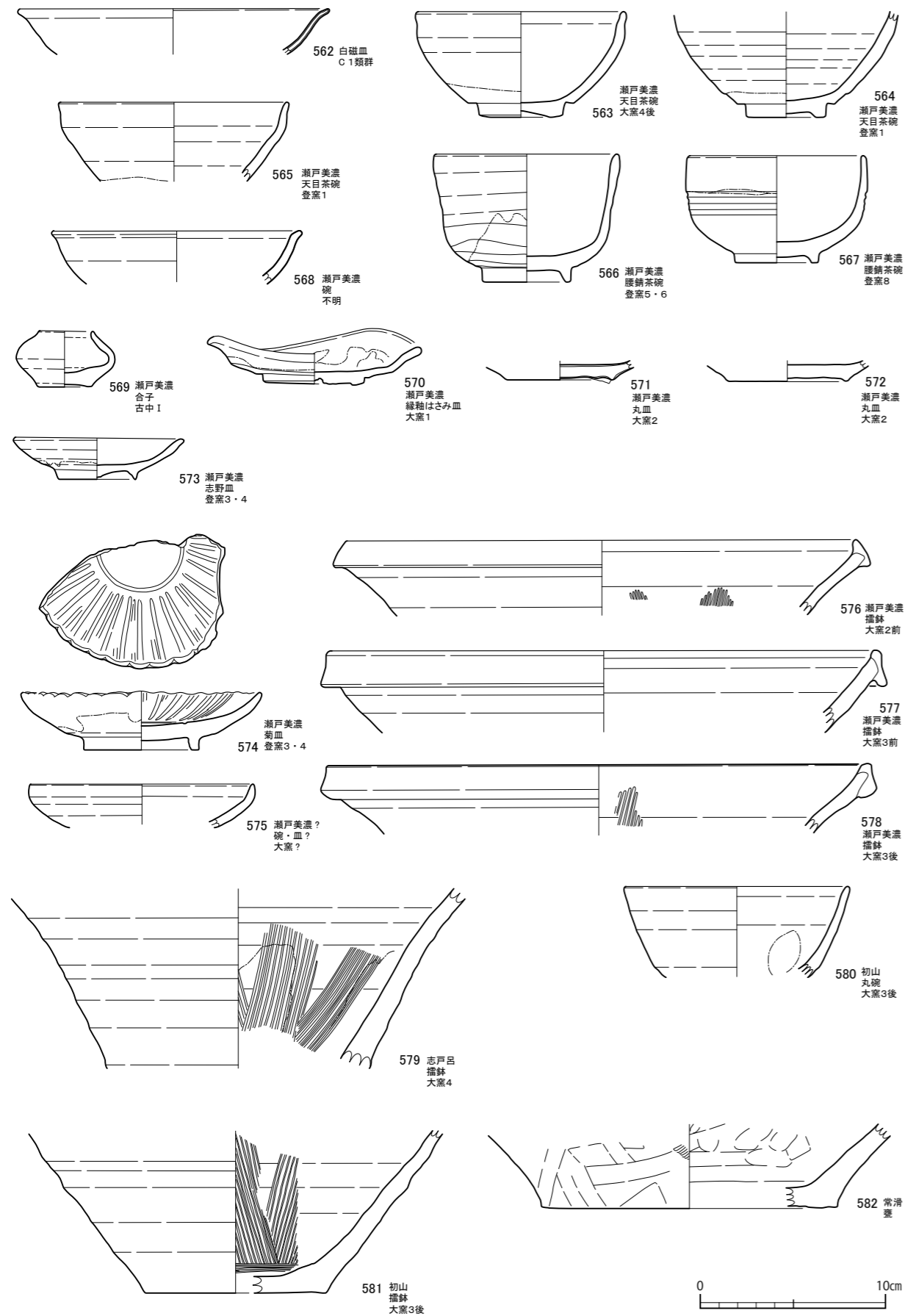
第193図 三ノ丸南部5号溝SD5出土遺物



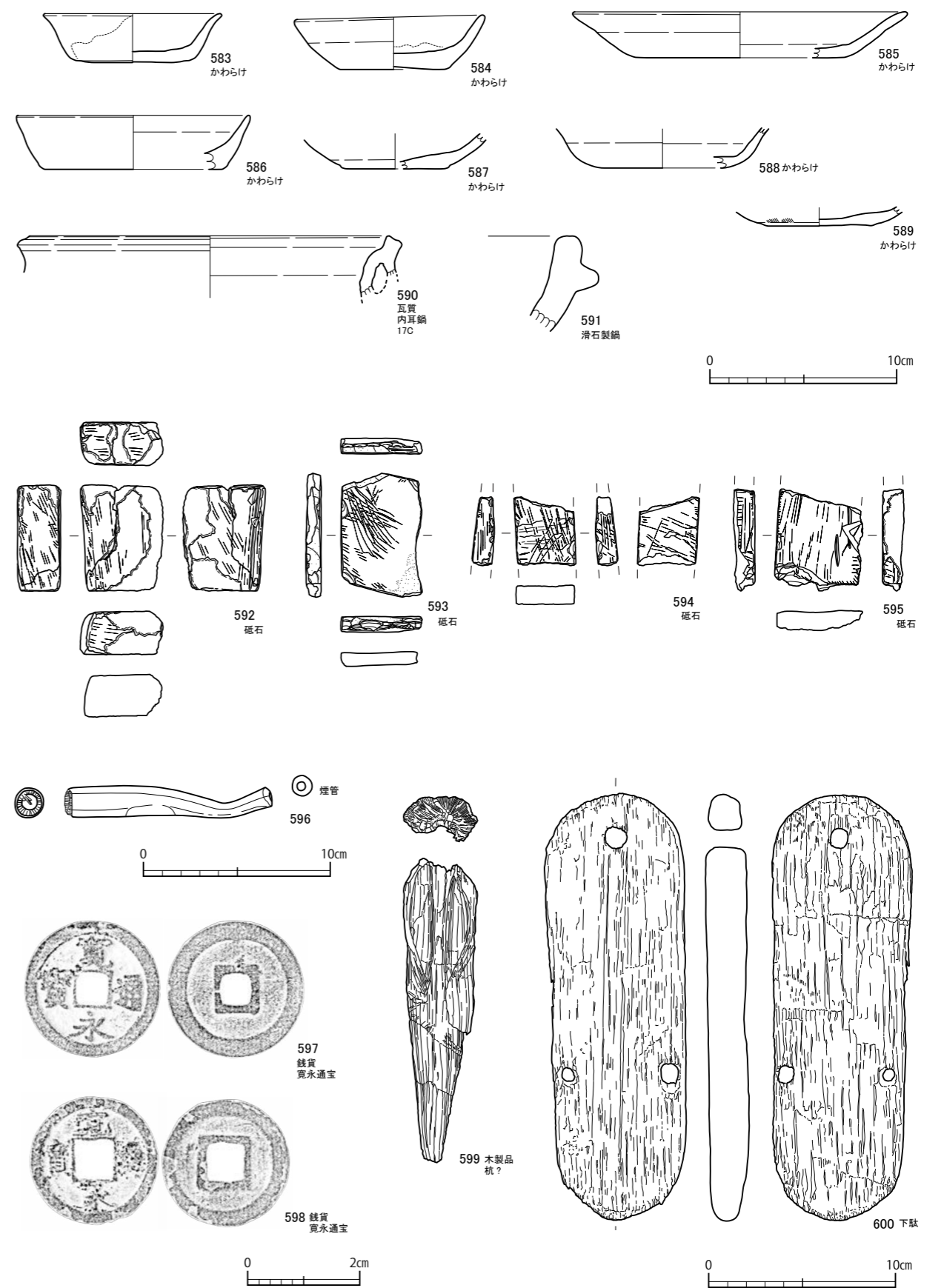
第194図 三ノ丸南部6号溝SD6出土遺物



第195図 三ノ丸南部PT群出土遺物



第196図 三ノ丸南部遺構外出土遺物(1)



第197図 三ノ丸南部遺構外出土遺物(2)

西大手周辺出土遺物 (第198図 601～613 PL.56・61・62)

貿易陶磁は染付皿が2点出土している。

瀬戸美濃は古瀬戸後Ⅳ期の天目茶碗(601)、卸皿と、大窯4段階～登窯第1小期の志野皿(602～604)など、計6点である。このほか、小破片のため図示はしていないが、大窯4段階併行の志戸呂の耳付水注や、常滑甕が出土している。

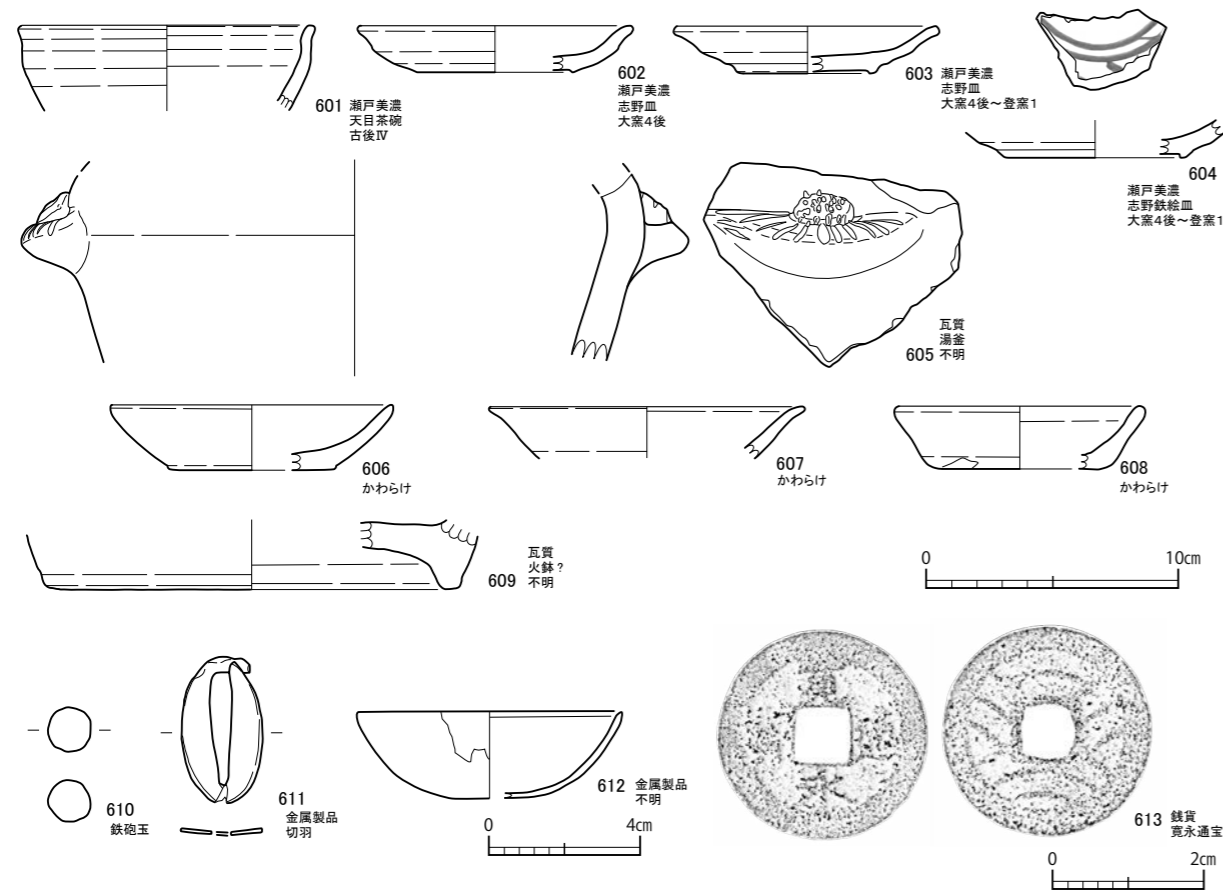
土師質では、湯釜(605)、かわらけ(606～608)、瓦質火鉢(609)などがある。金属製品は鉄砲玉(610)、切羽(611)、丸底の器(612)があり、寛永通宝(613)も1点ある。

(7) 大空堀出土遺物 (第199図 614～617 PL.57)

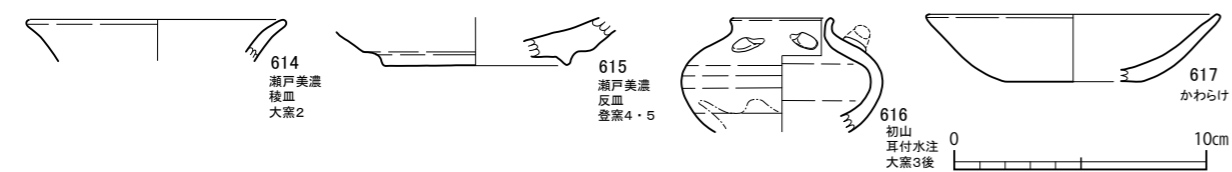
大空堀に設定したトレンチからは、中世から近代までの遺物が出土している。このうち戦国期前後の遺物を図示した。貿易陶磁なく、瀬戸美濃、初山が出土している。

瀬戸美濃は古瀬戸後Ⅰ・Ⅱ期の縁釉小皿が1点、大窯2段階の稜皿(614)、播鉢などがあるが、登窯段階の反皿(615)など近世のものも多く、計9点出土した。このほか、初山の耳付水注(616)、常滑の片口鉢・甕も出土している。

土師質では、かわらけ(617)のみであり、出土数は多くはない。



第198図 三ノ丸西大手周辺遺構外出土遺物



第199図 大空堀出土遺物

(8) 北曲輪出土遺物

第2調査区 北曲輪空堀1 (第200図 618～629 PL.57・61)

北曲輪空堀1からは近代までの遺物が出土していることから、明治時代まで完全には埋まっていなかったと考えられるが、中世と近世遺物を図示した。

貿易陶磁は青磁碗、白磁皿B群(620)、染付漳州窯系大皿(618)など4点出土している。619は青磁大皿か肥前磁器が判断できなかった。

瀬戸美濃は古瀬戸後Ⅲ・Ⅳ古期の小天目茶碗(621)ほか平碗や播鉢など古瀬戸製品もあるが、主体となるのは大窯～登窯段階で、計30点出土している。大窯段階では香炉(625)や小杯(626)、登窯段階では志野皿(622～624)などがある。このほか、小破片のため図示はしていないが、大窯段階の志戸呂・初山製品も出土している。常滑は片口鉢Ⅰ類、甕(627)など10点であり、中世前半の渥美甕も2点出土している。

金属製品は鉄砲玉(628)、北宋銭(629)がある。

第3調査区 SK・SX群 (第201図 630・631 PL.57・62)

北曲輪で検出された多量の土坑には、遺物がほとんど出土しなかった。このうちSK3からは、登窯第4・5小期の端反皿(630)、SX7からは貴金具と形状が似る金属製品(631)が出土したのみである。

第6調査区 北曲輪空堀2・3 (第202図 632～636 PL.57)

平成29年度に調査した北曲輪空堀2においては覆土中位から下位にかけて陶磁器が集中的に出土した。貿易陶磁は染付皿E群(632)1点のみの出土である。

瀬戸美濃は古瀬戸後Ⅱ期の平碗、古瀬戸後Ⅲ・Ⅳ古期の小鉢(635)、大窯2・3段階の皿(633)、大窯1段階の播鉢(634)などが出土しており、年代の下限大窯2段階までであり、比較的古手の製品が主体である。ただし、大窯3段階後半～4段階の志戸呂徳利が1点覆土上層から出土している。登窯段階の製品は出土していない。

常滑は13世紀末の甕2点が出土した。また空堀3の岩盤屑層から常滑甕(636)が1点のみ出土した。

第7調査区 造成土1 (第203図 637～645 PL.57)

平成29・30年度の調査であったため、十分な資料整理の時間が取れていない調査区である。そのため、図化できていない遺物もあるが、造成土1からかわらけが大量に出土している。このうち637～645の9点を図示した。また造成土から掘り込まれるFP1からも完形のかわらけが出土している(PL.42)。

北曲輪遺構外 (第204図 646～655 第205図 656～687 第206図 688～709 第207図 710～728 第208図 729～746 PL.57・58・59・60・61・62)

以下、空堀1と空堀2の間の曲輪中央部(第3調査区)にて出土したものを一括で報告する。

ここでは瀬戸美濃、常滑、渥美が出土している。

瀬戸美濃は古瀬戸中期の卸皿(647)、器種不明(648)、折縁深皿などが出土していることが注目される。古瀬戸後期、大窯段階、登窯段階も一定量あり、長期間にわたる製品、計22点を確認した。大窯段階では丸皿(646)、播鉢(649)、徳利(650～652)などがあり、登窯段階も志野皿や徳利などがみられる。

常滑は甕、片口鉢Ⅰ類(653)、片口鉢Ⅱ類(654)など13点、渥美甕も2点出土している。これらも12～13世紀まで遡る製品である。

土師質では、かわらけ(655)のみである。また砥石(656・657)や北宋銭(658)も出土した。

続いて、その他の調査区で出土したものを一括で報告する。

貿易陶磁は白磁皿C1群(660～662)、染付皿E群か(663)、東南アジア産陶器など15～16世紀のものを中心に9点が出土している。青磁碗B1類(659)は13世紀まで遡るもので、後述する瀬戸美濃古瀬戸前・中期の製品や常滑、渥美の出土状況もあわせ、中世前半の遺物が一定量認められる。

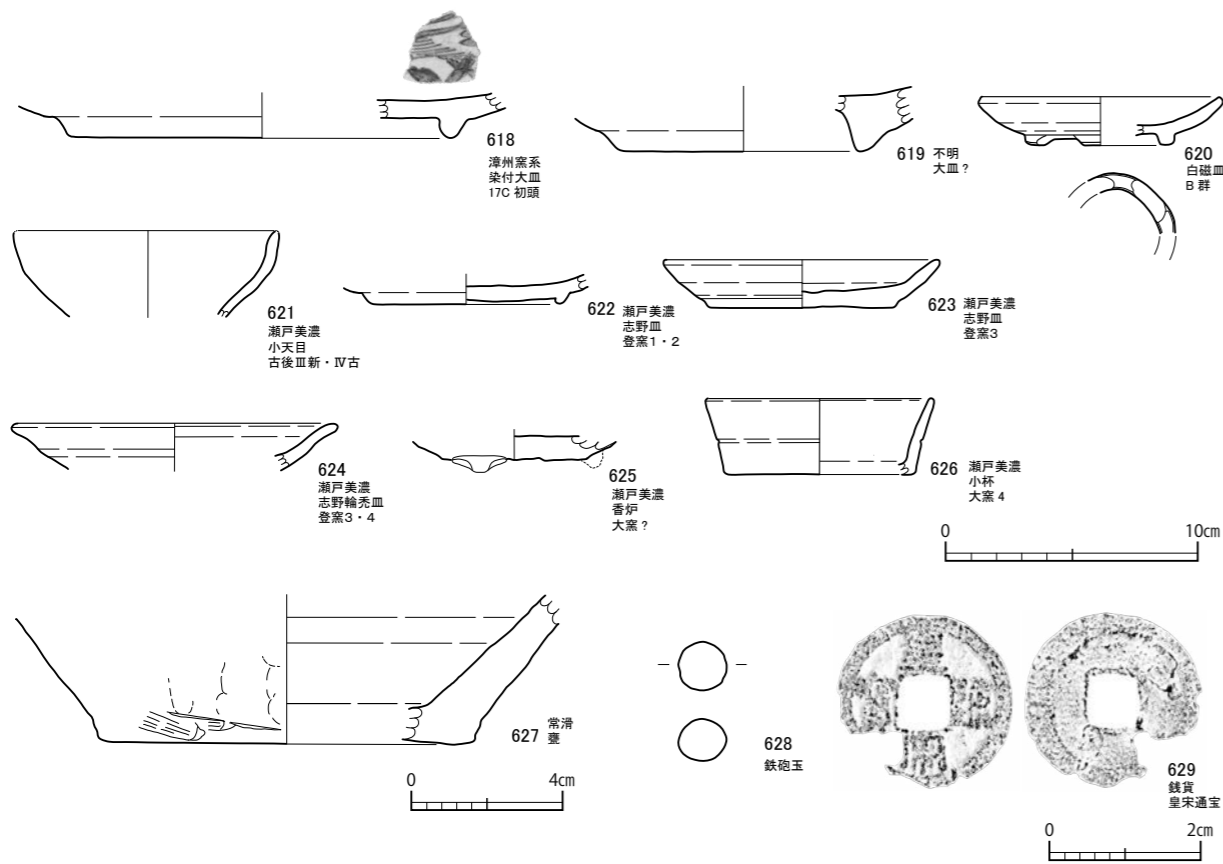
瀬戸美濃は興国寺跡の曲輪中で最も多く出土しており、計 228 点である。古瀬戸前・中期の製品は
卸皿 (685)、折縁深皿 (686)、鉢 (697)、入子 (699)、花瓶 (701)、などがある。古瀬戸後IV期から
徐々に出土量が増加し、登窯段階の遺物が最も多い。播鉢 (687～696) は古瀬戸後IV新期から登
窯第 1 小期まで出土しているが、大窯 2～3 段階が最も多い。

志戸呂は大窯段階の丸皿 (702)、大皿 (703)、播鉢 (704～707) など計 21 点である。一方で初
山は少なく、播鉢 (708・709)、天目茶碗など 4 点にすぎない。

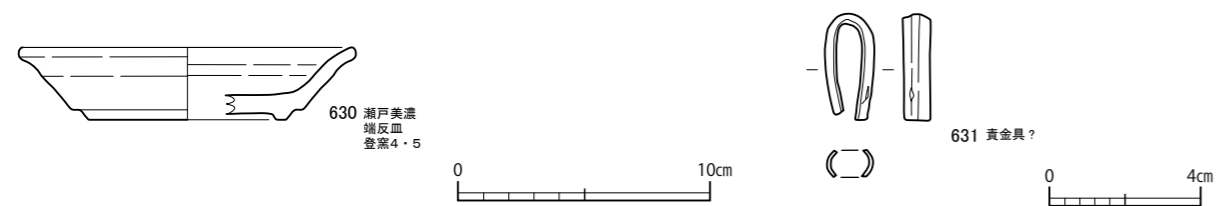
常滑は片口鉢 I 類 (710)、片口鉢 II 類 (711・712)、甕 (713～716) など 52 点出土している。
型式のわかるものでは、13 世紀後半から 14 世紀代のものが多い傾向がある。渥美は甕 (717) など
13 点出土している。信楽の播鉢 (719) は、当地域ではあまり出土例がなく注目される。

土師質の製品では、湯釜 (720)、羽釜 (721)、かわらけ (722～728)、瓦質の鍋 (730・731) などがある。

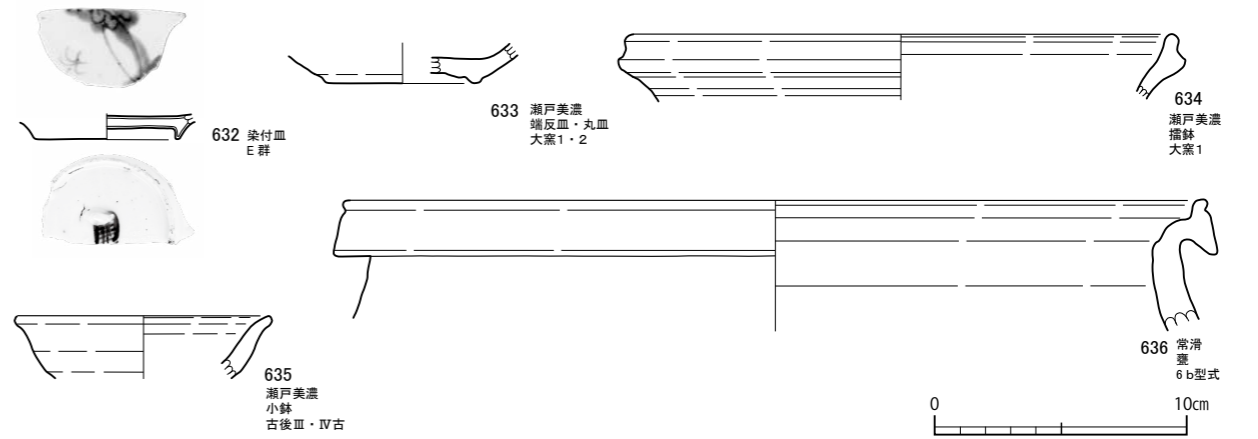
陶磁器・土器以外は、砥石 (732～736)、硯 (737)、滑石製鍋 (738・739) などの石製品、煙管 (740)、
鉄砲玉 (741～743)、北宋銭 (744・745)、寛永通宝 (746) が出土した。



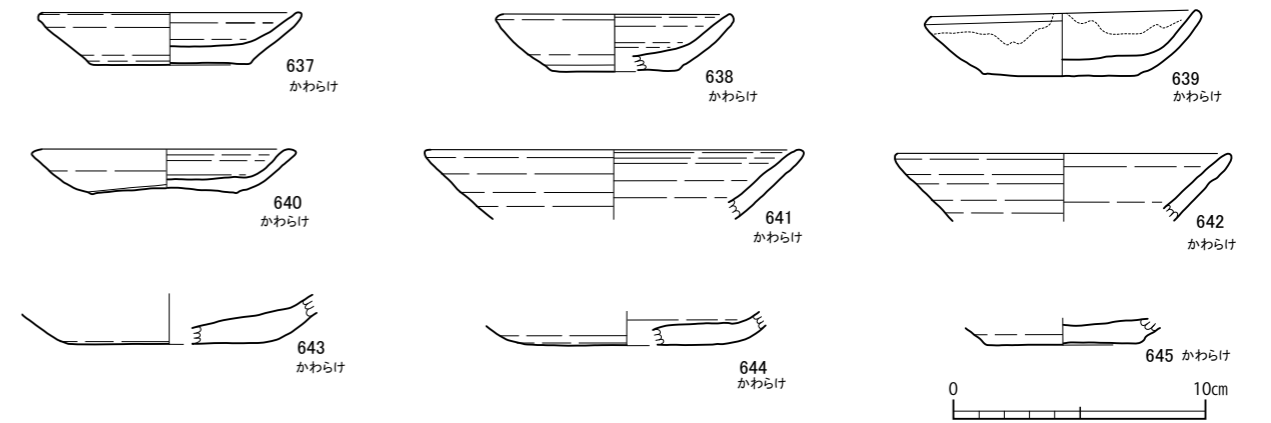
第 200 図 北曲輪第 2 調査区空堀 1 出土遺物



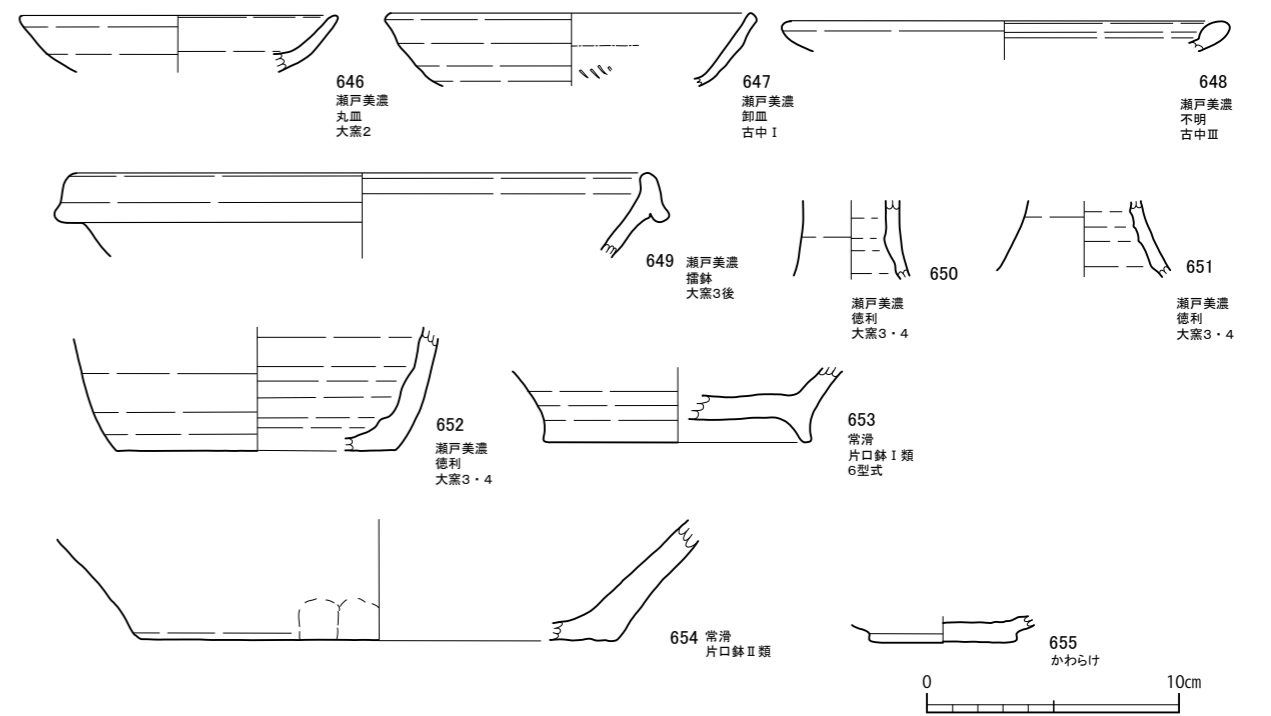
第 201 図 北曲輪第 3 調査区 SK・SX 群出土遺物



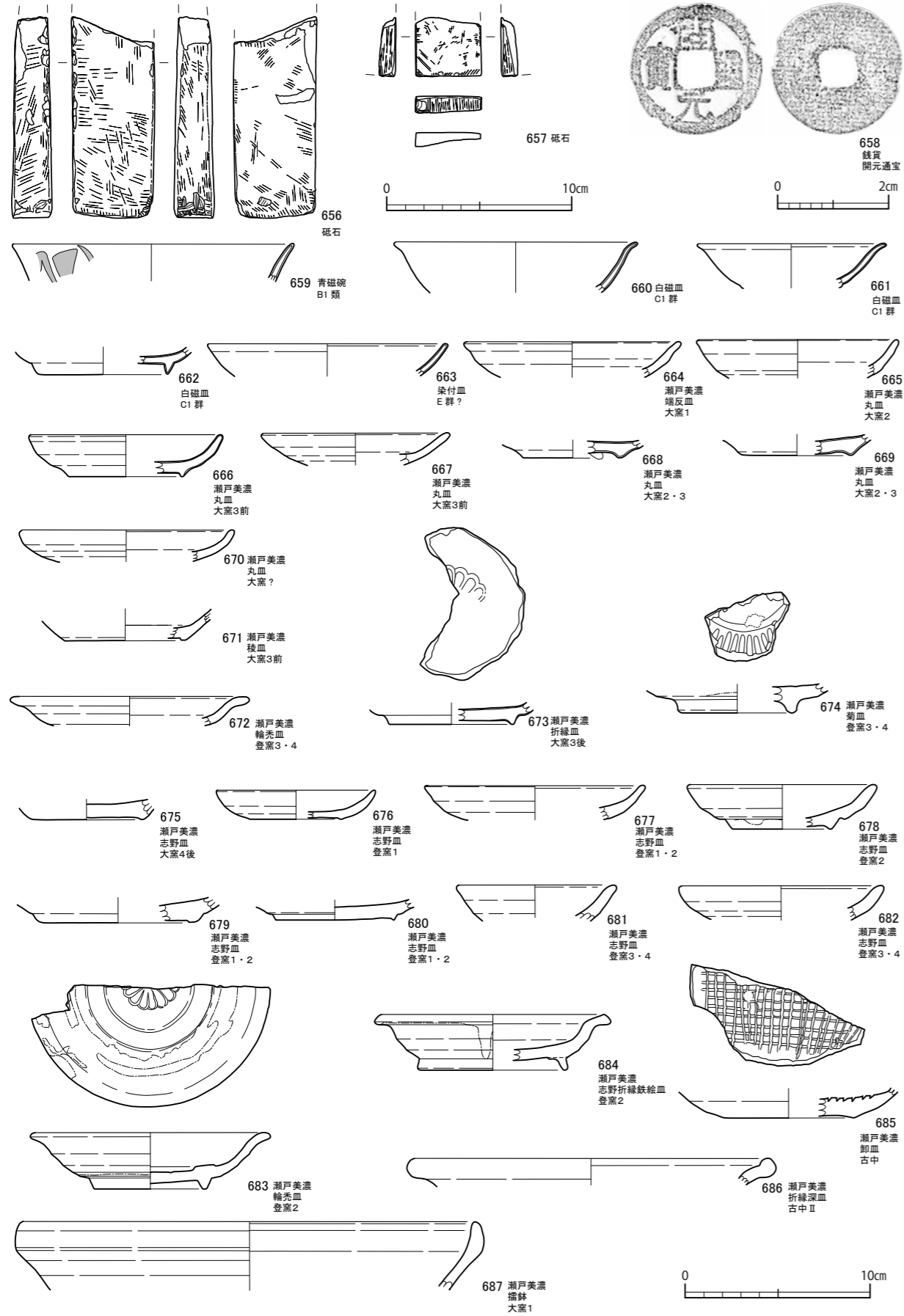
第 202 図 北曲輪第 6 調査区空堀 2・3 出土遺物



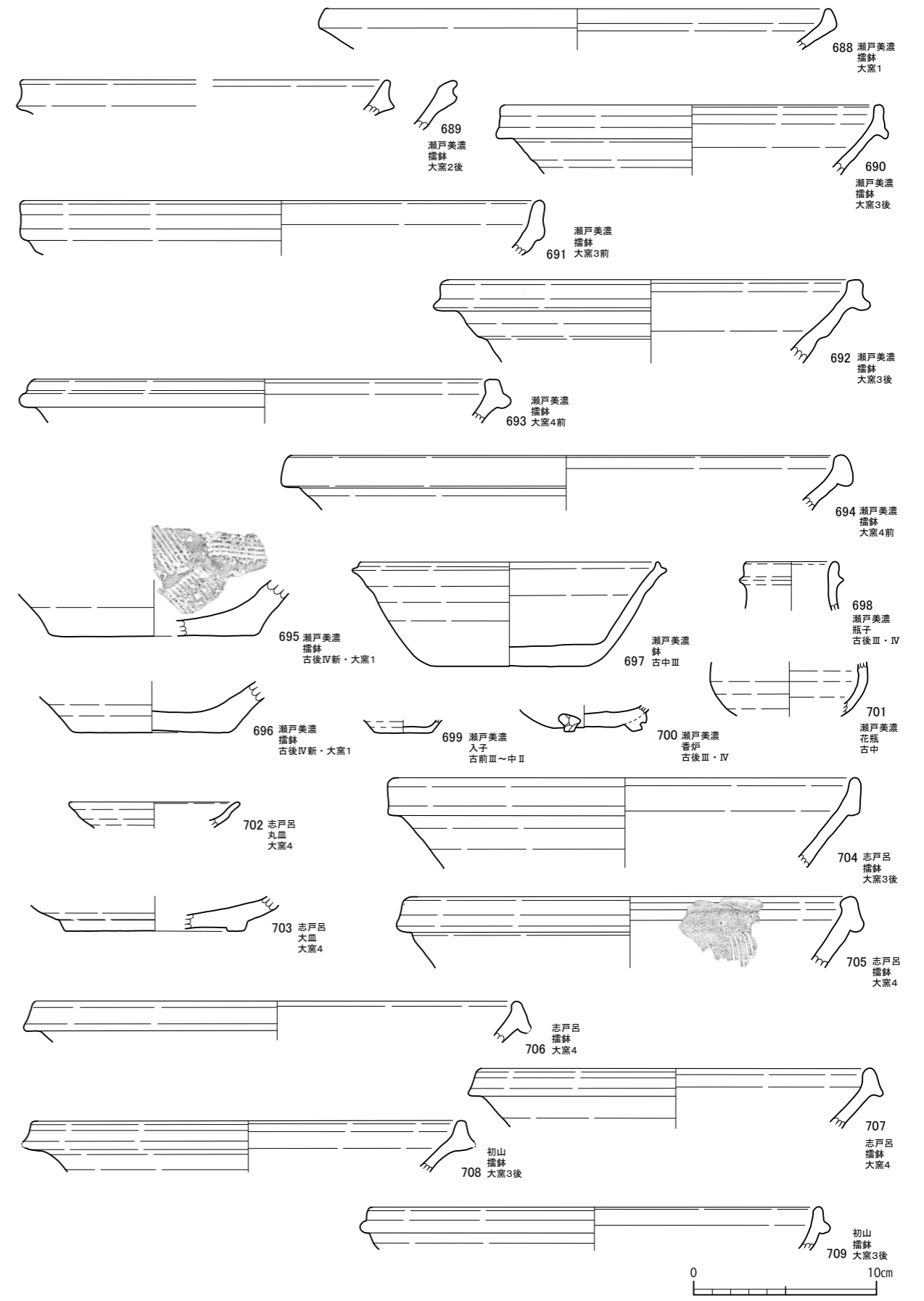
第 203 図 北曲輪第 7 調査区造成土 1 出土遺物



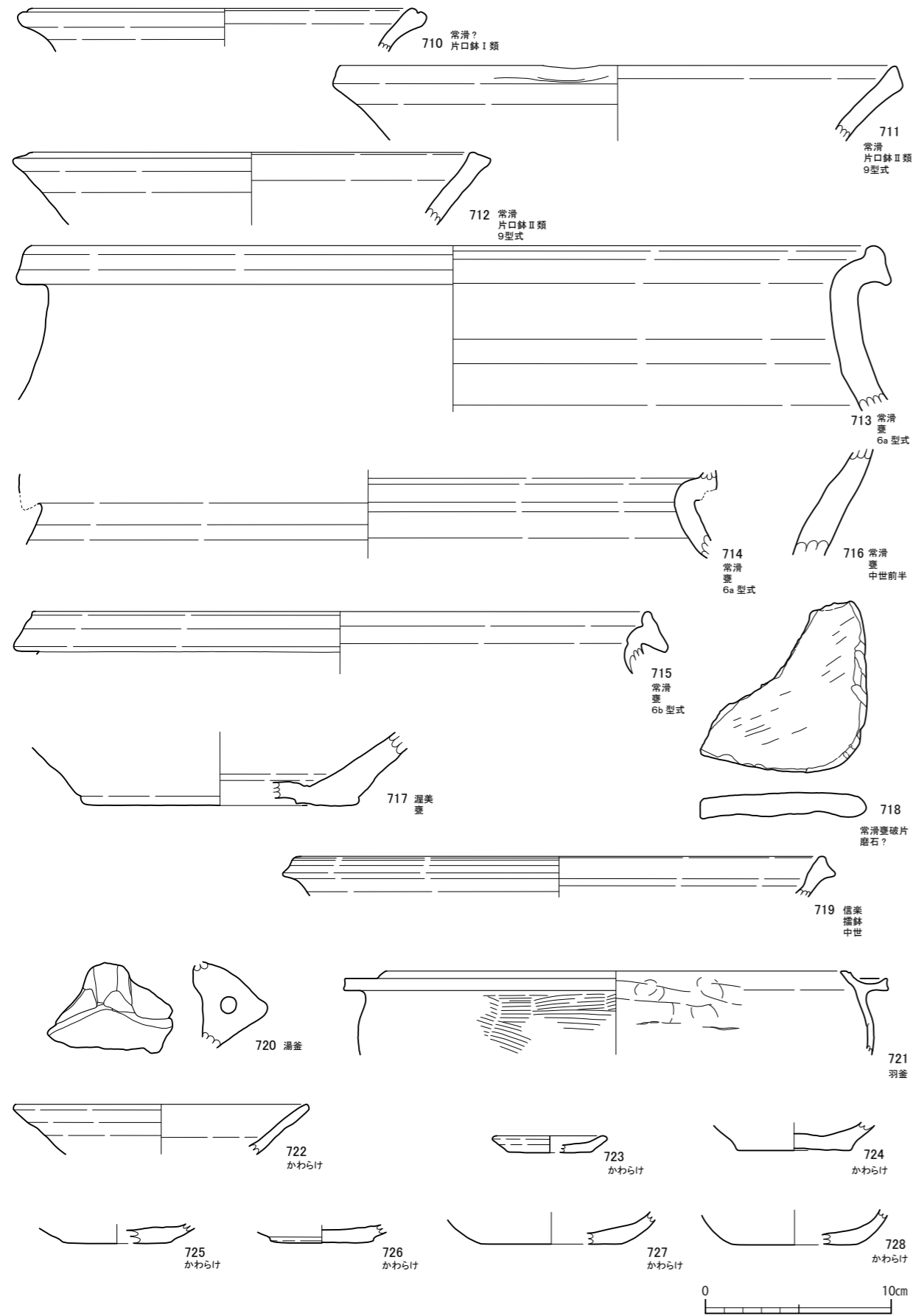
第 204 図 北曲輪遺構外出土遺物 (1)



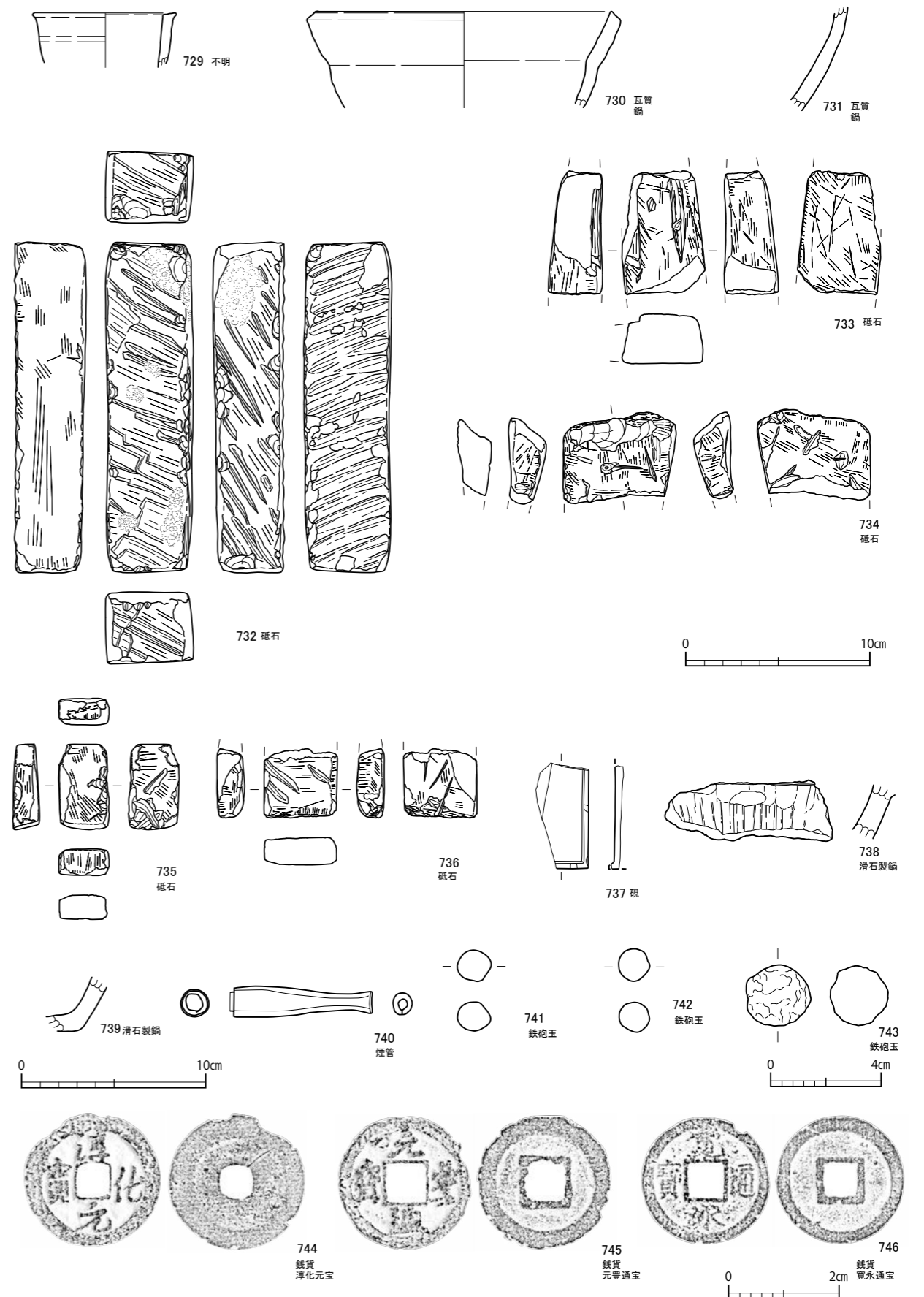
第 205 図 北曲輪遺構外出土遺物 (2)



第 206 図 北曲輪遺構外出土遺物 (3)



第 207 図 北曲輪遺構外出土遺物 (4)



第 208 図 北曲輪遺構外出土遺物 (5)

(9) 清水曲輪出土遺物

空堀 (第209図 747～753 PL.58)

貿易陶磁はなく、出土した陶磁器は瀬戸美濃のみである。

瀬戸美濃は古瀬戸後IV古期から登窯第1小期まで13点が出土している。緑釉小皿(747)、直縁大皿(748)、鉢(749)、播鉢(750)など古瀬戸後IV期の遺物が多く、大窯段階は大窯1段階の播鉢(751)や天目茶碗などで少ない傾向がある。

土師質では羽釜(752)、かわらけ(753)などがある。

遺構外 (第210図 754～766 第211図 767～779 PL.58・59)

清水曲輪の調査はトレンチによる調査であったため、全体として出土遺物は多くはない。

貿易陶磁は14世紀代の青磁碗(754)と時期不明の青磁碗の2点のみである。

瀬戸美濃は古瀬戸前期の四耳壺が1点あるが、古瀬戸後IV期から登窯段階にかけての製品が中心で、67点出土した。古瀬戸後期の製品では、緑釉小皿(757～759)、播鉢(764)、尊式花瓶(771)などがあり、大窯段階では天目茶碗(755)、緑釉はさみ皿(760・761)、端反皿(762)、播鉢(765～769)、登窯段階では志野皿や播鉢が出土している。

志戸呂は大窯段階の丸皿など3点、初山は播鉢1点と少ない傾向である。常滑は甕・片口鉢Ⅱ類など17点、渥美は片口鉢1点がある。770は「○に大」の印がある播鉢で、近世後半の製品である。

土師質では、羽釜(772・773)、内耳鍋(774)、かわらけ(775～777)が出土している。かわらけは小破片のため、形状は不明である。

(10) 清水小曲輪出土遺物 (第212図 780～805 PL.59)

清水小曲輪でも近世遺物が中世遺物を上回って出土している状況であったが、中世遺物を中心に図示した。

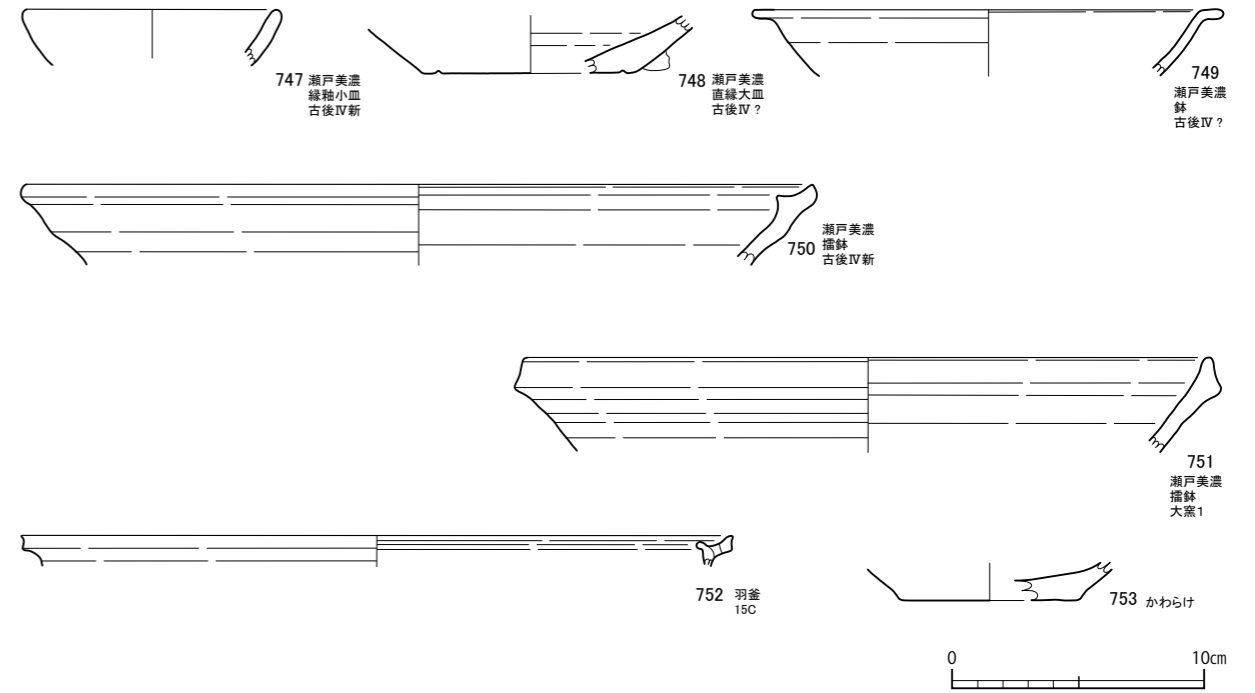
貿易陶磁は青磁碗、稜花皿(780)など5点出土している。このうち、白磁碗Ⅳ類(781)、青白磁梅瓶(782)は12～13世紀に遡るものである。

瀬戸美濃は古瀬戸前期の瓶類1点、中期の折縁深皿3点など、古手の製品もあるが、古瀬戸後IV期から登窯段階にかけての製品が中心で、総計73点出土している。古瀬戸後期の製品では、小碗(785)、緑釉小皿(786)、折縁深皿(793)、卸目付大皿(794)などがあり、大窯段階では端反皿などの皿類(787・788)や天目茶碗、播鉢など、登窯段階では天目茶碗(784)、志野皿(789～792)が出土している。

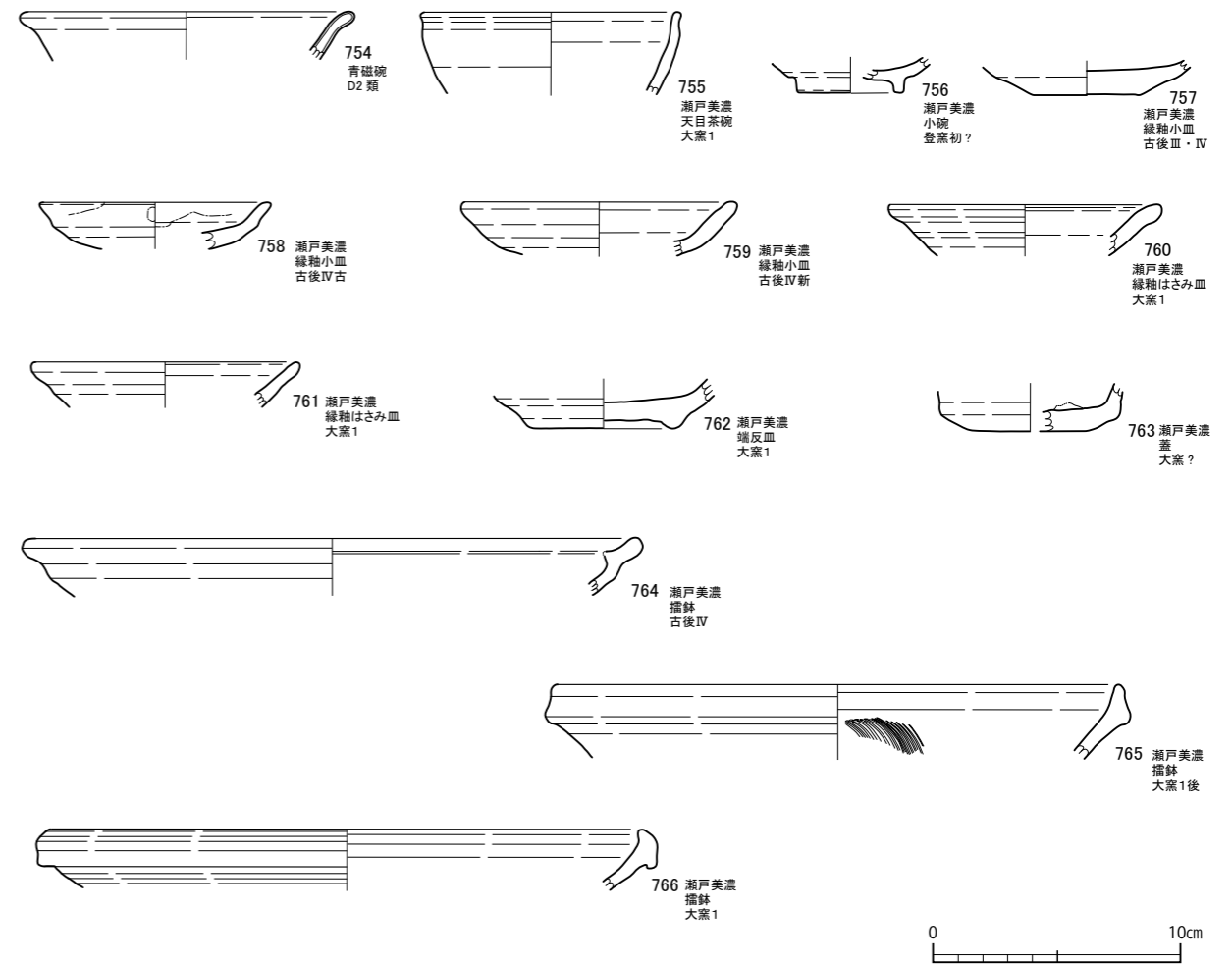
志戸呂は大窯段階の碗(796)、丸皿(797)など7点、初山は小壺など2点である。常滑は甕(799・800)、片口鉢Ⅱ類など29点、渥美は甕、片口鉢など11点である。

土師質では、羽釜が1点出土しているほか、かわらけ(801～803)が出土しているが、小破片のため、詳細は不明である。

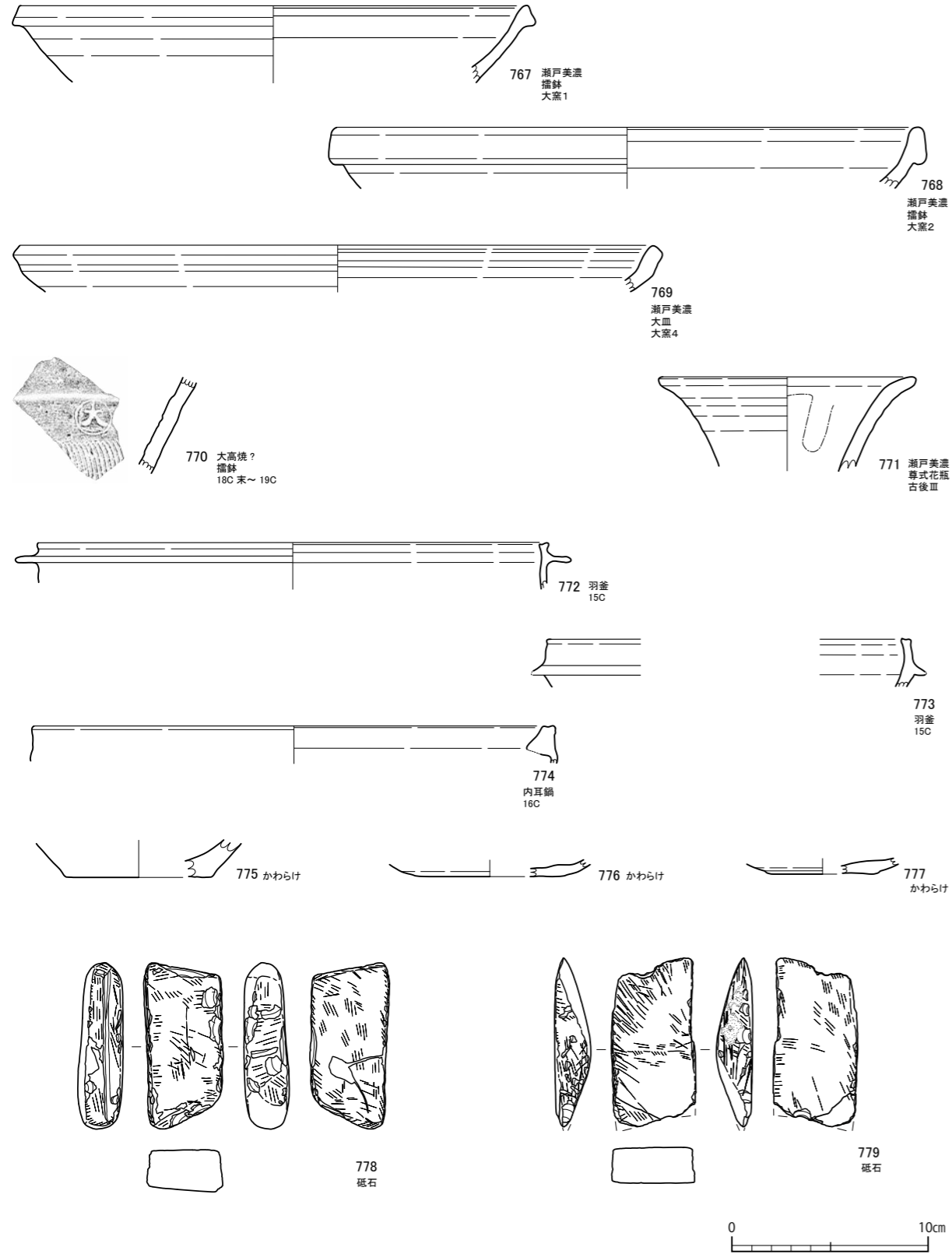
石製品では砥石2点を図示した。



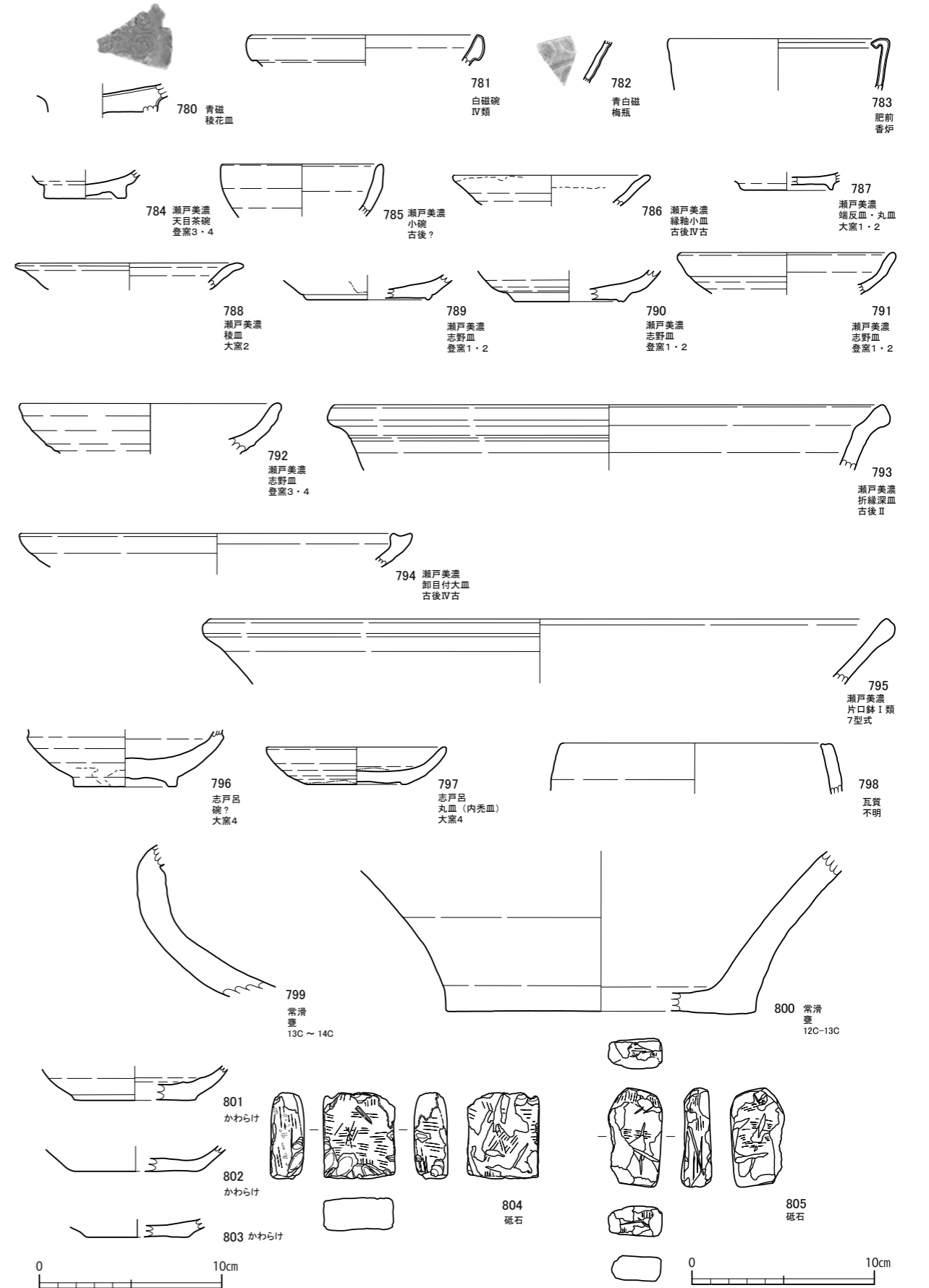
第209図 清水曲輪空堀出土遺物



第210図 清水曲輪遺構外出土遺物(1)



第 211 図 清水曲輪遺構外出土遺物 (2)



第 212 図 清水小曲輪出土遺物

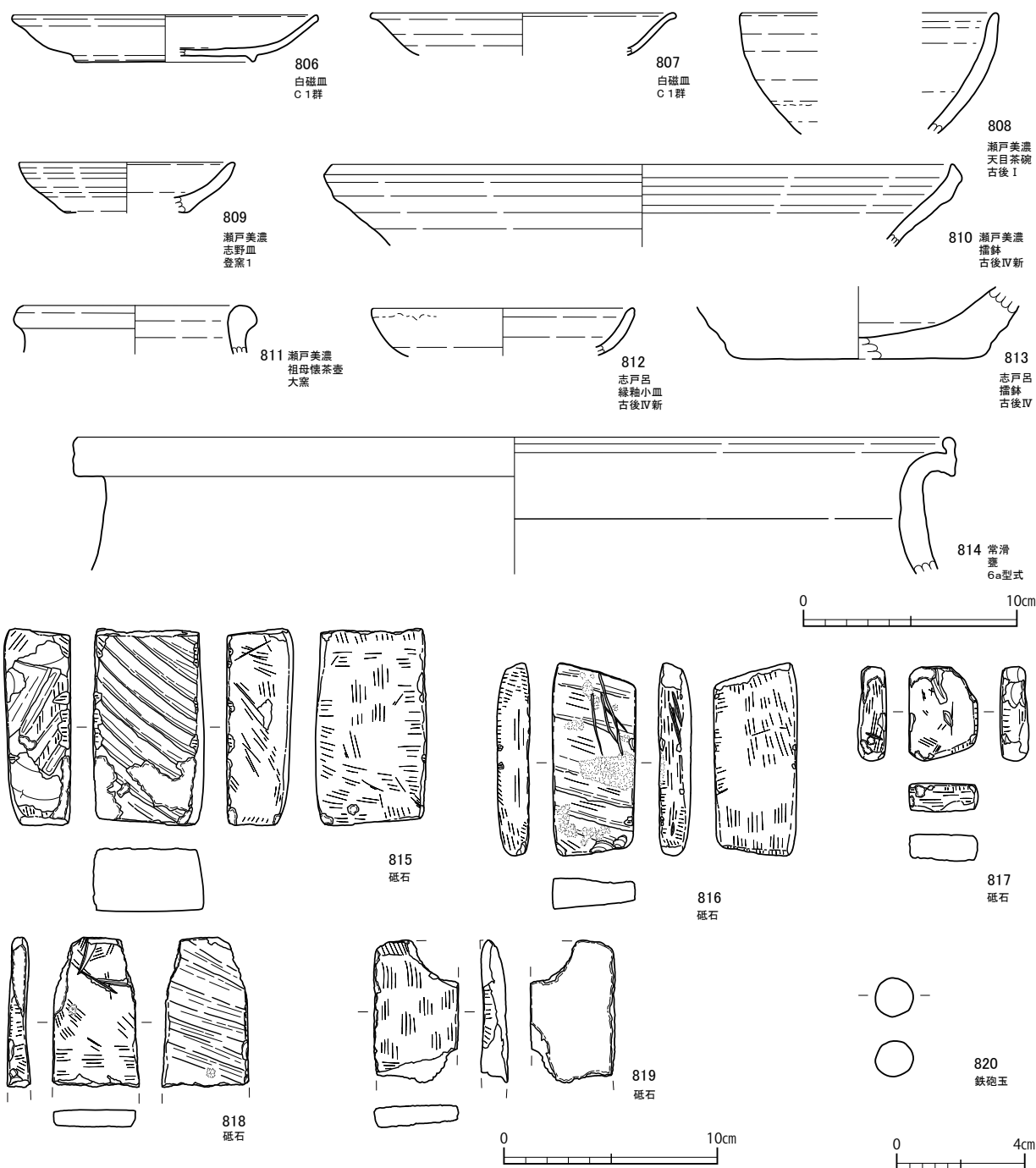
(11) 東外堀出土遺物 (第 213 図 806 ~ 820 PL.59・61)

貿易陶磁は白磁皿 C1 群 (806・807) 2 点のみである。

瀬戸美濃は古瀬戸中期の鉢 1 点、後期の天目茶碗 (808)、平碗、播鉢 (810) などもあるが、大窯段階から登窯段階にかけての製品が中心で、計 28 点出土している。大窯段階では天目茶碗、皿類、祖母懷茶壺 (811) がある。登窯段階では志野皿 (809) など皿類が多い。

志戸呂は古瀬戸後IV期併行段階の縁釉小皿 (812)、播鉢 (813) の各 1 点が出土している。常滑は甕 (814)、片口鉢 I 類など 16 点、渥美は甕 1 点である。

このほか、砥石 (815 ~ 819)、鉄砲玉 (820) などが出土した。



第 213 図 東外堀出土遺物

出土遺物観察表

H13 年度試掘調査出土遺物

図版No.	遺物No.	出土地点	種類	産地	器種	施釉等	時期	法量 (cm)	調査年次	備考
1			磁器	肥前	染付皿		近世後期	- × - × 7.9 (高台径)	H13 試掘	
2			陶器	瀬戸美濃	片口鉢Ⅰ類		6 型式	- × - × 10.4 (高台径)	H13 試掘	
3			陶器	常滑	裏		中世	43.8 × - × - (類部径)	H13 試掘	
4			土師質		羽釜		中世	24.7 × - × - (口径)	H13 試掘	
5			土師質		かわらけ			11.6 × 3.6 × 4.6	H13 試掘	煤・被熱
6			土師質		かわらけ			5.2 × - × - (口径)	H13 試掘	
7			土師質		かわらけ			6.1 × 4.8 × 4	H13 試掘	

H14 年度試掘調査出土遺物

図版No.	遺物No.	出土地点	種類	産地	器種	施釉等	時期	法量 (cm)	調査年次	備考
8			陶器	瀬戸美濃	稜皿	鉄	大窯 3 前	10.3 × - × -	H14 試掘	
9			陶器	瀬戸美濃	稜皿	鉄	大窯 3 前	11.4 × - × -	H14 試掘	
10			陶器	瀬戸美濃	搦鉢	錆	大窯 3 前	20.8 × - × -	H14 試掘	
11			陶器	初山?	縁釉皿	鉄	大窯 3 後?	11.5 × 3.7 × 5.4	H14 試掘	近世志戸呂?
12			陶器	常滑	裏		13C	20.7 × - × - (類部径)	H14 試掘	
13			陶器	常滑	裏		中世	- × - × 12.8	H14 試掘	
14			銭貨	中国	元豊通宝			2.5 × 2.5 × 0.1	H14 試掘	

本丸 1 号礎石建物跡 SS1 出土遺物

図版No.	遺物No.	出土地点	種類	産地	器種	施釉等	時期	法量 (cm)	調査年次	備考
15	1012		土師質		かわらけ			13.9 × 3.5 × 7.1	H15	
16	1014		土師質		かわらけ			9.2 × 2.2 × 5.2	H15	

本丸 1 号溝 SD1 出土遺物

図版No.	遺物No.	出土地点	種類	産地	器種	施釉等	時期	法量 (cm)	調査年次	備考
17		SD1	陶器	瀬戸美濃	天目茶碗	鉄	大窯 3 後	9.7 × - × -	H17	
18		SD1	陶器	瀬戸美濃	丸皿	灰	大窯 2・3	- × - × 6.7	H17	
19		SD1	陶器	瀬戸美濃	腰折皿	灰	古後Ⅳ新	- × - × 4.9	H17	
20		SD1	陶器	志戸呂	丸皿	灰	大窯 4	10.7 × - × -	H17	
21		SD1	陶器	志戸呂	小杯	鉄	大窯 4	- × - × -	H17	
22		SD1	陶器	志戸呂	皿	鉄	大窯 3 後	8.2 × - × -	H17	
23		SD1	陶器	志戸呂	搦鉢	錆	大窯 4	27.0 × - × -	H17	
24		SD1	土師質	-	内耳鍋			32.2 × - × -	H16	
25		SD1	土師質	-	かわらけ			10.8 × - × -	H17	
26		SD1	土師質	-	かわらけ			- × - × 8.2	H17	
27		SD1	土師質	-	かわらけ			- × - × 6.3	H17	

本丸 2 号溝 SD2 出土遺物

図版No.	遺物No.	出土地点	種類	産地	器種	施釉等	時期	法量 (cm)	調査年次	備考
28			陶器	瀬戸美濃	搦鉢	錆	大窯	- × - × -	H16	
29			土師質		羽釜			22.6 × - × -	H17	
30			土師質		かわらけ			- × - × 7.3	H17	
31			土師質		かわらけ			- × - × 6.7	H17	

本丸空堀（西）出土遺物

図版No.	遺物No.	出土地点	種類	産地	器種	施釉等	時期	法量 (cm)	調査年次	備考
32		土橋（版築土）	陶器	志戸呂?	鉢?	-	?	- × - × 11.9	H16	近世初頭?
33			陶器	瀬戸美濃	縁釉はさみ皿	灰	大窯 1	11.7 × 2.3 × 5.0	H16	
34			陶器	瀬戸美濃	志野鉄絵皿	長石	登窯 2	11.3 × 2.2 × 7.6	H16	
35			陶器	瀬戸美濃	搦鉢	錆	大窯 1	26.0 × - × -	H16	
36			陶器	常滑	裏	鉄・灰	13C	- × - × 20.0	H16	
37			土師質		かわらけ		中世	12.7 × 2.1 × 5.8	H16	
38		12/23	瓦質		内耳鍋			- × - × -	H16	

本丸空堀（東）出土遺物

図版No.	遺物No.	出土地点	種類	産地	器種	施釉等	時期	法量 (cm)	調査年次	備考
39		H17 調査区	貿易陶磁		青磁（折縁）盤		14C	22.1 × - × -	H17	
40		H17 調査区	陶器	瀬戸美濃	天目茶碗	鉄	大窯 1	10.7 × - × -	H17	
41		H17 調査区	陶器	瀬戸美濃	天目茶碗	鉄	大窯 2	4.5 × - × -	H17	
42		H17 調査区	陶器	瀬戸美濃	天目茶碗	鉄	大窯 3	- × - × -	H17	
43		H17 調査区	陶器	瀬戸美濃	菊皿	灰	登窯 3・4	11.4 × - × -	H17	
44		H17 調査区	陶器	瀬戸美濃	志野皿	灰	登窯 3・4	8.9 × 2.0 × 4.8	H17	
45		H17 調査区	陶器	瀬戸美濃	搦鉢	錆	古後Ⅳ新	- × - × -	H17	
46		H17 調査区	陶器	瀬戸美濃	搦鉢	錆	古後Ⅳ新・大窯 1	- × - × -	H17	
47		H17 調査区	陶器	瀬戸美濃	搦鉢	錆	大窯 3	- × - × 9.8	H17	
48		H17 調査区	陶器	瀬戸美濃	口広有耳壺	鉄	古後Ⅳ新	9.9 × - × -	H17	
49		H17 調査区	陶器	瀬戸美濃	香炉	灰?	古後?	- × - × 6.2	H17	近世?
50		H17 調査区	陶器	志戸呂?	搦鉢	錆	大窯 3 後・4	31.4 × - × -	H17	
51		H17 調査区	陶器	志戸呂	搦鉢	錆	大窯 4	- × - × -	H17	
52	85	H17 調査区	陶器	初山?	丸皿	灰	大窯 3 後	10.0 × 2.3 × 5.5	H17	
53		H17 調査区	陶器	常滑	片口鉢Ⅱ類	鉄	10 型式	28.0 × - × -	H17	
54		H17 調査区	土師質		かわらけ			- × - × 6.8	H17	
55		H17 調査区	土師質		かわらけ			- × - × 7.8	H17	
56		H17 調査区	土師質		かわらけ			10.3 × - × -	H17	胎土白色
57		H17 調査区	土師質		かわらけ			- × - × 5.5	H17	胎土白色
58		H17 調査区	金属製品		鉄砲玉			1.25 × 1.28 × 1.18	H17	
59	83	16/22	銭貨	中国	永樂通宝		明代	2.5 × 2.5 × 0.2	H17	
60	84	15/22	銭貨	日本	寛永通宝		近世	2.3 × 2.3 × 0.1	H17	

第10表 出土貿易陶磁集計表

Table with columns for artifact types (e.g., 青磁碗, 白磁碗, 染付碗), locations (e.g., 本丸空堀, 石火矢台), and counts. Includes a total row at the bottom.

第11表 出土主要遺物遺構別集計表 (貿易陶磁除く)

Table for H13 trial excavation artifacts, listing items like 志野皿, 志野鉄絵皿, 鉢, etc., with their respective counts.

H14 試掘調査出土遺物

Table for H14 trial excavation artifacts, listing items like 稜皿, 志野皿, 鉢, etc., with their respective counts.

本丸SD1 出土遺物

Table for SD1 site artifacts, listing items like 天目茶碗, 碗, 鉢, etc., with their respective counts.

本丸SD2 出土遺物

Table for SD2 site artifacts, listing items like 天目茶碗, 鉢, etc., with their respective counts.

本丸空堀出土遺物 (*土橋出土)

Table for SD2 site artifacts from the empty堀 area, listing items like 天目茶碗, 鉢, etc., with their respective counts.

本丸遺構外出土遺物

Table for SD2 site artifacts from outside the remains, listing items like 天目茶碗, 鉢, etc., with their respective counts.

Table with columns for 時期, 古瀬戸前期, 古瀬戸中期, 古瀬戸後期, 古瀬戸期, 古大窯, 大窯, 大~登窯, 登窯, 合計. Rows include 志戸呂, 初山, 常滑, 信楽, 土師, 瓦質.

石火矢台遺構外出土遺物

Table with columns for 時期, 古瀬戸前期, 古瀬戸中期, 古瀬戸後期, 古瀬戸期, 古大窯, 大窯, 大~登窯, 登窯, 合計. Rows include 瀬戸美濃, 志戸呂, 初山, 常滑, 瓦質.

本丸三日月掘出土遺物

Table with columns for 時期, 古瀬戸前期, 古瀬戸中期, 古瀬戸後期, 古瀬戸期, 古大窯, 大窯, 大~登窯, 登窯, 合計. Rows include 瀬戸美濃, 常滑, 瀬美.

Table with columns for 時期, 古瀬戸前期, 古瀬戸中期, 古瀬戸後期, 古瀬戸期, 古大窯, 大窯, 大~登窯, 登窯, 合計. Row: 土師 羽釜.

二ノ丸遺構外出土遺物

Table with columns for 時期, 古瀬戸前期, 古瀬戸中期, 古瀬戸後期, 古瀬戸期, 古大窯, 大窯, 大~登窯, 登窯, 合計. Rows include 瀬戸美濃, 志戸呂, 初山, 常滑, 土師, 瓦質.

志戸呂

Table with columns for 時期, 古瀬戸前期, 古瀬戸中期, 古瀬戸後期, 古瀬戸期, 古大窯, 大窯, 大~登窯, 登窯, 合計. Rows include 瀬戸美濃, 志戸呂, 初山, 常滑, 土師, 瓦質.

初山

Table with columns for 時期, 古瀬戸前期, 古瀬戸中期, 古瀬戸後期, 古瀬戸期, 古大窯, 大窯, 大~登窯, 登窯, 合計. Rows include 瀬戸美濃, 志戸呂, 初山, 常滑, 土師, 瓦質.

常滑

Table with columns for 時期, 古瀬戸前期, 古瀬戸中期, 古瀬戸後期, 古瀬戸期, 古大窯, 大窯, 大~登窯, 登窯, 合計. Rows include 瀬戸美濃, 志戸呂, 初山, 常滑, 土師, 瓦質.

二ノ丸虎口出土遺物 (*二ノ丸土橋出土)

Table with columns for 時期, 古瀬戸前期, 古瀬戸中期, 古瀬戸後期, 古瀬戸期, 古大窯, 大窯, 大~登窯, 登窯, 合計. Rows include 瀬戸美濃, 志戸呂, 初山, 常滑, 土師, 瓦質.

志戸呂

Table with columns for 時期, 古瀬戸前期, 古瀬戸中期, 古瀬戸後期, 古瀬戸期, 古大窯, 大窯, 大~登窯, 登窯, 合計. Rows include 瀬戸美濃, 志戸呂, 初山, 常滑, 土師, 瓦質.

初山

Table with columns for 時期, 古瀬戸前期, 古瀬戸中期, 古瀬戸後期, 古瀬戸期, 古大窯, 大窯, 大~登窯, 登窯, 合計. Rows include 瀬戸美濃, 志戸呂, 初山, 常滑, 土師, 瓦質.

常滑

Table with columns for 時期, 古瀬戸前期, 古瀬戸中期, 古瀬戸後期, 古瀬戸期, 古大窯, 大窯, 大~登窯, 登窯, 合計. Rows include 瀬戸美濃, 志戸呂, 初山, 常滑, 土師, 瓦質.

三ノ丸北西部出土遺物

Table with columns for 時期, 古瀬戸前期, 古瀬戸中期, 古瀬戸後期, 古瀬戸期, 古大窯, 大窯, 大~登窯, 登窯, 合計. Rows include 瀬戸美濃, 志戸呂, 初山, 常滑, 土師, 瓦質.

Table with columns for 時期 (古瀬戸前期, 古瀬戸中期, 古瀬戸後期, 古瀬戸期, 古大窯), 大窯 (1前, 1後, 2前, 2後, 3前, 3後, 4前, 4後, 大窯), 大~登窯 (1, 2, 3, 4, 初), 合計. Rows include 瀬戸美濃 (他, 德利, 小計), 志戸呂 (皿類, 丸皿, 常滑 裏壺, 裏・壺, 瀬美 裏壺, 裏・壺).

三ノ丸北東部出土遺物

Table with columns for 時期 (古瀬戸前期, 古瀬戸中期, 古瀬戸後期, 古瀬戸期, 古大窯), 大窯 (1前, 1後, 2前, 2後, 3前, 3後, 4前, 4後, 大窯), 大~登窯 (1, 2, 3, 4, 初), 合計. Rows include 瀬戸美濃 (天目, 天目茶碗, 搦鉢, 鉢形鉢, 小計), 初山 (他, 器種不明), 常滑 裏壺, 裏・壺, 瓦質 瓦質製品.

三ノ丸南部SD4出土遺物

Table with columns for 時期 (古瀬戸前期, 古瀬戸中期, 古瀬戸後期, 古瀬戸期, 古大窯), 大窯 (1前, 1後, 2前, 2後, 3前, 3後, 4前, 4後, 大窯), 大~登窯 (1, 2, 3, 4, 初), 合計. Rows include 瀬戸美濃 (天目, 天目茶碗, 搦鉢, 小計).

三ノ丸南部版築遺構出土遺物

Table with columns for 時期 (古瀬戸前期, 古瀬戸中期, 古瀬戸後期, 古瀬戸期, 古大窯), 大窯 (1前, 1後, 2前, 2後, 3前, 3後, 4前, 4後, 大窯), 大~登窯 (1, 2, 3, 4, 初), 合計. Rows include 瀬戸美濃 (皿類, 腰折皿, 搦鉢, 小計), 志戸呂 壺, 裏壺.

三ノ丸南部SD5出土遺物

Table with columns for 時期 (古瀬戸前期, 古瀬戸中期, 古瀬戸後期, 古瀬戸期, 古大窯), 大窯 (1前, 1後, 2前, 2後, 3前, 3後, 4前, 4後, 大窯), 大~登窯 (1, 2, 3, 4, 初), 合計. Rows include 瀬戸美濃 (皿類, 稜皿, 仏花瓶, 小計).

三ノ丸南部SD6出土遺物

Table with columns for 時期 (古瀬戸前期, 古瀬戸中期, 古瀬戸後期, 古瀬戸期, 古大窯), 大窯 (1前, 1後, 2前, 2後, 3前, 3後, 4前, 4後, 大窯), 大~登窯 (1, 2, 3, 4, 初), 合計. Rows include 瀬戸美濃 (皿類, 緑釉小皿, 志野皿, 搦鉢, 小計), 志戸呂 (搦鉢, 搦鉢, 他, 德利, 小計), 初山 (碗類, 丸碗), 常滑 裏壺, 裏・壺.

三ノ丸南部PT群出土遺物

Table with columns for 時期 (古瀬戸前期, 古瀬戸中期, 古瀬戸後期, 古瀬戸期, 古大窯), 大窯 (1前, 1後, 2前, 2後, 3前, 3後, 4前, 4後, 大窯), 大~登窯 (1, 2, 3, 4, 初), 合計. Rows include 瀬戸美濃 (皿類, 丸皿, 丸皿・端反皿, 小計).

三ノ丸南部遺構外出土遺物

Table with columns for 時期 (古瀬戸前期, 古瀬戸中期, 古瀬戸後期, 古瀬戸期, 古大窯), 大窯 (1前, 1後, 2前, 2後, 3前, 3後, 4前, 4後, 大窯), 大~登窯 (1, 2, 3, 4, 初), 合計. Rows include 瀬戸美濃 (天目, 天目茶碗, 碗, 端反碗, 碗, 緑釉小皿, 腰折皿, 端反皿, 皿類, 丸皿, 緑釉はさみ皿, 菊皿, 志野皿, 皿, 盤類, 盤類, 搦鉢, 搦鉢, 壺瓶, 瓶子, 壺・瓶, 小壺, 小壺, 合子, 他, 德利, 小計).

Table with columns for 時期 (古瀬戸前期, 古瀬戸中期, 古瀬戸後期, 古瀬戸期, 古大窯), 大窯 (1前, 1後, 2前, 2後, 3前, 3後, 4前, 4後, 大窯), 大~登窯 (1, 2, 3, 4, 初), 合計. Rows include 志戸呂 (皿類, 皿, 盤類, 大皿, 搦鉢, 搦鉢, 小計), 初山 (天目, 天目茶碗, 碗類, 丸碗, 搦鉢, 搦鉢, 小計), 常滑 裏壺, 裏・壺, 瀬美 裏壺, 裏・壺, 土師 羽釜, 瓦質 瓦質製品.

三ノ丸西大手付近出土遺物

Table with columns for 時期 (古瀬戸前期, 古瀬戸中期, 古瀬戸後期, 古瀬戸期, 古大窯), 大窯 (1前, 1後, 2前, 2後, 3前, 3後, 4前, 4後, 大窯), 大~登窯 (1, 2, 3, 4, 初), 合計. Rows include 瀬戸美濃 (天目, 天目茶碗, 皿類, 丸皿, 志野皿, 志野鉄絵皿, 鉦皿, 鉦皿, 小計), 志戸呂 小壺, 耳付水注, 常滑 裏壺, 裏・壺, 瓦質 瓦質製品.

大空堀出土遺物

Table with columns for 時期 (古瀬戸前期, 古瀬戸中期, 古瀬戸後期, 古瀬戸期, 古大窯), 大窯 (1前, 1後, 2前, 2後, 3前, 3後, 4前, 4後, 大窯), 大~登窯 (1, 2, 3, 4, 初), 合計. Rows include 瀬戸美濃 (皿類, 緑釉小皿, 稜皿, 反皿, 志野皿, 志野中皿, 皿, 搦鉢, 搦鉢, 小計), 初山 壺瓶, 瓶, 常滑 鉢, 片口鉢, 裏壺, 裏・壺, 小計.

北曲輪空堀1出土遺物

Table with columns for 時期 (古瀬戸前期, 古瀬戸中期, 古瀬戸後期, 古瀬戸期, 古大窯), 大窯 (1前, 1後, 2前, 2後, 3前, 3後, 4前, 4後, 大窯), 大~登窯 (1, 2, 3, 4, 初), 合計. Rows include 瀬戸美濃 (天目, 天目茶碗, 小天目, 碗, 平碗, 緑釉小皿, 丸皿, 志野皿, 志野鉄絵皿, 志野輪壳皿, 皿, 盤類, 盤類, 搦鉢, 搦鉢, 壺瓶, 祖母懷茶壺, 壺・瓶, 仏具, 香炉, 鉢類, 小鉢, 他, 小杯, 德利, 小計), 志戸呂 壺, 壺・瓶, 初山 他, 器種不明, 常滑 鉢, 片口鉢1類, 裏壺, 裏・壺, 小計, 瀬美 裏壺, 裏・壺, 瓦質 瓦質製品.

北曲輪空堀2出土遺物

Table with columns for 時期 (古瀬戸前期, 古瀬戸中期, 古瀬戸後期, 古瀬戸期, 古大窯), 大窯 (1前, 1後, 2前, 2後, 3前, 3後, 4前, 4後, 大窯), 大~登窯 (1, 2, 3, 4, 初), 合計. Rows include 瀬戸美濃 (天目, 天目茶碗, 碗類, 平碗, 腰折皿, 皿類, 丸皿・端反皿, 緑釉はさみ皿).

第V章 自然科学分析

(1) 平成 28 年度 興国寺城跡の放射性炭素年代測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

1. 試料

今年年代測定を行う試料は、二の丸虎口の土橋覆土から検出された No.1 ~ 4 の 4 点である。試料の詳細は結果とともに第 12・13 表に示す。

2. 分析方法

炭化物に付着する土壌を、できるだけ取り除く。塩酸 (HCl) により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム (NaOH) により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HCl によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する (酸・アルカリ・酸処理 AAA:Acid Alkali Acid)。濃度は HCl、NaOH 共に最大 1mol/L である。試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化 (鉄を触媒とし水素で還元する) は Elementar 社の vario ISOTOPE cube と Ionplus 社の Age3 を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を NEC 社製のハンドプレス機を用いて内径 1mm の孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした ^{14}C -AMS 専用装置 (NEC 社製) を用いて、 ^{14}C の計数、 ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)、 ^{14}C 濃度 ($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定する。AMS 測定時に、米国国立標準局 (NIST) から提供される標準試料 (HOX- II)、国際原子力機関から提供される標準試料 (IAEA-C6 等)、バックグラウンド試料 (IAEA-C1 等) の測定も行う。

$\delta^{13}\text{C}$ は試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表したものである。放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One Sigma;68%) に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う (Stuiver & Polach,1977)。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。

暦年較正に用いるソフトウェアは、Calib7.1 を用いる。較正曲線は Intcal13(Reimer et al.,2013) を用いる。

3. 結果

結果を第 12・13 表に示す。分析試料はいずれも保存状態が良くすべての試料で定法での AAA 処理が可能であった。いずれも年代測定を行うのに十分な炭素を回収できた。

同位体補正を考慮した年代値は、No.1 が $315 \pm 20\text{BP}$ 、No.2 が $375 \pm 25\text{BP}$ 、No.3 が $295 \pm 20\text{BP}$ 、No.4 が $325 \pm 20\text{BP}$ である。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い (現在考えられている ^{14}C の半減期は 5730 ± 40 年) を較正することによって、暦年代に近づける手法である。較正のもとになる直線は暦時代がわかっている遺物や年輪 (年輪は細胞壁のみなので、形成当時の ^{14}C 年代を反映している) 等を用いて作られており、最新のものは 2013 年に発表された Intcal13(Reimer et al.,2013) である。なお、年代測定値に関しては、国際的な取り決めにより、測定誤差の大きさによって値を丸めるのが普通であるが (Stuiver & Polach 1977)、将来的な較正曲線ならびにソフトウェアの更新に伴う

比較、再計算がしやすいように、表には丸めない値(1年単位)を(第13表2)、文章中では丸めた値を記す。2σの値は、No.1がcalAD1495～1645、No.2がcalAD1445～1630、No.3がcalAD1515～1650、No.4がcalAD1490～1640である。暦年較正の結果をみると、いずれの試料も16世紀に分布の中心が存在し、特にNo.2を除く3試料は16世紀の中頃に中心がある。

第12表 放射性炭素年代測定結果

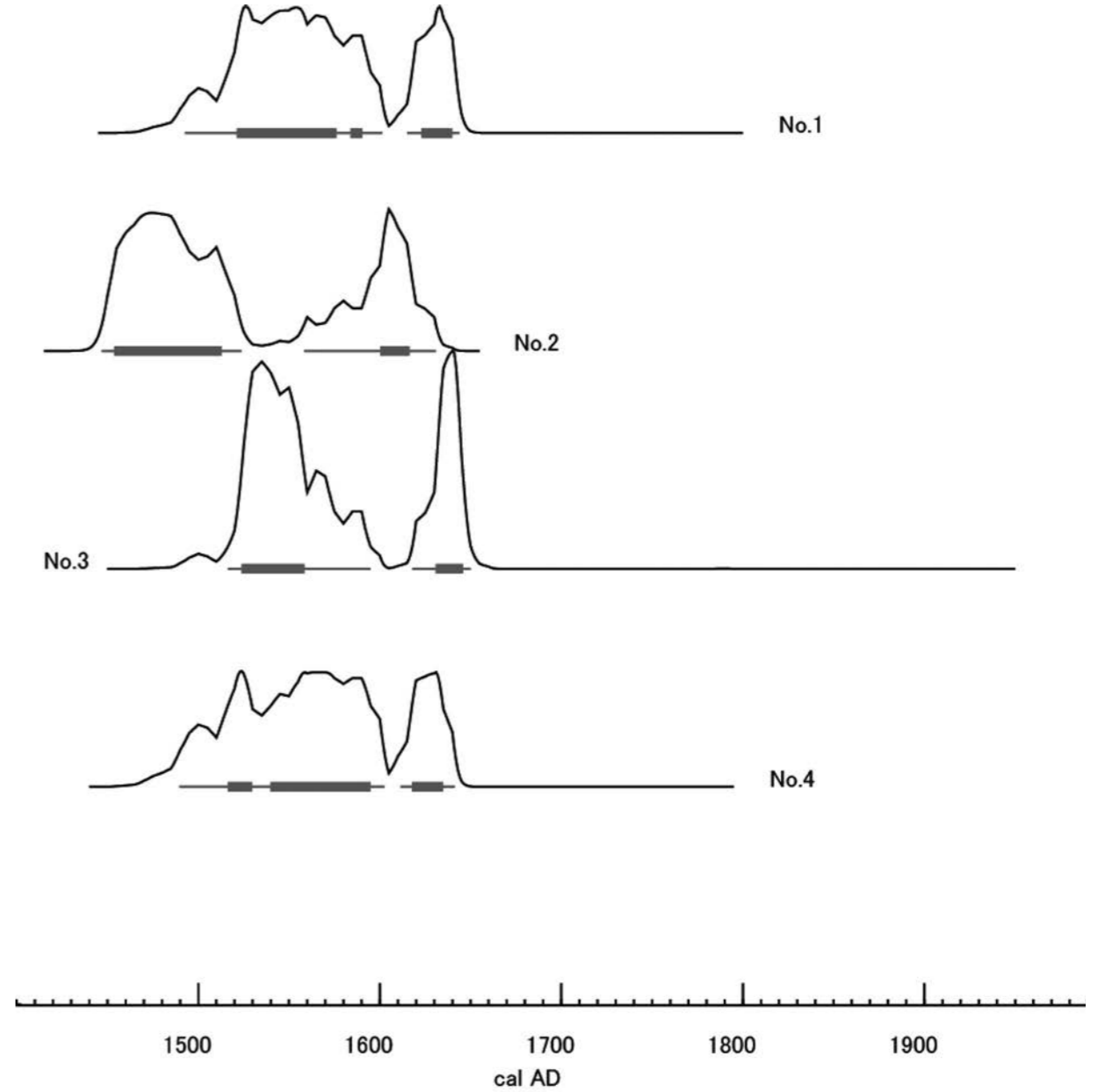
No.	遺物番号	種別	形状	樹皮	測定資料	樹種	処理法	δ13C(‰)	年代値(BP)	暦年較正用	Code No.	
1	21	生木	板目状	無	外側3年分	マツ属 複雑管束亜属	1M (AAA)	-30.0±0.5	315±20	316±21	pal-10437	TKA-17487
2	23	生木	分割角材状	無	全量(5年分)	トウヒ属	1M (AAA)	-26.1±0.5	375±25	376±27	pal-10438	TKA-17488
3	25	生木	丸棒状	—	全量	イネ科タケ亜科	1M (AAA)	-36.4±0.6	295±20	297±20	pal-10439	TKA-17489
4	138	炭化材	柱目板状	無	外側3年分	マツ属 複雑管束亜属	1M (AAA)	-27.5±0.5	325±20	325±20	pal-10440	TKA-17490

- 1)年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
- 2)BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
- 3)付記した誤差は、測定誤差σ(測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

第13表 暦年較正結果

試料名	補正年代(BP)	暦年較正年代				Code No.		
		年代値		相対比	中央値	pal-	TKA-	
No.1	316±21	σ	cal AD 1521 - cal AD 1576	cal BP 429 - 374	0.726			cal AD 1562
			cal AD 1584 - cal AD 1590	cal BP 366 - 360	0.077			
		cal AD 1623 - cal AD 1640	cal BP 327 - 310	0.198				
		2σ	cal AD 1493 - cal AD 1601	cal BP 457 - 349	0.789			
No.2	376±27	σ	cal AD 1454 - cal AD 1513	cal BP 496 - 437	0.781	cal AD 1503	10438	TKA-17488
			cal AD 1600 - cal AD 1616	cal BP 350 - 334	0.219			
		cal AD 1447 - cal AD 1524	cal BP 503 - 426	0.643				
		2σ	cal AD 1558 - cal AD 1631	cal BP 392 - 319	0.357			
No.3	297±20	σ	cal AD 1524 - cal AD 1558	cal BP 426 - 392	0.695	cal AD 1556	10439	TKA-17489
			cal AD 1631 - cal AD 1646	cal BP 319 - 304	0.305			
		cal AD 1516 - cal AD 1595	cal BP 434 - 355	0.706				
		2σ	cal AD 1618 - cal AD 1650	cal BP 332 - 300	0.294			
No.4	325±20	σ	cal AD 1516 - cal AD 1530	cal BP 434 - 420	0.149	cal AD 1564	10440	TKA-17490
			cal AD 1540 - cal AD 1595	cal BP 410 - 355	0.648			
		cal AD 1618 - cal AD 1635	cal BP 332 - 315	0.203				
		2σ	cal AD 1490 - cal AD 1602	cal BP 460 - 348	0.795			
			cal AD 1612 - cal AD 1641	cal BP 338 - 309	0.205			

- 1)計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.1を使用
- 2)計算には表に示した丸める前の値を使用している。
- 3)1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
- 4)統計的に真の値が入る確率はσは68%、2σは95%である。
- 5)相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。
- 6)中央値は、確率分布図の面積が二分される値を年代値に換算したものの。



第214図 暦年較正結果

(2) 平成29年度 興国寺城跡の放射性炭素年代測定

パリーノ・サーヴェイ株式会社

本分析調査では、発掘調査で出土した炭化材について、放射性炭素年代測定を実施し、年代に関する資料を作成する。

1. 試料分析試料

試料番号1(H23年度 291-1 三ノ丸西大手 石積遺構)、試料番号2(H23年度 291-2 三ノ丸西大手 石積遺構)、試料番号3(H22年度 155 三ノ丸南東部 SK2 井戸か?)、試料番号4(H18年度 120 三日月堀 下層)の4点である。試料番号1は、半炭化木で樹皮は無、形状はミカン割状で年輪数は10年、種類はシキミである。試料番号2は、生木で樹皮は無、形状は柱目板状で年輪数は15年、種類はシキミである。

試料番号3は、生木で樹皮は無、形状は板目状で年輪数は2年、種類はヒノキ科である。試料番号4は、炭化材で樹皮は無、形状は破片で年輪数は3-4年、種類はクスノキ科である。これらを半割して分析必要量切り出し、分析に用いる。

2. 分析方法

試料は、塩酸(HCl)により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム(NaOH)により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する(酸・アルカリ・酸処理 AAA:Acid Alkali Acid)。濃度は塩酸、水酸化ナトリウム共に1mol/Lである。

試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化(鉄を触媒とし水素で還元する)はElementar社のvario ISOTOPE cubeとIonplus社のAge3を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料をNEC社製のハンドプレス機を用いて内径1mmの孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC社製)を用いて、¹⁴Cの計数、¹³C濃度(¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度(¹⁴C/¹²C)を測定する。AMS測定時に、米国国立標準局(NIST)から提供される標準試料(HOX-II)、国際原子力機関から提供される標準試料(IAEA-C6等)、バックグラウンド試料(IAEA-C1)の測定も行う。

δ¹³Cは試料炭素の¹³C濃度(¹³C/¹²C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表したものである。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma;68%)に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う(Stuiver & Polach,1977)。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正に用いるソフトウェアは、Oxcal4.3.2(Bronk,2009)を用いる。較正曲線はIntcal13(Reimer et al.,2013)を用いる。

3. 結果

結果を第14表、第214図に示す。今回の試料は状態が良く、測定に必要な炭素量は十分回収できている。同位体補正を行った測定値は、試料番号1(H23年度291-1三ノ丸西大手石積遺構)が330±20BP、試料番号2(H23年度291-2三ノ丸西大手石積遺構)が380±20BP、試料番号3(H22年度155三ノ丸南東部SK2井戸か?)が160±20BP、試料番号4(H18年度120三日月堀下層)が640±20BPである。

暦年較正は、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、その後訂正された半減期(¹⁴Cの半減期5,730±40年)を較正することによって、暦年代に近づける手法である。測定誤差2σの暦年代は、試料番号1がcalAD1,489～1,641、試料番号2がcalAD1,446～1,624、試料番号3がcalAD1,666～、試料番号4がcalAD1,288～1,393である。Intcal13は、15世紀以降のこぎり状に大きく変動するので、これに該当する試料番号1、2、3については、年代幅が大きくなっている。試料番号3は、較正年代がIntcal13の範囲(1950年)を越えているが、異常値を示す1950年代後半の核実験の影響を受ける年代まではいかない。

石積遺構から出土した試料番号1,2については、年代値が興国寺城跡の存続時期と矛盾しない。一方で、井戸か?とされる三ノ丸SK2から出土した試料番号3は興国寺城跡廃城後の値が、三日月堀下層から出土した試料番号4は築城より古い値が出ている。これらについては、発掘調査の成果を併せて検討し、総合的に解析する必要がある。

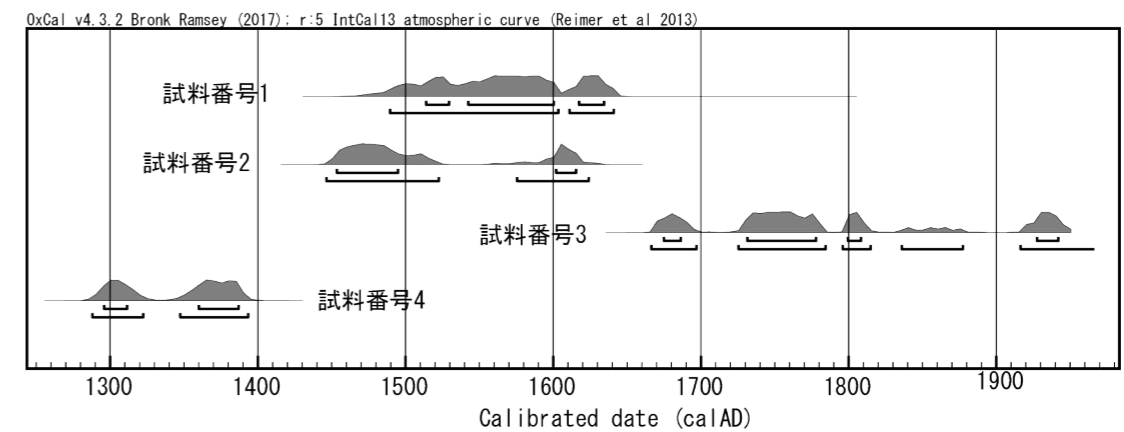
引用文献

Bronk RC.,2009,Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon ,51, 337-360.
 Reimer PJ, Bard E, Bayliss A, Beck JW, Blackwell PG, Bronk Ramsey C, Buck CE, Cheng H, Edwards RL, Friedrich M, Grootes PM, Guilderson TP, Hafliadason H, Hajdas I, Hatté C, Heaton TJ, Hoffmann DL, Hogg AG, Hughen KA, Kaiser KF, Kromer B, Manning SW, Niu M, Reimer RW, Richards DA, Scott EM, Southon JR, Staff RA, Turney CSM, van der Plicht J. ,2013,IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0–50,000 years cal BP. Radiocarbon ,55,1869–1887.
 Stuiver M, & Polach AH,1977, Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of ¹⁴C Data. Radiocarbon ,19, 355-363.

第14表 放射性炭素年代測定結果

番号	試料名	性状	方法	補正年代 (暦年較正用) BP	δ ¹³ C (‰)	暦年較正年代				Code No.	
						年代値					確率
						σ	2σ	σ	2σ		
1	291-1 A-TRE3 石積遺構	半炭化材 シキミ	1M (AAA)	330±20 (328±20)	-28.78 ±0.36	σ	cal AD 1514 - cal AD 1529	437 - 421 cal BP	0.111	YU-7324	pal-11133
							cal AD 1542 - cal AD 1600	408 - 350 cal BP	0.438		
							cal AD 1617 - cal AD 1634	333 - 316 cal BP	0.133		
						2σ	cal AD 1489 - cal AD 1603	461 - 347 cal BP	0.762		
	cal AD 1611 - cal AD 1641	340 - 310 cal BP	0.192								
2	291-2 A-TRE3 石積遺構	生材 シキミ	1M (AAA)	380±20 (379±20)	-25.58 ±0.31	σ	cal AD 1453 - cal AD 1495	497 - 456 cal BP	0.530	YU-7325	pal-11134
							cal AD 1602 - cal AD 1615	349 - 335 cal BP	0.152		
						2σ	cal AD 1446 - cal AD 1522	504 - 428 cal BP	0.707		
							cal AD 1575 - cal AD 1624	375 - 327 cal BP	0.247		
3	155 3 TRE7 SK1 井戸か?	生材 ヒノキ科	1M (AAA)	160±20 (158±20)	-26.20 ±0.33	σ	cal AD 1675 - cal AD 1686	276 - 264 cal BP	0.087	YU-7326	pal-11135
							cal AD 1731 - cal AD 1778	219 - 173 cal BP	0.398		
							cal AD 1799 - cal AD 1808	151 - 142 cal BP	0.075		
							cal AD 1927 - cal AD 1942	23 - 9 cal BP	0.122		
						2σ	cal AD 1666 - cal AD 1697	284 - 254 cal BP	0.161		
							cal AD 1725 - cal AD 1784	225 - 166 cal BP	0.428		
							cal AD 1796 - cal AD 1815	155 - 136 cal BP	0.108		
							cal AD 1836 - cal AD 1877	115 - 73 cal BP	0.065		
	cal AD 1916 - cal AD 1916	34 - cal BP	0.193								
4	120 三日月堀 下層	炭化材 クスノキ科	1M (AAA)	640±20 (638±20)	-26.90 ±0.36	σ	cal AD 1296 - cal AD 1311	655 - 639 cal BP	0.246	YU-7327	pal-11136
							cal AD 1360 - cal AD 1387	591 - 564 cal BP	0.436		
						2σ	cal AD 1288 - cal AD 1322	663 - 628 cal BP	0.386		
							cal AD 1347 - cal AD 1393	603 - 557 cal BP	0.568		

1)年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
 2)BP年代値は、1950年を基点として何年前であることを示す。
 3)付記した誤差は、測定誤差σ(測定値の68.2%が入る範囲)を年代に換算した値。
 4)AAAは酸・アルカリ・酸処理を示す。
 5)暦年の計算には、Oxcal v4.3.2を使用。
 6)暦年の計算には、補正年代(0)で暦年較正用年代として示した、1桁目を丸める前の値を使用している。
 7)1桁目を丸めるのが慣例だが、較正曲線や較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
 8)統計的に真の値が入る確率は、σが68.2%、2σが95.4%である。



第215図 暦年較正結果

第Ⅵ章 調査の成果と課題

第 1 節 発掘調査成果からみる城郭の最終段階

長年にわたる発掘調査によって、地下に埋没していた興国寺城跡の遺構や遺物の一端が明らかになった。大規模な空堀や石垣を配した虎口、さらには重層的に残る遺構群や改修痕跡、また総量は決して多くないものの 15 世紀後半から 17 世紀初頭まで連綿と途切れることなく出土する遺物は、興国寺城が中世後期から近世初頭まで東駿河の拠点城郭として機能していたとする文献史料と合致する成果であるといえよう。

しかし史跡という性格上、下層遺構の調査は十分とは言えず、その存在は確認できるものの、1 世紀以上にわたる城郭の変遷は必ずしも明らかにできなかった。そこで、本節では将来的な史跡整備及び活用を見据えて、城郭の最終段階、文献史料によれば 17 世紀初頭、遺物の年代に当てはめれば、瀬戸美濃大窯 4 段階から登窯 1 小期ごろに位置づけられる主要な遺構群についてまとめてみたい。

(1) 本丸

本丸は外郭を大土塁に囲まれ、北側には石垣を伴った伝天守台が備わる。神社地を除いた本丸北側は後世の改変により明確な遺構は検出できなかったが、本丸虎口では 1 号礎石建物跡 (SS1) や空堀を、本丸中央部では 2 号礎石建物跡 (SS2) や石組水路 (SD1) を検出した。

SS1 は 3 間×2 間、幅 5.4 m×奥行 3.6 m を測る礎石建物で、本丸虎口の北側にて検出された。東西両側が本丸土塁に挟まれていることから、本丸門と想定できる。本丸のほぼ中心に位置する SS2 は残存状況が悪く、奥行の規模ははっきりしないが、幅は現位置を保っていると考えられる石列間にて約 6.0 m を測り、これは SS1 よりも若干大きい規模である。SD1 は両 SS 遺構の西側に南北に走り、また南北の主要溝のほかに西への分岐も認められる。検出されていないものの、本来存在していた本丸内の諸施設へも接続していたと考えられる。

SS2 の西側と SD1 は接続し、その SD1 は本丸虎口の SS1 の内部を通して本丸空堀に通じることから、これらの遺構群は同時期に存在したと考えられる。このうち SD1 からは近世の肥前陶磁器が出土しており、これらは廃城後に廃棄されたものと想定されることから、SD1 も最終段階まで開口された水路であり、これと同時期に存在した可能性が高い SS1・SS2・空堀、そして SS1 を挟み込む本丸土塁、さらに土塁上に構築された伝天守台、西櫓台、石垣なども全て近世初頭に併存した施設といえる。これらが構築された明確な時期は不明であるが、この内容は『城築規範』「興国寺城」絵図に描かれる城の姿とほぼ合致している。

本丸出土の遺物は瀬戸美濃古瀬戸後Ⅳ期から数が増加し始めるが、出土数のピークは大窯 3・4 段階にある。大窯 4 段階に位置づけられる志戸呂も一定量出土しており、このことは近世初頭において、本丸中央部から虎口に城郭の諸施設が存在したとする遺構の成果と一致する。

(2) 伝石火矢台

伝石火矢台では後世の攪乱によって改変を受けていたが、土塁と絵図にある「カクシ口」と想定される位置を確認した。土塁は本丸から南に延びるものと南から北へ延びる 2 本が確認され、これらは食い違いの構造となっている。このことから伝石火矢台は本丸の東側から進入する小曲輪と認識でき、さらに本丸土塁によって区画されることから、この小曲輪も最終段階に機能していた可能性が高い。また東側には時期不明であるものの、北曲輪へ通じる道と東外堀へ至る道が確認され、この構造は絵図にある「カクシ口」と対比が可能である。

伝石火矢台の南側には本丸空堀 (東) が続いている。伝石火矢台が南へ弧状に張り出していることから、この形状に合わせて本丸空堀 (東) も屈曲している。ここでも本丸との一体的な構造を見ることができよう。

出土遺物も本丸と類似性が高く、瀬戸美濃古瀬戸後Ⅳ期のもも認められるが、相対的に大窯後半段階の出土数が多い。また大窯後半段階並行の初山や志戸呂も一定数出土している。

(3) 二ノ丸

二ノ丸では表土直下で早々に地山面が検出されたところも多く、造成土や地山にまで掘り込まれるような遺構は確認されなかった。絵図と対比すれば、二の丸は三方を土塁で囲まれていたと考えられるが、これらも南西部に一部が残存するのみで、ほとんどが滅失している。

ただし二ノ丸の内部には、完全に埋め戻されて最終段階にはその姿を消していた本丸三日月堀が検出されている。最終段階の遺構ではないため、本遺構については次節に記載する。

二ノ丸出土遺物は、本丸や伝石火矢台と同様、瀬戸美濃古瀬戸後Ⅳ期から出土が認められ、大窯段階で出土数が多くなる。大半が大窯 3・4 段階の遺物で、また大窯後半段階の志戸呂や初山も出土している。

(4) 二ノ丸虎口

二ノ丸虎口は 2 度の改修を経て、最終的に石垣堀を伴う虎口へと造り替わっていることが確認された。絵図において二ノ丸空堀 (西) は三日月形に描かれているが、実際に検出されているは 3 度の折れをもつ構造で、北端は西大手、そして西外堀へと通じているが、上層は失われているため、本来の幅や深さは不明である。二ノ丸空堀 (東) は、西端部にのみ石垣が L 字に積まれている。石垣は野面積みで、残存する高さは約 2.0 m である。裏込めを伴い、立ち上がりの角度は 65 度以上の急傾斜である。空堀 (東) の東側には石垣が伴わず、素掘りの堀となっている。なお、二の丸空堀では石垣堀堀底から大窯 4 段階の挿鉢が出土しており、廃城後まで機能した遺構である。これを裏付けるものとして、明治期の「根古屋村区分図」において、道や畑として二ノ丸空堀の形状の畑が描かれている。

改修前の土橋 1 は幅 5.4 m で、これは本丸虎口の SS1 と同規模であり、土橋 2 は 7.2 m と本丸虎口よりも幅広になる。仮に本丸 SS1 の礎石の「1 間 = 1.8 m」を尺の基準とするならば、土橋 1 は 3 間幅、土橋 2 は 4 間幅となり、最終段階の石垣堀段階、すなわち第三章第 4 節に示した土橋 3 段階では、対になる西側の構造が不明であって規模は確定しないものの、土橋 2 よりも拡張されていると考えられることから 4 間幅以上の土橋となる。本丸虎口は礎石による門が伴っているが、ここでの検出はない。しかし二ノ丸虎口は石垣を伴い、なおかつその幅も本丸よりも広がっているという構造は、かつては門が存在し、二ノ丸以北と三ノ丸との間においても「内」と「外」との意識の差が存在した可能性を示唆させる。

(5) 三ノ丸

三ノ丸では、主に外郭を構成する土塁及び外堀の構造確認調査と曲輪内部における遺構確認調査が主であった。土塁と外堀における主な調査成果として、土塁と外堀の構築時期が確定されたことが特筆される。これは、三ノ丸南西部において最終段階の土塁構築前に古段階の土塁と堀があり、これらを礫とともに人為的に廃棄したうで、さらに外側へ城域を拡張している状況が確認され、またこの廃棄礫の中に大窯 4 段階の志戸呂挿鉢が伴っていたことを根拠とする。旧外郭ラインを壊す「破城」と考えられるが、この成果から現在の外郭土塁と外堀は 16 世紀末以降に構築されたといえる。

この他の成果として、三ノ丸南西部の外郭土塁の断ち割り調査により、石組の暗渠 (SD4) を検出したことが挙げられる。三ノ丸内から城外への排水施設と考えられ、外郭土塁と同時期に構築されていることから、本遺構も 16 世紀末以降の城郭最終段階に位置づけられる遺構である。また土塁の断ち割り断面から、土塁は上部ローム層を基盤として掘り残し、その上に積んでいることが明らかになった。

北西部から西大手にかけての外堀の調査では大手口に関する遺構は検出されなかったが、外堀と岩盤層を掘削した平坦面、そして平坦面の西端部において石積を確認した。石積は土層観察から廃城後に破却した土塁の土留めとして積まれた可能性が高いと考えられるが、平坦面は、西大手に伴う城郭段階の施設の可能性がある。時期は確定できていないが、城郭に伴うものであるならば、外堀構築の時期と同じく 16 世紀末以降であろう。

東大手周辺は大きく改変を受けており、東大手の正確な位置を確定することはできなかったが、三ノ丸南東部においては外堀の造り替えが認められ、改修後の形状が絵図における東大手南側の外堀形状と一致すること

から、現在の県道直下に東大手が存在していた可能性が高いと考えられる。

土塁や外堀では大きな成果はあったが、曲輪の内部では最終段階に位置付けられる遺構は検出されなかった。しかし先述のように16世紀末において「破城」の痕跡が認められることや石組暗渠であるSD4の存在から、16世紀末を前後して曲輪として使用されていたことは確実である。

県道沿いということもあり、後世の改変が城内でも最も大きいためか、出土遺物は本丸などと比べて少ない。瀬戸美濃は大窯後半段階が多いという傾向はなく、古瀬戸後Ⅳ期から登窯まで満遍なく出土する。また志戸呂や初山の出土も認められる。

(6) 大空堀

大空堀は現状で堀幅は最大30m、伝天守台との比高差は15mを測る興国寺城跡の最大空堀である。東西の延長は約150mで尾根を分断している。堀底は岩盤層まで達し、発掘調査では、さらに4m下に堀底があることが判明した。また大空堀の東側では古段階の大空堀の痕跡が認められ、大空堀自体は改修を受けて現在の形となっているようであるが、最終段階まで機能していた空堀である。

また大空堀の北曲輪側には平坦面が存在していることが確認された。「興国寺城」絵図ではどのように大空堀を渡っていたのかは明らかではないが、「興国寺城」と構造が一致し、興国寺城の誤りであると指摘される同じく城築規範の「禅徳寺城」絵図(史料編 第2章 絵図史料集 史料番号10)には大空堀の東西に道が描かれており、平坦面は道と関連する可能性がある。発掘調査を実施していないため、詳細は今後の調査に委ねられるが、平坦面(特にTRE2とTRE3の間)には橋が架かっていたのかもしれない。

なお、ボーリング調査の結果からは、大空堀の南側の伝天守台は約8mの盛土層からなり、表層～3.5m付近には角礫が全体的に少量混じることが判明している。少量という点に疑問が残るが、これは大空堀掘削に伴って発生した岩盤層の角礫が、南側の伝天守台築造の際の盛土に混入した可能性がある。

出土遺物は少なく、ほとんどが瀬戸美濃登窯である。

(7) 北曲輪

北曲輪は、「興国寺城」絵図には「原」としか描かれていない曲輪である。しかし昭和27年撮影の航空写真には北側に三日月堀と空堀1が写っており、北からの守りとなる馬出があったことが判明している。現在三日月堀は新幹線によってその大部分が滅失しているが、端部のみ調査を行った。調査トレンチが狭く、堀底の確認には至っていないが、その幅は約11mで、後述する本丸三日月堀よりも規模が大きい。

空堀1は、幅約13.5m、深さ4.2mを測るが、覆土中層に整地層が認められることから、改修が行われ、最終段階における空堀1は、堀底幅3.0m、深さ4.2m程度の箱堀であったと考えられる。遺物は廃城後も開口していたことから瀬戸美濃登窯のものが認められ、少量ながら志戸呂や初山など城郭最終段階の時期に相当する遺物も出土している。ただし志戸呂は他の曲輪では出土例が最も多い播鉢の出土がない。一方、古い時期のものとして瀬戸美濃古瀬戸後Ⅳ期から大窯前半段階の遺物があるが、大窯3段階前半は1点、3段階後半は0点と少ない。遺物の出土位置の記録がなく、断定することはできないが、これらは箱堀への改修以前の遺物の可能性がある。

空堀1の南側において現状では土塁上の高まりがあるが、調査では土塁と断定するほどの成果は得られなかった。ただし本地点からは、遺物として少量ながらも瀬戸美濃大窯3～4段階の遺物が出土している。遺構に伴うものではないが、空堀1の箱堀段階に相当する年代の遺物である。また表土直下において多数の土坑やPT群、重複する溝などが検出されている。北曲輪全域における遺構外遺物としては瀬戸美濃登窯の遺物も多数見られるため、後世の畑などによる改変によって掘られたものもあろうが、いずれも時期は明らかにできなかった。曲輪の南部については絵図に記載がなく、平成19年度の調査ではじめてその存在が確認された空堀2・3が検出されているが、出土遺物に大窯後半段階のものはなく、また志戸呂や初山も出土しないことから、最終段階では埋没している堀である。また平成30年度の調査においては、空堀3の上層に造成面が2面確認さ

れており、この成果は出土遺物から想定される埋没状況を補完する結果といえる。したがって造成面2が最終段階であろう。

北曲輪南西部の小曲輪では、西側の面積を拡張するために盛土をしている可能性が高いが、一方で弥生時代の方形周溝墓が残存していることから、城郭段階において大きな造成は受けていないと判断される。「禅徳寺城」絵図では、伝天守台からの道が接続する様子が描かれているが、その痕跡は確認できなかった。

以上のことを踏まえると、最終段階における北曲輪は北側に三日月堀と空堀1による馬出を備え、曲輪の南側は造成された広い空間が備わっていたと判断される。なお、南側の空間は明確な城郭段階に位置づけることが可能な遺構が検出されておらず、何かしらの施設が存在した可能性はあるが、詳細は不明である。

(8) 清水曲輪

清水曲輪は曲輪内において4段の平坦面が認められ、階段状になっている。最上段では空堀が確認されており、この空堀は大空堀のように中央が北側へ凸型に張り出している。空堀の位置は大空堀と直線的に配されているものであり、ふたつの空堀を合わせると約300mに渡って空堀が城内を東西に通過していることになる。この空堀も現状では畑となっていたが、昭和27年の航空写真に堀の形が写されている。したがって、最終段階においても開口していた空堀である。清水曲輪の空堀の幅は最大約15.0m、深さは4.5mを測る。しかしこの空堀でも覆土中層に黄色ローム土を用いた整地層が確認されており、箱堀に改修されている痕跡が確認されている。このことから、最終段階では箱堀を呈し、深さは3.0mと浅くなっている。なお、この他に清水曲輪では最終段階に位置づけられる遺構は検出されなかった。

トレンチ調査ということもあり出土遺物は少なく、瀬戸美濃は古瀬戸後Ⅳ期、大窯1段階、登窯1小期があるのみである。全体としても大窯後半段階や志戸呂、初山の遺物の出土数は多くない。近世初頭においてどのような曲輪利用がなされていたのかは今後の検討課題である。

(9) 清水小曲輪

北曲輪と清水曲輪の間の谷に平坦面が作り出され、ここに清水小曲輪がある。絵図にも描かれず、また遺構はいずれも時期不明で、曲輪がどの段階で造成されたのかははっきりしない。出土遺物は少量で、古瀬戸前期・中期のものもあるが、古瀬戸後Ⅳ期から大窯前半段階が相対的に多くあり、大窯後半段階は少ない。ただし志戸呂や初山は出土している。登窯は志野皿が突出して出土するが、その他の器種は希薄である。

以上、最終段階の主要な城郭遺構についてまとめた。これを城郭全体図に表すと、第216図のようになる。本丸や三ノ丸の調査によって、外郭を構成する土塁は16世紀末以降に築かれたことが判明しており、最終段階の姿はおおむね絵図と一致する。北曲輪と清水曲輪については絵図には描かれておらず、最終段階において城郭の曲輪として機能していたかは定かでないが、北曲輪空堀1と清水曲輪空堀は埋没せず、開口している。曲輪内部における建物跡は本丸においてのみ検出されただけで、その他の曲輪では明らかにできなかった。

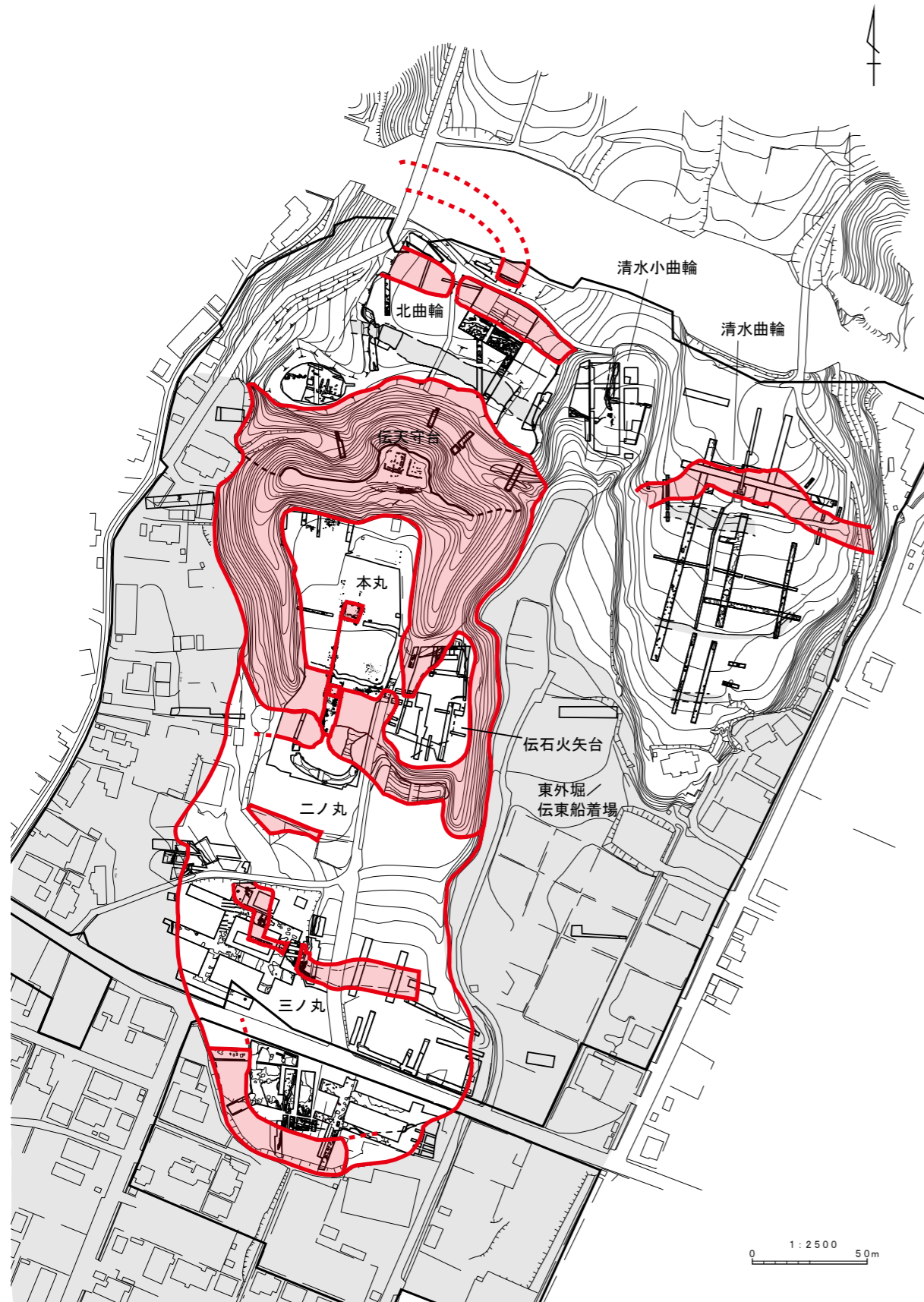
第2節 最終段階以前の遺構と改修痕跡

興国寺城跡の発掘調査によって、城郭最終段階の姿は、絵図に描かれる内容と相応の共通性がみられることが確認された。このことは発掘調査の大きな成果の一つであるが、この他に特筆すべき事項として、現状見えている遺構でも改修を経て最終段階に至っていること、そして絵図には描かれていない未知の遺構が検出されたことが挙げられる。したがって、本節では改修痕跡および最終段階以前の遺構をまとめておきたい。

(1) 本丸虎口(本丸丸馬出)

本丸虎口では、「三日月堀+本丸空堀2による丸馬出」から「空堀1+礎石門を伴った平入り虎口」へと改修されている。以下では、前者を「段階1」、後者を「段階2」と呼称する。

「段階1」の三日月堀は最大幅4.3m、深さ3.8mを測り、堀底幅は0.6mという幅の狭い薬研構造である。



第 216 図 興国寺城最終段階 遺構配置図

下層には自然堆積層が認められ、ここから瀬戸美濃大窯 3 段階前半の播鉢が出土している。そして上層は本丸側から人為的に埋め戻されて破却されており、このことは城郭主要部である本丸虎口の造り替えという象徴的な行為であり、すなわち「破城」と理解できる。そしてこのような堆積状況が確認される三日月堀において、遺物には瀬戸美濃大窯 4 段階と断定できるものや城内で一定量の出土が認められる志戸呂、初山の出土はない。したがって、本遺構は大窯 4 段階以前には破却されている可能性が高いと考えられる。

三日月堀と対応するのが空堀 2 である。三日月堀は完全に埋め戻されているが、空堀 2 は堀底の攪いを行うことはせず、下層に溜まった自然層の上面を整地したうえで、箱堀（空堀 1）へと改修がなされている。堀底幅は約 2.0 m で、上層は空堀 1 によって幅が広がられているため、堀の上幅は不明であるが、仮に覆土中層に認められる整地層より下層の角度のまま立ち上がっていたとするならば、上幅は約 8.0 m、深さ約 6.0 m を測る。三日月堀とセットとなる空堀であるが、本丸側の空堀 2 のほうが三日月堀よりも巨大な堀である。

「段階 2」は先述の通り城郭の最終段階の平入り虎口である。空堀 1 は整地面を堀底とし、堀の上幅は 14.0 m と空堀 2 の倍近く広がられているが、深さは 3.5 m と浅くなっている。三日月堀の破却と空堀 2 から空堀 1 への改修を同時と想定すれば、これが行われた時期は三日月堀破却の時期である大窯 3 段階以降、すなわち 16 世紀後半以後と位置付けられる。そして「段階 2」の虎口は廃城まで使われたため、17 世紀初頭まで「段階 2」の虎口形態である。

(2) 北曲輪馬出

北曲輪でも「北曲輪三日月堀（以下、三日月堀）+ 北曲輪空堀 1（以下、空堀 1）による丸馬出」が確認されている。三日月堀は大半が滅失していることから、詳細は不明であるが、その南側に位置する北曲輪空堀 1 は、本丸虎口と同様、覆土中層に黄色ローム土を用いた整地層が確認され、幅の狭い薬研構造から箱堀へと改修されている。

薬研構造の規模は推定上幅 8.0 m、堀底幅 3.5 m、深さ 6.7 m、箱堀段階は上幅が約 13.5 m である。空堀 1 とセット関係にある三日月堀は、端部のみ調査しか行われていないが、推定上幅は 10.0 m を測り、空堀 1 の薬研段階と比べれば巨大である。本丸三日月堀は人為的に埋め戻されているが、北曲輪の三日月堀は最終段階まで存続するという点で違いがあり、本丸と比べて巨大な北曲輪三日月堀は最終段階以前で堀幅が広がっている可能性がある。

(3) 清水曲輪空堀

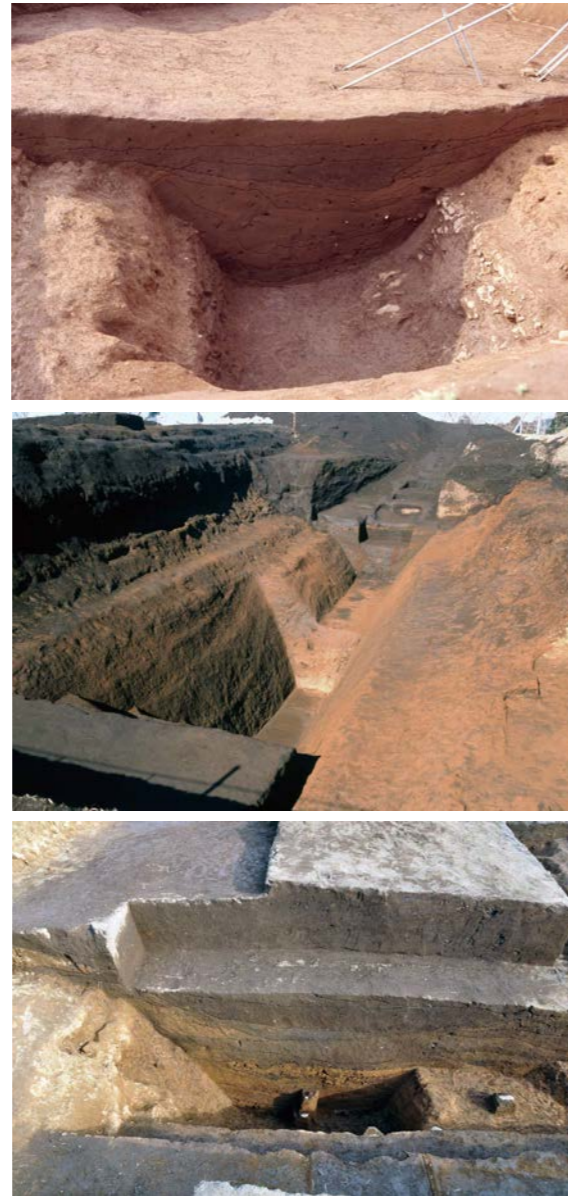
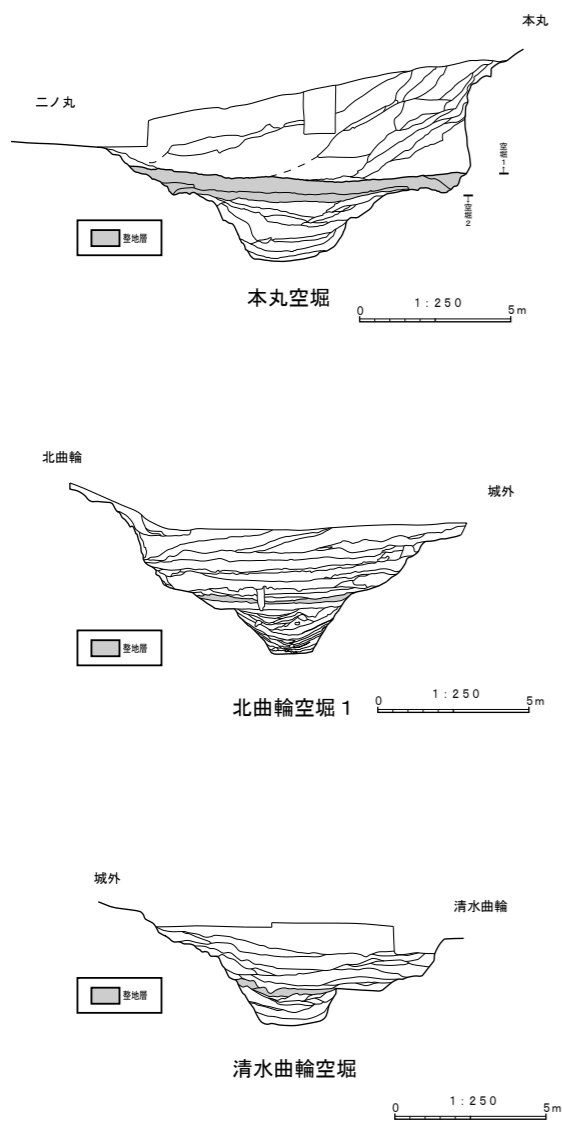
清水曲輪でも曲輪北側において覆土中層に整地層が認められる空堀が検出されている。本丸空堀や北曲輪空堀 1 と同様、下層の自然堆積層を攪うことはせず、自然堆積層の上面を整地して箱堀へと改修している。清水曲輪には三日月堀は伴わないものの、黄色ローム土を用いた薬研堀から箱堀への改修痕跡は北曲輪空堀 1 と共通する。

以上 (1) ~ (3) の空堀の改修痕跡は、いずれも覆土中層に整地層が認められ、幅の狭い堀から幅の広い箱堀へと改修されていることが共通している（第 217 図）。北曲輪空堀 1 や清水曲輪空堀は出土遺物が少なく、これら遺構単独で改修時期は明らかにできないが、本丸虎口の改修が瀬戸美濃大窯 3 段階以降であることを考慮すれば、同様の改修方法を取る北曲輪・清水曲輪でもその時期に大きな改修が行われている可能性が高い。

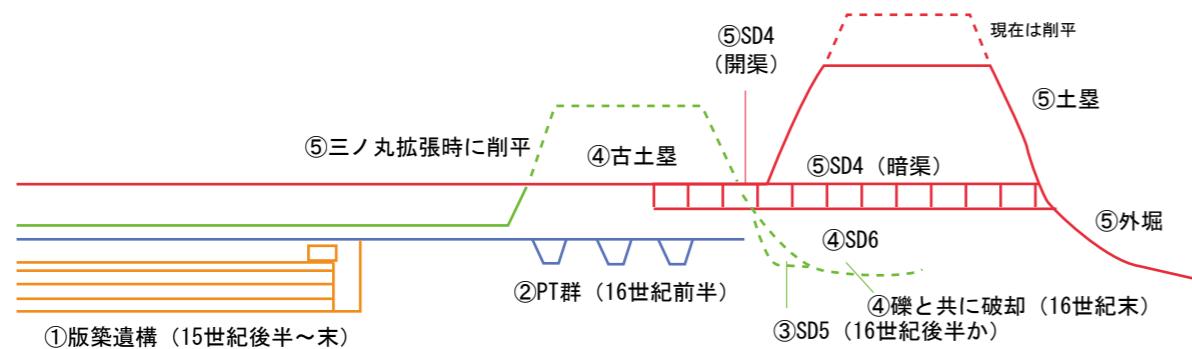
上記の結果から、大窯 3 段階前半段階における城域は、本丸を南端とし、北端を北曲輪、東に清水曲輪を備えた構造であった可能性を想起させる。もちろん本丸以南も舌状台地の先端部であり、城の守りを考えた際に放置してあったとは考えづらい。特に三ノ丸は街道沿いということもあって、なにかしらの施設があったと想定しているが、最終段階及び後世の改変を大きく受けており、遺構の確認には至っていない。

(4) 北曲輪空堀 2・3・造成土

北曲輪空堀 2・3 は検出当初は 1 条の堀と認識していたが、その後の調査によって 2 条の空堀が重複している状況が確認された。より新しい空堀 2 は出土遺物に志戸呂や初山を含まないことから、大窯 3 段階後半以前



第 217 図 本丸・北曲輪・清水曲輪の改修痕跡



第 218 図 三ノ丸検出遺構 変遷模式図

に埋没していたと考えられる。そして空堀 2 に切られる空堀 3 では出土遺物は少なく、年代の確定は困難であるが、北曲輪第 7 調査区において検出された空堀 3 埋没後の造成土 1 からは、からわけが多量に出土している。本報告書と同年の調査であって調査成果を十分に検討する時間がなく、またからわけの編年ができていないことを断りつつも、その年代は 16 世紀中葉頃との見通しをもっており、これは空堀 2 と同時期の可能性がある。いずれにしても空堀 2・3 は最終段階には埋没していることは確実である。

(5) 三ノ丸

最も遺構の重複関係が認められ、さらに築城以前に位置づけられる遺物も出土しているのが三ノ丸である。確認できる最古級の遺構は、南西部にて検出した「版築遺構」で、黒色土と黄色ローム土を交互に重ねながら基壇のように積み上げ、周囲には溝と石列が伴っている。出土遺物は染付碗 C 群や瀬戸美濃古瀬戸後 IV 期に位置づけられるものがあり、このことから 15 世紀後半～末頃の遺構と評価できる。

版築遺構よりも南側には造成土に掘り込まれた「PT 群」が展開している。造成土の構築時期は不明であるが、PT 群の中には大窯前半段階の遺物を伴うものもあり、16 世紀前半の遺構である可能性が高い。そしてこの造成土と PT 群を覆っているのが、土層観察ベルトでのみ検出された「古土塁」である。古土塁は黒色土とロームブロック土を用いて版築されており、その南側には古段階の外堀である SD6 が付随する。SD6 の幅は外堀を構成するには 2.0 m と狭いが、三ノ丸南東部で最終段階の外堀に接続することから、古段階の外堀である可能性が高い。そして SD6 は最終的に礫とともに埋め戻されたのちに最終段階の外郭土塁が築かれている。前述の通り、SD6 は廃棄礫とともに大窯 4 段階並行の志戸呂播鉢が出土しており、このことから SD6 の破却在 16 世紀末以降であることが考えられ、したがって古土塁 + SD6 の旧外郭ラインは、それ以前の遺構となる。また SD6 に切られる SD5 もあり、SD5 は出土遺物に乏しく時期の特定が困難であるが、大窯 3 段階の稜皿片が出土していることから、これに基づけば、16 世紀後半の遺構である。

以上が三ノ丸の遺構変遷で、これを概念的に表したのが第 218 図である。古い段階から整理すれば、(古) ①版築遺構 (15 世紀後半～末) → ② PT 群 (16 世紀前半) → ③ SD5 (16 世紀後半か) → ④古土塁 + SD6 (16 世紀末に破却) → ⑤外郭土塁 + 外堀 (廃城まで) の順となる。さらに三ノ丸には 12～13 世紀の滑石製鍋や渥美甕、古瀬戸中期の遺物の出土があり、これらの遺物は城郭に伴うものではないが、三ノ丸では 12 世紀から近世初期に至るまで継続的な利用があったと考えられる。

大窯 3 段階前半には北曲輪と本丸に三日月堀が付くことから、これら曲輪が城郭の主要であったと考えられるが、この段階の三ノ丸は遺構の検出状況は希薄であるものの、街道沿いの曲輪として機能した可能性がある。

第 3 節 興国寺城の変遷と今後の課題

以上、興国寺城跡の発掘調査によって判明した事項をまとめた。数多くの遺構が存在するが、時期の特定ができた遺構は少ない。課題も多く、継続的な検討を要することを考慮しつつも、現状判明している曲輪ごとの遺構変遷をまとめたのが、第 15 表である。

北曲輪や三ノ丸には比較的まとまって 12～13 世紀の遺物が出土しているが、初段階の遺構は三ノ丸の版築遺構である。これは街道沿いに存在した寺院に関係する可能性もあろう。伊勢宗瑞の存在を考古学から明らかにすることは不可能であるが、城の全域に渡って古瀬戸後 IV 期の遺物の出土が増加することから、少なくとも 15 世紀後半にはこの周辺での土地利用が活発化したとの評価は可能であろう。

空堀などの城郭に関係する遺構は大窯前半段階から見られるようになる。今川義元が興国寺城の普請を行ったとされるのは 1549 年のことであり、北曲輪空堀 2・3 は概ねこの時期に相当する。最も古い空堀が最も標高の高い北曲輪に存在することは、山上と街道沿いが一体的に利用されるような体制が成立した可能性がある。この成果は、当該期に本格的な城郭となったとする文献資料の成果と一致している。

この時期に引き続いて、大窯 3 段階 (16 世紀後半) には北曲輪と本丸に丸馬出が備わり、城郭として体裁

第 15 表 興国寺城跡主要遺構変遷表

城主	瀬戸美濃 編年	本丸・伝天守台	二ノ丸・二ノ丸虎口	三ノ丸	北曲輪	清水曲輪
	1450 古瀬戸後Ⅳ			版築遺構		
	1480 大窯 1・2			PT群	空堀 3 ↓ 空堀 2	
1549 今川	1560				造成土	
1568 北条	大窯 3	本丸三日月堀 + 空堀 2 ↓ ?	二ノ丸虎口土橋 1 ↓	SD 5? ↓ 古土塁 + SD 6	北曲輪 三日月堀 + 空堀 (薬研)	空堀 (薬研) ↓ 空堀 (箱)
1572 武田						
1582 徳川						
1590 中村	1590	SS 1・2 SD 1 土塁 空堀 1 伝天守台 伝西櫓台 大空堀	二ノ丸虎口土橋 3	外郭土塁 外堀 SD 4	北曲輪 三日月堀 + 空堀 (箱)	空堀 (箱)
1601 天野	大窯 4 登窯 1				拡張?	
1607 廃城						

赤文字は最終段階に存在した城郭施設を示す

瀬戸美濃の年代は愛知県史編さん委員会 2007 を参照。ただし生産地の年代である。

がより整うようになる。16 世紀後半（永禄・元亀年間頃）には北条氏と武田氏との抗争が繰り広げられており、武田氏滅亡後、興国寺城は徳川氏の支配下に入る。1590 年の豊臣秀吉による小田原攻略の際にも興国寺城には兵が入ったとされ、三ノ丸にも土塁や空堀が築かれるようになるのもこうした 16 世紀後半頃の情勢と関連して理解したい。

北条氏滅亡後、駿河国は徳川氏から豊臣氏家臣の中村氏の支配になり、関ヶ原の戦い以後は、徳川氏家臣の天野氏が興国寺城を治める。大窯 3 段階以降には伝天守台や大土塁、礎石門などが築かれるが、これらがどの城主によって築かれたのかは現状では判断できない。ただし伝天守台は中心に大型の礎石建物を持ち、両翼に櫓、建物下には石垣を備える構造をとっており、一見近世城郭の体もある。したがって、伝天守台周辺は現時点で 1590 年以前の徳川氏による築造の可能性は否定されないものの、大窯 3 段階以降の本丸虎口改修とは別時期、すなわち最終段階に位置づけられる豊臣氏家臣の中村氏か、もしくは近世大名の天野氏のどちらかによって築かれたと想定しておきたい。少なくとも天野氏段階にはこれらの施設は利用されていたのは確実であり、そしてそのまま廃城に至ったと考えられる。

以上のような変遷案には課題も多く、その解明には今後も継続的な調査を要する。三ノ丸に続いて、多くの時期変遷が認められる北曲輪の造成状況はいまだ解決できていない課題であり、また初期の調査ということもあって考古学的情報が不足している中で取り組んだ伝天守台周辺や本丸の調査は、現在の視点で再度検証をする必要がある。また周辺城郭との比較研究やそれに伴ってのかわらけ編年の確立など、広い視野での考古学的な課題のみならず、考古学以外の研究の進展と学際的な相互研究も必要となっていくだろう。課題は多いが、今回の調査によってこれまでの文献史学の成果によって評価されてきた興国寺城の実態が考古学から明らかになってきたと考える。

写 真 图 版



興国寺城跡全景写真（昭和 27 年）国土地理院



興国寺城跡全景写真（昭和 54 年）



興国寺城跡全景及び外堀調査状況（平成 21 年度撮影）



本丸大土塁（平成 30 年度撮影）



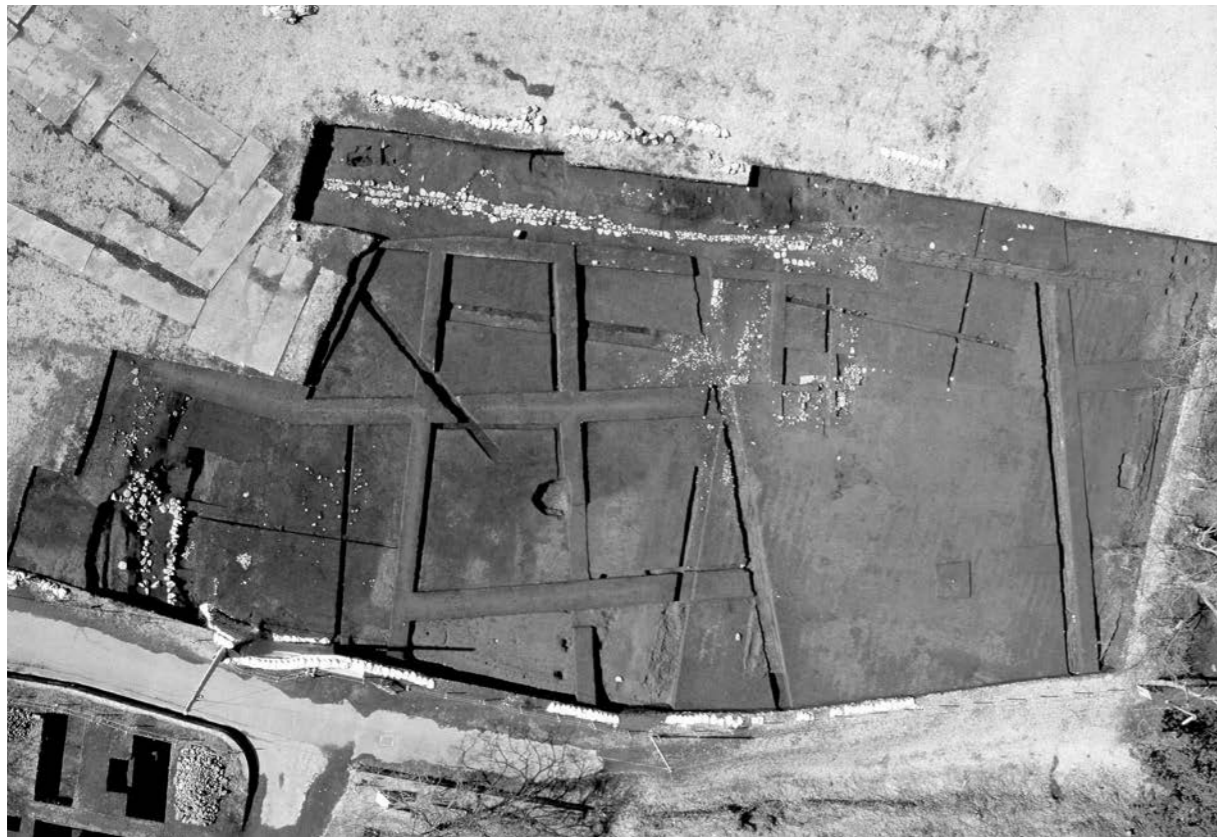
興国寺城跡より駿河湾を望む（平成 30 年度撮影）



本丸全景（平成 16 年度撮影）



本丸全景（南から 平成 16 年度撮影）



本丸全景（平成 17 年度撮影）



本丸 SD1・SS1 検出状況



本丸 SS1 検出状況（南から）



本丸 SD1 宝篋印塔検出状況



本丸 SD1 検出状況



本丸 SD1 分岐部検出状況



本丸 SD1・SS2 検出状況



本丸石列 3 検出状況



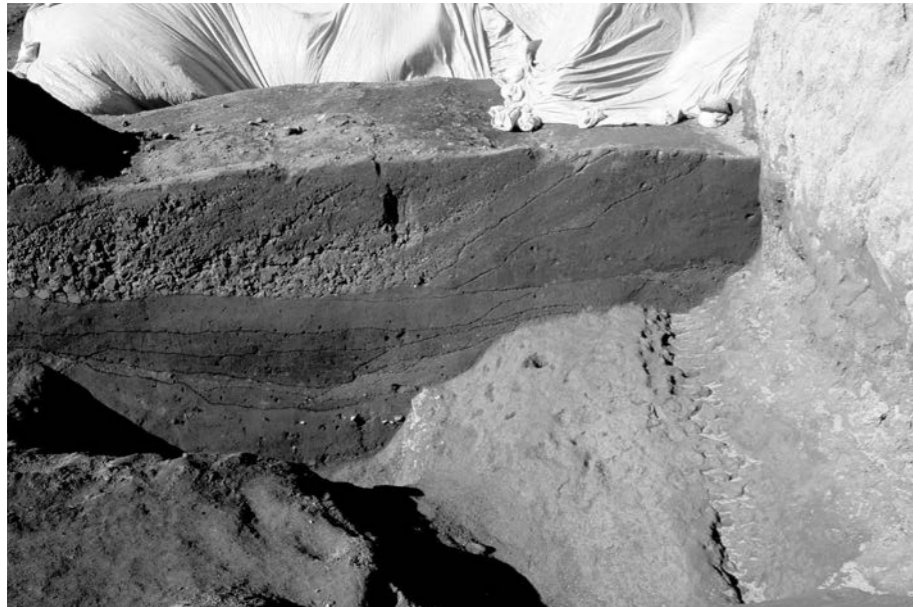
本丸石列 4 検出状況



本丸 SG4 検出状況



本丸空堀（東）セクション



本丸空堀（東）整地層



本丸空堀
（平成 17 年度調査地点）
検出状況（南西から）



本丸空堀
（平成 17 年度調査地点）
整地層



本丸空堀
（平成 17 年度調査地点）
検出状況



本丸空堀東端部
（平成 17 年度調査地点）
検出状況



本丸三日月堀全景



本丸三日月堀セクション



本丸北西部全景



本丸北西部（西から 平成15年度撮影）



石火矢台全景
(平成 17 年度撮影)



石火矢台北側セクション



石火矢台東側セクション



石火矢台 SG1 検出状況



二ノ丸全景
(平成 18 年度撮影)



二ノ丸東部全景



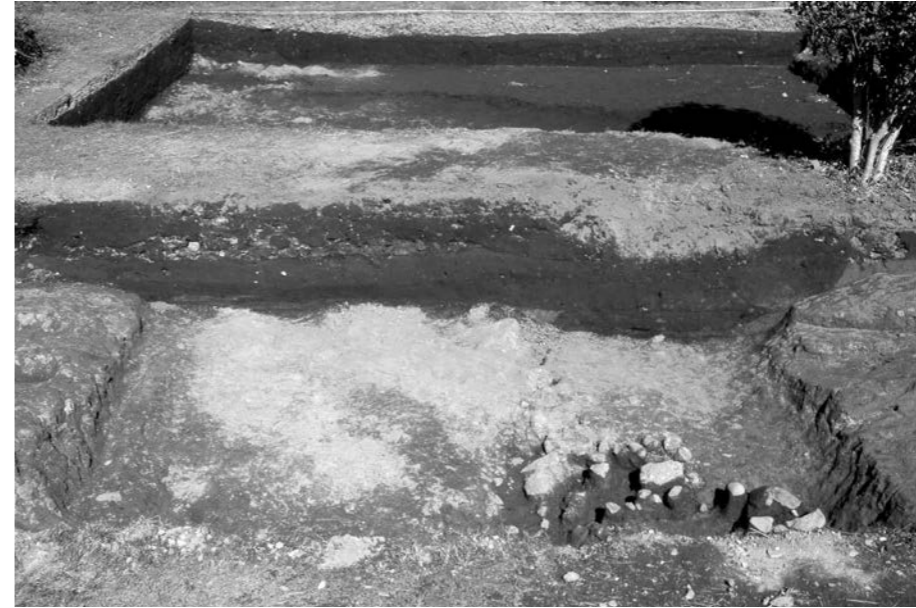
二ノ丸南東部土塁確認
トレンチ (北から)



二ノ丸虎口全景（平成 27 年度撮影）



二ノ丸虎口石積 1～4 全景（平成 28 年度撮影）



二ノ丸空堀（西）セクション



二ノ丸空堀（西）検出状況



二ノ丸空堀・石積 1
検出状況



二ノ丸虎口 SD3・SD4
検出状況 (南から)



二ノ丸虎口石垣全景 (北から)



二ノ丸虎口石垣堀
西面・北面検出状況
(南から)



二ノ丸虎口石垣裏込め
検出状況



二ノ丸虎口・石垣隅部
検出状況



二ノ丸空堀 (東) 石垣
確認状況
(北から 平成 25 年度撮影)



二ノ丸空堀 (東) 石垣
セクション (南東から)



二ノ丸空堀 (東)
西端部セクション (東から)



二ノ丸空堀 (東)
西端部堀底確認



二ノ丸空堀 (東)
H26TRE1-2 (北西から)



二ノ丸空堀 (東)
H26TRE2 セクション
(北から)



二ノ丸空堀 (東)
H26TRE2 セクション
(東から)



二ノ丸虎口石積 2
及び B セクション (北から)



二ノ丸虎口石積 2・3
検出状況及び A セクション
(北西から)



二ノ丸虎口石積 3
及び C セクション (南から)



二ノ丸虎口石積 3・4
検出状況 (西から)



二ノ丸虎口石積 3・4
検出状況 (北西から)



二ノ丸虎口石積 3・4
A セクション (北から)



二ノ丸虎口石積 3・4
B セクション (北西から)



二ノ丸虎口石積 4 検出状況
(南東から)



三ノ丸全景 (平成 22 年度撮影)



三ノ丸北西部全景 (平成 22 年度撮影)



三ノ丸西大手全景（平成 23 年度撮影）



三ノ丸西大手外堀・外堀石積検出状況（西から）



三ノ丸西大手
外堀・外堀石積検出状況
（南西から）



三ノ丸西大手
SD3 検出状況（南から）



三ノ丸西大手
SD3 検出状況（南から）



西外堀 TRE18 外堀東肩部
検出状況



西外堀 TRE18 調査状況
(西から)



三ノ丸西外堀
(H23-F) 全景
(平成 23 年度撮影)



三ノ丸南西部全景 (平成 23 年度撮影)



三ノ丸南西部土塁トレンチ 3・4 全景 (平成 22 年度撮影)



三ノ丸南西部
SD4（暗渠部）検出状況



三ノ丸南西部
SD4（開渠部）検出状況



三ノ丸南西部
SD4 及び土塁セクション



三ノ丸南西部
SD4（開渠部）及び
古土塁セクション



三ノ丸南西部
古土塁検出状況



三ノ丸南西部
版築遺構全景（北から）



三ノ丸南西部
版築遺構近景（北から）



三ノ丸南西部
TRE2・PT 群検出状況



三ノ丸南西部
SD5・SD6 検出状況



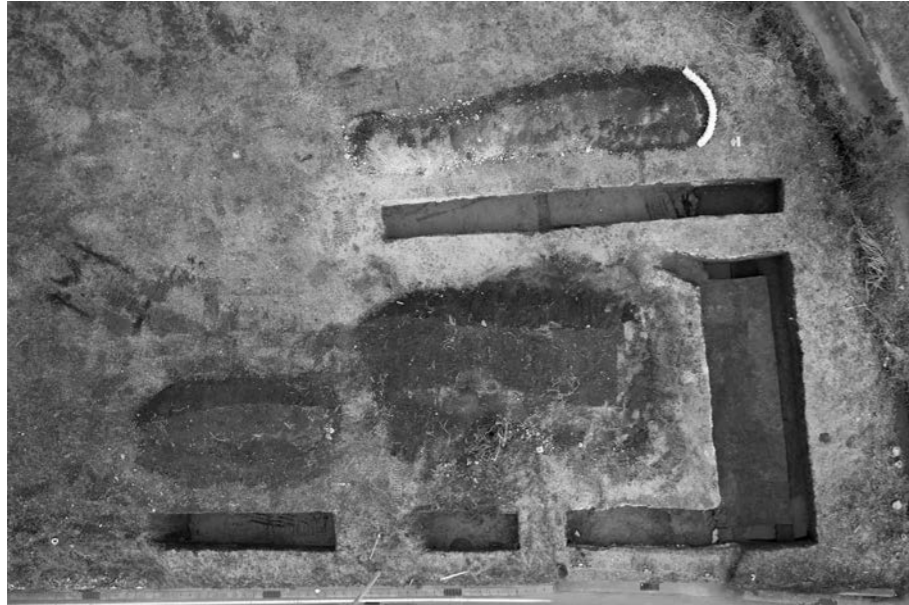
三ノ丸南東部・東外堀
全景（平成 22 年度撮影）



三ノ丸南東部
土塁トレンチ 4 全景
（北西から）



三ノ丸南東部外堀
確認トレンチ全景
（平成 23 年度撮影）



三ノ丸北東部全景
(平成 28 年度撮影)



三ノ丸北東部全景 2
(平成 28 年度撮影)



三ノ丸北東部
東外堀検出状況
(H28TRE13 地点)



三ノ丸北東部
東外堀検出状況
(H28TRE5 地点)



三ノ丸北東部
東外堀セクション
(H28TRE5 地点)



大空堀 TRE1 北側肩部



大空堀 TRE2 セクション



大空堀 TRE4 セクション
(下層)



北曲輪全景 (平成 20 年度撮影)



北曲輪北部全景



北曲輪空堀 1 検出状況 (東から)



北曲輪空堀 1 セクション



北曲輪空堀 1 土橋検出状況



北曲輪空堀 1 (東)
検出状況 (東から)



北曲輪空堀 1 (西)
検出状況 (北から)



北曲輪南部
(第3調査区周辺) 全景



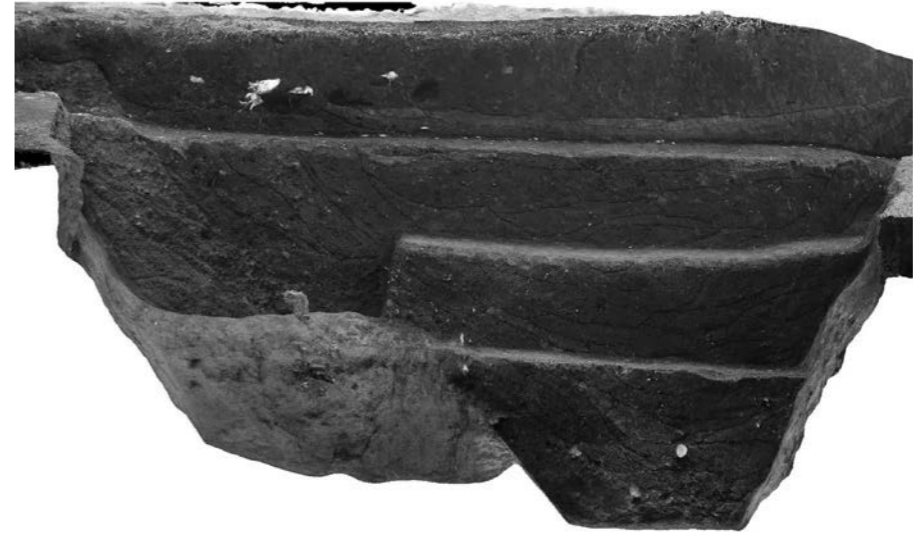
北曲輪第3調査区 SK・SX・PT群
(東から)



北曲輪第5調査区



北曲輪第6調査区
空堀2・3セクション
(南東から)



北曲輪第6調査区
空堀2・3トレンチ
西側セクション(東から)



北曲輪第6調査区
空堀2・3トレンチ
東側セクション(西から)



北曲輪第6調査区
空堀3 畝検出状況及び
セクション (南から)



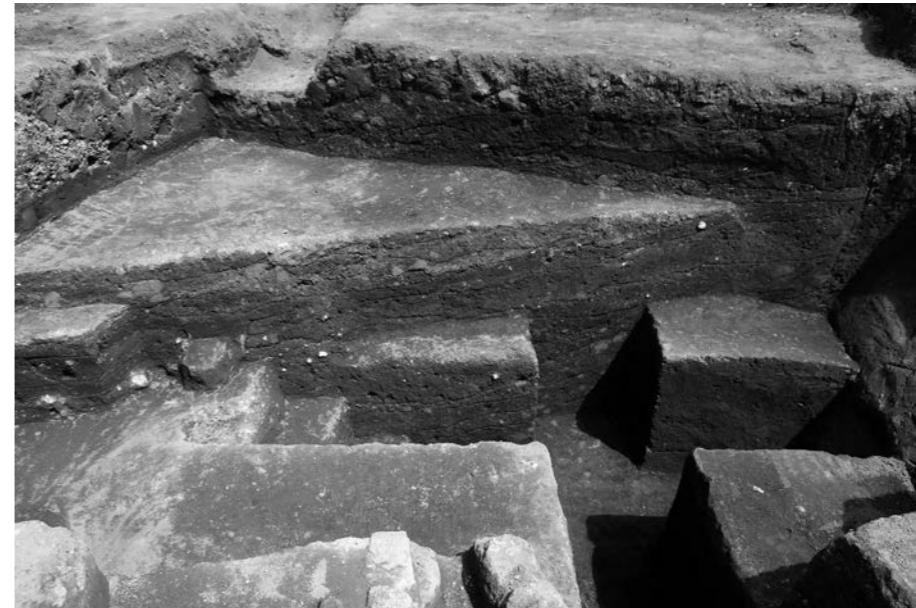
北曲輪第7調査区
空堀3 全景
(北西から)



北曲輪第7調査区
空堀3 畝検出状況
(南東から)



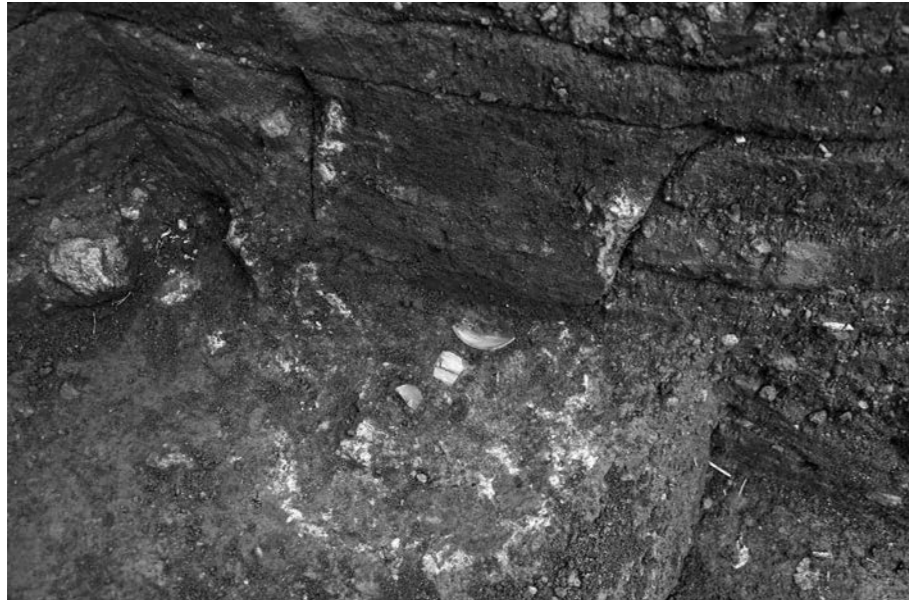
北曲輪第7調査区
空堀3 セクション
(西から)



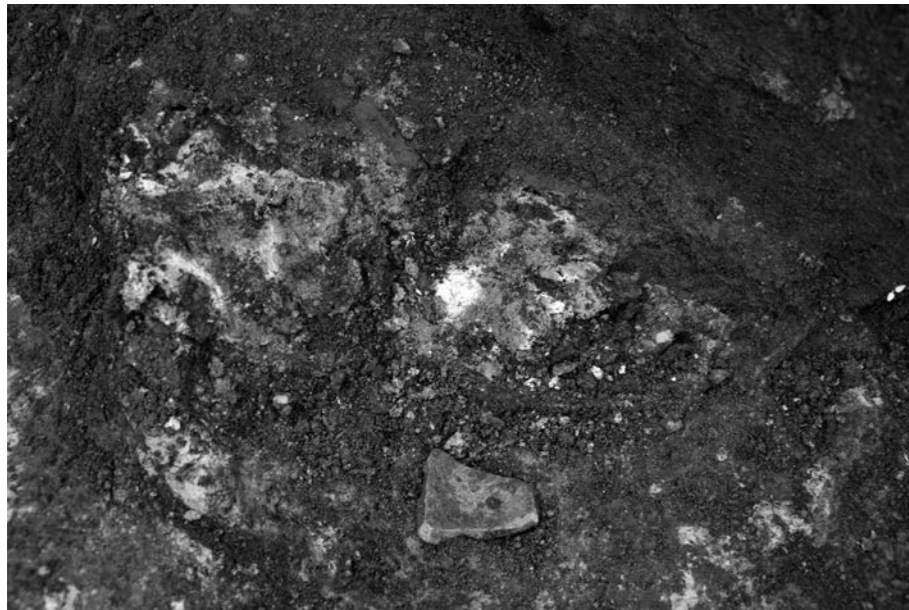
北曲輪第7調査区
造成土1・2 検出状況
(西から)



北曲輪第7調査区
造成土1 遺物出土状況
(東から)



北曲輪第7調査区
FP1 セクション



北曲輪第7調査区
FP1 粘土・焼土検出状況



北曲輪第7調査区
FP1 焼土除去後遺物出土状況



清水曲輪空堀全景
(平成24年度撮影)



清水曲輪空堀検出状況
(第1調査区)



清水曲輪空堀
下層土橋検出状況
(第2調査区)



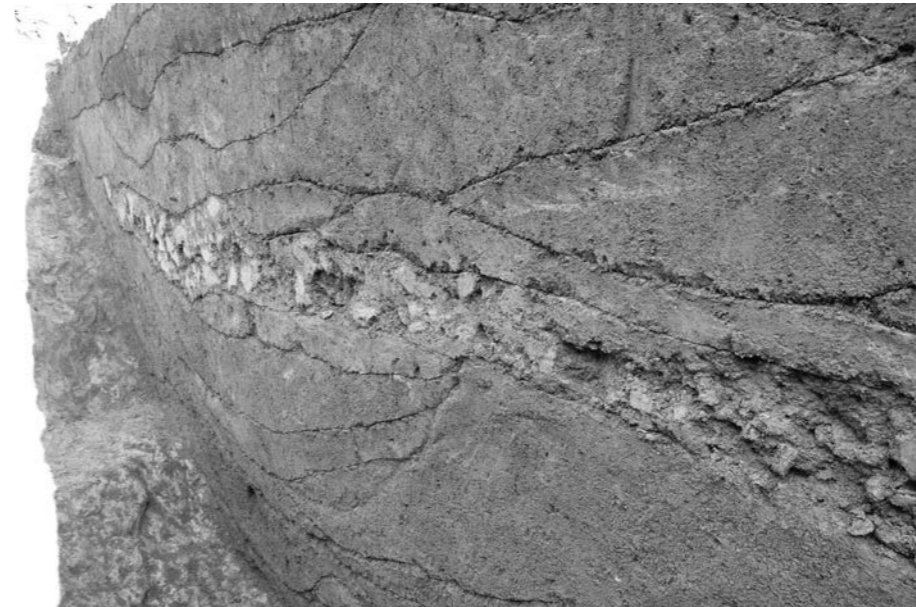
清水曲輪空堀肩部
検出状況（北から）



清水曲輪空堀セクション
（全景）



清水曲輪空堀セクション
及び整地層



清水曲輪空堀整地層



清水曲輪第5調査区全景
（北から）



清水曲輪SD1 検出状況



清水小曲輪全景
(平成 21 年度撮影)



清水小曲輪全景
(平成 21 年度撮影)
(北から)



清水小曲輪
岩盤検出状況
(東から)



清水小曲輪
南西部曲輪造成検出状況
(西から)



清水小曲輪
SD2 礫検出状況



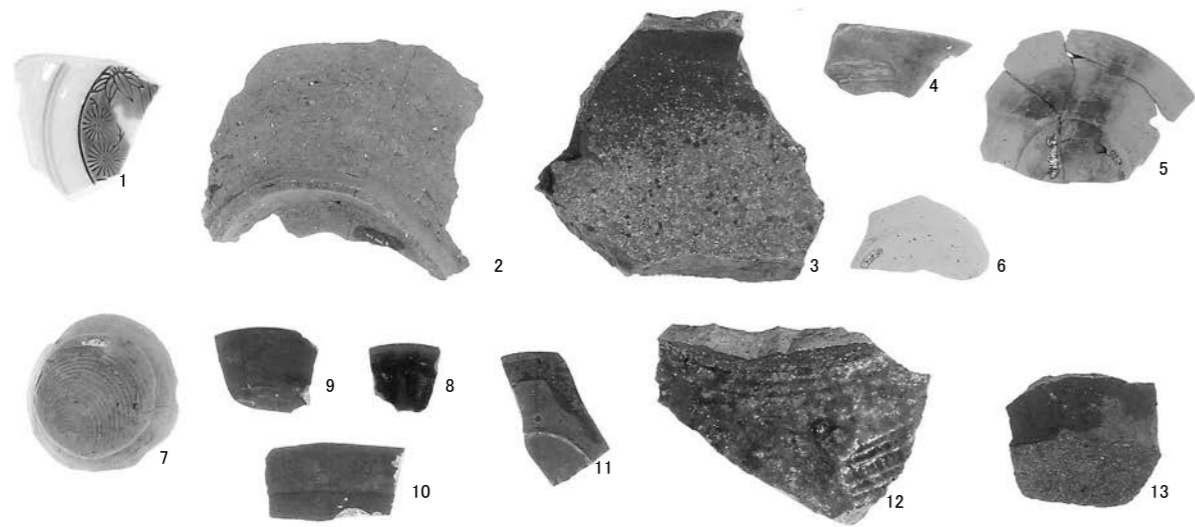
東外堀調査状況
(北から 平成 21 年度撮影)



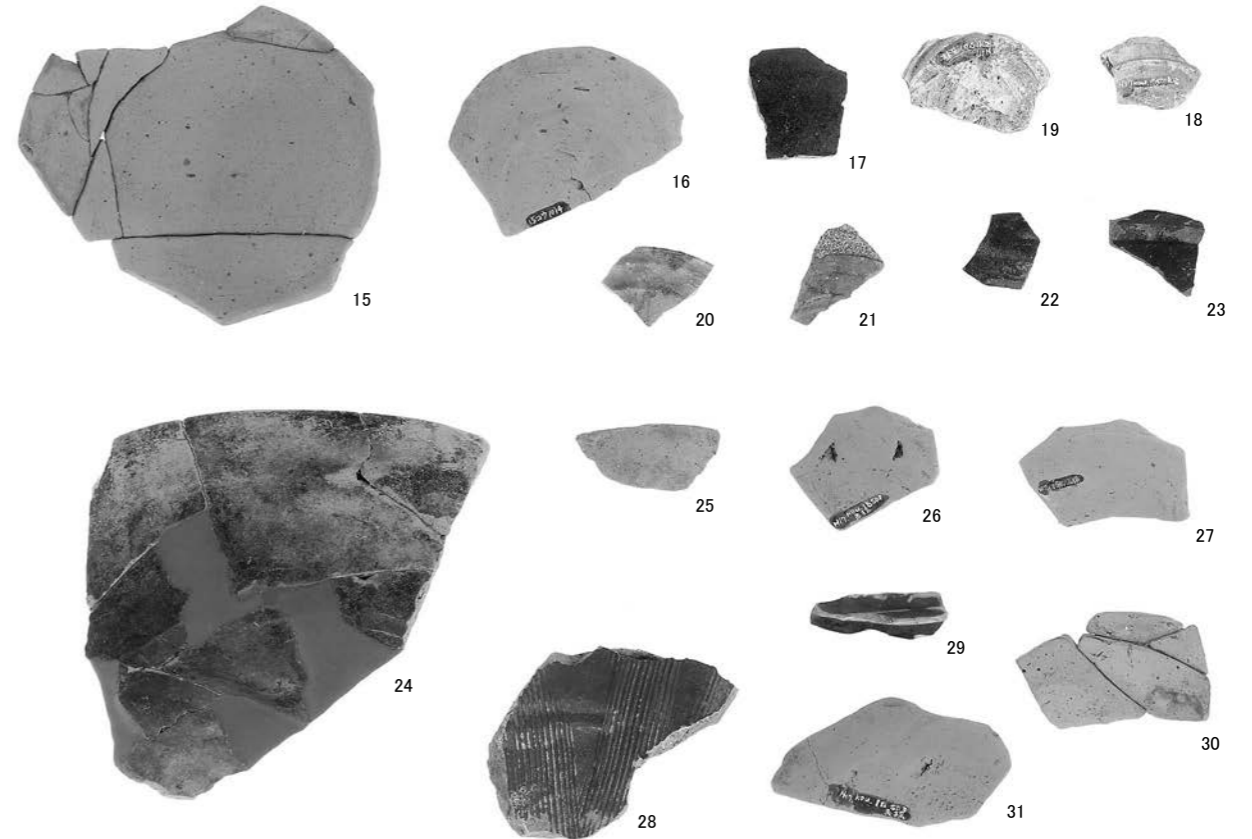
伝西檜台全景
(平成 29 年度撮影)



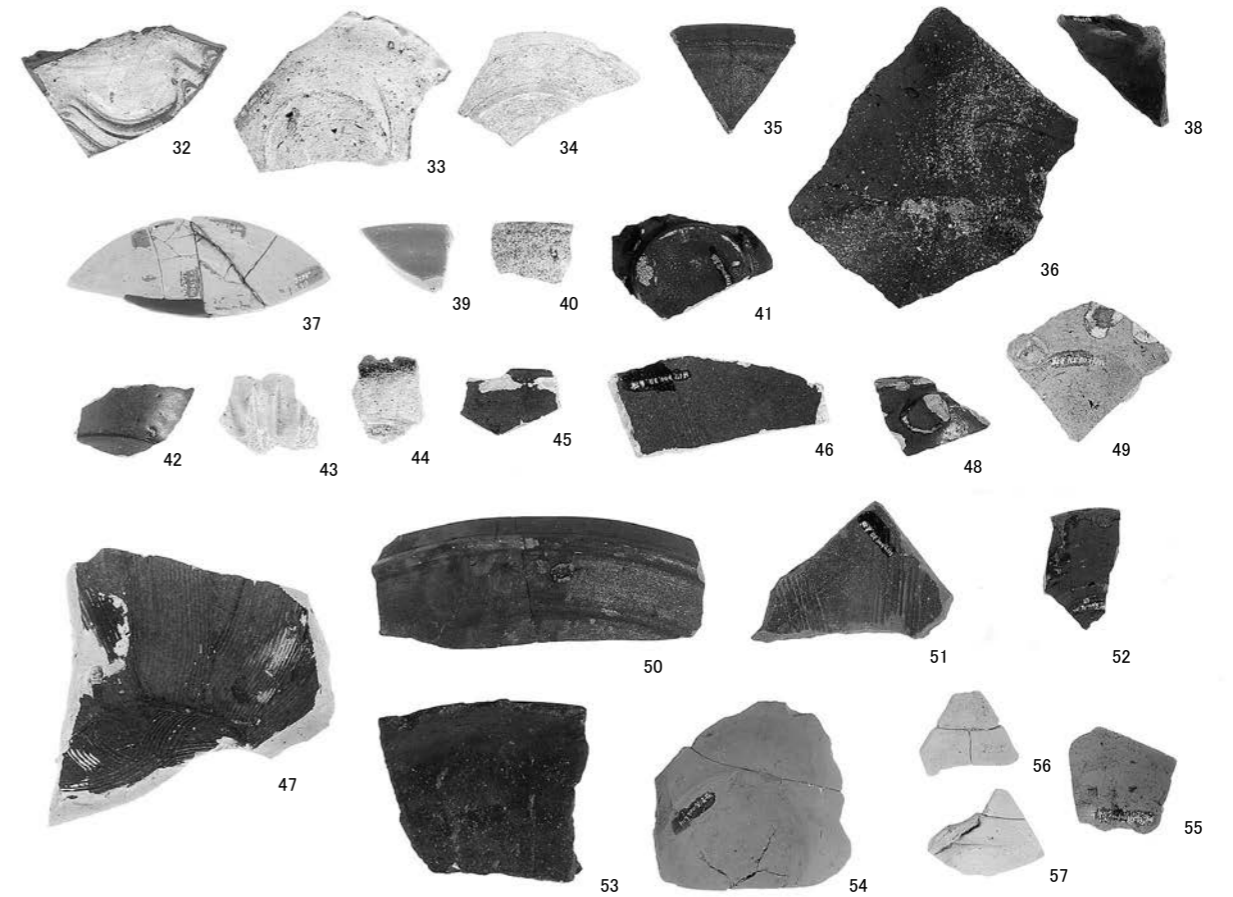
伝東檜台周辺
(平成 30 年度撮影)



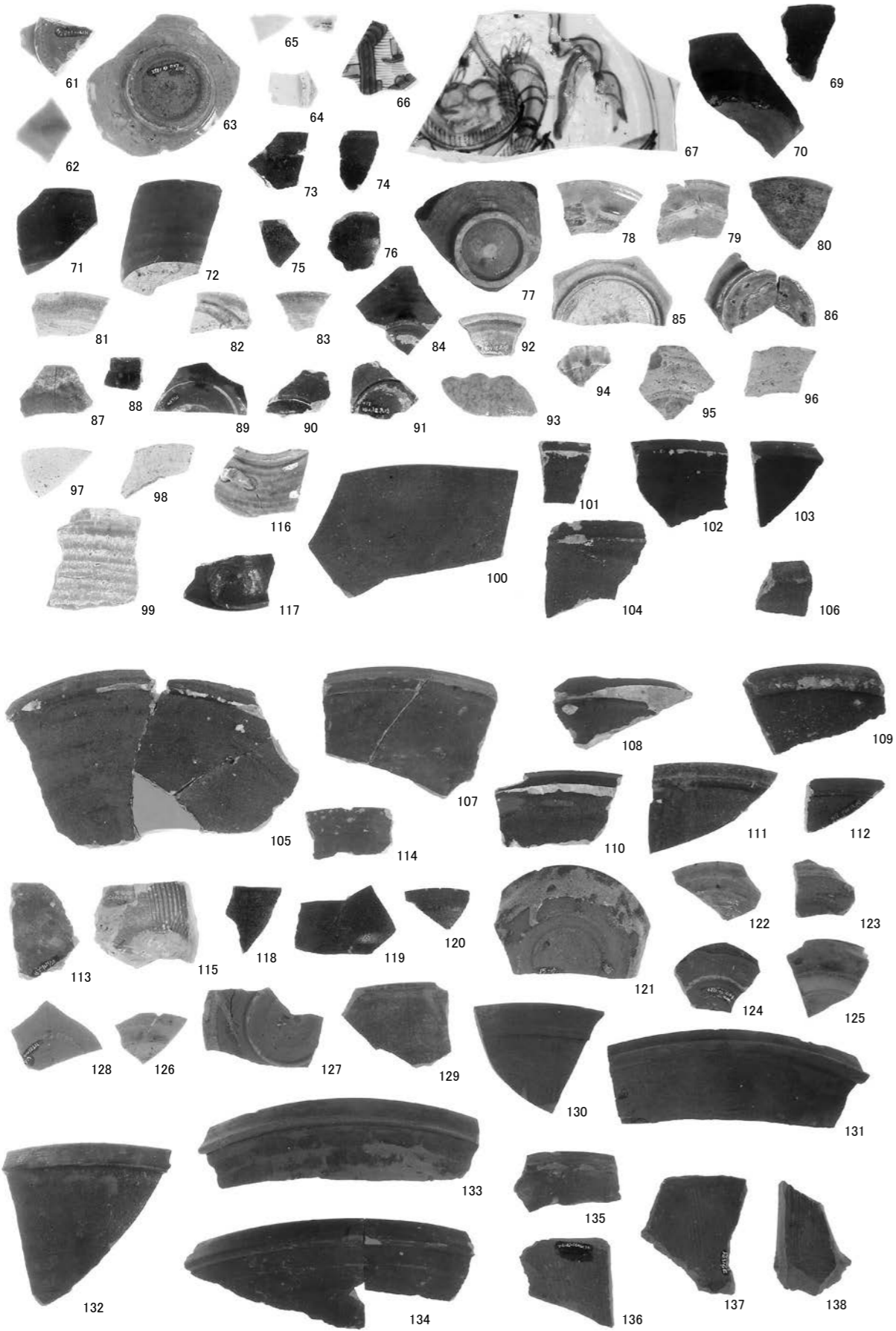
試掘調査出土遺物



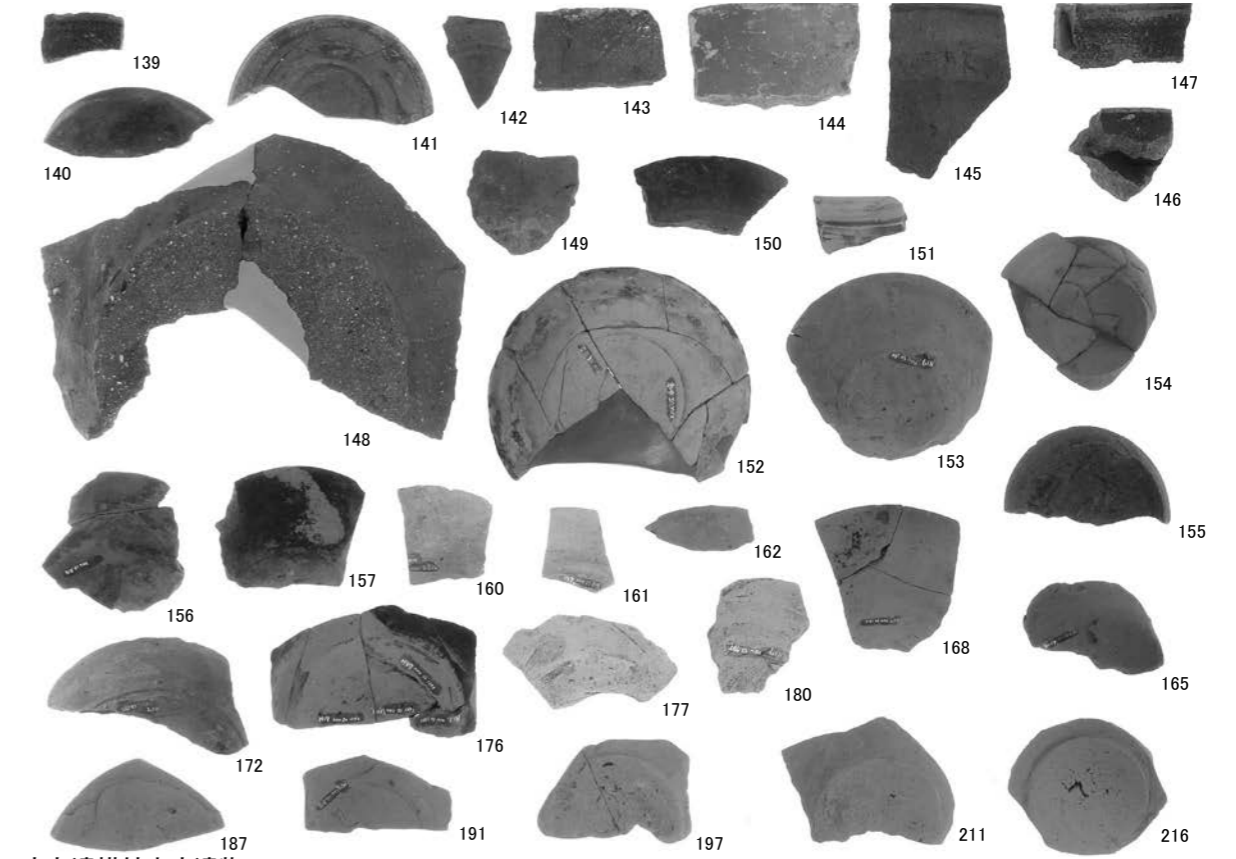
本丸礎石建物跡・SD 出土遺物



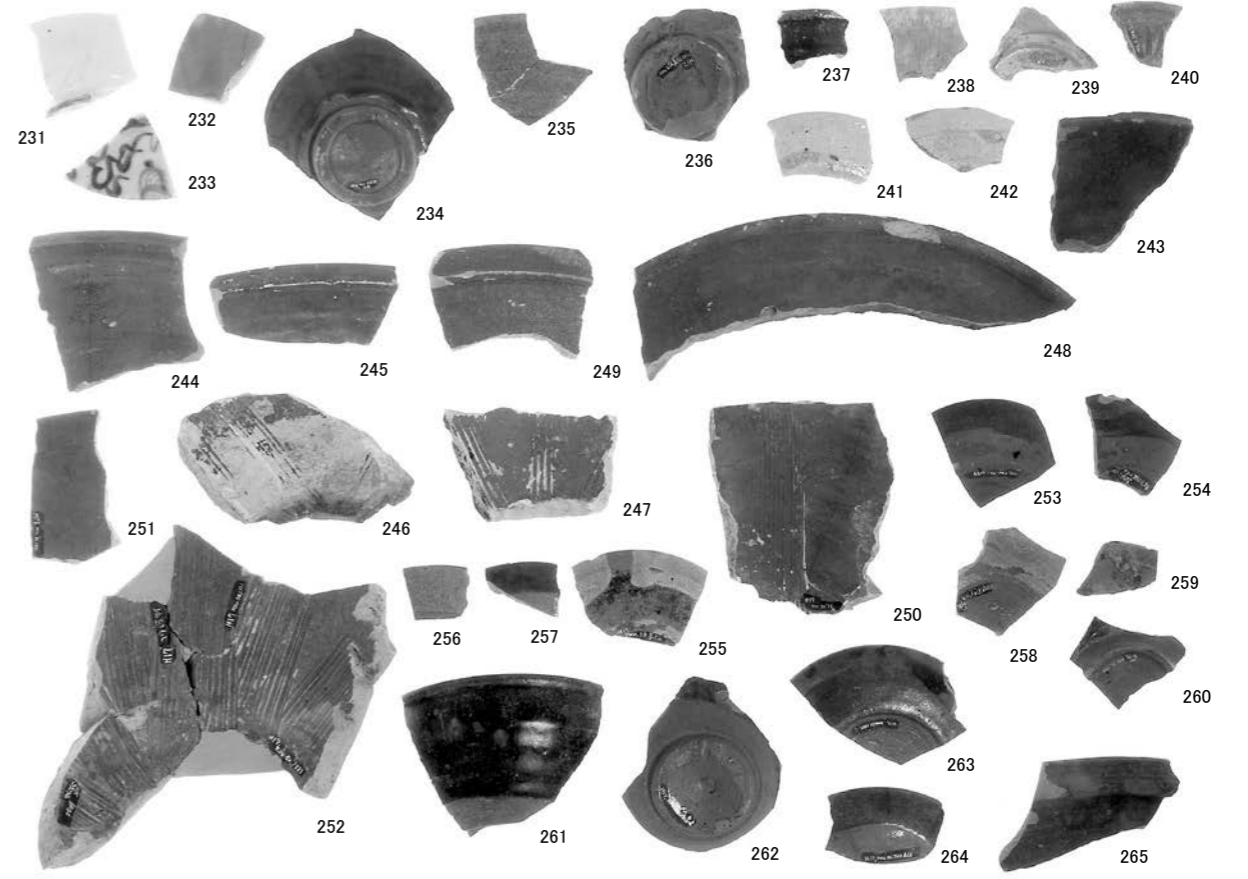
本丸空堀出土遺物



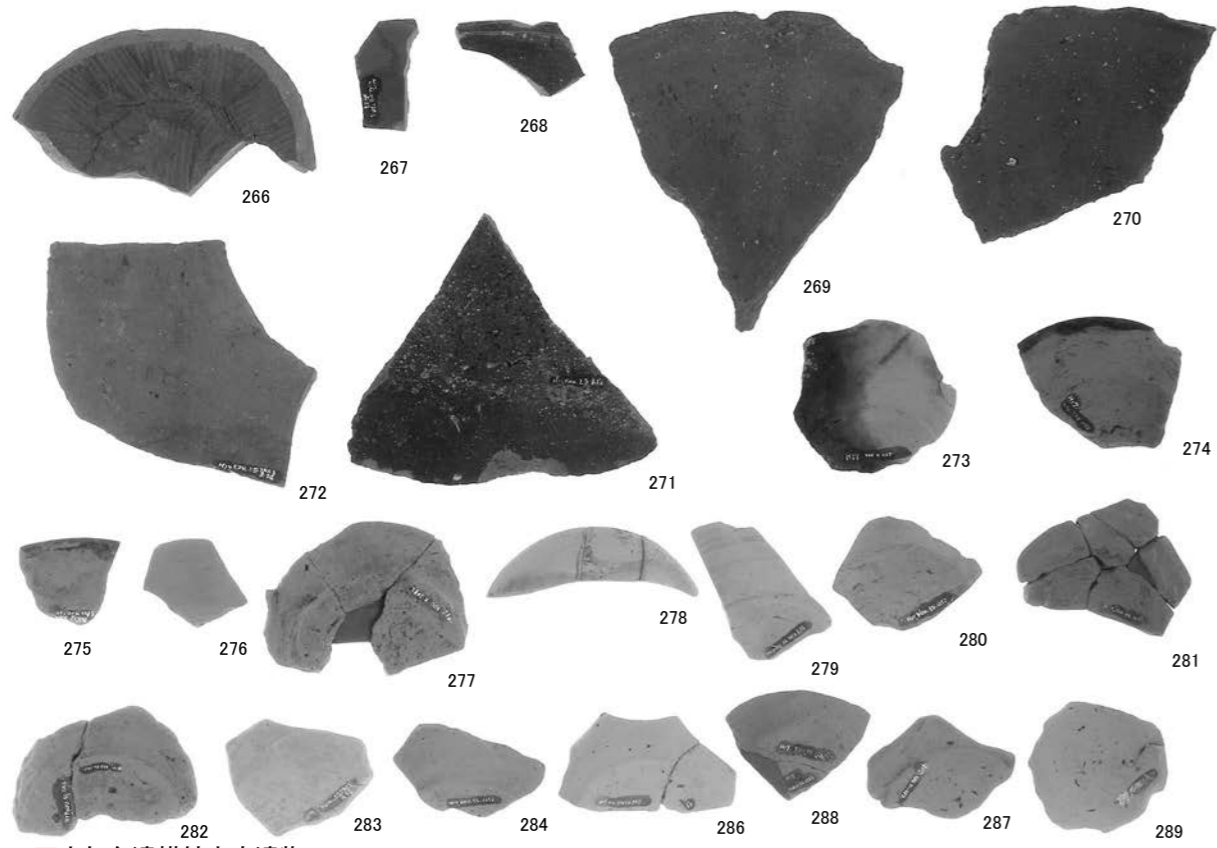
本丸遺構外出土遺物



本丸遺構外出土遺物



石火矢台遺構外出土遺物



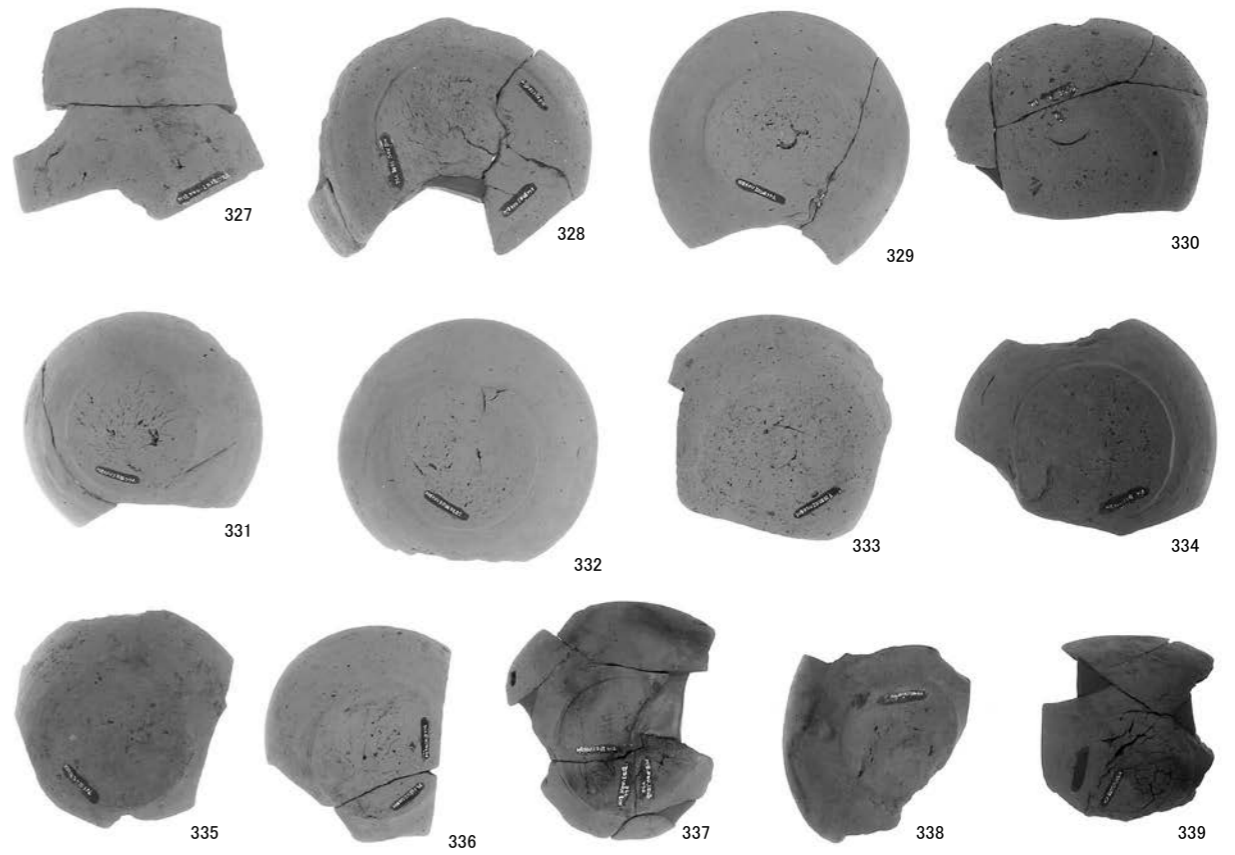
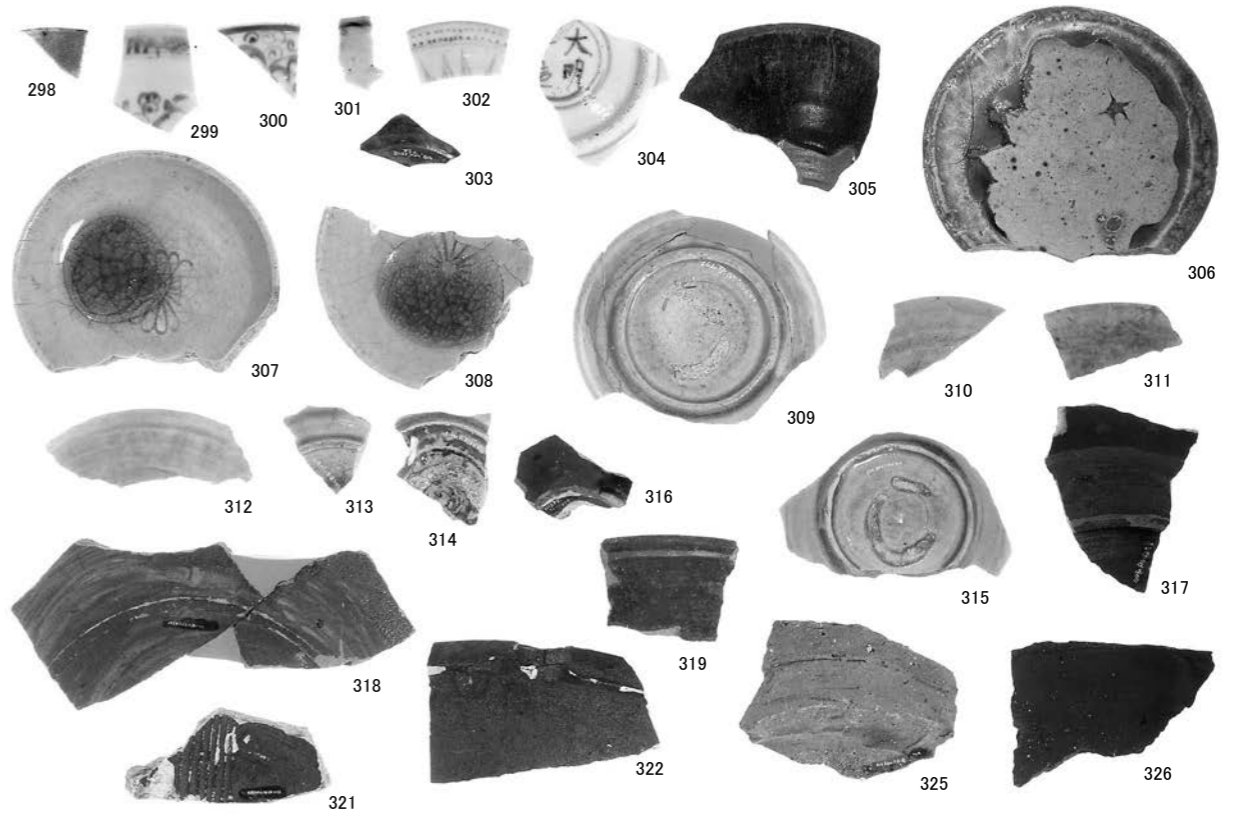
石火矢台遺構外出土遺物



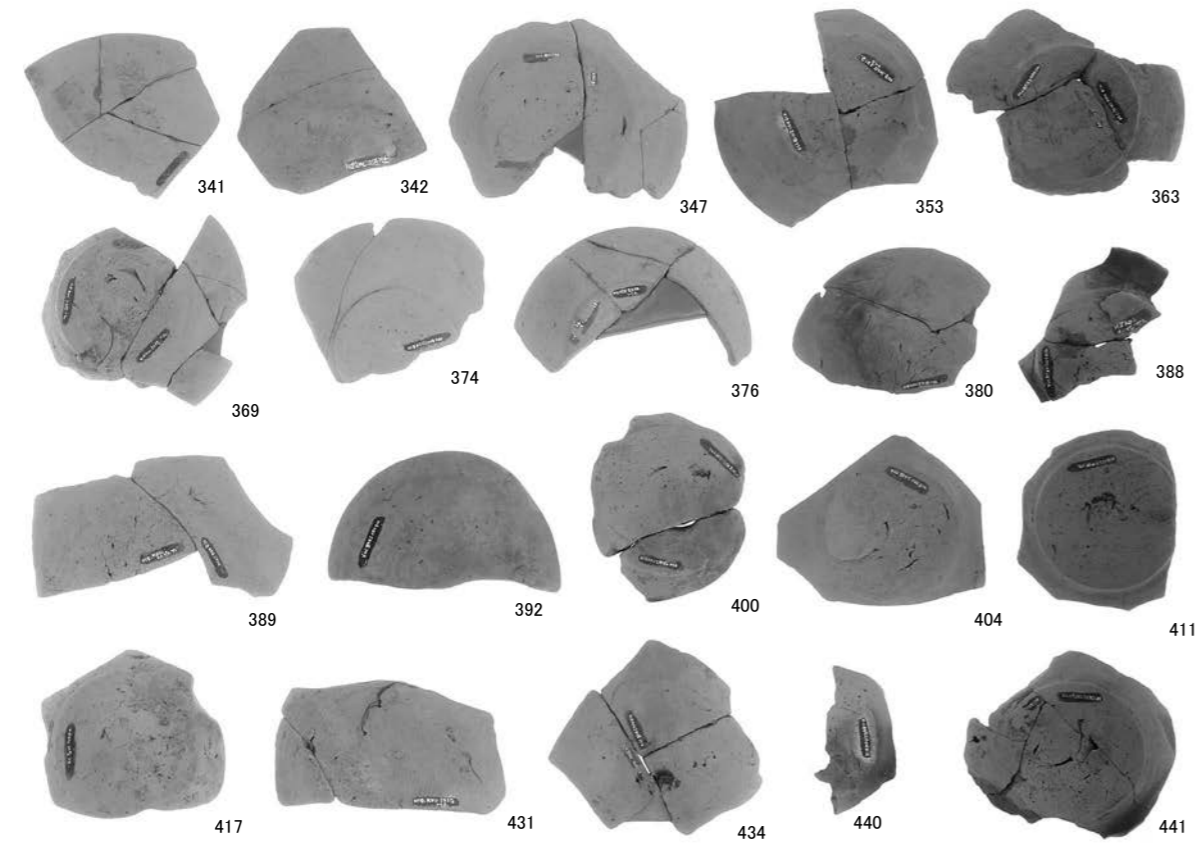
本丸遺構外出土遺物



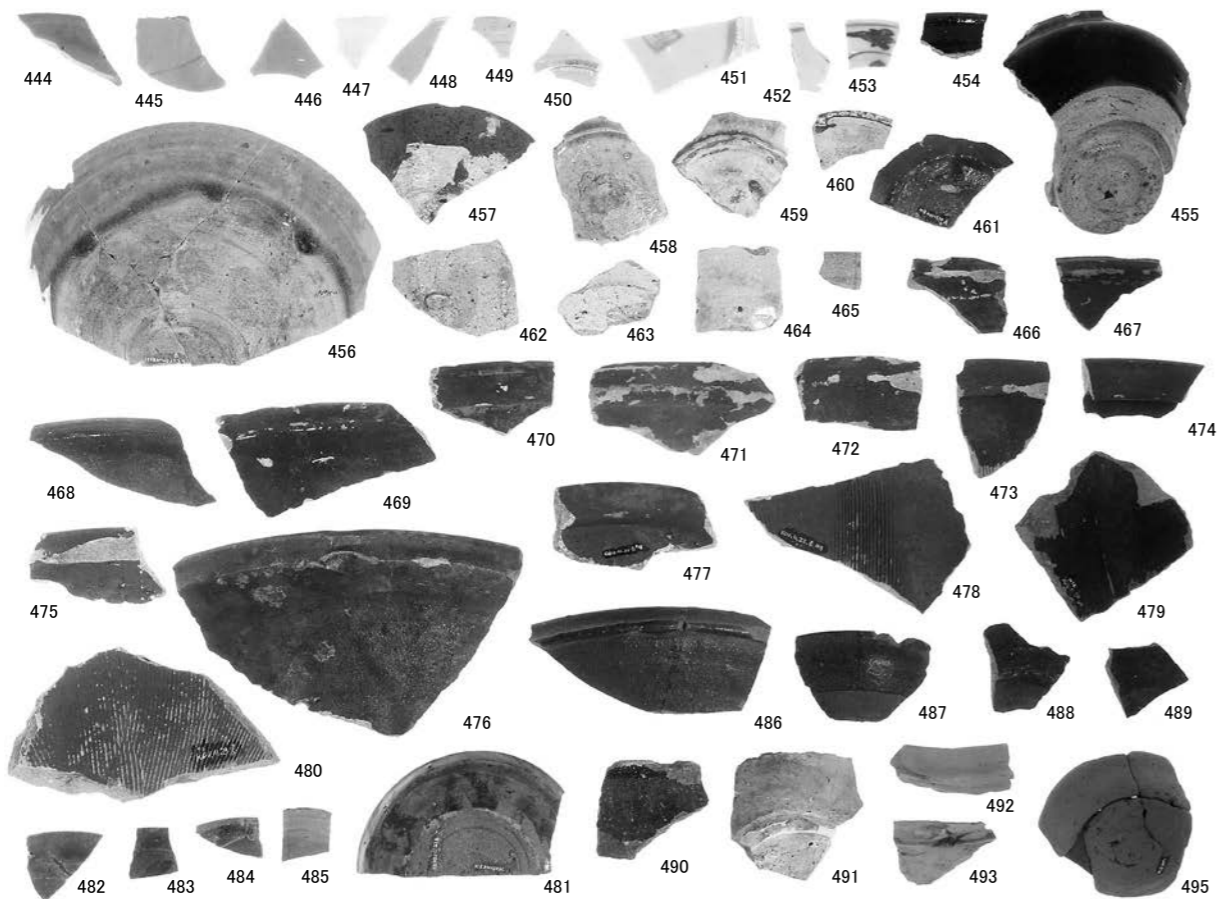
本丸三日月堀出土遺物



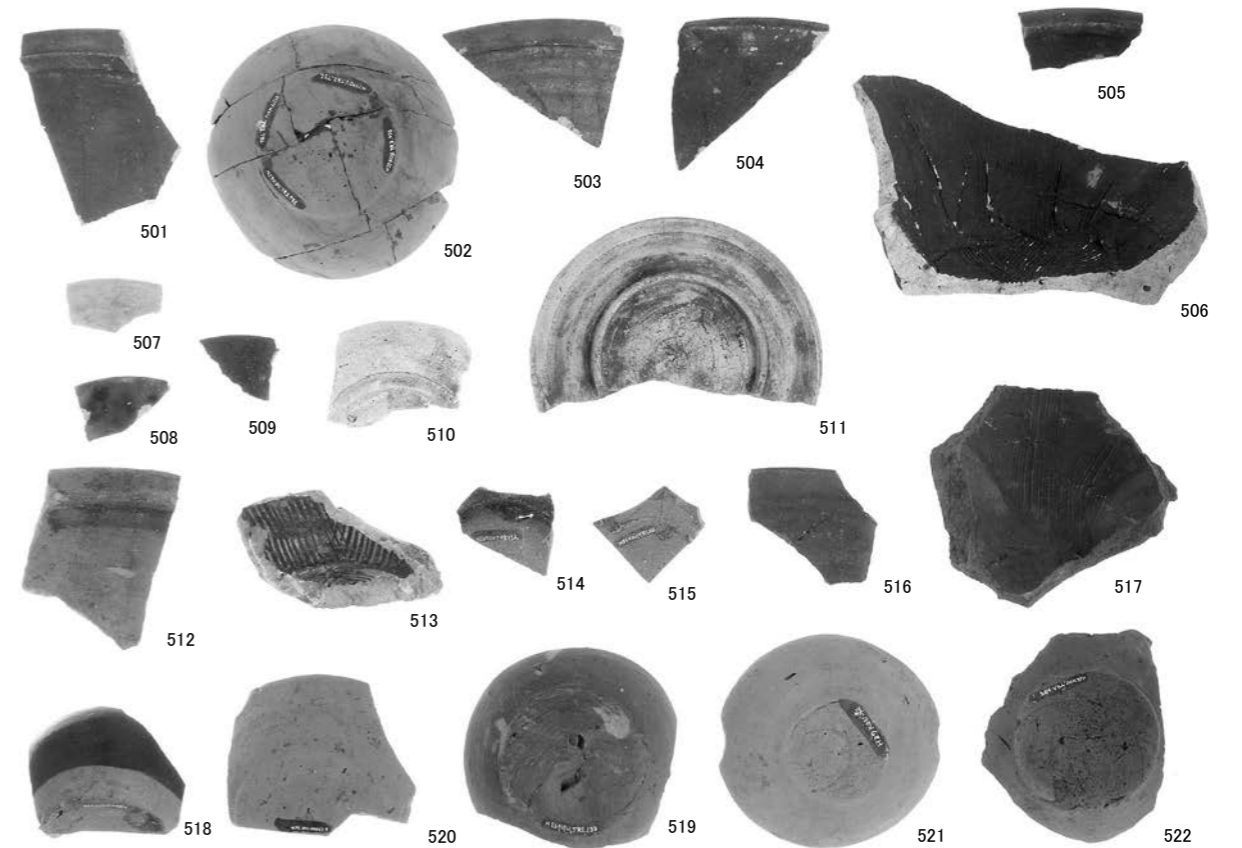
本丸三日月堀出土遺物



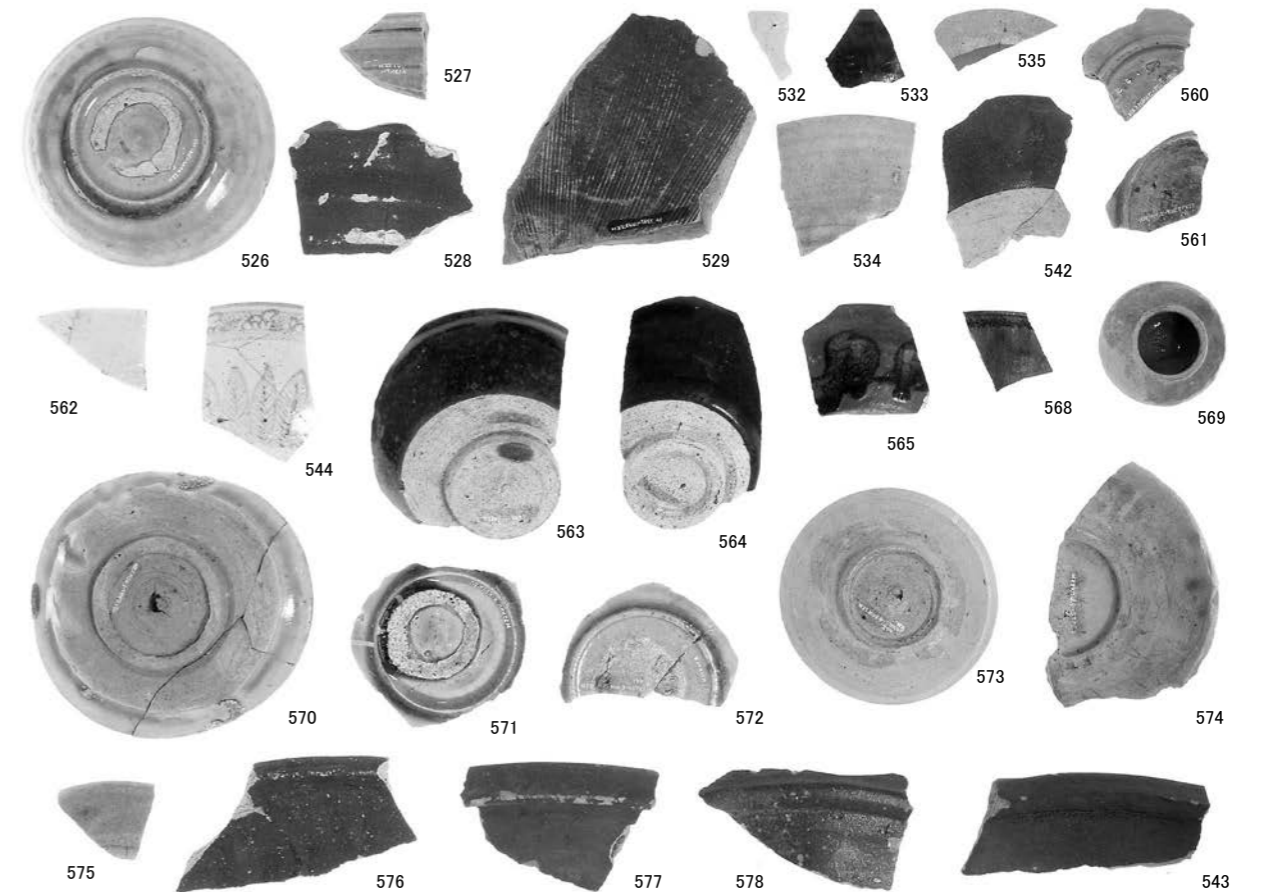
本丸三日月堀出土遺物



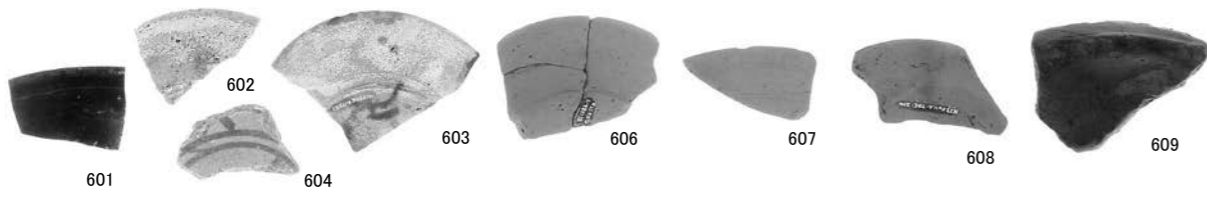
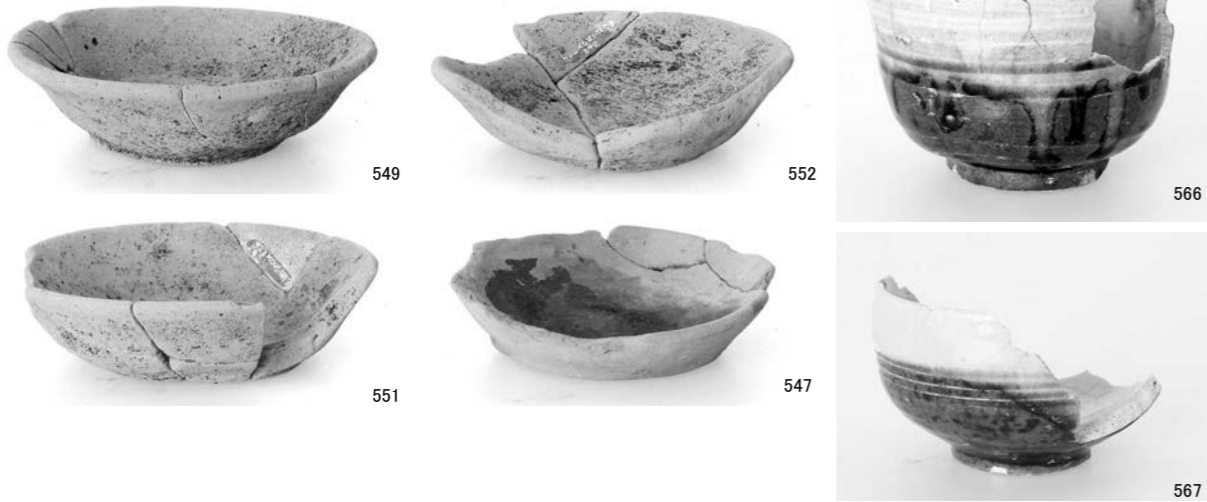
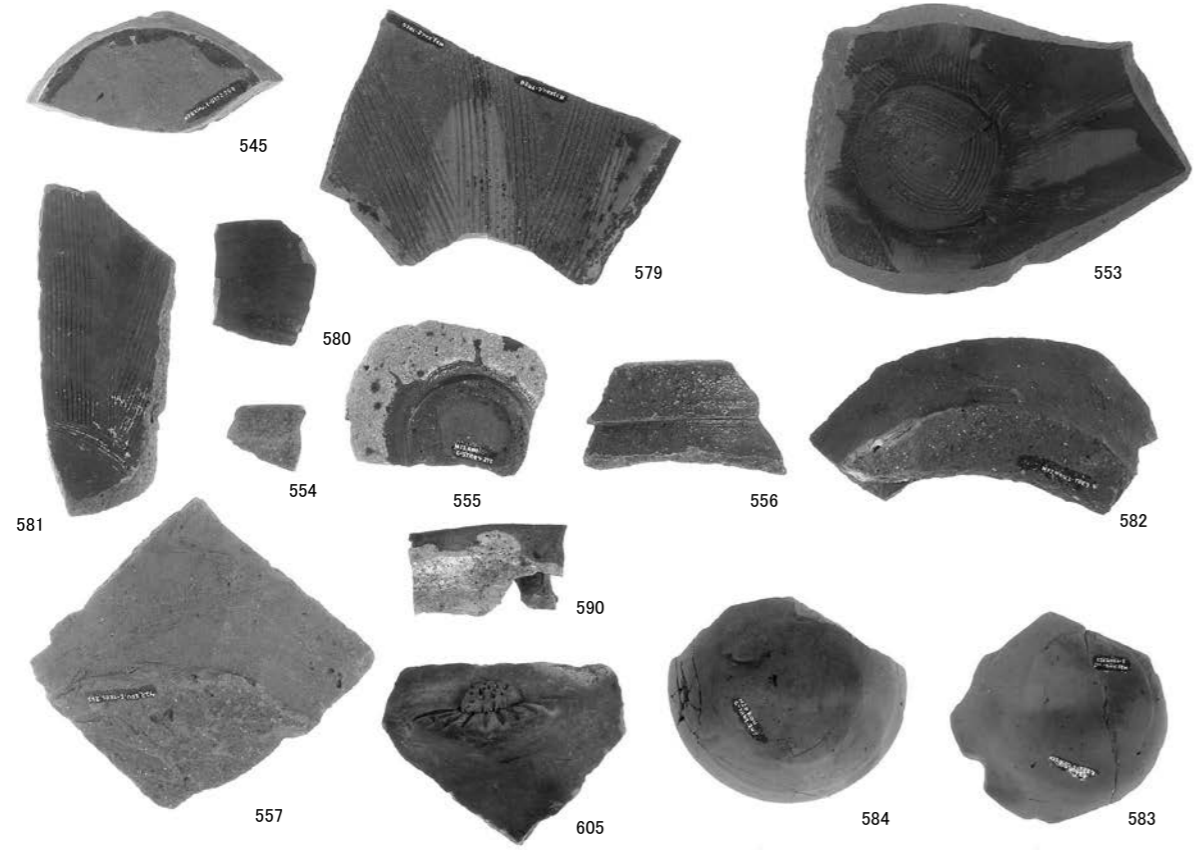
二ノ丸遺構外出土遺物



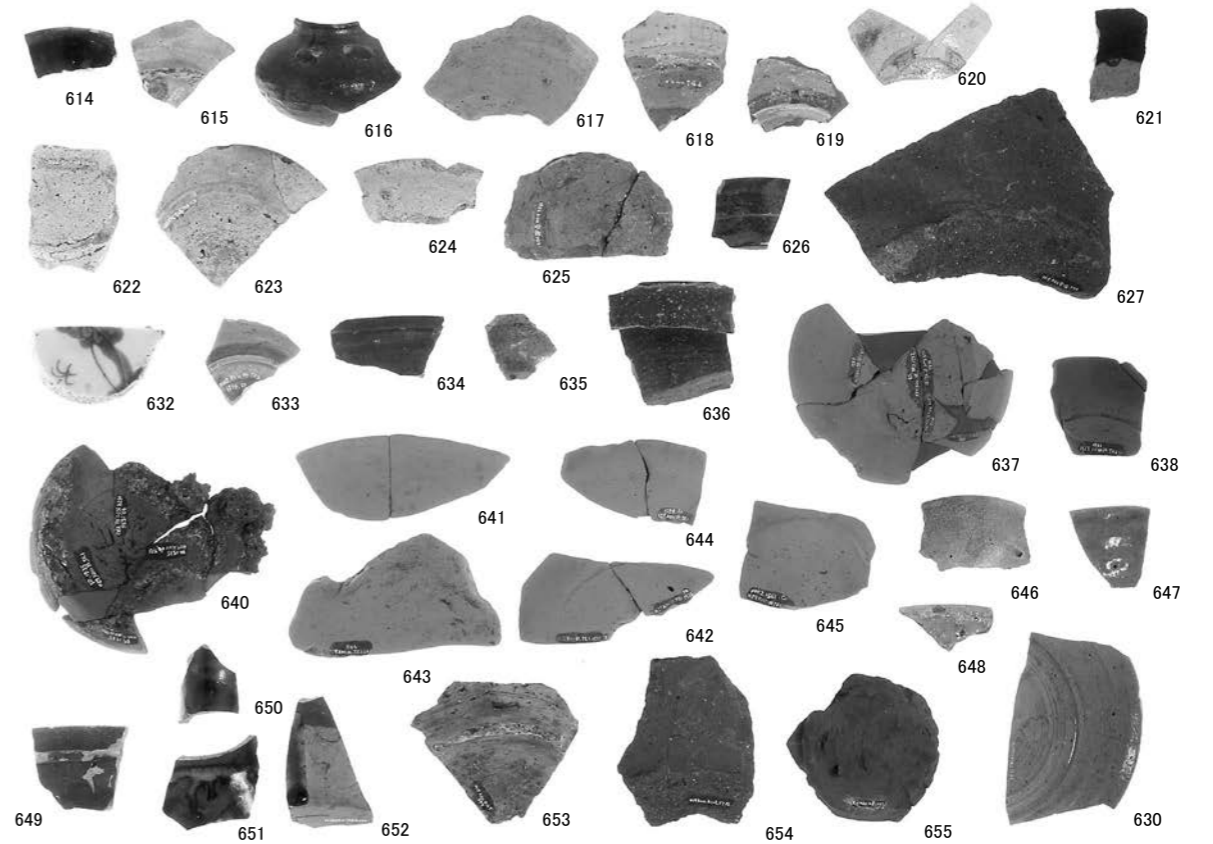
二ノ丸虎口出土遺物



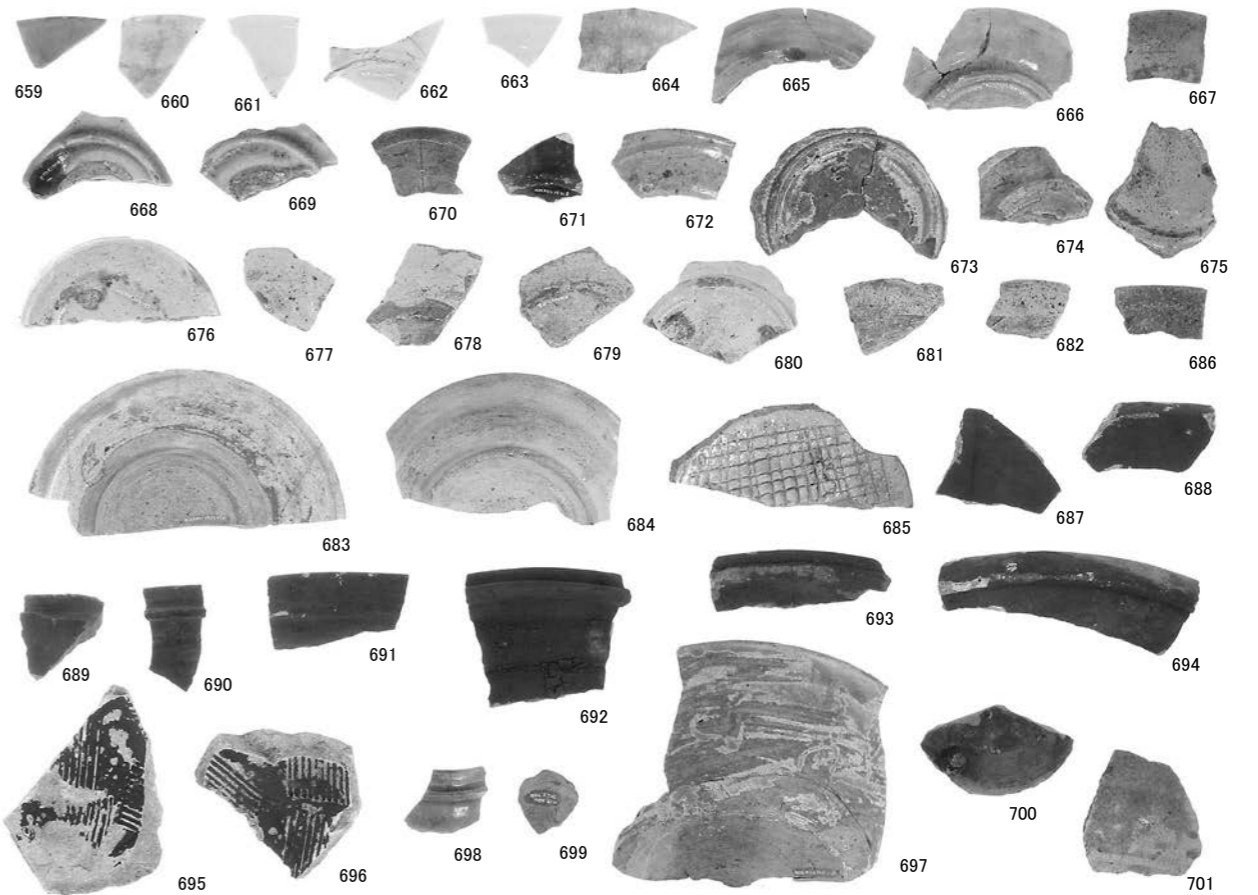
三ノ丸出土遺物



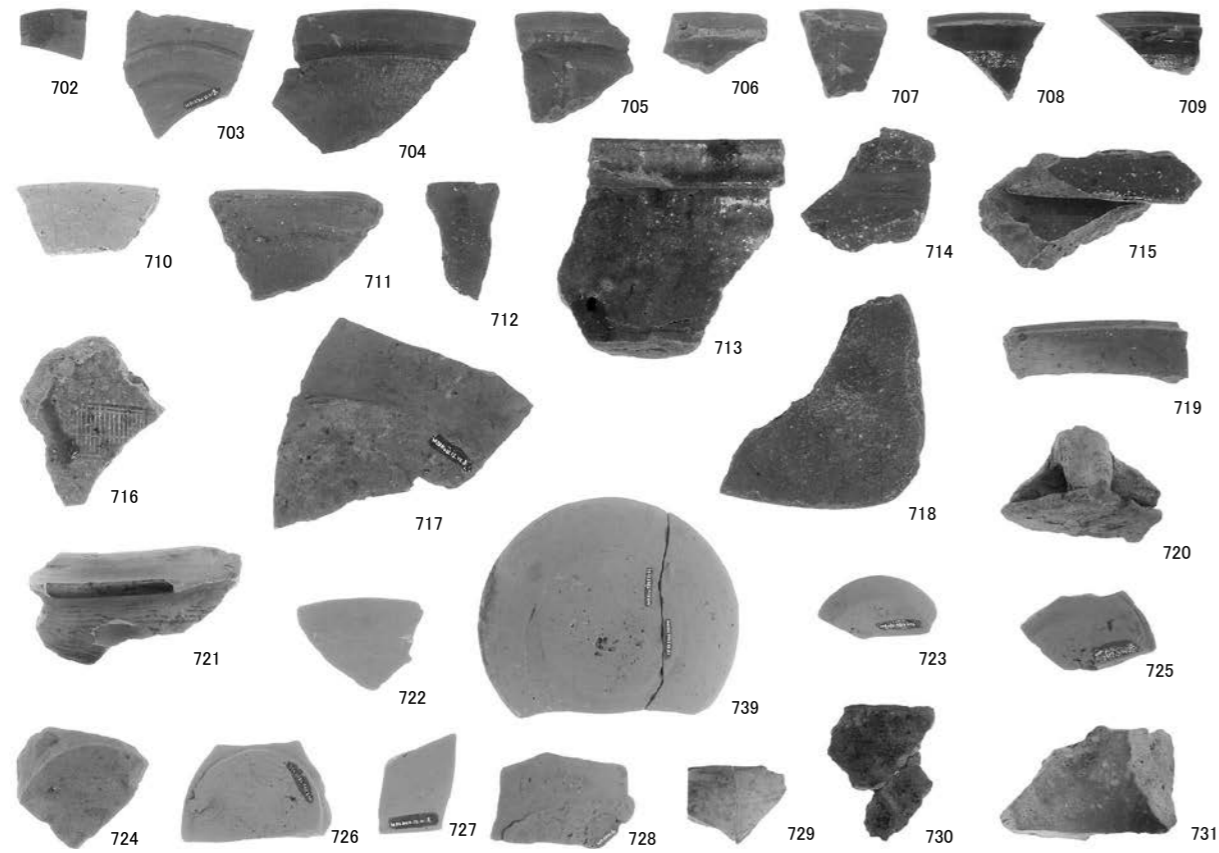
三ノ丸出土遺物



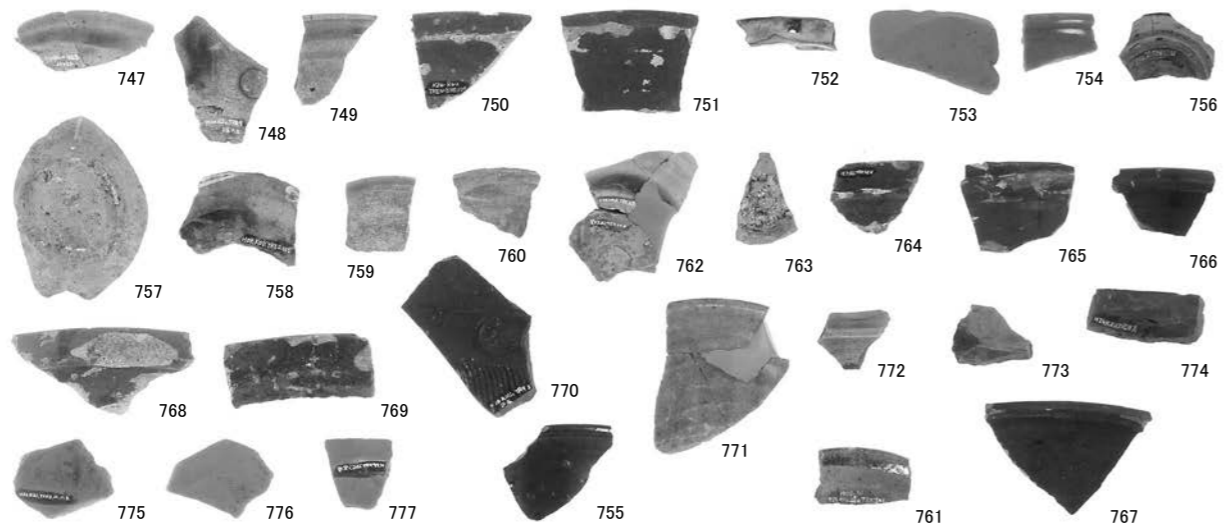
大空堀・北曲輪遺構出土遺物



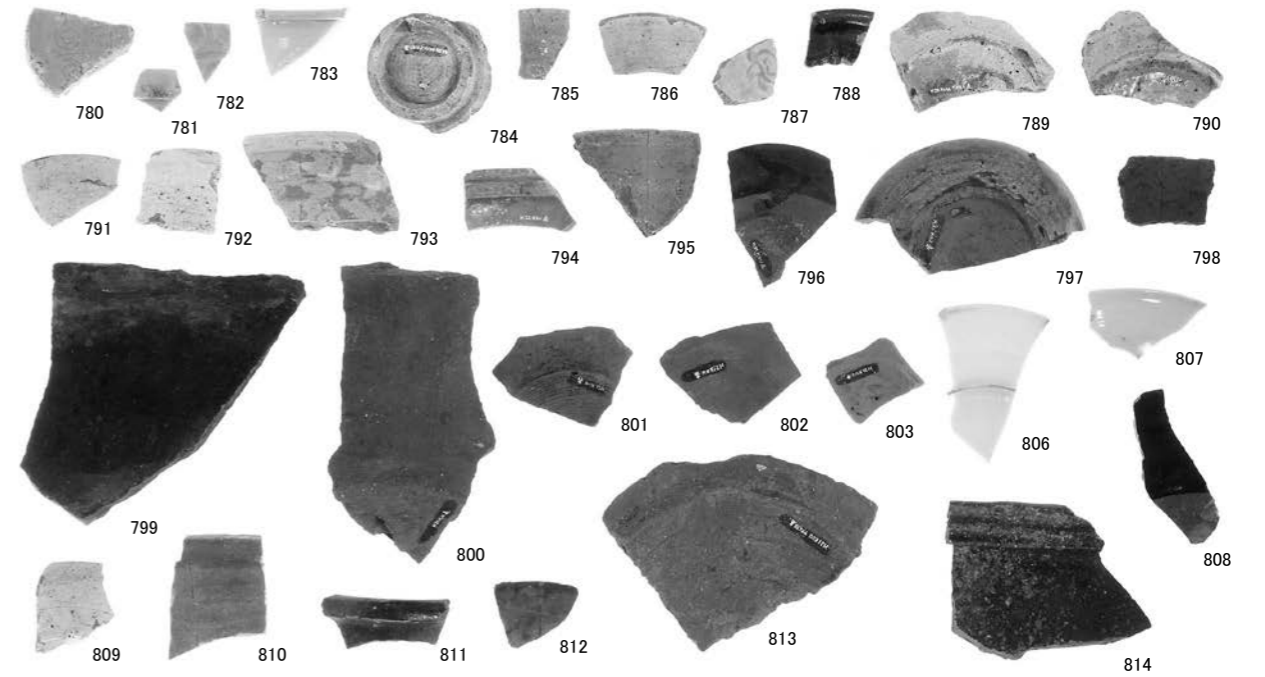
北曲輪出土遺物



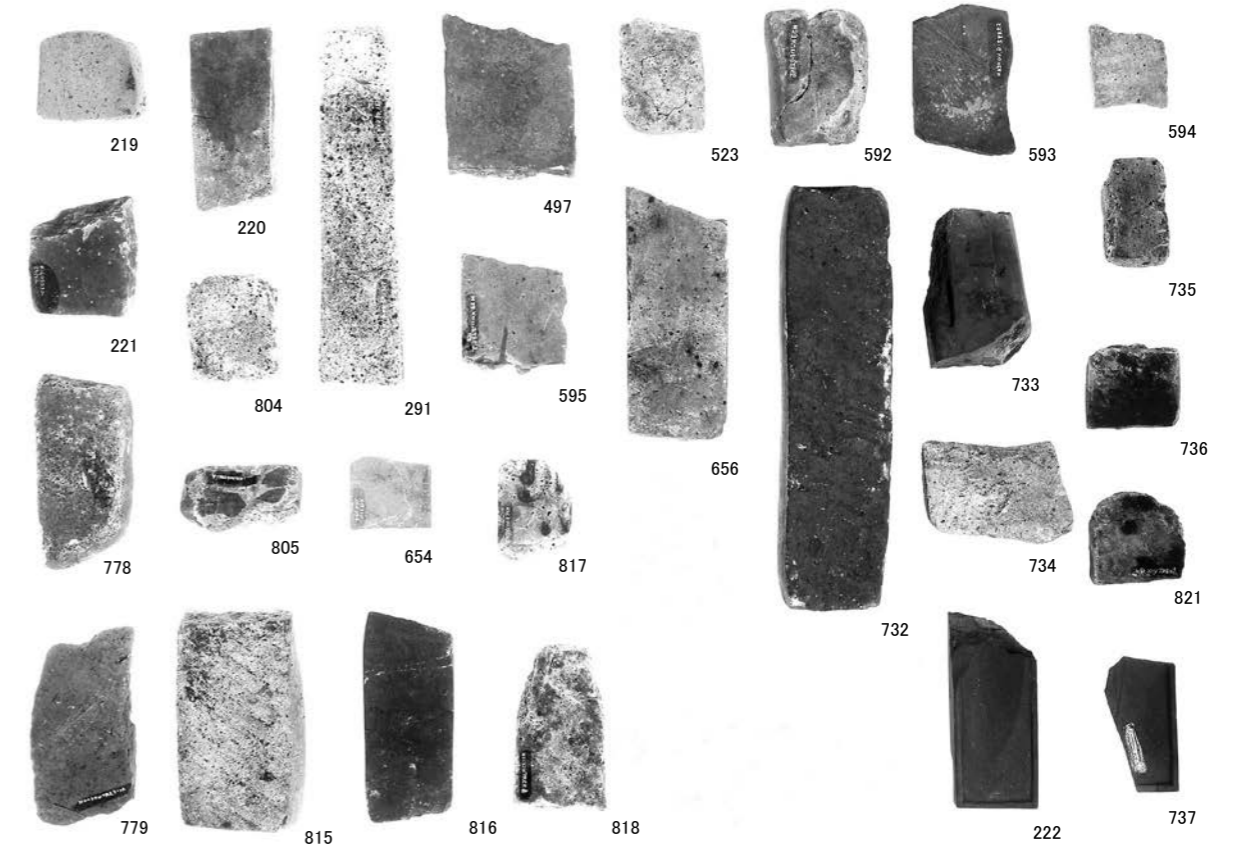
北曲輪出土遺物



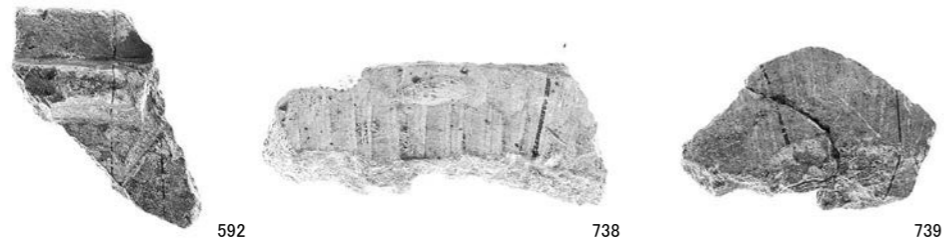
清水曲輪出土遺物



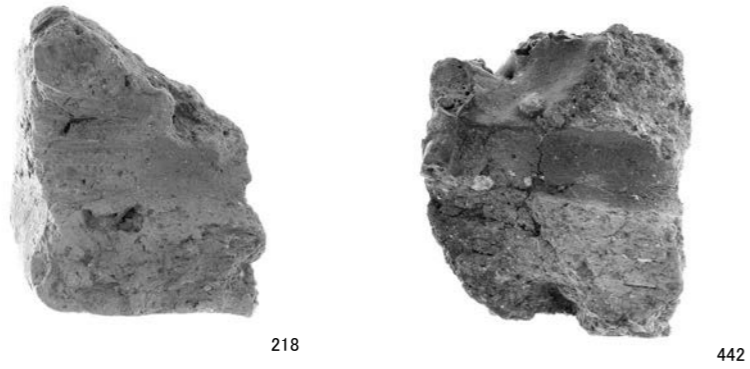
清水小曲輪・東外堀出土遺物



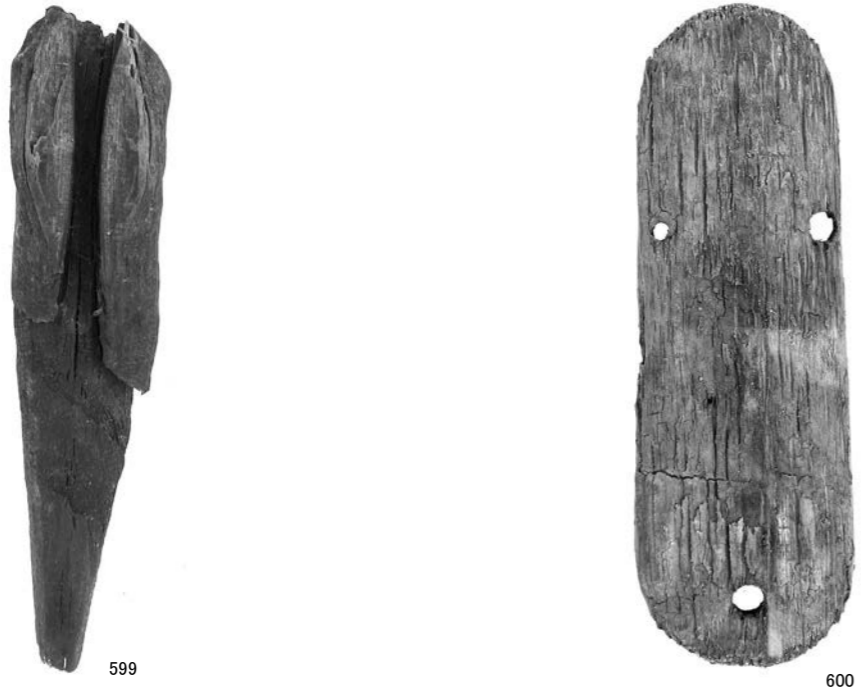
出土石製品



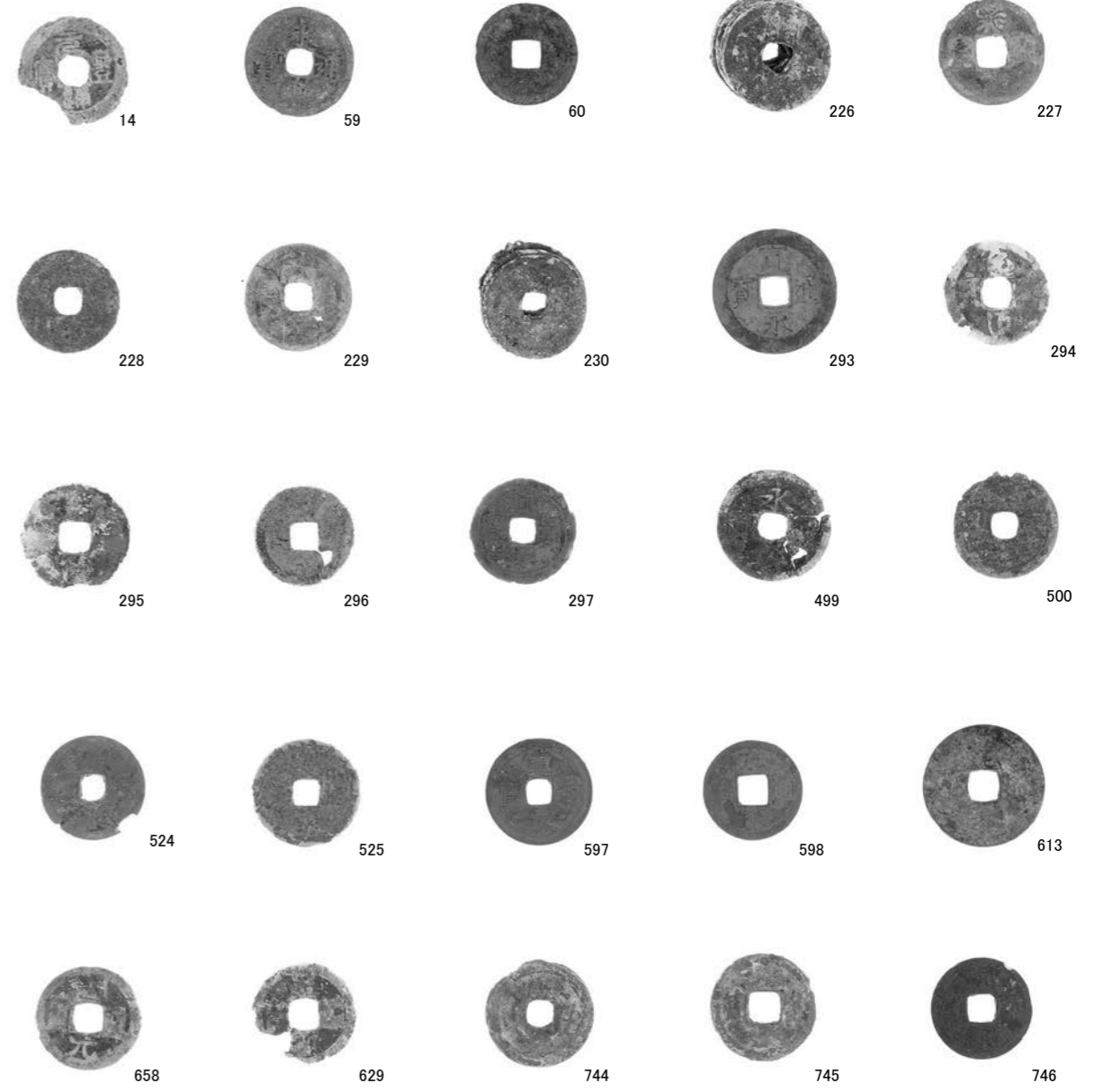
出土石鍋



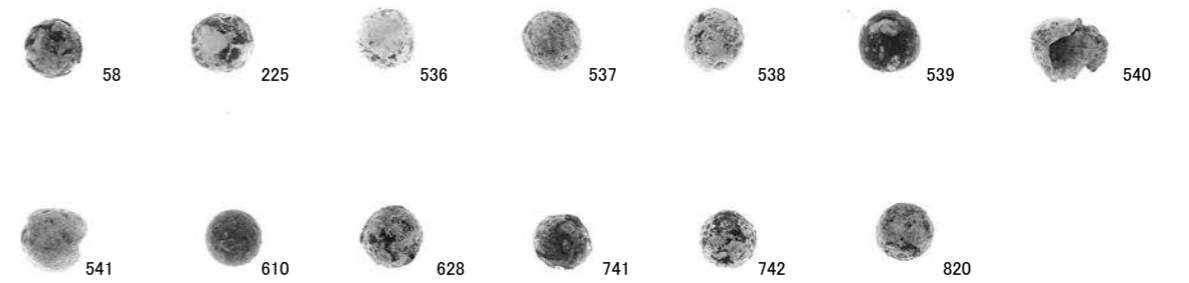
出土土製品



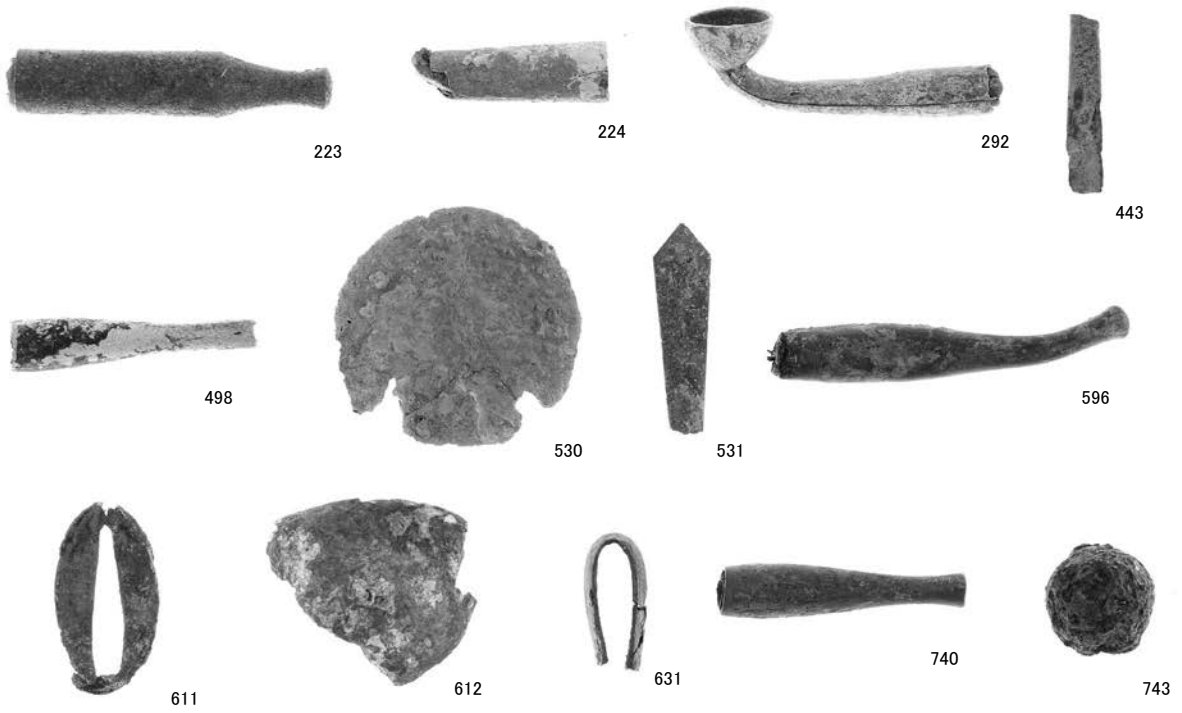
出土木製品



出土金屬製品 (古錢)



出土金屬製品 (鉄砲玉)



出土金属製品

報 告 書 抄 録

ふりがな	しせきこうこくじじょうあとちょうさほうこくしょ							
書名	史跡興国寺城跡調査報告書							
副書名	発掘調査編							
巻次								
シリーズ名	沼津市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第119集							
編著者名	原田雄紀 木村 聡							
編集機関	沼津市教育委員会							
所在地	〒410-8601 静岡県沼津市御幸町16番1号 TEL 055-931-2500 (代)							
発行年月日	西暦2019年3月15日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	世界測地系				
こうこくじじょうあと 興国寺城跡	ぬまづしねごや 沼津市根古屋 あざあかいけ 字赤池ほか	22203	48	35° 6' 9" 138° 52' 24"		2003/10 ～ 2018/10	累計 24,376 ㎡	史跡整備に伴う遺構確認
				日本測地系				
				35° 5' 57" 138° 52' 36"				
所収遺跡名	種別	主な年代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
興国寺城跡	城館跡	室町時代～ 戦国時代～ 江戸時代	礎石建物跡、堀、土塁、土橋、石列、集石遺構、石垣、石積、溝状遺構、土坑、ピットほか		貿易陶磁、国内陶磁器（瀬戸美濃・志戸呂・初山・常滑・信楽・肥前）、かわらけ、羽釜、内耳鍋、外耳鍋、土製品、瓦質土器、砥石、硯、木製品、鉛玉、古銭、煙管、金属製品		平成15年から調査を開始。これまで本丸・石火矢台・二ノ丸・三ノ丸・大空堀・北曲輪・清水曲輪・清水小曲輪・西櫓台・外堀周辺を調査。	
興国寺城跡 古城遺跡 根古屋清水遺跡	集落跡・散布地・その他の墓	縄文時代 弥生時代 古墳時代 古代 鎌倉室町時代 江戸時代	方形周溝墓、竪穴建物跡		縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗、陶磁器、石器		北曲輪で方形周溝墓、清水曲輪で竪穴建物跡が確認された。	
要約	<p>史跡興国寺城跡は、沼津市根古屋・青野に位置する戦国時代から近世初期にかけての城郭である。平成7年に指定を受け、平成15年から整備に向けた発掘調査を実施してきており、本書はこれまでの調査成果をまとめた報告書である。</p> <p>本丸では、虎口において礎石建物跡（門跡）を検出し、さらに曲輪内を縦断する石組水路が確認された。二ノ丸では最終段階では埋没していた16世紀後半の三日月堀が検出されている。二ノ丸虎口では石垣を伴う土橋が確認され、二度の改修が行われていたことも明らかになった。三ノ丸では15世紀後半から末頃の版築遺構にはじまり、17世紀初頭まで連続的な遺構変遷が確認された。北曲輪・清水曲輪では近代まで完全に埋没していなかった空堀を検出した。これに加え、北曲輪では新たに空堀が2条確認され、新規発見の空堀3には堀の両端部に畝が検出されている。</p> <p>遺物では、青磁・白磁・青白磁・染付などの貿易陶磁器が出土している。瀬戸美濃産陶器は古瀬戸前期から大窯・登窯までが出土し、なかでも古瀬戸後Ⅳ期から大窯4段階までの天目茶碗・皿類・播鉢が主体である。このほか、常滑や志戸呂・初山も数多く出土している。</p>							

沼津市文化財調査報告書 第119集

史跡興国寺城跡調査報告書

発掘調査報告編

平成31年3月15日 印刷

平成31年3月15日 発行

編集／沼津市教育委員会

発行／沼津市教育委員会

沼津市御幸町16番1号

TEL055-931-2500（代）

印刷／みどり美術印刷株式会社

